泡鳴全集

第十二巻

目次

義衛

四十四年四月より

池田日記

明治四十四年四月より

四月三十日。晴。淸子、下女と共に下阪。府下池田に定めて置いた借家に伴ふ。箕有電軌會社經營の新市街の一角で、電車線路を越えた舊市街のあなたに聳える五月山が書齋と定めた二階の一室から見える。その隣室からは六甲山が見える。家の前方二三丁にして、昔の吳織綾織の記念たる吳服神社の森が見える。二三十間にして、淨瑠璃にある相模稻川を思ひ出させる猪名川が流れてゐる。人らしい門附きの家へ這入つたのは、大久保の寓居が初めてだが、今回のは門も家の內も以前のよりはよく、且、周圍の風景が面白いと云つて、下女までが喜んだ。僕も、あすからは、ここから五里の道を電車で三十分で大阪へ通ふのである。

五月廿日。社から歸つて見ると、淸子の父がひよつくらやつて來て居た——息子の家庭が面白くないと云つて。

五月廿六日。晴。おやぢは目がねをかけて頻りに五月山の空を眺めてゐたが、どうもあれは鶴らし

いがと云ふ。皆が椽がはへ出て見ると、冴えた藍色の空に三羽の黒い影が大きな輪を畫がいてゐる。その輪の一端は家の上までも屆くかと思へた。おほやうな舞ひ方と云ひ、首の長いところと云ひ、きイと響き渡る鳴き聲と云ひ、誰れが見ても鶴のやうだ。おやぢの話では、二三日前から氣が付いたのだが、少くとも、五六羽があの山から出て來て、またあの山に歸つてしまうさうだ。

六月二日。小川未明氏、社の方へ來訪。珍らしいから、應接室でゆツくり話さうと思ふが、不斷でも例のせか〳〵した氏は旅のこととて一層せか〳〵してゐて、これから直ぐ京都へ行くのだからと云つて少しも落ち付いた樣子がない。そこへまた意外にも德田秋江氏がやつて來た。かれもこれも、孰れ劣らぬあわて者——と云つては失禮のやうだが、近代人の神經質を代表したやうな人——が二人、申し合はせたやうに旅で出會したのも面白い。文樂座の話が出て、秋江氏はこれから行きたいと云つた。未明氏はもう行つたから失敬すると云つて、先づ歸つてしまつた。

同日ゆふ方、攝津大椽と越路とを聽いたと云つて、德田氏は池田へやつて來た。一泊させる約束であつたから、ゆツくり寶塚の新溫泉へ案內した。大理石で加工した溫泉、その構造、客を喜ばせる設備等に對し、氏は『ふむ、ふむ』と獨りでうなづいてゐた。明日は、山と川とを取り込んで、それに設備を施した箕面の動物園を見せるつもり。

六月三日。曇。淸子も共に大阪へ出た。德田氏が大きな革鞄を一つ持つてゐたのが邪魔になつて、

動物園へ行くのを忘れてしまつた。その革鞄を梅田停車場へ預けてから、市中を見物させるつもりであつたが、生憎雨が降りさうなので、どうしようと考へた末、兎に角、千日前の見せ物と道頓堀の芝居との外景氣を見せた。德田氏の癖とて、呉服屋がある度毎に、渠はそのウヰンドウショウをのぞいて見た。渠は大阪が非常に氣に入つたと云つて、汽車に乘つた。

六月四日。電軌會社に立ち寄つて、五月山の鶴の話をしたら、重役は同社經營の箕面動物園の千羽鶴が逃げたのではないかと云つて、直ぐ電話で照會したが、そんな樣子もないと云ふ返事であつた。それで思ひ出したが、きのふの新聞に姫路の白鷺城の松に鶴が來て巢を喰つたとあつたのは、五月山のが向ふに落ち付いたのではなからうか？この頃は、もう、こちらにはゐないかして、飛んでゐるのを見たことがない。

六月十日。京都一泊。

六月十一日。ゆふ方、歸阪。京都へ行つたのは、兩本願寺の法主を訪問し、多少議論を取りかはした記事を取る爲めだが、どうも面倒がつて、なか〳〵直接に會はせさうではない。

七月五日。角座に文藝協會の「ハムレット」を見た。ああやつて見ると、シエキスピヤなどは淺薄なものだ。ハムレットには深遠な哲學があるなど云ふのも、思索には素人筋の云ふことで、公子が墓場で骸骨に向つて述懷を語るところなどは、今の半可通がヘツケルやオイツケンやベルグソンの言葉を詩

化しようとすると同様、歯が浮いてしまう。シエキスピヤには、實際、哲學の言葉はあつても、哲學はない。然し藝の上では、東儀氏も土肥氏もよかつた。それに、上山浦路子は女優として脊も高く、聲も自然に透つてよかつた。早稻田出の人々の非常な運動があつたからとは云へ、僕等の意外と思ふほどの成功をしてゐるのは、坪內博士並にその他の一行の爲めに祝さざるを得ない。興行を初めてから僅かに五日しか立たないのに、市中では、子供の遊びに、棒切れを以つてハムレトだとか、レヤーチスだとか云つてゐるのを見ても、その人氣の一般は知れよう。

七月六日。坪內博士を訪問。東儀氏にも會つた。二人ともそれとなく得意さうであつた。

七月八日。中の島公會堂に音樂倶樂部の第一回演奏會を開く。僕等が發起したわけになつてゐて、會長は菊地幽芳氏だ。同氏には、この頃、この會の相談で度々會ふ機があるが、會はないで考へてゐたのとは丸で違つた人物だ。渠の小說などは德富蘆花氏程度の――惡く云へば、際物若しくは假り物――に過ぎないが、さすが水戸人だけに人物は却々しツかりして、意志の强固なところがあるらしい。

八月二十一日。讀賣新聞社の岡村千秋氏來訪。今夜は別に會見する友人があると云ふので、箕面電車沿線を案內して別れた。

八月二十二日。晴。新報社俳句の選者青木月斗氏を初めて訪問したら、留守。近日下阪中の夏目漱

石氏が入院してゐるのを見舞ひに行つたとのことだ。それでは僕も見舞つて置かうと考へ、新報社の近くの病院と聽いて行つて見た。例の病氣が再發したのだ。月斗氏は歸つた跡であるが、水落露石氏などから屆けて來たと云ふ珍奇な版本を枕もとに置いて、氏は寢てゐた。顏を拭く間を待つて僕はその病室に通されたが、けふ位氏が氏自身のことを僅かだが僕に話したことはこれまでになかつた。氏に會見する度に、氏は僕にのみ僕のことを話させて、御自身のことは何も云はなかつた。考へて見ると、意志は强いが、近代的でない樣子は、菊地幽芳氏とよく似たところがあるらしい。この兩人が新聞小說家として、東西に相對し、而も最も敵對してゐる二新聞で對立してゐるのが面白い。

九月二十日。晴。書齋から見える五月山に登る。大阪灣頭の苫が島から淡路島の一面が幽かに見える。大廣寺といふ古刹の庭に牡丹花肖柏の碑がある。渠は俳人として一種の特色を以つてゐた人物で、池田の近處に住んでゐた時、紫のひもをつけた牛に乘つて悠々山水の美を賞して步いたさうだ。當地の八百屋で、毎日青物を賣りに來るのがまた面白い男で、早稻田の法律科に這入つてゐたが、禿頭病を病んであたまが丸で禿げてしまつたのを憂ひ、この故鄕に引ッ込んでゐるが、商賣の暇々にバイロンの詩集を讀んだり、肖柏の事蹟を調べたりしてゐる。淸子とヘッぽこ碁の相手。僕とまた玉突きの相手だ。渠を荒木無聲氏と云ふ。

九月二十三日。上司小劍氏より手紙あり、讀賣新聞に送つて置いた原稿が歸つて來た。東京出發

前、同氏並に岡村氏とも談合して、同新聞に再び僕の原稿を出すことはその社でも構はないと云ふことになつたのに、矢張り反對者があつて行けないさうだ。僕の原稿が出せないのはまだしも構はない。然し岡村氏が僕の原稿を出したのが一つの原因で、同社をやめなければならないやうになつたのは氣の毒でもあるし、また同社の不都合だとも思ふ。同社はそんな隱險な態度を取らず、初めから僕の原稿は過激であるとか、社の方針に反するとか、(それは誤解や不識の結果であるとしても)發表すれば、同氏も別に强いて僕をかばうやうなことはしなかつただらうに。同氏が當地へ來た時そんなことは少しも話さなかつたから夢にも同社をやめられたことは知らなかつた。

十月一日。獨立劇場の公演を角座へ見に行つた。中村春雨氏にも會つた。氏の自作並に選定を見ても、今の――ただ現在の――觀客を標準にした上の多少の新味と新問題とをねらつてゐる人であるのが分る。氏から直ちにイブセン物やメタリンク物の獨得を望むのは無理だ。氏の行き方は一般社會をただ一歩ぬけたらいいと云ふので、誠に實着な、惡く云へば、臆病な行き方だ。松居松葉氏が丁度それであつた時代もあるが、今は中村氏が取つて代つたところだ。僕等は大膽過ぎるが直ちに二歩も三歩もぬけたところをねらつてゐる。

十月二日――五日。大阪、京都、神戸三市の美人遊覽團が新報社の催しで發足した。僕もそれに從つて、九州の別府溫泉まで行つた。電報掛りを引き受けてゐたが、僕が若し社會部に屬してゐて、團

員の藝者、その他の感情を微細に觀察して書けといふ命令を受けてゐたとすれば、隨分書きたいことがあつた。往きは岡山縣淺口郡の金神（金光教會本部）に寄り、歸りには安藝の宮島へ行つた。別府で僕等が受け持つた團員の中には、〇〇と云ふお茶屋の仲居やそれが周旋した素封家の家族もゐた。途中まで二臺の馱馬車を驅り、坊主地獄や血の池地獄を見た。途々地下から熱湯が吹き出てゐて、そこに釜や鍋をかけて米や魚を煮てゐるのは奇觀であつた。社の畫家も一人一緒であつたが、血の池地獄の赤い泥を以つて仲居の繻絆の脊中に遊覽記念の字を。その他の人々の扇子やハンケチにいろんな畫を書かせられた。或女は僕の顏を畫かせて、僕に記念の署名をさせ、『岩野さんの顏はどこの雜誌に出てゐても、特色があるのだから』と云つたには驚いた。僕が新聞記者になつたのは、平凡化の最も平凡化をしてゐるつもりであるのに。大阪にも東京の雜誌に目を通してゐる婦人があると見える。

十月六日。晴。舊暦八月十五夜に當る。僕が子供の時初めて大阪に出た時からの友人を招いて觀月の宴を張る。三人ゐるうちの二人がやつて來た。一人は細君も同道だ。清子も贊成して池田の藝者を呼んだ。僕は大久保寓居以來眞面目なもので、一人で他の女に接したことはない。

十月十日。清子と共に千日前の活動寫眞を見に行く。どこも／＼新報社の美人別府遊覽團の寫眞で持ち切りだ。僕もその中に寫つて出て來るところが數ケ所あつた。美人團と云つても附き物や關係者の婆アさんや爺さんが多いので、何だ、本願寺の團參のやうだと冷罵する觀客もあつた。然し金神ま

では、それでも、大阪第一流の藝者も殆どすべて行つたので寫つてゐた。

十月十六日。昨夜、帝國座に川上一派のイブセン劇「人民の敵」を見た。川上は病氣の爲め出座せず、その役を藤川がやつてゐた。中幕「最後の靜」に景時が靜の子を殺してほうり投げるところがあつた。あれはやめなければならないぞと、角田浩々氏が作者の齋藤弔花氏に忠告してゐた。川上の病氣がひどいので、貞奴も出座出來ないやうになり、たツた四日目の今日から閉場を中止することになつた。

十月十九日。淸子の父は、厄介になつて遊ぶよりも自分で自分の生活をする方がいいからと云つて、歸京。ついでだから、下女も一緒に歸つた。

十一月九日。晴。池田の奥に毎年禪僧で菊花園を公開するのがある。そこを見に行つたが、夏目漱石氏も來たことがあるかして、同氏の句を書いた短册があつた。その短册とそこの一檀家の細君が書いた腰折れとを比べて、僕等が案內して貰つた八百屋さんがどちらを呉れるかと云つて見たら、どツちでも持つて行けと主人は答へたので、夏目氏のを貰つた。(八百屋さんは二三年前からそれを貰ひたくて堪らなかつたのであるさうだ。)

十二月十二日。新市街の倶樂部で玉突きをしてゐると、東京の西本波太氏がやつて來た。雜誌「趣味」の再興はとてもおぼつかないので、今度文藝の通信社をやるからと云つてゐた。

十一月十五日。東京から平野氏が來て、暫時の客となることになつた。利光氏の事業の一部にたづさはつてゐたのだが、今度大阪で株屋に這入りたいのである。

十一月廿四日。三越呉服店の小杉、小川兩氏の漫畫展覽會へ行つて、久し振りで薄田泣菫氏に會つた。氏は帝國新報の落ち武者を一人大阪新報社へ入れて貰ひたいと云つて、一緒に本社へ來たが、どうやらまとまりさうだ。

十一月廿五日。未醒、芋錢兩氏歡迎會を、本社にゐる兩氏の知人ばかりで、寶塚の山本旅館といふ待合でやつた。僕は幹事として遲くまで殘つたが、最終電車で歸つた。小杉氏は僕に東京へ歸れと頻りに勸めた。

十一月廿七日。佐藤歲三と川西座に來てゐる一俳優大木氏を寶塚に案內す。氏は文藝に抱負を持つてゐるために俳優になつてゐるらしく、佐藤がこんなところへ買はれて來る運命を同情的に歎じてゐた。

十二月三日。「東京潜伏時代の黃興」といふ話を書いた。僕が大久保にゐた時、渠が隣りにゐたことを思ひ出してゐたからである。

十二月十日。昨夜より、新報掲載の小說「發展」を書き初めた。十六日から掲載の筈。これは「放浪」の前篇に當るものだ。

十二月十一日。先月の中頃から舞ひ込んで來た犬があつたが、禿頭病の如き病氣でからだ全體の毛が脱けて行き、此間から非常に見惡くくまた臭かつた。家族は追ひ出すのも可哀さうだと云つて、そのままにして置いたのを、四五日前から平野氏が水をぶツかけたり、石を投げたりして、歸つて來ないやうにした。それが猪名川の土堤の榎の木のもとで倒れてゐたのを、下女がけふ見て來た。その前に飼つた犬もやうやく大きくなるに從つて、同じ病氣になり、とう〳〵獨り手にゐなくなつたが、同じみじめな運命に落ちたのだらうと思はれた。

十二月十三日。神崎沈鐘氏、東京から大阪の親戚を賴つて來たり、その足で來訪。

十二月十七日。三越吳服店に注文したケープが來る筈だが、持つて來ない。二三日も期日を延ばして、而も約束を守らないので、社から電話をかけると、店員が手ぶらでやつて來て、實は出來てゐるが、その代を拂つて貰ふか、前の店拂ひを入れて吳れるかと云ふ。東京の方ならそんな間拔けなやり方はしなからう。談判の樣子がおだやかならないので、勝手にしろと答へて歸した。僕も家に歸つてから、兼て同店の雜誌にと依賴されて渡した原稿の料金を、矢張り原稿書き商人の態度を以つて、この普通稿料よりも三倍にした請求書を送つた。

十二月廿日。三越吳服店より素直に請求通りの稿料を送つて來た。それで、その拂ひよりも多少の餘りが出來た。馬鹿な奴だ。初めから素直にしてゐれば、そんなことはしないで濟むばかりでな

く、今月末には少くとも拂ひの過半は濟ませるつもりであつたのに。どうせ、段々に拂つて貰ふだけの餘裕と金利とは、初めから品物の代金につけ込んであるのではないか？

十二月廿二日。昨日、武林無想庵氏から長い手紙が來た。蒲原、小山內、島崎諸氏の近狀も書いてある。ほんに、云つてある通り、同氏と長い手紙で刹那論を度々往復させてから、もう、一年になる。然し矢ツ張り禪を――大石正己氏を先達として――やり出したたどあるので、そんな頓馬な暇があるなら、もう創作にかかれといふ意を書いて返事した。數ケ月前氏はベルグソンを讀めとあつたので、その書物は二三冊取り寄せたが、いろんな人の紹介で見ると、讀む氣にはなれない、と、云ふのは、ベルグソンには僕の刹那論だけ內觀內察的な力がないやうだ。他日、暇を得てこの哲人を僕の見地から批判し、英文を以つて外國に發表したいと思つてることも書き添へた。

十二月廿四日。散步がてら寶塚に行き、新溫泉に獨り浴しながら、それの建設者岩下淸周氏の人となりを思つた。渠は東京の實業界の怪傑利光鶴松の後影を拜してゐるものだが、利光氏の鬼怒川發電工事ややがて發起する一億萬圓の東京灣築港事業たどと性質は同樣で、たとへ規模は小くても、あんな所にあんな建設を大膽に實現したのは、實現即思想だ。事業の成功不成功は、すべて事業を思ひ付いて決心した刹那に萬事がきまつてしまうのである。

十二月廿五日。平野氏、鳥渡東京に歸る。ついでに、或仕事を初める爲めの取調べを賴んだ。

十二月廿九日。神崎氏を日本商業新報社に周旋したのが成り立つた。僕等も知らなかつた新聞で、堂島の米相場連を相手に、既に一萬枚も出てゐるとは驚いた。無論、十五年間の苦勞の結果ださうだが、今回七臺のロールを輪轉機に換へて、なほ五千枚は發展出來ると云つてゐる。

十二月卅一日。曇。清子と大阪の今年最後の景氣を見がてら、ゆふ方から大阪へ出かけた。千日前で一ケ所活動寫眞を見、それから道頓堀をぶらつき、また心齋橋筋をずツと步いて見た。隨分賑やかなことは賑やかであつたが、今年も亦不景氣だと黑人筋の云つてたのを度々聽いた。然しどこの呉服屋でも店さきは非常に賑はつてゐた。電車を池田で降りた時、丁度除夜の鐘が鳴り出した。また一つ年を取るのかと思ふとそのいやな感じが年毎に增して行く氣がする。

四十五年

一月一日。晝頃から雨。社へ鳥渡行つた切り、すべてハガキで御免を被つた。今年のハガキには、大阪新報入社以來の短い近狀と新年の雜誌に出る僕の作物とを記して、不斷無沙汰の詫びに代へた。

一月二日。初荷として魚屋がハツを置いて行つた。この頃はこちらにもまぐろが多い。東京神田生れの淸子はこの刺身を口にしないと顏に瘦せが出ると云ふほどだが、關西ではつくりと云へば鯛ばかりを珍重し、まぐろ乃ちハツを卑しむので、どうしてもそれの賣れ口が少いので滅多に持つて來ない。

一月三日。社の同人四五名來訪。藝者を呼んで騷いだ。

一月六日。今日より新報に、「船場の一隅より」と云ふ讀切りの小論文を出し初めた。强いられた常識に安んじてゐる市民に、多少洞察ある常識の哲學を平易に知らしめたいのである。

一月十四日。晴。德田秋聲氏「黴」、小山內薰氏より「演劇新聲」到着。

一月十五日。晴。昨日の兩著批評を社にて認めた。文章世界の前田晁氏へ日記の拔粹十八枚を送

る。佐々木政治氏より手紙。

一月十六日。曇。雪ちらつく。本多、麻田、正宗(得)、前田(夕)、岩崎諸氏へ手紙もしくはハガキ、本日、午前一時より難波に出火あり、午前十時四十分鎭火するまで、同新地、千日前、日本橋通り、高津、谷町等、二十一ケ町、五千餘戸を燒き拂つたといふ號外が頻々に來たが、「發展」の原稿に氣が乘つてゐたので、大阪へは出かけなかつた。火災の爲めの損害は約二千萬圓の由。

一月十七日。晴。社へ北村季晴氏來訪、本月末頃廣島で音樂會をやるついでに大阪でも一晩やりたいからと云ふことだ。社の理事富樫氏を紹介し、出來るなら火災義捐慈善會として社が發起して見たらどうだらうと持ち込んで見た。北村氏は直ぐ廣島へ下相談の爲め出發。三時間玉突。就褥、午前三時半。

一月十八日。晴。午前十一時、起床。淸子と三越へ行き、寫眞を寫す。二時間玉突。就褥、十二時過ぎ。

一月十九日。晴。午前十時半、起床。風邪の氣味にて出社せず。春陽堂の本多氏よりハガキ。夜に入りて雪あり、薄白く積む。玉突三時間。就褥、午前三時。風藥を服す。

一月廿日。曇、薄雪少しあり。起床、午前十時。北村氏來訪。共に三木樂器店を訪ひ、また富樫氏の宅を問ふたが、留守。四ツ橋のかき飯屋で一杯やつて別れた。夜、加藤朝鳥氏、荒木氏來訪。玉突一時間。西村辰之助氏へ手紙。上司氏よりハガキ。就褥、風藥を服したのは午前二時半。

一月廿一日。曇、夜に入りて雨。正宗（得）氏よりハガキ。伊達氏よりハガキ。

一月二十二日。晴。北村氏の音樂會を社では今やることが出來ないと云ふので、大阪日々社長吉弘氏を訪ひ、同社にてやらせようとしたが、それも駄目――齊藤吊花氏とも談合、三月頃、音樂クラブの催しに加へられれば加へようと云ふことになつた。北村氏へさう返事した。佐々木政治氏、神崎氏と來訪。宅で飲んだ跡でまた面茂樓へ行つて飲んだ。西村、吉岡（哲夫）二氏よりハガキ。堺枯川氏より「賣文集」に對する序の依頼。

一月廿三日。晴。住吉に原（德太郎）氏を訪ふ、留守。その足で玉出の伊達氏を訪ふ、留守。加藤氏、社の小說を取りに來訪。池田の人十數名のカルタ會を催した。本日議會の議事初まる、政府提出の豫算歲入五億七千二百八十九萬一千八百六十六圓、歲出同額。就褥、午前一時。

一月廿四日。晴。起床午前十一時。出社せず。原氏來訪。山本（三）氏より手紙。堺、山本、吉岡岩崎四氏へハガキ。玉突二時間半。就褥、午前一時。

一月廿五日。曇。社へ神崎、原、講演依頼の爲め松本の三氏來訪。淸子並に神崎氏と天滿の初天神に行き、それから吉岡氏を訪ふ。就褥、午前二時。

一月廿六日。昨夜より雨。起床、午後一時。出社せず。玉突二時間。就褥、午前二時。

一月廿七日。曇。起床、午前十時半。堺氏よりハガキ。山本氏より手紙。玉突三時間。就褥、午

前一時半。
一月廿八日。晴。起床、午前十時半。池田町の齒科醫に行き、齒の治療をして貰つた。出社せず。
玉突二時間。就褥、午前二時。
一月廿九日。曇。起床、午前十一時半。加藤氏來訪。玉突一時間。就褥、午前三時。
一月三十日。朝曇あられ降る。起床、午前九時半。石丸氏來訪。前田(木)氏より手紙。西中佐へ手紙。昨夜、小犬の棄てられたのを拾つて置いたが、けさ、どこかへ行つてしまつた。
一月三十一日。晴。出社せず、風邪を床に寢てゐようとしたが、小犬を下女がまた連れて來て、きのふのはこれでないかと云ふ。黑いむく犬だが、泥だらけになつてゐた。それを裏庭へつれて行かせたが、その折、裏隣りの家が二階から火が起つてゐるのに氣が付いた。その方の騷ぎや手傳ひで寢てゐられず、夜はまた神崎氏がとまつて話した。博文館より文章世界の原稿料七圓五十錢。
二月一日。風邪、出社せず。東京より上司小劒氏來訪。西氏より手紙、返事を出す。吉岡氏よりハガキ。
二月二日。雨。出社せず、褥中にあり。武俠世界より稿料。原氏へハガキ。社へ欠勤屆。
二月三日。晴。出社せず。原氏來訪。
二月四日。雨。大阪にもあられ降る。武林氏よりハガキ。神崎氏より手紙。起床、午前二時。「現代

飜譯界の一覽」(上)十六枚を書いた。

二月五日。晴。起床、午前九時半。山本氏へハガキ。文章世界へ原稿。相馬氏(早稻田文學の稿料催促)。上司氏、多田の方から歸つて來たが、田舍人の歡迎につかれたかして、一夜をひツそり休みたいと云つて、どこかの宿屋へ行つた。玉突三時間餘。就褥、午前一時。

二月六日。雨。午前十時起床。前田(晁)氏へハガキ。中央公論より返つて來た原稿を太陽の淺田氏へ送つた。

二月七日。晴。吉岡氏、井上(仲)氏、並に巖谷(小波)氏よりハガキ。上司氏、多田より歸り來り、鳥渡話して大阪へ行く。玉突一時間半。就褥、午前三時半。

二月八日。晴。起床、午前十一時半。加藤、神崎兩氏來訪。淸子並に神崎氏と共に箕面の瀧まで行く。石龍子下阪の宴會に行く。就褥、午前四時五十分。上司氏より、大阪出發のハガキ。

二月九日。晴。起床午前十一時。德田秋江氏並に前田(夕)氏よりハガキ。德田、井上、吉岡氏へハガキ。玉突二時間。就褥、午前一時。

二月十日。晴。起床、午前十時。〇三越寫眞部へ社から手紙をやり、活動寫眞のフイルム撮映に關する問合せをした。昨年末より平野氏に依賴し、東京で取り調べをして貰ふ約束が今に至つても返事なきゆゑ、こちらで手を運ばしたわけにて、つまり、寶塚溫泉で早取り寫眞を開業する計劃である。

同時に。箕有電氣重役の小林一三氏の勸めにより、各電氣會社のパスへ本人の寫眞を張り付けるやうに運動し、その仕事をこちらで引き受けたいのである。一枚十錢宛を各會社から取れば半分は純益になるやうだ。同會社で小林氏に會ひ、先づ大體の報告をして置いた。神崎氏に手助けを頼むので、同氏が本日來訪したのを幸ひ、細いことを高麗橋の小西寫眞機械店へ行つて調べて貰ふやうに命じた。○荒木氏より朝鮮の雉子を貰つたのと、先日小劒氏が置いて行つた鯉とを、神崎氏に料理して貰つて晩餐に供した。相馬並に前田(夕)二氏へハガキ。吉岡氏よりハガキ。神崎氏一泊。就褥、午前三時。

二月十一日。晴。起床、午前十時。淸子並に神崎氏と平野鑛泉を見に行く。前田(晁)氏よりハガキ。

二月十二日。晴。起床、午前十一時半。早稻田文學より原稿料拾圓。石丸氏より手紙。玉突一時間。就褥、午前三時。

二月十三日。晴。本日、道が凍てゐた。こんなことは今までにもなかつた。昨日は寒い寒いと思つたが、けさ、珍らしく洗水鉢に氷が張つた。山本氏、上司氏よりハガキ。石丸氏へハガキ。出社せず。就褥、午前二時半。

二月十四日。雨。起床、午前十時半。出社せず。終日、雨と風。就褥、午前四時。

二月十五日。曇。起床、午前十時半。玉突二時間。就褥、午前一時半。

二月十六日。晴。起床、午前十時半。出社せず。玉突、二時間。水野氏よりハガキ。就褥、午前零

時半。

二月十七日。晴。起床、午前十時半。一週間ほど以前よりまた左の耳が聽えなくなつた。出社のついでに、醫者へ行くと、風を引いた結果だらうと云ふ。風も引いたが、過勞が影響することも分つてゐる。ただに左のみではなく、右の方も漫性的に惡いと云はれた。どうせ人間は聽える間だ、活きてる間だ。どしどしやれるだけ何でもやる。博文館より原稿料拾圓着。巖、原、二名よりハガキ。末廣博士より手紙、同じく返事。北村氏より手紙。上司、押川、日高、關、茅原氏へハガキ。茅原(華山)氏へは、萬朝の社說に出た氏のロマンチク鼓吹說があんな淺薄では、歸朝當時わが國の現狀を研究し、僕などに就いて自然主義の由來をも知つたのが、ほんの、表面的であつたのだらうと云ふことを云つてやつた。自然主義を物質的ロマンチク主義を精神的と區別するやうでは、もとの三十年前の外國思想に跡戾りするのだ。新聞記者などに深い觀察力のないものが多いのは、割合に分つてゐると思つた同氏でもそんな風のを見ても知られる。無論、新聞界のみではない、敎育界、帝國大學の連中は勿論、また文學界の大部分に於ても、さうだからいやになつてしまう。玉突二時間。就褥、午前二時。

二月十八日。晴。(日曜)。起床、午前九時半。出社せず。荒木氏來訪。夕方、大きな片の雪少し降る。玉突二時間。就褥、午前一時半。

二月十九日。晴（寒し）。池田では雪少し降る。大阪の耳科醫へ行く。末廣博士より手紙。玉突二時間。今月十五日の文章世界を見ると、僕が『先輩も後輩もなく獨立獨歩を誇りとす』と云つたのを、あり振れた誇りと評してある。然し今日の如く先輩や後輩を賴つて世間的地位を固めてゐるものが多い時に當り、僕は矢張り僕の實際を誇らざるを得ない。先輩や後輩を賴りとした獨立　眞の獨立にあらずだ。去年の十二月中旬から筆を取り出した小說「發展」は、第九拾八回を以つて、今夜、前篇を書き終へた。來月の二十日頃迄新聞に續く分だ。今回のは東京の友人間にも評判がいいやうだし、大阪でも社中のみならず、讀者にも受けられてゐるやうだ。後篇は東京の新聞に書きたい。就褥、午前三時半。

二月廿日。晴。起床、午前十一時半。茅原華山氏よりハガキ。出社せず。池田の町役場より役場員が來て、臨時演習の軍隊がとまるので、三四名引き受けて吳れろと云ふ。僕は軍隊が嫌ひだ。去年も斷つたのだが、今回は是非と云ふ。向ふも覺悟を持つて來たらしい、たツて斷るとならば、知事に上申して無理にでも置かせるやうにすると云ふ。僕はなほ謝絕して、人手が少いこと、軍隊は國民からの稅によつて成立してゐるからその上人民を煩はせる習慣はよくないこと、テントを張つてでも野宿させていいこと、よしんばとめるとして故障が起つても個人の訴へは團體に勝てないから損なこと、現に昨年末も大阪市中で止宿兵士があばれたのがその家の泣き寢入りになつた例があること、役場

が責任を以つて引き受けると云つても當てにならないこと、その上僕自身の性質が軍隊を好ましくないこと等の理由を云つた。然し、では物の分つた將校連をよこすからと云ふので、いやいや折り合つた。兎に角、軍隊を戰爭中であるかの如く歡迎する人民は馬鹿な人民だ。夕飯が不足したので、淸子と寶塚へ東京そばをやりに行つたが、打つのに時間がかかると云ふので、うどん臺の物をやつた。歸途、東京の水野氏へ送る栗やうかんを買ひ求め、本社員丸國氏のもとを訪ふて歸つた。今夜は脫稿小說の訂正をしたが、さて、明日から何にかからう？就褥、午前一時。

二月廿一日。晴。起床、午後零時四十分。耳科醫へ行く。昨日の軍隊止宿の件、町長に手紙を持たせてやつて謝絕した。暴力もしくは壓制的命令が來れば、個人としては對抗出來ないかも知れない。佐藤氏並に中里氏へ手紙を書いた。上司氏よりハガキ。就褥、午前三時。

二月廿二日。終日、雨。起床、午前十時半。大阪日報社の上總天香氏來訪。軍隊は入り込んで來たが、僕の家では斷つた。然し不都合なのは、昨日ことわりをやつて承知したとありながら、町からの改めた挨拶もなく。兵卒を四名を當てがつてあつたらしい。前々日は將校をよこすからと云ふ向ふの讓步も行はれてゐなかつたのだ。兎に角、止めなかつたから、それでこちらの意志は通つた。內田氏譯、ワイルドの『革命婦人』を讀んだが、下らない物だ。武林氏並に華山氏へハガキを認む。就褥、午後十一時。

二月廿三日、晴。起床・午前十時。耳科醫へ行く。玉突二時間。前田(夕)氏より手紙。

二月廿四日。晴。西氏へハガキ。起床、午前八時。神崎氏に留守居を賴んで、淸子と共に二日の小旅行に出た。先づ京阪電車で伏見の稻荷へ行き、そこから官線鐵道に乘つて石山に向つた。逢阪山のトンネルを脫けて、向ふに琵琶湖のあなたなる比良の山脈が、山の脊だけ眞ツ白になつて、春がかつた霞に浮んでゐるのを見た時、十年の昔、あれを後ろからこちらへ、脊をかけて、而も獨りで越えたことがあるのを思ひ出した。今はそんな勇氣が――ないのではない――自分の仕事といふことにばかり籠つてしまつた。石山、三井寺、大津市中など、初めての淸子には感興もあつたらうが、僕には昔見た通りなのが却つて何等の面白味もなかつた。藪田(信吉)氏に宿から電報をかけて堀井英也氏を呼んで貰つた。藪田氏は來なかつたが、堀井氏は午後九時頃にやつて來た。相變はらず法螺交りの世間話――話上手なので、つい、話すだけ聽いてしまう。が、そこには、渠のひねくれた性質と男氣とが籠つてゐるのが生命だ。小說の材料になるやうなことを澤山云つて聽かせてくれた。この男、縣廳の官吏でありながら、一年三百六十五日を三分の一遲刻する。休暇や日曜や大祭日などを引くと、出勤日の全數の殆ど二分の一が遲刻になつてゐるのだ。それでも渠は平氣だし、縣廳の方でもさうやかましく責めない。同廳ばかりではなく、大津市一般の評判男だ、變人として、また人の世話好きとして。

二月廿五日。晴。朝、縣廳の中山、田中兩氏來訪。兩氏とも十年一日の如しと云ふことを文字通りにやつてゐる人々だが、感心にも、皆健全な樣子だ。汽船で唐崎の松を見に行つてから、疏水によつて京都へ出た。南禪寺・永觀堂、黑谷等を見て銀閣寺に島(文次郎)氏を訪ふた。夜になつて、歸宅。吉岡氏、濶本某氏よりハガキ。河井(醉茗)氏よりハガキ。

二月廿六日。夜に入つて風雨。耳科醫へ行く。鼓膜を切つて中の水氣を取つたので、少し氣分がさツぱりした。武林氏より長い手紙。長谷川(勝治)氏へ雛人形一組を送つた。(妹千惠子の子の爲めに。)

二月廿七日。風雨。出社せず。武林・石丸兩氏へハガキ、巖へ手紙。小犬がまたきのふから一匹迷ひ込んで來て、居据つてゐる。女子文壇の爲めに、「諸方面に渡る東京大阪優劣論」(十二枚)を書いた。就褥、午前一時半。

二月廿八日。終日、雨。起床、午前十時半。耳科醫へ行く。水野氏よりハガキ。ニイチェの日本譯を調べて見た。就褥、午前二時二十分。

二月廿九日。曇。起床、午前十時半。出社せず。獨逸語でストリンドベルヒの「伯爵令孃ユリエ」を調べて見た。就褥、午前二時半。

三月一日。曇。起床、午後一時半。耳科醫に行く。山本(三)、平塚・石丸三氏よりハガキ。岡村・

山本(喜)二氏より手紙。玉突一時間。田村(成)、本多、山本(喜)三氏へ手紙を書く。安井、北村、岡村、水野四氏へハガキ。就褥、午前一時。

三月二日。晴。深田氏よりハガキ。加藤氏來訪。神崎氏一泊。「現代飜譯界の一瞥(下)」二十枚を書き終る。

三月三日。午後より雨。起床、午前九時。深田、山本(三)二氏へハガキ。中澤(臨川)、平塚(篤)二氏來阪。共に堂島の魚喜で飲み、加古川と云ふお茶屋へ行き、中澤氏の友人平田を招く。平田氏は僕等を新町の吉田屋へ連れて行つた。そこで「きりより、伊左衞門さままゐる」の手紙の實物を見せられなどして、僕は午後十時半に別れて歸つた。山本(三)氏より手紙。就褥、午前一時。

三月四日。雨。起床。午前十一時。耳科醫へ行く。玉突二時間。就褥、午後十一時。

三月五日。曇。起床、午前十一時。平塚氏よりハガキ。出社せず。山本、平塚、若宮、中澤四氏へハガキ。ゆふべ寢てゐたら、耳垂れが澤山出た。就褥、午前一時。

三月六日。雨。耳科醫へ行く。起床、午前九時。就褥、午前零時二十分。

三月七日。雨(もう、雨の降り方が全く春雨じみた。)起床、午前九時。雹の經一分ほどのが降つた。山本(三)氏よりハガキ。石丸氏來訪。近藤氏を訪ふ。就褥、午前二時。

三月八日。晴。起床、午前十一時。「巡査日記」(三十七枚)を書き終る。耳科醫へ行く。中山、田中

二氏を訪ふ。就褥、午前二時。

三月九日。晴。起床午前十時。巖、並に正宗氏へハガキ。原稿を早稻田文學へ送つて見た。博文館より稿料十三圓。神崎氏來訪。玉突二時間。白鳥氏の小說「毒」をまとめて讀んで見た。氏は長篇になると短篇に出てゐる銳感の度が薄弱になつてしまう。主人公香取の人物も作者が獨りで飮み込み過ぎてゐて、氏にあり勝ちの厭人的態度がぽつ〱と抽象せられて出るやうな氣がする。從つて、香取がお多代や藝者に對しておのれの皮を一皮むいて眞情を表する場合にも、自然主義的聯絡がその厭人性とよくついてゐないやうだ。それにお多代の性格がはツきり出てゐないし、湯原がわざとお人よしにされてゐる氣味がある。且、香取がお多代のところに泊つてから後、そこでまた湯原と會つた時の三人の氣持が曖昧だ。湯原がその關係を知らないにしても全く氣をまわしてゐないと云ふのが實際の人情とも思へないし、お多代のふてくされな點も餘りそこで容易に書かれてゐる。爲めに、香取が心でお多代の肉的勢力に壓迫されてゐると云ふのが、作者の說明してゐるとだけにしか見えない。就褥、午後十時半。

三月十日。晴。起床、午前十一時。若宮氏よりハガキ。近々一雜誌を發刊する計劃があるので、俳句の方の選者を靑木月斗氏に賴みに同氏を尋ねた。そして平野町の肉屋で飮んだ。石田氏社へ尋ねて來た。就褥　午前零時半。

三月十一日。晴。起床、午前十一時。耳科醫へ行く。兼て末廣博士から照會があつた森法學士が社へ尋ねて來た。入社問題に關してだ。また島村抱月氏も社へ來訪。これは文藝協會に關しての件でだ。此頃、如何に尊敬し合つても、そんなことで夫婦の愛が虛僞なく行くものでない事實があたまを持ちあげて來た。肉の底の底まで動かないで、女に男を愛する情が充分あるとは思へない。かたわならば知らず、さうでないのに、淫亂のやうに思はれるのを恐れて肉の動きを或程度に身づから制限してゐるやうな女は、愛する資格も愛せられる資格もないのだらう。クラシクや、ロマンチクや、靈といふやうなものが別に實在すると思ふ考へから來た形式の弊に堪へなくなつた。玉突二時間半。中黑、吉江兩氏へハガキ。就褥、午後十時半。

三月十二日。晴。起床、午前十時半。ひばりは、もう一ケ月前から啼いてるが、この頃のあツたかさに門外の牡丹畑が大分にどす赤い芽を出して來た。けさ、社へ出がけに近づいてよく見ると、つぼみさへ出てゐるのがある。それに、門内の庭にはつくしや、嫁菜や、せりが出てゐるのも分つた。淸子は嫁菜とせりとを摘んで晩餐にのぼせた。就褥、午後十一時。

三月十三日。晴。起床、午前十時。耳科醫へ行く。坪内氏より中座招待狀。きのふ、けふの寒さは特別だと思つてゐたが、每年、奈良の「水取り」の日(十二日)は寒さがぶり返すのが常ださうだ。玉突二時間。

三月十四日。晴。起床、午前十時。相馬、中澤二氏よりハガキ。中座に文藝協會の「ノラ」と「ヹニスの商人」法廷の場とを見た。土肥氏のヘルマーは舊劇じみた態度があつて少し感心しないが、それでも三幕目では大分に働いた。松井須磨子のノラは評判通り可なりの出來であつたが、まだ聲が足りない。森氏の醫師ランクは釣り合つてもゐたが、どうも、まだ呼吸がうまく行かなかつた。廣田ま子のリンデン夫人は最も拙であつた。クログスタッドの東儀氏はさすがよく出來た。氏がなかつたら、あの芝居は重みがなかつただらう。然し同氏のシャイロックは、如何に理窟を付けても、大した手堪へがなかつた。と云ふのは、藝の上からではなく、シェキスピヤは既に馬鹿げてゐるからで、而もその上にイブセンの現代劇を見せた跡では、一層下らないものだ。坪内氏はもう大抵にして沙翁劇はやめた方がよからう。脚本その物が全體たわいのない物だ。同座で水落露石氏に初めて會つた。また帝國新報へ來た倉辻白蛇氏にも久し振りで會つた。生田(長)・吉江・藤井三氏へハガキ。就褥、午前一時。

三月十五日。晴。起床・午前十時。耳科醫へ行つた歸途、車で今橋一丁目あたりを通る時、二人の女の子があツちからこツちへ、こツちからあツちへ一方の足を廣く延ばして飛んでゐる。鳥渡身輕に、上手な飛び方だ。何をしてゐるのかと思つたら、ノラのタランテラ踊りの眞似だ。初日に見て來たのだと思はれた。けふの療治で耳の中を通し管がどこか入らないところへ強く當つたと見え、少し痛

みを感ずる。哲學會へ會費。加藤氏を訪ふ。中里氏より手紙。玉突二時間。就褥、午後十二時。

三月十六日。晴。起床十時。神崎氏來訪。

三月十七日。雨。出社せず。西村、近藤二氏へ手紙。吉江氏よりハガキ。中里氏より手紙。

三月十八日。雨（大阪にてあられ降る）淸子、中座へ行く。僕も岸澤屋に坪内氏を訪ひ、それからまた中座へ行つた。耳科醫へ行く。

三月十九日。薄曇。西村氏並に山本氏よりハガキ。同氏へ手紙。巖へハガキ。加藤氏よりハガキ。

三月廿日。晴。耳科醫へ行く。日本ホテルで下阪中の島村抱月氏を主客として十名ばかり晝飯を共にした。その席で、森田氏が故靑木繁氏の畫集出版の件に就き、僕にも五圓の寄附をするやうに話しがあつた。同時に、僕は靑木氏の記念追想を最も親しかつた人々から書いて貰ひ、五月の早稻田文學の一部を借りて出すことを發議した。島村氏は承諾したが、それに付き、すべての斡旋をさせる爲め、蒲原氏へ手紙を書いた。靑木氏の親しかつたものと云つては、森田、蒲原、正宗（得）、小杉、僕、並に僕は知らない坂本と云ふ人の六名であるらしい。

三月廿一日。雨、蒲原氏へ手紙。正宗（得）氏へハガキ。石丸、神崎二氏來訪、一日を遊んで暮した。出社せず。神崎氏一泊。

三月廿二日。晴。出社せず。淸子と共に賓塚の賓梅園を見に行つた。電車停留所から山の奥へ十丁

ばかり、熱海梅園よりも大きく、樹木も多い。梅はもう少し遲かつたが、月末には桃の花がまたいいさうだ。平野を見おろして海まで見える。西の宮から來て、テント張りの茶屋を出してゐるものがあつた。

三月二十三日。晴。耳科醫へ行く。薄田、田村二氏よりハガキ。大阪印刷界より稿料三圓。

三月二十四日。晴。出社せず。玉突四時間。神崎氏、淸子、荒木氏と共に五月山の陽春寺へ登り、和尙を相手に午前二時まで飮む。

三月二十五日。耳科醫へ行く。平塚氏より手紙。末廣博士へ手紙（森法博學士入社の件）。

三月二十六日。晴。蒲原氏よりハガキ。出社せず。淸子と共に五月山の絕頂に登つた。小犬をつれて行つたが、山路をよく步いた。玉突一時半。孔子の思想を冷罵する脚本の材料に、耶蘇に對するユダのやうな弟子もしくは後代の反逆者を探してゐるが、見付からない。「竹書」と云ふ古書がそれには讀んで見るに面白からうと聽いたが、書店にない。古本の出るのを待つより仕方がない。宰予の「晝寢者」、子路の「佞者」などは、左程物にはならないやうだ。楊、墨、荀、王陽明などはまた反逆者としてはえら過ぎる。桀や始皇やはまたあり振れてゐる。「光秀」のやうな面白い人物はないか知らん？

昨年十二月中旬から新報に揭載してゐた小說「發展」は昨日漸く百回で終りを告げた。東京の友人

間には抑々評判がよかつたと云ふ通知や直話を聽いたし、大阪の讀者にもさう惡くなかつたらしい。それは兎も角、もう、新聞小說だと云つてこと更らに俗受けのするのを書く時代は過ぎたらしい。如何に分らないからと云つても、謎でない以上は、全部なり若しくは半分なりの意味は解せられよう。これまで新聞編輯者たるものの世間に對する觀察が餘り低かつたのは事實だ。

押川方義先生（僕が先生と云ふはこの人だけだ）の細君が死んだ通知が來た。くやみ狀を出す。

三月廿七日。雨、風。耳科醫へ行く。齋藤(宏)氏より手紙。石丸氏よりハガキ。神崎氏へハガキ。大阪印刷界より手紙、同じくその返事。

三月廿八日。晴。齋藤氏へハガキ。中澤氏へハガキ。出社せず。寶塚へ散步す。「露國印象記」を讀み終つた。

三月二十九日。雨。耳科醫へ行く、主醫は留守であつた。西村、入江、木村三氏よりハガキ。木村氏へハガキ。末廣博士より手紙。箕有會社の小林氏を訪ひ、梅田停車場のビヤホールで兼て相談してあつた雜誌發刊の件に付き意見を聽いた。資金上の補助はしないことはないが、どうせ賣れないなら、長つづきはしなからうし、それを無理につづければ僕の內職的收入が自然に減ずるから困るだらうと云ふ說で、宿題にして別れた。僕自身は四五ケ月維持したら、一千部は確かに出るだらうと主張して置いた。

三月三十日。晴。西村氏神戸より來訪、弟巖のシンガーミシン商會へ這入る件に關してだ。巖並に長谷川へ手紙。出社せず。

三月三十一日。晴。正宗(白)氏よりハガキ。吉味氏へ手紙。大木、加藤(風外)二氏來訪。耳科醫へ行く。

四月一日。晴。女子文壇より稿料六圓。耳科醫へ行く。

四月二日。夜に入つて雨・風。池田から箕面公園へ歩いた。途中で奥村養蜂園を見、蜂の養ひ方を聽いた。

四月三日。晴(夜に入つて鳥渡雨)。淸子・加藤、神崎氏を伴ひ、岡町から十五丁ある熊野田の石丸氏を訪ふ。吉味氏より手紙。巖よりハガキ。博文館より稿料拾六圓五十錢。巖、西村二氏へハガキ。

四月四日。晴。耳科醫へ行く。新潮社より手紙。佐々木氏よりハガキ。

四月五日。晴。俳優大木一座を紹介する爲め、二日以前、加藤朝鳥氏を朝日山のもとへ行つて貰つたが、向ふが承知したと云ふので、大木並に朝日山へハガキを出した。大木氏は大阪に於て自由劇場もしくは新時代劇協會的な試みを初めようとして滯阪することに決心したさうだ。四五名のものが生活出來さへすれば旅役者的な眞似はして歩かなくてもいいと云ふので、お伽芝居の子供デーを箕面動物園でやらせようと、箕有會社の小林氏へ照會して見たが、駄目であつた。で、朝日山へ紹介したの

だが、渠が多少でも時代の新要求を解しさへすれば、何か物にならうと思ふ。社の歸途、珍らしく鬪露香氏の宅を尋ねたら、廣島高師の杉森此馬氏が來たので、昨日から案内して廻つてゐるとのことで、留守であつた。歸宅すると、間もなく、鬪氏も亦珍らしく訪ねて來た。而も杉森氏を伴つてゐる。杉森氏とは二十四五年振りだが、明治學院で僕が英語をおそはつた教師だ。もう、大分に白髪が生えてゐる。就褥、午前三時半。

四月六日。雨。耳科醫へ行く。大阪ホテルへ、女子美術展覽會の相談で招待せられた。新潮社へ返答。就褥、午前二時半。

四月七日。晴。起床、午前十時。上司、北村、正宗、若宮、本多、佐々木氏へハガキ。鬪氏を毎日社に訪ひ、相島勘次郎氏への紹介狀を貰つた。近々上京の節訪問する爲めである。社へ森田恒友氏來訪、青木氏の畫會に關する件に付いてだ。また、青木櫻溪氏と云ふ人、來訪。演藝畫報の爲めに毎月何か書いて呉れろとの依賴だから、承知して置いた。夜、荒木氏、一休和尚直筆持有者を伴つた。就褥、午前二時半。

四月八日。小雨。耳科醫へ行く。青木氏よりハガキ並に演藝畫報、「劇界雜話」(十枚)を書いて、青木氏へ送つた。神崎、加藤二氏來訪。就褥、午前二時半。

四月九日。小雨。起床、午前十時。

四月十日。東京へ出發。淸子も急に思ひ立つて一緒に行くことになつた。午後七時發の汽車に乘つたが、車中で靑木繁氏に關する追想文十枚ばかりを認めた。

四月十一日。午前九時、新橋着。淸子は、直ぐ麻布の長谷川宅へ行つた。僕は同國人植村氏（報知社員）が經營する休息所吉田屋で北村季晴氏宅へ電話をかけ、午後行くといふことを知らせて置き、荷物をそこにあづけたまま、先づ日々の主幹相島勘次郎氏を訪問した。關氏からの紹介で、同社へ這入りたいのである。それから、長谷川へ行くと、先づ、最も聽きたくない幸子の話が出た。而も或止宿人と姦通してゐるのを、娘の富美子が憤慨して、僕の妹千惠子に語つたことがあると云ふ。これが大人の實見した證據なら直ぐ離緣の種に好いのだが、子供の云ふことだから、うからか取りあげることが出來ない。兎に角、八幡町へは行かないで、おのづから向ふで處決して來るのを待つより仕方がない。精神的には、もう、疾くから放棄した妻だが、まだ法律上の手が切れないばかりに、面倒がある。早速川手氏を訪ひ、相談して見たが、起訴するのは絕對によせと云ふ。それに、訴へても、こちらに勝ち味がないと云ふ。向ふが離緣を承認する氣分になるのを待てと云ふ。どうせ、法律上のことはどうでもいいつもりだ。

一先づ北村氏へ荷物を運んで行つたが、上司、水野、木村三氏からハガキが來てゐた。再び電車に乘り、薩摩原で乘り換へようとすると、小杉天外氏に會つた。『いつ來たのです』、『けふ』、『もう永久

に『いや、ちよつと』と云ふ話で別れた。

正宗氏のところへ行つたが、今出たところだと云ふ。細君は、きのふ德田（秋聲）さんが來ても、正宗氏と僕の歡迎會をする話をしてゐたと云つた。あがつて待てと云はれたが、僕が下阪後に來た細君で初對面だから、あがるのも變であつた。德田秋江氏が近處にゐる筈だから、それを訪ねて見ようと云ふと、細君はついて來て、中村春雨氏で秋江氏の宿所を確めて呉れた。正宗氏の細君は、秋江氏とは何か感情の行き違ひが出來てゐるとかで、ついそのそばまで僕を案内して歸つた。

木戶を這入つてだら〳〵と降りて行つた突き當りが德田氏の家だと聽いて、聲をかけたが、返事がない。留守だらうと思つて、手前の家人に言づてを賴んでゐると、留守と思つた家の戶が明いて『君か君か』と例の調子がランプを持つて出て來た。急な執筆をしてゐるので、實は留守をつかつてゐたのだと云ふ。

裏庭へまわつてあがると、下女がゐないとかで、机のあたりにお鉢やら、茶碗やら、箸を置いたまま、何か原稿を書いてゐた樣子だ。頻りに大阪方面へ行きたいと云つてゐた。國民新聞の島田氏と親しいと見え、いつも渠の話が出る。僕は「立食」のやうな物を書く閑があるなら、その筆をちやんとした小說に向けたらどうだと勸告した。いらいらしてゐる渠を見ると、長居も氣の毒だから、一時間ほど話してそこを出た。

今一度正宗氏を訪ふたが歸つてゐないので、北村氏へ引き返した。蒲原氏より手紙が來て居た。
四月十二日。朝、暫く北村氏と語つてから、そこを出た。神樂坂で人力車に乘らうとしてゐると、『おう』と聲をかけたのは京都の上田(敏)氏だ。珍らしいところで會つたから、ビールでも飮まうと、坂上のビヤホールへ這入つた。僕が京都大學大阪移轉論をやつたら、同氏も賛成してゐた。殊に文科をあんな消極的地方に置くの非は同氏でも既に分つてゐるらしい。約束通り、正宗氏へ行くと、待つてゐた。僕は先づいい細君を得たものだと賞讚した。渠の皮肉に鋭い顏がやわらいだのを見ても、滿足してゐるものらしい。二人で博文館に行き、田山氏と前田氏とに會つた。正宗氏は僕の歡迎會の相談をして、そこで通知狀を出した。
歸りに、正宗氏とカフエプランタンへ行つて見た。
四月十三日。春陽堂に行き、五月の新小說に出る「寢雪」前篇の稿料(四十五圓)を受け取つた。蒲原氏の新宅を訪ひ、正宗得三郎氏にも會つた。共に僕の歡迎會へ出席した。歡迎會は兩國の芳梅亭にあつた。會したもの、秋聲、花袋、白鳥、無想庵、米野口、前田(晁)、生田(葵)、上司等の十二三名。そこを切りあげてから、そのうちの一部はまた淺草のヨカ樓へ行つた。武林無想庵が白鳥氏をひやかす。白鳥氏は中年會もしくは初老會をやらうと云ひ出す。僕が驚いたのは、皆がこの一年間におツとりして來たことだ。スバルや三田文學で紹介される若手連中とは、時代がどうしても違ふことを皆が

自覺して來たことだ。これは當前である。途中でまぐれた生田氏が吉井（勇）氏を伴つてやつて來たので、また賑かになつたが、いつも默つて微笑してゐたのは秋聲氏だ。「さすが初老會の會長だ、なア」、とからかふものもあつた。そこでキスキに五六圓取られたらしかつた。

その夜は、水野氏へ清子も行つてゐるので、僕は水野氏に連れられ、武林氏と共に澁谷へ行つた。夜中語り合つて、夜明け方ちよつと皆が寢に就いた。目がさめたら、武林氏はもうゐなかつた。

四月十四日。午後、清子と共に水野氏宅を出で、上司氏を訪ひ、北村氏へ歸つた。北村氏に八幡町の狀態を語り、うまく處分して貰ふやうに賴んだ。

四月十五日。野口氏を訪ふ。午後、大阪新報支局に立ち寄り、それから有樂座の名人會に行つた。食堂で小山內氏に會つた。その歸りに、田村三治氏が相變らず醉つて電車を待つてゐるのに出くわし、共にカフェライオンへ這入つた。正宗氏よりハガキ。

四月十六日。中澤氏よりハガキ。中澤、田山二氏へハガキ。秋聲氏を訪ふ。夜、北村氏の宅で僕の友人を招待した。會したもの、武林、木村（鷹）、蒲原、正宗（得）、生田（葵）、田村（三）、清水（橋村）、高橋（正）等の十一二氏。島崎、中澤、田山、正宗（白）、德田（秋）、生田（長）等は來なかつた。

四月十七日。島崎、上司二氏よりハガキ。清子の歡迎に靑踏社の連中が田端の筑波園で會を開いた。ついて行つた途中で、吉江氏が鄉里から歸つたところに出くわした。夜、中澤氏を訪ふ。氏は若手

運の跋扈を憤慨してゐた。さう經驗も學力もない癖に、ヰスキなどを飮んで意張り散らすのが滑稽なので、それを見るのがいやさにカフエプランタンへも行かなくなつたと云つてゐた。

四月十八日。清子の父に會ひに、二人して市川へ行つたが、父は一週間ほど以前東京へ出たと云ふので會はれなかつた。歸つて、その夜は長谷川にとまる。

四月十九日。靑踏社の會合で話をすることになつてゐたが、勞れてゐたので、平塚明子氏へ斷りのハガキを出した。森盛一郞氏を訪ふ。夜、田山氏を訪ふ。

四月二十日。

四月二十一日。麻布へ行つたついでに、美顏術を受けて見た。上司氏を訪ふ。(時事新報の社會部主任の口がかかつてゐたから、どういふ樣子か聽きに行つたのだ)。今井歌子氏を訪ふ(留守)。松内氏を訪ふ。日々社に關する件だが、氏が目下上京中の角田(浩々)氏に會つて置けと注意したので、その宿を訪ふた。そこで廣津柳浪氏と伊藤痴遊氏とに會つた。

四月二十二日。松内氏を日々に訪ふと、兎に角、今直ぐと云ふわけには行かないらしいので、樣子は歸阪後聽かせて貰ふことにして別れた。中央新聞社に吉植氏、平塚氏を訪ふたがいづれも留守。川手氏とカフエプランタンで晩餐を共にした。岡村氏來訪、北村氏と出發するまで話してゐた。午後九時品川から出發。

四月二十三日。午前十一時半、梅田着。加藤氏來訪。とまつて貰つてゐた神崎氏、その夜、引きあげた。岩村、木村(信)、佐々木、武藤、讀賣等よりハガキが來てゐた。
四月二十四日。關氏を訪ふ。結果の分らないことを報告して置いた。耳科醫へ行く。川手氏下阪、宿へ訪問した。
四月二十五日。神崎氏來訪、共に寶塚へ行つて飲んだ。
四月二十六日。耳科醫へ行く。薄田氏よりハガキ。加藤氏を訪ふ。
四月二十七日。齋藤(曉之助)氏より手紙。
四月二十八日(日)。出社せず。箕面に行く。
四月二十九日。晴、(夜、雨)。高崎、佐々木、松内三氏へ手紙。野口氏より手紙、生田(長)氏よりハガキ。若宮氏へハガキ。木村氏、島田氏、高島氏へハガキ。讀賣へ返事。
四月三十日。深田、松根二氏へハガキ。正宗(得)氏へ青木氏追想文を送る。齋藤(曉)氏へハガキ。上司氏よりハガキ。(時事新報の社會部主任の口をかけて貰つてるのだが、まだ返事ないよし)
五月一日。曇。上司氏へハガキ。北村氏よりハガキ。北村氏へ手紙、雜誌、並に音樂書。西村氏へハガキ。神崎氏來訪。新小說に「寢雪」前半が揭載せらる。
五月二日。晴。耳科醫へ行く、また痔が惡くなつて來たので、痔疾專門醫石田氏へ行つて手術を乞

ふた。若宮氏より手紙（日々へ入社の件まだ運ばないよし）。島田氏より手紙、「放浪」の僞版がある件に付き、詳しい返事だ。川手氏へ手紙を出し、「放浪」の僞版「我身の罪」なる書の出版店博盛堂を起訴することを委任した。

五月三日。夜、雨。高崎氏より手紙。痔疾醫に行く。夜、社の編輯會議があつた。

五月四日。晴。痔疾醫並に耳科醫へ行く。

五月五日。晴。茅原（華山）氏並に川手氏へハガキ。痔疾醫へ行く。出社せず。

五月六日。晴。川手氏よりハガキ。痔疾並に耳科醫へ行く。永井氏を訪ふ。今朝、兼て蜂を注文して置いた奥村養蜂園より二三日前分封した蜂群を屆けて來た。新聞社の人だから、安くして置くと云つて、箱ごと二圓だ。庭の日あたりのいいところに南向きに箱を据ゑた。入り口に詰めた新聞紙を外すと、直ぐ蜂は出て來て箱の周圍を飛びまわるのがあつたが、やがて働きに行き出した。赤い花粉を取つてくるのはゲンゲのだ。蜂の出入自由に蜜を取り來たり、取りに行く樣子が面白い。尻の太く鐵色なのは雄蜂であるらしい。働き蜂は尻のさきが黑く、その黑い尻に細い黃色じみた白色の横筋が四段に入り、一番胸に近い第八段目のところに少し薄い赤茶色がある。高安氏よりハガキ。

五月七日。出社せず。痔疾醫に行く。

五月八日。晴。痔疾醫並に耳科醫へ行く。浪花蜂園よりまた一群（五圓）の蜂を持ち來たる。箱は假

り箱であつたから、本式のを別に持つて來て貰ふことにした。奥村氏から來たのに產卵がないので王ぬけかと思つた。

五月九日。晴。浪花蜂園の北川氏を訪ふ。餌皿に巢を造つた蜂があつたので、それを試みにそのまゝ分けてあるのがあつた。

五月十日。晴。耳科醫へ行く。佐々木氏より手紙。神崎氏來訪。正宗（得三郎）氏來訪。箕面並に寶塚を案內した。同氏一泊。蜂を世話する時顏をおそはれない爲めの網があるが、それを僕は妻の古い三越ベールでやることにした。さきに北川氏へ初めて行つた時は菜種の時期であつて、蜂が尻を眞黃色にして歸つて來たが、この頃はゲンゲに行くので、兩の蜜ぶくろに赤い花粉をつけて歸る。

五月十一日。晴。正宗氏と三越吳服店に行つた。氏の繪畫展覽會を同所で開いて貰はうとしてだが、差支へて出來なかつた。木村氏、三井（甲之）氏よりハガキ。川手並に若宮二氏へハガキ。奥村養蜂園から屆いた方の蜂群が、屆いてから二三日目になつても蜂兒を產みつけた形跡がなかつたので、王ぬけかと心配した。ところが、王がゐるのは分つたが、まだ尻が細く、交尾前ではないかと心配した。それも、昨日調べたに依ると、多少の玉子が產みつけられてゐるので、交尾ズミだと分つた。王の尻も、昨日頃は少し太くなつてゐた。

五月十二日。雨。青踏社員連の中野初子氏歡迎會があり、それにお伴をして箕面動物園へほととぎ

す啼合會を聽きに行く。去年の啼合會よりも時期が早かつた爲めか、うまく啼かなかつた。神崎氏も早川氏を伴つて來てゐたので一緒に行つたが、動物園で分れた。初子氏・清子、僕三人はそれから寶塚へまわつて歸宅した。正宗氏にも蜂箱を明けて見せたが、けふ、中野氏にも見せた。川手氏より轉居のハガキ。

五月十三日。晴（夜、雨）。三井氏へハガキ。耳科醫へ行く。

五月十四日。晴。東華園に行き、ライラクの小株を買つて來た。八月、花を開くさうだ。ついでに、石橋停留場のそばの花園で、フレンチラナンキユーラスと云ふ草花をも買つた。もしもツと永く大阪に勤めるなら、蜂の爲めに庭一杯クローバーの種を播いてもいいと思ふ。然し蜂は近い花でも僅かあるのには目をくれないらしい。庭のゲンゲに働くのを見たことがない。兎に角飛んで行つて花粉や花蜜を取つて來ないなまけ者はかみ殺されてしまうのだ。夕方、出社し、中山氏を訪ふ。同氏の話で、僕の自由勤務を正確にするには、表面、社外の人――客員とでも云ふ名義――になるがよからうかとのことだ。社員中で先日の編輯會議に、僕の勤務方に就ておせツかひを云つたものがあるからである。それ位のことで僕に每日出勤せよと云ふのなら、鳥渡いい折だから、辭職して歸京する方がいいが、客員とでも、何とでもなつてなほ自由を許され、その上月に少くとも一度は東京へ行けるやうになれば、多少結構だが――

五月十五日。晴。耳科醫へ行く。夜、箕面公園一方亭で、同乗會の相談があつて行つた。

五月十六日。晴。茅原(華山)氏よりハガキ。浪花蜂園を訪ひ、蜂蜜を巣から分離させるところを見た。分離させた蜜に飛び込んだ蜂を一匹拾ひあげて、蜜だらけのまま別な箱の入り口に置くと、その箱の群蜂が出て來て、寄つてたかつてその一匹に着いた蜜を吸ひ取り、見る見る丸裸にしておツぽり出してしまつた。他群の仲間であるからであらう。ところが、別な蜂――これも同箱のでない――を一匹入り口にほうりあげたら、これは平氣で箱の中へ這入つて行つた。今に見ろ、引きずり出されるからと云つて待つてゐたが、一向に出されて來ない。多分產れ立ての兒であらう。兒はまだ特種のにほひが染みてゐないからと云ふので、試みに別な兒をまたあげて見ると、矢張りのことと這入つて行つて、出て來なかつた。親になつた蜂なら、かみ殺され、さし殺されて出されるのに決つてゐるのだ。

五月十七日。晴。春陽堂へハガキ。若宮氏並に野依氏よりハガキ。若宮氏の紹介で實業之世界社から「發展」を出さうと云ふので、その原稿を野依氏へ送つた。條件は印稅一割、校正は一度見ること、再版から一分もしくは二分增、出版前に印稅の半額、印を押す時他の半額を受けること。蜂が井戸の流し元へ水を飲みに來たのを見た。耳科醫へ行く、この二三回、鼻から中耳へうまく棒が通らなかつたのが、けふは何の苦もなく通つた。痔疾醫へも行つた。「近重博士の音韻論に就てに就て」(八枚)を

草す。

五月十八日。時々雨。若宮、相島、水野氏へハガキ。深田(康)氏へ昨夜の原稿を送つた、藝文に出す爲めだ。加藤氏と共に香櫨園に於ける慶應マニラの野球試合を見に行く。西の宮の薄田泣菫氏を訪ふて連れ立つて行つたのだが、雨が降り出した爲め、同園境内の料理屋に這入り、三人で夕方まで話した。神崎氏來訪。

五月十九日。雨。箕面の一方亭に同乘會が開かれ、そこへ行つた。歸つてから、池田の吳座に藝者連の吳れは踊を見た。正宗(得)氏よりハガキ。深田(康)氏より手紙。

五月廿日。晴。水野、森田二氏よりハガキ。耳科醫へ行く。

五月廿一日。曇。野依氏、深田(康)氏よりハガキ。野依氏へハガキ(云つてやつた條件中、印稅の半額を出版前、他の半額を印を押す時貰ふと云ふのを、賴みにより、出版發賣後、十日以內と訂正することにして送つた)。川手氏、北村氏へハガキ「故鄕の禁止に就て當局者並に文藝家に注意す」(七枚)を書いた。

五月廿二日。晴。昨夜の原稿をハガキに添へて國民の德富氏へ送つた、東京で發表しなければ、注意が無駄になる恐れがあるから。耳科醫へ行く。日報社に齋藤氏を訪ひ、同氏と共に堺州樓に於ける木村畵家の宴に行つた。相島、若宮二氏よりハガキ。

五月廿三日。晴。清子と共に正宗氏の展覽會を見に丸善に行き、その歸りに同氏並に森田、山本(鼎)二氏と道頓堀へぶらつき、明陽軒にのぼつて晩餐をやつた。丸善で外國養蜂の書物二册を購求し、尙二册を注文して置いた。

五月廿四日。晴。耳科醫へ行く。夕方、岩崎氏來訪、それから清子と僕とをつれ出して、大阪に行き、四ツ橋のそばの三十ぢ（みそ）と云ふ料理屋に案内した。大阪文藝の連中の來るところと見え、宮飼、その他の若い連中二三名を僕に紹介した。加藤氏よりハガキ。川手氏よりハガキが來て、「放浪」に對する僞版「わが身の罪」を求め得たから、近日訴訟の手續をすると云つて來た。島田氏、關氏へハガキ。

五月廿五日。晴。川手氏へハガキ。島田氏並に國民新聞よりハガキ並に手紙、送つた原稿の中の問題、乃ち、「マグダ」禁止問題が解決したから、既に印刷にまで附したと云ふ拙稿返却の斷りである。この問題が訂正を以て解決し、六月中旬には大阪でやることにすると云ふことは、昨日東儀鐵笛氏が來社しての話であつたが、僕は脚本を當局者の意に滿つるやう訂正して興行禁止を免れたのでは、根底の解決が付いたものだとは認めない。拙稿は、殆ど同じのを大阪新報にも出したからそれでいいとしても、文藝協會が原作の訂正をして迄も興行をつづけようとするのは、既に藝術的誠意を離れて一般の興行者になつたわけで、とても僕は同情を表することが出來ない。

丸善へ行つたら、箕面電鐵の小林氏が正宗氏の畫を見に來たので、氏の爲めに一點を買つて貰ふことにした。谷崎（潤一郎）氏が來阪して文樂座に行つてゐるが、僕に會ひたいと云つてるとのことで、正宗氏と同座に行つた。そして「忠臣藏」のうち、南部、古靱等の道行、攝津大掾の山科閑居を聽いた。大阪の岸本、東京の柴川とか云ふ金滿家の招待であつて、山本、森田、織田の三畫家も來てゐた。京都祇園の揚屋の女將お高もゐた。打入り前に切りあげて、總勢は魚治と云ふ繩暖簾式の食物屋で飮んだ。それから、谷崎氏並に畫家達と電車で寶塚へ行つて、みよし野と云ふ旅館で落ち付いた。

五月廿六日。晴。谷崎氏は昨夜、長田（幹彥）氏が來てゐる筈なのを氣にして、大阪の宿へ電話をかけた。で、長田氏も電車で飛んで來たのだが、もう寶塚行がなかつたので、池田で下車し、そこから一里を人力車で飛ばすことにしかけたのだが、その夜、結婚式があつたとかで、土地の車がすべてその方に雇はれてゐた。たまたま一人の老車夫に出くわし、その車に乘つたのは乘つたが、これも醉つ拂つてゐて、長田氏は路上へ投げ出され、止むを得ず池田どまりにしたとかで、早朝、僕等がつかれて寢てゐるところへやつて來た。そこを正午十二時頃引きあげて、僕は池田で皆と別れた。

俳優大木氏の連中を箕面動物園の餘興場に雇ふ問題がまた交渉出來さうなので、僕は渠の爲めに園長の齋藤氏をその事務所に尋ねた。そして共に一方亭へ行つて午後十時頃まで玉突をして歸宅して見ると、荒木氏と陽春寺の和尙とが來てゐた。碁を打つて二時頃に至つた。

五月廿七日。小雨。松内氏へハガキ。大木氏來訪を幸ひ、昨日の話を下相談する爲め櫻井停留所そばの齋藤氏へ伴つて行つた。動物園の餘興場を渠が引き受けるやうになれば、それを生活費の種にして、その時間を渠の連中が新劇研究に供することが出來て頗る好都合になるわけだ。齋藤氏から伊藤公爵の半身像を貰つて歸つた。

五月廿八日。晴。耳科醫へ行つた。大木氏並に加藤(風外)氏、社へ訪問。川手氏より手紙あり、いよいよ告訴並に委任の書狀へ實印を取りによこした。直ぐ返事をやつた。平野(一助)氏から久しぶりに手紙が來た。朝鮮畜産株式會社皮革部の主任をしてゐるさうで、大阪に於ける取引先の周旋や、皮革相場の繼續的報告や、梅田の通運會社倉庫へ來てゐる皮革の賣り拂ひを頼んで來たのだ。木村・正宗(得)二氏へハガキ。

五月廿九日。晴。野依氏よりハガキ、「發展」の出版をいよいよやることになつたさうで、來月一杯に製本出來するやうになつた。田中王堂氏より手紙並にその著、「哲人主義」を送つて來て、批評をせよとのことだ。書は上下二卷で、上卷の半分は僕の人生觀並に藝術觀の批判に費されてゐるが、これに對してそれが雜誌中央公論に出た時批評してある(「悲痛の哲理」がさうだ)から、再び言を費す必要はなからう。その他に部面に於て云ふことがあれば、熟讀の上にすると返事して置いた。川手氏へハガキ、云ひ忘れたのだが、「發展」の版權登錄はしてないので、その必要があればやつて貰ひたいと

云つてやつた。

北川氏を訪ふたら、花屋敷へ行つて家にゐないと云ふ。ゲンゲなど少くなつたので、そして蜜柑の花の時期になつたので、蜂をすべてその山に持つて行つたのだ。田圃を五六町のことだから、步してそこへ行つた。北川氏は今分封した蜂を、群を强盛にして澤山蜜を取る必要上、もとの箱に返してやつたところで、網をかぶつたまゝでゐた。氏はこゝで百箱以上の群を世話して二年前に大失敗をしたのださうだ。經驗不相應に擴張したからである。蜜柑山がそのそばにあるので、蜂には持つて來いのところだ。まだ充分に發酵してゐない蜜の採れたのを嘗めて見たが、水氣が多くてねばり氣が少い。それから氏と共に再び川西へ歸り、アウストリヤ種とロシヤ種との形相並に働き振りを見せて貰つた。洋種は蜂の體も大きいし、働きも却々强盛だ。僕の宅の蜂がこの頃ゲンゲの赤い花粉の代りに、白いのを持つて來るものもあるので、何かと聽いて見たら、柿の花に行つてるのだ。その花粉はやや白い。今はブドウもあつて、その花粉も白い。せんだんもあるさうだ。無論、まだ野薔薇もある。長くべたべたと引く花粉はあざみ並に月見草の花。ホワイトクローバーのは黃の黑ずんだ色。みかんのは黃のさえたのだが、本月の十五六日から來月十日頃までが時期だ。僕の蜂が、けふ見たが、塀外の草原のゲンゲによく働いてゐたが、もう、その花は少くなつたやうだ。第二の箱へ十三四日前に入れたワクが一杯になつてゐるので、けふ、また巢礎のついた一つを加へてやつた。一週間程前に入れたの

が、四分の一ほど巣をつけられた。第一の箱へもまた一ワク入れた。
五月卅日。晴。田中王堂氏からその著「哲人主義」が來た。春陽堂並に野依氏へハガキ。山本氏よりハガキ。耳科醫へ行く。社へ行くと、京都から正宗氏の電話が來てゐたので、汽車で出て行つた。此間文藝座で會つたお高さんの家、磯田に正宗氏を初め、森田、織田、山本、山の内、谷崎、長田の諸氏が集つてゐた。そこからポント町の福田屋へくり出し、藝者や舞子八九名をあげてさわいだ。幸ひ、月もよし、久しぶりで京都の良夜に接した心地がした。然し人が多過ぎた爲めだらう、何だか一座にまとまりがつかなかつた。途中で散歩に出かけるものもあつた。僕等も舞子二三名を連れて、月光の中を祇園の丸山あたりまでぶらついた。螢を取つて歸る人々が多かつたので、舞子は皆それを欲しさうにして、その一人の男に『おくれやす』と聲をかけると、やるから來いと云はれて、却つてそれがおそろしくなつたかして、默つて置けとささやき合つてゐた。歸途、山本氏は藝者などの繪ハガキを貰はせられてゐた。ポント町へ歸ると、谷崎氏が一人で藝者を相手に何か歌つてゐた。山本、山の內二氏と僕との外は、すべて昨夜もここに止つたのだ。僕等は皆午前二時頃に床を並べて落ち付いてしまつた。女どもは昨夜の通りじやと寢をする筈であつたさうだが、男の人數が多いのと勢ひが烈しく見えたのとで恐れを抱いたのだらう、すべて二階へはあがつて來なかつた。僕は床に這入つてから蜂のことばかりが心配になつた。

五月三十一日。正宗、森田、山本の三氏は須磨へ行く必要があつて早く歸つたが、他は十時頃そこを引きあげ、四條橋の袂の西洋料理店で朝飯をすまし、丸山邊をぶらついて閑靜に横になるところを探したが、なかなか發見しなかつた。嵐山へ行かうと云ふものもあつた。知恩院の僧に賴んで、あすこで横にならうと云ふものもあつた。淸水へ行かうと云ふものもあつた。丸山のアイスクリーム店で種々評議をこらせたが、皆疲れてゐるので何の勇氣も出ない。たまに話がはずむかと思へば、駄洒落の云ひツこに過ぎない。止むを得ず、眞葛が原の月見樓と云ふのにのぼつた。そこで湯に這入り、一先づごろツちやらしてゐたが、手品の眞似をやり出すものもあれば、當て物を初めるものもあつて、矢張りよく寢られなかつた。そのうち、また酒になつた。そこのうちの娘絹世と云ふのが鳥渡面白いので、そこへとまらうと云ふ評議もあつたが、僕だけは今夜下坂する川手氏に會ふ必要があるのでさきへ引きあげた。十時頃梅田へ着くと、直ぐその足で川手氏を小西旅館に訪問した。そして四ツ橋の「三十じ」で飮んだ。東雲堂並に博盛堂に對する訴訟は、版權登錄の有無に拘らず成立するさうで、然し高々一千圓の要求しか出來ない樣子だ。でも刑法上では五百圓までの罰金がある。僞版の方は、ただ序文と挿繪とが變つてるだけ、第一頁も矢張り「放浪」通りになつてるさうだ。歸宅して見たら、川手、大木、平野諸氏のハガキの外に、野依氏から「發展」の校正が來てゐた。直ぐそれを見て投函した。この日、夕方、京都でもゆふ立があつたが、午前零時頃、池田に下車するまで急雨があり、家

についてから大雷雨になつた。
六月一日。晴。水野氏よりハガキ。川手氏來訪。寶塚の「みよし野」で飲んだ。池田へもどつた時、原氏が來てゐたので、三人で玉突をした。校正が來たので、見て送つた。出社せず。
六月二日。晴。出社せず。校正、三十二ページ。神崎、大木二氏來訪。大木氏の芝居が來る日曜日に箕面動物園で先づ一回試驗的にあることになつた。その話で箕面へ行つたついでに、一方亭で玉突をした。春陽堂の本多氏へ稿料催促。
六月三日。晴。田中、石丸二氏へハガキ。平野氏へ手紙。耳科醫へ行つたが、けふは棒を通さないで三度ばかり空氣が這入つた。もう、二三回で僕の左耳も平狀に返るかと思ふ。木村氏よりハガキ。先大阪府技師高橋久四郎氏夫婦はずツと以前からの知り合だが、大阪にゐるとは思つてゐなかつた。先日のクロスカントリレースの時、ふと細君に會つたのでその居所が分つた。細君は芝の幸子とは初めからの友達で、僕等の結婚當時も仲に這入つて世話をやいてくれた人だから、心配して芝の方へ手紙をやつて見たり、高橋氏が先月上京の節芝の方を訪問して樣子を見て來たりして、どうせ一緒にゐられないのなら、或條件のもとに早く別れてしまつたがよからうと幸子に勸めて、その話を僕にもするやうに引き受けて來たさうだ。けふ、細君から社へ電話がかかり、來てくれろと云ふので行つて見た。全體どうすると云はれたので、この前川手氏が幸子から聽いて來た條件のうち、五百圓くれいと

云ふのを少し妥協出來さへすれば承知すると僕も受け合つた。與へる金の全額を先づ二百圓と定め、それを月賦なり、また多く這入つた時はそれだけ多くなりして、段々濟ませるやうにと云ふことにして話を運ばせて貰ふことに頼んだ。歸つて來たら、春陽堂から電信カワセで六十九圓送つて來たさうだが、そのカワセを間もなく失つたと云つて淸子がおほさわぎをしてゐた。然しこれは何とか方づくことであらう。兎に角、『寢雪』に對して總計百十四圓受け取つたから、百九十枚あつたわけだ。

六月四日。夜、雨。出社せず。珍らしく朝早く起きて郵便局へ昨日のカワセ紛失手續をしに行つた。が、カワセは意外にも盆の底にくつ付いてたのを下女が發見した。歸宅して直ぐ湯に這入り、それから『發展』の序（田山氏の評言に對する反駁）七枚を認めた。それを秀才文壇に送る爲め淸書してゐると、俱樂部の主人が來て、蜜蜂の一群が飛んで來たから、どうかして吳れろと云つた。幸ひ明いた箱が一つ殘つてゐたから、それとベールとを用意して行くと、蜂は俱樂部の庭から向ふ隣の某氏の庭に行き、釣り葱のぐるりにうぢやうぢやたかつてゐた。先づ王を捕へようとしたが、どうしても發見せられない。子供が棒で投つたと云へば、その時うち殺されたかも知れない。どうして全部を收容したらいいか分らないので、葱ごとそツくり箱に入れて持つて歸り、北川氏へワクを取りに行くと、北川氏が一緒にやつて來て、世話をして吳れた。葱ごと持つて來たのがまだうぶな所以で、たとへ王が發見せられなくとも、椀か何かですくひ取ればよかつたのにと云はれた。そして某氏の庭にま

だ殘つてゐる分を、葱を持つて行つて、またそれにとまらせて持ち歸つた。王がゐるか、ゐないか、まだ分らないが、これが納まれば第三の蜂箱が出來るわけだ。第二の箱から蜜と産卵との澤山附いたワクを一つ取り出し、跡へは新らしいワクを入れ、取り出したワクから蜂をふり拂つて、それを第三號の箱の中心とし、左右に新らしいワクを各々一個づつ附けてやつた。中心ワクの巣のはみ出たのを直す爲め、ナイフでうら表の兩面から少しづつそぎ取つた巣をふきんでしぼつたら、一ポンドの三分の一强の蜜を得た。第二箱の一ワクに王臺が一つ出來て、旣にクラブの主人に群を見せた時、こわごわ巣をさわつて見たその樣子がをかしかつた。旣に二日目だ。兎に角、第一、第二の箱とも、來た時よりも二倍の群になつた。けふ、埋めて置いたダリャが芽を出して、もう、五寸ばかり延びた。板圍ひに添ふて植ゑた朝顔の苗もけふの雨で大分勢ひが附くだらう。北川氏は養蜂に趣味を持つてる細君を探してゐると云つてゐた。氏の外に、大木氏來訪。

六月五日。晴。前田(夕)氏と野依氏とへ同じ原稿。よみうりから問合せに來たことへ返事。校正をした。川手氏よりハガキあり、いよいよきのふ著作權侵害の告訴を提出したさうだ。けさ、昨日の蜂の殘黨がまだ殘つてゐると云ふ知らせが來たので、葱を持つて行かせた。夜、葱を取りに行つたが、その家が留守であつた。

六月六日。晴。平野氏より手紙。松永氏がロンドンよりショーとワイルドとの肖像ハガキ、その他

の繪ハガキを送つて來た。第一號、第二號の蜂箱の巣のでこぼこに出來たのを整理してやる爲め、三ワクだけただ上部の蜜蓋のふくらみ過ぎたところを削つたが、それで蜜が一ポンドばかり得られた。初めて來巣を整理する時、第一號の王蜂が石の上にころがつたが、別に傷をしたやうでもなかつた。初めて來た時から見れば、尻が二倍ほどに肥えた。多分、奧村氏が今年の新王を持つて來てくれたのであつたらう。第三號の群も落ち付いたやうだが、巣造りに急がしいせいか、なかなか荒い。そして入り來るものを一々誰何してゐた。敵の侵入したのを喰へて飛んだのがまた二回まで見えた。三ツ空ワクを入れたのが二ツまで大分巣を拵へた。箱が三個になつたので、まごつくあわて者が出來たせいでもあらう、第二號の入り口にはけふは六七匹の番兵が、規則正しく、同じほどの通り路をあけて並んでゐた。王臺はけふ取り去つた。不慣れの爲め、意外の時分封されるのが心配だし、分封させても花が少くなつたから强盛になるまいとのことであるから、北川氏も、もう一日の蜜の採收をとめたが、本年八斗ばかり取つたさうだ。某氏へ行つたら、もう、蜂の殘黨はゐなかつた。王をこちらへ持つて來たのだから、もとの巣へ飛び歸つたのだらう。

白松南山氏の『神になる意志』に於ける僕に對する議論に對し、その反駁を七枚まで書いた。

六月七日。晴。山本、森田氏よりハガキ。耳科醫へ行く。闕氏、吉岡氏、富樫氏が訪問。吉岡氏へ蜜蜂を養つて見てはどうだと云つたら、氏が家根の上で熱心にそだててゐる朝顏の大輪を花粉のばい

かいによりすべて變り物にしてしまうのを恐れるからと斷つた。校正、二百二十四頁迄。野依氏の事業振の捗々しいのに感心する。「船場の一隅より」を「事實と批評」として、前者の哲學的であつたのを改めて、成るべく當時の問題に觸れることにした。

六月八日。小雨。出社せず。校正、三百二十枚まで（但し、二八九頁――三〇四頁までは來らず。）上司氏より手紙、並にその返事。前に表庭の板壁に添ふて根分けした朝顏を、また根分けして、裏庭へ植ゑた。丁度小雨が降り出したからである。第二番目の朝顏種をも播いた。玉突、二時間。

六月九日。雨。增永氏より手紙。平野氏より手紙。前田氏よりハガキ。三百三十六頁まですべて校了。第二號の蜂群はまた王臺を拵へた、而も一時に七個だ。第三號の王蜂がまだ見付からないが、新らしい產卵が少しあるのは事實だ。

「神になる意志の不徹底」（白松氏を反駁す）十四枚を書きあげた。その中に蜂の一群を一つの肉體と見ての譬喩を思ひ出した。

六月十日。晴。耳科醫へ行く。（カテテルは樂に這入るが、それを取つた跡はまだ直きにつまつてしまう。）校正、三百五十二頁まで。坪内博士より手紙。昨日の原稿を早稻田文學へ送つた。相馬氏、增永氏へハガキ。松内氏へ手紙（先日關氏の話に相馬氏が東京日々をやめたさうだから、松内氏が主になつて僕の入社を奔走して貰ふやうに賴んだ。）玉突一時間。遲くなつて、正宗、森田、織田の三畫家

來訪。僕の蜂群から取つた蜜を溫湯にとかして御馳走とした。

六月十一日。晴。電車定期乘車切符へ本人の肖像を寫眞にして出す工風を、大阪の六會社に交渉して引受けるつもりで、さきにロンドンの W. Butcher & Sons ltd. Camera House, Farringdon Avenue へダンヂカムプレート (Dandycam Plate) をもツと自由に改造して貰へるか、どうかを問ひ合せて置いたが、けふ、その返事が着した。が、あれはあれ以外に改造の道がないさうだ。然し同社の寫眞器械キヤタログを送ることになつてゐると書いてある。石丸氏よりハガキ。政友會代議士會で西園寺侯のやつた演說が實に實質のないのを惜しみ、「事實と批評」の材料に入れた。夜、かじかを聽きに、清子と箕面の一方亭まで谷合を歩いて見た。川の流れが急でないから、かじかの聲もよく冴えない。きのふもけふも、堺外の空地の僅かなクローバーに、蜂が二三匹働いてるのを見たが、もう蜜源が少くなつて來たやうだ。第一號の箱が餘り一日中日光が當るので、朝だけ當るやうに、夜の中に向きを直した。けふも第三號の箱を調べて見たが、王蜂が見付からない。それに作る巢の形が正六角であるのが本當だのに、心持ち圓い。また、最初に第二號から入れた、ワクの巢蜜を喰つてるやうだ。これらは王ぬけ並に逃走の恐れを示めす。產卵が少しばかりあつても、王ぬけの時は働蜂が產むと聽いてゐる。

六月十二日。晴。出社せず。吉岡氏が投網を持つて來たので、猪名川を打ち步いた。そこへ北川氏

がやつて來て、第三號の蜂群が逃走の意志があると告げた。が、まさか、けふ直ぐとも思はないから、同氏をもつれて川を下つた。午後三時半頃川から歸宅すると、それが既に逃走した跡であつた。清子の話に、僕等が歸宅の一時間ほど前に、蜂群がぞろりぞろりと箱を逃げ出し、空中にわんわん云つて暫く飛びまわり、すべてが出たのを待つて、勢揃への勢ひ見事に二三度うづを舞つてから飛んで行つたさうだ。裏庭の空を飛びまわる羽音が臺所にゐてもよく聽えたさうだ。實は、昨日調べた時、産卵が少しあつたと思つたのは果して働蜂の産んだ雄蜂卵であつたのだ。けさも第三號を調べたが、どうも王が見當らず、且、第二號箱から取つて入れたワクの蜜が殆ど喰ひ盡されてゐるので、ひよつとすると逃走するつもりではないかとまで僕も思ひ付いた。それをうツかりしてゐたのが落ち度だ。王蜂は僕の心配してゐた通り、僕がこの群を收容する前某氏の子供が棒で投つた時うち殺されてゐたのだ。王がなければ、ゐ付かないのは當り前だ。早くもツと調べて、新しい王を與へてやつたらよかつたのに。逃げ殘りの小群（多くは幼兒だ）は、北川氏が即坐の合同法を以つて第二號箱に合同させたので、同箱は十一ワクになつた。今王臺が出來てゐるのを一つ仕立あげて、第二號群を分封させて見ようと決心した。第一號箱の向きが面白くないので、昨夜置き直して置いたが、けふは、その蜂の出たのが、歸りには一たび元の場所に行き、それから箱へ這入つた。が、働き振りに異狀はなかつた。蜂があたまから白い花粉をつけて來るのは、栗の花粉かと思つたが、何か雜草のださうだ。

獵して來た川魚を料理して、吉岡氏や北川氏と共に飮んだ爲め、午後五時から日本ホテルにある文藝協會よりの招待へ出席しなかつた。北川氏や淸子と寶塚を散步して、氷を飮んだ。「發展」の校正本文を了す、總計四百十四頁。

六月十三日。晴。野依氏へハガキ。哲學雜誌到着。淸子も兼て分封の用意が出來かかつてゐると思つてゐたのは、きのふから思ひ違ひであるのが分つた。けさ、加藤氏が來訪しての話に、一昨朝も來訪したが門が締つてゐた――これは下女がその前夜、飼犬のからだをかいてゐた振動が臺所口の戶にどんどん當つたのを泥棒と見て夜目を眠ることが出來なかつたので、特別な寢坊をしたからであるが――それが爲めに引き返すついでに、吳服神社の境內へ這入つて見たら、蜂が群を成してぶんぶん云つてゐたと報告してくれた。で、また收容しようかと思ひ一緖に行つて見ると、群團ではなかつた。太い大きな高い榎の木か、もちか、何かの木の高い枝に細い花が澤山咲いてゐる。その花を澤山の蜂が飛び渡つてゐて、ぶんぶん音はしてゐるが、何分高いのでどうすることも出來ない。一昨日は下の方でぶんぶん云つてたと云ふのだから、或はどこかの分封群であつたのかも知れないが、それとも、また花粉花蜜を取りに每日集つて來る蜂かも知れない。もう、山に蜜柑の花もなくなり、野に野薔薇、クローバー、あざみの花が僅かに殘つてる時節だから、僕の蜂もこんな木へ來てゐるのだらうと思つた。が、その境內に、徑三寸ばかりの木で、縱に松の幹のやうな皺の寄つた、皮の堅さうな、そ

して枝の分れが少い、そして又つくしのおばさんの俗名ある杉菜のやうな若芽を所々萌え出してゐるのがある。その幹の低いところに、一匹、蜂が迷つてゐたのを見ると、日本種のとは違ひ、尻がこけて、赤みを帶びてゐるのが特異點であつた。何とか云ふ大木に寄つてるのもそれと同じなら、池田の山手に、布哇から歸つた諏訪と云ふ養蜂家が百箱も赤いイタリヤ種を飼つてるさうだから、そこの蜂が來てゐるのかとも思はれた。何分高いところにゐるので、はツきりとは分らない。

けふ、第一號箱へワクを一つさし入れたので、都合七個這入つたわけで、小い箱はそれで一杯だ。第二號箱へは十一ワク這入つてゐるが、一週間ほど前に入れたワクの巣端にも亦一つの王臺が出來て、そこにやがて王蜂になる小いうじが輪のやうに丸まつてるのが見えた。この臺の中には滋養に供する蜜が入れてあるやうだ。つまり、うじの時は同じのだが、王臺に這入つて、王になる特別な滋養分を與へられるので、女王が產れるのだ。とに角、兩箱とも、狹くなつて來たので、蜂は箱の裏にくツ付いたり、出入口にあふれ出たりしてゐる。

夜、北川氏のところへ行くと、大變なことがあつたと云ふ。何かと思ふと、二箱の洋種のうち、四五日前からツギ箱をしたアウストリヤ種の方が意外に早く分封したが、それを取り逃してしまつたのだ。丁度お晝頃分封して庭の杉の木の絕頂にとまつた。邦種は何でも梅の木のうろや、かけた忽などのやうな低いところにとまるに決つてるが、洋種は枝葉の繁つた高い場所を撰ぶのだ。それが高いの

で困つたが、先づ收容する箱の整理をしてから、半ば杉の木をのぼり、鋸を以つて蜂のとまつた枝の根からそツくり切り取らうとした。が、足がすべつて落ちかけたのを手で幹にかかへ付いた勢ひで、ゆらゆらと木がゆれた　それと同時に、蜂群は空に舞ひあがり、二三度輪に飛びまわつた後、どこかへ見えなくなつたさうだ。僕がただで收容したのを無くしたのとは違ひ、三四十圓を棒にふつたと、氏は殘念がつてゐた。ところが、氏と吳服橋の上まで來た時、氏は氏の友人に出逢ひ、この殘念を話したら、ぢやア、その蜂だらう、少し川上にあるお宮の藪に四五時間前わんわん云つてたのがある。鼠信の音かと思つて仰ぎ見たら、蜂の群であつたと、その友人が告げた。で、明朝見て來ようが、多分もう他へ飛んだだらう。分封は一般に午前十時頃、遲くも正午までにするものとしても、午後四時頃までは同じ所にゐるものだが、どこか別にいい場所を見つけると、その頃また飛んで行くのだと、北川氏は云つた。

六月十四日。晴。出社せず。昨夜、十時頃、北川氏と別れてから、荒木氏を鳥渡訪ひ、けふの網打ちに誘つて置いて、歸宅した。文章世界に出た中村星湖氏の「描寫の意義」に對する誤解や矛盾を指摘する爲め、「小說表現の四階段」十七枚半を書き終へたのは、午前五時であつた。それを投凾してから寢に就いたが、九時半頃吉岡氏來訪。やがて荒木氏も來訪。鳥渡第二號蜂の王臺を見てから、二氏と淸子と僕とで網打ちに出た。北川氏をも呼びに行つて來たが、きのふの川西のお宮の蜂は逃げた奴

ではなくて、そこのもちの木へ同氏の箱から蜜を取りに行つてるのであつたさうだ。して見ると、呉服神社のも僕のや、他のが働いてるので、かの大木ももちの木であらう。花粉は白いさうだ。ぶんぶん云つてるのは働いてるので、分封群のとまつたのはおとなしくしてゐるさうだ。

秀の海と云ふ宮相撲取りが網好きかして僕等について來て、一人で網を打つて呉れた。けふは川上へ行つたのだが、渠が打つた網の中を水眼鏡で探して手取りにするのだから、鮎が三十尾も取れた。而も五六寸のがあつた。外に、たまづが二尾と澤山の鮒と雜魚だ。途中から、奧村養蜂園の主人も見に附いて來た。家で料理して喰つたのは、吉岡、荒木、北川の三人だ。川で柿の實の流れてゐるのを手に取つて見たが、もう小指のさきほどあつた。北川氏は第二號箱の王蜂の羽根を切つて呉れた、分封させるのに、遠く飛ぶのを避ける爲めだ。王臺の格恰いいのが一つ、けふで四日目であるさうだ。第一號箱を僕が調べてゐるのを見て、渠は大分巧者になつて來ました、なアと云つてゐた。七個のワクは多いので。一つだけ、まだ巢を造つてゐないのを取り除けた。野依氏よりハガキ。「發展」の印稅印紙に判を押して送つてくれろとのこと。同書の序文校正ズミ。

六月十五日。晴。野依氏よりハガキ、書物の體裁と定價との相談だが、體裁は上下を裁ち、表紙は純白なのにただ書名と著者の名とを入れ、定價は一圓以下八十五錢以上でよからうと返事した。荒木氏、神崎氏來訪。一昨日呉服神社で見た蜂の働きを再び見に行つたが、夕方であつた爲めか、ゐない

やうであつた。杉菜のやうな芽を出してゐる木から、その芽を見本に摘んで來てこの日記の紙脊に入れた。（それは紛失してしまつたのか、無くなつてゐる――編者）曾て比叡山の根本中堂の門内に一本植わつてるのを見たが、その檉の木らしい。今夜は下坐敷を明け放つたので、然しそれでも光が蜂箱の口に當らないやうに注意してゐたが、二三の蜂は電氣の光へ迷つて來た。耳科醫へ行つた、もう大抵よくなつたやうだから、次回にカテテルなしに空氣が耳内に少しでも這入つたら、最後の手術として鼓膜を今一度切つて、中の水を出して見ようと醫者が云つた。

六月十六日。大雨風。兼て帝國座のマグダをけふ一緒に見に行く約束をしてあつたので、正午頃北川氏が來訪、雨が降つても行くかどうかと問ふので、けふは日曜でもあるし、たとへ晴れても行かないことにした。そして同氏の知つてゐる諏訪末吉氏の經營する蜂園を訪ふて行つた。十丁ばかり山手の下澁谷と云ふところにある。大阪の桃谷から四月に移つたとて、まだ家は假小屋のやうなものだ。でも、夫婦に今年女學校を出た一人の娘と講習生數名とがゐる場所の外に、巢蜜分離室も出來てゐて、一段低い地面に七十餘箱の蜂群を並べてある。すべて外國種で、イタリヤ種は王蜂が全身茶色がかつた赤、雄蜂が黑い尻に赤がまじり、白色はない。働蜂はまた尻の前半は赤色に黑の筋が入り、後半は黑色に白筋がついてゐて、都合八段の變化になつてゐる。雨風のせいか、この日は蜂が勢ひがなかつた。が、ついて行つた僕の洋犬「小僧」と云ふのが、箱のそばに行つて尾を振るので蜂をおだてた爲

め、からだ中をさされて、そこらあたりを驅けまわつたのはをかしかつた。つぎ箱をした一群に王蜂が孵つて、二王になつてゐるのを見たが、孵りたての新王が他の王臺をかみ崩してゐたのは、自分がその群の主權を握らん爲め、競爭者を生れさせないつもりださうだ。

同園のそばには栗の木が多い。今に花を咲かうとするその芽の二三寸延びたのが澤山ついてゐる。栗の花粉も白いが、白いと云つて必らずしも蜂の取つて來たのをそれと判斷することは出來にくいやうだ。赤いのをゲンゲだと思つてゐても、何か洋草のがあるさうだ。イボタの花が今は野に多い。諏訪氏は大阪の砂川辯護士の失敗を話してゐた。市中なら家根の上で飼ふのだが、どうした拍子か、分封の折り出た王蜂がゐなくなり、その一群が統轄を失ひ、ちりぢりばらばらに迷つて行つて、あちらの床屋、こちらの煙草屋へ這入り込み、娘の子に飛びついたり、七十歳の老婆を刺したりした。砂糖屋は蜂に持つて來いだから、澤山つれ立つて行つて、ぶんぶん、ぶんぶん云ふので、午後半日を客が避けて來なかつた。そんなことで蜂の尻がすべてもとに返つて來て、同辯護士は一丁以内の家々へ五圓宛の損害要金を出したさうだ。王の羽根を切つて置けば遠くへ逃げないが、それもよし惡しで、澤山の群を持つてる園では、その出た群が王のゐないのを自覺すると元の箱に返るべきを、あわてて他の箱へ行つて、おほ騷ぎの結果、五合や一升の死體が直きにころがつてしまうとのこと。

ハルピンにある某會社の支店長が養蜂をやつて見たいとて、夫婦で見物に來てゐたが、夕方渠等並

に僕等は共に囲園を辭した。諏訪氏は僕に附いて來て、室町のクラブで百の對で四回玉突をやつたが、僕が三回勝つた。それから、碁を戰はせ、氏が三目置いて、二度共僕が負けた。

今年は不成績であつたと云つてゐたが、それでも蜜を二十樽（一樽二十貫宛）を取つたさうだ。

歸宅したら、谷崎氏から電報が來てゐて、大阪の某所へ直ぐ來いとあつたが、時間が遲かつたのでそのままにした。

六月十七日。晴。谷崎氏をその宿に訪ひ、午後五時まで話し、それから別れてマグダを見に行つた。うち合せをしてあつたので、清子も北川氏も來てゐた。正宗氏も來てゐた。マグダは餘り泣き過ぎると思つたが、須磨子の藝は兎に角段々進歩して行くらしい。土肥氏の老父も可なりだが、どうも臭いところがあつた。直儀氏のケラーもそれが缺點だ。佐々木氏の牧師が一番素直で、芝居をしてゐないところがよかつた。そして一般觀客は芝居をしてゐるところを上手だとか、氣が合つてるとか云ひ、それと正反對に僕等が望む舞臺上の自然主義を守つてる行き方を間がぬけてると云ふのだ。氣の毒だと同時に、それでは自然的な藝の發達しようがない。けふ、下女をして北川氏から蜂箱を一つ借りて來させた。蜂が日光に當つて黃色の透明に見えたのは、何種のかと思つたら、日本蜂が蜜を澤山取つて腹をふくらせてゐるのだ。

六月十八日。晴。平野氏、吉岡氏よりハガキ。西本氏よりハガキと共に復活の「趣味」を送り來た

る　松内氏より手紙あり、頻りに運動してゐるが東京日々へ僕の這入る相談がはか取らないとのことだ。耳科醫へ行く。高橋夫人よりハガキあり、來て呉れとのことだから行つて見ると、幸子が東京から來てゐた。かの女との離縁問題のことでだが、向ふも僕とは六年も會はないのだから、もう尋常にあきらめて出てゐるらしいとのこと。幸子にはわざと直接に面會せず、主人の高橋氏と契約を定めた。一、兩人は離縁すること。二、僕の所有の家を幸子にやること。三、三人の子供のうち、富美子と馨とを幸子の養子女にし、眞雄をこちらの嫡子とすること。四、離縁の手續きはこちらが先づ壹百圓を與へた時を以て行ふこと。五、幸子に五百圓を與ふること、但し手續を實行した翌月から殘金四百圓を毎月拾圓宛支拂ふこと。僕の目下のあては、川手氏に依頼した訴訟の勝利によつて取れる金を、その方に入れるより外にないのだ。富美子の編んだ毛絲の肱つきを高橋夫人から受け取つて來た。色女に肱つきを貰つたその喜びを殘してゐたのもつい此間のことだと思ふのに、早や娘からそれを貰ふ時代になつた。アラビヤゴムのついたレツテル紙を買つて來て、「發展」初版一千部（五枚はなほ餘分として）の分の印を押した。

けさ、第二號の箱から人工分封をやつて見た。王臺が　れも成熟してさきが赤くなつて來たから、もう分封してもいいだらうと思ひ、現在の王のついたワクを別な箱に移し、その前後に蜜の多いワクを各々一個づつ入れ、更らに空ワクを二個加へて第三號の蜂群を組織してやつた。夜、歸宅するのが

遲かつたので、その結果はまだ分らない。

六月十九日。晴。出社せず。野依氏から三百五十二頁までのスリ上り來たる。印稅印紙を小包にして野依氏へ出した。同氏並に川手氏へ手紙。長谷川氏へハガキ。けさ起きて第三號の箱を見てゐても一向に蜂が出て來ないので、みんな元の箱へ歸りでもしたのかと心配した。が、蓋を明けて見ると、さうでなく、矢張り、頻りに足をつなぎ合はせて寸法を取りながら、新らしい巢を拵へてゐる。コップに半分ばかり蜜を盛り、それをひツくり返して入り口に伏せて置くと、うぢやうぢや出て來て、自然と吹き出る蜜を喰つてゐた。第一號は今産卵が盛んだが、第二號（王の移されない前から）と第三號とは産卵停止の狀態だ。それでも、うじになつたのは大分ついてゐる。第二號のから王臺をきのふ二個切り取つたのを試に又くツつけて置いたが、一方のはさきの赤いところからくり拔かれて働蜂が中を掃除してゐた。多分切り取つた時、中のうじをいためたので、それを知つた蜂がやり直すつもりになつたのだらう。

夕方、北川氏を訪ふ。洋種が黃いろい月見草の花粉を長く曳いて歸つて來るのを見た。アウストリヤ並にロシヤ種の働蜂は尻の橫筋が黑白もしくは赤の七段に數へられるが、さきの黑色の部分がいづれも邦種よりも多く、七ツ目に至つて、アウストリヤは黑にぼけ、ロシヤは薄い赤茶色にぼけてゐる。イボタの蜜を一杯つめたワク一枚をわざわざ取りのけてあつた、肺病者に喰はせると藥だと云つ

て。

六月廿日。曇。夜、少し雨。出社せず。耳科醫へ行く。高橋氏からまた來て吳れとのハガキが來たので行つて見ると、一昨日の契約を訂正する必要があると云ふ。第二の家屋贈與の個條を抵當價格九百五拾圓で賣り渡した體にしたこと。第四項の壹百圓を壹百五拾圓にし、その金を高橋氏に立て替へて貰ひ、即金拂ひにしたこと。そして第六項を加へて金錢の授受はすべて高橋氏を通して正實に實行すること。この三件が書き直しの理由であつた。高橋氏に對しては、別に壹百五拾圓の借用證書(年利一割のこと)を書いた。もう、離婚屆の形式さへ分ればいいのである。歸宅したら、午後九時であつたが、呼んであつた神崎氏が待つてゐた。平野氏から依賴の皮革相場を毎日もしくは隔日に取調べ、それを朝鮮へ報告することが出來れば、相當の報酬が取れるから、やつて見よとすすめてやつた。長谷川氏へまたハガキを出した。

第二號の蜂群を調べて見たが、まだ王蜂が產れさうでない。王臺はすべて九日に發見したのだが、發見した時に既に二日經てゐたとすれば、明日か明後日出る筈だ。然しまだ臺の色が黑みがかつて來ない。

六月廿一日。小雨。上司氏より手紙(時事新報社會部長の件、成立しなかつた。)僕の出社中に、下女が蜂の逃走だと云つて、第一號の入り口を出る蜂に水をぶツかけたさうだ。一時逃走を防ぐにはそ

れでもいいが、どの位騷ぎ出したのだと聽いて見ると、二十匹ぐらゐだと云ふ。多分空氣浴をしに出たのを思ひ違つたのだらうが、それにしても午後四時頃とは、時間が遲過ぎた。と云つて、けさ、調べたのによると、第一號箱には産卵も澤山あつて、逃走の原因はない筈だ。第二號の王臺はまだ赤いまゝだ。梅雨期にも雨が餘り降らないのがこちらの土地の取り柄だ。降つてもじめじめせず、直きからツとしてしまう。塀外のクローバーに蜂が働いてるのを見たが、日本種ではないから僕のではない。諏訪氏のなら、赤蜂ばかり來る筈だが、赤いのと黑いのと入り雜つて働いてるのを見ると、北川氏のアウストリヤ、イタリヤ兩種の雜種の群から來たのだらう。クローバーは開花の時期が長く且蜂が少しの花でも見のがさないさうだ。

六月廿二日。雨が少しあつた。淸子と共に諏訪蜂園を訪ふ。主人は留守であつたが、氏の妻子に妻を紹介した。往きに安政年代の力士猪名川(稻川)の墓を見、復りにイボタの花を取つて來た。庭中の朝顏に一つびとつ女竹を立ててやつたら、八十本宛の束が三つ入つた。竹屋のおやぢが朝顏熱心だと云ふので、種として珍らしい「黃花」や苦勞人が一粒十圓にも賣つてると云ふ「紫宸殿」等の入り雜つたのを一袋呉れてやつた。けふは蜂箱を明けて見なかつたが、第二號箱に王臺が出來て以來、雄蜂が妙に增えた。一時はどの箱にも殆ど全く絕えたので、殼つぶしがゐなくなつたと喜んでゐたのに、女王が出來たらそれの交尾に必要なので、自然にまた產れて來たのだらう。それもいいが、雄蜂

れ限りどの箱へも這入つて行つて、蜜を喰ふには困つてしまう。が、それも一時のことで、第二號の王が出來て交尾さへうまく濟めば、たださへ花のない時期を、用のなくなつたものを働蜂が生かしては置かないのだ。けふも四時頃空氣浴をやつてゐた。きのふ、けふ、王が生れないのを見ると、分封させたのは少し早過ぎたやうだ。十四日に四日目の王臺もあつたのだから、それで勘定して見ると、廿五日に出るのだらう。

六月廿三日。晴。耳科醫へ行く。下女が親類の稻植ゑ付けの手傳ひに行つたので、けさ、七時半に起床。蜂の働きを見てゐると、既に出て行つたのが花粉をつけて賑やかに歸つて來たが、第三號のだけは一匹も出入りしない。蜜を少し入り口に滴らしてやつたら二三匹出て來た。小群だから活動が鈍いのだらう。午後三時頃社から歸つて來て見ると、それでも少しは働いて歸つて來るのを見受けた。第二號の群を調べると、また王臺が一つ口が明いた。働蜂がぶち毀したのなら横からかじつた跡がある筈ださうだが、十九日に發見したのも又今日のも、さきの赤かつたところだけがくり抜けてゐるのだから、ひよツとすると、既に王が二匹出來てゐるのかも知れない。臺のさきが黑む時は既に出る時だらうだから、きのふ黑んだのかも知れない。生れ立ての王はちよこちよこしてなかなか見つけにくいさうだ。

六月廿四日。晴。出社せず。午前十一時、褥の中から蜂のさわいでるのが聽えた。そら、ことだと

飛び起きた。戶を明けて見ると、第二號と第三號との蜂が出て、入りまじつて空にわんわん云つてる。入り口を這入つて行くのも澤山あつたが、段々離れて行くのは向ふ隣りの楠木氏の庭へ下りたやうだから行つて見ると、そこの家內中があれあれと驚いてゐるところであつた。庭の石燈籠に落ちついて一團を成してゐた。深い茶碗を持つて行つて箱の中へすくひ取つてゐるところへ、北川氏もやつて來た。きのふから疑問であつたから、同氏に來て貰ふことにしてあつたのだ。第三號の王が入り口に出てゐたから、今ひろつて置いたと云ふ。では、第三號箱を明けて見た時、草の間に二三十四群れてゐたのは王を守つてゐたのだらうと氣が付いた。この經過はかうだ。第二號には、果して十九日にも、廿三日にも王が出た。で、廿三日の王の仲間が分封した。その騷ぎにつれ、兼て逃去の念があつた第三號(僕もさう思つて、きのふ北川氏へ行つたのだが)のが飛び出したが、王の羽根を切つてあつたので、逃走群が再び元へおさまつたのだ。で、結局、第二號群から第三號は人工的に、第四號は自然的に首尾よく分封出來たわけだ。と云つて、第四號の王は生れてけふで二三日だから、交尾がもしまだとすれば、あす、あさつてのうちにその考へで箱を出るだらう。その時、無事に歸るか、それとも雀か何かに喰はれてしまうか、それがまだ確かでない。兎に角、けふはどの箱をも明けられないから、そのままにして置くのだ。第一號からうじの澤山ついたワクを一つ出して第四號のに入れてやつた。第一號は今イボタの蜜を取つて來るらしい、そのにほひがする。

北川氏と共に花屋敷に行き、午後三時から七時まで氏が蜂群を調べるのを見てゐた。十五日間ほうツたらかしてあつたうちに、王ぬけが二箱出來てゐた。それに各々王臺のついたワクを與へた。黃いろい花粉を取つて來るのは栗の花のださうだ。けふ、氏から豫備の箱をまた一つ借りて歸宅した。

夜、荒木氏來訪、共に寶塚で園藝を商賣にしてゐる長井氏へ伴はれ、御馳走になつた。

六月廿五日。晴。きのふ花屋敷で蜂に目の上をさされたのが、けふ起きて見たら意外に腫れてゐた。見ツともないので、出社せず。大木氏が臺灣へ行つて來ると云ふハガキをよこした。前田(晁)氏よりハガキ。けふ、第二號の箱を調べたら、新らしい王を一匹發見した。ちよかちよかして僕の手の上へ這ひあがつた。王臺は五ツ蓋が明いてゐたから、(明かない一つは切り取つた)或はなほ何匹か出てゐるのかも知れない。産卵がない上に、蜜を殆ど喰つてしまつて、ワクがいづれも輕い。また逃走する恐れがある。コツプに蜜を伏せて與へた。風がつよかつたので、他の箱は調べなかつた。

時計屋並に長谷川氏へハガキ　長井(箕面會社の)を訪ふ。

六日廿六日。雨。目の腫れに氷を當てて寢てゐるので出社せず。西本氏へ「養蜂日記」(上)、野依氏へハガキ。第一號箱から産卵の付いたワクを一つ取り、第二號箱の輕いのと入れかへてやつた。第四號にも新王が一匹ゐるのを發見した。また、一新王は第二號箱の外に投げ出されて死んでゐた。第二號には、一王より外ゐない。して見ると、なほ他の二匹の行くへが分らない。多分無用だから殺さ

れてしまつたのだらう。けふは四箱とも蜂はよく働いた。

六月廿七日。晴。耳科醫へ行く。目の脹れは直つた。第三號の蜂群には産卵が出來出したが、第二號、第四號にはまだない。神崎氏來訪。同氏と共に、蜂が月見草を取つて來るのを見てゐた。

六月廿八日。晴。川手氏より返事の手紙（僞版告訴の件は着々檢事局にて取調中、家屋を賣買とすれば千分の二十、印紙税を取られること、嫡子九才を廢するのは絶對に不可能、女戶主が婚姻するには廢家するを得べく、別に相續人を定める必要なきこと）。ロンドンより寫眞目錄、第四號の蜂はまだ産卵を初めず。箕面會社の招待で寶塚の菱富へ行つた。出社せず。

六月廿九日。晴。昨夜から「忠孝異論」を書かうと思つてゐたのが、けさ、午前二時過ぎ目をさましてそれがあたまに働いて眠られず、爲めに三時に床を出で、裏庭から外出し、猪名川の榎の木や樫の大木堤の上を行き來した。雲雀のあがる聲に和して川の上を飛ぶ千鳥の聲がちちりと聽えた。電車の鐵橋を川西へ渡り、川上の方へ四五丁のぼり、それから歸途呉服橋を渡つて歸宅する間に出會つたものは堤上で何かかついで行く老爺と、川西で野に出て行く草かり婆アさんとであつた。第二號と第四號との蜂を見てから、入湯と食事とをすませ、「忠孝異論」を書き初めた。上總氏へ朝顏の苗と種とをやつた。小說「發展」の製本が二ツ出來たからと、その一冊を來阪中の野依氏が使を以つて社へ一部屆けて來た。定價は一圓と付いてる。早稻田文學社から「神になる意志の不徹底」に對する稿料

八圓、博文館より「小說表現の四段階」に對する十一圓を受取つた。今夜、諏訪氏は細君並に娘を伴つて來訪、碁を四番打つて、僕は三番負けつづけた。氏が岐阜の人がきのふ來ての話だと云ふのに、岐阜ではステーションへ下りると直ぐ蜂にぶち當るが、車屋から宿屋までが擧つて種蜂屋で、それも眞面目な養蜂家でなく、單に相場師の如く種を賣買して儲ける手合だ。蜂を本統に養成するのではなく、庭へ砂糖の明樽を出して置くと、その中へ人の蜂が集まる、それをいい加減な時に蓋をして持ち返る。また、昆蟲を採集する袋で飛びかふ蜂をすくひ取る。そんなことが日當一圓に當るさうだ。そしてそれに王を與へて賣るのだ。蜂はまた粉蜜の取り物に窮して米屋のぬかを取り、また油かすを取る。去年岐阜に起つた一揆の原因がそれださうだ。——蜜源を年の順序で數へれば、菜種が初めで、それからゲンゲにクローバー、櫻には蜜もあるさうだが、桃に牡丹、しやくやくは駄目。それから野バラ、葡萄、柿、栗、もちの花、月見草等で、のうぜんかつら、夾竹桃、並にけしの花は蜂に害あり。あやめは白のがいいが、紫のはよくない。菊は野菊で、多瓣の花はすべて蜜に乏しい。朝顔にはあつても、深過ぎてとどかぬ。諏訪氏と吳服橋の上まで行つて別れたが、北川氏のやつて來るのに逢ふと、岐阜の人が來て近處の蜂の種をこの一週間に殆ど無くなつたほど買ひ取つたと語つた。

今夜、伏見から十五歳の小說志願者が書生に置いて吳れろとわざわざ尋ねて來たが、餘裕はないと云つてことわつた。（七月八日に訂正あり）

六月卅日。晴。出社せず。午前九時、第二號と第四號との蜂群をおだてて王の交尾を人工的に促す爲め、蜜を並んだワクの上に千鳥形に垂らしてやつた。これは昨夜諏訪氏から聽いた通りに實行したのだが、晝後までその影響は見えなかつた。交尾は午前十時から十一時、遲くも正午までに行はれなければ、効がないさうだ。蜂箱が蟻がつくのでにえ湯を浴せて退じた。スバルと文章世界到着。新潮社から「毒の園」。長谷川より返事。痔疾醫石田氏より返事（治療代七圓九十五錢）。高橋氏へハガキ。神崎氏來訪、一泊。

七月一日。晴。平野氏へハガキ。モザイク、新潮來たる。第二號箱を調べたら、産卵を初めてゐる。第一號のは勿論、第三號にも産卵が澤山あるのを見屆けた。清子と箕面の一方亭へ行つた。神崎氏一泊。

七月二日。風雨。（夜晴れた）。神崎氏が池田の舊市街の方へ引越して來た。

七月三日。晴。野依氏へハガキ。上總氏より秋海どう、えぞ菊、その他の根や種を持つて來てくれた。早稻田文學並に中央公論來たる。第四號の蜂も産卵し出したので、人工的並に自然的分封の新王は共に物になつたわけだ。

七月四日。晴。松内、上司、正宗（白）、正宗（得）、青木、武林、若宮の七氏へハガキ。出社せず。寶塚へ行く。

七月五日。晴。耳科醫へ行き、再び鼓膜を切つた。生田（葵）氏よりハガキ。「短檠」並に「人生と表現」來たる。蜂群はすべて產卵してゐるが、その卵を孵すだけの花粉がこの頃取れるかどうか疑問だ。諏訪氏より使あり、明日人工的に蜂王を拵へる試驗を見せるとのこと。

七月六日。晴。前田（晁）氏へハガキ。野依氏へハガキ。靑木氏よりハガキ。神崎氏を伴ひ、諏訪氏を訪ひ、蜂王の人工的製造法を敎へて貰つた。先づ人工王臺に實際の王臺（これは一昨日から故意に作らせてあつたさうだ）中のジエリイを取つて入れて置き、その上へ働蜂房の王子がうじになつて一日目位のを取つて載せるのだ。うじは働蜂のも女王のも變りはないが、王臺に於て働蜂のと違つた食物、乃ち、ジエリイを吸收するので王となつて生れるのである。小い交尾箱の中に養はれてゐる未孕王をも見せて貰つた。自然の王臺を臨時に造らせようとするには、王をちよつと脫いで置けば容易なことださうだ。また、花の盛りに蜜ばかりを充分得ようとするにも、殘酷なやうだが、王を脫いて置く。すると、產卵がないから、その方に費す勞力をも收蜜に用ゐさせることが出來る。王がゐなければ、却つて逃走の恐れがないさうだから、さきに僕のところの收容蜂が逃げたのも、王脫けの故ではないらしい。王がゐて、そこに落ち付く氣がなかつたから、却つて逃走を急がせたわけだ。無王の群は、どうせ逃げてもうまく行けないのを知つてるから、自然の全滅を待つてるかの如く、その箱を一匹になるまで固守するさうだ。

同園で晝飯を御馳走になつてから、諏訪氏はその講習生四名を率ゐて僕の蜂を見に來た。ところが、歸宅前一時間の頃第四號の群が逃走してしまつたのを發見した。『また蜂が逃げましたよ』と、淸子は少しがツかりしてゐた。その跡を見ると、箱は水だらけだ。逃走を中途から防ぐ爲めに水をぶツかけたが、もう役に立たなかつたのだ。原因は箱内があツたか過ぎたのとさなぎが無くなつたのとだ。働蜂はさなぎに愛着するが、玉子や既に密閉された房兒には餘り執着しないからである。産卵が出來たのをばかり嬉しがつてゐたのは、僕の不注意であつた。第四箱に殘つたワクのうち、二個は新聞紙に包んでしまひ、一個は第三號箱の殆ど巢が着いてゐないワクと入れ更へた。且、第一號並に第二號中のワクの、各々一個づつ、上から一寸五分ほどのところから、燒け巢を切り取つて貰つた。五回産卵に使はれた巢は赤黑くなつて、蜂がそれを役に立てないばかりでなく、蠟蛾が巢を喰ふやうになる。よしんば、産卵しても、房が狹くなつてるので生れた蜂の形が小いさうだ。そんなのを四月に切り、また七月初旬に取り、更らに九月初旬に取れば、産卵を奬勵することになつて、來年の春までには强群になるさうだ。

同勢は擧つてまた浪花蜂園の洋種を見に行つた。北川氏は大阪附近の養蜂家大會をやる話が持ちあがつてゐることを語つてゐた。そこで諏訪氏の一群と別れ、雄蜂驅除器を一個貰つて歸宅した。第二號群に蜜をコツプに一杯ほど與へ、各箱の上に日光を避ける爲めのむしろをかけてやつた。今や栗の

花は、能勢の奥には丹波栗のが盛りださうだが、この近邊では過ぎてしまつた。白あやめ、蓮、南瓜、早い蓼などの花がある。黄色のジャノメの花に働いてゐたのを北川氏は二三日前に發見したさうだ。けふ、切り取つた一つの巢の上部をしぼつて、一ポンドの四分の一ほど蜜を得たが、殆ど全く糖蜜であつて、蜂蜜の味がしない。岐阜あたりの蜂とは違ひ砂糖屋へ行く筈もないから、椰の木の若芽へ行くのだらうと云ふことだ。芽その物には蜜もないが、何とか云ふ小蟲がたかつて甘い物を分泌してあるのを取つて來るのであらう。

蜂の酸は蟻酸の一種ださうだが、諏訪氏は明確に蜂酸と稱してゐる。この酸が人間のからだに行き渡ると、惡疫に傳染する因をなくして吳れるから、米國では一時試驗的に無料で行つて見たことがあると云ふ。結核性の人は非常に痛がるが、辛棒して蜂に刺させてゐると、その病性を滅することが出來るわけのよし。リヤウマチスには最もよく利き、延びない手が延びるやうになつた實例もあるさうだ。

七月七日。風雨。平野、武林二氏よりハガキ。新潮社より手紙(原稿依賴)。耳科醫へ行つて再び鼓膜を切つた。新潮社並に上司氏へハガキ。塀外のホワイトクローバーを拔き取つて來て、澤山庭の中に植ゑた。働蜂の生命は六ケ月より十ケ月までださうだ。で、無王もしくば產卵不能王で六七ケ月もつづくと、蜂群は殆ど全滅するのである。去年の末に讀賣に出た服部嘉香氏の「泡鳴氏に酬ふ」を再

駁する詩論十二枚を書いた。

七月八日。雨。夜に入つて雷あり。新潮社へきのふの原稿を送る。社へ來た通信中に亡國的養蜂業と云ふのがあつた。岐阜の或百姓が無けなしの全身代を傾けて蜂群をいくつか買つたところ、巡回して來た一技師に見て貰つて到底駄目な蜂なのを知り、發狂者となつた。蜂箱を脊負つてそこら當りを歩きまわつてゐたが、つひにその細君までが同じやうなことをするやうになつたと云ふことが一例として出てゐた。「發展」の初版一千部の印税一百圓を受け取つた通知を野依氏へ出した。北川氏來訪、同氏と柳澤といふ晒布工場の管理者(初會)に從ひ清荒神の梅里で晩餐を共にした。

蜂に對する花の順序は、三月に川柳の花から初まり、分封に活氣をそへる梅の花は四月中旬までつづく。梅について單瓣の櫻があり、桃があり、ゆすら梅、ハダンキヤウ、スモモ、梨等。で、牡丹しやくやくは駄目。草花では、スミレ、タンポポ。菜種からゲンゲ。それから蜜柑、その他の柑橘類の花。同時に柿、ブドウ、蜜柑の花が濟んでから、クローバーは先づ赤の種類、それからホワイトの花。それに、牧草一切の花。それから、モチの木並にイボタの花。栗の花は六月一杯で終り。のうぜんかづら、夾竹桃、並にけしは有害。野薔薇は五月末からあるが、六月末から七月が盛り。無花果と云ふ七月には又蓮、白あやめ、(紫のはよくない)。瓜の花、月見草、ジヤノメ、ツメグサ、菩提樹、ダリヤ、蓼等。また、野菊(多瓣はよくない)。それから、よく蜂が行く日まわり。朝顔はあるが問題に

ならない。それから無花の時期を過ぎると、蕎麥の花が第一で、秋はハギから初つて、すべての七草があり、琵琶の木の花を以つて一年中の終りとなるのだ。

七月九日。晴(鳥渡雨が夕方あつた)。前田氏よりハガキ。新潮本月號で水野葉舟氏の田山氏作「妻」に對する徴細な批評を見たが、あんな行き方を僕等が一方に待ち望んでゐたのだ。具體的に行き届いて作者の落ち度や長所(この方は大したものでない)をよく示めしてゐる。野依氏より「發展」九部を届け來たる。大木氏よりハガキ。リヨウマチの氣味が兼てあるので、きのふ、北川氏の所で洋種の蜂に左の二の腕を刺させて見たが、直ぐ間もなく酒を飲んだので、けふは手首の根までも脹れてゐる。氣分が惡い。夜、富士市といふ料理屋から、諏訪、北川、並に前川といふ別な養蜂家が呼びに來たので、行つて見た。組合を設ける相談であつたらしいが、前川といふ人が何か感情を害したのでおじやんになつた。

七月十日。晴。出社せず。蜂の行動を見てゐたら、蜂取りの名人と云ふアブの一種の大きなのが蜂を喰はへて石の上にとまつてるのを發見した。投り殺さうとしたら逃げてしまつた。また來るだらうと思つたから注意してゐると、一時間ほどして果してやつて來て第一號箱の上の檜の木の枝にとまつた。棒を持つて三たびぶちのめしたが當らないで逃げてしまつた。家の蜂にまた右の腕を刺させた。けふは珍らしい程熱かつたのでどこか涼しい所へ出かけようかと思つてゐたのに、清子は獨りで出て

夜、北川氏が呼びに來て、柳澤氏を淸荒神に訪ひ、それから寶塚へ行つて玉突をやつた。

行つた。變な女だと思つて、僕は別に箕面に行き、一方亭で一眠りしてビールを飲んで歸つた。

昭五年七月十一日午
後
池田日記

七月十一日。曇(少し雨あり)出社せず。蜂の樣子を終日注意してゐたが、別に變つたこともなかつた。第二號の入口に雄蜂驅除器をすゑつけて置いたら、午後一時より二時半の間に六七匹かかつた。夕方、蠅取りアブを一匹とりもちで取つた。吉岡、川口二氏よりハガキ。德富蘇峯氏へ手紙を出し、國民新聞の小説を僕に書かせないか問ひ合はせにやつた。けふ、兩腕を各一匹宛刺させた。

七月十二日。晴。耳科醫へ行つた。切つた鼓膜はくツ付いたが、中耳へ通る鼻からの穴はまだ明いた樣子がない。けふは、朝二匹、夜一匹の蜂に刺させた。こないだから蜂酸の爲めにか兩腕がかゆくて仕やうがない。兩腕とも熱が出て、その上手くびの所まで腫れてゐる。北川氏を訪ひ、水目鏡が箱だけ出來たのにガラスを張ることを一緒に賴みに行つた。クラブの佐々木氏が子供の誕生とクラブのしにせが賣れたとの祝ひにまねかれた。第一號箱の蜂が夜になつても巣門の外にあふれてゐるのは、涼しみを取るのであらう。第二號箱から二十匹ばかりの雄蜂が驅除器にかかつた。神崎氏來訪、郁子氏への手紙。

七月十三日。蒸し熱く、少し雨あり。出社せず。二匹の蜂に腕の關節をささせた。小林氏を訪ふ、留守(「發展」とその原稿とを届けた)。新潮社より原稿を返して來て別なのをと云ふのだが、間に合ひさうでないので今回は斷つた。が、九月號の小說と十月號の論文とを引き受けた。返つた原稿は秀才文壇へ送つた。

七月十四日。晴。正宗(得)氏よりハガキ。吉岡氏が川獵に來ると云ふので北川氏も來て待つてゐたが、風が强いので來なかつた。で、北川氏並に淸子と諏訪氏を訪ふ。先日僕がおそはつて製造した玉蜂が二つのうち一つは成功したのを見た。夕方、同氏並にその家族も一緒に町へ下り、諏訪氏と僕とは玉突きをやつてるうちに、北川氏並に女連は淨瑠璃會から歸つて來て、また一緒に寶遊亭のスシを喰ひに行つた。午前二時頃になつたから、北川氏の宅で夜を明かしてから別れることにした。

七月十五日。晴。午前四時、淸子と共に歸宅。蜂はその時旣に働きに出てゐた。第一號箱を初め、他の箱のも、ばらばらと見てゐて面白いほど出入りをしてゐた。近重博士が僕の駁論を讀んだと見え、ハガキをよこし、僕の作詩上の著書を知らせてくれろとあつたので、返事を出した。生田(長江)氏から手紙があり、「發展」を讀んだので、僕の思索家として又詩人としての評論を書くと云つて來た。上司氏へ手紙、新報の編輯長として來ないかと云つてやつた。新潮社より「獄中記」

七月十六日。晴。出社せず。淸子と共に神戶へ行き、荒木郁子氏並に增田氏を訪ひ、共に須磨や舞

子に遊び、神戸へ歸つて一泊。

七月十七日。晴。布引の瀧を見た。午後五時頃歸宅。秋江氏よりハガキと原稿。北川、柳澤二氏來訪。

七月十八日。晴。朝、蠅取りアブをまた一匹捕へて殺した。出社、耳科醫へ行く。夕方、諏訪氏來訪、クラブで玉突をやり、また十二時過ぎまで家で語り、それから菊水といふ藝者屋へ同氏と僕等三人で行き、藝者三名をあげて夜あけまで飮んだ。

七月十九日。晴。午前四時半歸宅、蜂を見るとまだ出ないが、二十分もしたら出初めた。また、歸つて來るのもあつた。が、歸つて來たのはこれも昨夜歸りそくねてけさの夜あけを待つてたのだらう。出社。近重、佐々木、德田（秋江）、前田（夕）氏よりハガキ。上司氏より返事（新報へ來ることはいやだと云ふ）。高橋氏を訪ふ。諏訪氏より網の覆面布と給蜜器とを貰つた。奧村氏來訪。今夜、書齋に這入つた蠅取りアブ二匹を殺す。

七月二十日。晴。木村（信）氏へ手紙。前田（晁）、佐々木、長谷川三氏へハガキ。前田（夕）氏へ「詩歌」への原稿を送る。天皇陛下御不例の號外が來た。西本氏へ「養蜂日記」の下（二十二枚）。川手氏より手紙（訴訟の件。西村は關係なささうだ）。同氏へ手紙（紙型を使用させた點に於て無關係なわけはないとのこと）。上司氏より手紙（三面助手の推薦）。神崎氏訪問。加藤氏夫婦來訪。出社せず。新潮に

頼まれた小説を書き初めた。

七月廿一日。晴。出社せず。ザラメを四百六十匁目に水をその三分の一入れて釜で煮立て、蜜の代りに蜂群へ與へることにした。第一號・第二號の王蜂もけふ羽根を切つてやつた。その節、あやまつて第二號王の足を一本少し切り落した。雄蜂驅除器で第二號箱の雄蜂を二三十匹取り殺した。第二號、第三號には幼蟲も少しはあるが、第一號箱には幼蟲が殆ど全くなかつた。産卵はいづれの箱にも澤山ある。けふは、第二號群が晝日中も大分働いて、薄黄色の花粉(月見草のではない)を持つて來た。夜、神崎氏と三人で寶塚へ行つた。朝顏の花がけさからさき初めた。

七月廿二日。雨。耳科醫へ行く。生田(蝶)氏、片上氏よりハガキ。國民新聞社より手紙(小説の交渉に對する返事)。第三號群は糖蜜を二杯喰つてしまつたが、第一號、第二號の群は喰つてゐなかつたので、多分入れ物が深いので惡いのかと思つて、それに導く爲めにその蜜を滴らしてやつたら、段段とあり付いて來た。蜜をやつたせいか、第三號のはけふは大分活動した。荒木氏、夜來訪。

七月廿三日。雨。第一號・第二號の蜂も糖蜜を喰つてあつたので、三箱ともまた入れてやつた。各箱の蜂がすべてよく活動してゐる。「新日本」社から世界を通じての偉人を問ひ合せに來たので、左の通り答へてやつた。

一 今上陛下――神と云ふ物が殺されてしまつた現代に於て神を人間に實現し得て、それに價する

だけの大事業を世界に成就しつつある點は、世界中で陛下より外になからうと思はれます、世界の人人から見ても、現代に發展して行く日本人の最好標本でしよう。

一　ルーズヱルト――その主張と權威とは決して或コンベンションを借らず、凡て渠の自己その物から出てゐる。渠の行動は進歩的米人を代表すると同時に、進歩的米人はルーズヱルト自身となつて活動してゐる。中年大統領の候補として勝敗は別に關係致しません。

先づ以上の二者でしよう。その國でえらくて而もその國が强大なら、世界的人物です。それ以外に世界的と云ふのは空想です。實業家のカーネギやラジウム發見者などの如きは部分的な人物で、偉人の數に入れるべきものでないでしよう。又、哲學者ベルグソンなどを擧げて來ると、思想家としての僕自身をも引き合ひに出す權利があるやうに自信してゐます。以上指定した二者も、勿論、根本の思想問題から僕が割り出した答辯です。

七月廿四日。晴。耳科醫へ行き、ブーゼを鼻から中耳へ通したまま、ためしに、拔かないで歸つて來た。青木氏よりハガキ。神崎氏來訪。第三號の巢門は半分まで棒切れを以つてふさいであるが、その棒切れを小石で押さへてある下にとがつた草の葉が一本しかれて居た。それを番兵が取りのけようとして頻りに喰はへて引ツ張つたが、なかなか取れないばかりか、却つて自分が引ツ張られて、草葉を喰はへたまま空にひらひらした。それを他の番兵二匹が加勢したが、矢張り取れる筈がなかつ

た。で、邪魔になるのだらうと思つて、僕が取りのぞいてやつた。

七月廿五日。夜、雨。けふ、第一號箱の前に多くの蜂が死んでゐたのを發見し、その數をあらまし數へて見たら、六七十匹にものぼつた。多分、一昨日の大雨に出たのが巣門のそばまで歸つて、這入らないうちに倒れたのだ。今夜、諏訪氏が來訪したのでこのことを話すと、椽を置いてやらないからだと說明した。出社せず。この頃、蜂の取つて來る花粉は、月見草のべたべたした黃色をのぞいては、白いのと黃色のとよごれたやうに濁つて見えるのとの三種だ。よごれたやうなのはクローバー、黃色のは瓜、白のはダリヤ並に朝顏のだらう。

七月廿六日。晴。耳科醫へ行き、ブーゼを通したまま歸つて來た。蜂箱の入り口へすべて椽をつけてやつた。箱內を調べたら、すべて蜜が多くたくはへられ、幼蟲も出來てゐる。花粉は今割合に多く取れるらしい、クローバー、月見草の外に胡瓜、茄子、南瓜、蓮、ジヤノメ等がある。第二號の端のワクが一つ蜂が付かず、產卵も蜜もないので取り出したら、上半は蠟蛾におかされてゐるやうであつた。內藤(鋠策)氏、千葉氏より手紙、森田氏よりハガキ。毎日の奧村氏へハガキ。

七月廿七日。夜、雨。森田氏へハガキ。出社せず。諏訪蜂園を訪ふ。諏訪氏に昨日の巢を持つて行つて見せたら、蠟蛾におかされたのではなく、最も古くなつたやけ巣だ。ワクとのくツ付き目にこなのやうにぼろぼろしたのがあるのは、充分熟さない蠟のまま巣をくツつけた結果ださうだ。命數の自

然に盡きる蜂は巢門をころころところがつて出て來て、草の中を巢より遠ざかる方へ、方へと目的もなく歩く。水をぶツかけて見ても、また巢門に入れてやつても、もう、本復はしない。そして草の中で死んでしまう。それに引きがへるはひどい害敵だ。これまでにも見付け次第殺してゐたが、今夕、大雨と共に大きなのが出て來て、第一號箱の椽を半ば這ひあがり、巢門に出てゐる蜂をぺろぺろ、ぺろぺろと吸ひ取つてゐるのを發見した。直ぐぶち殺したが、かうして百匹や二百匹の蜂を喰ふのは何でもない暇のものださうだ。雨のふり出す前であつた、石竹や芽ばえの金仙花の間の草をぬいてやつたが、數日前さしたダリヤのぢくが四本つ いたらしい。バラの 方は一本だけは 大分に芽を ふいて來た。

七月廿八日。晴。出社せず。奥村(正)氏來訪、一泊。

七月廿九日。晴。德田(江)氏よりハガキ。新潮社より「森」、東雲堂より「染物店」。岡村氏來訪。奥村氏、夜歸阪。

七月卅日。朝、さアツと雨があつた。その前であつた、午前五時頃、號外の聲がしたから飛び起きると、果して御崩御のことであつた。朝顏の咲いたうちで、紫を白に洗ひおとしたやうな色のがカネ四寸あつた。紫宸殿はそれより少し小いが、例の濃い紫色に金粉をふりかけたやうな艶が如何にも面白い。耳科醫へ行く。社へ行つて、年號が「大正」と變るのを知つた。けふ、大阪研究の最初の結果

なる小說「ぼんち」（四十九枚）を脫稿した。

大正元年

七月卅一日。晴。出社せず。加藤氏に託して、社へ「偉人としての先帝」といふ原稿を屆けた。別な短篇小說を書き初めた。飼犬の頸輪並に鎖を買つて來た。實業之世界並に秀才文壇來たる。夕方より雨あり。

八月一日。晴。耳科醫へ行く。中央公論來たる。奧村氏、荷物を持つて來た。同氏の借りる家を見に行つた時、室町はづれの月見草の多くあつたところを調べて見たが、もう、その花が少くなつた。

八月二日。晴。「詩歌」來たる。柳澤氏を訪ひ、夕方から同氏並に北川氏を猪名川にボートを漕いだ。鳳仙花がうちの庭に澤山咲き出したが、この花にも蜂が行くのを見たと北川氏が云つた。その花粉は白い。

八月三日。晴。耳科醫へ行つたが、中耳がはれてるやうだから、ブーゼを通さなかつた、佐々木（大）氏よりハガキ。西本氏より手紙。スバル、新潮來たる。「得ちやん」（三十八枚）を書き終る。

八月四日。晴。「モザイク」來たる。田中（王堂）氏よりハガキ。第一號の蜂群の幼蟲が全くなく、また産卵が少いので、第二號群から半ば巣の出來たワクに幼蟲の付いたのを入れて、蜜ばかりのワクと代へことした。夜、淸子と寶塚散步。

八月五日。晴。耳科醫へ行つたが、中耳がまだはれてゐたのでそのままにした。「早稻田文學」（「巡

在日記」揭載）、「人生と表現」、並に「短檠」來たる。けさ第一號群のワクの背に蜜を千鳥形に垂らした。奥村氏・舊市街の借家に移る。瀧田氏へハガキ並に「ぼんち」の原稿。

八月六日。雨あり。夜、凪。出社せず。第一號群へけさも蜜を垂らしてやつた。最もよく働いてるのは第三號群のやうに見える。庭のクローバーへ來て、蜜袋にどす黑い花粉を取つてるのも二三匹あつたが、皆第三號箱へ飛び歸つた。吉岡氏よりハガキ。川手、茅原（茂）、田中（王）三氏へハガキ。新潮社へ「得ちやん」の原稿。朝顏の變り物が一つ初めて咲いたが、瓣が底まで切れた奴だ。夕方、諏訪氏を訪ふ。途中で見ると、芙蓉、えぞ菊、野菊、キビ等の花がある。雞頭はあれど、餘り蜂が行かないさうだ。

八月七日。曇。第一號群へ上からまた蜜を垂らしてやつた。巢門の方から第二、第三目のワクに少し產卵がある。夜、北川氏來訪。

八月八日。晴。吉岡氏來訪、北川氏とも猪名川を網打ちしたが、鮎五十八尾、そのうちにはカネ尺六寸のもあつたし、外に雜魚七十尾。夜、新報社の會議。早稻田文學社より原稿料二十一圓六十錢、吉岡氏、菊十一株を植ゑてくれた。川で、けふ、かじかを一匹捕へた。

八月九日。晴。出社せず。川手、内海二氏より手紙。第一號蜂群は可なり働くやうになつたが、念の爲めに給蜜をした。池田の市街の古道具屋でかじかの入れ物を買つた。夜、遲くから中山の星降り

祭を見に行つた。
八月十日。晴。けさ、黄色とあさ黄とが（キアキア）このやうに分れた朝顔が咲いた。大木氏よりハガキ。高橋氏を訪ひ、幸子との離婚屆の證人になつて貰つた。川手氏へ手紙を書いたが、これも同じ證人を賴んだ。第二號蜂群へ給蜜をした。
八月十一日。(日)晴。出社せず。奥村氏の宅居祝ひだと云つて、僕等二人と神崎氏と加藤氏夫婦とが御馳走になつた。それから、皆で猪名川でボートを浮べた。夜、田中氏を訪ふ。玉突。中村武)氏より九日附のハガキ。「發展」の發賣禁止を初めて知る。吉岡氏へハガキ。中村氏並に野依氏へハガキ。けふ、第三號群へ給蜜す。第二號に幼蟲がないので、第三號のワクと入れかへてやつた。どの箱にも、もう、雄蜂はゐなくなつた。庭には朝顔と石竹と鳳仙花とが盛りになつて來たが、そのどちらへも蜂の行つてるのは見ない。
八月十二日。晴。耳科醫へ行つたが、なほ脹れてるので中止。大木氏より手紙。角田氏よりハガキ。石橋の近邊でさるすべりの花が盛んに咲いてるところがある。かじかは雄が鳴き、雌は鳴かない。雌は少しからだが大きいさうだから、一昨日取つたのは鳴かない方のらしい。箕面に行つて、雄を一匹買つて來た(十五錢)。
八月十三日。晴。猪名川で取つた方のはかじかでないかも知れない。これは背が穢く普通のかひる

のやうな紋があるに反し、箕面で買つたのは白みがかつて、身が透きとほつてゐる。からだも少し小い。生きた蠅をやると、直ぐ飛び付くほど馴れてゐる。けふ、庭の鳳仙花へ蜂の行つてたのを見た。
『文藝の發賣禁止に關する建白書』、總理大臣西園寺侯並に内務大臣原敬に呈するのを各々八枚書いた。

八月十四日。晴。出社せず。西園寺侯並に原氏へ建白書、そしてその寫しを讀賣と國民とに。中村(武)氏よりハガキ。本日上京した筈の角田氏へハガキ。クラブの元世話人の話で、四升ばかりもある蜂群が家の軒へぶらさがつたのをけふ捕へた人が舊市街にあるさうだ。樣子を聽くと洋種らしい。持ち主が分らないなら、こちらで買つてもいいと云つて置いた。

八月十五日。晴。出社せず。清子と共に吉岡氏を訪ひ、氏の培養する朝顏を見た。去年のよりも二三種變つた大輪があつた。それから、浪花座に南極探險隊の撮映した活動寫眞を見たが、寫眞を取る方針が小い主我的に偏してゐて、研究的思考があつたとは丸で受け取れない。補遺としてシヤクルトンの取つたのを見せたが、その方が餘ほど頭腦のいい人が取つたことが直ぐに分つた。新報編輯に對する意見書を書いた。

八月十六日。晴。一昨日收容したと云ふ蜂群を見に行つたら、とまつた軒のそばの家根の上に、米屋だから、米箱をさかさまにして入れて置いたので、けさまでゐたが、逃げてしまつて、一匹もゐな

かつた。その近處の本養寺で飼つてゐたのであつたらしい。十個ばかりあるのが蠟蛾がついてるさうだから、それで逃げ出すのだらう。

八月十七日。晴。若宮氏へ手紙。出社せず。けふ、珍らしく散文詩を作つた。「カンナの赤い一輪」（四十行）だ。これを文章世界に送つた。大阪並に池田は東京より暑いやうだ。九十二三度を越えたことがない。蜂も暑いのだらう、井戸端へ澤山飛で來て、水を飲んで行く。今夕庭へ水をまいたら、それを飲みに來てゐた。

八月十八日。晴。出社せず。川手氏よりハガキ（先日の離婚届は不完全だし、本人が出頭せねば區役所で受け付けぬと云つて來た）。吉岡氏が植ゑた菊へ油かすをやつた。

八月十九日。晴。讀賣新聞社へ送つた公開狀（建白書）が歸つて來たので、東京朝日へ送つた。そこか國民かのどちらかが揭載するだらうと思ふ。

八月廿日。晴。出社せず。大掃除。かじかがきのふから鳴き初めたさうだが、けふも亦二度鳴いた。いつのまにか第二號のも黑みを帶びて來て、第一號のと見わけがつかなくなつた。入れてある石の色に同化して行くらしい。

八月廿一日。晴。耳科醫へ行く。國民新聞からも建白書の原稿が返つて來たが、東京朝日は電報をよこし、「ウチ（內容）バカリ一ダングライナラノセルゲンコウアラタメテオクレアサヒ」とあつたの

で、返却の原稿に中畧を多くして再び郵送した。若宮氏より返事。

八月廿二日。晴。若宮氏並に野依氏へハガキ。

八月廿三日。夜、雨。

八月廿四日。雨。東京から持つて來た三角棚と同じやうに組み立てることが出來る四角棚を（二圓八十錢）買つてきのふ四段に洋書を組み込んだが、まだまだ整理出來ないので、八百屋からさうめん箱とりんご箱十二個を持つて來させたが、まだ半分しか這入り切らない。殘本を書齋の疊の上に並べたままにして置いたら、ゆふべの大風雨で明い格子窓の紙がすべて破れ、それから這入つた雨ですべて濡れてしまつた。そのままかわかしてある。また、第三號の蜂の箱が倒れてゐたが、幸ひに蜂は逃げずにゐた。哲學會からハガキ。洲本の井關の老婆（九十才を越えてるだらう）が死んだ通知が來た。今夜、五月山の大文字が點火せられた。

八月廿五日。晴。昨日の東京朝日に建白書が掲載せられた。

文藝の發賣禁止に關する建白書

總理大臣西園寺侯爵閣下並に內務大臣原敬閣下

非禮を顧みず、茲に文藝に關する政治的取扱方に就き些か貴意を得たい事が出來たので有ます（中略）眞摯な文藝家て取ては文藝は決して一般人の考へる樣な閑文學では有ません（中略）

兩閣下、文藝的作物の發賣禁止は眞摯な文藝家等に取て重大な問題で有ます帝國憲法に於て住居信教並に言論の自由が保證せられてゐればこそ僕等は安心して當局の支配を受けてゐますがこの保證が容易に蹂躙せられては國民は動搖するに決つてゐます（中略）文藝家等は全く個々の行動を執つてゐます從つて當局と少しでも意見が違うと直ぐ或法律に違反するとして風俗壞亂若しくは治安妨害の名に嵌められて了ひます結局團體的武裝のない個々の文藝家の重大な努力も餘りに容易に一般的法律の執行に遭つて了ふので有ます。

第一この點を熟考して貰ひたいので有ます早い話が僕の今回禁止に遭つた小說「發展」は數年前から思ひ付て來て既に出版せられたのもある五部作の一で此一が缺けると數年來の計畫が完成致しません（中略）文藝には局外者たる當局の人々はよくそんな事は書かないでも、もつと面白い事若くは光明界の事が澤山あるではないかと申されるやうに承つてゐますが、眞摯深刻な文藝になればなる程人生の眞相に立入る物ですから何しても表面的な光明や面白味丈では充分な生命を握る事は出來ないのであります、夫が偶當局者の意見と衝突するので有ます。

此衝突に就ても（中略）原因が二種あると思はれます一つは出版物其の物の思想が全く衝突の原因になる場合です（中略）然し當局者に舊思想的偏見があつてそれが爲めに正當な新思想を拘束する樣ではなる文藝家の罪とは云へないので有ます（中略）又若し無政府主義ではない單に社會主義の書なら言論の自

由に保護せられていい物でそれを當局者が禁止するのは暴政の誹を免れ難いかと思はれます(中略)。
今一つは部分的字句的衝突であります僕のも之に相違ありますまい此場合には當局者の命令がありさへすれば出版者は著者と相談の上訂正する事が出來ますそして著者が何しても訂正しない樣な時に初めて全然發賣禁止をするのが穩當な、文明的處置かと存じます或書の如きは一ケ所に僅か二三言の不穩當があつた爲めにその三四百頁の書が全體禁止になつたと承つてゐます眞面目な文藝家の努力がそんな風で葬られるのは國民の損失では御座いますまいか(中略)初版の賣殘りを差押へて雜誌なら其場で訂正をさせるし、書物なら其分を沒收した所で第二版を出させる爲めに訂正を命じてもいいので有ます能うべくば「發展」からさうして貰ひたいので有ます。
承はれば近々畏れ多くも大赦令が降るさうで有ますが若し兩閣下に願へる事なら此際是までに過酷又は正當の爲めに發賣禁止になつた書の解禁若くば訂正出版の件を奏上して貰ひたいので有ます(以下略)

大正元年八月十五日　　　泡鳴　岩野美衞

かじかが二匹とも入れ物を逃げ出してしまつたとのことで、けさ方々を探したら、臺所の燃木の下に一匹だけゐるのを發見し、それを再び入れて置いたら、また逃げ出してしまつた。逃げさうなところもないのに、一心になれば拔け場所を見付けるものと見える。もう、いやになつた。朝顏も一昨日

の風で倒れたのがあるが、それも起してやる氣にならない。暑いので、ここ數日は何をする氣もない。小說を書きかけても、筆が進まない。と云つて、これまでに九十二度を上つた暑さの日はなかつた。井關氏へ香奠、今回三十五年記念をする淡路新聞社へ依賴により寫眞並に原稿。けふ、仲間の宴會をやる下調べに、獨りで寶塚のさきの武田尾溫泉へ行つた。川に添つたところに宿があつて、なかなか涼しい所だ。蜂は三箱とも赤い花粉をつけて歸つて來る。それが又兩方の足に蜂の首ほど大きく丸まつてゐる。洋草の花粉だらう。

八月廿六日。晴。耳科醫へ行く。離婚屆が整はなかつたのでまた印を高橋氏へ貰ひに行つたが、留守だから置いて來た。今回は芝區長に宛てて送り、事務の簡法を尋べと云つてやつた。けさ、四寸の紫宸殿が咲いたので取つて置いた。次のページのがそれだ。

この頃、淸子との間が何だか圓滑に行かないので、つい、言葉をかはすことが少い。吉岡氏へハガキ。

八月廿七日。晴。德田氏より電報並にハガキ。出社せず。淺田氏へ建白書全文（太陽の雜報欄へ出して置いて貰ふ爲め）。今夜、奥村氏が元藝者であつた女をつれて來て、神崎氏をも招いておそくまで飮んだ。

八月廿八日。晴。川手、上司、諏訪、北村、千歲樓へハガキ。奥村氏と僕等二人と寶塚を散步した。

蜂群を調べて見たら、いづれの箱にも産卵と幼蟲とがある。が、貯蜜にはすべて蓋がしてない。これは何を意味するのか分らないので、諏訪氏へのハガキの序に問ひ合はせた。庭の草にはどこを押してもこうろぎが飛び出す。蜂箱にまで這入つてゐる。まだ、谷を出ぬ鶯のやうに、啼き聲が熟してゐないのが多いが、晝間から夜にかけてよく啼いてゐる。その聲にまじり、逃げたかじかの聲もしてゐる。今井歌子氏からその父の訃を知らせて來た。九州へ歸つた平野氏よりハガキ。

八月廿九日。晴。出社せず。今井氏へ香奠。平野氏へハガキ。淸子と大阪に出で、天王寺の新世界を見た。入江氏よりハガキ並にその編「英和辭典」。

八月卅日。晴。耳科醫へ行く。博文館より稿料一圓五十錢(散文詩の)。

八月卅一日。晴。出社せず。北川、諏訪二氏を訪ふ。どす赤の花粉は南瓜のださうだ。今は萩の花が盛んだ。蜜蓋をしないのは、蜜がその房に一杯にならないからで、つまり、野に蜜分が不足なのだ。諏訪氏は此間から熊蜂退じにかかつてゐて、氏の近處中で旣に巢七八個、千數百匹の大小熊蜂を燒き殺し、うち殺したさうだ。氏の庭に澤山あつた交尾箱の群の、未姙王は殺し、小群はすべて大群に合倂してしまつたので、交尾箱がしまはれたのみならず、普通箱の數も少くなつた。

どうも夫婦の中が角が立つて面白くない。昨日などは、いツそ別々にならうかとも話し合つた。僕自身としても、この頃のやうに仕事が出來ないでは、乃ち、自己の存在理由が確かでないでは、愛も

何もあつたものでない。自己の存立も危い精神狀態で女を愛してゐると云ふのは、嘘言だ――嘘と知りつつ愛情的言葉や態度を見せるほど、僕は不正直ではないのだ。

九月一日。晴。出社せず。奧村、北川、清子、僕の四人が武田尾へ行つて半日を暮らした。若宮氏、小川氏よりハガキ。

九月二日。晴。早稻田文學來たる。新報社を退社することになつた。理由は、僕が東京から來た時の約束に每日出社しないでもいいと云ふことがあつたが、そんなことは云はなかつた筈だと社の方が云ふので――これは旣に二三ケ月前からの問題であつた。僕は每日出社してたつた五十圓の俸給ではいやだと云ひ張つてゐたのだ。今夜、小林一三氏をその宅に訪ひ、轉宅費として六十圓を借りることにした。

九月三日。晴。けふ、帝國新聞の改題した大阪日々新聞社に新社長吉弘氏を訪ひ、東京から寄稿することにして何とか相談が出來ないか、どうかを話して見た。多分いいだらうが、なほ齋藤氏にも話して置けとのことで、日報社へ行き、吊花氏にも吉弘氏の言を語つた。そこで白河氏に久し振りで會つた。それから耳科醫に行つたが、どうも鼻からの道が固くなつてふさがつてるのでブーゼが這入らない。當分中止することに斷念した。新報社へ行つて、皆に退社の挨拶をした。社長に賴んであつた原內相への紹介狀も出來てゐた。これは建白書事件で會ふ爲めの紹介だが、きのふ、後藤男爵に引き合

はしてくれるに好都合の人がないかと尋ねたら、十一月に岩下淸周が歸るから、あれからやつて貰ふやうにしてやると答へた。僕も何だか政治界へ出たくなつてゐるので、その意をうち明けたのだが、政治の實際にぶつかつて行くには、今のところ、後藤と政友會との間に立つてゐるのがいいやうに思はれる。歸京したら、誰れからか政友會にも接近するつもりだ。

今夜、原稿を書いてると、熊蜂が二匹飛び込んで來た。察するところ、ゆふべ小林氏の納家に巢を喰つた熊蜂の大きな巢を退じる仕方を敎へて置いたが、その通り今夜實行して、やりそこなつた爲め、蜂が散亂して、そのうちのがここへも逃げて來たのだらう。

九月四日。夕方、雨。大阪日々社の人が來たので、その人と共に同社へ行つて、今回編輯長を引き受けた上總氏に會ひ、齋藤氏へ話したことをまた話した。同社の社長の口振りは、きのふの樣子では物になりさうだから、なほ今日相談を定めて見ようと云つた。德田秋江氏、平野一郎氏よりハガキ。井關、西田利三郎二氏より手紙。新潮、詩歌二雜誌來たる。文章世界來たる。けさ、早く起きて蜂の働きを見てゐたが、いづれも白い花粉を取つて來るのが多い。

九月五日。雨。平野、德田(秋江)二氏へハガキ。夜、上總氏の宅を訪ふたが、入社が八九分まで出來さうなやうすだ。

九月六日。夜、雨。新潮社より電報かはせで二十六圓。上司氏より電報。新潮社依賴の論文「批評

の省察』(四十一枚)を書き終る。西田氏來訪、海軍の記者もしくは海軍評論家になりたいと云ふ。僕の滋賀縣にゐた時敎へた中學生で、海軍中尉だが、脊髓病の爲め先月休職になつた。病氣は先年からだが、もう直つたことは直つたも同前ださうだ。

九月七日。曇天。秋海棠の花が咲き出した。新潮社へ昨日の原稿。

九月八日。雨。上司氏より下目黑に家があることを云つてよこした。直ぐ返事をして、蜂を飼ふ餘地があるなら、手金を打つて貰ふやうに賴んだ。けふ、蜂群を調べて見たが、いづれも貯蜜、花粉、產卵、幼蟲がある。この頃になると、蜂の氣が荒くなると見え、どの箱でも開けたら尻をあげて飛びかかつて來る蜂があつた。

九月九日。雨。高橋縫子氏より手紙。その返事を同氏の名で八幡町へ出す(離婚屆がまだ形式上の不備があるのだ)。『再び中村氏に』(十七枚)を書き終る。

九月十日。晴。早稻田文學社へ昨日の原稿。寶塚をぶらつく。

九月十一日。晴。諏訪氏を訪ふ。來春になつて洋種一箱を貰ふことにした。蜜蠟を煮て分析するところであつたから、その方法を見てゐたが、それから同氏の一勢をつれて、小林氏の宅に至り、熊蜂の巢を退じ、二百十匹を殺してしまつた。けふ、諏訪蜂園で見てゐるのに、熊蜂は蜜蜂を巢門から出るところで捕へるが、赤蜂は巢門へ歸るところを捕へる。この方が機敏だ。夜、池田の芝居へ行つ

た。

九月十二日。晴。小林氏に電軌會社で會ひ、約束の六十圓を受け取つた。その時の話に、氏は君は失敬な人だと云ふ。何かと聽くと、きのふ熊蜂を退じたが、あれは幸の神として緣喜がいいことにしてあつたのだ。然し退じてしまつたら仕方ないがとのことだ。それは此間の話に行き違ひがあつたのだ。每日社へ行き、關、薄田、伊達三氏に會つた。それから、住吉に原氏の留守宅を訪ひ、大阪へ歸つて吉岡、並に岡村氏を訪ふ。

九月十三日。晴。けさ、新聞を見てゐて、天皇陛下が英國皇帝御名代コンノート殿下を新橋に迎へられる記事を讀みながら、知らず知らず先帝の威容を想像してゐたが、氣が付くと、新皇帝が先帝の御喪儀參列者をお迎ひに來てゐられるのであつた。またこんな錯感が起るほど、先帝は自分の心に近くゐますのだ。まだ歷史上の人として考へるには近過ぎるやうだ。北川氏を訪ひ、歸京後、蜂蜜販賣を弟にやらせようとする手續きを研究した。夕方、蜂が一匹庭の石竹に働いてるのを見た。

九月十四日。雨あり。昨夕、先帝の轜車御行進の時刻に、乃木大將がその夫人とさし違へて殉死したと云ふ事實を報ずる號外を、けさ見た。が、要するに、かうなつて來ては、お芝居同樣、寧ろ滑稽だ。二子をも戰死させたと云ふやうなところから、人生を悲觀してのことなら、まだしもいい場合を得たと云ふに止るが、忠義の意味を示めさうとする殉死なら、感服しない。東京に歸つてからやらう

とずる蜂蜜販賣の說明書き「蜂蜜の說明」を書いて見た。弟と淺田とに手紙とハガキ。

九月十五日。曇。諏訪氏を訪ひ、蜂蜜販賣の工合をうち合はせて見た――蜂蜜原價一ポンド二十四錢、瓶九錢、レテル四枚（表、裏、ネクタイ、封しん）一錢二厘、ツメ賃一錢、蜜のへり一錢二厘、瓶の割れ（百分の三）三厘、一ダース箱（上等三十錢、下等二十錢の平均二十五錢、それを十二に割つて）二錢五厘、包裝費八厘、運賃三錢六厘、計四十四錢二厘。仕入一貫二圓、容器代（貫に付き）五錢（へり等は見込んで）、運賃六錢、計二圓十一錢。おろし賣二圓五十錢、差引純利三十九錢（百斤、十六貫に付き、純利六圓二十四錢）。小賣若しくはおろし一ポンド瓶入六十五錢、（以下容器代は別）百匁以上は百匁に付き四十八錢、一貫目以上は一貫に付き四圓五十錢、五貫目以上は五貫に付き二十圓（貫に付き四圓）、（以下容器無代）、十貫目以上は十貫目に付き三十五圓（貫三圓五十錢）、百斤（十六貫）以上は百斤に付き四十圓（貫二圓五十錢）。

北川氏曰く、『一ポンド瓶入（正味百匁）七十錢、百匁六十錢、一貫目三圓五十錢、五貫目（一貫に付き三圓）、十貫目（一貫に付二圓）』。

入れ物、チエリイの瓶が代理によし、（一升で七八百匁）、一斗入（七八貫）はグリセリン若しくはアルコールの空鑵がよし、三斗樽（ふうたい、二貫三百匁）に二十貫以內十七八貫入る（代、八十錢）、一斗四五升樽（これは特別の形）に十二貫入る（代、七十五錢）、一斗入（ふうたい、八百匁）に八貫弱（代、七

十五錢）。レテルは紺（インヂゴをまぜた）色が蜂蜜の色を引き立たせる。（蜜が六十度以下で氷ることをビハインドレテルに書き入れること）。蜜の分析轉化糖（ぶどう糖）七三、水二四、鑛物質〇・八、その他の有機物が殘部。蜜の色は、蜜質の上等のから順序立てると、一、類白色微黃（ハゼウルシ）、二、淡黃色（ゲンゲ）、三、純黃色（ミカン）、四、帶褐黃色（ソバ、クリ、ウリ）、五、類白色微黃で水分の多いのは（ナタネ）。ソバ、クリ、ウリのは凍つても色は變はらないが、他のはすべて白色となる。

北川氏曰く『ミカン淡黃色、ゲンゲ黃色（氷つても白少し）、ナタネ黃色に黑み、即ち、褐色。』

そして一旦凍つたのが暑熱で自然に溶解する時、ハゼウルシとゲンゲとのは半ばしか溶けない、他はすべて溶けて少し酸味を帶ぶ。いづれも日を經るに從つて、色が濃くなる。蜜の需要、工業ではモスリン友禪、火藥（グリセリンの代りに）、花火、燻物（せんから等）。藥用ではねり藥（大木五臟圓の如き）。化粧料用ではお白粉下、ねりハミガキ、しやぼん。蜂印でない甲ざん葡萄酒。西洋菓子、ミルクセーキ、アイスクリーム。種蜂、純粹洋種五十圓以上八十圓、雜種十五圓以上五十圓、日本種八圓以下四圓。（藤澤藥種店は日本橋區本町四丁目）。蜜は冬よりも夏分に賣れが多いが、蜜その物よりも、あんず、きんかん、桃、しやうが等の蜜づけの方が當分賣れ行くものと見るべきだ。（ついでに、大雅堂の蜂蜜羊かんもよからう）。

やうかん製法。

白あづき。　　　　かんてん、
水、　　　　　　　砂糖(三分)、
蜜(七分)、
こげつかないやうにして、蜜をまぜるが必要。
夏向きには、
、、、こはく糖、
かんてんで固める、あづきぬき也。

九月十六日。雨。伏見から淺田がやつて來た。正直さうな少年と見てゐたから、東京へつれて行く相談をしたのだ。大木綠二氏、庭鳥を一羽持つて來たる。

九月十七日。雨。上司氏よりハガキ。日々社へ社長を訪ねたら、明日會はうと云ふことだ。日報社の齋藤氏に聽けば、日々と日報と兩方を書くことにして頼まれるやうに定つてるさうだ。東京朝日の松崎氏に日報社で會つた。德田秋江氏、毎日の增野氏と共に來訪、大分、前とはからだもよくなつたやうで、感じがよかつた。他に荒木、奧村、二氏も一緒になつて話した。桝本氏より手紙。大木氏、友人をつれて來訪、夜共に吳服座に氏の藝を見た。

九月十八日。晴。日々社に行き、吉弘社長に面會したところ、下阪するには及ばないから、原稿を

書いてよこすことに定つた。その代り、手當は大したものでないらしい。月見草が、もう、越年の用意に、根から大きな葉を出して來た。鳳仙花は全く花が落ちて實ばかりだ。カタバミは殆ど全く消えかかつてゐる。朝顏の花は段々小くなつた。

九月十九日。晴。奧村氏來訪。若宮氏よりハガキと東京魁新聞と來たり、原稿の依頼を受けたので、書くと返事した。桝本氏へ返事。吉岡氏へ手紙（僕に忠告した意味が違つてるから、それをどう思ふかと云つてやつた）。

九月廿日。風。諏訪氏へハガキ。吉岡氏より手紙。淸子と共に和歌の浦、紀三井寺へ行つた。紀三井寺は殆ど見すぼらしい場所だが、和歌の浦の入り江は鳥渡天の橋立に似て、靜かな感じを與へた。外海の海岸は砂地が狹くて濱寺ほどの廣さを感じられない。甚だ穢い休息所のかみさんを下女が『奧さん』と呼んでゐたので思ひ出したが、紀州ではすべてさう云ふ習はしだと曾て友人が云つてゐた。『けれど』と云ふのが、『けれろ』のやうに聽える。あしべ屋と云ふ旅館で夕飯をやつた。和歌山市はしみツたれた市だ。

九月廿一日。夕方より雨。前田（晁）氏へ文章世界の正誤。けふ、熊蜂の來襲を初めて見付けた。狹い庭へのツそりと六七匹群を爲して飛んで來たのを見た時は、バルチク艦隊でもやつて來たかのやうにおツとりとした雄大の氣に打たれた。午後二時頃が來襲の時間だと聽いてゐたのは如何にも事實

だ。五匹をはたき落して、他の再來を待ちかまへてゐたが、もう姿を見せなかつた。
九月廿二日。終日雨。疲れて夕方より寢た。
九月廿三日。朝雨あり、午後より晴。「先帝崩御の暗示」（三十枚）を書き、太陽に送つた。いとこの鈴木花子死去の知らせに接し、香奠を送つた。
九月廿四日。晴。一昨日よりの大風雨で和歌山、淡路、堺等に海嘯と大出水とあり、先日行つた和歌の浦の宿屋なども浸水床上四五尺にのぼつたらしい。東京より電信電話不通、大阪郊外も三十年來の出水、毛馬閘門に於て新淀川と大川との落差二十尺。
本日朝早く起きて蜂の行動を見てゐたが、ちよつと目を放してゐたうちに、第二號箱の外に蜂がまごついて地上にちらばつて行くのを見つけた。また强敵の來襲があつたのかと思つてると、その巣門のところに死んだ大蜂（熊蜂よりは少し小い）が運び出されて來た。けなげにも、箱中でやつ付けたのと見える。
午後七時二十三分大阪發。
九月廿五日。晴。午前九時新橋着。直ぐ下目黑に上司氏を訪ひ、同氏の見付けて置いた家（七圓五十錢）を下目黑二五五に決めた。そこを午後二時過出で、新橋より三時四十分の汽車で歸阪。若宮氏へ、ハガキ。

九月廿六日。晴。午前七時池田着。北川、諏訪二氏を訪ふ。木村(信)、水谷、茨木稅務署より手紙。東京魁新聞へ出すとして若宮氏より依賴せられた原稿「發賣禁止論」(六枚)を認めて送る。深田(康)氏へハガキ。西村茂氏來訪。

九月廿七日。晴。若宮氏よりハガキ、返事。荷物の引きまとめ。石丸氏來訪。夜、池田の連中の送別會を受けた。東京へつれて行く書生として淺田菊次郎(十五才)が伏見から到着。

九月廿八日。晴。荷物三十三個(運賃十八圓八十二錢)を池田驛の運送店に託す。日本ホテルで送別會あり、上總、薄田、吉岡、加藤、その他、すべて十三名集つて呉れた。それが終つて上總氏は僕をまた曾根崎の某亭へ招いたが、十一時頃歸宅。

九月廿九日。朝から北川氏が蜂の始末をしてくれた。諏訪氏から洋種一群を贈られた。夕方、奥村氏の家に引きあげ、そこから出發した。梅田から乘車の前、僕は高橋氏を訪ふたが、既に舊妻との離婚は成立した筈だから、毎月の送金を渡せ、またさきに貸した金の注意をしろと云ふ件を充分に注意せられた。

梅田から出發したのは、僕夫婦と淺田とである。

日堂一ゐ記

大正元年九月廿日より

大正元年

九月三十日。雨。午前十時頃、目黑に着。上司氏のところから飯をたいて貰つて喰つた。蜂は邦種三箱を鐵道便にし、洋種一箱は手荷物で持つて來たので、僕等が到着すると同時に、庭で巣門を開いてやつた。二十匹ばかり倒れただけであつた。直ぐ働きに出て、向ふ側の目黑園からであらう、花粉を澤山取つて來る。

十月一日。雨。邦種がまた無事に屆いた。早速砂糖を煮て給蜜したが、やり方が惡かつたので、洋種だけには蜜が箱の外にだらだらと流れた。

十月二日。晴。果して洋種へ邦種から盜蜂を送つた。見てゐると、大膽な奴はぐツと巣門內に這入り込むが、やがて追ひ出されて來たり、又は喰ひ合つてころげ出たりする。邦種もなかなか機敏で、洋種の胸をさして殺したのもある。が、大抵は巣門に至らないで、ただ箱の後ろにしみ出た蜜を喰つてゐるので、そのままにして置いた。夜、上司氏と共に水野氏を訪ふたが、留守であつた。

十月三日。雨。上司氏と共に五反田邊まで散步した。大崎驛で僕の箱をおろす前にも、七箱ほどおろした人があつたと云ふので、どんな養蜂家か調べに行つたのだ。五反田の高みにある驛から低地を見おろすと、果して蜂箱を並べた家があつた。行つて見ると、高木氏と云つて、一ヶ月前に九州の島原から來た人だ。七箱の蜂は凡て僕のと同じイタリヤ種で、式は然し相島式だ。そこの主人の妹がおもに世話をしてゐるらしかつた。熊蜂の來襲が甚しいやうだ。夜、實業之世界社に行つたら、幸ひに野依氏がゐたので初めて逢つた。が、『今、あなたの本をやぶいてゐるところです』と云ふ。「發展」の賣れ殘りが五百部返つて來たのを、どうするわけにも行かないから、破つて屑屋に賣らうとするのだ。僕はそれを見てゐて、自分の身を裂かれてゐるやうな氣がした。

十月四日。晴。盜蜂はおさまつたが、熊蜂と赤蜂とが時々來襲して來出した。赤蜂二匹を打ち殺した。洋種はどの蜂も皆紅白の花粉を取つて歸るが、邦種は餘り取つて來ない。殊に第一號群は殆ど全く働かない。運搬して來たままのありさまでまだしばつた針金をも取つてやらないのが惡いのだらうが、この家が氣に入らないし、今別にいい家が明きかけてゐるので、そこへうつつてからにしようと思つてる。

十月五日。晴。荷物、漸く到着。だが、當てて る家がまだ這入れないのだ。

十月六日。晴。田代氏來訪。弟並に妹が來訪。新潮社から「明治時代に於ける文界並に劇界の偉大

なる作品、人物、並にその感想」を質問によこした。詩界に於ては、新らしい感情に道を與へた藤村の「若菜集」、新らしい思想と考へ方を一變させたとに力ある僕の諸詩集――小說界では、詩界の藤村に當る意味での紅葉（露伴などの位置は渠に及ぶべきでない）並に僕の詩に於ける意味での「獨步集」（その前後の他作家は今に至るまで獨步のやうな革新を與へるものがない）――劇界では、團十郞が藝と藝人との地位を高めた點（逍遙氏の作劇などは、如何に性格を主としたからツて、國州の範圍を脫してゐない）――このやうな返事を書いて出した。家の前を萩の花を見がてら不動へ參詣する人々がぞろぞろ通つた、日曜だから。

十月七日。晴。博文館に淺田江村氏を訪ひ、初めて會つた。そして昔、氏が空花と稱して新體詩を女學雜誌に出してゐた頃の話に及び、僕よりも後輩であつたと云ふやうなことが出た。が、氏はその頃から新聞記者になつて政治的方面に向つてしまつたが、僕は漸くこの頃になつて政界に入らうとしてゐると云ふことを僕は語つた。直接の用事は原稿「先帝崩御の暗示」のなり行きを聽きに行つたのだが、今少し言葉を和らげて吳れろと云ふことになつた。田山氏にも會つたが、例の脚氣でよわつてゐるからでもあらう、顏色がよくなかつた。それから、正宗氏を訪ねた。氏は段々きまり切つて來るやうだ。そして細君に繻子の半襟付きの衣物などを着せてをさまつてゐる。他に川手氏と今井（歌）氏とをも訪ねた。

十月八日。晴。淺田氏より原稿を返して來たので、注文通り訂正して再び送つた（二十三枚に縮めた）。當てた家が何だか曖昧なので、上司氏と共に不動のあたりから桐ケ谷、大崎などをぶらついたが、適當な家も見當らない。

十月九日。雨。碑文谷へ家を探しに行つたが、なかつた。諏訪氏へハガキ。本多、相馬、前田（晁）西村（渚）、――中村（武）氏へハガキ（新年號小說の交涉）。

十月十日。晴。競馬場前の家の持主を四谷に訪ふた（明日いよいよ返事が分る筈）。同時に、先帝御葬儀の式場を見に行つた。上司氏も一緒に行つたが、話し合つたのは本殿であつた建物の家根の曲線が面白くないことだ。東京の建築家には、よくやれないのだらうか？二重箱にした洋種の中を初めて調べて見た。ワクは五個這入つてるが、蜂が蜜集してゐる工合は正味二ワク分の群だ。幼蟲はあるが、産卵が殆ど全くないやうだ。ついでに、王の羽根を切つてやつた。洋種と邦種第一號群とに給蜜をした。深田（康）氏よりハガキ。日高（猪）氏來訪、留守であつた。

十月十一日。夕方より雨。當てゝゐた家が駄目らしいので、荷物を半分ほどほごした。同時に、邦種の蜂のワクをすべて直してやつたが、この頃餘り働いてなかつたのも、尤も――蜜もなく、幼蟲も産卵もない。これではうかうかしてゐられない。一つは、打ちつけて來たワクのアキがあらかつたので熱を保ちにくかつたのでもあらうと思ふが――。この頃山野には萩の外に、蕎麥の花や茶の花が咲

いてゐる。野菊もある。洋種の取つて來る花粉には赤と白と青みがかつた白とがある。小菅（繼母の弟）から繼母の復籍を賴みに來た（承知の返事を出した）。

十月十二日。晴。洋種は糖蜜を喰ひ殘してゐるので、殘つた分をそのまま第一號群に與へた。第二號のも喰ひ殘してあるが、これは少しづつ喰つて行くやうすだ。あたたかかつたせいでもあらう、すべての群が多少よく活動したが、最も小群な第三號が一番働き方が鈍い。新潮社並に西村（渚）氏よりハガキ。吉弘並に小林二氏へ手紙。（吉弘氏へは小說稿料のうちから二百圓前借、小林氏へは五十圓借用の件）。書物の荷をも全く解いてしまつた。日高有倫堂氏來訪、田山氏への紹介を賴でん、同時に僕の「斷橋」並に改正「發展」出版の相談をして行つた。田山、增永（加）、增永（尙）、中田氏へハガキ。島川、久松、吉岡、薄田、宮田、井上、上總、江部、加藤（朝）、荒木、神崎、石丸、加藤（恒）氏へハガキ。島田、原、生田（蝶）、鈴木（新）、川手、若宮氏へハガキ。

十月十三日。晴。奧村、高橋氏へ手紙。名古屋の松川屋へハガキ（蜂蜜やらかん問合せ）。巢箱を一つ拵へた。蜂群に給蜜（洋種と、第二號と第三號とへ）。

十月十四日。晴。生田（蝶）、前田（夕）氏へハガキ。若宮氏よりハガキ。邦種第一號群が一ワクの巢の下半分を喰ひ破つた粉が山積してゐたので、箱內を掃除してやつた。大きなナメクジが二匹も這入つてゐた。けふは盜蜂が多かつた。邦種がたまに洋種へも行つたが、多くは洋種が邦種へ行つた。が、

中へ這入るのは極少いやうであつた。そのうちでも、極樂にもぐり込む蜂で、洋種のやうだが、僕のイタリヤ種とは思へないのがあつた。一は邦種のよりは大きく、尻が黑い。一は、また黑い尻の上部に一本赤みがかつた黃線がある。イタリヤ種も古くなつた老蜂は黑みがかつて來るさうだが、果してそれか、それとも他にこの近處で別な洋種を飼つてるものがあるのか、どうも疑問だ。けふは、洋種と第一、二號とに給蜜した。砂糖を同じ水分で煮ても、けふは直きに固まつて行く傾きがあつた。それでもかまうまいと思つて、山盛りにして入れた。

十月十五日。晴。淺田(彥)氏へ手紙(太陽の評論受持の件)。新潮社へハガキ。蜂が喰ひ殘した糖蜜の固まりをすべて煮かへてやつたが、そのにほひを聽いてか、きのふの黑蜂がまたやつて來た。丁度、外出しようとする時であつた、第二號群が——兼てさうだらうと思つてた通り——果して逃走をくはだてた。わんわん云つて門前の空に渦をまいてゐたが、僕が羽根を切られてゐる女王を巢門を出た時拾つて置いたので、二三分にしてすべての蜂がまた同じ箱に歸つて來た。そこへ王を放ちてやつたので、元の通りにをさまつた。現金なもので、それから以前とは打つて變つて働くやうになつた。椽がはに一時取りのけてあつた給蜜器には黑蜂が——而もそればかりが——二十匹ほどたかつてゐた。これでは强敵であるに相違ないと心配せられる。有倫堂を訪ねた。(僕の小說は當分駄目だと云ふ、株主に反對者があるので)。德田(聲)氏を訪ねたが留守。北村氏を訪ひ、十二時過歸宅。吉岡、增

永、箕面雷軌より書信。

十月十六日。晴。蜂箱の蓋を一つ拵らへた。すべての蜂に、煮返した糖蜜をくばつてやつた。黑蜂は第一號箱をおもに襲ふやうだ。第二號、三號へは、たまに行く。が、どれにも這入るのは少いやうな。六七匹は、うち殺した。洋種へは全く行かない。第二號と第三號との蜂の出動がけふは大分烈しく、兩群の蜂が互ひに巢門で相戰つた。巢門に導く板の上を何對も何對もころころところげ落ちるのを見た。中には、三四匹から十匹も一緒になつてころがつた。それを見てゐると、必らずしも敵と味方とのくみ打ちばかりではなく、當の敵は逃げても、味方同志の彌次どもがかみ合ひ、さし合ひしてゐる。第一號の巢門には、盜蜂をさける爲め、紙をはさみ、二匹分ぐらゐの通路を殘して置いたが、活動はなかなか盛んであつた。天氣も濕であつたせいだらう。原、久松、前田氏よりハガキ。大川政八氏より手紙並に原稿。淸子の父來訪。

十月十七日。晴。野依、原、上總、正宗(白)、長井氏へハガキ。井關氏より僕の叔父鈴木新七の死去電報。先月その娘を失つて、今また氏の死だ。これで僕の母方の叔父はすべて亡くなつた。けふ、上司氏と共に家を探しながら中延、碑文谷邊をぶらついた。もう、萩の花はなくなり、至るところ花と云へばコスモスが盛りだ。野菊もまだある。コスモスや野菊の花粉は黃色だから、僕の蜂群が取つて來る赤い花粉は何のであらう？、今どこの花園にも菊とダリヤとカンナとがある。ダリヤとカンナ

との花粉を調べて見なければならない。中延邊は平野で、畠ばかりだから、養蜂にはあまりいい所ではない。淺田の母から手紙。

十月十八日。晴。大川氏來訪。茅原(茂)氏、畫家の小寺健吉氏をつれて來訪。給蜜は洋種と邦種第一、二號とに。第三號の巣門へ盜蜂が度々行つたかして、邦種の死骸が十數匹ころがつてゐた。第一號の箱から黑蜂が一匹飛び出したのをはたき落した。北川、加藤、井關氏よりハガキ。加藤、ちゑ、田代、瀧田、諏訪氏へハガキ。茅原氏へ新刊雜誌郊外新報への原稿と廣告。

十月十九日。晴。增永(加)氏來訪と入れ違ひに同氏を訪ふ。長谷川氏宅で時間を見て再び訪問。壺屋へ蜂蜜賣込の相談を賴んだ。歸途北村氏を訪ふ。けふ、洋種へ二合五勺、第二號へ一合の給蜜。諏訪氏より返事あり、蜂群はかけ價なし五十圓、三割の口錢。やうかんは伏見のスルガ屋のがよし。甘露づけはまだ物にならないが、なれば蜜その物と同價。防寒外箱は巣箱より四寸大、外箱の門は高サ一寸二三分、長サ五寸五分。(內箱の門の高サ五分、長サ四寸五分に對して)。もみぬかは(摺糠、籾糠は)外箱の底にも、高サ一寸の位置へゲス板をはめて、その板の下にもぬかをつめる。二重箱にしたら、屋根裏の布切もしくは新聞はない方がいい。と、なり。有倫堂へハガキ往復、正宗氏よりハガキ。

十月二十日。晴。若宮氏を訪ふ。大久保文學くらぶを訪ふ。吉江、正宗(得)、前田(夕)、戶川氏を訪ふ。留守に吉野(甫)氏來訪(『文章講義』の原稿の件)。書生の淺田が不良少年たることを發見した。二

三日前も二日一夜をぶらつき歩いて來たが、けふも歸らないので交番所へ屆けた。見つかり次第、歸鄕させるつもり。

十月二十一日。晴。書生、朝巡査に引かれて歸り來たる、然しまた出た切り夜遲く歸宅。明日は歸鄕させるつもり。洋種と第二、三號へ給蜜。第三號を除いた三箱は平調に返つたが、第三號だけがまだ尋常の働きをしない。若宮氏と共に池田藤四郞氏を日本新聞社に訪ひ、氏の黑幕たる東京魁新聞を手傳ふことになつた。吉野氏また來訪、論文作法九十枚を書かせられることになつた。神崎氏より氏が大阪日々へ入社の報。「魁」から此間の稿料五圓。

十月二十二日。晴。水野氏來訪。洋種と第三號とに給蜜。洋種にはふたされた兒の外に幼蟲がない。第三號群にはまた産卵が少しあるだけだ。後者もけふは少し働いた。

十月二十三日。晴。（夜、ちよつと雨）。夜、池田氏の宅を訪ひ、魁新聞の十一月一日號の相談をした。報酬は發行三回に對して當分三十圓と定つた。諏訪氏よりハガキ。二重箱の中蓋は息を拔くところを置かないで綿をのせてもいいさうだ。けふ、そのやうに綿を洋種のにつめてやつた。けさ、十一時頃、書生に神田の忠誠堂もしくは本鄕の吉野氏宛の手紙をつけ、論文作法原稿料の中から四圓前借をさせ、直ぐその足で新橋から出發するやうに命じたところ、犬の小僧がそれに付いて行つたものと見え、漸く午後八時頃に歸つて來た。よく東京の複雜な道を嗅ぎ分けて來たものだ。

十月二十四日。晴。「論文作法」を書き初めた。大箱を拵へて邦種第一號を二重箱にしてやつた。
十月二十五日。雨。
十月二十六日。晴。昨日の雨で蜂箱の中へ水が這入りはしなかつたかを調べて見た。二重箱は二つとも無事であつたが、一重のは兩方ともワクの上にかけた新聞紙がぬれてゐた。蓋がつぎ合はせで、その間から這入るのだ。近代劇協會の「ヘダガブラ」を有樂座に觀る。
十月二十七日。晴。吉野氏よりハガキ。中澤、長谷川氏へハガキ。吉野氏、池田氏を訪ふ。「近代劇協會の第一回興行」(九枚)を書く。
十月二十八日。晴。上司氏と共に文部省展覽會を見、それから德田(聲)氏を訪ふ(留守)、正宗(白)氏へ行つて分れた。今井氏を訪ふ。
十月二十九日。曉方、雨あり。有倫堂よりハガキ。丸善より手紙。上司氏から長谷川(天)氏午前十時に新橋着の通知があつたが、間に合はなかつた。蜂はいづれも働くが花粉の取り方が減じた。そして取つて來ると、朱色のと靑みがかつたのとだ。
十月三十日。晴。中澤氏よりハガキ。家を見に下澁谷邊をぶらつき、それから魁社へ行く。池田、若宮氏に從ひ、晩食を銀座でやつた。魁社から來月分手當三十圓を受取つた。
十月三十一日。雨。今曉、「論文作法」(五十枚)を書き終つた。日高、中田、相馬氏へハガキ。幸橋稅

務署より所得納稅地變更屆並に所得金額決定通知書受領屆を出せと云つて來たが、まだ納稅した場所もなく、通知書も大阪の茨木署へ返却したことを云つてやつた。

十一月一日。雨。入江氏へ手紙。高橋氏へ十圓爲替（八幡町への月額）

十一月二日。晴。有樂座に土曜劇場の興行を見、夜、呂昇の義太夫を聽き、印象「有樂座の半日」（「土曜劇場の興行」と「呂昇の語り振」とより成る）を十七枚書いた。中村氏より原稿の通知。演藝畫報より稿料五圓。神崎、長坂氏よりハガキ。

十一月三日。晴。大久保文學クラブ、吉江、蒲原、野口氏を訪ふ。中央公論、新潮來たる。

十一月四日。晴。夜は雨。日高氏來訪。長坂氏へ悔み狀（九郎次郎氏の死去に對して）。社へ行つたついでに、ヒュウザン會の新洋畫展覽會を觀、それから田山、川手二氏を訪ふ。

十一月五日。晴。蜂の外箱を一つ製造した。高橋（久）、高橋（五）氏よりハガキ。ホイトマンの詩の譯をまとめて見た（三十字詰、十行のポケト本に百三十九枚は既に譯せてゐる。その他に、「普遍の歌」もあつた筈だが、中學世界に出た切りで保存せられてゐない。樺太での失敗時代に、あいつがどうかしたのだ）。上司氏が關西旅行から歸り、僕の池田の宅のそばで取つたと云ふあざみと紅葉とを屆けて來た。

十一月六日。曇。忠誠堂より「論文作法」稿料二十五圓。新潮社より「批評の省察」稿料二十圓。社へ

新聞を讀みに行く。昨日、蜂群を調べて見たが、洋種はワクがすべて重いほど蜜をためてゐるが、まだ蓋したのが少い。幼蟲並に卵は四箱ともすべて澤山ある。きのふは、皆よく働いたが、けふは曇りがちな爲めか大して働かなかつた。松昌洋行に山本唯三郎氏を訪ふ。二十四五年ぶりである。

十一月七日。晴。清子病氣の爲め、昨夜來眠られず。西本、淺田氏よりハガキ。「いろは翁漫語」三枚を社へ送る。慶應の石田氏へ手紙(塾で一二時間の講義を受け持ちたいとの交渉)。中村(武)氏へハガキ。阿部、本間氏へハガキ。

十一月八日。晴。石田氏より返事(餘地なし)。中村氏より返事。大木氏よりハガキ。きのふ、蜂群の働きぶりを見てゐるに、もう、花も菊の外は少くなつたせいか、非常にあせり出して來たのが分る。そして勞れ方が烈しいものと見え、まともに巣門へ這入り込めるものは殆どない。門の手前へとツ付いて休んだり、巣を通り越してしまつて、跡もどりの節、蓋の上へとまつたりして、暫くのまは動けない。けふ、第二號の邦群を二重箱にしてやつた。産卵に幼蟲は持つてるが、蜜が少い。西本氏來訪。品川稅務署より手紙(また納稅通知書受領書の催促)小說「正美先生」(三十三枚)を書き終る。

十一月九日。晴。稅務署へ通知書返納。鈴木氏よりハガキ。本間氏よりハガキ。蜂の箱へ外から土を塗り、油紙をかけてやつた。奥村氏よりハガキ。チヱ子より弟の病氣しらせ。妹へハガキ。

十一月十日。晴。家を探しがてら、上司氏と中目黑の方面に行つたら、また一つ高木養蜂場といふ

のを發見した。岐阜からやつて來たんで、六箱の外國雜種を飼つてゐる。一箱を除き、跡はすべて强群らしい。「情界日記」を書き初む。

十一月十一日。晴。「趣味」來たる。社へ出た。正宗(白)氏來訪。

十一月十二日。晴。前田、田山氏へハガキ、(天溪氏歡迎會の件)。中村氏へ原稿。芝川、加藤、淺田氏よりハガキ。品川稅務署よりまた故障のハガキ。午前三時半起床、支度して橫濱へ出た、觀艦式を見る爲め午前七時出帆の神奈川丸(郵船會社の招待券にて)をキヤツチす。午後六時過歸宅。海上で飛行機を初めて見た。

十一月十三日。夜、雨。長谷川(勝)氏よりハガキ。文藝協會より招待狀。帝國劇場に外人團の「ハムレト」を見た。外人の劇を見たのは初めてだが、エロキユーションが主で、わが國のやうなわざとらしい芝居をしないのが取り柄だ。

十一月十四日。晴。蒲原、野口二氏來訪。神崎氏より手紙。弟の巖、病氣の爲め勤めを欠勤し、八王子より引きあげて來た。リヨウマチスとして醫者に取り扱はれてゐたさうだが、こちらで見せるとそれよりも寧ろ心臟の方が惡いやうだ。心臟擴大病であると云ふ。けふ、野口氏等と共に山林試驗場の中をぶらついたが、ビワの花も既に散つてゐた。

十一月十五日。雨あり。入江、文學クラブより手紙。前田(晁)氏よりハガキ。高橋(五)、蒲原、川

手氏へハガキ。吉江氏、原氏へハガキ。原(德)氏より手紙。隣りの田中氏を訪ふ。横濱の妹へ弟の病氣通知。

十一月十六日。晴。西本氏へハガキ。鈴木(初)よりハガキ。同じくへハガキ。「フースフーインジャパン」社より社員佐野氏。僕の職業は Poet, Novelist, Critic, Free thinker,and Writer だと告げた。第三號の蜂群を入れ換へ、しきり板を左右に入れ、その餘地へわらをつめて、箱の下にもわらを入れた蓋を置いてやつた。蜜のたまつて、多少ふたの出來たワクは一つしかなかつた。

十一月十七日。晴。高橋(五)氏を訪ふ。弟の病氣の爲め金が入るから、氏の飜譯を手傳はせてくれろとの交渉をした。自分は餘り名を出して飜譯者たるを好まないから――今さら、――これまでそれを避けて來たのだ。有樂座に文藝協會のショー劇 "You never can tell" を見た。これを「二十世紀」と譯し、茶目公式なドーリーやフイリプを近代式な子供と決めてゐる如きは、あたまから薄浮で而も膚淺だ。

十一月十八日。晴。茅原(茂)氏來訪。碁を四番のうち、二度負けた。けふ、洋種と第二號と第三號とに給蜜した。洋種には、既にふたの出來た貯蜜も可なりあつたが、聽いたところに據ると、うちの蜂が近所の八百屋や砂糖屋へ行くらしい。どこから、こんなに來るのだらうと云つてるさうだ。よくよく蜜源がなくなつて來たのであらう。

十一月十九日。雨。社へ「かんかん蟲の印象」（四枚半）、「外人の沙翁劇」（五枚）、「ショーの喜劇」（七枚）、「今月の二小說」（九枚）を持つて行く。志賀氏の在外邦人發展々覽會を見た。姉よりハガキ。

十一月廿日。晴。きのふ、給蜜の結果を調べなかつたので、けふ調べて見た。洋種は殆ど全く吸ひして、ただふちに固まつてこびりついたのを殘してあつた。第一號も、殆ど同じ程度に吸收した。第三號は少し成績が惡かつた。三つの給蜜器に殘つたのを集めて煮返し、それを第二號に與へた。第一號並に第二號からワクを各一枚拔き取つた。それで、第一號は六枚弱、第二號は五枚、第三號は五枚の群だ。洋種は初めから五枚ワクで、兩端の外部が全く明いてる外は、すべて蜜がある。第二號と第三號とには、もツと給蜜の必要があらう。洋種と第二號とに、雨が漏つて困る、如何に油紙をかけて置いても。けふは、暖いので、どの群もよく働いた。が、赤いのと白いのとの花粉を取つて來るのは、十中の二三であつた。晝飯に上司氏へよばれ、簡易洋食といふのを喰べた。有倫堂、吉岡二氏よりハガキ。妹、巖の見舞に來た。小い子供を一人つれて來るので、うるさくて困る。けふは、殊に、うんこをしたまま、それを踏み付けて步いた。

十一月廿一日。曇。蒲原氏よりハガキ。水野氏を訪ふ、留守。五六年振りで、水上氏を訪ふた。澁谷停車場前に大正養蜂場と云ふのがあるを兼て承知してゐたが、けふ、鳥渡訪問して見た。カーニヨラ種を六箱持つてゐて、まだ大して經驗家ではないやうだ。容易な事業と思つてやりかけたのだが、

やつて見ると、なかなか六ケしいので、明日から箱根にある養蜂講習會へ行くつもりだと云つてゐた。

十一月廿二日。雨。一日降つてゐる。池田氏へ、「耽溺」再版の相談、(病人やら何かで金の工面の爲め)、新小說へハガキ。增永氏より書物を返送して來た。邦種三群を二群に合同してしまはうかと迷つてゐるのだが、養蜂上の書物や雜誌などを見ると、さう心配しないでも行くらしい。但し、もツと給蜜する必要はある。某雜誌に、蜂の近づかぬ花はカキツ、ハナシヤウブ、イバラショウビン、牡丹、朝顏、夕顏とあつた。菊もさうだらう。ケシの花には無論行かないのである。今は、近所に、蜂の行く花とてはサザン花ばかりで、茶の花はもうないやうだ。

十一月廿三日。晴。けふは晝から天氣が晴れたので、日本蜂は大分働きに出た。ザラメ砂糖を半斤ばかり煮て、ぢよろに入れ、その口さきを平べツたく叩きつぶしたのを巢門からさし込むやうにして、第三號に喰はせた。第二號並に洋種にも少し分けてやつた。こぼれ出る恐れがあるので、箱を巢門の方で少し高めに持ちあげてから與へた。洋種へ少し分けたのが門外にこぼれて來たので、そこの蜂は外へあふれ出るやうになつて直きに吸ひ取つた。が、その間に邦種のから盜蜂がやつて來た。あすは第二號に與へるつもり。けふ取つて來た花粉は赤のと白みがかつた黃のとだ。高橋(五)氏よりハガキ、シモンズの「表象派運動」の飜譯をやつて吳れとある。これが相談出來れば、多少助かる。上司氏來訪、

田中醫師も加つて、將棋をさした。弟の學校へ手紙。小菅、北川氏へハガキ。

十一月廿四日。晴。今井孃よりハガキ。淸子と共に大久保文學クラブの歡迎會に行く。第二號群に砂糖半斤の給蜜をして置いたが、夜調べて見ると、固まつた分（四分の一ほど）が如露の中に殘つてゐた。

十一月廿五日。晴。第二號群へ昨日の殘りを煮返して與へた。社へ行つたついでに、麴町へまわり、新潮社を訪ひ、それから歸路、高橋氏へ行つた。

十一月廿六日。晴。新潮社へ手紙（出版依賴の件）。中澤氏へハガキ。第二號へ給蜜した。瀨沼夫人來訪、その話に露西亞で見た蜂蜜は牛乳の如く白く、味もリツチハネのやうにあまたるツこくなかつたとのことだ。「誤解せられた半獸主義の眞相」（十三枚、魁へ出す分）を書いた。

十一月廿七日。晴。第二號のきのふ吸ひ殘した分を煮返して洋種へやつた。柏木の養蜂器具屋吉田明堂が、大正養蜂場から聽いたと云つて、やつて來ての話に、同場のカーニオラは各群百圓ほど出したさうだが、正味の群は箱每に長ワク二枚しかない樣子では、越冬が六ケしからうと云つてゐた。それに、イタリヤ種は東京で昨冬すべて失敗したとのこと。けふは、蜂が赤と黃色との花粉を十匹につき二三匹は取つて來た。好まない菊の外は、さざん花しかないと云ふのに、何から取つて來るのか分らない。一昨年から中絕してゐたシモンズの「表象派運動」の飜譯をまたけふからやり初めた。中澤氏

を訪ふ、留守。長谷川(天)氏を訪ひ、外國の實見談を聽いた。中澤氏よりハガキ。社より三十圓。
十一月廿八日。晴。大阪丸善より勘定取り(一圓)。巣門外に洋蜂のころがつて死ぬのがきふに目に立つのは、氣候が寒くなつた爲めでもあらうが、巣門から給蜜した流れにおぼれて、蜜がついたりして冷える爲めもあらう。二十匹ばかりをコップに拾ひ取り、火にあツためてやつたら、二三匹は生き返つて元巣に歸つた。高木氏の養蜂を五反田へ見に行つた。箱を重ねて、上のは空でただ瓶入りの蜜をさかさまにして下の箱へ與へる爲めの餘地にしてある。巣門は一二匹が揃つて出られるだけ位のあきにして、ワクの上に給蜜瓶の這入るだけの穴を中央に殘したワラ布團をのせてある。同所では、十月よりも十一月の方が花粉を澤山――殆どすべての働蜂が――取つて來たさうだ。
十一月廿九日。晴。第一號の外はすべて日當りが惡いところに置かれてあるので、椽がはの近くへ置き換へてやる爲め、けふから少しづつ箱を移し始めた。北川氏並に倉辻氏よりハガキ。
十一月三十日。晴。昨日の倉辻並に上總兩氏のハガキに從ひ、上京中の大阪日日社長吉弘氏を吾妻屋に訪れたら、來てゐないと云ふ。で、日日支局へ行くと、けふは來ないが、今夜歸阪とのこと。會つて一言譴責もしたいが、どうでもいい。自由劇場主催の劇場展覽會を讀賣社上に見てから、社へ行く。留守に清水氏來訪。けふ、蜂がまごついたのか、第三號の入り口前に兩手に一つかみほど倒れてゐたさうだ。下女がそれを火の上であツためて半分は活かせたさうだが、僕が歸つて見た時、洋種の

巣門外に日本蜂がまた片手へ一つかみほど倒れてゐた。洋種と格闘したのだらう、洋種も亦少しはまじつてゐた、尻をさし合つて。飜譯十枚、もうあけ方のヨジになつたから、ヨシます。

十二月一日。晴。石田氏より手紙。原氏よりハガキ。病人は少しいいやうな口振りを云ひ出した。蜂は、けふは、箱の新位置に慣れたらしい。飜譯九枚。太陽、中央公論來たる。

十二月二日。晴。石田氏、原氏より書信。夜、平塚尽竹雨女史が清子を訪ねて來たので、仕事を中止して上司氏の許へ遊びに行く。ふたりで、長谷川天溪氏の歡迎の意を兼てカフエプランタンで茶話會を催す通知狀を十五六名に出した。飜譯八枚。博文館より稿料十四圓。

十二月三日。晴。原、諏訪二氏よりハガキ。「答辯」(本間氏に對する)四枚を書いて、新潮に送つた。北村氏を訪ふ、また劇團をやり出し、都合によると土曜劇場をも引き受けるさうで、僕も世話人として加勢してもいいことを語つた。

十二月四日。晴。博文館に前田氏を訪ふ。池田氏を訪へば若宮氏もゐた。松居松葉氏が今回の僕の劇評に就て云ひたいことがあると云つてるとかで、氏を呼んで皆で會食することになつた。松葉氏とは初めての會見だ。結局新舊意見の衝突に過ぎなかつた。それに僕がショーの作の原文が多分 Engage (乃ち、婚約)とあるのだらうと云つたのを、原文には Marriage とあると反駁して俳優にも結婚することになる人云々と云はせたと云つたが、歸つて譯文を調べて見ると、矢張り「結婚した人」とあり且俳

優も確かにさう云つたことが分つた。たとへ Marriage と云ふ語が這入つてゐても、原文がそれをすることになる云々とあるならば、Engage と同じ意味で、「結婚した人」では正當でないではないか？けふ、洋種の蜂箱の中を調べたら、産卵はないが、左右の兩端のワクの外側を除いては、すべての面に過半蓋の出來た貯蜜が澤山あつて、蜂の群集する面積の三四倍を占めてゐる。が、巢があれでも小さ過ぎる爲めか、群集の中心が巢門の方へ寄つてゐる、換氣の工合がうまく行き渡らないのであらう。そして最も奥にあたる巢端に少しかびが生へてゐる。ついでに邦種第三號をもあけて見たが、これは洋種のには及ばないが貯蜜も可なりあつて、少しは産卵もうじもある。きのふ、北村氏からの歸り道で、ついて來た小犬をつれて歸つたが、今夜は小僧のそばにゐないで、どこか裏の方で鳥渡聲がしたばかりだ。

十二月五日。晴。新らしい犬はどこへ行つたかゐない。松葉氏へきのふの反覆をなじるハガキを出した。池田、加藤、高橋(久)、諏訪氏へハガキ。原氏よりハガキ。正宗(得)氏夫婦、清水氏來訪。正宗氏は「魁」へ出す僕の原稿の性質に關する傳言を持つて來てくれた。若宮氏から云ふのを氣の毒として、野口氏に賴み、野口氏は蒲原氏に賴み、蒲原氏がまた正宗氏に賴んだのだ。社で餘り困つてるのなら身づから處決しなければ氣の毒だと思ひ、池田氏を訪ふたところ、事が傳言から傳言に大きくなつて僕の耳に這入つたに過ぎなかつた。つまり、若宮氏が僕の爲めに心配して餘り六ケしい原稿を

書くなと注意することであつた。

十二月六日。晴。天溪氏の爲めに催した茶話會に行く、カフエプランタンに集つた人數は十一名であつた。『來るべき大阪文藝の性質――秋江氏に送る手紙』(十七枚半)を書き終る。石川氏へハガキ。松居氏より返事があつたが、不正直な辯解と無了解のあげ足取りとは駄目だと再び返事を書いた。演藝クラブよりハガキ、同じく返事。小山内氏送別會の通知。

十二月七日。夕方一雨。正宗氏より手紙(「日日」への寄稿依賴の傳言)。原氏よりハガキ。昨日の令稿を文章世界に送つた。蜂箱の位置を全く定めてしまつたが、洋種と第一號と第三號とは西の椽がはさきで南向き、第二號は南椽の戸ぶくろ前で南向き。第二號が朝早くから午後三時頃まで日があたりづめだが、他のは二時までで日はその上を越す。

十二月八日。風。『新らしい婦人間の運動』(十八枚)を書き終る(「日日」への寄稿。)加藤氏よりハガキ。高橋(五)氏來訪。淸子、靑鞜社の小林歌津子孃をつれて來た。また松居氏より手紙、それに返事。

十二月九日。晴。朝、十時頃寢床の中で門外に人の騷ぐ聲を聽いた。どうやら犬がいじめられてゐるやうなので、どてらで飛び起きると、臺所の方からブルドクが魚屋の犬をかみ殺してゐると下女がわさわさしてゐる報告に接した。うちの小僧は下女につれられてゐたが、出て見るといかにも大騷ぎだ。兼て危險だと思つてゐた坂下池上氏のブルが二匹で魚屋の犬(これも小僧と云ふ)を夢中になつて

かみついてゐる。それが隣家の米屋のうらへ行つたので、ついて行つて見ると、普通犬は息もほうほうの體で、ブルを殺せ殺せと叫ぶものはあつても、誰れも手を出すものがない。僕はそばにあつた眞木割りを以つて一匹のブルの顔を投ぐり、また一匹の尻を擲つた。が、考へて見ると、いつ飛び付いて來るかも知れないので、そのまま引ツ込んでしまつた。食事をすませてから、上司氏を訪ひ、村の人々と申し合はせて抗議を申し込むことにした。同時に兎に角目黑園の主人(家の差配)をして駐在所へ注意せしめた。昨日の原稿を以つて日日社を訪ひ、後藤又男氏に會つた。そして二月の小說を引き受けた。その上、都合によりては、毎號何か書くことを約束するかも知れない。池田氏と社とに立ち寄つて、歸宅。けふの記念日の爲め妹が呼ばれて來てゐた。上司氏も來た。駐在所の巡査を訪ふて、かけ合ひの樣子を聽くと、池上の主人を呼び出して充分注意させ、以後犬を出させないやうに固くいましめると引き受けたので、僕等の申し合せは一先中止して置くつもり。池田氏へハガキ、池上氏へ注意の手紙。高橋(久)氏よりハガキ。扶桑新聞よりハガキ。

十二月十日。晴。高橋(久)氏へハガキ。扶桑新聞へ返事。日本新聞社の赤岩氏來訪。原夫婦來訪、渠等と僕夫婦と東京に出で橋善の天ぷらを喰ひ、それから永夢軒に行く。原氏より備前燒の龜の香爐を貰つたが、負ぶさつた方の龜が取れてゐた。

十二月十一日。晴。北村夫婦來訪。燒き附ぎ屋をして昨日の龜をくツつけさせた。午後一時頃洋種

が少し出遊したが、第一號と第三號とは全く出ない。第二號は、日あたりが最もいいせいか、二時過ぎまで澤山出入りしたが、何も取つて來るのではないやうだ。諏訪氏より返事があつた。ロシヤの蜂蜜が乳白色であつたと云ふのは素人のそら目だらう。味は寒國のは暖國のよりも惡い筈。巣脾端のかびはそのままにして置いてもよからうし、また一應乾燥させて後返してやれば一層いい。ただ保温上の不行屆から水蒸氣の還元の爲めに、生へる筈でないところに生へたかびは餘ほど注意しなければならない。と云ふやうなことだ。洋種はこの樣子ではうまく越年するだらう。飜譯十六枚。

十二月十二日。晴。堅炭を賣りに來たので、十一俵をそつくり買ひ、椽の下へ入れさせた。小舍の寢床の周圍がそれが爲めに風當りをさけ、あつたかくなつた。蜂はどの群も隨分出遊した。そして多少はどす赤や青みがかつた花粉を取つて來た。けふ、目黑園の主人が買つて來た大きなビワの木には澤山花が咲いてゐた。飜譯十四枚。

十二月十三日。晴。中村(武)氏より手紙。清水氏、田代氏來訪。洋種は、けふ、午後一時前に、澤山で空氣浴をやつた。今井郁太郎と云ふ人、水野氏の紹介を以つて來訪、「新愛知」の新年號に短篇十七八枚を依賴したので、舊作を一篇渡すことにした。飜譯六枚。

十二月十四日。晴。蜂は相變らず出る。水野氏を訪ふ。飜譯十一枚。

十二月十五日。雨。例の如く、就褥朝の三時半。十一時、起床。舊作「店頭」を訂正して新愛知へ與へ

ることにした。

十二月十六日。晴。飜譯八枚。午前二時半就褥。十時起床。後藤氏より手紙。けふ、蜂を調べて見た。まだ花粉(ビワのだらう)を取つて來るので、産卵があるかどうかを調べて見たのだ。どれにもなかつた。邦種第二號よりは第三號の方がまだしも强群のやうだ。洋種はどうも心細い、産卵を中止してゐて、毎日のやうに少しづつ死んで行けば、この冬中に絶えはしないか?貯蜜は多いが、各ワクの集りが小い。池田氏を訪ふ。留守。

十二月十七日。晴。飜譯七枚。就褥午前二時、起床十時。博文館。池田氏(日本へ)を訪ふ。加藤氏よりハガキ。

十二月十八日。雨。飜譯十五枚。就褥午前三時。起床十二時。一昨日警察署へ飼犬届を出したが、要點は名「小僧」、明治四十五年四月生。大正元年十月一日大阪より伴ひ來たる洋犬、黑みがかつた茶色。爪すべて黑し、鼻筋に白き毛少々あり、胸にも白き毛あり、尾は長く天向きにして毛は房々す、胸から腹並に尾の裏側にかけて白き毛あり、耳垂る。身長三尺餘、價五十圓也。以上、大正元年十二月十六日届。加藤(朝)、後藤。中村(盛)。小林(一)氏へハガキ。上司氏と將棋、三番勝、一番負。

十二月十九日。曇。飜譯五枚。就褥午前二時。起床十時半。畜犬届訂正を命ぜられ、本日書きかへて出す。飜譯四枚。

十二月廿日。曇。「天主教の秘密生活」（廿枚）を書く。就褥午前二時半、起床十二時。森（盛）氏より手紙。前田（晁）氏よりハガキ、それに返事。きのふ、下女が顏を赤くして「旦那さん」と云ふ。何かと思ふと、下帶を犬が隣りの小犬と一緒に喰はへて引き破つてゐると云ふのであつた。が、僕はしツかりつけてゐるので、多分どこか外の主人のふんどしであつたのだらう。

十二月二十一日。曇。夕方より雨。飜譯十六枚。就褥二時半、起床十二時。新潮社から電報。蜂は十八日の雨から以來、曇り勝ちで寒いから、一向に出なくなつた。社の井口氏來訪。新潮社よりハガキ。上司氏から呼びに來たので、行つて見ると、岡村氏並に渡邊（守一）氏が來てゐた。淸子、けふ三越から人形を買つて來て大悅びだ。三年來望んでゐた一つの望みが遂せられたからであらう。これで四五日來の含み合ひが直つたのであらうか？

十二月二十二日。曇。飜譯十六枚。就褥午前五時、起床午後一時。社並に今非（郁）氏へ行く。

十二月二十三日。曇。飜譯十枚。就褥午前五時半、起床午後一時半。新潮社へ行き、「正美先生」の稿料廿三圓を受取る。夕刊を見ると、けさは東京市中が非常な霧で、二間しかさきが見えなかつたさうだ。夕刊で思ひ出したが、この間中は政變のことで外出する度每に夕刊をいそいで買つたが、この頃ではもうさきが分つてしまつた。兼ての望みなる政界へ關係するには、この政變前、もしくは政變中になら都合がよく、また多少直ぐに注意を引く運動も出來ただらうに、情けないことには、まだ今回

歸京後仕事が定らないので心に落ち付きがない。それに、實は、政友會と國民黨との感情的、事情的分立がある間は、鮮明な旗幟を立てて活動することが出來まいから、新參者として而も有力なことをしようとするものには、不快であるに決つてる。昨今、兩黨の聯合運動は時期に適してゐるが、とても分明に惡分子を陶汰して純粹の民黨を建設するには至るまい。仲小路氏は、とうとう多年の望みを遂げて、大臣になつた。渠を直接には知らないが、僕の「巡査日記」に出る高等官がそれだし、その巡査や書生は渠の家にゐたこともあるもの等で、そのうちの巡査になつたものと僕とは、國にゐた時、今の仲小路夫人を――その時はかの女がまだ同氏の下女に行く前であつた――取り合ひしたこともある。同氏の外に、内閣書記官長になつた江木氏も僕は知つてれば、地方局長になつた湯淺氏も知つてる。兎に角、新時代に近い人々が政權を握れるやうになつたのは、如何に官僚派の内閣が不滿足でも、一つの進步である。

十二月二十四日。晴。飜譯九枚。就褥午前四時、起床――正午頃。水野氏の來訪によつて呼び起された。北村氏來訪、大阪帝國座の返り舞臺開きにエルガを持つて行く相談が出來たら、一緒について行つてくれろとのこと。土曜劇場に行き、「父親」と「傳聞」とを見た。今井(郁)氏より稿料七圓。

十二月二十五日。晴。「屁ツぴり腰の西洋人」(十一枚)を書いた。就褥午前三時十分。起床午後一時。高橋(五)氏を訪ふ。蒲原氏へハガキ、青木氏の「發作」の畫稿が發見せられたから、それの知らせに。

十二月二十六日。晴。飜譯五枚。就褥午前二時、起床正午。瀧田・麻田・後藤三氏へハガキ。正午過ぎに洋種が數匹出遊した。

十二月二十七日。晴。飜譯十七枚。ムブメントの本部譯了。就褥午前三時半、起床十時。社のサラリ三十圓を持つて來て吳れた。社へ行く。

十二月二十八日。夜、雨と雪。飜譯五枚。就褥午前二時半、起床十一時。日高氏よりハガキ。博文館文章世界より稿料十一圓。夜、雪が降るので、蜂の巢門につみふさがらないやうに、蓋の上から新聞紙を當ててやつた。上司氏のところで、雉の肉を喰ふ。

十二月二十九日。雪。飜譯十二枚。就褥午前一時半、起床十一時。ゆふべからの雪は積もつて四五寸になつてゐた。日本蜂が一匹飛び出して椽がはにころがつた。小僧は生れて初めての雪で、これが何だか分らないのだらう、初めは喰つて見たりしてゐたが、寒いのでいじけてばかりゐる。午後二時頃もなほどんどん降つてゐる。夜、隣家の醫者田中氏を訪ふ。

十二月三十日。晴。飜譯七枚。午前一時、雪はやんでゐたが、寒く曇つてる。就褥午前一時十分、起床十一時。後藤氏より稿料十圓。高橋(五)氏を訪ふ、それから社へ行く。けふ、蜂は出遊した。飜譯五枚。これで「ムヴメント」の本文と解題とを全部譯了したわけだ。二百卅一枚で終つたが、途中に一度雜誌に出たのをそのまま訂正して行つたのがあるので、都合二百七八十枚にはなつたわけだ。丁

度夜の十二時だ。就褥、一時。

十二月三十一日。晴。起床午前十時。けふも蜂は出た。蒲原氏より手紙。夜、淸子と共に高橋(五)氏を訪ふ、僕の飜譯の稿料少しも取れなかつたさうだ。それから銀座をぶらつき、歸宅午前一時。

大正二年

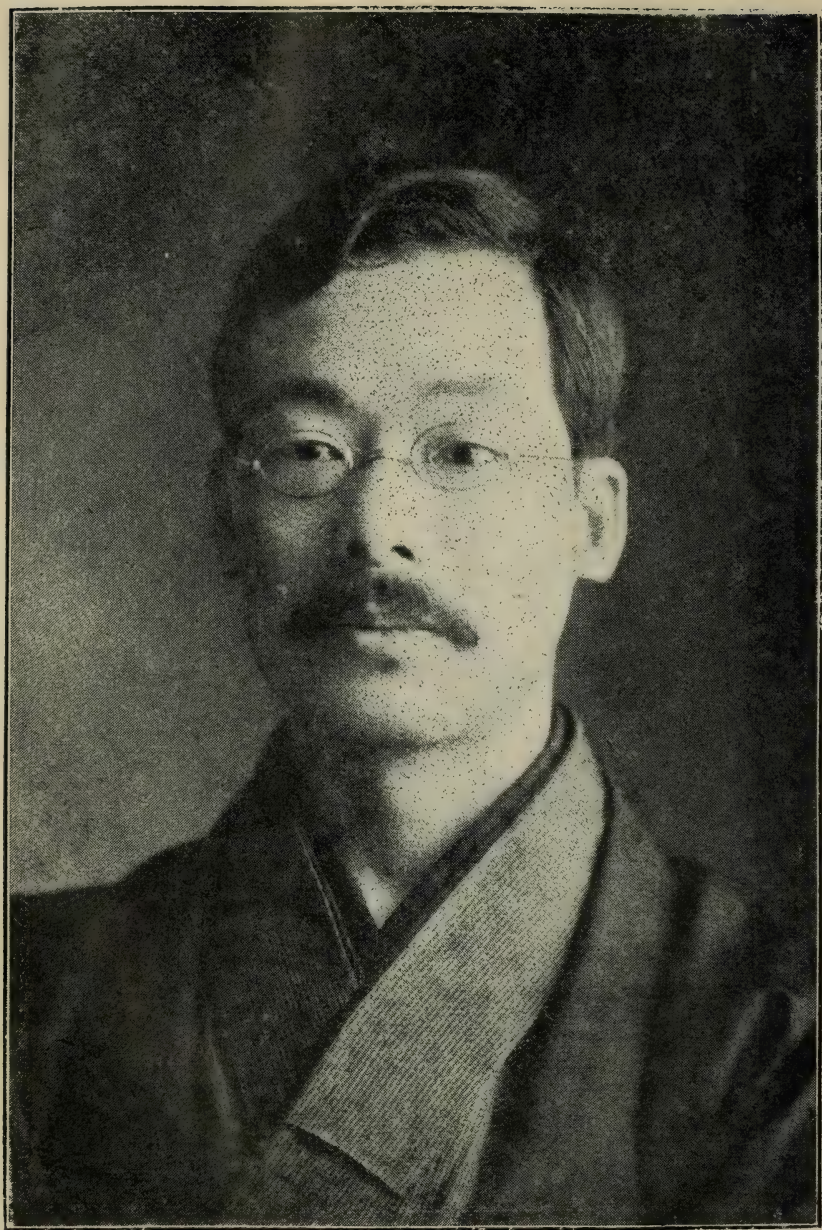
一月一日。晴。起床午前十時。水野、松下、若宮、森、前田(夕)、平出、瀨戸、川手、川路、奧村島川、諏訪、藤井、文藝協會、宮田氏より年始狀。上司氏へ行き、來訪の大杉、荒畑氏等と夕方まで話した。蜂は洋種も澤山出たばかりでなく、花粉を取つて來るのもあつた。

一月二日。晴。飜書の序文十五枚。就褥午前二時、起床十一時。蜂は出なかつた。

一月三日。晴。起床十一時。蜂はいづれも出た。洋種のは、花粉も取つて來たのがある。年始狀の來たのは、岡田、矢島、井口、麻田、生田(弘)、水島、宮飼、須藤、北山。

一月四日。晴。年始狀の來たのは、水谷、增永(尙)、淺田。家を探しに出た。

一月五日。晴。靑木氏の追回を三たび訂正し、十八枚になつた。就褥午前二時十五分、起床十一時、美好野、靑木、武藤、古谷、振根、十合より年始狀。妹夫婦來訪。越後へ行つてゐた繼母が歸つて來たので、妹と一緖に來たが、近々うちへ入れることにした。

（大正二年撮影）

一月六日。晴。午後一時起床。年始狀、高島、神崎、廣瀨、荒木、正宗(得)、上山、小林(一)。文章學會より手紙。博文館へ原稿を持つて行き、歸途、社に立ちよる。たまたま淸水氏に會つたら、雜誌を出すから賴むと云つてゐた。氷點以下十三度に下つた寒さは、珍らしいさうだ。

一月七日。晴。「西洋人靴の跡」(十八枚)を書いた。就褥午前四時、起床九時。文章學會へ返事。秋江氏へ返事。東京へ出る。

一月八日。晴。就褥午前一時、起床十一時。新聞記者を材料の小說を書き初めた。齋藤、田口氏より年始狀。

一月九日。曇。起床、午前十一時。原氏來訪。文章世界で「靑木氏の一面」を返して來たので、早稻田文學に送つた。「新聞記者」(二十五枚)を書き終る。

一月十日。晴。午前二時十五分就褥、起床十一時。小說を書き足して二十八枚となる。けふ、初めて、人家の北側の家根に雪が解けるのを見た。桝本、松、よりハガキ。

一月十一日。晴。「高橋五郞氏」(十枚)を書いた。就褥午前二時、起床十一時。文章世界へ小說原稿。讀書之友の稿料六圓を取りに、讀賣に行く。中央公論より手紙、返事。社へよる。「冷酷なる愛情觀と婦人問題」(十枚)を書いた。

一月十二日。晴。就褥午前零時十五分、起床九時。平塚女史へ原稿。籾山、桝本、新愛知支局へ八

ガキ。犬の頸輪を失つたので、いいのをつけてやつた。蜂群の第三號を調べて見たら、貯蜜を半分は喰つてしまつてゐる。けふは、どの群も出遊した。淸子と共に千住へ行き、歸りに荒木氏を訪ふ。留守に正宗(白)氏來訪。就褥十二時半。

一月十三日。晴。起床、午前十時。高橋氏よりハガキ。高橋氏を訪ふ。「日本語ばかりが何で不完全だ」(阿部次郎氏へ)十枚を書いた。

一月十四日。晴。午前四時就褥。午前十時起床。

一月十五日。晴。博文館へ行き、稿料十九圓六十錢を受け取つた。同館で鈴木三重吉氏に初めて會つた。新潮社へ行き、それから今井孃を訪ふ。加藤(朝)氏よりハガキ、その返事。中村(武)氏へハガキ、德田(江)氏より原稿「博文館」が來たので、「魁」へ送る。

一月十六日。晴。起床九時。

一月十七日。雨。就褥午前零時十五分、起床午前十時。ゆふべからの發熱はけさ少し本物になつて來た。「ぼんち」の訂正を終つた。(六十枚になつた)。中村(武)氏よりハガキ。「平家物語に就きての研究」(前篇)を通讀し、曾て僕が文章世界に出した平家論のうちの、著者に關する部分に訂正を加へた。氣分が惡いから十一時に床に這入つた。

一月十八日。晴。起床午前十一時。春陽堂へ原稿。北村氏へ、「魔の夢」の三田文學掲載を送る。け

ふちよツと洋種が出遊した。夜、雪がふつてるのに氣が付き、蜂の箱の巣門にすべて新聞紙をかけてやつたが、僕は考へた――これは素人のやり方だらう。と云ふのは、巣門中は蜂の熱であツたかいので、巣門外の雪はすべて解けてゐるからである。

一月十九日。晴。風邪で引ッ込んでゐた。

一月廿日。晴。昨日清子が女優にならうと云ふ決心をしたので、けふ、北村氏を訪ひ、その方法を相談して見た。原氏を訪ひ、「ぼんち」中の大阪語を讀んで行けないところを直した。

一月二十一日。晴。起床午前十時。清子をして原稿を中央公論社へとどけさせた。洋種は、けふが大寒の入りなるに拘らずあつたかいので、頻りに出た。德田(江)、高橋(五)氏よりハガキ。高橋氏へハガキ。社へハガキ。高橋縫子氏よりハガキ。

一月二十二日。雨(午前十二時まで)。高橋(久)氏より手紙。それに對する返事(八幡町のこと)。高倉氏へ出版物の交渉。坪内氏へ手紙(清子を文藝協會の學校へ通はせられるものかの問合せ)

一月二十三日。晴。高橋(久)氏へ手紙(昨日の返書を)。薄田氏へハガキ。風邪を直しに、森の宮の鑛泉へ行つて、一泊。

一月二十四日。晴。夕方、歸宅。高橋(五)、高倉、德田(江)氏よりハガキ。

一月二十五日。晴。德田(江)氏よりハガキ。坪内氏より返事。川手氏を訪ひ、それから訴訟のまだ

そのまゝに進捗しないことで平出氏と會見す。

一月二十六日。晴。

一月二十七日。晴。平出氏より手紙、同じ事件で岩田氏の意見を問ひに行く。川手氏を訪ふ。德田氏よりハガキ、同じく返事。長谷川(勝)氏へハガキ。社よりハガキ。けふ、邦種第一號と第三號とが空氣浴をしたさうだ。洋種も出遊した。

一月二十八日。晴。「思想界の維新を自覺せよ」(十五枚)を書いた。午前四時二十分就褥。地方裁判所の檢事を訪ふ。社並に池田氏を訪ふ。

一月廿九日。風。生田(葵)氏よりハガキ。中村(武)氏よりハガキ。中村(武)氏へハガキ。高橋(五)氏來訪。蜂、出遊。

一月三十日。晴。僞版の件に付き、僞版者の武田、媒介者阿野源とを訪ひ、川手に至り、版元西村氏を電話でかけ合へば、明日會見したしとのこと。

一月三十一日。晴。蜂、いづれも出遊す。高本養蜂場の高本孃來訪。高橋(五)氏よりハガキ。高橋(久)氏より手紙。西村氏と會見(川手氏宅にて)

二月一日。晴。高橋(久)氏へ返事。

二月二日――五日。反省社へ行つたついでに、「人生と表現」社へ立ち寄り、三井氏に會ふ(四五年前

二三度訪問してくれたが、いつも留守であつたのを思ひ出して)。長田(幹)、北村、川手氏よりハガキ。反省社より手紙。この頃、氣候があつたかく、梅の花が二三輪づつ咲き初めたので、蜂が働いてるやうだ。ぽつぽつ、花粉を運んで來るが、その色は白に青みを帶びてゐて、まさに咲かんとする梅のつぼみの色と同じだ。れんげうの花が咲いてゐたのを見た。反省社より稿料五十五圓。

二月六日。雨。森(盛)氏を訪ふ。高橋(久)氏より手紙、同じく返事。近代思想社よりハガキ、返事。

二月七日。晴。蜂、第二號を除いては、すべて出遊した。高橋(五)氏へハガキ。木村(鷹)氏を訪ふ、留守。正宗(得)氏を訪ひ、青木氏の畫「運命」を持ち歸る(僕の所持物であるから)。中央公論三月號に載る「ぼんち」の校正をした。

二月八日。晴。

二月九日。晴。蒲田へ清子と共に梅見に行つたが、まだ咲いてゐなかつた。近代思想社の招待を受け、鴻の巣に行く。客は內田魯庵氏と僕とであつた。席で、土岐、和氣二氏に初めて會つた。

二月十日。晴。「犬の話」(二十四枚)を書き終へた。夕方、清子有樂座の稽古から歸り來たり、燒き打ちが初まつたと報告するので、北村氏の宅まで出て行つて、電話で所々の形勢を聽いたりした。北村氏は今回のこの事件に感激して、藝術界でもこの種の運動をやるべしだと云つてゐた。僕は無論そ

の考へで初めからやつてゐるのである。

二月十一日。晴。內閣總辭職（桂第三次の）。高橋（久）氏より手紙、同じく返事。けさ、寒暖計四十二度。この二三日は蜂出遊せず。

二月十二日。晴。川手、池田氏を訪ふ。風月堂で池田、後藤六彌、伊庭三氏に會ひ、歸途伊庭氏と上山氏を訪ふ。

二月十三日。晴。有樂座での稽古を見に行き、淸子と共に歸りに銀座をぶらつく。

二月十四日。晴。高橋（久）氏よりハガキ。

二月十五日。晴。青年會館に於て、靑鞜社の演說會に臨み、一席の演說を爲した。大阪每日よりハガキ。日高猪兵衞氏より同藤兵衞氏の死去報告。

二月十六日。晴。高橋（五）氏よりハガキ。日高、原、北村氏を訪ふ。

二月十七日。晴。木村（鷹）氏よりハガキ。淸子と共に北村氏を訪ふ（土曜劇場はぶちこわれたらしく、別に方面をかへて約束が成立するらしい）。

二月十八日。夜に入つて雨あり。この一二日來、梅の花大分に開いたので、蜂も行くらしい（洋種と第三號とが出た）。日高藤兵衞氏の葬式に行つた歸りに、郁子氏、歌子氏、福廻氏、田山氏を訪ふ。

二月十九日。晴。けふ、すべての蜂群が出遊した。結婚届のことで芝區役所へ行つた。川手、長谷

川(勝)・高橋(五)氏を訪ふ。西村氏、僞版問題の件で來り、詫び狀と三十圓とを留守に置いて行つたが、これでは承知出來ない。弟、快癒、八王子に行つた。

二月廿日。晴。昨夜の大火の爲め、神田の方面へ見舞ひに出た。郁子氏、平出氏、忠誠堂等は無事だが、駒木氏はやられたらしいが、分らなかつた。

二月廿一日。夜に入つて雨。西村東雲堂の代理來たる。田中氏を訪ふ。山本內閣成る。

二月廿二日。夜に入つて大雨。正午前後に蜂群すべて出遊。寒暖計六十三度であつた。東雲堂より返事あり、示談を破つて來た。角田氏より手紙。巖より手紙。長谷川(勝)より繼母が怪我をしたと云ふ電報が來たので、行つて見ると、自動車に引かれたのであつた。相談の上、病院に入れることにした。近處に猫柳が咲いてゐる。

二月廿三日。晴。高橋(五)氏、留守に來たる。伊藤野枝氏、青鞜社の演說料十圓を持參した。寒暖計五十六度。

二月廿四日。晴。池田、春陽堂、日高、德田、高安氏を訪ふ。

二月廿五日。正午より雪。西村(辰)氏より手紙。一幕物「停電」(四十一枚)を書き終る。

二月廿六日。朝から晴。正前一時半、蜂の箱を見てやつたが、地上一寸ばかり積んだ雪が箱の巣門には消えてゐるので、それをふさぐ恐れはないと思つたが、念の爲め洋種のだけに新聞紙のおひをし

てやつた。雪はこの日中に消えた。

二月廿七日。

二月廿八日。風。中村氏より十圓八十錢。西本氏來訪。

三月一日。風。中村氏より新潮の原稿依頼、巖よりハガキ。巖へふとんと手紙。櫻井(茂)氏へ手紙。

三月二日。晴。帝國公論より原稿依頼。病人見舞の歸りに高橋(五)氏を訪ひ、吉田潔氏に會つた。

三月三日。晴。水野氏來訪。病人見舞。

三月四日。晴。「表象派の提供」(二十四枚)を書き終つた。箕有會社の婦人博覽會より手紙、同じく返事。

三月五日。晴。繼母の被害に關する示談が整ひ、養生實費の外に示談金百五十圓を受取つた。

三月六日。晴。蜂が出動して、足に黄に青みがかつた花粉を取つて來るのを見た。多分梅の花のだらう。清子と共に丸善に行き、外國雜誌リビングエヂを注文し、エレンケイの「愛と結婚」を購ひ、それから平塚明子氏を訪ふ。歸りに武林氏をも尋ねたら、丁度母堂の死去せられたところであつた。

三月七日。雪少し降る、風ひどく、寒い。深川と横濱とに大火のあつた號外。阿部氏の答へに答へる論(四枚)を書いた。「表象派の提供」の終りへ附する。長谷川(天)氏轉居の通知。

三月八日。曇。新潮へ原稿。川手氏へハガキ。西村氏へ手紙。中村(武)氏よりハガキ。黒崎氏を久

し振りで尋ねて見た。

三月九日。晴。上司氏方で澁谷氏と僕との會食があつた。「婦人を了解せよ」上(二十一枚)を書き終る。

三月十日。晴。帝國公論へ原稿を持つて行き、歸りに中野へ行き、蒲原、野口・瀨沼三氏を訪ふ。

三月十一日。晴。木村(鷹)氏來訪。西村、後藤二氏よりハガキ。西村、後藤・日高三氏へハガキ。

三月十二日。晴。家をさがしながら、澁谷あたりをぶらつき、歸路に水野氏を訪ふ。

三月十三日。晴。けふ、東京へ出ようとして目黑ステーションのプラトフオムまで行つたが、氣分が進まないので歸つた。そして蜂の箱を明けて見た。越冬以來初めての調査であつた。先づ洋種を調べて見たら、五枚完全枠の各兩面を都合十面あるうち、六面に蜂が附着してゐて、四面にまだ貯蜜が殘つてゐた。奬勵給蜜の必要もないと思つたので、貯蜜の幾分かの蓋を切つてやつた。產卵はまだ初めてゐない。次ぎに、第一號の邦種を調べた。七枚すべて巢脾半分の枠のうち、三枚には旣に產卵並に幼蟲が出來てゐる。そして二枚は殆ど全く蜂がとまつてゐないし、全體のうちの二面だけにまだ貯蜜が殘つてゐる。第二號と第三號とは饑餓凍死であつた。去七日の雪の日に失敗したのであらうか？兎に角、數日前・第三號の巢門外で蜂が四五十匹も倒れてゐたのを見た時、注意してやればよかつたのだらう。働きはし初めたが、さて貯蜜が切れてゐたのだらうから、早く給蜜してやる必要があつた

のだ。死蜂の跡かたづけをしてから、胸のあたりにぴくぴくと痙攣をするのが分つて、机に向つても落ちつけない。煙草を中止して、玉子を二つ喰つた。上司氏を訪ねたら、大杉、荒畑二氏が來て居た。水野氏もやつて來た。左の如き日記（六枚半）を「蜂と人」として水野氏の雜誌からの依賴に報いた。

蜂と人

三月十三日。

おい、水野君、君の『木と草』を讀んだよ。そしてあの中に現はさうとした感想――寧ろ哲理若しくは具體思想だと云ふデマンドを君は持つてるだらうが――をあの程度に於ては充分に受け取れた。が、ああ云ふ沈思默考の行き方には、既に既に、メタリンクの行き方に最上の實例がある通り見え透いた型、乃ち、淺薄な形式がつき纏つてゐるに決つたものである。

一面には、新らしく感覺から出發して、草木、呼吸、繁茂、沈默と進む。他の一面では、感覺界と無理で突飛な關係を持たせられた神秘につづいて、運命、靈魂、沈默と來る。そしてこの兩方面の到着點なる沈默は、內容に於て不同一であつても、呼び名さへ同じければ同一だと見て、それ以上の反省が入らないとした――さう云ふのが、君の形式、否、あの君の感想文中に於て君が有意的にか、無意的にか、どツちかに眞似したメタリンク常套の形式である。そしてさう云ふ形式の沈思

默考は、單に修辭的な默考に落ちて、そのデマンドする哲理若しくは具體思想を表現することにはならない。

デマンド、乃ち、要求するところが如何に立派でも、實現するところが單に修辭的であつたら――そして君のが大抵いつもさうでないとは云へないのである。君はよく無雜作に人の生活を粗野とか、雜駁とか云つたことがあるが、それが多くは、君の落ち入つてる缺點を知らないで、修辭的に沈思默考することを有雅、不雜だとするところから來てゐた。けれども、君のこんな先入見に反對する僕等の沈思默考の結果、乃ち、生活は、如何に粗雜に見えても、修辭的程度にとどまつてはゐないのである。そしてただ修辭的にあらゆる雅致を盡したのが最も精練せられた生活だ、などとは思はれないのである。

感覺が思想であり、思想が感覺として活きる表現は、メタリンクの傾く二元觀では出來ない。君の修辭的生活でも、無論、出來まい。然し、君、話は別として、君が草木の生活に關して感じた若しくは感じようとして失敗したことを。僕はこの一二年間蜂に就いて感じて來たのである。今、こに君の形式を借用して『蜂と人』とでも云ふ小品を作るよりも、いツそ、作らないでしまひ込んで置く方がいいと思ふが、きのふも君の家で蜂の話をして來たついでもあるから、あれに加へる報告を一つして置くよ。

外でもないが、越冬がうまく出來たと思つてゐた蜂群を、けふ調べて見たら、そのうちの二群が饑餓凍死をやつてゐたことである。去年の九月、十月頃から人間と同樣、越冬の準備にかかり、どの群にも春までの消費蜜も貯へさせ、凍みの通らないやうに箱を二重にしてやつてあつた。

今年になつて初めての內部調査をする氣候になつたわけで、然し、少し調査の時期が後れたかとも思へたが――第一に明けた箱には、貯蜜がまだ隨分殘つてゐて、一群はおほやうに巢脾の面上に動いてゐた。そして、その間を步きながら、母蜂は、もう、巢の整理に取りかかつてゐた。第二の箱には、もう、產卵も澤山あつて、幼蟲の狀態にまで進んでゐるのも一枠每に五つや六つどころではない。働蜂の働きも活潑になつて、足に梅の花粉を圓めて來て、幼蟲に與へてゐるのもあつた。

ところが、三回目に明けた箱の蓋の裏が冷たかつた。又巢の上に置いた新聞紙が濕けたやうに冷たかつた。そして僕は直ぐ失敗を覺悟した。と云ふのは、數日前に、この箱の巢門外に四五十匹も倒れたことを思ひ出したからである。あの前に新らしい給蜜をしてやればよかつたので――去七日の降雪と寒風とに最後の貯蜜を喰ひ盡したのだらう。折角無事に越冬して活動し初めたと思つたのに、あツたかいこの二三日を一匹も出遊さへしなかつたのは、群がすべて餓ゑて凍つた爲めであつた。

巢の整理に取りかかつてゐた證據には、舊い巢脾をかみ碎いた粉が、底板の上に枠數だけの山を成してゐた。が、その上に蜂の死骸が何千何百となく、たとへば、奪取し難かつた旅順の山々に

戰死したわが同胞を想像せしめるやうに、累々とつみ重なつてゐた。かうなつては、四回目に明けたのも、僕の胸に痛いほど思ひ當つて來た通り、矢ツ張り、駄目であつた。そして僕は失敗した看護人の後悔、さなくば、まだ仕慣れない墓掘りの寂し味をおぼえた。

この二箱內には小い物の死と濕り氣としかなかつた。そして僕にはまた看護人の後悔若しくは墓掘りの寂し味しかなかつた。各枠の巢脾にとツ付いたまま動かなくなつてるものの中には、二匹や三匹のあツためれば活き返りさうなのもあつたが、どうせ全滅だから、僕は絕望的にすべてを、脾のおもてから、惜しげもなく、羽掃木でばらばらと掃き落した。

どの枠、どの脾、どの巢房にも、貯蜜は影もにほひも皆無なほど喰ひ盡され、吸ひ盡されてゐた。そして驚いたことには、蜜の貯はへられてゐたと思はれる巢房には、悉く、小い動物が一匹づつあたまから喰ひ込んで、その黑い冷たい尻だけを正六角の房外に出してゐた。それを摘んで引き出さうとしても、いのち懸けにがつがつ喰ひ込んで行つた力がまださながらに殘つてゐるやうで、なかなか抵抗力があつた。

君の『木と草』に於ける態度は、メタリンクに習つて、この形ばかりの抵抗力などを外存的に存在するものとして、そこから運命や沈默の問題を引き出さうとするのである。よしんば、空體な修辭上に終はらないまでも、內觀洞察の實際的生命に乏しいのは事實だ。僕はこんな內容上からの反對

を君に對していだきながら――丁度君の小品を讀んだところであつたから――僕自身の蜂に關す一種の小品的味はひのある仕事を終へた。

と云ふのは、一生懸命に房内へ喰ひ込んだ力の跡を見て、蜂群の持つてゐた而もなかなか侮られない生々慾を幽靈の如く、まのあたりにぞツと感じながら、明き箱になつた箱の始末をしたからである。そして氣を換へて再び机に向つた時、僕の胸の動悸が、どうしたものか、痙攣のやうにぴくぴくしてゐて、頻りに、生と云ふことがわが身に氣にかかつて仕方がなかつた。

本篇は小品隨筆（第十一卷二百六十六頁）と重復せるも、暫く掲げて原本の體裁に從ふ。（編者）

三月十四日。晴。邦種に一合半ばかり給蜜したら、一時間位で吸收してしまつた。生田（長）氏の紹介で竹中良吉と云ふ人が來訪。「婦人を了解せよ下」（十六枚）を書き終る。

三月十五日。晴。帝國公論より稿料十圓。新潮へ出る原稿の校正が來た。けふ、邦種へ巣脾のついた枠を一つ與へた。洋種も、けふの働きは盛んで、出たものは大抵花粉をつけて歸つて來たが、その花粉の色は鼠色をしてゐた。川柳のか知らん？「エマソンと支那の一自由思索家」（英文）を書き初めた。火どめの高く延びた鉢物を珍らしいので買つた。

三月十六日。晴。蜂はけふ白い花粉をも取つて來た。

三月十七日。朝、雨。大杉夫婦來訪。

三月十八日。夜、雨。洋種が產卵を初めた。十五日に見た時は、まだなかつたのである。英文三十一枚を書き終つた。上司氏來訪。長谷川氏へ手紙。高橋(久)氏へ十圓。

三月十九日。雨、夜晴れ。高橋(五)氏來訪、鑿泉給水會社創立の主趣書を置いて行つた。

三月廿日。晴。日本新聞社に行き、池田氏のタイプライタを借りて、英文原稿を寫す。半分ばかり進行。西本氏に會ひ、カフエパウリスタへ行つた。

三月廿一日。雨。石田氏へ三圓。芝區役所へ婚姻屆を出す。淸子の絕家再興によつて戶主たる遠藤家を癈家する手續が面倒臭かつたのである。戶籍謄本に、「養祖母跡相續、絕家再興」とあるので、相續か再興かの問題が區役所に分らなかつたので。箕有會社婦人博覽會より手紙。

三月廿二日。晴。高橋(久)氏並に高本氏よりハガキ。タイプライタをやりに行つた。午後三時より九時までつづいた。十二頁で終つた。

三月廿三日。晴。茅場町に森氏を訪ひ、鑿泉給水會社の計劃見積を置いて來た。野口氏を訪ひ、英文原稿の紹介狀を貰ふ。先づボンベイ發行の「East and west」へ送つて見ることにした。蒲原氏をも訪ふ。あさ顏、その他の種をまいた。

三月廿四日。晴、夜、雨。平塚明子氏を訪ふ。歸りに武林氏へよつて見たが留守。北村氏、近處へ

引越して來た。洋種の蜂は三枠に澤山の産卵をした。雄蜂房は既に蓋が出來たのが多い。邦種も産卵が増し、雄蜂房には蓋が出來たが、貯蜜が少いので、給蜜をしてやつた。婦人博覽會へ手紙。

三月廿五日。雨。加藤(朝)、諏訪二氏へハガキ。川手氏へハガキ。芝區役所より婚姻屆の訂正をせよと云つて來たので、二三字直して送つた。日附は二十六日にした。世田ケ谷分署から畜犬のことで出頭せよと云つて來たので、出頭して見ると、「小僧」を拘束して置けと云ふことだ。人をかんだのがこちらの弱點だが、それは臺所から物を持つて行かうとしたのをどろ棒と思つてかんだのだから、一昨日警視廳から獸醫が診察に來た時も狂犬にあらずと證明した。それでも、年中、而も永久につなげとは不都合のやうに考へるから、口輪をはめて置くことに受け書を書いた。近代劇協會からファウストの招待狀。

三月廿六日。晴。邦種群を二重箱から出してやつた。洋種が盜蜂に來るのを、二重箱の大きな口では氣が付かないやうすが見えるからである。その節、蜂にひたへをさされた。けふ、カンナの根をおろした、深紅と黄色とのだ。桝本氏へハガキ。犬の口輪を買つてやつた。

三月廿七日。晴。西村、正宗氏よりハガキ。近代劇協會の「ファウスト」を帝國劇場に觀た。

三月廿八日。晴。おととひから、洋種の盜蜂が邦種へ盛んに來るので、ゆふべ、邦種に給蜜してから巣門をかな網でふさいで置いたが、ちよツとのスキがあつたものと見え、出働して花粉を取つて來

たものと盗蜂とが入り口を探して澤山まごついてゐた。試みにふさいだ箱を別なところに移し、空箱に二つの巣牌を入れたのと置き換へたが、花粉を持つた蜂は勿論、盗蜂も、一たび這入つて直ぐ飛び出して來た。そしてその箱並に近處に移つた箱のまわりを飛びまわつてゐた。その中で、夕かた見れば死んでしまつたのもあれば、假箱の巣牌にかじりついてたのもあつた。火にあツためて蘇生させてやつたのもある。盗蜂も死骸の仲間に這入つて死んでゐたのもあつた。相馬(泰三)氏來訪、植竹書院から僕の「ぼんち」、「非常時」、「巡査日記」、並に「ゑんまの眼玉」を小冊にして出す約束が定つた。「破ファウスト」(十枚)を書いた。

三月廿九日。晴。長谷川(天)氏より手紙。石田醫師より受取のハガキ。前田(晁)氏へハガキ。水野氏へ、新聞に於ける「ぼんち」短評の誤想を正すハガキ。僕の創作的神經が一本調子だと云ふことも、常識的な統一だと云ふことも、寧ろ氏の方にそれ以上の了解が出來る力がない結果だ。けふもなほ盗蜂が來たが、邦種の入り口がふさがつてたので、這入れはしなかつた。が、ゆふ方、蜂の納つた頃にあけて見ると、その中に洋種が入りまじつて同じやうに落ちついてゐる。そして巣門の網を取つて見ても、出口まで來た洋種が逃げようともせず、却つて番兵をするつもりで邦種の外から歸つて來るのを誰何して入れてやつてゐるのもあつた。にほひが平均したのか知らん。これで、若し邦種中にゐる洋種が花粉を取つて歸つて來れば、和洋の雜居狀態を實現するのである。原氏よりハガキ。

三月卅日。晴。阿部（次）氏へハガキ。「閻魔の眼玉」を訂正して、植竹書院へ送る。「婦人を了解せよ」（下）を訂正し、二十三枚になる。新潮社より稿料十四圓。桝本氏よりハガキ。

三月卅一日。晴。スケチ劇「停電」の作を了し、六十枚分になる。きのふ、洋種の群に邦種が二三匹這入つてゐて、死骸を運び出したり、ごみくづを出したりしてゐて、洋種のどれにもいぢめられてはゐなかつたが、けさ見ると、邦種が二匹巣門外に殺されてゐた。邦種の方に於ても、入りまじつた洋種は矢張り落ち付いたのではないらしい。いづれも蜜を運んでは、洋種箱へ返つて行くものばかりだ。洋種の中を調べて見たら、邦種が二匹まごついて無事にゐたのをつぶしてやつた。産卵は枠三枚の裏表兩面について、多くはふたされてゐる。雄蜂と見たのは違つた。左右兩枠の內面は新らしい蜜と花粉とに滿ちてゐる。邦種をあけて見ると、三枠には蓋された幼蟲がついてゐるが、こないだからやつた給蜜の貯へが殆どない。二三日巣門を開閉して見たのと盜蜂との爲めにそれだけなくなつたのだらう。今夜、邦種を巣門のあいたまゝ別な位置へ移した。「停電」六十四枚に增えた。

四月一日。晴。後藤、前田、水野氏よりハガキ。野口氏より手紙。桝本氏へハガキ。春陽堂へ「現代五人女」（「鶴子」、「藝者になつた女」、「お島と亭主」、「店頭」、「馬鹿と女」）並に「停電」を持つて行く。前者は出版の相談、後者は新小說への相談。長谷川（天）氏へ書物四冊を返す。現代社へ原稿。野口氏並に蒲原氏を訪ふ。假りに二枚の巣脾を入れた箱にけふも邦種がまごつくので、時々集つたとこ

ろを別に移した本群へ運んでやつた。が、盗蜂が全くやんでしまつた。今夜、またあけて見ると、もう一匹も這入つてゐない。別位置にある箱の方向を段々日あたりのいい方へかへて行かうと思ふ。

四月二日。晴。相馬(泰)氏へハガキ。アサランソムの論著『Portraits and Speculations』を昨日讀んだが、その米野口論並に Kinetic and Potentiol Speach などは、僕が云つてることに近い——この共通點は、いづれも表象派的發表を知つてからのことであらう。けふも、邦種は空箱の方へ歸つて行くのがあるので時々本群へ運び入れてやつた。

"Japan ahead in Music" by Alfred Westharp, Mus. Doc. (A paper read before the Japan Society, London October 21, 1912) を讀んだが、これに對して英文の一論文を書かうと思ふ。先づ讀賣新聞にざツと飜譯して見ようと思ふ。

四月三日。晴。音樂論を概譯す(十二枚)。「蜜蜂の話」(十四枚半)、婦人評論の爲めに。加藤(朝)氏よりハガキ。新文林より原稿料二圓。

四月四日。晴。相馬(泰)氏よりハガキ。新潮社より手紙。洋種をあけて見たら、もう若い蜂がかへつてゐた。そしてその跡はかたづけられて、早や新らたに産卵が這入つてゐる。中の三枠とも、みなさうだ。邦種も昨今番兵を爲し、誰何も初めたのを見ると、越冬中に番兵問題などは忘れてしまうものので、春になつて子がかへつてから、再びやり出すものらしい。新潮社へ返事。(若し洋行するとなら

ばと云ふ質問だから、僕は先づだだツぴろい米國に渡り、演說をして金を儲けながら、あの活動的な事業界を視察し、それからロンドンに渡り、アサランソムといふ若い評論家に會ひ、渠が米野口氏を、わが國では殆ど全く忘れてゐて、僕以外に氏を推薦したものもないのに、頻りに英國で表象派を通過した新文藝の立ち場から推賞してゐる勞を友人の爲めに感謝してやりたい。それから歐洲に渡り、巴里かどこかでメタリンクに會つたら、お前とおれとは二十年程前に共に同時にエマソンの感化を受けた思想上の兄弟だが、僕がその後エマソンを見限つたのに反し、お前は渠の弱點ばかりを誇張し、佛蘭西表象派のいい傾向を空虛な神秘主義へ持つて行つたのは不都合ではないかと詰責したい。それから、露國へ行き、文藝卽實生活の立脚地に立つ多くの作家等と共に、若し立派に通譯の勞を取つてくれるものがあつたら、あの米國の將來を談じて見たい)。田中正平氏へ手紙(音樂上の質問)

四月五日。晴。磯村氏來訪、濱口書店から僕の小說を出すと云ふ相談に來た。夜、水野氏へ青木氏の畫を取りに行き、高村(光)氏に會つて、音樂のことを暫く話し會つた。きのふ、上司氏の話によると、僕の「ぼんち」を讀んでいやな氣を起してゐたのが、矢張り同じ場所で同じ事件にぶつかり、卽死したのださうだ、大阪朝日の高崎堅三郎氏は。氏は大阪赴任の卽日、池田の僕の寓居を訪ふて來て、夜おそく大阪まで歸つた時、電車がなければ僕の家でとまれと云つたのに、遠慮して五里の道を步いてしまつたことがある。その後、他社の人とは交涉すなと命ぜられ、僕の家へはぴツたり來なくなつ

た。それが今回その奇妙な計に接したのだ。

四月六日。晴。平塚女史より手紙、研究會は種々の壓迫があつて實行出來ず、爲めに中止の上、講義錄だけを出すから、矢張り僕の刹那哲學をそれに出してくれろとのこと。『ぼんち』の校正、けふから初まる。高村(光)氏よりハガキ。けふ、上司氏のところで社會主義の連中が四名集つた。何か用のありさうなので、その場へ行き合はせた僕は遠慮して出て來たが、その節和氣氏の持つてゐたズダマンの "Roses" を借りて來てそのうちの Streaks of Light や The Last Visit などを讀んだ。また呼びに來たので行つたが、皆が歸つた跡での上司氏の話によると、大杉氏が僕と喧嘩をしたかつたのであ る。その理由は、僕をなぐるか、何とかしたら、きツと新聞に出る。すると、なぐつた者がそれだけ名を知られると云ふのだ。そりやア、外國人の飜譯で、冗談に云つてるのだらうと答へたら、上司氏はいや、あの人々はモップ主義で眞面目に考へてるらしいと。それから二人で澁谷氏を訪問した。淮南子を借りるつもりであつたが、なかつた。

四月七日。晴。平塚女史へ返事。新潮社へ正誤を送る(阿部氏への答へに、氏自身とあるべきが、どうしたのか僕自身となつたところが二ケ所あつた)。田代氏より手紙。正宗(白)氏が來たので、上司氏と食事をした。田中(正)氏より手紙。松原(二十三階堂)氏よりハガキ。エストハプ氏の「日本音樂の發見」(音樂に昨年掲載)を讀んだが、Japan ahead in Music よりも一層くだらないものだ。攻擊の方

の材料が一段まして來た。

四月八日。雨。島中雄三氏からサンデーに執筆してくれろと云つて來たので、樣子を見に社へ行つたが、留守であつた。植竹書院よりハガキ二つ。池田氏を日本社に訪ふ。長谷川（勝）氏へ行く。繼母の病氣まだよくない。

四月九日。晴。島中氏へ手紙。The Read Questions of Japanese Music を書き初めた。

四月十日。晴。島中氏の依賴でサンデーに每月二回書くことになつた。今回は『婦人を了解せよ』の下篇を『了解せらるべき婦人』として出すことにした。それから、植竹書院に行き、それから吉江、前田（夕）二氏を訪ふ。

四月十一日。晴。小說集『ぼんち』の卷頭に入れる寫眞を日比谷寫眞館へ取りに行つた。川手氏を訪ふ（留守）。中村（武）氏より手紙（表象派の文學運動出版の件）。中村並に植竹氏へハガキ。小杉天外氏來訪、碁を三番打つた。增上寺の前を通つたら、御忌の爲めに小田原講中が導師に引かれて入門するところであつたので、電車を下りて暫く見てゐた。

四月十二日。晴。後藤（又）、松原二氏へハガキ。木村、鈴木（悅）、相馬（泰）三氏よりハガキ。巢鴨へ家を探しに行く。

四月十三日。晴（昨夜から今朝にかけて雨があつた）。中澤氏より同氏著『トルストイ』を送つて來

た。同氏へハガキ、あれだけ研究した骨折は他の人には得られないところだが、まだ外人の言に由るところが多く、自個の批判に缺乏してゐるところが缺點だ。磯村氏より手紙。濱口の出版問題は駄目らしい。植竹氏來訪、「ぼんち」集の稿料五十圓(但し全集等出版の節は返して貰ふ約束で)を受け取つた。蜂群の内部を調べた。洋種は五枠のうち四枠分は充分に滿ちた。その上、三枠の全面に一杯の幼蟲の蓋せられたのが出來てゐる。邦種は先日の位置移轉の事件でだらう、正味三枠分にしか當らなくなつて、二枠のから巣を引き出して、四枠だけにする必要となつた。驚いたのは、蜂王の變色で、赤みがかつてゐたのが、全く黑びかりの腹部を持つてるやうになつた。老いて來たしるしかも知れない。産卵は三枠に渡つてあることはあるが――雄蜂の生れてないのと雄蜂の房らしいのがないとの爲めに、諏訪氏へ質問を發した。

四月十四日。晴。(夜に入つて雨)。英文を三十枚まで書いた。今朝、茅原(茂)氏來訪。

四月十五日。雨。松原(二)氏より原稿歸る。英文四十五枚に達してまだ終らない。水野氏の紹介で大正演藝の婦人記者來訪。けふは蜂が雨の爲めに餘り出なかつた。もう、櫻も單へはなくなつた。庭のげんげやたんぽぽが咲き初めた。椿の花が目黑園の中に見える。

四月十六日。晴。中村(武)氏來訪、「表象派の文學運動」を新潮社へ相談の爲め持つて行つた。同時に、六月號の卷頭物を依賴せられた。英文の初稿が出來あがつたから、北村氏へ行つて、話して

見た。

四月十七日。夜、雨。水野氏と前田(晁)氏來たる。どこかで飲んで大分上氣嫌であつた。前田氏が國木田氏死去前後に於ける田山氏と眞山一派との暗鬪もしくはさや當てのことを語り出した。獨歩の死ぬ少し前に病院の入り口で數名と一緒に寫眞を取つた時は僕もゐた。その前日、茅ケ崎でとまるところを、小栗その他の諸氏がゐるのではづしたいと云ふものがあつて、僕等は國府津まで行つて一泊した。正宗、田山、吉江、前田、並に僕であつた。その晩、僕だけ藝者を買つたことは前田氏も詳しくぶちまけた。それから死んだ翌日の晩、茅ケ崎館で底ぬけの大さわぎがあつたさうだが、そのまた翌晩には僕も行き合はせた。眞山氏が小栗氏の横つらを『このちんちくりんめ』と云つて投りつけた。小栗氏はそばにゐた僕に何の意味だか分らないが、全體どうしたんだと聽いた。間もなく小栗氏もふんどし一つになり、眞山氏と共に踊り出し、鴨居をどりだと云つて、それをつたひなどした。この時のことには、前田氏はゐ合はせなかつたが、蒲原、田山、僕、その他誰れかもゐた。

四月十八日。晴。

四月十九日。晴。清子と共に、千住の老畫家を訪ひ、その歸りに荒川堤の八重櫻を見た。多くの人人が酒に醉つて踊り狂つてゐたが、自分はあんなことをして來た經驗がないだけに、そして今さらそんなこともやる氣がないだけに、實際はどんな氣持ちだかと云ふやうなことを考へて、傍觀してゐた。

それから大塚の貸家をきめて歸つた。

四月廿日。晴。「ぼんち」小説集二百七十餘頁の校正を了す。

四月廿一日。巣鴨村へ轉居。

巣鴨日記（第一）
大正二年四月廿一日より

大正二年四月二十一日。晴。西本氏へ賴んで、新宅地圖の私製ハガキを拵らへて貰ふ手紙を出した。目黑から北豐島郡巢鴨村字宮仲二五一七番地へ轉居、間數五、庭可なりあり。なほ二十二三坪、きこく垣を出して、取り入れる約束だ。蜂蜜をも宇都宮運送店の馬車へつんで來たから、どうなつたか心配だ。犬は隣家のモクをもつれて來た。

四月二十二日。少雨。洋種が直ぐ邦種へ盜蜂に行つてゐる。邦種が白い幼蟲を運び出してゐるのがをかしいと思つて、起きるが早いか調べて見ると、どのワクもどのワクも落ちてゐた。洋種のも五ワクのうち三ワク落ちてゐた。きのふ、二三十匹、死んだのも無理はない。王も無事かどうか分らない。落ちた巢を、竹の皮で結びつけてワクにつけた。洋種のには巢脾を二つに割つて元の一ワクを二ワクにしたのがある。正宗(得)氏よりハガキ、靑木氏の畫集が出來たのを目黑の方へ送つた通知だ。横山、山本、中村、前田(夕)、平出、島中、三井、後藤、鈴木(悅)、廡田、長谷川、木村(信)氏へ轉宅通知。

四月二十三日。少雨。風が强かつた。こちらはいつも强風が吹くのかも知れない。蜂には餘りよくない。それに蜂が花粉を取つて來るのが少いのは、蜜源が少いのかも知れない。けふも兩方が互ひに盜蜂に行つたが、洋種は見つけ次第邦種をいぢめてゐたが、邦種の箱へは洋種が自由に出入りしてゐた。「巢鴨村より」(文部省の迂愚、新らしい女と女子大學、感傷的は行けない、生きながらの銅像の四件)二十四枚、サンデーへ行く分。千葉鑛藏氏よりイブセンの飜譯三篇を送つて來た。

四月二十四日。晴。沼波氏へハガキ。中村氏より手紙、新潮社で「表象派の文學運動」をいよ〳〵引き受けることになつた。稿料八十圓の賣り切りのよし。それで滿足しなければならぬらしい。上司氏來訪。倉田(淸)氏の紹介で坂口と云ふ人來訪。僕は誰れにも留守であつた。瀨沼女史、野口、蒲原三氏を訪ふ。瀨沼氏より兎の兒を一對もらつて來た。夜の十一時からその始末をした。

四月廿五日。晴。兎の箱を拵らへた。サンデーの依賴により、動物小說「小僧」(犬の話)を郵送した。また訂正して廿八枚餘となつた。新潮社へ行き、正宗氏を批評する材料を取つて來た。今井女史並に岡本氏を訪ふ。共に留守であつた。

四月廿六日。少雨。風あり。昨夜、邦種を盜蜂から助ける爲め別なところへ移したら、好結果に行くらしい。給蜜もしてあつたのだが、みんなはまだ吸收してなかつた。おほ屋からツツジを三株買つて植ゑた。藤を一株買つた。沼波氏より手紙、近頃大煩悶の結果大解決を得たから、近日議論に出て

來ると書いてある。パンの會よりハガキ。

四月廿七日。少雨。風あり。パンの會へ出席通知。村越氏へハガキ。

四月廿八日。雨。邦種は移動せられても、けふは、また洋種にやられてゐるので、夜に入つてから、巢門をふさいで置いた（細い金あみを以つて）。新潮社へ行き、譯書の原稿賣り切り料八拾圓を受け取つた。歸途、前田（晁）氏を訪ふ。

四月廿九日。少雨。學農社へ行き、輕便採蜜器と白クロバの種とを買つて來た。種は家の周圍並に道ばたへふりまいて置いた。洋種を檢するに貯蜜が殆どない、それが爲めに花粉を取つて來ないのだらうと思はれるので、試みにザラメ半斤をやつて見た。正午後やつたのが夕方にまだ吸收し盡せてゐなかつた。邦種は殆ど全く貯蜜なく、これにも半斤を與へた。正宗（得）、立川二氏よりハガキ。村越氏より手紙、同氏へハガキ國民の記者來訪。

四月卅日。晴。邦種はもうどうしても駄目だ。盜蜂を自覺したのか、けふは、巢門外に澤山まごつき初めた。見てゐても、花粉など取つて來るのは一匹もない。あす頃、逃走を試みるかも知れない。婦人評論社より稿料七圓。今夜英文の音樂論をいよ〳〵書き終つた。

五月一日。雨。風烈し。井關・鈴木（勇）、吉味、長谷川（勝）、高橋（五）岩村・生田（長）、池田、植竹、加藤・川手、木村（鷹）、小杉（天）・芝川・田代・千葉、中澤・原・宮地、日高、牧野、森、吉

野、若宮、吉岡、神崎、荒木、長谷川(天)、北川、石田、立川、小川、磯村氏へ轉居通知。丸善、長谷川(勝)氏へハガキ。

五月二日。晴。北村、田中二氏へハガキ。サンデーより稿料八圓八十錢。西村氏より原稿依頼、承諾返事。品川税務署よりまた通知書が來て、六圓也大正元年隨時所得税並に十錢督促手數料を納附せよと。是を非にまげるのが癪だから、出來るだけ反抗して見る。(茨木署の落ち處だから、同署から直接に云ふことを云へと云つてやつた)小川氏よりハガキ。森氏より手紙。白鳥論を書き初めた。

五月三日。雨。高橋(久)氏へ手紙(カワセ三十圓)丸善、千葉二氏よりハガキ。現代社へハガキ(稿料さいそく)。苗を賣りに來たので、ナス、キウリ、ふぢマメ、インギンなどを植ゑた。

五月四日。晴。中澤、植竹、西本三氏よりハガキ。中島清と云ふ人から手紙(蒲原氏から何か紹介してあるとのことだが、何も來てゐない。)吉野氏來訪。平塚女史その他二名の青鞜社員が來た。布川夫婦珍らしく來訪。千葉(鑛)氏が僕の家を大分さがしたさうだが分らなくつて歸つたさうで、その前ぶれに來たのださうだ。

五月五日。晴。佐藤稠松氏來訪。氏と共に、氏の新宅を訪ふ。それから、青鞜社事務所へ行き、昨夜持つて行かせた蜂の様子を見、給蜜してやつた。どうしても洋種が盗蜂に行くので、それを避ける爲め、一時邦種をあづかつて貰つたのである。安持研子氏が直ぐえりのところをさされた。中を調べ

てもどうも王が見付からない。ひよツとすると、ゐないのかも知れない。それに、巣房にうみつけた卵が、一房に二つ這入つてゐるのが二三ケ所あつた。或は働蜂が例の中性產卵をやり初めたのではないか知らん。歸つて洋種をしらべると、そこにも二ケ所、二つの產卵が這入つてゐるのがあつた。然し王は現に存してゐて、ずん〳〵整理等をしてゐる。落ちた巣の竹の皮で結はへたのは、しツかりくツつけられた。それで皮をすべて取り去つた。蜂は各ワクの兩面に一杯にくツついてゐるやうになつたし、蜜も隨分一杯だ。が、まだふたせられたのはない。桝本、吉岡二氏よりハガキ。アスカ山のそばまで野菜種を貰ひに行つた。

五月六日。晴。桝本氏へハガキ。千惠へ手紙。公衆劇團より手紙。千葉氏よりハガキ。畑をしてゐる時、瀧田氏來訪、中央公論の小說依賴。風邪の氣味だから、晩餐後直ぐ就褥。

五月七日。晴。昨夜水をコツプに五六杯飮んで、寢たので、熱は一時に出てしまつた。そして今朝は何のこともない。高橋(久)氏より返事。小杉(天)氏よりハガキ。「巣鴨村より」(賢母良妻と愚母惡妻、支那現今の政局、弔慰金を他人に左右せしむるな)二十二枚。

五月八日。晴。田中氏より返事(カツポレの譜)。中村氏より原稿催促、同じく返事。千惠より返事。島中氏、蒲原氏へハガキ。サンデーへ原稿。

五月九日。晴。サンデー記者川浪顯宗氏來訪。桝本氏よりハガキ。邦種を見に行つたら、果して母

蜂がゐない。そして頻りに働蜂の産卵が出來、一房に十も十五も這入つてるのがある。
五月十日。雨あり。正宗(得)氏來訪。現代社より原稿料六圓。兎が一匹死んだ。
五月十一日。晴。西村、中村、高橋(久)氏へハガキ。「胃病所産の藝術」の上篇(四十枚)を終つた。
五月十二日。夜、雨。新潮社へ原稿。野口、蒲原兩氏來訪、新屛風を見て、渠等も畫かせようと云つた。兎また死す、何の原因だか知らない。犬が畑をあらすと云ふ故障が百姓から生じて來た。「紹介せらるべき平塚女史」(十四枚)を書いた、文章世界へ原稿。
五月十三日。雨。婦人新思潮と官憲の取締に關する、中央公論への原稿(五枚)を書いた。大野氏へハガキの返事。
五月十四日。晴。ゆふべから、中央公論への小説原稿を書き初めた、材料には池田の荒木八百屋さんを取つた。高木養蜂場よりハガキ。
五月十五日。雨。正宗(得)氏よりハガキ。
五月十六日。雨。「政吉」(四十一枚)を書き終り、中央公論に送つた。
五月十七日。晴。代々木の高木養蜂場に行き、巣礎六枚を枠につけて貰つた。そのうち、二枚を直ぐ蜂群に與へた、前後に各々一。四五日前から、六枚の枠は殆ど一杯になつてゐた。幼蟲や蓋された蟲兒が一杯で、蜜をためる場所は殆どないほどだ。高橋(五)氏よりハガキ。高橋(五)並に木村(鷹)氏

來訪。

五月十八日。晴。瀧田氏へハガキ。沼波氏へハガキ。蜂群にいよ〳〵雄蜂が生れたらしい。けさ、一匹巣門外に生れたてのがよわつてゐたので、拾つて入れてやつた。給蜜しようか、どうかと考へてゐる。犬にもはツきりした特性が出來てゐるのが面白い。モク――妻はよくモク助などと呼ぶが――は、ここへ來るまでに餘りいぢめられて、半ば野犬あつかひにせられてゐたので、非常に人を恐れる。慣れてゐながらも、呼ばれて直ぐ人に近づくことをしない。下女が憎らしいと追つかけると、遠くへ退いて、尻を突きあげたりする。それに、つないだ鎖を、小僧は默つて辛棒するに反し、がりがりかんで外してしまうことが多い。それも珍らしくないとしても。かんで鎖が切れたのを、けさの如きは、その切れた根元の方をくはへてどこかへ持つて行つてしまつたほど、意地の悪いことをやり出した。サンデーよりハガキ。

五月十九日。晴。新潮社へハガキ。吉野氏來訪、同氏とサンデー社、池田氏、ナショナル社を訪ふ。北村、上司、田中三氏を訪ふ。靑木氏畫集に對し僕の受け持つた分を誰れかに賣りつけようとしたが、買ひ手がなかつた。けふ、蜂を調べたが、新ワクにはちよつとしか蜂がついてゐない。

五月廿日。雨。博文館へ行き、文章世界の稿料九圓十錢受取。春陽堂へ立ちよつたが、本多氏不在。日本新聞社に行き、池田氏のタイプライタで午後五時頃より八時半まで書いた。若宮氏が來たの

で、その歸りにカフエへ行つた。きのふ、北村氏の話によると、或新聞に、僕がもう死にさうだから、あたまだけは大學で解剖させる、からだは海へでも山へでも投げて呉れろと遺言したとあつたさうだ。そんなことを疾くの昔云つたことがあるし、また今でもそのつもりでゐるが、近頃語つたこともない。多分、ずツと舊い話が傳はり傳はつて、今回書かれたのだらう。

五月廿一日。晴。中央公論より校正並に稿料四十一圓は小說、三圓は談話。末政氏來訪、山座公使について北京へ行くさうだ。茨木稅務署へ三圓のカワセを送つた、先日板橋の稅務署を經て六圓（一年分）の滯納處分を行ひに來たが、たとへ拂ふべきとしても、昨年九月までの半ケ年分の筈だから、それだけ送つたのである。野口氏からハガキ。並に故原撫松氏に關する出版物とてんらん會招待券。

五月廿二日。晴。サンデー社へ行つて見た。午後三時より十時まで、日本新聞社でタイプライタ。

五月廿三日。晴。飜譯の校正來初めた。蜂に半斤の給蜜をした。

五月廿四日。晴。蜂が澤山井戸のポンプロに來てゐるのを見た。新潮社よりハガキ、同じく返事。瀨沼波氏より返事、僕の「男女靑年の新思想」を東亞堂で出してくれるさうだ。けふ、故原撫松氏遺畫てんらん會を見に行つた。きまり切つたクラシク趣味を感じさせられたが、あれだけ確かな筆法は、今の日本洋畫家連には殆どあるまい。瀨沼女史來訪、その「櫻の園」を置いて行つた。

五月廿五日。晴。田代氏來訪。茨木稅務署よりまた殘部の催促、だが僕には拂はない理由があるで

はないか？飜譯中佛語の Tiens が tenir の變化であるかどうかを確めに上司氏を訪ね、氏と共に大杉氏をも訪ふて、さうだと確め得た。蜂群に雄蜂が大分生れてゐるのを見た。

五月廿六日。晴。西崎嬢が女子文壇の用で訪問に來た。

五月廿七日。雨。新潮社よりハガキ。靑踏事務所へあづけた邦種蜂群は、もうウちやらかしてあるが、働蜂が產卵を初めてゐた爲め、尻の劍がなくなつてゐるさうだ。そして多少の貯蜜もしてゐるさうだ。

五月廿八日。晴。野口、サンデー社へハガキ。文章世界よりの質問に答へるハガキを出した。淸子と共に平塚女史を訪ふ。「ウエストアンドイースト」社に送つた原稿が返つて來た。

五月廿九日。晴。夜雨。前田(晁)氏來訪。

五月卅日。雨。大杉氏を訪ひ、譯中の佛語をすべて確かめて貰つた。それから正宗(得)氏を訪ひ、氏と前田(夕)氏を訪ふ。正宗氏の油畫「越前堀」を持つて來た。

五月三十一日。晴。大杉氏より手紙。川浪氏より原稿依賴。隣りへけふ、午後二時頃泥棒が這入つた。

六月一日。雨。大杉氏へハガキ。

六月二日。晴。新潮社よりハガキ、同じく返事。サンデーよりハガキ。

六月三日。雨。サンデーより三十圓の稿料（六圓八十錢不足）來たる。「巣鴨村より」（奥田文相の因襲思想）、サンデー原稿紙で二十八枚。

六月四日。曇。新潮社より稿料二十圓也。末次氏來訪。蜂に王臺が六個いつのまにか出來て、既にふたされてゐる。なほ二個出來かかつてゐる。また、念の爲め用意の巣礎を前後に各一枚入れた。分封群に對する箱の用意をした。

六月五日。雨。茄子の根切り蟲を取つてやつた。

六月六日。雨。本多、島中二氏よりハガキ。正宗（得）氏より小說出版の口があると云つて來た。

六月七日。雨。池田氏へ Black moss の意を聽きにやつた。新潮社より手紙。雄蜂が少しも巣門外へ出たのを見たことがない。たま〳〵出てゐるのは、死んでゐる。

六月八日。晴。けふ二三日目に晴れたので、午前十時頃、蜂が分封した。逃げまどふ羽なし王を收容し、その新箱を舊箱の位置に代へて置いたら、分封群はそれに納つた。で、これを別な位置に移し、舊箱を舊位置に直してから、調べて見ると、まだ新王は生れ出てゐなかつた。すべて切り取つた王臺のうち、二個は失敗したので、五個を別々に王籠若しくは手製の王籠まがひの籠に入れ、失敗した王臺中の乳をも入れて、第一號群につるしてやつた。分封群には幼蟲附きの枠一個を中心として、まだよく受けてない巣礎の枠を二個加へ、なほ王臺切り取りの節くづした巣の小片を一つ宛つけた枠

二個をも試みの爲め入れた。

六月九日。晴。沼波氏よりハガキ。池田氏より返事。神崎氏より手紙。長谷川より千惠分べんのしらせ。沼波、川浪、前田(夕)氏へハガキ。新潮社へ手紙。けさ、十一時頃、分封の第二號の方がまた逃げ出したが、王を拾つて入れてやつたので、歸つて來た。そしてやがて花粉を取つてくるやうになつた。本群に保護せられる王臺の一つのさきが少しあからんでゐた。第二號へ給蜜をしてやる。トマトを植ゑかけてやつた。

六月十日。晴。王蜂が一匹生れた。これを第一號の群につけて置くつもり。小說「靈魂の行くへ」(小片四十四枚)を書いた。高橋(五)氏へハガキ。

六月十一日。午後、雨。王蜂が二個生れたので、第三號と第四號とが成立した。共に給密をしてやつた。中央公論の質問(五枚)・女子文壇の質問(一枚)を書いた。高橋氏より返事(Self-osculationが自己診斷と分つた。)佐藤(稠)氏を訪ふ。

六月十二日。晴。高橋(五)氏よりハガキ、同じく返事。「幸福な不幸」(十枚)を書いた。(新文林へ)。生れてゐた二個の王蜂で第五群と第六群とを組織した。巢礎五枚と枠にする木とを買つて來た。靑年男女の思想に關する分の論文を集め、それを統一し初めた(東亞堂で出す)。高本氏のイタリヤ種は今春以前に王を失つたら、働蜂だけで王臺に王を生みつけ、それの孵つたのが今日立派に產卵して、分

封もしたさうだ。僕の日本種の王を失つたのは、働蜂の產卵しかたが例のやうで、一房中に五個も十個も玉子を生みつけたが、高木氏のイタリヤ種は王の平常と同じく働蜂も一房に一個しかうみつけなかつたさうだ。

六月十三日。晴。蟻があまり這入るので、蜂箱の周圍に石油を水に浮かせて撒いた。各箱に巣礎を各一個宛入れてやつた。「新思想と新時代」(三百五十五枚分)を編した。東亞堂へ渡すのである。板橋稅務署から人がまた來た。で、大阪の稅務監督署へ事情を云つてやつた。

六月十四日。夜、雨。昨日取りまとめた原稿を以つて沼波氏を訪ふ。ついでに、德田(秋聲)氏を訪ひ、共に角田(浩)氏を訪ふ。

六月十五日。晴。瀧田氏來訪、中央公論の「大阪の夏の印象」を引き受けた。正宗(得)並に岡村書店より手紙。

六月十六日。雨。

六月十七日。晴。大阪夏の印象十六枚半を書いた。平塚女史へ借りた雜誌を返送。岡村書店へハガキ。きうりと里いもと唐もろこしと枝豆とは大分うまく行つてるやうだが、他のものはうまく行かない。茄子苗をきのふも買つたが、けふは、淸子がトマトとかき菜といんぎんとの苗を買つて來て、夜おそく植ゑた。

六月十八日。雨。

六月十九日。晴。高橋(五)氏來訪、氏を角田氏へ紹介。若宮、千葉(鑛藏)兩氏一緒に來訪、淸子も共に千葉氏宅へ同伴した。「宗敎心と人種問題」(サンデー原稿十八枚)。

六月廿日。晴。正宗(得)、蒲原、高村(眞)、森田、坂本氏等と柴又の川甚へ行き、半日を送つた。イボタの生垣をしてある家があつて、その花が白く全面にさいてゐた。

六月廿一日。晴。東亞堂番頭大越氏來訪、「新思想と新時代」の出版を約す、但し稿料賣り切りで七十圓。前田(晁)、小川二氏來訪。野口氏より手紙、本を返す。

六月廿二日。雨。松本(道)氏來訪、例の文藝演說會の演說を賴みたいと云つたが、和强樂堂は氣に向かないのでことわつた。

六月廿三日。晴。武林氏へハガキ、氏のサフオ譯があまりひどいので、一度來いと云つてやつた。東亞堂へハガキ。千葉氏よりハガキ。蜂群すべてまだ產卵し初めないやうだが、けふは特別に騷いでゐたのは、王が交尾に出たのかも知れぬ。

六月廿四日。雨。武林氏よりハガキ。同氏へハガキ。東亞堂の大越氏來訪。稿料の半額三十五圓を受け取り、他の半額は校正ズミ迄の預り證を置いて行つた。博文館の印刷所へ行つたついでに、前田(晁)氏を尋ねた。歸宅早々、不快で褥へ這入つた。

六月廿五日。晴。今朝腹が大變下つて、食事がまづかつた。博文館印刷所並に新潮社へ行く。(校正の注意の爲めだ。)同印刷所の大きいのに驚いた。如何にも東洋第一だらうとは當つてる。武林氏とハガキ往復。奇蹟社並に昴社よりハガキ。巖よりハガキ。巖へハガキ。けふも加減がよくない。

六月廿六日。晴。中村(星)氏へハガキ。武林氏へハガキ往復。千葉氏へハガキ。北村氏へハガキ。前田(晁)氏よりハガキ。一群の箱第六號に王がゐなくなつたので、他の一群第三號と合同した。筑紫氏來訪、また同氏宅へ行きトマト、小町草、カンラン、コスモス等を貰ふ。筑紫氏の花園の矢車へ頻りに僕の蜂が行つてるさうだ。

六月廿七日。晴。正宗(得)氏へハガキ。武林氏とハガキ往復。中村(星)氏よりハガキ。ホトトギス社招待の能會に行つた。青鞜事務所へ預けた蜂を見に行つたが、段々減じたと見え、一枠の五分の一しかなかつた。働き蜂を調べたに、矢張り、劍あるものばかりが殘つたらしい。一枠を殘してあとの枠はすべて持ち歸つて、洋種に與へた。

六月廿八日。雨。武林氏よりハガキ。もう、氏との議論はやめた、多少は向ふが向ふの自己の爲めに反省する氣が出たらうから——こちらをえらい人だなど云つてよこしたのを見ると、まだこちらの期待してゐないことを云つてるやうだけれど。大阪の小塚氏宛手紙と青木氏畫集二部を郵送。正宗(得)氏よりハガキ。植竹書院よりハガキ。時事新報社より質問、その答へ。この頃はとうなすの花

が盛りで、家の周圍はその花見が出來るやうだ。そして蜂が每朝さかんにそれへ行つてる。
六月廿九日。晴。キコクを二百本買つた。
六月卅日。晴。サンデー社へ行く。池田氏を訪ふ。新文林より稿料五圓也。
七月一日。晴。蜂すべて交尾ずみであるのを發見した。もう、新らしいうじを持つてるのもある。
中村(春)氏來訪。文光堂より稿料延引の通知。植竹より「ぼんち」製本十部到來。出版屆に判を押した。諏訪氏へその一部を送る。邦種の巢を與へられた群は、それを整理して貯蜜に用ゐてゐる。
七月二日。小塚氏より靑木畫集代六圓來たる。
七月三日。晴。今少し蜂群を增したいので、第二號の王を拔いて見た。千葉氏來訪、警醒社への紹介狀を貰ふ。夜、上野氏を訪ふ。
七月四日。雨。第二號を調べて見たら、果して王臺を造營すること五箇。それでいいだらうから、再び王を返してやつた。中央公論、サンデー、前田(夕)氏へ稿料さいそく。「新人の情想と文明問題」(サンデー用紙十六枚)を書き終はる。空蟬橋にポスト新設願を出す爲め、上野、伊勢、筑紫三氏の印を貰ふ。
七月五日。晴。警醒社へ「悲痛の哲理」出版の相談手紙を出した。蜂王の羽根を切つてやつた。第一號には蜜が大分ふたされてゐるので、近々一度採つて見ようと思ふ。正宗(得)氏よりハガキ。

七月六日。晴。秋江氏歡迎會通知。前田（晁）氏よりハガキ。水谷氏よりハガキ。中村（春）氏を訪ふ。籾山氏へ「耽溺」再版照會。白石氏へハガキ。

七月七日。晴。白石氏よりハガキ。サンデーより稿料のうち十五圓也。正宗（得）、野口、蒲原氏訪問。けさ第一號群の二枠から蜜を二ポント採取して見た。岡村（千）氏來訪、南洋へ行く福田氏と共に。辻氏來訪（共に僕は留守であつた。）

七月八日。警醒社より暫く待つてくれとの返事。新潮、岡村書店へハガキ。「エマソンと支那の一自由思想家」を野口氏と相談の上シカゴの「オプンコート」へ送ることにして見た。「禁止を抑制に代へよ」（五枚）、サンデーに。田代氏を訪ひ、その紹介で山田孝雄氏と會ふ。近頃珍らしい國語研究家であるからである。その奈良朝文法史、平安朝文法史、並に平家物語史考を貰つた。最後のは、既に、田代氏から借りて讀んだものだ。留守に野口氏來訪、音樂家エストアル氏招待會へ誘ひに來たさうだ。

七月九日。晴。第二號群の王臺は五つとも取り拂はれてゐて、別に一つ新らしく出來たらしいのがあつたが、それもかみくづされさうだ。試みに、又第一群の王を抜いて置いた。

七月十日。夜、雨。淸子と共に上野へ明治記念博覽會を見に行つたが、歸りに別れて、岡村（千）氏並に森田氏を訪問した。「ほとゝぎす」より先日の招待能の感想を聽きに來たので、半野十二枚を認め

た。籾山書店より返事、「耽溺」再版をする氣はないさうだ。第一群を調べたら、王臺一つしか出來てゐなかつたのでそのままにして置いた。
七月十一日。雨。第一號群の王臺が六七個になつてゐるので、王を返してやつた。岡村書店(捨吉)氏より返事。同じく再びハガキ。「梁塵秘抄」(今回發見せられた)を讀み終つた。
七月十二日。晴。諏訪氏よりハガキ。夫婦で中村(春)氏を訪ふ、留守。散文諷詩十篇を作る。
七月十三日。晴。秀才文壇へ答へ。中央公論へ原稿。夜、佐藤(稠)氏を訪ふ、午前一時まで談話。
七月十四日。晴。吉野氏來訪。同氏と共に山本(三)氏を訪ふ。歸途千葉氏(留守)並に布川氏を訪ふ。「新人の皇室觀」(十三枚)を書く。
七月十五日。晴。サンデーへ稿料殘金さいそく。途中、佐藤氏と會ひ、すし屋で飲む。
七月十六日。晴。前田(夕)氏よりハガキ、返事。中央公論より銷夏法質問、返事。「爛」の會へ行く、初めて森田草平氏と面會した。夜、ちよツと雨。
七月十七日。晴。水野氏よりハガキ。中央公論へ「皇室觀」。中村(春)氏來訪。東亞堂へ殘りの原稿。
七月十八日。晴。サンデーよりハガキ。野口氏來訪。
七月十九日。晴。高橋(五)氏よりハガキ。同氏來訪。第二號群につぎ箱を與へた。夜、夫婦で佐藤氏を訪ふ。

七月廿日。晴。高橋氏の依賴で、速成日本習字學會の披露招待を角田、上司、倉田、松崎、島田五氏へ發した。新潮社を訪ひ、佐藤(義)氏とプルタク傳飜譯を相談して見た。こんなことでもやつて常收入を拵へないと困るばかりだ。今月の末に這入る金は實に僅かで、二十圓とはあるまい。上司、北村二氏を訪ふ。

七月廿一日。晴。正宗(得)、新潮社へハガキ。長谷川(勝)並に繼母へ手紙。佐藤(稠)氏來訪。東亞堂の大越氏來訪。サンデーへの原稿、『新聞紙の勢力』(七枚)。

七月廿二日。晴。巖へ手紙。サンデーへ原稿。高橋氏より使ひ。島田氏より返事。森田氏より山本(鼎)氏の版畫を送り來たる。東亞堂より書名を『近代思想と實生活』にしたらと云つて來た、その近を現にしてもよからうと答へた。蜂はいづれもどし〳〵巢をつくつてゐる。が、ここ二三日はとうとう茄子の花がおとろへて來た。この花が周圍至るところにあつたので餘ほど助かつたのだが、これから無花の期だらう。

七月廿三日。晴。正宗(得)氏來訪。島田一郎氏、塚越(停春)氏の紹介で來訪。高橋(五)氏の速成習字會の披露に出席。長谷川(勝)氏より返事。

七月廿四日。晴。夜、雨あり。繼母と長谷川(勝)へ絶交すべしと云ふ手紙を出すつもりで持つて出たが、その足で長谷川へ行つた。母は僕と一緒にこちらへ來た。

七月廿五日。晴。長谷川へ叱責の手紙。藝術座贊助員を交渉して來たので、承諾の返事を島村氏へ出した。新潮社に佐藤氏を訪ふ(留守)。東亞堂に沼波氏を訪ふ。東亞堂より書物二冊郵送し來たる。暑いので今月に至つて何等の仕事も出來ないのに閉口してゐる。第二回に東亞堂より出す文學論を昨夜より取りまとめ初めた。夜からいい雨があつた。

七月廿六日。長谷川より返事、到底話せないから、以後絶交のつもりで再び手紙も出さず。

七月廿七日。晴。中村氏から使ひあり、行つて見たら、正宗(白)氏が來てゐた。

七月廿八日。晴。新日本の楠山氏より原稿依賴、承諾の返事。蜂群は兩方ともどうしても出來た王臺を發達せしめない、まだ意志がないのだらう。いづれも九枠・十枠の群だのに。

七月廿九日。晴。

七月卅日。夜、雨。文學論をまとめて見たら、約千枚の嵩があるので、これを二卷にしようと思ふ。

七月卅一日。雨。東亞堂へ手紙。第一號、第二號の蜂群からおの〳〵三枠を拔いて、第四號・第五號を平均せしめた。淸子の父が來て、同居することになつた。

八月一日。晴。中央公論・サンデー、秀才等へ原稿請求。茅原(茂)氏へハガキ。

八月二日。晴。

八月三日。晴。東亞堂、サンデー、加藤(朝)氏、茅原氏より書信。加藤(朝)氏の爲めに、角田氏へ

推薦のハガキを出す。『新發想論』の下篇十二枚半を認めた。『近代思想と實生活』の校正が來初めた。

八月四日。晴。夫婦でとどろきの瀧を見に行つた。新潮社よりハガキ。伊藤(證信)氏來訪、留守。中村(春)氏來訪、將ギ二番まけ、一番分け。

八月五日。晴。サンデーより手紙、時事の山梨氏來訪。夜、ちよつと中村氏を訪ひ、初めて西山氏に會ふ。『先帝の御製』(九枚)を訂正す。

八月六日。晴。サンデーへ原稿二篇。

八月七日。高濱、北村二氏へハガキ。生方(敏)氏來訪。

八月八日。晴。楠山氏より『新日本』九月號への小說依賴に對し、承知の返事。時事の柴田(柴庵)氏來訪。第二號群が分封の念を起し初めたらしい、以前にうツちやり放しになつてる王臺の外にもまた王臺を作りかけてある。瀧田氏より『皇室觀』と諷詩半分と歸り來たる。

八月九日。晴。生田(長)氏紹介の某來訪。大阪の石丸氏來訪。楠山氏よりハガキ。

八月十日。晴。午前六時までに、サンデーへ送る、『脛の肉』(四十七片半、『十三峠』の改作)と時事へ出す『計劃と自負心』(十片)とを書きあげた。

八月十一日。晴。時事より稿料二圓五十錢。小川氏よりハガキ。

八月十二日。晴。サンデーより手紙、同じく返事。新潮社へハガキ。中村(春)氏を訪ふ。第一號群

もこないだから分封の念を起したやうだ。

八月十三日。久しぶりで、夕立。新日本への小說原稿「郊外生活」(四十六片)を書き終つた。同じく發送。今井(歌)孃來訪。

八月十四日。晴。諏訪氏へ手紙。吉江、野口二氏を訪ふ。

一　二十世紀の優勝者たるべき最大民族は何れぞ？
(政治上經濟上、思想上、文藝上はた生理上その他何れかの方面より觀て)

二　東洋人と西洋人と孰れがより多く世界の文明の發達に貢献せしか？

三　日本人の性格は將來世界の文明競爭の優者たるに適するか、其長所短所、國民性改造の必要ありとせば如何に改造すべきか？

「新日本」から以上の質問が來たに對する答へ(二片)を書き送つた。

八月十五日。晴。新潮社を訪ふ。ついでに正宗(白)氏を訪ふ。

八月十六日。晴。新潮社へ原稿(諷詩)。東亞堂へハガキ。吉江氏へ手紙。本多、德田(秋聲)、有倫堂、高安、三井、沼波氏を訪ふ。夜、筑紫氏を訪ふ。

八月十七日。晴。東亞堂、楠山、生方(敏)氏より書信。生方氏へ寄稿承諾の返事。岡村書店へいつ來るかの問合せ。春陽堂より使ひ來訪、「現代五人女」の出版交涉。印稅七分。

きのふ、蜂群は第一號を除いて、すべて貯蜜を殆ど喰ひ盡してゐたのを發見したので、けふ、砂糖蜜三斤の三分一を分與した。どう云ふ理由か、第一號だけはどの枠にも十分貯蜜があるのに。つまり、大群はこの暑さにも餘裕があるやうに働いたのだらう。寒暖計は八十八九度までものぼる。野外の花は最も少い時らしいが。花粉は矢張り澤山取つて來る。貯蜜の喰はれた跡へは、すべて產卵區域がひろがつて、花粉の貯へもひどく目に立つほどあるのもある。

千葉(鑛)氏來訪。夜、山梨氏を訪ふ。

八月十八日。雨。「享樂」一號に出す「明巢ねらひ」(廿八片)を書く。

八月十九日。晴。秋江氏が文章世界八月號に書いた無駄話のうちに、僕の一私言として書きあげた件は、事實が全く反對であるので、秋江氏へ抗議と絕交とを申し込んだ。同時に、同雜誌へ「橫合ひからの取り消し」文をハガキで出した。島村氏と須磨子との關係を僕が舊人的に輕信した言を、池田にゐる頃云つたと云ふのだが、寧ろさう云つたのは秋江氏だ。おのれの便利の爲めに、こちらの思想までも無意義に私用するやうでは、以後會ふ必要がない。時事新報に出す斷片語(十四片)を書いた。原(德)氏來訪。こないだ蜜蜂(と云つても、ただの蜂か知れない)が來て、コハク色の透明な物を垂れて行つたので、手に取つてなめて見たら甘かつたから、多分蜜だらうと思つたと云つたが、多分その蜂のうんこであつたらう。吉江、石丸、諏訪三氏からハガキ。僕所有の蜂の種類がイタリヤ種でない

やうで、而も黄色の全くないのも飛び出すのを不審に思つてたが、諏訪氏の返事でサイプリヤン種の雄に、カーカサス種の王が交尾した雜種であるのが分つた。

八月廿日。晴。吉江氏の紹介による長野縣の立田屋へ手紙を出す、弟に出させようと云ふ店に飾るフキの砂糖漬けに關し、若し取引きするとせば代金は後拂ひ、供給の分量、箱の種類と代價、この三個條の問ひ合せだ。サンデー、生方、田代三氏よりハガキ。田代氏へ返事。夜、原氏を訪ふ。

八月廿一日。晴。山田(孝)氏、田代氏と共に來訪。正宗(白)氏來訪。闘翠松と云ふ人、生方氏の紹介で來訪。第一號第二號の蜂群、どちらも王臺をうッちやらかしにしてあるのを發見した。第二號には、どの枠にも貯蜜が出來て、ふたしたのもある。

八月廿二日。雨。山梨氏來訪。北村氏へハガキ。

八月廿三日。晴。森田(恒)氏來訪。岡村書店よりハガキ、二百三四十枚の短篇集三四十圓位だとのこと、お話にならない。春陽堂よりハガキ。同堂へ「現代五人女」の廣告文參考を送る。佐藤(義)氏よりハガキ、中村(春)氏を訪ふ。夜、雨。

八月廿四日。雨、ちよッとあり。北村氏より返書並に僕の英文論文の材料にする樂譜。巖、來たる。「巣鴨村より」(三十八片)を書き終る(「わが國民の獨創」と「舊式家庭とその子女」)。

八月廿五日。雨あり。信州立田屋より返事。春陽堂より見本刷り。Open Court 會社より返事、僕の

原稿は着したが、今主筆ケーラス博士が旅行中だから歸つたら、見せると。西洋櫻草の種を播いた。もう、四五日前から秋のやうな氣分が這入つて來た。茄子が少し取れなくなり、取れたのも形が小くなつた。唐もろこしはすべて實が半分ばかりも出來てゐない。えだ豆はよかつた。昨今おやぢが小かぶ、にんじん、その他の種を播いた。ダリヤの枝をすべて短く切つてしまつた。きのふ、清子が母と共に百花園に行つたら、もう萩もその他の秋草も咲いてるさうだ。第一號群の蜂は前から貯蜜は減じなかつたが、第二號は今日見ると、大分貯蜜をした。その他は殆ど蜜がない、第五號に少しあるだけだ。このままにして置いて見よう――もう、近頃の秋草が――殊に萩も――咲き出したと云ふから。第二號に分封の念が矢張りあるのか、二個の王臺は大分形がよくなつて來た。箱にはあまるほどの群になつてるから、雄蜂などは多くは巣の上から追ひ拂はれ、底板の上にうよ〳〵まごついてゐる。

八月廿六日。雨。夕がほの大きくなつたのを一つちぎつた。瀧田、川手二氏へハガキ。

八月廿七日。昨夜より大暴風雨、午後晴れて、富士並に箱根山脈がはツきりと見えた。トマト、カンラン、ダリヤ、カンナ、朝顔の棚等が倒れたのを手當てしてやつた。

八月廿八日。晴。第三號群の巣門外に多くの蜂がごろ〳〵苦悶してゐるのを見つけた。一昨日來の風雨に出て疲れた爲めかとも思つた。箱内を調べて見ると、貯蜜は一滴もなく、二三個の蜂は巣房に首をつツ込んだまま、動かない。死んだのかと思つてそれを引き出すと、僅かに餘命があるのであつた。

僕は目黑に於ける日本蜂全滅の時の心持ちがひらめいた。と同時に、今にも自分が死ぬのを知らないで、死にかかつたのをせツせと運び出してゐる蜂もあつた。第四、第五の蜂群にも殆ど貯蜜はなかつた。直ぐ三群に給蜜をした第一、第二の群は各枠にふたされた蜜があるので大丈夫だ。第二號の王臺、矢張り生みつけられてない。「歐米の新婦人問題とその背景」（五十四片）を書き終つた。東亞堂よりハガキ。小山内氏歡迎會の通知があつたが、金がないので不參の返事を出した。

八月廿九日。晴。東亞堂へ行く。吉野氏を訪ふ（留守）。高橋（久）氏へ手紙。

八月卅日。晴。原氏來訪。春陽堂へハガキ。エマソンの「自然論」を改譯し初めた（十數年前の僕の譯があるのを東亞堂主人に話したら、出さうと云ふので、箱から引き出して。）

八月卅一日。晴、風。東亞堂と有倫堂とを訪ふ。前田（晁）氏へハガキ。平出氏へ手紙、著作家協會設立の件に就き、氏の發起しようと云つてゐたのが運んでるかどうかを聽く爲めだ。僕の方では大阪行き前に運びかけたのを近頃のやうに官憲がいい氣になつて來ては困るので回復しようと思つてるところだから、向ふが運んでゐなければ、こちらで更らにやり出さうと思ふ。

九月一日。霖雨。前田（晁）氏よりハガキ。植竹書院へハガキ。新譯の第二章の終までを東亞堂へ送る。第二號を二階つきにしてやつた、とても分封しさうではないから。

九月二日。雨。巖よりハガキ。平出氏より返事。病氣の樣子だから會ひに行つて相談しよう。二宮

（行雄）氏へ手紙（「閻魔の眼玉」を帝劇で買はないかの相談）。
九月三日。晴。吉野氏來訪。サンデー並に新日本へ稿料催促。新潮社の佐藤氏より手紙、プルタクの譯をいよ〳〵やつてくれとのことで、僕からも稿料の要求を返事した。各蜂群に給蜜。おみなめしを折つて行く子供があつた。母が病氣で、昨日から醫者を呼んでゐる。岡村書店來訪。小品集出版の相談（うり切りで四十五圓、但しその中に收めたものを他の書へ僕が流用するのはかまはないこと、菊半判三百ページ標準。）小說「獨り者」（六十片）を書き終つた。
九月四日。晴。夜になつて雨。楠山氏よりハガキ。富山房より稿料二十二圓。人見氏より手紙。サンデーより論文稿料十四圓六十錢（二圓餘なほ不足）。中村氏來訪。蜂群に蜜が貯へられないのは、一つには、もう無用の雄がゐる爲めだらうから、雄蜂驅除器で第一號から五六十匹取つた。氣候は冷やかになつた。
九月五日。晴。第一號から雄蜂を二三十匹取り除いた。サンデーへハガキ、小說稿料を送つて來ないのは二重賣りをしたと思つてだらうから、さう思ふなら、どうでもいいが、こちらは一度出したものでも丸で書きおろしと同樣の勞をしたのだと云つてやつた（「十三峠」を「脛の肉」にするには）。春陽堂よりハガキ。戶川（秋）氏の紹介にて廣井辰太郎氏來訪。生田（長江）氏來訪、夜おそくまで話した。秀才文壇より質問その返事。

九月六日。晴。原氏へハガキ。加藤(朝)氏よりハガキ。サンデーよりハガキ。原氏來訪。蜂群すべて多少の貯蜜をやり出したやうだ。京菜、そら豆、ほうれん草、等の種を買ひに行つた。

九月七日。曇、夕方ちよつと雨。新潮社を訪ひプルタク飜譯をきめた。印税一割で、そのうちから前借の工合は、原稿紙一枚につき三十錢。平出修氏を病床に訪ひ、著作家協會設立の下相談をした。雨に會ひ、新開店の久美羽へ這入り、瀧田氏を電話で呼んで飲んだ。藝者三人であつた。大阪の加藤氏來訪。(留守であつた。)

九月八日。夜、雨。サンデーへハガキ。蜂群いづれにも貯蜜がない、そばの花も咲き初めたのに。「巣鴨村より」「文藝家の道德」(二十二片)、「鄕土色の發揮」(十片)。

九月九日。晴。蜂群に給蜜。サンデーと「新日本」と「新潮」とへ原稿。中村(春)氏を訪ふ。夕方、熊蜂が一匹來たが、取り逃した。

九月十日。晴。「生と同一な藝術」(四枚)を人見氏に送る。春陽堂の人來訪。時事の柴田氏來訪。

九月十一日。雨。楠山氏より原稿受取のハガキ。山梨氏來訪、同氏が大きな佛語字書を以つてると云ふので、行つて La Trappe を引いて見た、トラピストの僧院の名であつた。

九月十二日。曇。時事文藝部よりハガキ。中村(武)氏よりハガキ。藝術座より招待狀。原氏來訪。春陽堂より使ひ。大杉氏と和氣氏と來訪、探偵がついてゐたやうだ。

九月十三日。晴。「五人の女」校了。赤蜂を一匹ぶち殺した。萩の早ざきが山の手線路に咲いてゐた。筑紫氏の言によると、萩の花はまだ盛りにならないのださうだ。原氏を訪ふ。

九月十四日。曇。原氏來訪。佐藤（稠）氏の紹介で、廣島と云ふ人來訪。大住舜氏かの手ら初めて紙、それに返事、片一方の目が脹れて不愉快なので、校正の外何もしないで暮した。

九月十五日。晴。島中氏より手紙。春陽堂より「五人の女」一千部に對する印税五十二圓五十錢を届けて來た。十五夜の月、全蝕がよく見えた。

九月十三日。夜あけ前に雨。晴。夜、月がよかつた。中村（春）氏を訪ふ。

九月十七日。晴。加藤（朝）氏來訪。原氏來訪。中央公論より詩の稿料五圓。これを原氏に融通した。「五人の女」の出版届に印を押した。

九月十八日。晴。第二號の蜂群の巣門に雄蜂驅除器をかけて置いたら、働蜂が十數匹その下で死んだ。どうした理由か分らない。佐藤氏來訪。坂口藤佐布といふ報知記者來訪、淡路の人だ。

九月十九日。晴。木村（鷹太郎）氏來訪、氏の發刊しようとする「日本民族」の寄稿を頼んで行つた。原氏來訪、八幡町へ養女並に養子の件、いよ〳〵公正證書になつた。これには、子女が十五歳に達するに從ひ、それ〳〵送籍のかたをつける事。送金は來年一月末から五圓宛の送金。上司氏が關西旅行から端書をよこした。朝、佐藤氏來訪、昨夜の文字を取調べて來てくれた。夜、淸子と共に有樂

座に「モナヷナ」を見た。西洋新劇の紹介もいいが、メテルリンクの如き、僕等から見ればまやかし物の劇を、而もあんなへツぽこ藝で見せて、あんなに客が集まるやうでは、日本もまだ〳〵心細い。
九月廿日。晴。サンデーよりハガキ。浮田博士へ同氏の論旨反駁の通知。加藤氏へ手紙。平出氏へハガキ。竹中と云ふ人よりハガキ、返事。天溪氏紹介の柴田某氏來訪。原氏を上野に見送つてから、川手氏と久し振りで玉突三回。
九月廿一日。雨。加藤氏よりハガキ。木村氏より手紙。昨日、蜂群をすべて調べたら、まだ〳〵貯蜜をしてゐないが、産卵はやり出した。試みにこのまま置いて置くが、どうなることだか？　第二號の二階を撤去した。
九月廿二日。雨。加藤氏よりハガキ。「巣鴨村より」――「優强者の教育」(三十三片)、「宣教學校の惰眠」(九片)。けふ、家庭學校へ本棚と蜂箱とをあつらへに行つた歸りに、一人の男が短い竹ざをのさきに蛙のむいたのをつきさし、そのさきをもろこしの根へさし出してゐるのを見た。何をしてゐるのかと思つてると、それを引ツこめてさをの根の方を土にさして立てた。一匹の土蜂がさきにとまつてゐる。指さきでしづかに蛙の肉を少しちぎり、それを別な細い棒きれのさきにのせ、蜂の口もとへ持つて行くと、頻りに肉をすつてた蜂がこの方に氣をつけ、これに抱きついた。そして間もなくそれを喰はへて飛んで行つた。男はそれを見のがさないやうに目で追つてゐたが、とう〳〵見失つてしま

つた。が、行つた方角だけを確めたと云つた。どうするのかと聽くと、かうして巣を見つけに行くのだと答へた。運んで行つたものを置いてまた同じさをへやつて來るに定まつてるからと云つて、じツとしやがんで待つてゐた。土蜂の幼蟲を取つて賣るのださうで、一匁十五錢するさうだ。巣が見つかれば、必らず直徑七八寸のが五六枚はかかさないので、けふも晝頃から五時頃までに三ケ所發見したと云ふ。蜜蜂は幼蟲を脫したのも煮て喰へるが、針をすべて取る爲め、生きながらふくろに入れて振ると、すべてふくろをさして拔けるさうだ。土蜂の幼蟲はつくだ煮にすると云ふ。

九月廿三日。晴。植物園に行く。プルタク二種を新潮社より送附。

九月廿四日。晴。高橋(五)氏來訪。エマソンの難點二三を聽いた。

九月廿五日。晴。原氏、大阪より安着のハガキ。

九月廿六日。雨。高橋(五)氏よりハガキ、帝國劇場へ行つて、マクベスを觀たが、作その物が外延的で少しも引きつけられなかつた。蜂に給蜜したが、第一號は前から多少ためてゐた。

九月廿七日。雨。エマソン「自然論八章」(二百六十片)を譯了した。

九月廿八日。晴。山本(三)氏よりハガキ、返事。時事より質問、返事。東亞堂へ譯を持つて行き、それから原夫人を訪ひ、それから高橋(五)氏を訪ひ、それからお繁さんを訪ひ歸つた。留守に正宗(白)氏と上司氏が來た。蜂に給蜜。

九月廿九日。晴。東堂亞へハガキ。岡村書店へ小品叢書中の原稿「岩屋の娘」(三百枚分)を以つて行つた。新潮社へ稿料を取りに行つたが留守であつた。正宗氏、平野氏(留守)、生方氏(留守)、小川氏を訪ふ。木村(鷹)よりハガキ。柴田(流星)氏の死を報ずるハガキ來たる。同氏とは曾て行き來したが、氏が時事の記者になつてる間に、僕の何でもない事件をおほげさに惡く云ひまわり、一度など僕が時事へ入社問題があつた時に、意外な寃罪を口述にしてじやまをしたと、同社の人から聽いたので、その後訪問もしたことがなく、葬式にも行く氣にならない。ありふれた耶蘇教信者に過ぎない。

赤蜂一匹を逸した。

九月卅日。晴。小川氏と昨夜約束した氏の庭の植木二十本、石十五箇、並に水蓮とその水鉢を三圓で持つて來た。それを植ゑつけるに夜遲くまでかかつた。留守に東亞堂主人が來た。公衆劇團より招待狀。加藤(みどり)氏よりハガキ。赤蜂一匹をうち落した。

十月一日。曇。加藤(みどり)夫人へハガキ。文章世界から十一月小說依賴。本村(鷹)氏よりハガキ。野口氏より手紙。浮田博士へ再びハガキ、返事がないから(無論返事は要求したのでないが)あの反駁を讀んだか讀まないかは知つて置く必要があるし、今一つは一般的耶蘇教家の通弊通り、反駁者に對し底意地の惡い超然家癖の人かどうかを試めしたい――からと云ふ意味を書いて。公衆劇團の「エレクトラ」並に(茶の家)を帝劇へ見に行つた。(茶の家)は脚本も藝も渠等の程度で可なりの出

來だが、エレクトラに至つては成つてゐなかつた。藝ばかりではない、ホフマンスタール共人が大した人物ではないらしい。あれで見ると、イブセンほどには勿論、メテルリンクだけの資格もない舊人だ。

十月二日。曇。東亞堂へ行き、「近代思想と實生活」の稿料殘りの半金三十五圓を受け取つた。新潮社へ行き、稿料さいそく。野口氏を訪ふ。春陽堂よりハガキ。

十月三日。雨。新潮社より小說稿料二十一圓。山本(三)氏よりハガキ。山梨氏來訪。

十月四日。晴。中村(春)氏を訪ふ(留守)。

十月五日。晴。野口氏へハガキ。玉川宅地經營部へ問ひ合せ。中村(武)氏より手紙。サンデーよりハガキ。森(盛)氏よりハガキ。佐藤(稠)氏を訪ふ。

十月六日。晴。サンデーより稿料十四圓五十錢。「近代思想と實生活」の校正全部を了す。堀正一氏よりハガキ。蜂群、いまだに貯蜜が少い。花粉は頻りに取つて來るが――

十月七日。雨。「今月の雜誌から」(四十六片)を時事の爲めに書き終つた。郁子氏より手紙。

十月八日。雨。小說「熊か人間か」(五十二枚半)を書き終る、中央公論へ。加藤氏紹介の近代劇協會の一會員が來た。正宗(得)氏へハガキ。

十月九日。晴。加藤氏よりハガキ。原稿を中央公論へ。並にサンデーへ。「表象派の文學運動」全部校了。中村(春)氏來訪。

十月十日。晴。時事へ追加六片（詩の句法に就いて）。正（得）、蒲原二氏來訪。岡村書店より小品叢書原稿半額二十圓。

十月十一日。晴。服部（嘉）氏、瀧田氏よりハガキ。筑紫氏の會へ行く。

十月十二日。晴。中村（武）氏へハガキ。吉丸氏へ、此の駁論を駁すること僕の論の出る日を通知した。西村氏へハガキ。蜂群に三斤の砂糖を半分と少しやつた。やり方が惡かつたのでか、第一號と第五號との巢門外に各々十四もしくは二十四死んだ。きのふ、會での話に、筑紫氏の裏に、僕の家から見える七かかへもあるもちの木があるのを知つた。散步の間に小いほこらが立つてるのを見たが、その小森が一本のもちであつたには驚いた。蜂には持つて來いだ。この頃、宅のコスモスへ蜂はよく行つてゐる。ダリヤにも、聯隊旗と云ふのには行つてる。どうもねぎは出ない。けふ、その部分の畑を返して、京菜や山東菜をまいた。ゐんどう、そら豆などは出て來た。里芋畑も半ばは返して京菜にしてしまつた。

十月十三日。晴。小說「醜婦」（六十一片）を書き終つた。蒲原氏より野口氏送別會通知。石田氏より「第三帝國」を送り來る。平野氏よりハガキ。博文館へ原稿を持つて行つたが、西村君は留守であつた。長谷川氏がゐた。丁度生方氏が來てゐて、三人の話をしてゐるうちに、生方氏の新雜誌（享樂第一號切りでまた別なのを出す）の名が「ゴシプ」と定つた。東亞堂へ立ちより、それからお繁さん

を訪ひ、カルタを三年やつて、散歩してから別れた。蜂にけふは殘りの砂糖を給蜜した。

十月十四日。夜、雨。おほそうじであつた。新潮社より手紙、アーサーシモンズか、アサシモンズと書くかの電報を打つてくれとのことであつたから、わざ〳〵なまつてアーサーと云はないでも、アサでいいと云つてやつた。英語の發音のなまりが殆どそれでなければならないやうになつてるのはをかしなものだ。a も、a: も、or もスヰフトの發音學を見ても、實際には同じで、イタリヤ音の a: と同じだ。丁度日本のアに當るので、それをまた延ばしてアーと云ふに及ばぬ。楠山氏よりハガキ。電報をうつたついでに、前田(晁)氏を訪ふ。

十月十五日。雨。西村氏よりハガキ。野口米太郎の渡英送別を蒲原、正宗(得)、高安、僕の三氏で山茶莊に於てやつた。それから正宗氏と共に森田(恒)氏を訪ふ。

十月十六日。夕方から雨。文展の初日を見に行つた。提燈屋の畫のやうなものばかりで批評するだけの價値は、洋畫にも日本畫にも、なかつた。織田(一)の大阪から見に來たのに出會つて、暫くロハ臺で話してると、中央公論の瀧田氏が來て、氏に新年號の小說を賴まれた。それから千葉(鑛)氏を訪ふ。「小僧」がここ四五日殆ど歸らない、そして目的のめすにばかりくツついて歩いてゐるのを見たが、瘦せて尻の骨などが突起して來た。それでも、他の犬を追ツ拂つて自分ばかりがそのめすを專有してゐるらしい。モクがそばへ寄つて行かうとしても、おそろしくうなつて近づけなかつた。德田(秋江)

氏からべんかいのハガキが來たが、成つてゐない。
十月十七日。雨。時事新報より稿料十圓。博文館より同じく貳十四圓。大住氏より手紙。辻氏へハガキ。中央公論より校正、禁止になりさうなところがないかと注意して來た。
十月十八日。曇。サンデーよりハガキ。米國リヸングエージ社より手紙。辻氏來訪(留守)。中央公論へ行き、稿料五十四圓を受取つて、歸りに瀧田氏並に島村氏と共に飮んだ。
十月十九日。晴。辻氏來訪、プルタクを下譯して貰ふことに定つた。僕は別に自分だけで初めから終りまで手にかけるのをやらうと思ふ。野口氏より手紙。瀧の川の康樂園へダリヤを見に行き、來年の一根二圓と一圓五十錢との二つを豫約した。佐藤(稠)氏を訪ふ。
十月廿日。晴。東亞堂並に瀧田氏へハガキ。丸善へ雜誌代を拂ひに行つたついで、オイケンの哲學とペータの「ルネサンス」とスノードンの婦人論とを購ふ。よみうりに上司氏を訪ひ、一緒に水野氏を訪ふ(內藤鋠作氏に會ふ)。蜂群はいづれも蜜を可なりためたが、まだ蓋が出來てゐない。相變らず產卵してゐるが、蜂の數は減じたやうなので、どの箱からも一枠づつ拔き取つた。
十月廿一日。夕方から雨。野口氏へハガキ。小川氏より轉居通知。
十月廿二日。曇。英文原稿、返送せられて來た、どうも文章が下手だから。野口氏よりハガキ二。池田氏より手紙。「言語の腐敗」(サンデー用紙二十三枚)。

十月廿三日。夜、雨。池田氏へ手紙(「青鞜」發行引き受けるや否やの件)。新潮社へ行き、「文學運動」の製本急立て二部を受け取り、野口氏を訪ふ(シモンズへ持つて行つて貰ふ爲め)。それから蒲原氏を訪ひ、野口氏と共に三人で銀座へ出で、別れのカフヱをニユヨークキチンでやつた。栗本氏も一緒であつた。午後九時、野口氏の渡英出發を送つた。池田氏に會つたので、臺灣茶店でちよつと手紙の用件を話して置いた。

十月廿四日。晴。川手氏より手紙。吉野氏來訪、夜までゐた。風氣味で、僕は早く褥に就いた。野口氏へ僕の英文「エマソンと王陽明」を送つた、(加茂丸宛にて)。

十月廿五日。晴。瀬沼女史よりハガキ。

十月廿六日。晴。寢てゐてもつまらないので、當てもなく家を出た。先づ木村(鷹)氏を訪ふ。留守。正宗(得)、吉江二氏も留守。ちよツと大久保文學クラブに立ち寄り、それから戸川氏を訪ふ。歸りに尾島女史と大杉氏とを訪ふ。

十月廿七日。曇。楠山氏へハガキ。著作家協會設立の件につき、話があり田山氏を訪ふ。その節、僕の島崎氏に對する定評を酷だと云つて辯解し、田山氏は藤村氏には詩人のやうなところがあるのを出さないやうに、出さないやうにとしてゐるのがいい、また同情すべき點だと云つた。が、僕はこれに答へて、その出さないやうにしてゐるものがヹルレンなら取り柄があらうが、テニスンなら何でも

ないぢやアないかと云つた。これには田山氏も異論はなかつた。田山氏自身も主觀をうとんじてゐちやア駄目なのだらう、など云ふことをしみ〴〵云ふやうになつたのを見て、僕は氏の平面描寫論の轉機が來たのだと注意した。と同時に、僕が前から云つてた方へ近づいて來たのだ。それから平出氏を訪ひ、いよ〳〵協會の下相談に取りかかる手筈をするやうに定めた。田山氏の宅で少し酒を飲んで行つた爲めか、ふとした拍子に火鉢をひツくり返し、右の手の甲をやけどうした。平出氏宅の電話を借りて仲小路氏へかけ、兼て國で知つてる同氏細君から氏に面會するやうに頼まうとしたが、ゐないさうであつた――近來の脱黨、その他の問題につき、忠告的な攻擊を氏の面前でして、實際にどんな考へなのかを見たいのである。

十月廿八日。曇。平出、生方、岡村書店、本多氏へハガキ。

十月廿九日。晴。昨日、第四號を第三號に合同して置いたら、けふ、もとの位置へ歸るのが多いので、夜、給蜜して巢門をふさいで置いた。筑紫氏から左の球根を買つた。

チユリツプ優等種十五種混合
　　二球　金　.30
同　新種八重咲赤絞極上
　　二球　　.30

同　早咲種　五球（各色混合）	.40
シラー（可憐ナル白色梅花形ノ花ヲ二月頃開ク）	
五十球	.15
ヒヤシンス紫ヤグラ咲極上	
二球	.34
同　雪白一重　極上二球	.30
同　赤一重　極上二球	.30
同　紫一重　極上二球	.30
同　名稱札落　雜球三球	.30
フリージヤ（有香白色筒咲ニシテ三月頃開花）	
五十球	.15
喇叭咲水仙極大輪（黄色）	
二球	.06
計十一種	2.90

賣價金二圓九十錢也

内四割引
代價金一圓八十四錢也

十月卅日。晴。ゆふべからの第三號群の狀態を注意してゐると、箱の中でぶう〳〵云ふのがきこえた。それでも、出るものがなかつたやうであるが、ゆふかたになつて、あまりその聲が大きいので行つて見ると、巢門外に二十匹ばかり出たのがかじり付いてゐた。そして出て來るのもあつた。どうせどこかへ穴をあけたのなら、それまでだと思つて、巢門のかな網を取りのけてやると、直ぐ二三十匹が突進した。最初に出たものは出ると直ぐ氣力を失つた。その樣子を見て僕は戰爭に於ける圍みをうちから破る決死隊を思ひ起した。古く新聞紙をつめてある巢門わきのところに一二匹づつ出られるほどの穴をあけてあつた。蓋をあけて見ることだけはしなかつた。正宗(得)氏來訪、畫家と文學者との談話會催しの相談に來た。來月五日、二人の名で二十名以內の人々に鴻の巢へ來て貰ふことにした。東亞堂の店員來訪、「實生活」中の文句に少し訂正を加へてくれろとのことであつた、禁止をさける爲めに。

十月卅一日。晴。正宗(得)氏へ婦人をも四五名招くことに云つてやつた。博文館(太陽)より稿料十四圓、サンデーより十五圓。第三號群、けふは、もう、落ちついたらしい、もとの巢際へ行くものもまご〳〵した後に第三號地へたどつた。天長節上野へ行く。

十一月一日。晴。サンデーへ受取りのハガキ。田代氏、辻氏來訪。

十一月二日。晴。第三號群をあけて見たら、貯蜜は多いが、まだ蓋はしてない。第二號群も同じ。けふ、朝は五十度であつた。花壇並に京菜へ霜よけをした。蜂の箱はすべて防寒のござを捲いてやつた。けさ、水じもが下りてゐたさうだ。生方氏へ返事の催促。

十一月三日。晴。中村、佐藤二氏を訪ふたが、留守。散歩がてら、靑鞜社事務所を訪ふ。

十一月四日。晴。生方氏よりハガキ。富山房より稿料十圓（但し枚數に比し甚だ少いので、どうしたわけだか聽きにやつた。）新潮社より今年中の藝術界に於けることを聽きに來たので、花袋氏の「樂園」と秋聲氏の「緣きり」はまだ讀まないが、讀んだうちでは、白鳥氏の「心中未遂」、俊子氏の「憂鬱な匂ひ」などがよかつた。畫界では、靑木氏の畫集が出來たこと、そして劇界には感服すべきことがなかつたと返事した。花壇の霜よけをした。第一號の蜂群を二重箱にして、その間に新聞紙のくづをつめた。枠は七枚であつた。

十一月五日。晴。原氏大阪より來た。加藤（朝）氏來訪（留守）。田代氏よりハガキ。正宗（得）氏と僕とで發起した會が鴻の巢にあつて、男女十二名が集つた。

十一月六日。晴。第三號以外へ給蜜。平出氏よりハガキ。加藤、田代、平出氏へハガキ。巢鴨郵便局長へ手紙（犬の爲めに配達不能と云ふその附箋がついて郵便物を遲れさせた件）。「巢鴨村より」の

うちへ「個人主義と道德の實質」(再び浮田博士へ)を四十八片。博士は太陽に於て僕のさきの議論に、答へたのを僕が見てだ。楠山氏よりハガキ。

十一月七日。晴。吉野氏を訪ふ。

十一月八日。晴。加藤氏を訪ふ(「近代」新年號に脚本一篇を受け合ふ)。原氏を訪ふ。川手氏を訪ふ(留守)。歸りに今井歌子氏を訪ふ。

十一月九日。晴。尾島菊子氏、加藤朝鳥氏よりハガキ。中村氏を訪ふ。原氏夫婦來訪。

十一月十日。晴。サンデーへハガキ。尾島菊子氏も來る筈で、目白の日吉まき子氏を訪ねたら、約束の日變更の知らせが行き違つて、僕だけであつた。菊子氏よりハガキ。

十一月十一日。晴。三井といふ藥劑師で、偏べきだが、一種の考へを以つて日本主義を主張する人が筑紫氏の紹介で來て、木村氏に紹介を賴んだので、つれて行つて會はせた。僕は兩氏の話を聽いてゐた。それから、直ぐ出發、稻毛の海氣館へやつて來た。一年と云ふもの、旅行する餘地もなかつたので、少し保養しながら、新年號の小說と脚本とを書くつもり。松原の中の家で海の風が吹き入る。今夜は、殊に、月の夜だ。

十一月十二日。晴。「巢鴨村より」(道德の內容と戀愛論)四十八片を書き終つた。瀧田、本多、淸子、楠山、繁子氏へハガキ。

十一月十三日。夜、雨があつた。風も强かつた。

十一月十四日。けさは雨風であつた。午後少し落ち付いた。家より手紙。岡村書店より校正(「岩屋の船」の校正がはじまつた。)中央文學より文章座右銘をてうして來たから、「文章は卽ちその人の生活でなければならないので、人生觀と同樣、外延的傾向を避けて、內部の實質を捉へるように努むべし。何とかうまく形容しようと云ふ心を起すのが、一番文章を作るものの避くべきことだ』と返事した。今夜、長篇「未練」の第四、第五を書いてゐる時、お鳥の本物がふと目の前にまざ〳〵と見えた氣がして、海氣館の離れに獨りでぽつりとしてゐるのが何だか怖ろしくなつた。淸子へハガキ。岡村書店より『アボト先生』は餘るので取り返した。

十一月十五日。曇。滋子氏よりハガキ。本多氏よりハガキ。本多氏へ手紙。瀧田、植竹二氏へハガキ。尾菊氏へハガキ。

十一月十六日。晴。瀧田、茅原(華山)、服部、淸子等の人々よりハガキ。瀧田氏並に茅原氏へ返事平出、サンデー、上司氏へハガキ。

十一月十七日。雨。午前四時頃、「未練」(上篇二百〇九片)を書き終つた。富山房より不足稿料五圓。淸子へハガキ。

十一月十八日。曇。サンデーへ原稿。茅原、淸子二名よりハガキ。稲毛より歸京、原稿を中央公論社

に渡しに行つたついでに、三井氏を訪ふ。

十一月十九日。晴。新潮社を訪ふたついでに、正宗(白)氏を訪ふ。日吉夫人にハガキ。新潮社へは飜譯書出來を取りに行き、短篇集もしくは長篇「斷橋」の出版交渉をして見た。

十一月廿日。雨。辻氏へハガキ。浮田氏へ僕の反駁の出たこと並に誤植訂正の通知。山梨氏へ手紙植竹書院へ今一度傑作叢書へ入れないか若しくば別に短篇集をやらないかの交渉を出した。並に田村俊子氏を紹介。川手氏より手紙、區會議員撰擧に一票を取つてくれろとの依賴で、田中(正平)氏へつれて行つた。田中氏とは久しぶりで會つたが、相變らず形式に傾いた博士だ、熱烈な惡罵はおとろへないが――。

十一月廿一日。曇。滋子氏よりハガキ。島中氏から手紙、同じく返事。昨日「表象派の文學運動」十部を受取つた。歸京早々、蜂群を調べて見たら、すべて貯蜜は十分あるやうだが、まだふたをした部分は多くない。第一號二重箱にした所の如きは、最端の枠の蜂が三四匹這つてる、そとがはまで一杯貯めてある。けふ、ダリヤ並にカンナの根をあげた。試みに三ケ所のダリヤをそのままにして見る。昨日、瀧田氏來訪、「未練」はあと六十枚まで增して完結して四月の特別號に出すことにして、別に四十枚のを依賴だ。東亞堂へ手紙。書棚屋へハガキ。

○稻毛の旅館にゐる時、あまりに月がよささうなので、筆を擱いて外へ出た。可なり高い而も立て

こんでゐる松原の間を海岸へ出ようとすると、門まで下りて行く道で一匹の大きな犬が鼻をふん〳〵云はせて後ろへやつて來た。三四才の子供ほどなので、若し吠えられては困ると思つたが、向ふを驚かさないやうにふり向いて『うし〳〵』と聲をかけて見た。しツぽを振つてゐる。これでは大丈夫だらうと見て、僕は口ぶえを吹いて少し走り加減に歩くと、渠は僕のさきに立つて、僕の行く方へ行くのである。

淺い海岸だが、滿ち潮で岸まで寒い月の光をきら〳〵させてゐる。その中へつき出たさん橋やうの渡りがある。近處のものがそこへ渡つて行つて物など洗ふところだ。渠は僕よりさきにそれを渡り、僕の從ふのを――後ろを向き〳〵――みち引いたが、そのとツ鼻が海の中へすべつて行つてるところへ行つたら、渠は驚いたやうにあとずさりし、それから僕をぬけてあともどりした。

僕はずツととツ鼻へ進んだ。そして、うちに殘して來たよく吠える犬は今ごろどうしてゐるだらうと思ひ出しながら、暫く海の空氣を吸つてゐた。時候が時候だけに、宿に滯在してゐる客は僕だけなので、ふり返つて見ても、海岸に人影一つ見えなかつた。珍らしい客に夜の松原全體を見せてやると云はないばかりに、月はその上へあがつてゐる。僕は蔭ある方へもどつて行つた。

すると、また同じ犬がついて來た。

僕は駄菓子屋へ立ち寄つてかたパンを二つ買つた。そして少しづつ折つて、これを與へながら、

『吠えるなよ――吠えて呉れると、散歩も夜出來ないから、ね。』
『この犬は吠えません』と、そこのお婆アさんがそばから口を添へた。入り口の障子が少し締め殘つてるところから、首を出してパンを無器用に拾ふ物の頭は、猛惡なブルドクのそれのやうだ。
『さうか、ね。』から輕く受けたつもりであつたが、この無器用で、且、落したパンのありかを時々探し得ないでゐるのを僕は渠が喰ひたくもないものをと云つてるやうに、薄氣味惡く取れた。
僕はこの犬と共になほ海岸をぶらついてから松原の中にある離れの二階へ返つた。
賴まれて書いてる新年小說が、もう、終りに近づいた勢ひを受けて、夜あけがたまで筆を執つてゐたが、それから褥に這入り、午前十時だと云ふに、起された。
窓からのぞくと、ぶらんこのかけてある林間の空地で、掘りぬき井戸を掘つてる大輪の回轉してゐるのを背景にして、三四才の子供が二名よたよたして步きながら遊んでゐる。そしてゆふべの犬が同じほどの脊なるこの二名の間へ這入り、二名からして脊中を叩かれたり、耳をいじくられたりして、怒りもしないでぴんぴこ尾を振つてゐる。茶色に黑毛の少しまじつたおとなしい犬だと思はれた。
『何と云ふ犬だね、あれは？』
『皆があかと申してをります。』女中ちよツと見て、から答へた。
『あかあか』と、僕は呼んで見た、手には、ゆふべのかたパンの殘りを持つて。

一向聽えないやうであつた。二三度呼んでるうちに、それでも氣付いたと見え、窓の下へやつて來た。で、僕はパンをほうり投げてやつたら、矢張り、受けることを知らないで、落ちたのを追つて行つて拾つた。

『こいつは人に吠え付くか、ね？』

『いいえ』と、女中はほかのことをしながら、『おしですから――』

『おうしかい？』僕はちよツと不思議な氣がしたが、呼んで見ても、パンをやつて見ても、その動作ののろいのをそれが爲めか知らんと考へた。『ぢやア、人の聲も聽えない筈だが――』

『どうですか――』

『全體、どうしておうしだと分つたのだ』と、僕は根問ひして見た。

『皆が試しによくぶちますが、どんなにぶつても聲を出したことがありません。』

『可愛さうに』と、僕は云つて、渠に最後のパン切れを與へた。

もう、ないのかと云ふ風に渠は上を仰ぎ見てゐたが、やがて海岸の方へてく〳〵歩いて行つた。

『あか〳〵あか』と、子供は後ろから呼んでゐた。

役に立たない畜生犬と云つて誰れにも相手にしられないのであつたが、いつのまにか、拾はれて、煙草や郵便切手を賣る家の、獨り者の婆アさんに飼はれる犬になつてるのださうだ。

以上、日記の部分を「啞の犬」として雜誌「處女」へ送つた。

十一月廿二日。晴。尾島菊子氏よりハガキ。中央公論より二十圓と五十四圓五十錢との爲替來たる。新潮社よりハガキ。散歩の道で、茶の花が垣根になつて咲いてるのを見た。コスモスは歸京當時、もう、駄目であつた。

十一月廿三日。晴。吉野氏來訪。田村俊子氏來訪。植竹より手紙。平出氏よりハガキ。東亞堂より手紙。

十一月廿四日。風。岡村書店へハガキ。瀧田氏よりハガキ。千葉氏來訪。「お仙」(七十片)、中央公論へ。

十一月廿五日。晴。加藤(朝)氏へハガキ。サンデーへハガキ往復。反省社へ原稿を持つて行く。

十一月廿六日。晴。正宗(得)氏よりハガキ。高橋(五)氏よりハガキ。正宗氏の畫會主意書を小塚(正一郎)、神崎氏、堀氏へ送つた。

十一月廿七日。晴。岡村書店よりハガキあり、使をやつて殘金二十圓を受取る。加藤氏へハガキ。「近代」に依頼され脚本一篇、「解剖學者」(九十九片)。

十一月廿八日。晴。加藤氏へ原稿を持つて行つた。川手、平出二氏を訪ふ。辻氏來訪。

十一月廿九日。曇。「時事」の質問へ答へ。新發田新聞の質問へ答へ(その一つは地方の家庭に讀ます

べき書籍に就ての意見と云ふのであつたら、僕はそれに答へて――地方人が東京風に書いた物を讀んで、これを眞似るのは實生活上に誠意を缺く結果を來たす。僕は小學校の教科書が地方に於ても東京語で書いたのを使用してゐるのが一番人間を墮落させる原因だと思ふ。先づ標準語の小學教科書を打破してから、地方家庭の讀み物などの相談は初めるがいいと思ふ。）鈴木（全眞）より老母の死を報じて來た、香奠一圓を送る。加藤みどり氏よりハガキ。石丸氏よりハガキ。

十一月卅日。風。三井、筑紫、その他一名一緒に來訪。サンデーより十六圓五十錢。辻氏來訪。

十二月一日。雨。原氏へ手紙。大阪の高橋氏へ拾圓返却。「近代思想と實生活」の見本出來。東亞堂へ手紙。瀧田氏、佐藤氏、辻氏へハガキ。

十二月二日。晴。鈴木（全）氏よりハガキ。「巣鴨村より」（政治思想の腐敗と缺乏）（二十三枚）。

十二月三日。辻氏來訪、夜、同氏と江戸子へ行つて會食し、それから上野、淺草をぶらつき、江川の玉乘りを見た。はしご乘りの曲藝を見て、僕が子供の時、それが半分ばかりやれてゐたのを思ひ出した。「炭屋の船」（三百二頁）の校正終る。加藤、岡村書店へハガキ。

十二月四日。晴。「近代」へ送つた脚本が「近代」の維持がもう困難なので歸つて來た。これを反省社へ送つて、來年二三月號のに一考を煩はせた。今夜プルタクの飜譯を全部何枚になるか勘定して見たら、五千枚には大丈夫ならう。うかうか相談して見たが、いよいよかうしてやつてゐると、なかなか

大事業だ。

十二月五日。晴。國分まさをと云ふ婦人、生田(長)氏の紹介で來訪、曉と云ふ雜誌への論文と小説とを依頼。五日會へ出會。「敎育界批議十一ケ條」(十五片)。

十二月六日。晴。國分氏へ原稿。岡村書店へ「炭屋の船」の出版屆を送る。平出氏よりハガキ。叔父の小林(克衞)氏來訪、墓地に關する實印捺しを賴みに來た。殆ど全く出入りをさせなかつたのだが、年の加減で弱い〳〵人になつてるらしい。それから見ると、今ゐる清子の父などは殆ど二十も上でありながら、物も分り又氣もはき〳〵してゐる。

十二月七日。晴。三井(良)氏來訪。田代氏の友人と云ふ靑年來訪。國分(ま)氏よりハガキ。西村氏より手紙、同じく返事。筑紫氏を訪ひ、同氏のよく行くと云ふ後藤新平氏へ、折を見て會ひに行く約をした。無論、僕の話を敬して聽く氣が出ないならわざ〳〵行く必要もないのだが——兎に角、後藤と山本(權)には會つて意見も述べて置きたいと思ふ。おとゝひの晩買つて來たギニアピグ、乃ち、天竺ねづみのつがひの活動を見てゐると、鼠にも、ふくろにも、みみづくにも、兎にも、猫にも、鳥にも、豚にも似たところがあつて、而もその物をねだる聲がかなりやのさいづる聲のやうだ。

十二月八日。晴。北村、小林二氏よりハガキ。北村氏の紹介で非田絃聲氏來訪、新潮社へ第一回分の飜譯原稿百六十一枚(一行置きに書いてあれば正味八十枚半)を持つて行つた。小川氏並に滋子氏を

訪ふ。
十二月九日。晴。伊藤證信氏が細君並に二名の青年と共に來訪。きのふから、蜂蠟を費て精撰して見た。
十二月十日。雨。辻氏來訪。尾島(菊)氏よりハガキ。新潮社から飜譯金の最初が來るのを待つてゐたが、來なかつた。
十二月十一日。晴。千葉氏より手紙。木村(鷹)氏よりハガキ。佐藤、中村二氏を訪ふ。氣分がよくないので早寢。
十二月十二日。雨。東亞堂へハガキ。有樂座へキネトホンを見に行く。
十二月十三日。晴。加藤氏より手紙。神崎氏よりハガキ。新潮社へ行き、譯稿八十枚分の稿料二十四圓を受取つた。
十二月十四日。風。佐藤氏、平出氏よりハガキ。新潟縣から未知の人の手紙。(返事せず。)辻氏來訪、下譯をことわり、もツと進行する爲め、毎日僕の口述を筆記しに來て貰ふことにして、日曜以外毎日五時間、月給二十圓を出すことにきめた。サンデー新年號から「事實と批評」と改め、その第一回「治安警察法第五條の改正」(サンデー用紙二十四枚)を書いた。
十二月十五日。晴。二三日前、蜜の壜内に白いごみが浮いてゐるのを發見したと思つたら、凍りか

けてゐる泡であつた。佐藤、近重、二氏から「實生活」受け取りの通知がこちらへ來た。東亞堂よりハガキ。淸子の父がけふからかの女の兄の方へ引き取つた。
十二月十六日。雪。神崎氏へ手紙。瀧田氏へハガキ。サンデーへ原稿。佐藤氏へハガキ。朝から雪がふりつづき、つひに十七日の午前二時頃もまだ降つてゐる。三四寸は積んでるだらう。
十二月十七日。晴。日光に照らされてきら〳〵する雪は、七八寸も厚さがあつた。蜂の巢門はそのままであつたが、そこだけは雪が解けてゐて、入口をふさぐやうな心配はない。
十二月十八日。晴。木村(鷹)氏來訪。
十二月十九日。晴。奧田文部大臣より「近代思想と實生活」を受け取つた禮狀。筑紫氏を訪ふ。
十二月二十日。晴。吉野氏來訪。東亞堂より五十圓、但し「自然論」譯料のうち。
十二月二十一日。晴。東亞堂へハガキ。帝國劇場へサロメを見に行つた歸途、中村(春)氏に會つたら、入場券を吳れるつもりで一枚持つてると云ふから、家族の行くのに貰つた。天竺ねづみのめすを、さきに死んだのを補つてやる爲め、二匹買つて來た。
十二月廿二日。曇。
十二月廿三日。晴。
十二月廿四日。晴。神崎氏より手紙。新潮社へハガキ。

十二月廿五日。晴。東亞堂より手紙。
十二月廿六日。廿七日。廿八日。午後十一時より十二時の間に一中隊許りの演習があり、不都合。
十二月廿九日。新潮社より譯料二百七十枚分八拾圓。
十二月卅日。晴。筑紫氏より水蜜桃一本を貰ふ。平塚女史來訪。
十二月卅一日

大正三年一月

一月一日。晴。郁ちやんを訪ふ。(小松氏に會ふ。)
一月二日。風。佐藤氏來訪、誘はれて田村(松魚)氏を訪ふ。
一月三日。風。青鞜社の會が僕の家であつたのでおつき合ひをした。
一月四日。晴。蒲原、瀬沼、正宗、芝川氏を訪ふ。
一月五日。晴。今井(歌)、吉野、生田、櫻井、倉辻氏を訪ふ。
一月六日。
一月七日。晴。滋子氏を訪ふ。歸途、筑紫氏宅のカルタ會への招待へ行く。
一月八日。
一月九日。晴。丸善、新潮社、岡村書店へハガキ。「新婦人」社へ質問の答へ。
一月十日。晴。十日會へ行つた。淺田氏より太陽への寄稿依賴。

一月十一日。晴。淺田氏へ返事。千葉(鑛)氏より碁會の招待狀來たる。サンデーより稿料のうち、拾圓だけ來たる。

一月十二日。晴。三年振りで岡野碩氏より迎へが來たが、さしつかへ。

一月十三日。晴。千葉氏の宴會へ招かれ、初めて中島德藏、隈本有尙、高木壬太郞、岡田哲藏、得能文等の諸氏に遇つた。「新春作物の批判」(五十片)

一月十四日。大風、雨あり。太陽より稿料十五圓(不足に付き、その分だけ請求)。蒲原氏よりハガキ。讀賣よりの質問に答へ。

一月十五日。晴。岡野氏を訪ふ。加藤(朝)氏來訪。蜂群の第四號を調べたら、蜜のふたがすべて切れてゐて、而も少ししか貯藏がないので、暖いうちにちよツと給蜜して見た。

一月十六日。晴。鴻の巢へハガキ。讀賣より久し振りで原稿依賴。蜂の全群に給蜜。

一月十七日。晴。藝術座の「海の夫人」を見に有樂座へ行く。サンデーへハガキ(先月原稿不足催促)

一月十八日。雨。加藤氏よりハガキ。

一月十九日。晴。太陽より追加稿料五圓。東亞堂へハガキ。蜂は給蜜を大抵吸收してゐたので、今一度全群に吸蜜した。けふはどの群も花粉を取つて來た、多分ビワかつばきのであらう。夜、郁子氏

を訪ふ。佐藤氏を訪ふ、（留守）。「現文界と帝劇と婦人」（十三片）。
一月廿日。晴。よみうりへ原稿。
一月廿一日。晴。西本氏來訪。
一月廿二日。晴。サンデーよりハガキ。休刊の通知。大寒に入つても、蜂蜜は壜内に於て半ば凍つてるばかりで眞ツ白になるには至らず。
一月廿三日。晴。東亞堂よりハガキ。（文藝論出版見合せのこと。）帝劇へ「マダム、バタフライ」だけを見に行つた。
一月廿四日。晴。神崎氏よりハガキ二。

生田長江氏の言として以下の文「雜誌トヂコミ」がはり付けてある。（編者）

文壇の自然主義運動に對する部分的の小反動として、所謂享樂派なるものの現はれたのも、もはや兩三年乃至三四年以前の事となつた。その小反動は更にそれ自らに對する小反動を呼んで、斯樣の戲作的文學もやうやく飽かれて來た。これと共に自然主義思潮の本流を繼承する文壇の中心傾向は、新浪漫主義新理想主義等の旗幟を飜へしながら、再びその人生に對する嚴肅の態度に立ち歸らうとしてゐる。

ところで曾つて善き戰を戰つた自然派の老將等は、この最近の風潮に對し、如何なる關係に立つてゐるか。

島崎藤村氏は如何に。田山花袋氏は如何に。島村抱月氏は如何に。その他の某々氏等は如何に。

少くとも思想問題に關して、此後尙ほ健鬪をつづけて行かれさうなのは、岩野泡鳴氏位なものではあるまいか。

「傍觀的態度」が意味ありげに言明されたり、「藝術と實生活との間に橫る一線」が用心深く劃されたりした時代から、孤立して「獨存自我」の「心熱」を論じ、「悲痛の哲理」を說いてゐた泡鳴氏は、今日のオイケンやベルグソンなどを口にするところの新しき道德論者に對し、明白にその先驅をなしたものであると思ふ。

所謂無理想無解決の意味に於ける自然主義の後をうけたる新しき人生觀は、一度び否定せられたる人生の、再び肯定せられたるものでなければならぬ。一度びも否定されたことのない、ナイイブな人生の肯定——それが所謂享樂主義と云ふ淺薄輕浮なる人生觀である——と混同されてはならぬ。

生きようとするものは、まづ一度び死んで來なければならぬ。三日目によみがへつたと傳へられる人は、十字架をとりて我に從へと敎へてゐる。ツアラトウストラの超人は沒落を憬憧するものとして說かれてゐる。人はただ自らを殺すことによつてのみ、自分を活かすことが出來る。私共は刻刻に自らを殺して刻刻に自らを活かすより外はない。これに名づけて古くより克已の生活と言つてゐる。

否定の後の肯定と云ふ考は、否定その物に內在するところの肯定にまで進んで行く、寂滅爲樂の哲學がそれである。ショオペンハウエルの解脫觀がやはりそれである。

一月廿五日。晴。

一月廿六日。晴。郁子氏と小松氏來訪。

一月二十七日。晴。大阪の奧村氏來訪。

一月廿八日。晴。諏訪氏へ送本。新潮社へ行つた序に正宗氏を訪ひ、氏と一緒に田山氏を訪ふた。

一月廿九日。晴。筑紫氏を訪ふ。「蒲原氏へ」(二十一片)。「若宮氏へ」(五片)。
一月卅日。晴。讀賣と新潮とへ原稿。大阪の石丸氏よりハガキと新聞とが來たが、僕の曾て氏に語つた話を、斷りもなく、また意味も違つて、文にして出したので、以後そんなことのないやうにハガキを出した。
一月卅一日。晴。人見氏と若宮とへハガキ。新潮社へ行つて二百枚の譯料六十圓を受け取つた。小川氏に會つたので一緒にバーへ這入つた。荒木、吉村、麻田、德田(秋聲)氏訪問。その前に小川氏と別れる前に一緒に加能氏を訪ふ。辻氏へ十圓を渡す。
二月一日。晴。生方氏よりハガキ。
唯今御葉書拜見、小生は舊臘中取るものも取りあへず旅行に出かけ、雜司谷の家は全部引拂ひて留守の人も無之去りとて今さら急には歸られず誠にお氣毒樣ながら如何ともなし難く心勞いたし居り候、何れ歸京次第原稿持參謝罪に參る可く候草々。
運動がてら此氏を訪ふ。
二月二日。晴。三木(露)氏來訪、留守。北海道の瀧川氏來訪。北村、上司、田中、木村、正宗、吉江氏を訪ふ。原氏へ手紙(八幡町の件、かの女がなほ頑迷なことを云つてるので、仲に這入つた原氏に注意した。)

二月三日。晴。植竹氏へハガキ。「よみうり」より稿料四圓。

二月四日。晴。中谷氏來訪（新日本の用）。瀧田氏來訪（中央公論の用）。柴田氏來訪（時事の用）。「女優の現狀」（八片）。

二月五日。晴。原氏より返事。植竹書院よりハガキ。

二月六日。

二月七日。

二月八日。大雪。淡路會よりハガキ。小川氏の「夜の街にて」到着。新潮社へ行き、百枚の飜譯三十圓を受け取つた。プルタルクを六册にして出すことに定り、またこの書その物を推薦する手紙を、出版者の都合上、奥田（義）、黑岩（淚）、芳賀（矢）、三宅（雄）、尾崎（行）、並に花井（卓）の六氏に賴むことにした。三宅、芳賀、佐藤（稠）氏へ手紙。新潮社へ手紙。

二月九日。晴。昨夜の雪五寸。岡村書店へハガキ。淡路會へハガキ。春陽堂へ行き、「停電」稿料三十八圓四十錢受取り。（但しなほ十圓の不足。）小松氏を訪ふ。

二月十日。晴。午前四時產婆を呼びに行つた。淸子、產氣が出さうであつたが、產婆は今夜中大丈夫だと云ふので、十日會へ出席した。歸りに、現政府彈劾の餘黨が電車をとめてゐるとて丸の內へまわれず、上野の方からまわつて歸つた。午後十一時、また產婆を迎へに行つた。故障がありさうなの

で、念の爲め濱田病院の渡邊氏をも迎へにやつた。

二月十一日。晴。午前四時頃、渡邊氏が來ての診察によると、子宮口が小いので出にくいのだとのこと。然し本日の正午過ぎまではまだ產氣が進むまいと云つて、六時頃に一旦歸つて行つたが、十時頃から再び來て、多少は進んでゐるのを確めた。產婦の腹を暖めたり、かんてうをしたりなどしたがとても出さうでない。僕が時事新報依賴の原稿を書いてると、午後四時頃、醫師はいよ〳〵手術をすると云つて來た。機械を二本入れて、兒のあたまをはさみ、引き出した時ぽき〳〵と云ふ音がした。子宮口の破裂だ。血と共に仰向けに出て來た兒は、出ると直ぐおぎやア〳〵と泣いた。大きく開いて泣く口の中やあたりは血だらけであつた。きん玉が比較的に大きいものだと僕は思つた。醫師は機械で口内や鼻の穴の血を吸ひ取つてから、ほぞの緒を切つた。產婆が兒に行水をつかはせてから、後產があり。その後で、醫師は裂けた口を縫つた。それに手當てを施し、腹部を庭の雪でひやして置いてから、醫師は歸つた。產婆の用務はなほつゞいて午後の九時頃までかかつた。子宮口が小いところへ兒のあたまが大きく、且つらは向きに出て來たので、廣い額部が出をさまたげた。その上に、また、產婦の精氣があまり長い苦しみと二夜の睡眠不足とでよわつてゐたので、難產の條件が三つにも四つにも重なつたのであつた。人間が生を營む最初からして、斯くも猛烈な自我主義なのだ。母體を蹴破つても、自分は生の具體を現ずるのだ。僕はこれまで前妻の兒を六人までも產ませたが、產の現場を見

たのはこれが初めてだが、それがまた人並みのではなかつたのだ。それでも母體と生兒とは共に無事らしい。若山牧水氏より使があり、演説を賴みに來たが、返事はあとのことにした。明日渡す原稿を書き終つて午後十一時就褥。

二月十二日。晴。尾島(菊)氏よりハガキ。平塚、安持二氏來訪。中央公論へ三十圓前借のハガキ。時事への雜誌評(五十六片)を書き終つた。佐藤氏より手紙。

二月十三日。晴。生れた兒に、美衞五男、民雄と云ふ名をつけて屆けた。和田垣(謙)氏へプルタルク推薦のことで手紙を出した。新小說へ不足分請求。中央公論より三十圓到着。若山氏からの依賴の演説を斷るハガキを出した。佐藤(稠)氏へハガキ。今井氏並に淸子の父へ出產の知らせ。

二月十四日。晴。原(德)氏へハガキ。倉田氏へハガキ。時事より稿料十三圓。第四號の蜂群が巢門外にころ〳〵死んでゐるので、あけて見たら、貯蜜が少しもなかつた。こちらの正蜜を給與した。瓶の蜜はうはかはだけは多少凍つてゐても、中はどろ〳〵してゐる。

二月十五日。晴。今井(歌)氏來訪。蜂全體に給蜜。

二月十六日。晴。荒木姉妹來訪。

二月十七日。晴。尾島、西村、原氏よりハガキ。西村氏へハガキ。中村氏を訪ふ。

二月十八日。晴。蜂群の一を見ると、給蜜を吸收してあつた。けふでも何かの花粉を取つて來た。

千葉氏來訪。

二月十九日。朝、少し雪降る。夜に入つてまた降り出した。寒い。瀧田氏よりハガキ、同じく返事に今書いてる長篇の名を「毒藥を飮む女」とした。上田氏よりハガキ。同氏へハガキ。春陽堂より不足分六圓四十錢。

二月廿日。晴。「毒藥を飮む女」書きあげ(總計三百六十八片)。加賀代議士より手紙。先日、サンデーに出た「軍隊はなほ跋扈するか」を同氏から同志會へ、他の二氏から國民黨と政友會とへ提出させたのである。あの方針で質問をしたらどうだと。

二月廿一日。夜、雨。原氏より手紙。加藤(みどり)、上司、西村氏よりハガキ。原稿を持つて中央公論社を訪ふ。ついでに高安、沼波。吉野氏を訪ふ。吉野氏と共に澤代議士を訪ひ、軍隊問題の話をした。

二月廿二日。雨。夜より雪。今井(歌)氏よりハガキ。西村氏へハガキ。奧山代議士よりハガキ。

二月廿三日。雪。昨夜積むこと三寸。今井女史より電報並にハガキ。

二月廿四日。晴。正宗(得)氏來訪(留守)。今井女史を訪ふ。滋子氏を訪ふ。今井、文章世界、沼波氏よりハガキ。

二月廿五日。曇。沼波、正宗、文章世界へハガキ。小川氏へ「炭屋の船」。竹腰へ十圓と養子緣組屆

（薫と眞雄とを向ふの養子にしてやることを今一度届けて見る爲めだが、證人は筑紫氏と中村氏とにやつて貰つた。）藤野愛子女史を淺草に訪ふ。（今井女史の紹介。）瀧田、今井二氏へハガキ。
二月廿六日。曇。蜂を調べたら給蜜を半分しか吸收してなかつたのもあり、再び煮直してやつた。第三回全國養蜂大會より四月に講演を賴みに來たが、斷つた。西村氏よりハガキ。西村並に辻氏へハガキ。
二月廿七日。晴。盆栽をよく日に出してやつた。日どめは一二輪咲き初め、靑木は赤い實の色がさえてゐる。ヒヤシンス室育ちが、もう、一寸五分ほどの花を出した。加藤（朝）氏來訪。辻氏來訪。小川（未）氏よりハガキ。中央公論社より「毒藥を飮む女」の稿料殘金八十九圓五十錢也。橫濱の姉より手紙並に祝ひ物。
二月廿八日。晴。高村（光）氏へハガキ並に雜誌返却。染井の墓地あたりまで散步した。
三月一日。晴。三井（良）氏來訪。西川（光）氏夫婦來訪。蜂は鼠色並に赤の花粉を取つて來た。盆栽に乳の殘りをかけて置いたら、そのにほひを追つて來て、頻りに蜂が四五匹ですつてゐた。
三月二日。雨。高村（光）氏よりハガキ。沼波（武）氏來訪。時事より二圓。
三月三日。晴。平塚女史を訪ふ、留守。小松氏並に荒木（郁）女史來訪。文章世界への二月文壇（三十枚九）。

三月四日。曇。瀧田・小川二氏へハガキ。高橋(久)・末次二氏へ手紙。平塚女史來訪。平出(修)氏宅より同氏危篤の報至り、見舞ひに行く。川手氏を訪ひ、共に江戸ッ子へ行く。けふは、蜂がどれもこれも花粉を持つて歸つて來た。

三月五日。晴。きのふから、ヒヤシンスの花が開き初めた。菜種の花が、もう、ちよい〳〵咲いて來た。讀賣より二圓五十錢。

三月六日。凪・(南であつ苦しいほどであつた。)十日會の通知、小川氏加能氏の連名で來たる。第一號並に第三號の箱を調べたが、既に王蜂は產卵を初めてゐた。卵ばかりでなく、既に幼蟲が蓋されてもいいほどに發育したのもある。不思議なのは、然し、王のゐる群に於て、巢の一つの穴に二つの產卵をしてあるのがあることだ。

三月七日。昨夜より大凪つづき、夜に入つてやむ。

三月八日。晴。第二・第四の蜂群も產卵あり、第二號の如きは、五寸四分までも、既に蓋をした幼蟲が出來てゐた。全群に給蜜をして置いた。高橋(久)氏よりハガキ。チユリプの一つに變形が出來て、赤い葉とも付かず花とも付かぬものが出た。「婦人觀察に於ける現代の缺陷」(十六片)・よみうりへ出した。

三月九日。雨。生田・森田兩氏の連名で「反響」の招待狀。

三月十日。曇。報知新聞へ行き、それから十日會にまわり、歸途お滋さんのところへ二三名と共に

立ち寄つた。藝術座の分離者等より手紙。加能氏よりハガキ。
三月十一日。曇。夜、雨。伊藤證信氏夫人來訪。
三月十二日。曇。
三月十三日。晴。晝間は一日庭の世話をしてしまつた。
三月十四日。雨。『反響』の披露會へ行く。
三月十五日。曇。中村(春)氏來訪。
三月十六日。晴。新潮社へ譯稿百三十四枚を持つて行く。二月十日並に十一日の日記を書き直して、『反響』に送る(十六片)。神田で小川(未)氏に會ひ、暫く一緒にぶらつく。久し振りで藤生夫人を訪ふ。吉豁へ蜜蜂分封群豫約募集の廣告を送る。
三月十七日。晴。小松氏と郁子氏と來訪。若宮氏來訪。辻(雅俊)氏來訪、この人は僕が滋賀縣の通譯兼英語教師をしてゐた時に、警部をしてゐた人だ。伊藤(證)氏を訪ふ。新潮社並に新日本社より手紙。今井女史よりハガキ。『十七日の感想』(六片)、新日本へ。

十七日の感想

けふ、一人の友人が來て、萬朝その他の新聞が陸軍から手をまはされて、あんなに腰が強くなつた

のは事實だと憤慨して歸つた。若し陸軍が成功して寺内伯でも擔出すとならば、僕等は寧ろ政友會が頑張つて呉れた方がいいやうに思ふ。

今日の政黨には隨分弊害が多いことは僕等もよく認めてゐる。が、全く政黨なるものの長所を知らず、而も藩閥の情實を以つてしか政治と云ふものを見ないもの等が、再び數年前までのやうな全く頑迷無理解の内閣を組織するよりも、政友會の勢力を以つて今少しやらせて置くが他日の爲めにはならう。

政友會が多數を頼んで議會に於ても横暴なことも事實だが、それは寧ろ非政友側に於ける政黨的準備が整つてゐないのを證するのではあるまいか？如何に人物がゐない政友會でも、たとへば、若し同志會に直ぐあとの内閣を引き受ける力があらば、潔くこれに讓つてまた他日の回復を計るやうにさせるだけの明がある人が一人や二人ないでもなからうと思ふ。今の樣子では、政友會が山本伯と共に引ツ込めば、其あとへ出るものはまたもとの藩閥組ばかりであらう。たとへこれに他の或政黨が喰付くとしても、政黨としての役目は恐く政友會丈出來なからう。

今の内閣が倒れるとして、そのあとへ少くとも政友會と同樣な若しくはそれ以上に純粹な政黨内閣が立つときまつてゐれば、僕等は早く今の内閣が倒れて貰ひたいのである。然し寺内伯やその他の官僚系が立つのなら、どうしても眞ツ平な氣がする。實を云へば、僕等は政友會唯一の操縱者なる原敬

氏をも好まないのである。渠に新智識と新了解とが全く見えないのは、官僚派の人々と同じことだ。然し他の政派を見渡しても、僕等の要求するやうな新見者は一人もゐない。その時、その時の策略ばかりを政治家の唯一本領の如く心得てるやうな犬養氏から、僕等は新舊を問はず一定の見識を求めることをしたくない。日本人を英國人等の下に見下してゐるやうな加藤男が、現代の日本國民の眞情にしツかり適當するやうな政治を施して呉れようとは思はれない。尾崎氏の如きも政權を得れば、結局舊式な人物になつてしまうに違ひない。

それでも、若しさう云ふ政黨の主領連が入閣して、多少でも勢力が振へるならやつても見させたいが、渠等が入閣しても伴食であつたり、または全く純官僚系の御用をつとめるやうなことであつたら、それよりも、今の多數黨が――たとへ芋堀り連中ばかりの多數でも――藩閥の一部を戴きながらこれを殆ど有名無實にこき使つてる方が、まだしもいいではないか？無論、さうして藩閥や官僚系の勢力を段々削いで行くべきを條件として云へばだ。

何にしても、もう老人の代議士並に政治家連は駄目だ。新時代が渠等を後見し、監視し、制肘し、そして段々驅逐して行くべきである。（大正三年三月十七日新日本掲載）

三月十八日。曇。平出氏死去の通知あり。悔みに行つた。川手氏を訪ふ（留守）。美音會事務所へ行

き、國風舞踏の件に付き相談。森田(恒)氏を訪ふ。生田氏並に滋子氏よりハガキ。伊藤(證)氏來訪・留守。

三月十九日。晴。千葉氏よりハガキと雜誌。鈴木(全)氏よりハガキ。石田氏來訪。伊藤(證)氏夫婦來訪。伊藤氏の紹介で當村の舊家保坂氏に面會し、二百坪餘の地所と家屋建設借用との件を相談した(淸子の發議で梅林を造る爲めで、本年七月頃建築を終る筈)

三月廿日。晴。石田氏よりハガキ、「第三帝國」へ毎號何か一ページ若しくは二頁(九枚若しくは十八枚)書くことになつた。

三月廿一日。ちよツと雨。平出氏の永訣會へ行つた。郁子氏並に歌子氏を訪ふ。「二重生活の弊害」(十八片)。

三月廿二日。晴。歌子氏・愛子氏、憂羮氏・貞子氏へハガキ。第三帝國へ原稿。平塚女史へ行く。

三月廿三日。雨。上司氏よりハガキ、女中ありとのことで訪問した。北村氏をも訪ふ。千葉氏へ丁酉倫理に出た飜譯評に抗議(四片)。

三月廿四日。雨。新潮社より譯料四十圓。藤野(愛子)女史より手紙。

三月廿五日。雨。

三月廿六日。雨。今井女史よりハガキ。瀨沼女史へハガキ。帝劇に藝術座の「復活」を見る。

三月廿七日。曇。尾島女史の紹介を以つて北陸タイムスの記者赤壁氏來訪。伊藤(證)氏を訪ふ。
三月廿八日。晴。上野散歩。
三月廿九日。晴。上司氏全快祝ひの會の通知。原(德)氏よりハガキ。
三月卅日。雨。念の爲め蜂に給蜜す。原氏並に新潮社へハガキ。今井女史よりハガキ。筑紫氏を訪ふ。
三月卅一日。晴。蒲原氏來訪。カフエヨーロパへ上司氏の爲めの會に出席。
四月一日。晴。きのふとけふと、畑の種まきをした。
四月二日。雨。瀨沼女史來訪。新潮社へ百枚分を以つて行く。小川氏並に藤生貞子氏を訪ふ。若柳吉千代氏を訪ひ、國風舞踏の場所借用の話をして見た。讀賣より質問。
四月三日。晴。讀賣へ返事。今井女史來訪、傳通院前の西川洋食部へ案內した。前田(晁)氏を訪ふ。博文館の少女文學の一篇を引き受けた、エノクアデンの飜案にきまる。千葉、尾島女史、十日會よりハガキ。
四月四日。雪、積む。石田氏より原稿催促。
四月五日。夕かた、ちよつと雨。佐藤(稠)氏、大阪の中村(長)氏を伴つて來た。新潮社へハガキ。
藤野女史へ手紙。中村(武)氏より手紙。「皇室と宗族制度、附忠孝異論」(十九片)。新日本より原稿料二

圓。
四月六日。晴。石田氏へ原稿。岩村(透)、前田(晁)二氏へハガキ。岩村氏外遊の通知。增永氏よりハガキ。前田氏よりハガキ。新潮社より譯料百枚分三十圓。
四月七日。雨。「婦人問題雜話」(四十片)、新潮へ。竹腰より手紙。――五圓郵送。(子供を向ふへ入籍させることは、どうしても十五歲になるまで出來ないさうだ。)藤野愛子氏より手紙。
四月八日。雨、のち晴。前田(晁)、東亞堂、安成(二)氏よりハガキ。東亞堂へハガキ。十日會の正宗・森田兩氏送別會に行く。
四月九日。風。東亞堂、加藤二氏よりハガキ。筑紫氏を訪ふ。讀賣よりハガキ。
四月十日。晴。永安初子氏、五六年ぶりで來訪。よみうりの質問へ答へ。
四月十一日。晴。昨日御隱れの皇太后陛下の喪が本日發表せられた。
四月十二日。晴。讀賣より稿料五圓。平塚女史より手紙。三井(良)氏來訪。
四月十三日。雨。博文館の世界少女文學中の一篇「榛の樹かげ」(二百九十片)を脫稿した。
四月十四日。晴。岡村・石田・塚原三書店へハガキ。(出版の相談)。前田氏のところへ原稿を屆けに行つた。藤野愛子氏を訪ふ。博覽會へ寄り、それから德田(秋聲)並に瀧田氏を訪ふ。奧村(博)氏來訪。

四月十五日。晴。奥村氏來訪。平塚女史を訪ふ。
四月十六日。雨。前田氏よりハガキ。前田氏を訪ふ。博文館より「包み合つた心」前金六十圓。清子の父來訪。大隈內閣成立、丸で官僚派の內閣のやうだ。
四月十七日。晴。生方氏來訪。生方氏と共に森田氏を訪ふ。石田氏よりハガキ。
四月十八日。晴。博覽會に行つて、女中お節の父なるお宮師が拵らへた如意輪塔を見た。摸倣若しくはほんのただ再現をやつたに過ぎないのだが、製作者は上司氏の小說にも材料になつた男で、ちよツと天才肌のあるところが面白いのだ。それから水產館の食料品陳列部で搖漬機が味噌をすつてゐたのを見てゐると、臼と槓とが反對に兩方とも動き、いつも同じ範圍內でうまくこねて、少しもその外へちらさない。するに從つて、段々味噌のにほひが高くなつて行くのが氣持ちよかつたので、暫らく立ちどまつて見てゐた。後藤宙外氏が秋田時事に赴任する送別會に臨み、歸りに樋口龍峽氏と二人で一時間ばかり柳橋で遊んだ。岡村書店よりハガキ返事。
四月十九日。晴。中央公論の質問に返事。樋口氏へハガキ。
四月廿日。曇。中央書院よりハガキ。岡村書店へハガキ。「再び二重生活否定」(華山氏へ)十四片。森田(恒)氏渡歐を新橋まで見送つた。新橋で、橫井時雄氏、巖本善治氏の、二氏ともに久し振りで會つた。橫山健堂氏とも出會ひ、碁を打たうと云ふことになり、同氏の家まで行つた。道々話しながら、

婦人の觀察に新らしい舊いと云ふことが僕の口から出たが、僕の舊いと云ふのは舊い時代の多數婦人を觀察してゐることで、そんな觀察では少數の新婦人觀は分らないのでと云ひ足した。

四月廿一日。晴。今井女史よりハガキ。石田氏來訪、現大隈内閣に何をさせたらいいだらうかと云ふ話が出た。僕は答へたには、先づ官制改革を山本伯の改革以上に進めて、思ひ切つて海陸大臣を文官にしてしまうこと。國防も出來るならどこまでもやるべきだらうが、それが爲めに人民の疲弊をこれ以上にしては困るから、今日の「實業」の面をかぶつた「虛業」の傾向を排して、もツと殖産工業を奬勵すべきこと。學制統一問題をあんな空想的に向はせないで、却つて不統一にして、自由な教育主義、地方々々の獨立的經營と言語的實生活とを輕んじしめないこと。東北地方の田園殖民の奬勵等だ。第三帝國より稿料五圓。けさ、八幡町の家の債權者がやつて來た。が、僕には名だけの關係で、實際は責任のない公正證書が出來てるのであるから、さう云つて、一先づ歸した。また來たら、八幡町の家をこちらで賣つてしまうより仕方がない。この相談で川手氏を訪ふたが留守。

四月廿二日。晴。尾島(改め小寺)菊子氏より結婚披露の招待、それへ出席通知。川手氏を訪ひ、それから永安夫人、廣津(柳浪)氏、郁子氏等を訪ふ。

四月二十三日。晴。よみうりよりハガキ。前田(晁)氏よりハガキ。前田氏へ返事。吉野甫氏來訪。

四月二十四日。夜、雨。ダリヤとカンナとを庭に出してやつた。桔梗と日本さくら草とを買つて來

た。佐藤(稠)氏を訪ふ。

四月二十五日。晴。

四月二十六日。晴。上司、森田二氏よりハガキ。

四月二十七日。晴、夜雨。馬車を傭つて、安安（或は萬安か、暫く原本のまゝにしておく）に於ける尾嶋小寺氏の結婚披露會に行つたところ、友人がはの代表としてお禮の演說をした。席上、朝日新聞の松山氏の夫人に會つたが、氣持ちのいい婦人であつた。「或結婚席上の演說」(十三片)。

四月二十八日。曇。昨夜の原稿を讀賣へ送る。美術劇場より招待。第二號の蜂群は王嘉を、數日前のとで、三つ拵へたやうだ。この群と第一群とには蓋された雄蜂の巢が出來てゐる。中村(春)氏を訪ふ。

四月廿九日。晴。和氣氏來訪。美術劇場へ行く。「自由思想家とは何ぞや」(九片)。

四月卅日。晴。よみうりへ昨日の原稿。新潮社に行き、譯料前金二百枚分、三十圓也。小川、森田(末)二氏を訪ふ、留守。

五月一日。風、晴。蒲原氏へハガキ。西本氏へハガキ。正宗、森田二氏へ巴里大使館宛ハガキ。京都の原氏來訪。「秋田雨雀氏に問ふ」(十片)。中央公論社を訪ふ。三井(甲)氏・吉野氏を訪ふ。

五月二日。晴。三井(良)氏を原氏へ紹介し、三井氏のマンガン鐵ペプトンの一手販賣者を大阪に得

せしめる相談をさせた。

五月三日。曇。中村（春）氏來訪。川手氏より手紙。なすび、唐もろこし等を植ゑつけた。

五月四日。晴。無名會の演劇を見に有樂座へ行く。川手氏を訪ひ、竹腰の件を相談するに、矢ツ張り、こちらからは竹腰の債權者へ、今では公正證書の文面上無關係になつてるからと云つて置けばいいさうだ。執達吏が來たとしても、その時いよ〳〵名義を書きかへさせればとのこと。

五月五日。晴。生田（長）氏來訪、同氏と伊藤（證）氏を訪ふ。筑紫氏を訪ふ。「かな綱とどん底」（十六片）

五月六日。曇。昨日の原稿を反響へ。中村（武）並に生田（春）氏來訪、新潮の爲めに相馬御風氏に關する談話をした。後藤（宙）氏よりハガキ。第二號群には、雄蜂が出てゐた。中村（春）氏來訪。

五月七日。晴。康樂園よりダリヤ二球届く。カクタス ザ インプ（黑）とピオニリバチ（紅）と。中央文學より質問、同じく返事――『現代青年必讀の書物は澤山ありましようが、少くとも僕の著「近代思想と實生活」はその一つです。理由は、この時代の轉機に臨み、青年自身が（青年ばかりではないが）舊思想から新思想に移る道筋と方向とが分るからである。そしてこの方向に進まないものは、やがて思想並に生活上の劣敗者ですから。』青年日本社から社員來訪。（小松氏の紹介。）西村（渚）氏より文章世界の小說依賴。博文館より寫眞師來宅。

五月八日。晴。石田、生田(長)よりハガキ。十日會より通知。讀賣より書齋の好みを質問、同じく答へ――『書齋には別に好みはありません。が、廣いのよりも狹くてきちんとした方がいいやうです。そして一つの仕事に引き出した書物などは、その仕事の終るまで、いくらでも散らかして置けるやうな工合にして置くのです。』今夕の太陽は、變てこに眞ッ赤であつた――ゆふべも赤かつたが。

五月九日。晴。「女中の戀」(六十一片)。

五月十日。晴。文章世界へ昨日の原稿。十日會で同原稿を朗讀した。中央新聞より質問。その答へ。けさ、寢に就く前に、午前四時より庭に出て草むしりをした。第二號の蜂ばかりが早くから出動してゐたが、すべて花粉を取つて來ない。思ふに、早曉は蜜ばかりを取つて來るのだらう。また、第二號、乃ち、本親の群が他のよりも强大なので、早く出動するのらしい。

五月十一日。夕方より雨。滋子氏より歸京の通知。けふ一日コスモスを植ゑつけたり、庭を整理したりした。譯、二十一枚。

五月十二日。晴、夜雨。川路氏より詩集。博文館より原稿料二十四圓五十錢の通知。第一號群にも王臺が一つ出來た。筑紫氏よりカンナ五球とアマリリス二球。うちのカンナはすべて駄目であつた。譯、十九片。

五月十三日。晴。反響社より招待。吉村と云ふ人、來訪、下關の觀音崎より女と一緒に逃げて來て

女が身を賣つてるので、それを受け出す爲めに小説を書いたら、どこかへ世話してくれろとのことであつた。僕は、とても無名の士で小説を書いでそれを直ぐ大金にしようとするやうな野心は駄目だと云つて歸した。トマトやらカンランやらを植ゑかへてやつた。譯、廿六片。

五月十四日。晴。竹腰より富美子の大病（肺炎）を報じて來たが、今の心持ちでは行く氣になれず。たとへ死ぬとしても、わが娘を失ふやうでない氣がする（娘には可哀さうだが、その母の心がけが惡いから仕方がない。）反響社の宴會に行き、初めて野上（臼川）氏に會つた。譯、二十二片。

五月十五日。雨。新潮社へ譯八十一枚分を持つて行く。中村（武）、正宗（白）、小川氏を訪ふ。「再び秋田氏へ」（七片）。

五月十六日。雨。時事の山梨氏へ原稿。歸つて來たので、よみうりへ。時事より稿料二圓。その後の譯、三十七片。

五月十七日。雨。譯、二十五片。中村（武）氏よりハガキ。竹腰へ五圓。富美子死亡の通知。

五月十八日。晴。第二號群の王臺のうち一つはかみ崩された。第一號には、王臺がふえた。第三號にも一つ出來た。「三たび二重生活否定」（十八片）。

次ぎの手紙を蒲原氏へ書いた。（富美子の死に關して聽いて置いて貰ひたいから）

大正三年五月十八日

蒲原君、

僕は君に聽いて置いて貰ひたいことが出來た。君のところにも大病人があると云ふ時に當り、死のことを云ふのは少し躊躇されるが、けふ、この感じの起つてゐる時に云つて置かなければもうそのやうになるかも知れないから、強ひて――

君、僕の今ゐる子供のうちの總領娘で、十六歳になつたのが、――君も聽いてるだらうと思ふが、他の子供と共に先妻の方へ行つてたが、――一昨日、兼ての氣管支カタルが肺炎になつて、死んださうだ。そしてその葬式がけふあつた筈だ。然し僕は、昨朝通知を受けた時から、少しも行く氣になれなかつたのです。

それには二つの理由がある。その一つは、いつも父を馬鹿だと云ひ馴らされて來た子供に會ふ以上は、父の馬鹿でないことを云つて聽かさなければならぬのを僕は面倒だと思ふし、またさう聽かせば、これまで渠等の母が子供にうそを云つてたやうなことになり、今まで信用してゐる母を疑ふやうになるだらうと思ふと、子供の立ち場の上に非常にぐらつきが來て、却つて變なことになるだらう。それに、こちらを馬鹿とか、何とか、兎に角惡く思つてる子供を――如何に分らないからと云つても――僕は一種の敵と思つてる。死んだ娘だけは少し分つて來てゐたと見え、時々手紙をよ

として會ひたさうで、また遊びに來たさうであつたが、僕は――それも父と母との間に往來して、二股膏藥のやうになるのを恐れ――とう〳〵返事も出さず仕舞ひであつた。これで僕は子供を四名失つた。然しかの女が死んだのは、かう云ふはめに立つて、而も貧乏に育つて行くよりも、却つてかの女の爲めに仕合せであつたらうと思ふ。

第二の理由は、僕の先妻を見たくないからである。かの女と僕とが正式の離婚をしたのは、大阪に僕がゐた時、現今大阪在住者で、もとの仲人であつた夫婦の家でだが、その時かの女も東京からやつて來たが、僕は直接に面談しなかつたほどでした。さきの家庭内のことはさて置き、家庭外にあらはれたことでは、僕が最初にかの女に反いたのは、君も知つてる通り、事實ですが、それまでにかの女に於ても僕の自我を家庭内のことで傷づけるやうなことが多かつたばかりで無く、僕がいよいよあの大久保へ別居し、それからまた大阪へ行つてからのことで、――これは具體的には云へないが、――名義だけはまだ所天たる僕を最も侮辱した行爲があつたのです、その證人は今回死んだ娘であつたさうで、未丁年者は訴訟の證據にはなりませんでしたが、それが僕から向ふの不承知な離婚を無理にも承諾させた内因です。そんなことで僕は二度とかの女を見るつもりはない。そしてあの八幡町の家は(抵當のままだが)やつてあるし、その上に五百圓に達するまで今でも毎月金を送つてるのだから、それ以上に向ふがどんなことがあつて病氣にならうと、貧困に迫らうと、もう、

返り見るには及ばないのです。それから、子供は以上の條件の中へ這入つて向ふでわざ〳〵離さないので、十五歳に達して、その自己の意志を云へる時になる毎に、戸籍上の變更をすればいいやうになつてゐます。

こんなことを今更ら君に白狀するのは、ちよツとわけがあるのです。それも今回娘が死んだからで、かの女の病氣も見舞はず、またその死をも見送らないので、先妻はきツとそれを、ほんの、常識的俗見から、至るところに非難して歩くに違ひない。ひよツとすると、新聞などに書かせるかも知れない。その場合、君は——議論では合はないところもあるが、——長らくの交際であるから、この手紙を證據として僕の立ち場を發表して貰ひたいのです。その時になつて僕が物を云へば、今ほどのなま〳〵しい感じは出ないに違ひないから、君にそツくりあづけて置くのです。

僕は子供は嫌ひだが、決して無情なわけではない。ただ以上のやうな理由で、先妻を憎む餘り、かの女のそばにゐる子供をも見に行きたくないのです。そしてかの女との關係には、今ではただ、子供の送籍が出來る年齡を待つこと、約束の金を五百圓に達するまで送ること、八幡町の家の名義をなるべく近々に友人なる辯護士を代理としてかの女の名に書きかへることだけが殘つてるばかりです。

今一つ、付け加へて置きたいのは、今の妻と先妻との關係です。今の妻はその初め十分の理解を以つて先妻に對してゐたが、先妻が或時毒に似た物を茶に入れて飮ませたのが分つてから、全く交際が絕えてゐるのです。今では、とても、僕自身がたとへ仲に立つとしても、今の妻からの和解は出來ないのです。

この手紙が役に立つやうな時の來ないのを僕は望むが、若し役に立つと君が思ふ時が來たら、君の考へで發表して貰ひたいのです。

以　上。

岩　野　泡　鳴

五月十九日。晴。原氏より手紙。十九日のよみうりに出た「生ひ立ち」の一部に關する答へをした。新潮社へハガキ、昨日の原稿を「第三帝國」へ。譯、四十片。

五月廿日。雨。東京評論社の某記者來訪。プルタルク序論(八十八片)を終る。

五月廿一日。曇。新潮社へ昨日の稿。第二號群がかみ崩した一つの王臺はまた造營されて、一層大きなのになり、もう、直きに蓋されるやうになつた。前妻より先日の娘の死に就いて何か不思議があつたらうと、往復ハガキで云つてよこした。まだ易とか占ひとか云ふやうなことを信じてゐるのらしい。返事をやる氣もない。伊藤(證)氏を訪ふ。譯、十七片。

五月廿二日。晴、風。西本氏よりハガキ。新潮社より譯料八十枚分貳十四圓並に新潮稿料十一圓。(そのうち、五圓は竹腰へ。)加藤(朝)氏來訪。(讀賣の用)。中谷氏來訪(新日本の論文依賴)。佐藤(稠)氏の紹介で原正男氏來訪。譯・二十四片。

五月廿三日。曇風。譯・二十五片。母蜂養成箱一箇を造つた。

五月廿四日。晴。新公論の宮地猛男氏來訪。蜂箱の大を一つ造つた。譯・二十三片。今夜は昭憲皇太后の御葬式だ。

五月廿五日。晴。きうりやいんぎんに竹をやつた。譯、十九片。

五月廿六日。晴。蜂全體に給蜜をして見た、と云ふのは貯蜜が少しよりなく、而も明き巢に卵を產みつけてないからである。內ケ崎作三郎氏を訪ひ、話が僕の刹那主義並に二重生活否定の問題になつた時、氏は『それぢやア一種の宗敎ではないか』と云つた。勿論、僕は僕の宗敎を述べてゐ、また生活してゐるのだが、宗敎だと斷らないのは、一般の宗敎と同じやうに、善意にも惡意にも、解釋されて、一般宗敎の外存外向的な諸道具(世間はそれをいいことにして)が僕にも必要だらうなどと云はれるのが面倒だからである。現代の思想界も文藝界も幼稚だから、僕の云つてること行なつてることを、ほんの、ただの文學論の進歩した物としか思つてゐないのだ。人の手を引ツ張つて天國へ連れて行くことが出來ると思ふやうな淺薄な傳道的宗敎は、僕の初めから問題としないところだが、僕の

言行は決して宗教に至る道ではなく、宗教その物である。
五月廿七日。晴。午前五時頃までに、譯二十三片。この頃は大抵徹夜で、夜があけて戸を明け、畑に出るのを心よく待たれるやうになつた。譯、二十三片。
五月廿八日。晴。新潮社よりハガキ。同社へハガキ。筑紫氏を訪ふ。譯、二十一片。
六月廿九日。曇。第二號群（一昨年からの、最初の王に從ふ）の王臺が蓋されてるばかりでなく、また外から、もはや、働蜂が蓋を破りつつあつたのもあるので、都合四箇だけを切り取り、王籠に入れて同群に返して置いた。そして新箱數個の据ゑ付け用意をした。他の群にも王臺はすべて數箇づつあるが、まだ蓋されるに至らない。
五月三十日。雨。譯、二十九片（但し昨夜より朝までに）。けふは、來た中央公論の自作長篇「毒藥を飲む女」を讀みながら、ところどころを直した。ついでに、「熊か人か」並に「お仙」の訂正もした。
五月三十一日。晴。清子の父來たる。蜂を三群分けた。原（正）氏來訪。伊藤（證）氏を訪ふ。新公論の簡易生活質問に答へ、「根本的に生活を革新せよ」（三片半）。新潮社より三十圓。藤野愛子氏より手紙。
六月一日。曇、夜雨。蒲原氏へハガキ。蜂一群を分けた。「武士の云拔、平民の詰腹」（國民道德の變遷に就て大隈首相の反省を促す）四十二片を新日本の爲めに草した。
六月二日。雨。中村（春）氏を訪ふ。小寺菊子氏よりハガキ。第三帝國の爲めに、「革新せらるべき生

活」(十八片)。

六月三日。曇、夜おほ風。博文館へ「包み合つた心」の出版屆と版權讓渡屆とに捺印して送る。先般の二回の批評に對して秋田氏よりハガキ。

暫く失禮して居ります。讀賣のを拜見しました。僕は「化出」と似てゐるがローカリテを出すのがあの作の一の要素であるところから全く異つたものとして充分注意して書いたつもりですが、さう思はれるのは作の拙い爲め(僕の作は僕のある時期を代表したもので、今は餘程、殆んど違つてゐる。)かと思ひます。拙いと無自覺とは違ひます。少くとも僕自身は作劇の上には、生意氣だといはれるか知れないが、拙くとも僞は書かないつもりです。議論でお答へするより書くつもりです。此内ゆつくり伺ひますから氣を惡くしないで話してください。またお暇の折は此方へもいらつしやい。

奥さまにもよろしく。

續いて。氏の來訪。原田(信造)氏より手紙。新潮社より譯料十三圓五十錢。新潮より質問、これに答へ、「昔の旅の一印象」(二枚)。譯、十三片。

六月四日。晴。藤野愛子氏へ手紙。原田(信)氏より手紙。富山房より稿料十四圓七十錢。増野氏來訪。分けた蜂群の二つに王は生れた跡はあつたが、王その物がいづれにも姿を見せない。王臺を入れたのを受けないで、喰ひ破つたのか、それとも交尾に出て歸らなかつたのかだ。譯、十六片。

六月五日。夜あけ前に雨。晴。富山房へ受領書。竹腰へ五圓也。演藝畫報への質問答案。筑紫氏を訪ふ。濟生堂來訪。譯、十片。讀賣より十圓。

六月六日。曇。楠山氏來訪、先日の原稿が大隈伯並に同内閣の攻撃に當るから、外のと取りかへて與れろとのこと。で、別なことを書くことにして、先日のは「太陽」へ送つた。小此木（忠）氏を訪ふたところ、氏とも久し振りであつたが、また犬養氏と云ふ、これも舊い時の知人に會つた。犬養氏は曾て吉原の女郎を受け出し、待合を開いたが、自分の厭ひな客は得意の柔術を以つて投げ飛ばしなどしたので、つひに廢業しなければならなくなつた。今は、草履工場の監督ださうだ。芝川氏よりハガキ。

六月七日。晴。「政界その他の實生活的觀察」（二十九片）、新日本へ。大根の種と思つて播いたのが、ほうせん花であつたのを伊藤氏へ半分わけた。

六月八日。晴。小林（一三）氏へハガキ。博覽會へ行く。吉野氏を訪ふ。太陽へ送つた原稿が返つて來たので、反響へ。

六月九日。晴。澤代議士より「國防に關する質問顚末報告」を送り來たる。增野氏を訪ふ。譯、十四片。（三時間半でこれだとすれば、先づ一時間四片の割り）

六月十日。晴。石田氏へハガキ。生田（長）氏よりハガキ。原田氏來訪。十日會へ行く。

六月十一日。晴。三木氏を訪ふ。小林（一）氏よりハガキ。譯、二十四片。生田氏へハガキ。

六月十二日。雨。西村氏を訪ふ。（黃色朝顏の苗を持つて行き、いちぢくのさし木を貰つて來た）。山田氏來訪、十二錢叢書百册のうちの、七册を引き受けた（これは僕自身がしないでも、妻にやらしていいと云ふので）。吉野夫婦來訪。

六月十三日。晴。藤野愛子氏來訪。增野氏來訪。三木氏來訪。讀賣の質問へ答へ。京都の中外新報より手紙。

六月十四日。あけ方まで雨。晴。伊藤氏を訪ふ（留守）。小川氏よりハガキ。「評家として見たる諸家の藝術觀」（「毒藥を飮む女」に就いて）を三十片。同原稿をよみうりへ。唐なすの花が咲き初めた。門前の原ツぱへ一面に去年まいたクロバの花が咲いてるのを、二三の子供が拔いて行つた。譯、十二片。

六月十五日。晴。伊藤氏を訪ひ、石丸氏からの中外新報に每月六回執筆すると云ふ依賴のことを相談し、石丸氏へ承諾の手紙を出した。生田氏よりハガキ、同氏へ返事。サンデーへもとの稿料請求。昨日より「包み合つた心」の校正が來初めた。

六月十六日。「純全生活」（五回、三十一片）を昨夜から書き終つた、初めて中外日報へ送る分。雨。野口（米）氏を訪ふ（歸朝みやげにローマンローランの「トルストイ」を貰ふ）。蒲原氏を訪ふ。譯、十六片。

六月十七日。夜明前から雨。川手氏より手紙。生田氏よりハガキ。よみうりから原稿返り來り、二題「反省の餘地多き批評」並に「事實と幻影」に分けて、再び送つた。

六月十八日。譯、二十四片。午前五時半就褥。(これからまた就褥時間をつけて見ようと思ふ)。起床、午後一時。川手氏を訪ふ、同氏とカフエライオンに行つたら、時事の川面某氏に紹介された。

六月十九日。曇。新らしい風呂を買つたので、舊い方のを鳥小屋にする爲めに毀わした。珍らしい力わざをしたので、足腰や背中が痛いほど凝つて來た。福岡書店來訪、淸子代篇の「モナヴナ」を渡し、二千部印稅前金二十圓を受取つた。增野氏來訪。岡部和一郞氏、突然來訪――二十一年振りだ。氏はその間に支那浪人の一人となり、第一革命の時、黃興を掩護して漢陽で戰つたさうだ。けさ、九時頃、第二號群が自然分封をやり、隣りの畑の低い櫻の木の枝に落ちついたので、箱に二三の巢枠を入れてそのそばへ押し付けたら、すべてそれに這入つた。他に人工分封をした王が二つとも一向に產卵の形跡が無いので、その一方を第三號群の舊王と取りかへてやつた――と云ふのは、その箱にはまだ雄蜂が澤山ゐるからである。蒲原氏よりハガキ。淸子と共に平塚女史を訪ふ。

六月廿一日。曇。三木氏を訪ふ。「潛淵君に」(五片)。譯、十八片。

六月廿二日。曇。岡部氏よりハガキ。よみうりへ昨日の原稿。長山(省吾)氏へハガキ、(岡部氏來訪により、住所が分つて)。小此木氏、桝本氏、伊藤氏來訪。伊藤氏を訪ふ。譯、十二片。

六月廿三日。晴。長山氏よりハガキ。下痢で伏せつた。

六月廿四日。晴。三木氏來訪。

六月廿五日。晴。佐藤(稠)氏來訪。千葉氏よりハガキ、同じく返事。

六月廿六日。晴。第一回に人工分封をした群の王蜂は、きのふ、產卵してゐるところが二回見られた。十九日に自然分封をした群には、どうしても、王蜂が見つからない――そして分封の節與へた卵附きの巢に數個の王臺を經營して、既にふたされたのもあつた。その一つだけを殘して、あとの物を皆つぶす時、試みに三個だけ王養成籠に入れて、第一群へさし込んで置いた。第三號群へ入れかへた新王は殺されたかして見えない。が、王臺のふたされたのが大分出來てゐる。そして第三號群の舊王を入れた新群では、この舊王を受け容れてゐる。舊王は落ちついてたからで、新王が受け容れられなかつたのはあわててゐたからであらう(もツと王籠のまゝ入れて置けば慣れたのであつた。)荒木(郁)氏よりハガキ。病氣は殆ど全快。

六月廿七日。晴。郁子氏へハガキ。新潮社の佐藤氏へ手紙(別な出版相談)。正宗森田兩氏宛の巴里行き手紙を出す。中外日報より稿料十圓。伊藤氏夫人來訪。夜、伊藤氏を訪ふ。

六月廿八日。あけ方前に雨。譯、二十片。午前四時就褥。十時起床。晴。千葉氏へ招待され、席上で上田萬年氏にも會つた。

六月廿九日。晴。新潮社から三十圓(譯料)。滋子氏を訪ひ、一緒に博覽會へ行く。島中氏より手紙。『包み合つた心』校了。南北社へ立ちより、高橋都素武氏に會ひ、出版の相談をして置いた。

六月卅日。晴。木村(鷹)・大町(桂)二氏署名のハガキ來たる。東京毎日並に時事より質問、それに答へ。佐渡日報より佐渡に關することを書けと云つて來た。「佐渡の思ひ出」(十片)。

七月一日。晴。筑紫氏來訪。新蜂群二個はその王が產卵するやうになつた。加能氏、川手氏よりハガキ。譯・九片。

七月二日。晴。博文館へ行き「解剖學者」稿料四十圓八十錢、並に「包み合つた心」殘金十二圓五十錢。郁子氏を訪ふ。留守に、第三號分封。畑のもみぢにとまつたのを淸子が收容した。別にまた生れた王を以つて別群を組織し、その王を王籠に入れて暫くそのままにして置いて、それから籠のふたを明けたところ、直ぐ働蜂が飛びかかつてみんなでさし殺してしまつた。して見ると、メテルリンクが云つた働蜂の王應殺若しくは取り卷き攻め(そして王を働蜂は決してささない)と云ふことはうそだ。夜、バンドマン歌劇を見に行つた。川手氏へハガキ。南北社へ手紙。

七月三日。晴。新日本より原稿賴み、斷る。時事の柴田氏來訪。蜂王が王臺を中から喰ひ破る音は、持つて見ると、ぱりぱりと響く。二分の一小枠を以つて二群を組織して見たところ、二群とも蟻の爲めに襲はれて、四方にちりぢりばらばらになつた。そしてその一方に生れた王もどこへか行つてしまつた。けふ人工分封をしたので全群數は十四箱になつた。讀賣より八圓。三木氏來訪。

七月四日。晴。人工分封をした箱の一つに王が生れ出かけてゐたのを見ると、あたまだけ出て、働

蜂の口から蜜を受けてゐたので、手を以つて皮を破つてやると、いそいで飛び出し、巢の上に二三分じッとしてゐたが、ちよこ〳〵とかけ出して働蜂の脊やら腹部やらをかまはず、通り越えて走つてゐた。が、働蜂は害も加へぬ樣子であつた。昨夜、一箱を筑紫氏へやつた。前妻がやつて來たが、僕は會はなかつた。增野氏を訪ひ、蓄音器と譜とを借りて來た。

七月五日。小雨あり。文章世界並に辻氏へハガキ。最初の王。乃ち三年目の蜂王を人工分封した群を調べて見たら、その王(羽根を切つてあつた)がゐずに、新王が出來てゐた。そしてその王の出たらしい王臺が破れてゐた。前妻が訪ねて來たが、僕だけは會はなかつた。今少し反省と鎭靜とがかの女に出て來ないと、僕は會ひたくない。

七月六日。雨。川手氏へハガキ。(前妻に家を與へるのに、竹腰家を別家してゐなければ、かの女が若し死んだ時その家は竹腰に取られてしまひ、子供の爲めにはならないことを云つてやつた。)巴里若の森田氏からハガキ。辻氏よりハガキ。サンデーの川浪氏來訪(留守)岡野氏を訪ふ。

七月七日。晴、夜雨。サンデーの島中氏へハガキ。田代氏來訪。蜂の桝を十四五箇造つた。人工分封の一群の巢門前に王が死んでゐた。これに王籠の王臺の、まだ出られないのをさし入れて置いた。他にも二群無王のがあるが、それらは王臺を經營して大分熱してゐるから、そのままにして置く。岡野氏へ傘を返しに行く。伊藤氏を訪ふ、話がイブセンのことになり、氏は森田(草)氏の言を信じて、イ

ブセンの問題劇は多くは疑問を提出しただけな物だとやうに考へてゐたので、僕はさうでないと答へた。氏の言によると、何度聽き返しても森田氏は疑問提出劇だと云つたさうだ。すべて問題劇を疑問劇と思ふのさへ用語例を間違つてゐると思ふのに、かのイブセンのをそんな煮え切れないものに解釋するのは、一しほ間違ひだ。渠は問題を提出すると同時に、渠だけの解決は付けてゐるのだ。そこが渠の惡く云つて理想家たるところだが、渠は一劇毎にその理想を建て直して行つたところに、具體的な生活者であつたことを示めしてゐる。それから、今一つの氏の誤解は、イブセンの解決は破壞に終つてると云ふことであつた。僕の考へでは、建築師が塔の上から落ちて死ぬのも、ブランドが氷塊に敷かれて死ぬのも。生活を破壞したのではなく、全人的生活を生活したことになつてるのだ。

七月八日。晴。北村氏を訪ふ(留守)。上司氏を訪ふ。

七月九日。晴。石丸氏よりハガキ。南北社並に新潮社を訪ふ(小說集並に論文集の出版相談は駄目)。露領漁業貿易時報主幹高井義喜久氏並に同役員高野金彌氏が來訪、僕の「毒藥を飲む女」を露語譯にする許しを得た。高野氏は僕が樺太で知つた林氏の友人ださうだ。增野氏來訪、同氏を訪ふ。

七月十日。晴。十日會へ行く。夜、雨。

七月十一日。雨。「婦人問題の順序」(三十六片)を中外日報へ。昇氏、瀨沼氏へハガキ。警醒社へ手

紙(出版の件)。

七月十二日。晴。王臺の一つが一向に生れないので、つぶして見れば、蟻が這入つて王體を全くからにしてあつた。譯、十四片。

七月十三日、曇。一個の王籠の王臺がまた生れないので、調べて見たら、ひからびてゐた。三個の王臺を取り出し、籠に入れて養成するやうにしてやつた。譯、二十四片。

七月十四日。晴。瀧田氏來訪。增野氏よりハガキ。昇氏よりハガキ。藝術座の第四回擧行を福澤邸の試演場に觀に行つた。

七月十五日。夜、雨あり。伊藤義人氏來訪、五部作の中なる加集または加能のモデルで、僕が樺太歸後途中で會つたが當分來るに及ばずと云つて置いた。が、先日報知新聞社へ行つた時、ひよツこり出會したところ、妻も貰ひ、家も持つたと云ふので、今後は從前通りに會つてやらうと思つた。何と云つても、小學時代からの知り合ひは渠だけだ。野口氏來訪。時事より稿料二圓。蜂王がまた一つ生れたのを交尾箱に收めた。露語家大井包高氏來訪。警醒社より返事、出版は九月に入るまで待つて呉れろとのこと。

七月十六日。晴。蜂の箱を一つ拵らへた。增野氏よりハガキ。文章世界より左の質問、同じく答へ。

おたづね

一 好きな色は?『特別に無し。
二 好きな花は?、庭に今咲いてるのでは、紫しづか。
三 好きな樹木は?『桐に無花果などであらう。
四 好きな季節は?『夏は冬よりもいい氣持ちだ。
五 一日の中の好きな時間は?『蜂や畑などを見るには日中、書き物には夜半から明けがた。
六 好きな遊戯と娯樂は?『玉突が好きであつたが、それをやめてから碁。
七 好きな書籍は?『他人の書には好むところなし。
八 好きな名前は(男並に女の)?『無し。
九 好きな政治家(現在)は?『無し。
一〇 好きな歷史上の人物?『豊太閤や伊藤公を、僕の主義から理解した上では、好きと云ふよりも僕の主義を說明するに便利な人物である。
一一 好きな女の顏と性格は?『顏などはどうでもいいやうだが、性格の上では、平塚明子と岩野清子とをつきまぜて、田村俊子と云ふ衣物を着せたやうなのがあらば、結構であらう。
一二 好きな時代は(東西古今を通じて)?『現代。

一三　世界中で住みたいと思ふ所は？「日本。

一四　外に好きな職業を選んだら？「僕は詩人、小說家、並に自由思想家だ。他に好きな職業を選んでも、矢張り詩人、小說家、並に自由思想家だ。但し、文士と云ふやうな下らない用語を以つて職業の名とはしてゐない。

一五　一番幸福に思ふことは？「悲痛と終始すること。

一六　一番不幸に思ふことは？「同じく悲痛と終始すること。

七月十七日。ちよツと雨。北村氏へ手紙。中央公論への「まだ野暮臭い田村女史」(二十三片)。荒木(郁)氏來訪、蜜蜂の豫約金五圓を置いて行つた。

七月十八日。夜、雨あり。香港に本社があるゼメール社の「フースフー」編輯者の一人來訪。筑紫氏で晩餐を受けた。解題「モナヴナ」の校正終る。

七月十九日。晴。瀨沼女史よりハガキ。同じく返事。新橋堂へ手紙(出版のかけ合)。「包み合つた心」の挿し畫の箇所を博文館に答へた。蜂王のゐなくなつた一群へ、まだ出ない王臺を與へた。伊藤(證)氏の宅へ招かれて、會食した。ルソー懺悔錄の縮少編成を安藤氏に引き受け、辻氏にやらせるつもり。

七月廿日。晴。瀨沼女史來訪。反響への「さし迫つた法權運用の改善」(二十二片)。岡野氏を訪ふ。

七月廿一日。晴。岡(落葉)氏來訪。岡氏と木村(鷹)氏を訪ふ。岡氏の家に行く。小寺氏を訪ふ(留守)。

七月廿二日。晴。辻氏より斷りのハガキ。高井氏へ「毒藥女」の譯し方の間違ひを、瀬沼女史の注意に從つて、通知した。昨日、蜂の新群を調べたら、二群に王がゐなくなつてゐた。また交尾箱に入れた王は二箇のともゐなかつた。そして無王群はみな王臺を經營してゐた。

七月廿三日。譯、十三片。晴。ビール箱を以つて蜂の箱四個を作り、ペンキを塗つた。中村(春)氏來訪。中村(武)氏より手紙。昨夜伊藤(證)氏來訪、ルソーを書く代りに平田篤胤をとのことであつたが、これは代筆がさせられないから、餘ほど時日を貸して貰ふことにした、本氣に書きたいのは、この平田の傳と批評とだ。

七月廿四日。譯、十四片。新潮社の中根氏來訪或飜譯に名を貸すことであつたが、これは斷つた。佐藤(茂)氏へハガキ、プツゲルの獨逸文世界古代歷史地圖を國民中學會に買はせること。中村(武)氏へハガキ。新橋堂より返事、出版駄目。增野氏よりハガキ。蜂の箱三個を拵らへてペンキを塗つた。夜、ちよつと雨あり。

七月廿五日。譯、二十二片。晴。蜂箱にペンキを塗つた。伊藤(義)氏來訪。夕かた、雨がふりさうで降らなかつた。

七月廿六日。大雷驟雨。夜、澁谷の澁谷氏を訪ふたところ、氏の話では、澁谷附近では大粒の雹が降つた。

七月廿七日。曇。博覽會に行く。加藤（朝）氏よりハガキ。巴里の正宗氏よりハガキ。中央公論より八圓。

七月廿八日。曇。諏訪氏並に愛子氏へ最近著を送る。蓋の出來た王臺のうち、三個を三個の無王群に殘し、他の七個を王籠に封じて、或群にさし入れた。

七月廿九日。譯、二十二片。晴、夕かた一雨あり。中外日報より稿料十圓。人工分封により、舊王三個を以つて別群を組織した。そして人工的に無王になつた群へそれ〴〵王臺を與へた。別に交尾箱を以つて二小群を作り、王臺を與へた。畑の一部を耕した。茄子にこやしをやつた。

七月三十日。譯、十七片。晴。交尾箱を一つ作つた。新日本よりハガキ。愛子氏より手紙。中澤（臨川）氏の病氣を見舞つた。郁子氏を訪ふ。

七月卅一日。晴。

八月一日。譯、十六片。晴。川手氏よりハガキ。加藤みどり氏來訪。淸子は今日平塚氏と共に内務省へ警保局長の無責任な談話を質問しに行つた。

八月二日。譯。十二片。晴。大阪から岩崎（鼎）氏來訪。福岡書店から「モナヷナ」解說の奥附印を取

りに來た。『斷片語』(三十片)を新潮に送る。

八月三日。曇、ゆふかた降りかけてまたやんだ。南北社より手紙。諏訪氏より手紙、――新蜂王は十日若しくは十五日間に産卵し初めないと駄目だと云つて來た。伊藤(證)氏を訪ふ。反響へ『豫想される平民黨の意義』(十八片)。

八月四日。曇、『婦人問題補遺』(十八片)。中村(武)氏よりハガキ。蜂に給蜜。一群を合同した。七月二十九日に王を抜いて別に王臺を與へた三群のうちに、一群は、王を有したが、二群は王を得なかつた。王の抜けた王臺を調べて見ると、尋常にうまく口があいて戸びらになつてゐないで、やたらに喰ひやぶられた跡のやうだ。多分、王に故障があつたのだらう。然し既にふたをした王臺を數個造營してゐたので、各々一つを殘して他は切り取り、これを王籠に封じて或群に入れて置いた。(まア六日目の熟し臺だ。)

八月五日。曇。新潮社より手紙。藝術座よりハガキ。給蜜。

八月六日。譯、十二片。晴。歌舞伎座へ藝術座のマグダを見に行く。

八月七日。晴。交尾箱の二蜂王を大きな無王群に入れたら、一王は無事に納り、一王はさし殺された。

八月八日。譯、十八片。晴。岡(落)氏よりハガキ、同じく返事。新潮社へ行き、譯(第二卷四〇一

片より六〇〇片まで、計百枚）の前金四十圓を受け取つた。但しこの分から一枚三十錢を四十錢にして貰つた。同社で相馬（御）氏並に中村（武）氏に會ひ、將棊を數番してから、ヤマニバーへ行つて食事をした。今井孃を訪ふ。竹腰より手紙。

八月九日。譯、十八片。川手氏を訪ひ、まだ竹腰の登記料が出來ないことを書き置いて來た。吉江氏より「三人」寄送。福岡書店より解題「モナヴナ」到着。高橋（五）氏を訪ふ。二三日この方淸子と物を云はない。今回は向ふに落ち度があるのだから、やがてあやまるだらう。

八月十日。譯、十七片。晴。生方氏よりハガキ。交尾箱の一群は蟻の爲めに段々平らげられてしまつたので、大きな群へワクを入れた。今一つの交尾箱には王もゐるが、まだ交尾ずみではないらしい。原（正）、伊藤二氏來訪。「大倉喜八郞氏に呈す」（三十片）、新日本へ。

八月十一日。譯、十九片。晴。西村氏より手紙。「戰爭卽文藝」（九片）、文章世界へ。大杉氏よりハガキ。「大杉氏等への忠告」（十三片）、近代思想へ。伊藤（證）氏を訪ふ。上原ふく子氏來訪、曾てかの女が藝者をしてゐた時、その身の上の一部を殆ど僕の最初の小說「藝者小竹」に於て書いたことがある。電車終點まで送つた。

八月十二日。曇。田中（王堂）氏よりハガキ。同じく返事。伊藤（義）氏來訪、フーズフーインジャパン社の權利を賣り渡すことに口を聽かせることにした。これは一昨日高橋氏からの依賴であつた。大

阪の石丸氏來訪。夜より大風雨。

八月十三日。朝のうちは雨。ふく子を訪ふ、お互ひに何かに相引かれてゐるやうなところがあつたが、昔話と晩餐とで午後十時半頃まで無事に過ぎることが出來た。夜、十二時より雨。

八月十四日。晴。畑の倒れたトマトや枝豆や唐もろこしを竹で起してやつた。胡瓜は、もう、駄目だから引き拔いた。サラダの種を花から取つて、直ぐ播いた。交尾箱の王を無王群と合同した。今一つ無王群を合同した。鈴木(三重吉)氏來訪、出版屋になるから賛成してくれろと云つたので、承知して置いた。電車終點まで送つて行つて、ミルクセーキにヰスキの醉ひをさました。

八月十五日。譯、三十九片。雨ふりかけて、晴。昨日合同した二つの群のうち、一群は成蹟よく王も無事だが、他の一群の巣門外に澤山の働蜂と共に王が一匹死んでゐた。その死王は見慣れてゐた交尾ずみのであつた。で、その箱の中を調べて見ると、一ケ所蜂が密集してゐるところがあるので、或は王を圍んでゐるのかと思つて、棒で分けて見ると、果して見たことのない新王が出て來た。つき刺されないうちに救ひ上げて王籠に入れ、それからまた群に與へて置いた。兎に角、王のゐないと思つて合同した群にも新王が無事でゐたのを、知らなかつた爲めに合同し、二王が一群に出來たので舊王は合同に持つて行つた群の爲めに若しくは新王の爲めに殺し出され、新王は舊群の爲めに圍み責めにされてゐたのだ。伊藤(義)氏よりハガキ。竹腰より五圓の受取り。田中(王)氏來訪。

八月十六日。譯、十片。晴。大杉氏、滋子氏、中澤氏よりハガキ。大阪の小林(一)氏よりハガキ、同氏を采女町の山口旅館に訪ひ、岩下清周氏の人物に關する意見を參考の爲め聽いた。席に矢倉と云ふ日本橋の一長者がゐて、食事を一緒にした。夜、小林氏に伴はれて帝劇へ行つた。「現代」の記者橋本氏來訪(留守)。號外が出て、いよ〳〵獨逸に關する最後の通知が公表された。

八月十七日。晴。瀧田氏へハガキ、巴里の森田氏よりハガキ。藝術座より手紙。小此木(忠)氏より移轉株式會社の紹介。同氏へ上原ふく子の亭主を使はないかとの交渉を送つた。昨日の橋本氏來訪。

八月十八日。譯、十片。晴。フースフー社の件に付き、その社長栗田俊治郎氏並に製本屋生方捨藏本間(久)氏來訪、早稻田文學講演會の講演を賴みに來た。

八月十九日。晴。川手氏を訪ひ、ふく子氏と共にカフエライオンに行つた。高橋(五)氏よりハガキ氏來訪。夜清子と共に野上氏を訪ふ。蜂群の大合同を行つた。

八月廿日。晴。伊藤(義)氏へハガキ。植竹氏へ手紙(フースフーの件)。生方(捨)氏再來訪。同氏より加藤(朝)氏よりハガキ。蜂の大合同は無事であつた。

りハガキ。鈴木(三)氏よりハガキ。けふも二つの合同を行つた。そして三群に給蜜。殘つた王の總計六箇のうち、一匹はつぶし、三匹は籠の中で死亡。二匹はこれを强勢の群中にあづけて置いたら、それが爲めだらう、同群中に爭鬪が起り、昨日から今朝までに死骸が可なり澤山運び出されたので、二

匹とも取り出し、別に蜜を與へて戸棚にしまつて見た。

八月廿一日。譯、十六片。晴。早稻田文學より日本國民性論中の一つを執筆依賴。同じく返事。昨日の二合同の結果は、一つは無事。一つは新王を包圍してゐたので、王を籠の中へ助け入れてやつた。察するところ、働蜂は慣れない新王をうゐ殺す目的で包圍してゐるのではなく、王に餌を獻じようとしてわれも〳〵と迫るのを、王が不慣れの爲め拒むから、いつまでも包圍してゐるわけになるのだ。一つには、舊王を拔き取つて直ぐ合同したのが惡かつた。植竹氏より返事。

八月廿二日。中外への「眞理と自我主義」(十四片)。譯、九片。晴。一群に與へた王をその群がどうしても受けないので、籠を明けると、王は包圍を逃げて空中に去つてしまつた。で、また別な隔離王の一つを與へて置いた。今一つの群も王籠を明けて見たら、王を包圍ばかりするので、また籠に入れて置いた。この兩群の處分さへすめば、今年の蜂の用は方づくのだ。楠山氏へハガキ。伊藤(證)氏と圍碁、氏は七目から進んで、この頃では四目だ。

八月二十三日。譯、十八片。晴。夜、雨。伊藤(義)氏よりハガキ。福岡書店より「モナヷナ」第三版一千部印税拾圓を送り來たる。二三日前に、文章世界より稿料三圓五十錢を受取つた。橋本氏來訪、フースフーを石川半山氏が引き受けようかと云ふと語つて、內容を聽いて行つた。淸子と共に原稿紙を買ひに出たついでに、德田秋聲氏を訪ふ。けふ、獨逸に對する宣戰詔勅が出た。

八月廿四日。譯、二十九片。朝は雨、晝から晴。三井(甲)氏よりハガキ二枚。

八月廿五日。譯、三十片。晴。新潮社へ行き譯料四十圓と雜誌稿料五圓（二圓五十錢まだ不足）を受け取つた。吉野氏を訪ひ、それから上野をぶらついた。新潮社へハガキ。

八月廿六日。淸子の代筆の解說「マクベス」を査讀した。「ホイトマン草の葉抄」の原稿を整へ、その序文(八片)を書いた。晴。楠山氏より手紙。岡氏よりハガキ。栗田氏へハガキ。けさ、籠に這入つた蜂王を二つとも出してやつてから褥についたが、午後その二群を調べると、一方のは王も無事であつた。十個ばかり急仕立ての、皮のうすい王臺が出來てゐて、蓋もしてあつたが、すべて取り除いた。働蜂房にも幼蟲の大きいのが多少見えてゐるのを見ると、さきに不姙王だとして取り殺してしまつた王は既に多少の產卵をしてゐたのであつたらしい。(まさか、働蜂が雄蜂卵を產み出したともまだ思へないから。)現に、働蜂卵を王蜂蟲に改造してもゐたのだから。然し今一つの群には、放つた王が見えない――あす、よく再調査をするつもり。いんぎんとジヤガ芋とを取り除いた古畑を耕して、こやしをして置いた。

八月廿七日。譯、三片。晴。柴田(俊)氏よりハガキ。新日本より稿料十四圓也。夜、淸子と共に神田の古本屋をひやかして、四五册買つた。

八月廿八日。ちよツと雨。本間氏よりハガキ。窪田(通)氏より手紙。文明論を――

八月廿九日。夜より大雨、風も隨分あつた。福岡書店へハガキ。文明論を――

八月卅日。晴。橋本氏來訪。文明論を――

八月卅一日。晴。ふく子氏を訪ふ。文明論を――

九月一日。晴。文明論――

九月二日。晴。文明論なる「わが國民生活と文明の基調」(百三十六片)を書き上げ、早稻田文學社へ持つて行つた。途中で長田(秀)氏に會ひ、木下(木工)氏に紹介された。吉野氏を訪ふ。

九月三日。窪田氏へ返事。

九月四日。晴。伊藤氏を訪ふ。栗田氏へハガキ。岡村氏よりハガキ。

九月五日。晴。吉野氏來訪。福岡書店を訪ふ(稿料を持つて來ない爲め)。郁子氏を訪ふ。

九月六日。晴。大阪の薄田氏へ手紙(大阪每日へ一種の歷史小說「鳴門姬」を書かせないかと)。警醒社へ手紙。母、二三日前より病氣。早稻田文學社より稿料四十圓。福岡書店主人來訪、「マクベス」解說の稿料二千部印稅二十圓並に「モナヷナ」第三版印稅十圓を置いて行つた。瀧田氏來訪、中央公論の小說四十枚を引き受けた。「解剖學者」の校正をして博文館に送つた。

九月七日。晴。竹腰へ五圓發送。小菅へ繼母の病狀を知らせに行つたついでに、ふく子氏を訪ふ。高橋(五)氏來訪(留守)。伊藤(證)氏來訪。

九月八日。晴。中村(武)氏來訪。小川氏に對する批評を聽いて行つた。同時に、文學著作協會設立の下世話を賴んだ(生田長江氏が一向にはかどらせないから)。鈴木(三)氏よりハガキ。同氏を訪ふて出版原稿を渡す。先日給蜜した外の蜂群に給蜜。現在の存在蜂群數九個――外に一つ、無王のがあるが、たちが惡くなつたので合同してやらずに、その亡び行く樣子を研究してゐる。昨夜より、「藝者あがり」を執筆。

九月九日。晴。警醒社より主人が留守だから今少し待つてくれろとの返事。平塚氏の宅へ行つたが、お祭りで野上夫婦、林(千)氏等が來てゐた。「藝者あがり」を――

九月十日。曇。深夜から雨。十日會に行く。急に冷やかになつた。「藝」――

九月十一日。雨。竹腰より五圓の受取。瀧田氏よりハガキ、同じく返事。小菅よりハガキ、病人の模樣を知らせる。反響社よりハガキ。「藝」――

九月十二日。晴。岩崎並に小野二氏來訪(劇團組織の贊成者になる件)。伊藤(義)、堀、よみうり三氏よりハガキ。「藝者あがり」(百四十片、計七十枚分。)この材料はふく子氏をモデルにした。

九月十三日。雨。中央公論社へ原稿を持つて行き、七十圓を受け取つた。沼波氏を訪ふ、留守で細君に會つて話して來た。「臨川プラス獨創」(十二片)、中央公論へ

九月十四日。雨。

九月十五日。晴。東京堂より校正。「宗教か反宗教か」(四十片)、中外日報へ。

九月十六日。晴。ふく子氏を訪ひ、賤機の「狂女は」のところを習ふ。「評家數名の批判」(十二片)、よみうりへ。新時代劇協會より招待。

九月十七日。雨。警醒社より返事(出版の件ととなはず)。新時代劇協會の公演を見に行く。

九月十八日。晴。よみうりよりハガキ、同じく返事。けふは澤山の來客があつた。淸子のおやぢが一人客をつれて來たし、佐藤(稠)氏が來たし。桝本、辻、伊藤夫人が來たし。夜、伊藤氏を訪ふ。

九月十九日。晴。讀賣記者加藤謙氏來訪。加藤(朝)氏よりハガキ。「マクベス」捷概校正ずみ。廣文堂より原稿を見せてくれろと云つて來た。夜、早稻田文學社の文藝講演會に於て日本文明論を一時間と四十分ばかり演說した。

九月二十日。「舊日本の滅亡」若しくは「近代生活の解剖」と稱しようとする原稿四百四十枚分をまとめた。——晴。——原稿を廣文堂へ持つて行く。歸りに平塚女史を訪ひ、婦人記者の候補に木村政子と云ふ人を推薦することにした(東京日々の松内氏の依賴があつたので)。「藝者あがり」の校正をすます。

九月廿一日。晴。淸子の父來訪。吉野、島中二氏共に來訪。野上氏來訪、自由講座の一講演「婦人問題研究」を引き受けた。

九月廿二日。夕かたから雨。「戰爭の內的要件」(八片)、時事新報へ。譯、十四片。

九月廿三日。晴。こないだ中から萩の花も咲いてゐて、蜂は花粉を運ぶことが盛んだ。譯、四十二片。

九月廿四日。雨。自由講座より受持時間通知。

九月廿五日。譯、三十五片。晴。自由講座へ返事。辻氏へハガキ。廣文堂へ問ひ合せ。トマトを取り去つたあとの畑を耕した。沼波氏よりハガキ。自由講座の木村(幹)氏來訪。

九月廿三日。譯、三十片。晴。小松菜と時なし大根との種を播いた。廣文堂の人が來て、原稿を五十圓で賣り切りにしてくれろとのことであつたから、せめて代價の一割(千部に對する)にせよと云つてやつた。主人に相談して來ると云つて歸つた。伊藤氏と二回碁を圍んだ。

九月廿七日。譯、十三片。晴。安藤(理)氏を伊藤(證)氏が伴つて來訪。僕の「半獸主義」を再版することになつた。また、宗教叢書中に平田篤胤の外に今一つキリストを引き受けた。

九月廿八日。譯、十六片。晴。楠山氏來訪新日本新年號のを依賴。芝川氏より轉居の通知。ふく子氏來訪。中外日報より十圓。

九月廿九日。譯、二十七片。雨。新潮社へハガキ。植竹書院より手紙。それへ返事。新潮社、瀧田東亞堂へハガキ。

九月三十日。譯、六十片。雨。安藤氏よりハガキの爲め、伊藤(證)氏を訪ふ。病人はまたきのふから惡くなつた。けふは殆ど徹夜で「牛獸主義」の訂正をした。

十月一日。晴。窪田氏より原稿依賴。無王の一群を二三日前から、どうせ邪魔になるので、入り口をふたして置いたら、けふ見ると、大抵死んでゐた。二三日の雨つづきの爲めだらう、一群には飢ゑて死に倒れる蜂が巢門に十數個ほどあつたので、それに給蜜をしてやつた。ついでに、別に弱さうな一群へもやつた。

十月二日。譯、十四片。晴。福岡書店からモナヴナの印を取りに來た(第四版)。本間(久)氏來訪、先月演說の謝金を三圓持つて來た。大陽から小說依賴、同じく返事。伊藤證信氏轉居の通知。正宗(白)氏よりハガキ。けふ、別な蜂群にも多少幼蟲を嚙み出して巢門外に出したのがあつたので、給蜜した。

十月三日。晴。中村(春)並に島村(民)氏來訪。時事より稿料二圓。よみうりより四圓。一蜂群へ給蜜。

十月四日。晴。譯、三十片。木村(鷹)氏よりハガキ。木村(幹)氏より自由講座の時間割通知。ふく子氏よりハガキ。沼浪氏來訪。

十月五日。晴。廣文堂並に東亞堂へハガキ。自由講座に行き、「婦人問題の批判」第一講をやつた。

十月六日。晴。小寺夫婦來訪。岩村、三井(甲)氏より十日會の件ハガキ。加藤(朝)氏へハガキ。村役場へ繼母寄留の屆。
新潮社から譯百枚分四十圓。

十月七日。小說「トンネル狂」(四十一片)、太陽へ。晴。今井歌子氏來訪。三井、蒲原、長谷川三氏へハガキ。藤野愛子氏へ手紙。東亞堂より手紙。安藤氏よりハガキ。日月社へハガキ。ナナの梗概を書きはじめた。

十月八日。雨。日月社の青森氏來訪、「神秘と半獸主義」の稿を渡し、二千部印稅四十圓のうち二十五圓を受け取つた。加藤(朝)氏よりハガキ。福岡書店よりハガキ。

十月九日。晴。愛子氏より手紙。福岡氏へハガキ。中央公論より臨川論四圓二十錢。

十月十日。晴。畑を耕した。よみうり記者並に筑紫氏來訪。蒲原氏來訪。太陽より十六圓。十日會へ行く。

十月十一日。夜、雨。千葉(鑛)氏來訪・同氏の紹介で圖書株式會社へ出版の照會。廣文堂よりは賣り切り五十圓でなければと云つて來た。平澤明子氏來訪。藤野愛子氏の催しにかかる鶯の會を見に、鶯谷のいかほへ行く。今井歌子氏來訪。

十月十二日。晴。安藤(理)氏へハガキ。沼浪氏よりハガキ。愛子氏より手紙。蒲原氏よりハガキ、

同じく返事。今井歌子氏、坂田幹子孃を紹介しに來たる。鈴木郁翁氏初めて來訪。二三日前からコスモスの花が庭の周圍並に隣りの空地へ咲き出した。蜂はよくそれに行つてる。

十月十三日。晴。日月社へハガキ。おほ掃除。原(德)氏よりハガキ。蒲原氏に招待され、野口氏と三人で一夕を談じた。「桑木博士に與ふ」(八片)、よみうりへ。

十月十四日。晴。齋木仙醉氏來訪。大日本圖書會社よりハガキ、同じく返事。木村(幹)氏よりハガキ。吉野氏來訪。筑紫氏を訪ふ。山田氏へハガキ(芝の家の件)。

十月十五日。晴。今井歌子氏へハガキ。安藤氏へハガキ。敬文館へんしう員大月隆仗氏來訪、名著批評叢書中へ「古神道論」、オイケン、ベルグソン、ジエームス、並に沙翁を引き受けた。佐藤(稠)氏より手紙。自由講座の講演に行く。沼波氏來訪。

十月十六日。晴。畫報社より手紙。沼波氏よりハガキ。人見氏より手紙、中村某氏出版の「惡魔主義の思想」筆記依賴——條件は百五十枚から二百枚で、五十錢本の叢書の一。印稅八分、期日十一月十五日。承知の返事を出す。

十月十七日。晴。一茶同好會の催しにかかる戸隱のもみぢ見に沼波氏よりさそはれ、午前八時上野出發。長野地方へ行くはこれが初めであつた。妙義山を近く望み、淺間の煙を遠く望んだ。午後四時三十八分頃に長野市着。ふぢ屋本店に入り、會主なる中村六郎氏に紹介せられた。同行のうちには、

沼波氏の外に、佐々醒雪、齋藤松州、平福百穗、戸川殘花等の諸氏もあつた。同夜、佐々氏と圍碁七番、このうち一番はあいこで六番は勝負相半ばした。家へハガキ二枚。

十月十八日。曇。長野の人は、もう、あはせにあはせ羽織、襦袢を着てゐた。宿では多くの座敷にブシの花を生けてあつた。その上、生け方が――菊にせよ、その他にせよ――すべて横にまがり出たやうなのばかりだ。善光寺の境內、大勸進と云ふ建て物の一部に陳列した一茶の筆蹟並に永井雲萍の繪畫を觀、同建築物內の行在所で茶會に列した。庭はあまりわざとらしく作つてないのがよかつた。本堂で、同好會へ寄附した空也念佛を行なつた。家へハガキ。蒲原氏へハガキ。夕かたから雨。佐々氏と圍碁七番勝負なし。

十月十九日。晴。上司、正宗愛子、滋子、ふく子等の諸氏へハガキ。汽車で柏原へ行き、一茶の俳諧寺、一茶の住して死んだ倉、一茶の歌つた栗の樹およそ二丈五尺の太さの等を見てから、中村氏の本家に休憩し、そば燒き餅を喰ひ、そこから馬で戸隱へ向つた。荷鞍は窮窟なので、途中から西洋鞍にかへさせた。山に入ると、至るところ紅葉で、谷あひから又谷の上から、それが見えるが、どこと云つて一ケ所もいいところがないので、高尾や永源寺などには及ばないやうだ。戸隱神社の別當家に宿泊。そば入りの打ち菓子、晩餐にはまた岩魚、ナラの木茸等を喰つた。東京から一緒に行つた空也連を呼んで、これに念佛踊りを繰り返さしめた。また僕等もその行き方を習つて見た。戸隱村の名物

踊りお宣長をどりを村の人等に踊らせ、僕等も飛び入りした。中村氏の姉に當る尼さんが善光寺でも世話をしてゐたが、柏原からも一緒に來てゐて、これも踊りに飛び込んだ。踊りだけでは僕の腹がまだこなれないので、僕は「賤機」の一部をも唄つた。歌子、愛子、家へハガキ。

十月二十日。雨。雷の中を反對の方へ下山。飯縄高原は遠く紅葉を臨んで氣持ちがよかつた。僕と佐々、沼波兩氏を先頭として、一行はあとさきになり、皆無事に長野へ達したが、日本橋の是眞堂のおやぢだけは長野で倒れて、一緒に汽車に乘ることは出來なかつた。

二十一日。晴。朝六時上野着。伊藤(證)氏來訪。留守中の訪問者武林無想庵氏(久し振りであつたのに)、海野幸勝氏(高須氏の紹介で)、僕の子供二名等。「マクベス」製本來たる。日月社より半獸主義初二千部の印税殘金十五圓。ハガキ――七尾某、安藤(二枚)、沼波、小泉、等の諸氏より。

二十二日。晴。畑の大根を間引き、菊へよしずの家根をした。羽太氏よりその著書生殖器學。美術新報社よりハガキ、同じく返事。圖書株式會社の支配人村田五郎氏來訪。松本悟朗氏來訪。自由講座並に人見氏へハガキ。藝術座より招待券。

二十三日。晴。安藤氏へハガキ。七尾某、田邊後援會等へハガキ。敬文館並に佐々木(政治)氏よりハガキ。以上二氏へ返事。よみうり記者來訪。

二十四日。晴。文展を見に行つたついでに、淸子と共に田村氏を訪ふ。木村(幹)氏よりハガキ。中

澤(臨)氏より「ベルグソン」。東亞堂主人來訪。日月社並に高井氏へハガキ。

二十五日。晴。中村(六郎)氏へ手紙。日月社よりハガキ。福岡書店へハガキ。「ナナ」出來。

二十六日。晴。小川氏より轉居通知。帝劇へクレオパトラを見に行つた。

二十七日。晴。安藤氏よりハガキ。敬文館より "Eucken and Bergson." 伊藤(義)氏來訪。譯、十四片。

二十八日。晴。圖書會社より使ひ。木村(幹)氏よりハガキ。木村(幹)氏來訪。澁谷(愛)氏と共に佐藤(稠)氏を訪ふ(留守)。蜂群の小なのを三つ一つに一昨日合同したら、本日、王を殺してしまつた。一昨日から全群に給蜜。愛子氏よりハガキ。

十月二十九日。曇。二科展覧會へ行く。電氣館へ歐洲戰役の活動寫眞を見に行く。自由講座の講義をした。譯、十八片。

十月三十日。雨。西村氏よりハガキ、同じく返事。

十月三十一日。譯、三十七片。雨。ふく代氏來訪(「藝者あがり」が親戚中の問題を起したよし)。木村(幹)氏來訪。高井、伊藤(證)二氏よりハガキ。北豐島郡長より家屋税滯納通知(これは芝區役所からまわつて來た物で、竹腰が滯納してゐるのである)。譯、八片。

十一月一日。晴。「短信」(四片)、俳味へ(一茶のこと)。一ケ月ほど前から殆ど危篤をつづけた繼母

がけふの午後九時頃死んだ。惡くもあるし又不誠實であつた婆アさんであつた。夜、十一時に板橋警察署へ行き、檢死證を得て來た。看護婦を初め皆を——勞れてゐるらしいので——寢かせてから、譯、二十一片。

十一月二日。晴。村役場へ行つて死去屆並に埋葬申請の手續きをした。繼母の死を熊谷（太郎）、熊谷（安城）、杉本（鈴子）、飯塚（嘉三郎）、並に鈴木（全眞）氏へ通知。植竹へ出版の相談書。落合へ死人を運んで行つて火葬場に渡した歸りに、野口氏を訪ひ、ランソムの「ポー」、ソルレイの「ヹルレン」、ランソムの「ワイルド」を借り。岡野（碩）氏來訪。新潮社より譯百枚の四拾圓。

十一月三日。晴。自由講座より四圓五十錢。中村（一六）氏より手紙。（「惡魔主義」の督促）。大月氏より「古神道」の督促。澁谷氏よりハガキ。骨拾ひに落合に行き、それから蒲原氏を訪ふてワイルドの"Selected Poems"ヒユネカの Egoists"「最近獨逸文學の研究」、ポーのチヨイスヲルク、スキンパンの Poems & Ballads„ ウドベリの Swinbuhne„ 等を借りた。青山墓地へ行き、父並に母の墓に繼母の遺骨を埋めた。それから川手氏を訪ふと、平野氏が來てゐたので、歸りに湯島のクラブで玉突を二回り、內藤鳴雪氏の子なる人に會ふ。木村（鷹）氏來訪（留守）。

十一月四日。晴。福岡書店よりハガキ。木村（幹）氏より十一月自由講座の時間割。大日本文學會より監問、同じく答へ。橫濱の姉來訪、一泊に付き活動寫眞へつれて行つた。

十一月五日。曇、風。安藤氏へハガキ。福岡書店より拾圓(モナヅナ第四版)。芝區役所へ行く。長谷川(勝治)臺所の方から來訪、會ふ必要もなかつたが、是非にと賴むのであげた。繼母並に僕に對する仕うちの卑劣であつたのを云つて聽かせ、悔悟の樣子が見えたにより、渠並に僕の姉を許してやつた。

十一月六日。晴。竹腰よりハガキ。同じく返事(子を二名ともこちらへ渡すべきこと、八幡町の家は賣却して斷然こちらの迷惑を絕つこと)。村田(五)氏並に天弦堂へ手紙。佐々木(政治)氏來訪。弟、來訪。

十一月七日。晴。加藤(朝)、小寺、杉本諸氏より吊詞。早稻田文學社より大正三年の文藝界總評を質問して來たので、左の如く答へた――

「本年は自分のことに多忙の爲めあまり人の作や評論を見る暇がなかつた。そのうちで僕が注意したのは、第一に、三井甲之助氏の發表である、第二に、古谷榮一と云ふ人の「オイケン哲學の批難」である。同氏は曾て僕のもとへ「自己の實生活の問題として見たる藝術の創作の意義」と云ふ、これも長大な論文を加賀の金澤から送つて來たことがあるが、その時からなか〳〵意氣の盛んな靑年であることが推察出來た。願くは、渠をしてその考へを十分によく段々と纒めさせたいものだ。」

中村(六郎)氏より手紙。山田(三)よりハガキ。

自由講座臨時講演會に行き、「發行停止發賣禁止に就いて」を演じたが、あとで考へると、安寧妨害の件を治安妨害と語つたのは思ひ違ひであつた。歸りに生田氏と共に安藤氏を日月社に訪ふ。青島陷落の號外が出た。

十一月八日。晴。安藤氏よりハガキ。中村(一)氏より手紙。姉より手紙(八幡町の家と子供との件)。圖書會社よりハガキ。廣文堂よりハガキ、廣文堂へ返事。滋子氏來訪。熊谷(トヨ)氏より弔詞と二圓。

十一月九日。雨。小野崎氏より弔詞と一圓。自由講座で講演。

十一月十日。晴。廣文堂店員中川氏來訪、「近代生活の解剖」原稿、印税として、二千部六十圓のうち五十圓を置いて行つた。第三番目の千部から千部毎に六十圓を出させることにした(つまり最初二千部に對して六十圓を拂はせ、あとは一千部毎に六十圓也)。敬文館の店員來訪(藤川義雄氏)。東亞堂の主人來訪。前田(夕)氏の紹介で中澤某氏來訪(雜誌まじめの件)。よみうりの加藤氏來訪。筑紫氏來訪。芝區役所より戸籍謄本。明治生命保險會社に行き、繼母の保險料請求。村田(五郎)氏へ手紙(原稿の交渉を斷り、別に婦人問題に關する出版を相談)。十日會へ行く。横濱の姉よりハガキ、同じく返事(竹腰の件)。

十一月十一日。晴。鈴木(昇)より弔詞。伊藤(證)氏よりハガキ。

十一月十二日。晴。伊藤(證)氏へハガキ。加藤(朝)氏、楠山(正雄)氏へハガキ。澤(龜治郎)氏來訪、新らしい雜誌を出すので關係者になつて呉れろと云ふので、承諾し、且、加藤(朝)氏並に吉野(甫)氏を推薦した。飯塚より弔詞。

十一月十三日。晴。明治保險會社に行き、繼母保險金百圓を受け取つた、滋子氏を訪ふ。

十一月十四日。晴。澤氏、吉野氏、加藤氏來訪。上野葉子氏來訪。廣文堂から校正が來初めた。楠山氏より手紙。

十一月十五日。昨夜より雨。土田杏村と云ふ人より僕に與へる議論を送つて來た。同氏へハガキ。天弦堂よりハガキ。小林(一三)氏へ手紙(新雜誌へ大阪實業界の事を毎月入れる件)。澤(龜)氏を訪ふ。

十一月十六日。晴。夜、霧が深かつた。午前筑紫氏來訪。福岡書店よりハガキ。

十一月十七日。晴。福岡へハガキ。天弦堂の主人來訪。竹腰の代理として村上と云ふ婦人來訪。

十一月十八日。雨。雜誌「まじめ」の最初の會議に臨む。石井(柏)氏よりハガキ並蒲原所有の「ドアズレ」。押川春浪氏永眠の報知、同じく悔みのハガキ。

十一月十九日。晴。原稿依賴(若宮、伊藤(證)田中(王)、田中(正)、木村、齋木、平塚、阿部、川合、野田、蒲原の諸氏へ)。

十一月廿日。曇(夕がた雨)。小林氏より返事、同じく返事。田中(王)氏よりハガキ。岡野(碩)氏來訪。

十一月廿一日。晴。讀賣へハガキ。まじめ會へハガキ。土田・天弦堂、自由講座・田中(正)・敬文館・木村(鷹)・伊藤(證)・川合(貞)、若宮の諸氏より手紙やハガキ。生方氏來訪。

十一月廿二日。雨あり。木村(鷹)、加藤(信)、天弦堂へハガキ。よみうりよりハガキ。天弦堂・平塚(明)、加藤・村田(五)氏よりハガキ。植竹より手紙・同じく返事(文明叢書へ這入つた「ぼんち」は無條件でないこと並に校正を見せなかつたことの抗議)。木村(鷹)氏を訪ふ。敬文館の藤川氏來訪。

十一月廿三日。曇。

十一月廿四日。曇。小野崎氏よりハガキ。小林(一)氏より手紙、同じく返事。上野(葉子)氏へハガキ。

十一月廿五日。晴。巴里の森田氏よりハガキ。雜誌社の會議へ行く。上野(葉)、小寺二氏を訪ふ。

十一月廿六日。晴。新公論の小阪氏來訪、新年小說を引き受けた。三井氏より返事・同じく氏へ返事。澤氏へハガキ(ぽんち畫の件)。新評論の質問へ左の如く返事——

(此二行原稿に缺く。編者)

天弦堂より手紙、同じく返事。清子と共に伊藤(證)氏を訪ふ。

十一月廿七日。晴。清子が病氣が直つたとなると今度はまた兒の病氣だ。

十一月廿八日。晴。新潮社の中根氏來訪。よみうりの加藤氏來訪。加藤(朝)氏よりハガキ。「毒藥を飮む女」の校正はじまる。中村(春)氏を訪ふ。自由講座より五圓。

十一月廿九日。晴。加藤(朝)氏へハガキ二。田中(王)氏へハガキ。藤川氏よりハガキ。淑女畫報よりの質問に答へ。社の中澤氏來訪。敬文館の藤川氏來訪。

十一月卅日。晴。ヒヤシンス並にチユリツプをおろした。自由講座で講演。鈴木(三)氏へハガキ。

十二月一日。晴。北村(季)氏來訪。鈴木(三)氏より返事。

十二月二日。晴。澤、吉野、加藤、木村(鷹)氏來訪。上野葉子氏來訪。澤氏を訪ふ。木村(幹)、伊藤(證)、中村(武)、上司諸氏よりハガキ。敬文館より手紙。西村(渚)氏よりハガキ。佐々木(政)氏より手紙、天弦堂來訪。小說「津田三藏」(六十一片)。

十二月三日。晴。日月社、松本(悟)、千葉、加藤(信)氏よりハガキ又は手紙。松本(悟)並に千葉氏へハガキ。「故押川春浪の事」(十一片)、「斷片今語」(十二片)。

十二月四日。晴。三井氏より原稿並にハガキ。野上氏よりハガキ。澤氏よりハガキ。昨日來風邪の氣味で何も出來ず。よみうりより稿料二圓五十錢。

十二月五日。晴。風邪に付きへんしう會議を僕の家でする筈のところ、澤氏から電報でえんきの知らせが來た。生方、野上二氏來訪。加藤(朝)氏來訪。楠山、西本二氏よりハガキ。富山房より三十一圓(新年小說稿料)。第三帝國へ原稿。

十二月六日。雨。小林(一)氏より原稿並に手紙。敬文館よりハガキ。加藤氏よりハガキ。風邪が直つたので吉野氏を訪ふ。留守に田中王堂氏來訪。お滋さんへハガキ。

十二月七日。雨。伊藤氏よりハガキ。新雜誌發刊が澤氏の都合で延期になつたので、止むを得ない人だけの稿料請求をしに澤氏を訪問した。十日會より通知。蜂群の一つは饑ゑ死にかけてゐるが、めんどうだからそのままにして置く。生田氏、松本氏へ原稿。

十二月八日。晴。小林(一)氏へ手紙。手もとへ來た諸氏の原稿を返す。(上野、三井、木村)。西村氏よりハガキ。鴻の池銀行へ行つたついでに、吉野氏を訪ふ。

十二月九日。晴。加藤氏よりハガキ。松本(悟)氏來訪。野上氏を訪ふ(留守)。敬文館へハガキ。

十二月十日。晴。生方氏へハガキ。よみうりより新年原稿依賴。岡野氏より寒菊と手紙とを届けて來た。中澤、高木二氏來訪。「近代生活の解剖」校正ずみ。十日會へ行く。

十二月十一日。晴。けさの徹夜で「古神道大義」を完了。敬文館から藤川氏が取りに來て、初版二千部印稅五十圓を十五日拂小切手で受け取つた。この書は二千部以上は印稅七分と定めた。大信田(落)

氏よりハガキ。生方氏よりハガキ。小林（一）氏より手紙。澤・並に廣文堂へハガキ。加藤（朝）氏を敬文館へ紹介。

十二月十二日。晴。新潮社から縮刷出版する爲めに「耽溺」の訂正をした。新公論よりハガキ。

十二月十三日。晴。楠山氏へハガキ。石山賢吉氏より手紙あり、小林氏の原稿をその方へまわした。澤氏よりハガキ、同じく返事をして約束銀行の日限を再び注意した。植竹氏よりハガキ、「ぼんち」十錢本に對する僕の抗議に就き、左の如く――

拜復其後御不沙汰仕り候扨「ぼんち」の件に付き御手紙に接し候間參上解決をつける筈の處多忙の爲め延引失禮仕り候決して卑怯に默つてゐた譯では之なく候何れ近々小生なり代理なり參上御相談可仕間候宜敷御願申上候匆々

先妻の子薰だけが、けふから、こちらの家族に這入つた。「鄕土藝術と描寫問題」（十一片）。よみうりへ。

十二月十四日。晴。訂正「耽溺」を新潮社へ持つて行く、これは印税一割の約束で出すことにした。歸りに小川氏を訪ひ、ヤマニバーで晩酌をして、神樂坂を通つてると、田村俊子氏と長田幹彥氏とに呼びとめられ、また一緒に川鐵と云ふ鳥屋へあがり、途中あつた瀧田氏も共になつた。そのあとで、俊子氏と共に楠山氏を訪ふ。

十二月十五日。晴。生田(弘)氏よりハガキ。

十二月十六日。晴。吉野氏來訪。「古神道大義」の校正が來初めた。鈴木(三)氏へハガキ。

十二月十七日。晴。小說「信より玉江へ」(八十五片)。小林(一)、高橋(久)二氏へ手紙。天弦堂來訪、今月中に五十圓持つて來る約束をさせた。生方氏來訪。鈴木(三)氏より使ひで「毒薬」前篇印税二千部代三十圓を届けて來た。岡野氏を訪ふ。薫が來て以來、淸子は親切にしてやつてるが、一方にまた民法を頻りに調べ出した。

十二月十八日。晴。澤氏來訪。吉野氏來訪。

十二月十九日。晴。實業之世界社より增版の賛否を問ひによこしたので、不賛成と答へてやつた。岡野、吉野、安藤三氏よりハガキ。散步のついでに敬文館を訪ふ。けふから「惡魔主義の思想」に取りかかつた。淸子を代理として新潮社から「耽溺」の印税のうちから四十圓だけさき受け取りをした。

十二月廿日。晴。澤氏へハガキ。植竹の代理として鈴木(悅)氏のハガキ、同じく返事(選集四月出版の件)。

十二月廿一日。晴。木村(鷹)。生方、中澤、岡野氏よりハガキ。岡野、木村二氏へ返事。東亞堂主人來訪、僕の「自然論」の最初二十枚分ばかりを紛失した詫びを述べた。

十二月廿二日。昨夜から初雪、午前十一時に起きたら、もう、然し、消えてゐた。正宗氏よりハガ

キ(旅からである)。辻氏來訪。

十二月廿三日。晴。加藤(朝)氏へハガキ。

十二月廿四日。晴。高橋(五)、廣文堂二氏よりハガキ。春陽堂より手紙。敬文館を訪ふ。

十二月廿五日。晴。澤氏來訪、十圓を持つて來た。その他に加藤氏並に生方氏への稿料も僅少だが持つて來たので、それで無事に別れた。そのあとへ二氏が來たので、それを渡した。天弦堂の代理來訪、金は廿八日にしてくれろとのこと。薫のからだがさめ肌のやうになつてるのを發見したので、醫者へつれて行くと、あぶら氣が少いからであるとのことであつた。多少まづい物ばかり喰つてゐたのだらう。筑紫氏を訪ふ。淸子が何だかぐづ〳〵云ふ風が見えて來た――こちらは、もう、どうでもいいのだ。子供もどうでもいいのだ。

十二月廿六日。雨。楠山氏より「津田三藏」の原稿を返して來た。その理由はいよ〳〵新日本發行の場合になつて內務省秘書官から國交上さしつかへあるからとの注意があつたさうだ。木村(鷹)、楠山二氏へハガキ。滋野氏來訪、「大日本」へ書いた來三月號の小說が都合惡いので別なのを書きかへてくれろとのこと。淸子と共に小さん獨演會を聽きに行つた。小さんを聽くのは初めてだが、思ふに、いや味がない話し振りは自然的のやうだが、どの話もどの話も同じ癖が出るところ、あんまり工風が固定過ぎる。

十二月二十七日。晴。岡野氏よりハガキ。藤野愛子氏を訪ふ、留守。吉野氏を訪ふ、留守。鈴木(三)氏から印税の判並に出版屆を取りに來た。

十二月廿八日。晴。土田氏よりハガキ。天弦堂より五十圓(但し、「惡魔主義」の初版千部印税四十圓と再版の一部としての十圓)。野口並に蒲原二氏を訪ふ(書物を借りに)。

十二月廿九日。晴。よみうり社を訪ふ。上司氏に會つたが、あのあつた男が瘠の爲めにずツと痩せこけたのが目に立つた。伊藤(證)氏へ稿料を持つて行つて、御馳走になつた。愛子氏より手紙。よみうりから五圓のカワセ。

十二月卅日。晴。薫をして廣文堂へ殘金十圓を取りに行かせた。岡野氏より大日本社の稿料五十圓を持つて來た。「古神道大義」の校正を終はる。生田氏へハガキ。先日來、犬「小僧」がおとなしくなつたが、あの數日間うちをあけてゐたのは野犬のおびき出しに會つたのかも知れない。歸つて來た日、裏木戸の入り口に弱くあやまるやうにもたれて、ひイ〱と小い聲を出してゐたのが思ひ出される。今夜は、あたまが痛いので早く寢る――まだ午後十二時だ。

淸子はまた何か子供のことからすねてゐる。少しめんどうになつて來た。今書いてゐる「惡魔主義」の一要件なるアンパシビリテがさこそと思はれる。

十二月卅一日。晴。淸子と共に夜、暮の市中をぶらついて見た。

本年の收入は一千五百餘圓。

大正四年

一月一日。晴。年始狀の來たのは――小杉(爲)、千葉(鑛)、吉味、中田、鷲見、吉岡(哲)、諏訪、藤野、堀(正)、奧村(正)、原(德)、櫻根(孝)、長谷川(勝)、長山、大月、廣文堂、藤川、敬文館、平木、小野崎、水谷、新潮社、野口、川路、岡野(碩)、岡村書店、川手、春陽堂、大住、西村東雲堂。出したのは、櫻根、千葉、吉味、中田、吉岡、諏訪、藤野、堀、奧村、原、小杉、鷲見諸氏へ。生方氏來訪。

一月二日。晴。來狀――東亞堂、高須、鈴木(全)、池田、古谷、中央公論、植竹、小林(克)、福岡書店、増野、小林(一)、鈴木(昇)、吉野、北山、伊藤(義)、石丸の諸氏。出狀――小林(一)、増野、池田、鈴木(全)の諸氏へ。天弦堂來訪。中村(春)氏來訪。淸子の父、來訪。「毒藥を飮む女」の製本出來。

一月三日。晴。來狀――岡、山本(三)、松本(悟)、田村(俊)、荒木(滋)、中野(初)、伊藤(證)の諸

氏。出狀――山本(三)・岡二氏。伊藤(證)・加藤(朝)・植竹の代理三氏來訪。
一月四日。晴。長谷川(勝)がその兄二名をつれて來た。夜、辻氏を訪ふ。
一月五日。晴。荒木滋子氏を訪ふ。
一月六日。晴。愛子氏よりハガキ。第三帝國より稿料三圓。夜、反響社の會合へ行つた。
一月七日。午前から雪ふりつづく。澁谷氏來訪。
一月八日。昨日からこの夜あけまで雪はふりつづけだ。午後、曇。佐々木(政)、井上(正)氏からの年賀狀。
一月九日。晴。中村(武)氏來訪。天弦堂、山本喜市郎、中村(六)氏よりハガキ。
一月十日。晴。人見氏より端書。新日本より手紙。藤原上司氏より手紙と新原稿。十日會へ行く。
一月十一日。晴。天弦堂よりハガキ。敬文館より「古神道」の二千五百部の印を取りに來た(そのうち五百部の印税はまだ受け取らぬ。)
一月十二日。晴。「惡魔主義の思想と文藝」(凡そ百九十五枚分)を書き終つた。
一月十三日。晴。北村(季)よりハガキ。巴里の正宗氏より手紙。「魔の妻」(單行短篇小說六百枚)をまとめて、植竹書院へ持つて行つた。小松氏を訪ふ。(郁子氏の友人と云ふ森田美枝子氏に出會つたところ、僕の國の小學教師であつた人の子の細君であつた。)武林氏來訪(留守)大倉(喜八郞)氏へハガキ

と反響新年號（渠への忠告を讀ませる爲め）

一月十四日。晴。荒木滋子氏來訪（松原至文氏を敬文館へ紹介の件）。同氏を案内して、小野秀雄氏並に三ケ島葭子氏へ行く。

一月十五日。晴。敬文館へ手紙（松原氏紹介の件。）鈴木（全）氏へ「ぼんち」一册。土田氏へ、子供の中學のこと聽き合せ。佐藤並に中村氏を訪ふ（共に留守）。

一月十六日。晴。岡野氏、新潮社、天弦堂へハガキ、淸子並に薰をつれて上野へ出たついでに、田中（王）、千葉（鑛）・並に山本（露）氏を訪ふ（後二者は留守）。小川（未）、並に岡野氏よりハガキ。

一月十七日。晴。敬文館よりハガキ。土田氏より返事、平塚氏へハガキ。「斷片語」（九片）・よみうりへ。

一月十八日。譯、十片。晴。岡野、天弦堂二氏よりハガキ。野口氏より英文「ジャパニスポエトリ」。「近代生活の解剖」出來、十部を届けて來た。佐藤（稠）氏へ廣文堂の中川氏を紹介。橫濱の姉より書物を返し來たる。

一月十九日。譯、二十七片。晴。新潮社の佐藤氏、平塚氏よりハガキ。田中（王）氏へハガキ。

一月廿日。譯、四十六片。晴。中村（春）氏來訪。岡野、植竹二氏よりハガキ。近代劇協會の連中よりハガキ。僕の誕生日だからとて、淸子が田中王堂氏と平塚明子氏とを招待したが、平塚氏の方は來

なかつた。田中氏との連名で三十名ばかりの人に談話會を通告することにした——第一回はこの月の末に。

一月廿一日。譯、十一片。晴。平塚氏よりハガキ。土田氏より返事(子供の中學に付き)。清子と共に岡氏の新築を訪ふ。「惡魔主義」の校正が來初めた。仙臺の長谷川氏並に岡氏へ「古神道」を送る。原氏へ「ぼんち」。

一月廿二日。譯、二十四片。晴。至誠堂へ出版の相談。森(直)氏來訪。先日の藤原氏の原稿を返し渡した。

一月廿三日。譯、三十四片。朝、曇。愛子氏が大築孃を伴つて來訪(近著二種を與ふ。)筑紫氏を訪ふ。

一月廿四日。譯、十五片。昨夜、雪。雨。加藤(朝)、酒卷(貞)氏よりハガキ。久し振り、而も四五年ぶりで散文詩「淺草の女」を作つた。竹腰が眞雄をつれ來た。眞雄は九歲だが、父と云ふものを何だか分らない樣子だ。幸子を家屋稅管理人にしてしまつた。滯納がこちらへ來て面倒だから。

一月廿五日。晴。沼波、岡野二氏よりハガキ。人見氏を訪ひ、僕の散文詩集を金風社から出すことにした。岡野氏を訪ふ。詩集を集めて「戀のしやりかうべ」と名づけた。

一月廿六日。晴。田中(王)氏へハガキ。加藤(朝)氏へハガキ。平塚明子氏來訪に付き、田中氏を電

報で呼んだ。

一月廿七日。譯・二十片。晴。田中(王)氏來訪、(三十日の會合の件に付いて)。千葉(鑛)氏より手紙。小野崎氏よりハガキ。譯、十八片。

一月廿八日。雨。殆ど校正ばかりに。

一月廿九日。晴。吉野・德田(秋聲)氏を訪ふ。德田氏と共に生田長江(留守)、武林(留守)、並に生方氏を訪ふ。蜂群に給蜜した(あまり時ならず暖いので蜂が出るから。)

一月卅日。晴。田中王堂と共に僕の連名で三十餘名に對して出したハガキで十七八名神田の多賀羅亭に集つた。その席で會の名は火曜日會とし、毎月第一火曜に集るやうにきめた(但し來月は十五日のこと。)

一月卅一日。雨。甥の小野崎が士官學校から遊びに來た。若宮氏を訪ふ(古神道論を森村翁に讀ませる爲め。)

二月一日。晴。鈴木(三)氏より手紙。「惡魔主義」の初校終る。天弦堂より使ひ、(ボドレルとボーとの小傳の件)「毒藥を飲む女」下篇の校正初まる。吉江氏へ手紙(子供の中學入學の件)。敬文館並に廣文堂へハガキ。

二月二日。雨。田中(王)氏を訪ふ(火曜日會の件)。文藝通信の尾木氏來訪。よみうりより稿料參圓。

二月三日。晴。中澤(靜)氏よりハガキ。天弦堂員來訪(二度)。「稻毛氏への再駁」(二片)。よみうりへ。

二月四日。雨。千葉氏より僕等夫婦への招待狀が來た、同じく出席の返事。新潮社より書齋に關する質問が來たので、左の如く答へて置いた。

僕は夜中を仕事してとほす癖だから、晝間でもあまり明るいと困ります。そして大きな室よりも狹いのを望みます。裝飾には頓着しません。書棚の代りに二ダース入りのビール箱を(中を二段に仕切つて)澤山重ねてそれに書物を入れて置くのが一番便利でもあり、また書物の上下にアキが少いのでごみが這入ることもないのですが、それもこの頃はやめて、すべて戸棚の中へ入れてしまひました。つまり、書齋には壁や戸棚の代りに、奥のあさい本棚を取りつけて置くのがいいと思ひます。

吉江氏より返事(子供の中學のこと)。

「懶け者の日記より」(七十七片)を書き終つた、大日本への原稿。同稿を岡野氏へ郵送した。

「監獄の壁」並に「犬の聲」と云ふ散文詩二篇を作つた。そして先日金風社へ送つた詩集「戀のしやりかうべ」中に加へしめた。

二月五日。雪もやう。岡野氏よりハガキ。淡路會の通知、同じく欠席の返事。「毒藥を飲む女」下篇

の校正を了す。天弦堂より「惡魔主義」六百部の印を取りに來た。瀧田氏來訪、中央公論の三月並に四月の小説引き受け。

二月六日。晴。至誠堂より出版かけ合に對する斷り。中澤(靜)氏よりハガキ。「戀のしやりかうべ」の校正が來初めた。千葉氏の招待に行つて、初めて桑木博士にも會つたが、その議論と同樣相變らず分らないことを云つてゐる人だ。渠は學問をこなす力がないのみならず、世間をも知らないで、大學の仲間內での不平やら意氣込みやらを云つて、それで滿足してゐるらしい。渠が思想に國民性がないとか、哲學に講壇のと通俗のとの別があるとか發表したことに對して、僕が直接に云ひ及んでも、そツぽうのことを云つてそれですんでしまつたと思つてるやうだ。愚だ!

二月七日。晴。澁谷氏よりハガキ。十日會通知。吉野(甫)氏。生方氏來訪。新潮社の中根氏來訪(原稿(小說)の催促)。長谷川(勝)氏より妹の安產通知。

二月八日。晴。中澤(靜)氏へハガキ。鈴木(三)氏へハガキ。天弦堂より「惡魔」の印、あと四百部分を取りに來た。京都の原氏また移轉して來たとて來訪。

二月九日。曇。女中一名、親の病氣の爲めひまを取つたに付き、口入屋を二三軒あるきまわつた。滋子氏を訪ふたところ、その妹の里がへりの賑やかさのうちに飛び込んだので、僕も醉つて長唄や端唄を歌つた。田中(王)氏よりハガキ、同じく返事。吉江氏より十日會の帳簿を送り來る(氏が幹事と

して明日出席出來ない爲め)。

二月十日。晴。天弦堂より「惡魔――」の出版屆を送つて來たので、印を押した。小說「四十女」(六十九片)を書き上げて新潮社へ持つて行つた。その稿料のうち二十圓を受け取つた。十日會へ行く。火曜日會の通知。

二月十一日。雨。村役場へハガキ(稅金の件)。中央公論へ稿料値上げかけ合ひ。岡野氏を訪ふ。近藤逸五郞氏の死去記念號の通知を、「音樂界」より。新潮社の中村氏よりハガキ。土曜新聞の北山氏よりハガキ「信より玉江へ」(八十五片)を七十七片にちぢめて中央公論へ。

二月十二日。晴。滋子氏來訪(敬文館から僕が引き受けた透谷論を松原氏へ讓つてくれろとのことで、承知を與へた。)原(正)氏來訪。天弦堂より「惡魔主義の思想と文藝」の製本十部を持つて來た。

二月十三日。晴。聖學院中學校へ子供の入學の件で行つた。中央公論に行き、稿料三十九圓を貰つて來た。新潮の中村氏來訪、先日の原稿「四十女」がきけんだから書きかへてくれろとのこと。鈴木(三)氏より使ひあり、「毒藥を飮む女」下篇の印千五百部を取りに來た。巴里の森田氏よりハガキ。正宗(白)氏の轉居の知らせ、僕の舊宅の近處だとのこと。

二月十四日。晴。巴里の森田並に正宗へ手紙。西村氏よりもとの龍土會の記事を文章世界に載せたいと云ふので、こちらにある筆記(曾て僕の主幹した「世界文藝」に半分は出した物で、神崎氏に蒲原

氏の談を筆記せしめ、僕が氏の忘れた事實を記入した）を今一度蒲原氏に送つた。女中のことで中澤（靜）氏を訪ふ。それから今井歌子氏を訪ふと、途中で活動寫眞に行くところに出會ひ、一緒に牛込のそれへ行く。つれてた女中を歸したので、歸りには送つて行かねばならぬので、神樂坂を下り切つた所まで來た時、秋江、幹彥、楠山、その他の一名の一團が何か立ちどまつて話してゐるのに出會つた。秋江氏が僕の袖を引くので何かと思つたら、細君に密告するぞとの話だ。かまはないよ、僕等の間は何でもないのだからと云つて別れた。

二月十五日。晴。火曜日會の第二回へ出席。藤川氏來訪、敬文館からの叢書以外の一著書依賴を受けた。原（德）氏來訪。どうも淸子との間に僕は思想上の、從つて生活上の衝突が避けられないやうに考へる。昨夜、話し合つて見たところでは、けふ、かの女が別に住む家を探しに行くと云ふのであつたが、けふは火曜日會に、少くとも、僕は――幹事として――出席しなければならぬので、ゐて貰つた。

二月十六日。晴。巢鴨村役場へ行つて、芝の家屋稅七圓九十七錢を收めた。德田（秋聲）氏へハガキ。淸子は昨夜來の件で父を呼びにやつた。田中（王）氏來訪（火曜日會の件）。後藤（宙）氏より手紙。

二月十七日。晴。中澤（靜）氏よりハガキ。淸子の父が來たが、渠の顏を見ると、かの女が渠を呼んだ理由を話し切れぬとのことでそのままにした。この問題は、つまり、當分預りだらう。鈴木氏より

「毒藥」下篇二千部の印税三十圓を送り來たる。
二月十八日。晴。歌子、秋聲、若宮三氏よりハガキ。原(德)氏へハガキ。「毒藥を飮む女」の製本五部來たる。原稿紙を買ひに出て、德田(秋聲)氏並に吉野氏を訪ふ。風邪の氣味だ。
二月十九日。敬文館へハガキ。
起きて見たら周圍は雪であつた。ゆふがたになつてやむ。
宙外氏への短信(五片)、秋田時事へ。若宮氏へ「肉靈合致の證明」(九片)、土曜新聞へ。原氏より手紙(出版業開始の件)
二月廿日。晴。蒲原氏と野口氏とへ參考書を返しに行つた。瀧田氏よりハガキ。
二月廿一日。晴。「津田三藏」を「昔の友人」と直して大陽に送つた(採否を問ひに)。春陽堂主人へ手紙(出版のかけ合)。滋子氏來訪。今井、荒木二孃へハガキ。鈴木氏より「毒藥を飮む女」上篇第三版五百部の印税七圓五十錢を郵送し來たる。同氏へハガキ。安成氏より馬場氏後援の推薦狀へ出名、演說、並にその文集原稿をかけ合つて來たが、どうも馬場氏自身の依賴もなく、政見の發表もないので、彌次馬と同視される恐れがあるので、斷つてやつた。敬文館よりハガキ。火曜日會の通知ハガキ二百枚出來。
二月廿二日。晴。天弦堂へハガキ(蒲原有明氏に表象主義の文藝を書かせるやうにすすめる爲め)、

新潮社の加藤(武)氏來訪(代表的論文集出版の件に就き)、加藤(朝)氏へハガキ。
　昨朝午前三時頃に寢に就いたところ、暗中に物が見えるではないか？暫くなかつた事だから、暫くはそれを樂しんでゐたが、そんな時に限つてあとでも神經がさえて眠られない。とう／＼夜が明けて、女中が起き出した時までさめてゐた。が、ふと思ひ出すと、前夜よそで食事をした時食がすすまなかつたので、めしは一杯ばかりで遠慮したのが、あとで空腹を來たしてゐたのだ。珍らしくも六時頃から起きて顏を洗ひ、机に向つてるうちに、やツと朝めしが出來た。それから間もなく、またねむくなつて、午後一時頃まで寢た頃お滋さんが來たのであつた。
　筑紫氏を訪ひ、グラキシニア一根を分けて貰つた。
　二月廿三日。午後より雨。文章世界より文士錄掲載の條目を尋ねて來た、同じく返事。「金に添へて」(五十四片)を書き終つた(中央公論か新潮かの四月號へ行く筈)。
　二月廿四日。晴。西村(渚)氏よりハガキ。(「三藏」を「昔の友人」と直して太陽へ交涉して貰つたのだが、矢ツ張り駄目として返して來た)。齋木氏よりハガキ並にその「フアウスト」を送り來たる(僕が紹介して出來た爲めに)。春陽堂より手紙(出版のかけ合ひを斷つて來た。)加藤(朝)氏來訪(同氏と共に瀧の川・王子等を散步し、歸途、生田長江氏を訪ふ。天弦堂よりハガキ。火曜日會通知を五十二名に發した。去廿一日に屆けて來た印稅に對し「毒藥を飲む女」上篇五百部の印を押した。

二月廿五日。晴。金風社へハガキ。鈴木(三)氏よりハガキ。小林氏より僕の印鑑證明を賴みに來たのでこれを送つた。山本喜市郞(露滴)氏より突然手紙あり、杏雲堂病院にゐるとのことだから直ぐ見舞ひに行つた。樺太日々並にカラフト夕刊の社長として兎に角意張つてるのは結構だ。僕が曾て北海道で質入れした時計を(受け出して置いてくれたので)六年ぶりで受け取つた。この夏は今一度樺太へ來いとのことだ。

二月廿六日。朝からおほ雪。

二月廿七日。雨。瀧田並に原(德)氏へハガキ。淡路會の幹事より僕を評議員に推薦したと云ふ通知が來たので、大したことでもなからうから承諾をするハガキを出した。野上氏よりハガキ。山本(喜)氏を見舞つた。「秘書官」(五十四枚)を書きあげ。

二月廿八日。晴。淸子の父へハガキ。「金に添へて」を新潮社へ持つて行つた(稿料は先日の二十圓でさし引き一圓六十錢)。同社より十五圓を飜譯料として前借。滋子氏と會つたので、一緖に秋江氏を訪ふ。原氏來訪(留守)。

三月一日。晴。吉野氏來訪、宮城縣に於ける澤來太郞氏の代議士候補に對する推薦者の一人になつてくれろとのことだから承知して置いた――馬場孤蝶氏の推せんを僕が斷わつたのは氏がまだ不熱心な態度であるからだが、澤氏のとは場合が違ふ。瀧田氏よりハガキ。木村(鷹)氏を訪ふ。新潮社から

出る「泡鳴論文集」二百三十枚分を編した。
二月二日。晴。澁谷（愛）氏よりハガキ。太田（正）氏より氏の著書。生方氏來訪。尾木氏來訪。佐藤（義）、植竹、金風社、敬文館、天弦堂へハガキ。火曜日會へ出席。山本（喜）氏へハガキ。修善寺の荒井へハガキ。
二月三日。晴。鈴木（三重）氏へハガキ。中央公論社へ行き、五十圓を受け取つた。（その內わけは、稿料が一枚一圓二十錢に上つて二十八枚分三十三圓六十錢と將來に對する前借十六圓四十錢）愛子氏を訪ふ。原氏來訪。金風社よりハガキ。
三月四日。晴。太田（正雄）氏へ「古神道」。有島氏へ「惡魔主義」。木村（鷹）氏よりハガキ。藤井（伯）氏よりハガキ。植竹より手紙、直ちに植竹を訪ふ（選集の件。）郁子氏を訪ふ。新公論の池田氏、伊藤夫人と共に來訪。
三月五日。新潮社へ手紙並に論文集原稿を屆ける。
三月六日。晴。東京出發修善寺着（妻子と女中と共に）瀧田、山本二氏へハガキ。家へハガキ。松崎（天）氏が來てゐるのを發見した。
三月七日。夕、雨。原、新潮二氏へハガキ。
三月八日。曇。生田氏へハガキ。十日會より通知、同じく欠席のハガキ。留守宅よりハガキ。上司

正宗二氏へハガキ。

三月九日。晴。無事。

三月十日。晴。土曜新聞より稿料三圓、加藤(朝)氏よりハガキ二。千葉(鑛)氏より手紙。第三帝國よりハガキ、同じく斷りの返事。植竹の鈴木氏へハガキ。「放浪」を訂正してしまつたら、もと約四百八十枚分が六十枚減縮した。

三月十一日。晴。國木田收二氏が伊東から來て、松崎氏と共に三人で飲んだ。夜收二氏と碁を打つた。家へハガキ。愛子氏へハガキ。

三月十二日。晴。上司氏よりハガキ。同氏へハガキ。創造社からハガキ、――返事。

三月十三日。朝から、雪。午後に積みかけたが、やむと直ぐ消えた。山本(喜)氏よりハガキ。

三月十四日。譯、四十五片。晴。午後ちよつと雨。愛子氏より手紙。植竹の鈴木氏より手紙、短篇集の原稿を無くしたとのことだから、植竹に對しその無責任を詫びさせる爲め、金五十圓を要求した手紙を出した。(十日間の期を限つて)。家より小包み。吉岡氏よりハガキ、同じく返事。譯、二十二片。

三月十五日。午前一時頃雪はひひとして降つてゐた。夜があけてから晴。山本氏から電報。吉野氏から手紙。新日本から僕の岩野泡鳴論を依囑して來た。「僕の見た僕」(二十四片)。

三月十六日。晴。昨日の原稿を新日本に送る。加藤(朝)氏へハガキ。植竹の鈴木(悅)氏へハガキ、

先日の植竹に對する五十圓要求は取り消し、若し原稿の紛失が事實なら、辯護士に依賴してずッと多大の辨償を爲さしめるからとの通知をした。山本（喜）氏を大仁まで迎へに行つた。譯・八片。

三月十七日。晴。松崎氏がけふ出發した。

三月十八日。晴。松崎氏より手紙。原氏より手紙。留守宅へハガキ。譯・十二片。

三月十九日。晴。鈴木氏より手紙、植竹は原稿紛失の賠償もするから、僕の歸京まで待つてくれろとのこと。國木田氏より手紙、生しいたけを送つてくれろとのこと。山本氏と共に開春亭で藝者をあげた。譯・十九片。

三月廿日。晴。植竹の鈴木氏へハガキ（その頼み通り承知したことを通知）。淡路會評議員會の通知があつたが、欠席の通知を出した。天民その他六名から寄せ書きハガキ。「惡魔主義に就いて、野口氏へ」（十片）・時事新報へ。

三月廿一日。晴。天弦堂よりハガキ。國木田氏よりハガキ。新潮社の中村氏より評論原稿依賴。金風社へハガキ。「優强者の權利」（再び若宮氏へ）を九片、土曜新聞へ。原（德）氏より手紙。

三月廿二日。晴。譯・二十六片。就褥・例によつて午前二時。竹腰より手紙・原氏から來た手紙の意と同事件で、原氏との交渉が斷絕したことを知らせて來たが、僕から見れば、斷絕しないで原氏に家屋をまかせた方がいい、どうせあの家屋を維持して竹腰が下宿屋をやつて行くことが出來なからう

からと云ふ意を妻から返事させることにした（その意に從へば、今一度原氏との交渉をやり直すやうに計つてやると）。「評論界の感傷家等」（十一片）、新潮へ。夜に入つて雨。留守宅へ金を送れと云つてやつた。

三月廿三日。午前一時就褥。午後七時頃から山本氏と共に當地の寄せに行つた。

三月廿四日。晴。時事新報より稿料參圓。家より電報ガワセ。

三月廿五日。雨。小寺菊子氏並に新潮よりハガキ。原、よみうり、時事、小寺、家等へハガキ（歸京の通知）。あとになつて、薰を呼んでやることになり、その電報とカワセとを送つた。

三月廿六日。譯、十四片。就褥、午前二時。家よりでん報、薰來ぬよしなれば、明日出發の筈。夜、雨。山本（喜）氏より稿料拾圓。

三月廿七日。晴。修善寺出發、江の島一泊。

三月廿八日。歸京。鈴木（悅）氏よりハガキ、植竹へ行つてる原稿が所在分つたよし。石橋思案氏より手紙、原稿の依賴。新潮の中村氏より手紙。小寺菊子氏よりハガキ。

三月廿九日。晴。庭のヒヤシンスやチユリプを鉢に移す。蜂は一箱だけが活動して、花粉を取つて來る。中はまだ見ないが、もう、幼蟲が出來てゐるやうだ。（その一つを巢門外に引き出してあつた）。

三月三十日。晴。田中（王）氏よりハガキ。田中、千葉、吉野、安藤、原、滋子、歌子諸氏を訪ふ。

新潮社の中根氏來訪(留守)。中根、田中二氏へハガキ。

三月三十一日。晴。後藤(宙)氏へハガキ。加藤(朝)、高橋(五)、正宗、川手諸氏を訪ふ。原氏來訪(留守)芝川氏よりハガキ。增野氏より「キタンヂヤリ」並に手紙。

四月一日。「マンダラ」を評す(十五片)。よみうりへ。晴。深田氏並に原(正)氏來訪。原氏に野口氏への紹介を書いた。天弦堂よりハガキ。夜、筑紫氏を訪ふ。

四月二日。譯、十五片。曇。新日本より稿料八圓。植竹より白井氏來訪。金風社へハガキ。

四月三日。雨。神經衰弱のやうなので何もせずに運動がてら染井まで行き、野上(卯)氏の家を訪ふ。

四月四日。晴。蜂は一群の外皆死んでゐた。殘存の一群には、然し、一ワクだけは半面にふたの出來た幼蟲があつた。これをよくふやしてやる必要上、給蜜をした。人見氏よりハガキ。滋子氏より手紙、同氏を訪ひ、一緒に梅坊主のかつぽれを見に行つた。僕には梅坊主は初めてであつた。

四月五日。晴。坂元ぐれん洞氏來訪。小此木(忠七郞)氏と中桐(確太郞)氏とが一緒に來訪、暫く話してから、僕も一緒になつて深田氏を訪ふ。そこで小此木氏に別れ、中桐氏と共に歸る時、佐藤氏に會ひ、同氏のもとへまた三人で行つた。植竹並に金風社より手紙。「大庭中將の露國婦人談を讀んで」(二十一片)。

四月六日。晴。植竹並に金風社へハガキ。増野氏へハガキ（タゴルの「新月」に序文を書いてもいいが、どうせタゴルを否定的に批評するが、それでもいいかと先づ念を押してやつた。）第一火曜日會へ出席。その歸りに四五名と共に上野公園をぶらついた。留守に加藤（朝）氏來訪。愛子氏へ電話をかけた（大月氏結婚に相當の男子があるがと云ふことを）。博文館へ行く。（西村氏より三圓）

四月七日。雨。「修善寺雜記」（四回分。二十八片）。樺太日日へ。加藤（朝）氏より手紙。十日會よりハガキ。時事より稿料四圓五十錢。

四月八日。晴。蒲原氏來訪。田中（王）氏來訪。鈴木（三）氏より「毒藥――」上篇第四版五百部印稅七圓五十錢。今日から薫が中學に行くことになつた。

四月九日。譯、十三片。晴。石田（友）氏よりハガキ。梅坊主をまた見に行つた。新潮社へハガキ。

四月十日。譯、十六片。晴。深田（憲）氏來訪。十日會を森ケ崎に催したので出席、その宿で僕が小舟に乘つたので平塚明子氏が同乘し、ちよツとしたはづみで氏は水中に落ちた。まことに氣の毒なことをしたが、衣物を濡らしただけで濟んだ。

四月十一日。雨。滋子氏より手紙。福良（浩）氏よりハガキ。

四月十二日。譯、四十一片。増野氏よりハガキ。生田氏よりハガキ。新潮社に行き、飜譯の分十五圓（但しこれは前借十五圓をさし引かれてだ）、並に評論集の稿料半分二十五圓、都合四拾圓を受け取

つた。生方氏を訪ふ。同氏と平塚明子を訪ふ、それから武林氏を訪ふ。氣分が悪くて何もしなかつた。

四月十三日。全日を寢通した。敬文館へハガキ。鈴木氏より「毒薬を飲む女」の第四版の印を取りに來た。(五百部)

四月十四日。晴。佃島の日高氏よりハガキ。大阪の日高氏へハガキ。生田氏へハガキ。

四月十五日——十八日。病氣でろく〳〵仕事をせず。その間に、佐藤(稠)氏が家族をつれて來訪。加藤氏よりハガキ。敬文館から「古神道」五百部印税八圓七十五錢。原稿を一つ書いて、時事の山梨氏へ屆ける途中で、藁が紛失させてしまつた。植竹の店員來訪。「蜜蜂の話」を書き初めた。

四月十九日。雨。加藤(朝)氏へハガキ。沼波氏來訪。深田氏來訪。

四月二十日。「蜜蜂の話」(八十片)を書きあげた。晴。中央公論社よりこの原稿に對して(評論並みにされて)二十八圓。公論社、吉野、日月社、原氏を訪ふ。

四月二十一日。曇。山梨、中村(星)氏よりハガキ。「畫家ビアヅレに就て」(再び野口米二郎氏へ)を十八片。よみうりへ。

四月二十二日。曇、風。藝術座より招待狀。淸子と共に平塚氏の病氣を見舞つた。僕も加減が惡いので何もしないで寢る。

四月二十三日。晴。天弦堂並に若宮氏へハガキ。深田氏を訪ふ。

四月二十四日。晴。安藤、田中(王)、日高(傳)氏よりハガキ。田中(王)氏來訪。「功利主義に純全たれ」(田中王堂氏の所論を駁す)、三十七片を書き終はる。今日から蒲原孃を飜譯の筆記者に頼むことにした(月十五圓の手當で)。譯、八片。

四月廿五日。晴。安藤氏並に有倫堂へ手紙。譯、十九片。天弦堂よりハガキ。安藤氏より「日蓮聖人の教義」。新潮社より「耽溺」改版の校正が來初めた。

四月廿六日。晴。吉野氏來訪。藝術座の興行を帝劇へ觀に行つた。譯、十四片。

四月廿七日。雨。博文館の石橋氏より手紙。同氏へハガキ。石丸氏より手紙。植竹の白井氏よりハガキ。生田氏へハガキ。時事へ原稿。譯、十四片。

四月廿八日。雨。島田(俊雄)氏より返事。「耽溺」校正終はる。譯、十八片。弓をきのふから引きに行つてる。

四月廿九日。晴。俄かにあツたかくつて、八十度近くになつた。若宮、西村、石橋氏よりハガキ。西村氏へ返事(六月號の小說承知)。生田(長)氏細君と共に來訪。深田氏、細君と共に來訪。

四月三十日。晴。原氏よりハガキ。同氏へ返事。石倉(翠葉)氏より手紙。日月社の安藤氏より手紙。中央公論より論文原稿が返つて來たので、よみうりへ送つた。千葉(鑛)氏來訪。「放浪と斷橋」の訂正

を濟ませた。

五月一日。夜、雨。植竹へハガキ。天弦堂よりハガキ。よみうりより稿料四圓五十錢。松本(悟)氏來訪。ゆふがた、散歩がてら筆記者の蒲原房江(暫く原書に從ふ。編者)氏を訪ふ。譯、三十片。

五月二日。雨。新潮社より手紙。川手氏よりハガキ。原氏來訪。筑紫氏來訪、岡落葉氏への紹介狀を書いたと同時に、蒙古行きの周旋を賴んで置いた。譯、十一片。

五月三日。晴。譯、晝間に十七片。夜、(以下記事なし。編者)

五月四日。晴。新潮社へハガキ。火曜日會へ出席。新公論より小說稿料の殘金十圓也。譯十一片。

五月五日。晴。巴里の森田氏よりハガキ。伊藤證信氏夫人並に大杉榮氏來訪。現代通報社と云ふところの濱田氏來訪、然し會はなかつた。譯、三十三片。弓が大分まとに附くやうになつた。

五月六日。

五月七日。晴。新公論社へハガキ。安藤氏へハガキ。近重博士より「禪學眞髓」。夜、深田氏を訪ふ。譯、十九片。夜、川手氏を訪ひ、築地の光琳へ行つたが、氏は一種の政治團體を新進家のみで起さうと云ふので、贊成して置いた。十一時引き上げた。新潮社より譯料三十圓と五月號稿料二圓五十錢と。植竹から「放浪と斷橋」の原稿を取りに來た。

五月八日。曇。沼波氏より手紙。新潮社から「耽溺」の印稅の印を押す印紙二千枚を送つて來たの

で、それに捺印した。夜、深田氏來訪。譯・二十三片。「功利主義に純全たれ」を讀賣から取り返したので第三帝國へ送つた。

五月九日。曇。印を押した印紙を新潮社へ送つた。同時に、その印税一千部の催促（他の一千部は既に昨年來に受け取つた。）大阪の團欒社より原稿の催促が來たが、多忙の故を以つてことわつた。文章世界の「八日の日記」を依賴して來たのに答へを送つた。沼波氏より手紙（これで二度の手紙はすべて僕の「新體詩の作法」の紙型並に出版取りもどしの件に關するが、修文館から沼波氏の方へもとの原稿料だけ出せば渡すと云つて來たさうだ。それではあまり高過ぎる。）第二回水彩畫てんらん會へ行つて見た。「四十女」を文章世界に送るので、禁止の恐れあるところを訂正した。

五月十日。曇。日月社の安藤氏より手紙。中央公論の瀧田氏來訪、七月增刊號の社會的小說一篇（四十枚）を依賴。譯、十五片。十日會に出席（その場で西村氏に小說原稿を渡した。）蜂の箱を二階にした。

五月十一日。雨。原（正）氏より轉居の通知。佐藤（榮枝）と云ふ人より手紙並に詩稿（大した作でもないから駄目だと返事した。）譯、三十三片。

五月十二日。曇。瀧田氏へハガキ。芳賀博士へ手紙。僕は近頃僕の日本音律論を文學士會に提出して博士を要求する必要があると思ふので、その手續きを氏に尋ねたのだ。博士をくれる、くれないは

向ふの會議の如何によるが、こちらは自分の創見を學界に報告して置けばいいのだ。都合によれば、古神道論をも一緒に提出し、その註若しくは參考として「近代思想と實生活」並に「近代生活の解剖」を添へようとも思ふ。時事より稿料五圓也。博文館より文章世界の稿料二十八圓也。安藤(現)氏へハガキ。譯、三十二片。

蜂群に雄蜂房が出來た。また、王臺が出來たのを一つ見た。

五月十三日。晴れ又曇。西村氏よりハガキ。小野崎より書物返却。譯、三十六片。

五月十四日。晴。西村氏よりハガキ。芳賀博士より博士論文提出手續きの返事來たる。譯、三十四片。

五月十五日。晴。新潮社、荒木二女史を訪ふ。滋子氏と三崎座へ行つた。譯、十六片。

五月十六日。晴。佐藤(榮)氏より手紙。同氏へ原稿返却。新潮社より譯料三十圓、『耽溺』二千部の殘金十七圓。

左の答へを「創造」六月號に對する質問の答へに送つた、――

小説を作るものに對することも必要でしようが、小説を評するものの間にこの頃のやうに玉石混淆のあたまを持つてる人々が大分見えることはどうしたことでしよう?一例をあげると、水野葉舟氏が時事新報に出したなか〳〵利いた風な四月小説評に、僕の作に對して云つてるところで、「人間味」

の足不足と云ふことをまた別に說明しかへて、「味覺」の能不能と書いた。こんな雜駁な、出たら目な用語例がどこにある？言葉のことをやかましく云ふ人が先づ言葉の使ひ方を習つて來ねばならぬとは何たる哀れな現象だ！

第三帝國へハガキ。新潮社へ「耽溺」の出版屆に印を押して送つた。

五月十七日。晴。菊を植ゑかへた。美川氏よりハガキ。文部省專門學務局長宛にて文學博士請求書、履歷書、並に「日本音律の硏究」を小包書留郵便を以つて送つた。田中氏來訪、僕は留守であつた。譯、二十四片。

五月十八日。晴。譯、二十四片。島田(俊)氏より返事。同氏へハガキ。樺太の山本氏から電報あり、イソギソノチタツカヘンとあつたが、どうも多忙なので、イケヌと返電した。(樺太東西兩海岸を今一度見に行く約束があつたのだが。)田中(王)氏來訪。蜂群から王臺をすべて(と云つて一二三箇)取り去つた――すべていい王臺らしくないからである。

五月十九日。晴。滋子氏よりハガキ。美川氏が或新出雜誌の爲めに話を乞ひに來たが、斷つた。譯三十六片。

五月廿日。晴。吉野氏來訪。深田氏來訪、氏を新潮社に紹介した。譯、三十五片。家庭博覽會を觀に行つた。

五月廿一日。曇。火曜日會有志の立川行き通知。加藤(朝)氏來訪、野口(米)氏へ紹介を書いた。譯、三十二片。
五月廿二日。雨あり。深田氏來訪。岡(落葉)氏來訪。譯・十四片。
五月廿三日。雨。譯、二十片。深田氏を訪ふ。夜、田中(王)氏來訪。氏は十二時に五分まへまで語つて歸つたが、先夜の如くまた電車がないかも知れぬ。
五月廿四日。晴。深田氏來訪。蜂群を調べたら。また王臺が出來たので、今度はそのうちの三つだけを取り殘して置いた。雄蜂が十匹ばかり出來てゐた。譯、十七片。
五月廿五日。晴。火曜日會の有志五名と共に市川へ散策に行つた。天弦堂よりハガキ。
五月廿六日。晴。天弦堂へハガキ。深田氏來訪。譯、二十三片。
五月廿七日。晴。火曜日會の通知。新潮社、火曜日會・天弦堂へハガキ。蒲原、野口二氏を訪ふ。譯・二十五片。
五月廿八日。晴。西村氏よりハガキ。北村(季)氏より手紙。よみうりの加藤氏來訪。譯、四十二片、新潮社より譯料三十圓。
五月廿九日。晴。サンデーよりハガキ。平塚氏來訪。譯、二十八片。
五月卅日。晴。原氏並に伊藤(證)夫人來訪。山本(喜)氏よりハガキ。北山氏よりハガキ。譯、三十

三片。けふ、蜂群を調べると、一つの王臺は蓋が出來てゐた。そして割りに堅くなつてゐた。その他には王臺のまだ蓋の出來ないのを一つ殘して、あとはすべて——と云つても二つ——を摘まみ取つた。

五月卅一日。夜に入つて雨。齋木氏より手紙。川手氏を訪ふ。實業之世界社の北山氏來訪。譯、二十八片。新潮社より譯料三十圓。

六月一日。雨。新日本より手紙。(質問があまり下だらぬので返答せず)。生田(弘)氏より轉居の通知。中央公論の田中(王)氏「國民主義」を讀むと、最初は堂々たるものだが、あとの方は丸で煩悶解決所だ。第一火曜日會へ出席。

六月二日——四日。菅(省三)と云ふ人より弟子になりたいと云つて來たので、斷つた。北山氏よりハガキ。十日會の通知。プルタルクの譯が半分を終り、第三卷に移つた。譯、十八片。

蜂を三日に見たら、ふたある王臺をつぶしてあつた。他に二三の王臺を取り殘した。また、箱の二階をやめた。

六月五日——六日。六日の夜は雨。丁度その日、茄子ときうりとの苗を植ゑつけた。新潮の中村氏より手紙。福田(參琅)と云ふ人から手紙並に「ひげ男」。譯、八片。

六月七日。雨。中村氏へハガキ。山本(喜)氏へ手紙。加藤(朝)氏より轉居通知。「自由戀愛の意義と

社會關係」(三十一片)、女の世界へ。

六月八日。晴。生方氏來訪。譯、十五片。

六月九日。雨。深田氏來訪。譯、二十九片。

六月十日。晴。おほ掃除。十日會へ出席。

六月十一日。雨。西村氏よりハガキ。諏訪氏より手紙。譯、二十八片。「安成氏へ答へ」(十二片)、神道論に就て、よみうりへ。

六月十二日。晴。諏訪氏へ返事。西村氏へハガキ。第三帝國の中村氏來訪(小說を書く件)。譯、十九片。

六月十三日。雨。生田(春)、奧二氏來訪。深田氏來訪。蜂群を調べたら、もとの(殘した)王臺はすべてなくなつてゐて、別に新らしいのが、まだ卵が這入らないでゐた。

六月十四日。曇。譯、十九片。岡(落)氏を訪ふ。

六月十五日。晴。生方氏よりハガキ。譯、四十二片。

六月十六日。晴。西村氏よりハガキ。同じく返事。田中(王)氏來訪。稻毛氏の紹介を以つて米倉書店の佐藤學氏來訪、出版のことを依賴せられた。

六月十七日。晴。夜、ちよつと雨。米倉書店の佐藤氏來訪、僕の出版書は成るべく哲學的なるをえ

らぶことにした。中央公論への「三角畑」(脚本)、八十四片を書き上げた。新潮社並に中央公論社へハガキ。

六月十八日。晴。中央公論より稿料五十圓四十錢。新潮社より稿料延引の電報。譯、八片。

六月十九日。晴。譯、二十五片。深田氏を訪ふ。「毒藥を飲む女」のモデルより手紙が來たが、清子の反對で返事せず。

七月廿日。晴。筑紫氏が蒙古行きの途中、奉天からハガキをよこした。箕面電よりハガキ(自筆原稿を貰ひに)。山梨氏を訪ふ。「刹那哲學の建設」(七百枚分)を集めた。同書を出版すると云ふ米倉書店へハガキ。

七月廿一日。晴。筆記者蒲原女史が病氣と云ふので見舞ひに行つた。それから野上氏を訪ふ。箕有電鐵會社へ出せと云ふ依賴の爲めに「四十女」の原稿を送つた。

六月廿二日。晴。「新舊葛藤の時代」(十三片)、文章世界へ。巴里の正宗氏よりハガキ。稻毛詛風氏を訪ふ(僕の哲學書の出版の件)。沼波氏の「乳のぬくみ」の中なる新免武藏の研究を讀んだが、今少し廣い解釋が出來ようと思ふ。山崎氏の「地拍子精義」を通讀した。

六月廿三日。晴。野上氏よりハガキ。譯、二十九片。

六月廿四日。風雨。箕有電軌よりハガキ。米倉書店の佐藤氏が「刹那哲學の建設」の印税五十圓(但

し、定價一圓の本になると見て一千部分の半分）を持つて來たので、原稿を渡した。譯、四十二片。
六月廿五日。雨。千葉氏よりハガキ、同じく返事。米倉書店の佐藤氏來訪。新公論の上野岩太郎氏來訪。譯、十四片。蜂群には、まだふたされた王臺は出來てゐなかつた。また、卵の這入つた王臺もなかつた。
六月廿六日。晴。第三帝國の中村氏來訪。譯、十七片。千葉氏邸の淨曲會へ行き、その歸りに田中（王）氏を訪ひ、一緒に上野公園をぶらつき、それから共に三枚橋のビヤホルへ這入つた。荒木滋子氏來訪（留守）。
六月廿七日。晴。譯、十四片。
六月廿八日。晴。夜、雨。時事の柴田氏よりハガキ。田代倫氏よりハガキと「地上生活」。譯、十七片。田中（王）氏の甥と云ふ人が使ひに來た。人見氏の紹介で或畫家が一名來訪。
六月廿九日。晴。生方氏よりハガキ。譯、四十二片。
六月卅日。晴。人見氏へハガキ。火曜日會の通知を出す。新潮社より譯料三十六圓。藤野愛子氏を訪ふ（留守）。繁子氏を訪ひ、それから共に郁子氏を訪ふ。
七月一日。晴。箕面よりハガキ。愛子氏より手紙。譯、十九片。
七月二日。晴。田中（王）氏よりハガキ、同じく返事。愛子氏へハガキ。加藤（朝）氏來訪、野口氏の

英書を翻譯しようと云ふ爲めに野口氏のところへ伴ひ紹介する。譯、十六片。蜻蛉にはまだ三臺に卵を生みつけてなかつた。

七月三日。晴。圖案社よりハガキ。木村氏來訪、同氏と共に深田氏を訪ふ。譯、十七片。十日會の通知を出す。

七月四日。曇。「刹那哲學の建設」を校正ずみ。米倉書店へハガキ。中村(春)氏を訪ふ。

七月五日。雨。譯、十二片。淸子、房江二氏と共に雲右衞門を聽きに新富座に行く(僕は渠を聽くのは最初で最後であらう。)

七月六日。雨。米倉書店の佐藤氏へ刹那哲學の原稿を渡す。西村、北山、並に讀賣へ稿料の催促。

譯、十三片。火曜日會へ出席、印度の靑年學者 Prof Benoy Kamar Larkar (Panini Office, mohabad Inda) が友人二名をつれてやつて來た。若し僕の家へ尋ねてくれば、わが國の思想問題を詳しく話してやると云つて置いた。田中(王)並に滋子氏よりハガキ並に手紙。

七月七日。晴。竹腰來訪。八幡町の家のことで淸子を不動銀行へやる。譯、三十一片。

七月八日。晴。上司氏よりハガキ。女の世界より稿料十一圓。淺草をぶらつく。譯、三十八片。中村(春)氏並に深田氏來訪(留守)。

七月九日。晴。小川氏よりハガキ。生方氏よりハガキ。散歩がてら三木氏を訪ふ(留守)。譯、二十

片と十五片。新潮社へハガキ。

七月十日。曇。稻川(一郎)氏・西村氏、生方氏より手紙。新潮社より飜譯、三十圓。十日會へ出席。譯、十九片。稻川氏へハガキ。文章世界より八圓五十錢。

七月十一日。雨。竹腰が家の事で來訪。生方氏が「敏郎集」の校正を持つて來て序を賴むので、「生方氏の爲めに」(八片)を書いた。これを生方氏へ發送。

○裁判所より八幡町の家を競賣に附する通告が來た。

「人生と表現」の催しに係る松本彥次郎送別會に招かれ、目がねのミカド出張店に行つた。夜、遲く雨。

七月十二日。晴。竹腰の家の爲めに日本橋の大和會社を訪ふ。竹腰へハガキ。吉野氏を訪ふ。氏と島中氏と僕とで上野をぶらついた。野口(米二郎)氏來訪(留守)。

七月十三日。晴。八十四度。生方氏よりハガキ。譯、十四片。「僕の古神道大義に就いて再び安成氏へ」(二十四片)、よみうりへ。

七月十四日。晴。八十九度。岡(落)氏來訪。よみうりへ昨夜の原稿。譯、八片。けふ、蜂群にはまだどの王臺にも卵が產みつけてなかつた。

七月十五日。晴。九十一度。譯、三十九片。

七月十六日。晴。よみうりより稿料二圓五十錢。竹腰の家救濟の爲めに、八幡町へ行き、大石と云

ふ。婦人のもとで大工の棟梁と會見した。英江氏と共に江戸博覽會へ行く。生方氏よりハガキ。

七月十七日。晴。川手氏よりハガキ。野口(米)氏より手紙(同氏英著邦譯への序文依頼)。淸子と共に深田、生田二氏を訪ふ。

七月十八日。晴。(日曜)鈴木(三重吉)氏を訪ふ。その歸りに加藤(朝)氏を訪ふ。

七月十九日。晴。よみうりの加藤氏來訪。譯、十二片。蜂が意外にも分封したので、これを收容した。同時に、原群にふたの出來た王臺が澤山あるので、これをそれ〴〵處分して、なほ別に二群を成立させた。計四群になつた。

七月廿日。晴。川手より手紙。野口(米)、續いて加藤(朝)二氏來訪。中村(孤)氏來訪。譯、十七片。

七月廿一日。晴。小寺夫人よりハガキ。譯、二十一片。

七月廿二日。晴。岡野氏來訪。箕有電、加藤(朝)、その他一名よりハガキ、八幡町の家のことで竹腰氏を訪ふ(僕の印を要しないで、二番抵當が出來ることにした)。ついでに、正宗氏を訪ひ、共に中澤(臨)氏を訪ふ。歸途停電の爲め、滋子氏のもとに、夜まで話をした。

七月廿三日。晴。米倉書店の佐藤氏來訪。譯、二十八片。もと龍土會の諸氏十五名に來る廿八日會合することを正宗、中澤、田山、僕の名を以つて通知狀を發した。

七月廿四日。晴。譯、三十五片。

七月廿五日。晴。「野口米二郎氏の爲めに」(二十二片)、氏の「日本詩歌の精神」邦譯の序。時事へ送る。加藤(朝)氏へハガキ。上司氏へハガキ。新潮社よりハガキ、共に三十圓譯料。譯、四片。

七月廿六日。晴。淸子に語らう語らうと思ひながら機を逸してゐたことを、昨夜語つた。それは先月來の出來事で、僕と筆記者蒲原英枝氏との關係である。淸子は止むを得ぬと思つてだらう、英枝氏にあまり野心を生ぜさせぬ範圍に於て、この關係を許してくれることになつた。

昨日、蜂の一群に王が生れたので、他の王臺の熟したのを王籠に入れて置いたところ、それも昨夜生れたのだらう、而も籠のふたを蜂どもが開けたので群中にまじつたものと見え、けさ、一王は巢門外にほうり出されて死んでゐた。多分、他の王と戰つて負けたのだらう。中を調べて見ると、他の王の方もゐなかつた。で、今一つの王籠なる王臺を籠のふたを明けて與へて置いた。

七月廿七日。晴。小雨。加藤氏よりハガキ。一の外の無王群には王が生れた。譯、七片。火曜日會の夜、淸子と共に小寺氏を訪ふ。藝術座よりハガキ。筑紫氏が蒙古よりハガキをよこした。

七月廿八日。小雨。加藤(朝)氏へハガキ。中澤氏へハガキ。龍土會へ出席。譯、二十片。の通知を發す。

七月廿九日。晴。田中(王)氏よりハガキ。蜂のもと群がまた分封しようとしたので、巢門外に新王がまごついてるのを拾ひ取り、働蜂の分封的散亂をふせいだ。そしてその王を今ある一無王群に入れ

て見ると、見てゐるうちに逃げ飛んでしまつた。
七月三十日。晴。人見氏よりハガキ。譯、四十八片。
七月三十一日。晴。植竹の白井氏より來狀。八幡町の家の爲めに實印を押しに行つたが、遂に押すだけの要領を得なかつた。譯、十三片。雨あり。
八月一日。晴。十日會の通知。川路、安藤、並に戸川氏へ書信。譯、三十六片。雨あり。
八月二日。十分の雨。無王群にも王蜂が生れた。新潮社へハガキ。有島武郎氏より手紙。譯、二十七片と九片。時事より稿料五圓。
八月三日。小雨。吉野氏へハガキ。竹腰氏より裁判所の通知を送つてくれとあつたので、郵送した。火曜日會へ出席。
八月四日。雨。竹腰、今井(歌)、原(正)氏來訪。譯、十五片。新潮社より譯料三十圓。飜譯を暫らく中止してくれろと淸子が新潮社から聽いて來たので、どう云ふ意味か僕自身で聽きに行つたが、社長の佐藤氏が留守であつた。譯は今第三卷の五百枚で來たのまで、これまでに、もう、凡そ二千七八百枚は出來て、あとに第三卷の五六百枚と第四卷千二三百枚とが殘つてゐるのだ。
譯が中止なら別に仕事を見付ける爲めに、米倉書店に立ち寄つた。「日蓮」か、「明治思想史」か、「最近歐米の思想家評論」かを問題にして置いた。

八月五日。――十一日。書信、山本(喜)氏へ手紙往復。同氏より稿料十圓。米倉書店より三十圓(但し「日蓮」起稿の前金)。いよ〱清子と別居することになり、巣鴨町一〇七二に僕だけは轉居。ここで英枝氏と同棲することになつた。通知並に兩人間の契約は左の通り――

今回僕等は別居することになり、泡鳴は轉居致しましたが、清子は從前通りの住ひを續けます。乃ち、左の通り――

府下巣鴨町一〇七二(電車巣鴨終點より約三丁 日新湯横丁)岩野泡鳴

府下巣鴨村二五一七　岩野清

大正四年八月十一日

八月十一日。晴。淸子を訪ふ(留守)

八月十二日。晴。三井(甲)氏へ返事。早稻田文學社の質問へ返事。西村(渚)氏より原稿の依賴。淸子を訪ふ。深田(憲)氏へ棚受けの印を賴みに行つたが、留守であつた。よみうりより、今回の別居の件を聽きに來た。

八月十三日。晴。伊藤(證)氏へハガキ。田中(王)氏よりハガキ。淸子の宅で、時事並に讀賣の記者に會見した(別居の件)。

八月十四日。晴。吉岡、伊藤(證)二氏よりハガキ。

八月十五日。晴。「靑年自殺の心理」(十二片)、文章世界へ。德田秋聲氏を訪ふ。加藤(朝)氏と途中で會つて、カフエに這入つた。

八月十六日。晴。中村(孤)、よみうりの加藤、佐藤(稠)、木村(幹)氏來訪。山梨、原(德)二氏よりハガキ。蒲原(有)氏へハガキ。

八月十七日。晴。ちよツと雨。伊藤(證)氏へハガキ。深田氏來訪。

八月十八日。晴。先日の印度人並に植竹よりハガキ。弟の巖來訪。英枝の弟來訪。「女の世界」の記者北野氏來訪。

八月十九日。曇。岡野、吉野二氏來訪。北野氏來訪。「女の世界」への原稿依頼。筑紫氏、蒙古より歸朝、來訪。

八月廿日。曇。大雷雨。英枝の弟、一昨夜來僕等と種々爭論並に相談の上、歸つて英枝の父を大體に於て承諾させるやうな口吻になつて、午後新潟へ歸つた。大阪の奥村氏よりハガキ。岡野氏を訪ふ。

八月廿一日。曇。後、雨。國民新聞社へ本月十六日に出た今回の別居並に移轉記事に對する取り消しを申し込んだ(英枝との關係を姦通と出したからで、本人は既に三ケ年間前夫の扶助を受けず自活してゐた上、僕と同居前に離婚の手續きをしたのである)。

八月廿二日。雨。小說「かの女の遺物」(四十六片)、國民講壇へ。石田氏來訪。朝日新聞へハガキ。

八月廿三日。雨。岡野氏より手紙、同じく返事。國民新聞本日號に取消文掲載された。萬朝報より記者として木村(幹)氏が來たり、僕の一部の傳記じみた事を筆記して行つた。

八月廿四日。晴。伊藤證信氏、米倉の佐藤氏來訪。妹千惠子、中村(孤)氏よりハガキ。木村(幹)氏

より手紙。淸子を訪ふ。加藤(信)氏來訪(留守)。英枝の弟・靈英氏へ手紙。

八月廿五日。曇。木村(幹)氏よりハガキ。岡野氏より手紙、同じく返事。靈英氏へ書物。「姦通に非ず――別居の理由」(二十二片)、女の世界へ。

八月廿六日。雨。伊藤(證)氏よりハガキ、同じく返事。長谷川より電報。弟巖來訪。佐藤(稠)氏を訪ふ。「刹那哲學の建設」を再び訂正し初めた。

八月廿七日。雨。靈英氏より手紙(これによると、英枝との問題もこれッ切り無事に納まるらしい)。

八月廿八日。晴。文章世界より稿料四圓。若宮氏よりハガキ、同じく返事。新日本より原稿依賴。

八月廿九日。晴。新潮社より手紙。加藤(朝)氏を訪ふ(留守)。生田、深田二氏を訪ふ。田中(王)氏來訪。

八月卅日。晴。新日本より手紙。東京日々へハガキ。中澤・川手、滋子氏を訪ふ。川手氏へは「戀のしやりかうべ」無印發行の訴訟を賴んで置いた。

八月卅一日。晴。淸子が筑紫氏を伴つてやつて來た(さきの契約に僕との間の衝突がある爲めに)。「井上博士外數氏に詰問す」(七片)、東京朝日へ。

九月一日。晴。「僕の談の訂正」(七片)、第三帝國へ。國民新聞の記事に僕の名譽毀損のかどがあつたのに對し――さきに取消文を送つたにも拘らず。人目につかぬ欄外などへ入れたので、それをも不滿

足に思つて――抗議を申し込み、反省がなくば法廷の問題にすると通告したところ、部長の石川(六助)氏から手紙あり、また記者が一名來たので、今一度取り消しかたがた記事を載せさせることにした。昨日の件で筑紫氏へ招かれてゐたので、晩餐に行つた。中村(武)氏へハガキを出し、新潮の記事が清子の名譽毀損になることを知らせてやつた。樺太の山本氏から電信カワセで二十圓。

九月二日。曇、少し風。朝日より原稿返る。新小說の田中氏より手紙。火曜日會のハガキ。英枝と共に滋子氏を訪ふ。

九月三日。雨。中村(武)氏よりハガキ。清子より使ひ。

九月四日。雨。藝術座、春陽堂氏より書信。高橋(五郎)氏來訪、世界語大學設立の件に付き相談があつた。高橋(久)氏よりハガキ(借金の催促)。清子より手紙。木村(朝)氏へハガキ。

九月五日。雨。高橋(久)氏へ返事。「谷崎氏のお才と巳之介」(十九片)、新日本へ。よみうりより稿料五圓。清子へハガキ。山本(喜)氏より手紙、同じく返事。宮仲の家の家主伊勢の代理大原辯護士より手紙。「男女と貞操問題」(四十片)、新潮へ。

九月六日。曇。松屋へ原稿注文。筑紫、清子二氏より手紙。筑紫氏を訪ふ。

九月七日。夜・雨。大原辯護士へハガキ。加藤(朝)氏へハガキ。薄井(秀)、松屋、よみうり、中澤十日會諸氏よりハガキ。新潮社の中根氏來訪。新潮稿料十三圓。火曜日會へ行く。中根氏の依頼で、

僕の近頃書いた今回の事件に關する記事並に論文を一册にすることを約束した。
九月八日。雨。瀧田氏へハガキ。加藤、石丸、木村（修）氏よりハガキ。「僕の別居事實と諸家の論議」（六十一枚）、新小說へ。朝日の薄井氏來訪。
九月九日。雨。加藤（朝）、木村（修）氏へハガキ。瀧田氏よりハガキ。英枝の子が返されて來たので當分ここへ置くことにした。
九月十日。雨、後曇。清子よりハガキ。十日會へ出席。
九月十一日。曇、雨。伊藤（證）、中澤二氏へハガキ。淸子が契約破棄並に同居請求の訴訟を起さうとしてゐることは昨夜ちよつと十日會の歸りに人から聽いたことだが、それがけさの時事に出たとかで、讀賣並に萬朝の記者がまたやつて來た。新潮社より使ひ。
九月十二日。曇。木村（幹）氏よりハガキ。原（正）、生田（長）氏來訪。新潮社へ「男女と貞操問題」（二百五十枚）の單行原稿を持つて行き、一千部印稅前金五十圓を受取つた（一部定價五十錢の豫定で）。吉野氏を訪ふ（その席で、世界公論主筆の小山田武男氏に會つた）。「伊藤證信氏へ返す」（十二片）。春陽堂へハガキ。
九月十三日。晴。伊藤（證）氏よりハガキ。春陽堂に行き、六十枚分の論文原稿四十二圓を受取つた。川手氏を訪ひ、今回の事件の法律事件を相談した。竹腰を訪ひ、質三十五圓を出す。伊藤氏來訪

（留守）。

九月十四日。晴。伊藤氏來訪。滋子氏來訪。「樺太の思ひで」（四十三片）、樺太日々へ。

九月十五日。夜、雨。樺太へ電報。辯護士吉田市三郎氏より内容證明の手紙並に普通の手紙（但し清子の契約破棄の手續きだ）。僕はこれに對して、契約破棄は既に清子がその意を直接に僕に表したので完結してゐるが、渠の手紙着の四五時間前に僕から清子に對して戸主並に夫としての命令とやがて離婚訴訟を起す通知とをやつたことを告げるハガキを書いた。

僕が清子に與へた命令並に通知は左の如し、——

一、親切上の注意

○あの吉田の法律事務所はあまり腕のない辯護士五六名の團體で、左程責任あるところでない、今回そツちの事件を引き受けるからが既に無責任で、ただそれが爲めに名を知られようとしたに過ぎぬさうだ、と云ふのは夫婦の契約は一方の取消意志が見えればそれですんだことだし、同棲要求は戸主の身體を縛してでもし得る法がなければやつても駄目ださうだ。

○新潮社の方へ無料辯護をしようと申し出たべんご士があるさうだ、これも名を知られようとする者だらうが、こちらは勝つに定つてても結局は百圓位と諸新聞への謝罪文ですむに過ぎなからうとの事、もと代議士で中央新聞の主筆綠川の細君があんまで淫賣とサンデーに書かれたその訴訟もそれ

であつた。

○民法八百十三條の第五項により僕からあなたに對する離婚訴訟が、もう、十分に成立することを發見した、(但しこの理由での勝訟になれば離婚後の扶助や賠償をするに及ばず)。

二、戸主として僕があなたに命令する件々(但し直ぐ實行を要す)。

○契約は別居のと嫡子變換のとを共に取り消す。

○戸主たる僕はあなたと同居に堪へないから、別に生活して貰ふから、次ぎの條々を實行すべきこと。

○僕も八圓の家賃にゐるから妻たるあなたは多くても五圓位の家に住むべきこと。

○女中を廢すること(僕が別に世話して貰ふのでないなら、妻一人が妻のことを處分すればいい)。

○二人の子を一所に置くならそれでもいいが、すると子二名並にあなたの生活費並に學校費を最少限度に縮めること、それには金額は家賃とも三十圓渡す(但し薫をこちらへよこすなら三十圓から十圓を減ず)。

三、最後の相談

○第二節の命令はまだ法律上だけででも妻たる間のことだが、僕はやがてあなたに對して僕の戸主並て夫としてあなたから無理解、曲解、侮辱、名譽毀損(これも成立します)、並に不從順の理由を以

つて離婚訴訟を起す、これにも勝ち味はあるが、若し相談づくで離婚を承諾するならそれでもよし。

以上の注意、命令、並に相談に對してはあなたは妻としてそれぞれに挨拶、服從、並に返答を要します。

四、追加命令

○實印と印稅の印とを返せ(これは薫に持つて來させるがいい、これも命令です)。

五、追加注意

○以上は辯護士に相談した上のことだから、僕の云ふことには法律上の落ち度はない、だから——たとへば、そツちの荷物を持つてこツちへ來たところが駄目だ、たとへ妻と同居する義務はあつてもこちらにその意志がなくなつたら道理上からでも離婚か別居かだ。

戶主並に夫として當分別居を命令する、法廷で爭ふつもりならそれまで扶助はするから別居してゐるがいい。

餘事——三十五圓と十圓との質を一緒に出すつもりで行つたが、十圓のは別な家に在るので昨夜は取つて來なかつた、現金と竹腰の質かよひとは僕の手に在るから出すなら渡します。以上六枚あり。

九月十四日　　　岩の美術

清　様

「伊藤證信氏へ返す」（補遺）七片を書いた。

九月十六日。雨。吉田辯護士へハガキ。澤（來）氏より刷り物。「刹那哲學の建設」の書き換へと編成仕直しを終つた。英枝と共に上野の廣小路まで出た。

九月十七日。晴。米倉書店へハガキ。昇之助の義太夫を聽きに行つた。

九月十八日。晴。植竹書店よりハガキ。淸子氏を訪ふ（留守）。かの女はどうも先日の命令に從ふつもりが無ささうだし、薰に當り方がひどいやうなので、本日また手紙を出し、薰を直ぐこちらへよこせと云ふこと、以後扶助料を送らぬと云ふこと、民雄の方はそツちから相談あり次第協定すると云ふこと、並に離婚請求訴訟を起さしめないで取り定めるつもりなら多少の讓步をするといふことを云つてやつた。昨日から「日蓮評傳」を書く參考書を讀み出した。

九月十九日。晴。田邊太一老人の葬式に列しに靑山へ行つた。ついでに、高橋（五）氏を訪ふ（留守）。北村（季）並に上司氏を訪ふ。米倉書店に原稿を渡す。淸子、その父と共に來たが、荒れたのでなぐり倒した。こんなことをしたのは淸子には初めて のことであつた。武林氏夜中に來訪、夜明けに歸つた。けふから薰がこちらに住むことになつた。

九月二十日。雨。田邊氏より挨拶狀。竹腰來訪。米倉より「刹那――」印税のうちへ二十圓入る。

九月二十一日。晴。生田、深田二氏を訪ふ。また滋子氏を訪ふ。淸子の父が交渉に來た。(が、僕の意は決してゐる)。「男女と貞操問題」の初稿を終つた。新小說の田中氏來訪、五十枚內外の小說を引き受けた。若宮氏より轉居の通知。新潮社の佐藤氏よりハガキ、飜譯がまた初まることになつた。竹腰よりハガキ。

九月二十二日。晴。野上、滋子、龍土會よりハガキ。佐藤氏、滋子氏へ書信。龍土會出席通知。新小說への小說を書き初めた。

本日改印届を完全にすませた、さきのは淸子が握つて渡さないからである。實印は乃ち左の如し。新らしい印税の印左の如し。

九月二十三日。晴。淺草へ行く。

九月二十四日。晴。竹腰が僕の横濱の姉をつれて來た。「日蓮自叙傳」を讀了。

九月二十五日。晴。野口氏より手紙。新潮の中村氏よりハガキ。淸子が僕に對する同居請求の訴訟日の通知が地方裁判所から屆いた。これに付きこちらの用意、乃ち、反訴としての離婚承諾請求の手

續をする爲め、辯護士の川手氏を訪問した。同氏と岡田氏と僕とで演伎座に天一孃の手品を見た。

九月二十六日。晴。樺太日々の字野氏來訪。夜、龍土會へ出席。午後、松坂屋へ黑曜會の展覽會を見に行つた。

九月廿七日。晴。「男女と貞操問題」第二校正ずみ。武林氏を訪ふ（留守）。

九月廿八日。晴。米倉よりハガキ、その店員佐藤氏を解傭したと云ふ通知が來て、而も本日待つてゐても約束の金が來ないので、問ひ合せのハガキを書いた（明日投函）。吉野氏を訪ひ、上野あたりまで散步した。「雄辯」に出た「岩野泡鳴を彈劾す」を得て讀んで見たが、あまりに下だらぬ議論であつた。また、「婦人雜誌」にも何か出てゐると云ふので買つて見たら、浮田博士の談として「岩野と云ふ人は病人である。性欲上の一種の病人なのである。その病人がただ新らしい文學と云ふものを知つてゐるだけのことで、病的の點から云へば」云々とあつた。これは確かに名譽キソンの訴へに價へするから明日川手氏と相談して見るつもりだ。

九月廿九日。雨。新潮社より「男女と貞操」問題の印稅のうちへ三十圓受取る。保全病院へ行き、オキシヘラの功能を試驗して來た、一個を買ふつもりで。宇野、並に火曜日會よりハガキ。川手氏へ明日行くと電報をかけた。

九月三十日。朝雨、曇。川手氏を訪ひ、いよ〳〵浮田博士を訴へることにきめた。その費用三十四

圓を新潮社から前借りしたいと云つてやつた。米倉氏よりハガキ。松屋よりハガキ。

十月一日。曇。若宮氏來訪。女の世界・中外日報・新日本へ稿料催促。植竹へハガキ。米倉の代理者伊藤三郎氏來訪（刹那哲學の件）。「女四人と男三人」（百二片）、新小說へ「浮田博士を詰問す」（八片）。

十月二日。雨。貞操問題印稅十八圓入る（これにて千五百部の印稅すべて濟み、但しそのうちの百部は無稅にした）。同じく新潮社より十六圓（プルタルク譯料の前借）。以上の二口を以つて訴訟用の費用にした。川手氏を訪ふ（留守）。新潮社の佐藤氏より手紙。中外日報より稿料六圓。

十月三日。晴。新日本より稿料六圓。米倉より手紙。同じく返事。新潮社よりハガキ。植竹よりハガキ。川手氏を訪ふ。伊藤（弘）氏を訪ふ。春陽堂の田中氏へハガキ。國粹全書刊行會へ購讀を申し込んだ。

十月四日。晴。女の世界より稿料七圓二十錢。山本（喜）氏より手紙。米倉よりハガキ。新潮社よりハガキ。巖本氏のそばを通つたので、寄つて見たが留守、お宮さんに逢つた。

十月五日。晴。川手氏より手紙。同氏へ訴訟委任狀。火曜日會へ出席。「男女と貞操問題」の製本出來。「浮田博士に詰問す」（八片）、訴訟手續きをすませてからよみうりに出すつもり。

十月六日。曇。藤野（愛）並に岡田氏へ書物。井上（哲）・鹿子木（員信）、畔柳（都）・渡邊（鐵藏）、四氏へ各々詰問を發したことを通知した。杵屋並に十日會よりハガキ。サランボの活動寫眞を帝國館

に見に行つた。けさ、萬朝の佐藤(稠)氏が來訪、內務省の或高等官が文部省に來てゐた時、上田萬年氏が泡鳴と云ふ人は色の靑ざめた貧相な男でもあるかと思つてたら、或所(これは千葉氏の碁會でだ)で會つて見ると立派な紳士だと話してゐたので、その內務官が佐藤氏を別室に呼び、內務省では岩野の人物を思ひ違へてゐた、君(佐藤氏)も友人なら注意してやれ、この頃特に岩野の書く物に內務省は注意してゐるからと告げたと僕に云つて聽かせた。內務の分らず屋どもが何を云つてやがるのだ?　押さへるところがあらば押さへて見ろ。

十月七日。雨。藤野(愛)氏よりハガキ。米倉より三十圓(刹那哲學の印稅のうち、これで計百圓)。

十月八日。曇。千葉氏より手紙。桑原某氏より手紙(要領を得ないから返事せず)。小說「女四人と男三人」(百八枚半分)を完了。「重婚と單婚」(五片)、中外日報へ。「自由戀愛の語義」(九片)、時事へ。

十月九日。晴。川手氏より浮田博士に對する訴訟文案を送つて來た。川手氏を訪ふ。春陽堂に行き、「女四人」の殘金四十九圓三十錢を受け取つた。吉野氏を訪ふ。

十月十日。晴、夜雨。米倉氏へハガキ(淸子の日記中に僕を侮辱したところがあらば止むを得ず訴へるからと)。鈴木(三)氏へハガキ。高橋(五)氏の紹介で萩原(紫電)と云ふ人が來訪。十日會へ出席。

左の手紙を英枝の姉並に弟へ出した、——

十月十一日、東京　　　　岩　野　美　衞

尙枝樣、その他英枝さんの御親族樣

其後は全く御無沙汰致してゐました。

さて、僕等の事件が以外にもやかましくなりましたので、世人の誤解や反對に對して僕は自身の立ち場を明らかにする必要が生じ、止むを得ず一冊の書物をまでも書きました。あなたがたの御心配を減少させる爲め讀んで貰はうと思つて、さきに英枝さんから御二人に問ひ合はせて貰つたところ御返事がないのでそのままに致しました。あなたがたは——尙枝さんのお手紙によると——書物を出したのが却つていけないやうに思つてられるやうですが、それは姑息な考へです。自分のことが一たび公けの問題になつた以上は、自分もこれを公けの問題として自立の對抗をしなければ世間から自己の生存を危うくされます。まして僕としては、また英枝さんとしては、理解ある人々から見られて決して耻づべき點や弱點がないのですもの。

今回の著書「男女と貞操問題」に於ても書いた通り、僕の今回の別居並に英枝さんとの同居は僕の一種獨得の思想的生活、乃ち宗敎の一端を實行したことになつてゐます。それに對する俗人の反對は日蓮に對する鎌倉時代の俗衆の反對のやうなものです。近頃日蓮の評傳を書く爲めに日蓮の物を讀んでゐますが、渠は僕よりも內容に於て貧弱だけれども形相に於ては僕と同樣に自力的に熱烈でありました。熱烈なだけに一種の宗敎的革命を行ひつつあるものは反對を受けることが多いのは僕

としても覺悟の上です。かかる人に英枝さんを緣にして關係がつながるお方々は先づ寧ろさう云ふ點に於て十分に僕に肩を持つて下さつてもいいではありませんか？それを世俗の駄言にびくびくして一々消極的な、姑息的な手段や考へをお起しになるのはどうしたことでしよう？僕は主義上手段を絕した純全生活を主張もし、實行もしてゐる人間で、これで以つて段々日本國の世界に於ける中心存在力を作つてゐるのです。

以下分り易くする爲め、個條書きに致しましよう、――

（一）、僕としては淸子との別居と英枝さんとの同居とは別々な問題です。たまたま同時に起つたに過ぎぬ。で、今回淸子の同居請求訴訟は英枝さんには直接の關係が御座りません。又、この訴訟は法律上成立しないわけがありますから、淸子は成功致す筈はありません。かの女が勝つても負けても何の効果をもかち得ないのです。僕はそれに對して反訴として侮辱罪の證據を握つて離婚請求の判決を求めてあります。この方がたとへ負けたとしても、同居成立が出來ない限り、淸子はやがて相當の涙金を得て離籍するにきまつてます。この頃では、收入三分の契約は向ふから破棄され、且僕の命令に從はない狀態にあるので、扶助料をさへ送つてゐません。

（二）、あなた方が僕等の爲めに世間を憚ると云ふのは、幾重にも間違つた考へです。つまり、あなた方御自身の不德を僕等にかこつけて隱さうとするに過ぎない利己的な煩悶ですよ。第一、

尙枝さんにはお話しした通り、事實をよく理解せば僕等(僕と英枝)は公明正大であるのだから、世間でかれこれ云へばこれを以つてなぜ辯解なり、擁護なりをして吳れません?その正大な辯解や擁護が直ちにあなた方の顏が立つ早道です。第二に、それだけの御熱心がなくばあなた方の兄弟なる英枝さんを信じないのだから、兄弟だけれども信じてゐないから、あれに對しては責任がないと世間に公然云つてればいいのです。御自分さへ正直な德に於てしツかりしてゐればです。それをわざ〳〵うそを云つて英枝さんを兄弟ではないとか、英枝さんの今やつてる通りを事實通りに云はないで置かうとか、何とかかとか下だらぬ世間體を胡麻化して置かうとして胡麻化し切れなくなつて苦しむやうなことはあなた方に於ける不正直な報いです。殊に、福島の御兄弟から僕等の爲めに御兄弟が離婚するとか、しないとか云つて來る如きは、世間にばかり媚び〳〵た上の劣等な利己的手段からのいざこざであつて、眞に兄弟を思つてるわけになつてはゐないと思ひます。苟も一個の寺院を持つてる程の人がこんなことで檀徒を憚るやうな見識なしでは德や精神に足りぬところがあるのです。福島からの手紙によれば、新潟にゐる英枝さんの妹さんが僕等の爲めに不名譽を感じてお嫁に行けぬとお泣きになつたさうですが、そんな無見識なことを若い者と一緒になつて僕等の方へ傳へて來るのは最もおとなげないことではありませんか?なぜそんな無見識では駄目だと新潟の方へ敎へてやることに氣が付かなかつたのでしよう?如何に兄弟だ

ツて、既に一人前になつた者をおのれ等の世間體ばかりを考へる爲めにいろんな尤もらしい口實をつけて左右しようとするのはあんまり勝手な蟲がよ過ぎます。親切ごかしもここに至れば利己の爲めに過ぎなくなるではありませんか？第三、倘枝さんの校長が若し——以上のことをよく語つて聽かせても分らずに——眞に果して僕等の事件の爲めばかりに學校をよせと云ふなら、僕は當分倘枝さんを引き受けてもいいです。校長の大村と云ふ人は僕を淡路洲本に國引けしてゐた蜂須賀侯の直家來の一人なる岩野直夫の息子美術と云へば知つてるだらうと思ひます。あの人はもとは有名な秀才であつたが、老いぼれてただ喜勿れ主義の敎育法に安んじて來たものと見えます。兎に角、倘枝さんは心配なら校長にこの手紙を見せて校長から講堂に於て、何かのついでに、あなたの便宜になることを云つて貰へば、直ぐ生徒の不信用（若し僕等ばかりの爲めに得たのだとすれば）は直ります。それもしないで辭職しろとなど云ふなら餘ほどの分らず屋だから、僕は主義上校長と戰つてそんな分らず屋の校長を敎育界から葬つてもよし。ただ斷つて置くのは、倘枝さんが僕等の事件をだしに使つて他の目的に利用して貰つては困ります。（たとへば、他の事で不評判になつたのを僕等にかこつけたりすることは）以上の三項をよく御考へになつて、よくお分りになつたら、倘枝さんのロクマクや元丸さんのぼんやりしてゐると云ふやうな病狀（？）が——果して僕等の爲めばかりのことなら——直ぐ直る筈です。それでも直らないと云ふ場合には、

もう、こちらのせいではなく、あなた方の姑息癖や卑しむべき世間心が然らしめるに過ぎないことをば反省なさいまし。福島で――うそか本統か知りませんが――夫婦別れの問題が持ち上がらうとしたのなども世間心からの一種の病氣に過ぎません。

（三）、福島からは田舍に引ツ込めとか、尙枝さんからは當分隱れてゐろとか英枝さんのもとに御すすめがあります。かの女にして若しその氣があらば僕は反對致しません。また尙枝さんの御考案の如く僕から生活費を送つてもいいです。この點は然し英枝さんが自身で返事なり處分なりをするでしよう。ただ申して置きたいのは、かの女は僕を十分に信賴してゐます。僕も信賴を受ける限り、愛護致します。

（四）、この項は無理に云はないでもいいことですが、今の生活狀態のことです。尙枝さんのいらしつた頃は丁度夏でもあつて收入が少なかつた爲め末の御心配があなたに見えましたですが、九月からは殆ど時間が足りぬほど働き、そしてこの働きがそのまま僕の宗教ですが、それに添つて報酬として先月も二百五十圓ほど這入り、今月はまだ十日にしかなりませんが、既に百五十圓ほど入りました。今月中にはまだ外に五十圓と九十圓との分は確かに入ることが分つてゐます。そして先日は英枝さんが村上に預けて來た紋つきや長繻袢を出しましたし、例の三十五圓の僕の質物も出しました。今日も松坂屋から二三十圓の註文をして歸つたところにあな□の手紙が來て

ゐました。(但しこんなことはさきに內證を御存じであつた尙枝さんだけに聽いて貰つたらいいのです)。なほ福島からの書信によると、僕等は世間から全くうとまれてただ二人で往生してゐるやうに御想像の樣子ですが、東京は地方よりも分りのいい人が多いだけ、寧ろ同情者は僕等の方にあります。そして僕は相變らず每月の三會合に出席もし、そのおもな世話をも致してゐます。無論、僕は世間の同情や貧富などは眼中にないのは豫め御承知を願ひます。

以上くど／＼申しましたが、これでなほお分りにならない點は、もう、思想上並に信仰上の相違から來るのでありますから、あなた方もさう御決心になつて、僕等の信者になるか反對者になるか、二つに一つのはツきりした區別しかありません。そして斯く區別が立つたら、親だッて子の信仰を左右することが出來ぬのだから、兄弟同志は心配も無用です、また無理解な親切も無用です。たとへば、眞宗の檀徒を日蓮宗に取られたやうに、あなた方の子若しくは兄弟を一名僕に取られたとおあきらめになるのがよう御坐いましよう。

この手紙は先づ尙枝さんに御覽に入れますが、お讀みの上は元丸さんへ御送りを願ひます。但しこれは多少こころ安立ての云ひぶりでまだ面會しないお方々へは失禮な點もありますが、僕の隱し立てなき精神で御坐いますから、元丸さんがお讀了の上は福島の御兄弟へ御送り下さい。それから、またお濟みの上は失禮ですが——どうか破らず、また手段的なお考への爲めに途中で左

右することなく――新潟なる英枝さんの御兩親樣へお届けを願ひます。そして御兩親から御挨拶が願へれば最も結構です。願へなければ、また時を待ちますが。その他のお方々からもこの手紙に對しては僕に御挨拶を願ひたいのです。以上。

尙　枝　樣

元　丸　樣

福島御夫婦樣

蒲原靈性樣

十月十一日。晴。夜、雨。米倉氏よりハガキ。生田氏、深田氏を訪ふ。

十月十二日。雨。鈴木(三)、菊子、時事の柴田氏よりハガキ。時事へ送つた原稿が返つて來たので新潮へ送つた。米倉氏へハガキ。小寺・加藤(朝)二氏を訪ふ。けふからまた飜譯を初めた。

十月十三日。雨あり。米倉よりハガキ、同じく返事。高橋(五)氏を訪ふ。譯、十八片。

十月十四日。曇。樺太の山野氏より手紙並に寫眞。僕が樺太の日露國境標に於て寫した寫眞も來た。山野氏へ返事。龍土會よりハガキ。植竹へハガキ。川手氏よりハガキ(浮田博士に對する訴狀いよいよ提出したさうだ)。米倉氏よりハガキ。英枝の母、越後より來訪・止宿。譯、二十七片。

十月十五日。晴。藝術座よりハガキ。萬朝の宮田(滋子)氏へハガキ。よみうりへ「浮田博士に詰問

す」を送る。三越へ二科展覽會を見に行つた（英枝並に母と共に）。譯、十八片。
十月十六日。晴。米倉よりハガキ、同じく返事。藝術クラブの建物を見に行つた。譯、十三片。
十月十七日。雨。岡田氏より手紙。田中（純）氏より手紙、同じく返事。淺草へ活動寫眞を見に行く。
十月十八日。雨、夕方より晴れた。萩原（德三郎）氏よりハガキ。よみうりよりハガキ。譯、四片。
十月十九日。晴。よみうりへ原稿。川手氏へハガキ。清子が淺草の公園女優になると云ふ新聞記事が出たので、まだ法律上夫たる僕がそれをさしとめ置く權利がないかどうかを川手氏へ尋ねに行つた。歸途、岡田氏に會ひ、氏の家を初めて訪問。譯、二十二片。
十月二十日。晴。武林氏來訪。實業之世界の質問に左の如く答へた、――
一、大浦問題は、
（イ）不起訴は否。（ロ）少くとも、政治道德をいつまでも進歩させない。（ハ）大隈内閣はこの問題の爲めに辭職すべし。
二、乃木問題は、
（イ）復興は非。（ロ）この問題が乃木大將をあまりえらい者として取り扱つてるものとすれば、愚だ。騷ぐだけが却つて害あつても益なし。（ハ）非を取り消せ。

川手氏を訪ひ、けふの裁判の樣子を聽いて見たが、第二回は十一月八日になつた。
植竹より白井氏來訪、「放浪と斷橋」の原稿を返して來て、無期延期のもとに兎に角同店からいづれ出すことにして置いてくれろと云つて來たので、五十圓の損害金を出せと請求して返事を一週間待つことにした。

十月二十一日。曇。新小説の田中氏來訪。英枝の母、八日目の今日出發歸國、僕等のことは大體認めて行つたわけだ。譯、十一片。

十月二十二日。曇。中外日報並に中央公論にハガキ。島田、柴田、石田、北山、吉野諸氏へハガキ。植竹より來月五日に三十圓を渡すと云ふ返事が來たので、承知の返事を出した。町の八幡神社（僕のうぶすな神）から寄附金の通知が來た、僅か送つたところで仕やうがなからうから、送らぬつもり。譯、十八片。

十月二十三日。曇。新潟なる英枝の父蒲原靈性氏より初めて手紙、同じく返事。譯、二十一片。

十月二十四日。雨。龍土會に出席。譯、十七片。國民の島田氏よりハガキ。

十月二十五日。雨。清子より英枝の事情ある私生兒（六歲）に對する冷笑のハガキが來た（わざ〱新潟へ戶籍謄本を取りにやつたと云つて、自慢さうに）。前島（震太郎）氏の使ひがオキシヘラを屆けて來た。午前からつゞけて使つて見ると、今、夜中の午前一時半までも大して勞苦をおぼえぬ。譯、三

十八片。

十月二十六日。曇。中村(武)氏よりハガキ。新潮社より譯料三十圓(そのうち、二十三圓は前借としてさし引かれた)。同じく新潮稿料二圓五十錢。山本(喜)氏の新宅を訪ふ。譯・二十八片。

十月廿七日。晴。火曜日會の通知を發す。高須(梅)より手紙。藝術クラブより手紙。譯・七片。

十月廿八日。晴。昨日清子のところへマントその他を取りに行つたら、保存の雜誌等はあつたが、マントは賣つてしまつたと云ふし、蜜蜂四箱もなくなつてゐた。多分二群は滅亡し、他の二群は賣つてしまつたらしい。今夜、神樂坂上で木村(鷹)氏に會ひ、ヤマニバーへ行つて暫らく話した。

十月廿九日。晴。三井(甲)氏へ木村氏後援會の趣意書きを送つた。原氏より返事。山本(孝)氏樺太より上京、氏の宅に於いて訪問したが、菊判三十二ページばかりの雜誌を勝手に出すだけの費用を負擔すると云ふから、「新日本主義」と云ふ名で僕の意見を發表する舞臺にしようかと思つた。中村(武)氏を訪ふ。

十月卅日。曇。木村(鷹)氏へハガキ。生田(長)氏より轉居の通知。山本(喜)氏へ手紙。左の證明書を書いた(川手氏へ渡すもの)。――譯・十九片。

十月三十一日。曇。小寺(菊)氏よりハガキ。英枝と共に文展を見に行つた。滋子氏も一所に行つて、また歸宅してから食事を共にした。それから田島の夫人も來て、四人で花を引き、別にかけたわけで

はなかつたが、久しぶりの遊びであつたので、徹夜をした。
十一月一日。曇。滋子氏、午前十一時に歸つて行つた。山本(喜)氏來訪。いよく\僕の爲めに「新日本主義」と云ふ小雜誌の發行費並に保證金を融通してくれることになつた。來年一月一日創刊號發行のことにきめた。竹腰氏よりハガキ、同じく返事。川手氏へハガキ。譯、三片。
十一月二日。雨。山本(喜)氏よりハガキ(但し保證金は當分納めないでやらうと云ふことになつた、雜誌のこと)。川手氏を訪ひ、この八日の公判材料を渡す。火曜日會へ出席。譯、ナシ。
十一月三日。晴。三井(甲)氏へ手紙、加藤・武林二氏へハガキ(三名とも今度の雜誌の件で)。田中(王)氏來訪。武林氏を訪ふ。山本(喜)氏へハガキ。
十一月四日。晴。瀧田氏來訪、中央公論の小說依賴。植竹・前島二氏へハガキ。新小說の田中氏よりハガキ・同じく返事。滋子氏を訪ふ。譯、三十八片。
十一月五日。晴。オキシヘラの前島氏來訪。加藤(朝)氏來訪(「新日本主義」の連中になると云つた。)植竹を訪ふ。譯・十七片。
十一月六日。晴。川手氏を訪ふ(浮田博士の訴訟は今月十八日ときまつた)。今井(歌)氏を訪ふ。三井氏より運動贊成の返事が來た、同じくこちらからハガキ。廣瀨(哲)、山本(喜)氏へハガキ。今井歌子氏へ書物。十日會より通知。植竹より三十圓(これは原稿出版遲延の損害に取つた金だ)。譯・十七

片。

十一月七日。雨。山本(喜)氏よりハガキ、同じく返事。加藤、武林、廣瀨氏へハガキ。廣瀨氏よりハガキ。譯、三十八片。

十一月八日。雨。大須賀氏、木村(卯)氏へハガキ。譯、十九片。訴訟第二回の公判を聽きに行つた。

十一月九日。雨。新潮社へ行き、譯料のうち三十圓を受け取つた。「新日本主義」最初の會合を山本氏宅に開いた、廣瀨、木村、加藤、武林の四氏出席(三井氏は地方に在つて缺席)。竹腰の件に付き英枝を八幡町へつかはす。浮田博士の答辯書に對して、辯護士の參考となるやう反駁を書いた。

十一月十日。晴。三井、加藤、米倉三氏へハガキ。十日會へ出席。本日即位式の影響で市中は賑やかであつたので、會が終つてから、ぞろ〳〵人が歩いてる道を一緒になつて須田町まで歩いた。

十一月十一日。雨。今日、僕の代表者として田島氏を竹腰の爲めに棟梁に會見しにやつた。米倉氏來訪。淸子の「愛の爭鬪」を讀み終つたが、こんなに僕を解してゐなかつたのかと驚かれた。それに肉と靈とが頻りに區別してあるのがをかしいほどことさらじみてゐる。

十一月十二日。曇。竹腰が來て、八幡町の家のことを——たとへ多少不利益でも——穩便にして置いてくれと賴むので、僕は出張して棟梁、その金主、並に營業掛りを並べて置いて、無事に竹腰の身

だけを頼んだが、竹腰に不利益なのは實際多少どころではないのは分り切つてゐるのだ。約束の三年間に、どうせあの家は取り返せまい。川手氏へ訴訟に關する意見を手渡しした。中央公論の小說を書き初めた。

十一月十三日。曇。加藤みどり氏並に米野口氏よりハガキ。みどり氏へ返事。日比谷の菊を見に行き、銀座をぶらつく。小說をつづける。

十一月十四日。晴。無盡燈社へ手紙。石田、茅原、山本、瀧田氏へハガキ。石田氏より手紙。加藤(朝)氏が小形某氏をつれてやつて來た。原(正)氏來訪。

十一月十五日。晴。瀧田、三井二氏よりハガキ。小說「膝に飛び付く女」(三十一枚)を書き終つた。中央公論社へ行き、三十七圓二十錢を受け取つた。

十一月十六日。晴。山本、龍土會二ケ所よりハガキ。田中(純)氏へハガキ。渡邊(誠人)氏と云ふ人來訪。田中(王)氏を訪ふ。僕の雜誌に出す宣言、斷片語、並に未開人と云ふ事の由來を書き、「米野口氏の發想」(二十五片)を書いた。

十一月十七日。晴。瀧田氏よりハガキ。同じく返事。山本(喜)氏を訪ふ。清子の「愛の爭鬪」を評す(十二片)。

十一月十八日。曇。浮田博士に對する公判日だと思つて裁判所へ行つたら、昨日のことであつた。

川手、吉野二氏を訪ふ。川手氏よりハガキ。第三帝國より華山氏に對する意見を聽きに來たが、返事せず。「日蓮學者に問ふ」（九片）、新日本主義へ。

十一月十九日。晴。加藤（朝）、木村（鷹）、小寺（菊）氏を訪ふ。

十一月廿日。晴。西村（渚）氏より手紙。山本氏を訪ふ（留守）、滋子氏を訪ふ。歸途醉つた爲めにどぶどろに落ちた。

十一月廿一日。晴。岡田氏より手紙。龍土會へ出席。三井、加藤氏へハガキ。田中（王）氏へ書物を郵送。

十一月廿二日。晴。けさ午前一時から武林兒玉（花）、その他二名の連中に叩き起され、あけ方の五時までおつき合ひした。英枝の父よりハガキ、同じく返事。千葉（鑛）氏來訪。

十一月廿三日。晴。岡田氏來訪、高橋五郎氏への紹介を書いた。ここ二三日、痔が再發して治療中。譯・二十六片。

十一月廿四日。晴。中澤（靜雄）氏來訪。譯、二十三片。

十一月廿五日。晴。山本氏よりハガキ。譯、三十六片。

十一月廿六日。小雨。野口（米）氏よりハガキ、同じく返事。岡（落）氏へハガキ。（森田恒友氏歸朝につき十日會にて歡迎の件）譯、三十一片。

十一月廿七日。晴。三井氏よりハガキ。木村(鷹)、石田氏へハガキ。川手氏を訪ふ(留守)。廣瀨氏を訪ふ(留守)。蒲原、野口、加藤氏を訪ふ。

十一月廿八日。晴。三井、大杉、山本氏へハガキ。木村(卯)、中村(春)氏來訪。天弦堂の店員來訪、「悪魔主義の思想と文藝」の第三版三百部の印を押した。千葉氏よりハガキ。新潮社へハガキ。

十一月廿九日。晴。前島氏よりハガキ。吉野氏來訪。山本氏を訪ふ。

十一月卅日。晴。山本、森田氏へハガキ。森田氏より歸朝の通知。木村(鷹)氏よりハガキ。三井氏よりハガキと原稿。前島氏の店員來訪(五圓渡す)。武林氏を訪ふ。「孤月氏へ」(十二片)。

十二月一日。晴。千葉氏へ返事。中村(武)、廣瀨氏へハガキ。川手氏を訪ふ(留守)。中村(武)氏よりハガキ。岡、新潮社、安江氏よりハガキ。安江氏へハガキ。三井氏並に武林氏より原稿。

十二月二日。晴。岡、加藤二氏へハガキ。火曜日會の通知を發す。譯、三十四片。野上氏を訪ふ(留守)。

十二月三日。晴。廣瀨(哲)氏、原稿を以つて來訪。川手氏を訪ふ。中村(武)氏よりハガキ(原稿の事)。加藤氏よりハガキ。野口氏より手紙。文章世界より酒の事で質問、左の如く答へた、

『酒にはさう趣味がありません。猪口に二三杯で醉ふのはもとからのことですから、家では晩酌さへしません。ただ仕事の勞れをおぼえたやうな時には、近頃では葡萄酒を少し飲みます。』

譯、ナシ。「國家と個人」(新日本主義の意義)、八片、新潮へ。
十二月四日。晴。中村(孤)氏よりハガキ。徹夜。
十二月五日。譯、六十片。野口氏より著書。木村氏より原稿。加藤氏、原稿を持つて來訪。雜誌編輯ずみ、社へ持つて行つた。新潮社より譯料三十圓。留守に木村(鷹)氏並に竹腰來訪。
十二月六日。晴。けふは裁判所に僕の事件が二つあつまつた。清子のと浮田氏のとだ。そして二つとも辯論終結になつて、前者は十三日、後者は二十日が云ひ渡し日だ。讀賣に行き、「浮田氏に詰問す」を取り返し、上司氏とカフエへ行つた。米倉書店の主人來訪。三井氏より手紙。
十二月七日。晴。三井氏へハガキ。山本氏へ手紙。木村(鷹)氏より手紙。千葉氏よりハガキ。火曜日會へ出席。譯、二十五片。
十二月八日。曇。十日會の通知。淡路會の通知。譯、三十五片。
十二月九日。晴。中村(孤)氏よりハガキ。竹腰來訪。觀世舞臺の招待能に行つた。その歸途、野上氏夫婦の紹介で山崎樂堂並に阪本(雪)氏に會ひ、山崎氏の宅へ寄つた。譯、十二片。淡路會へ出席の通知。
十二月十日。晴。野口氏、讀賣、時事へハガキ。紀平氏へハガキ。譯、九片。三井氏よりハガキ。十日會へ行く。

十二月十一日。晴。山本、紀平二氏よりハガキ。淡路會へ出席。

十二月十二日。晴。紀平氏より『認識論』寄贈。譯、十片。喜多の能へ行つた。

十二月十三日。晴。淸子の起した同居請求の訴訟が勝利を得、僕の反訴なる離婚請求が負けたので、淸子が父を使ひとして僕に相談に來いとのことだが、かの女の手紙の文句が倨傲過ぎるので行くにも及ばぬと思つた。たとへ訴訟に破れても、まさか法律が同居を强いる規定はなからう。辯護士に電話をかけたが、留守であつた。やまと新聞社の大館憲平氏並に東京朝日の芳賀榮造氏が來訪、負訴のあと始末如何を聽きに來た。譯、三十五片。

十二月十四日。晴。相馬(御)氏より手紙、同じく返事。龍土會よりハガキ。紀平氏へハガキ。岡氏を訪ふ。滋子氏來訪。譯、二十六片。

十二月十五日。晴。新潮社より譯料三十圓。山本氏を訪ふ。譯、十七片。

十二月十六日。晴。讀賣、時事へ轉居の通知。巢鴨町一〇八二へ轉居(家賃十五圓)。原(德)氏、加藤(朝)氏來訪。

十二月十七日。晴。石田氏より手紙。

十二月十八日。晴。松屋へ原稿紙二千枚注文。山本氏よりハガキ。川手氏を訪ふ。その結果、淸子の父へ返事のハガキを書いた。つまり、まだ判決書が到着してゐないが、それが來た模樣で或は控訴

するかも知れぬこと、並にそれに拘らず淸子が相當の禮儀を以つて直接に相談したいと云ふなら、書面で以つて分ること、並に如何に裁判に勝つたとて僕に加へた侮辱は取り消されたのでないことを通知したのだ。譯、七片。安江醫院長へ四圓二十一錢送つたが、それは十年ほど以前の殘金だ。

十二月十九日。晴。朝日、日々、やまとの記者へ十四日の記事を二枚送るやうに手紙を出した。田中(王)氏へハガキ。山本氏よりハガキ。「戀のしやりかうべ」の紙型を大精社から取つて來た。無印出版をされたので、その損害としてだ。龍士會へ出席。譯、十片。

十二月廿日。晴。中央公論、新小說、文章世界に轉居の通出。島田(俊)氏へハガキ。新日本主義の校正を終つた。山本氏を訪ふ。浮田博士に對する訴訟はけふ負けになつたさうだが、まだその理由等は淸子のと同樣判決書が辯護士の手もとへ達しないので分らない。譯、七片。

十二月廿一日。夜、雨。今井、藤野二孃へハガキ。三井氏へハガキ。橫濱の姉より手紙、同じく返事。相馬(御)氏より手紙、同じく返事。大館、原田(信)、芳賀(榮)三氏より返事。譯、二十九片。

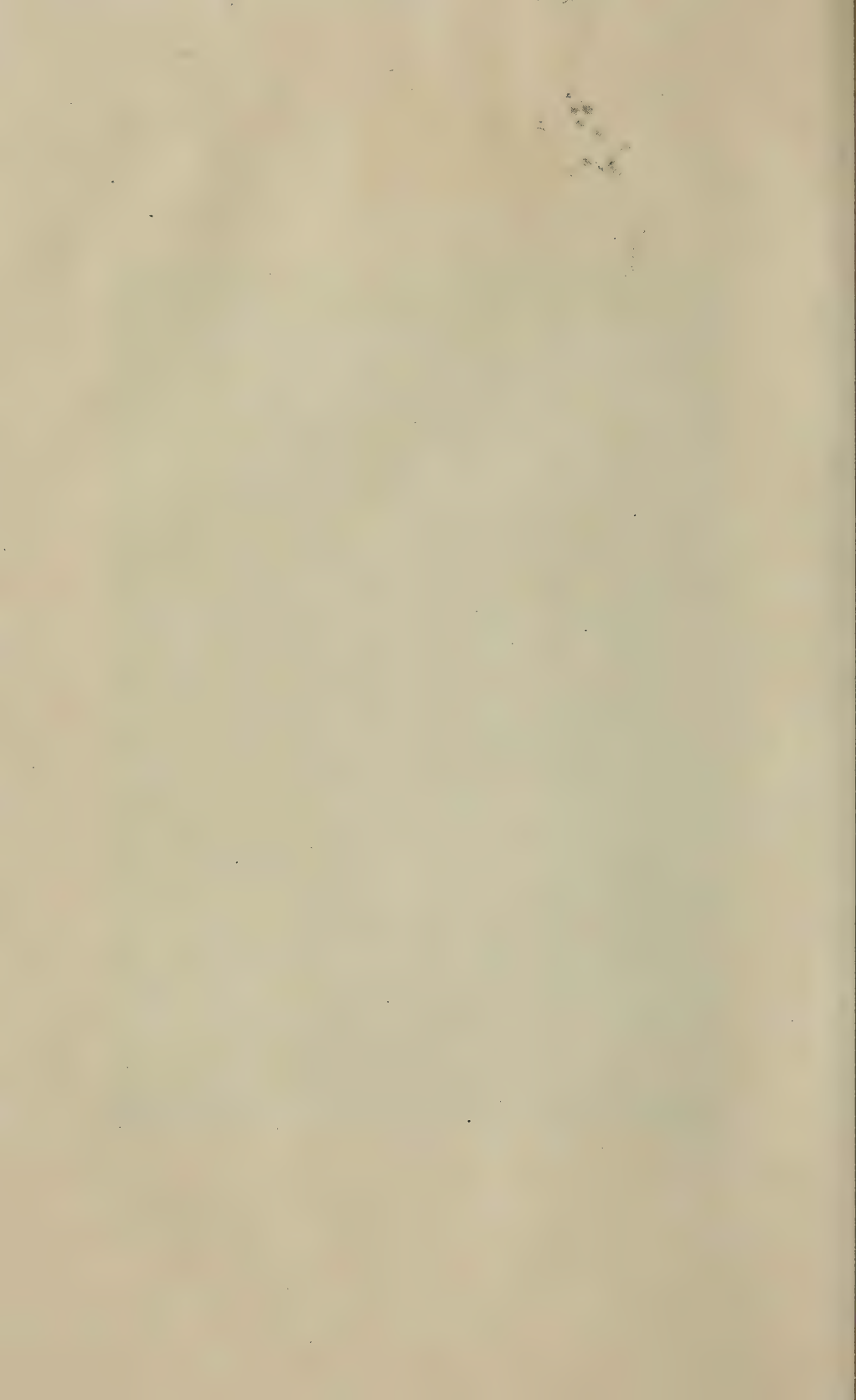
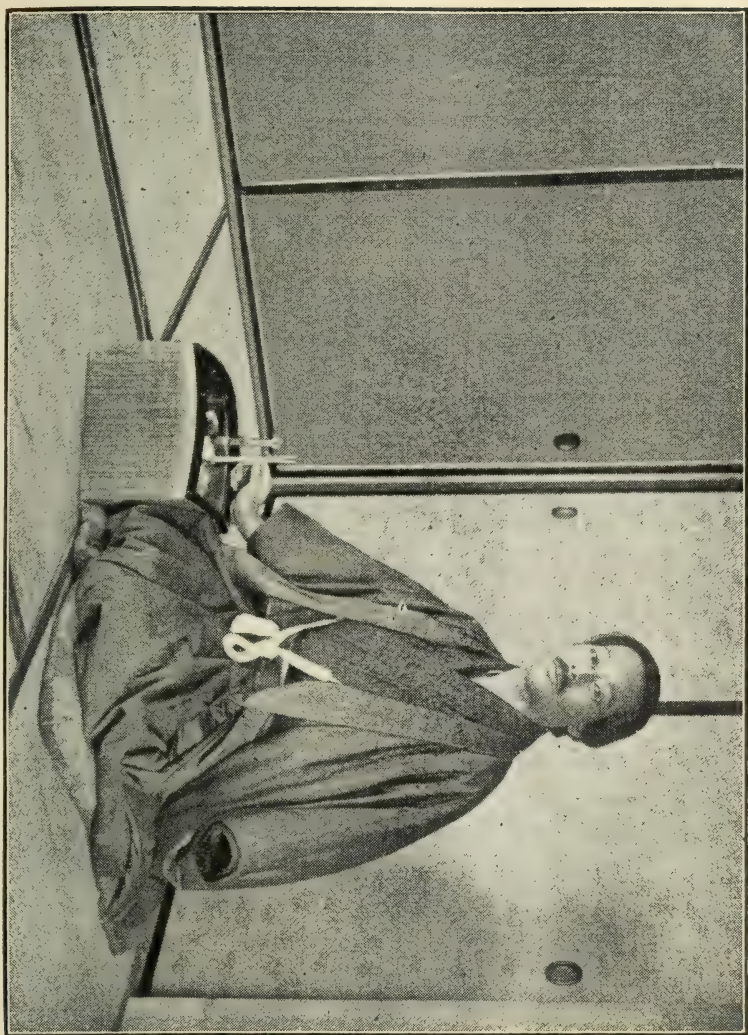
十二月廿二日。曇。宇野氏來訪、新日本主義編輯人としたる僕の印を取りに來たのだ。今井孃よりハガキ。原田氏へハガキ。譯、三十三片。

十二月廿三日。晴。譯、二十六片。僕の主幹として出す「新日本主義」が出來した(部數は一千部)。

十二月廿四日。曇。原田氏よりハガキ、同じく返事。前島氏よりハガキ。譯、五十三片。新潮社へ

ハガキ。
十二月廿五日。晴。三井、田中(王)、中央公論社よりハガキ。譯、四十五片。
十二月廿六日。晴。中央公論社の質問に返事。新潮社より譯料三十圓。山本氏を訪ふ。田中智學氏へ「新日本主義」を送り、「日蓮學者に問ふ」の答辯を求めた。譯、二十二片。
十二月廿七日。晴。田中(王)氏來訪。淸風亭に於て著作家協會の相談に行く。
十二月廿八日。曇。田中智學氏より返事。譯、三十八片。
十二月廿九日。晴。山村氏より手紙と詩集。けふ一日風邪でやすむ。
十二月卅日。晴。木村(卯)氏來訪。千葉氏と布川氏とが來訪(留守)。廣瀨氏よりハガキ。新潮社より譯料三十圓。山本氏へ立ち寄る。
十二月卅一日。晴。けふ、例年の通り夕かたから東京市中へぶらつきに出た。銀座をぶらつきながら或は淸子に出會ふかも知れぬと注意してゐた。若し會つたら、きツと疑問の男をつれてゐるに相違ないと思つたのだが、會はなかつた。念の爲め、日本橋の鴻の巣へ行つて、ひよツとすると來るだらうと思つたら、果してやがてやつて來た。男も豫期通りのであつた。この男と先日來殆ど毎日のやうにかの女は出歩き、夜十二時過ぎにならねば歸宅せぬと云ふ情報は竹腰からも聽いてゐたのだ。お定と云ふ女中もそれが爲めに出てしまひたいのだと聽いた。兎に角、今晩は計劃通りのつぼにはまつた

のだ。これでなほ引き續き訴訟がある場合は或程度までこちらの利益になる證據をつきとめた。男と云ふは米倉書店だが、關係があるなしは、もう、問題となすに足りぬ。僕に取つては淸子にこれから何も云はさぬだけの證據を握つてればいいのである。みそかの晩にこんな獲物があつたのもきはどいわけだ。（大正四年終り）

（大正五年撮影）

大正五年

一月一日。曇、小雨。火曜日會通知狀二十八枚を出す。樋口、岩村、野口、若宮、竹越(三叉)、芳賀(矢一)、田山、田中(王)、中澤の九氏へ昨年末に定つた著作家協會の發起人承諾請求のハガキを出す(これだけは僕の受け持ちに當つた分である)。賀狀返し七。來狀十三。

一月二日。曇。來狀七、返し七。來狀三、返し二。來狀十、返し九。德田(秋聲)、吉野、深田三氏を訪ふ。深田氏來訪。吉野氏のところで新公論の森氏に初めて會つた。「興味を以つて」(九片)、新刊批評(四片)。

一月三日。曇。來狀十七、返し十二。若宮、北村二氏を訪ふ。北村はけふ頻りに僕に詩人として詩を作れと勸めたが、これは渠が今の僕の氣ぶんを知らないからである。

一月四日。晴。夜に入つて風。加藤氏來訪。深田氏來訪。來狀十、返し七。「普通學としての外國語を廢止せよ」(十五片)。「斷片語」(十一片)。「日本著作家協會の設立」(十片)。以上いづれも新日本主義

へ。

一月五日。晴。年賀來狀三。山本氏よりハガキ。「二訴訟の經過」(十二片)。斷片語(十一片)。

一月六日。晴。賀狀四、返し二。三井氏へハガキ。加藤氏を訪ふ。

一月七日。晴。賀狀二、返し一。千葉、野口二氏よりハガキ。竹越(與三郎)氏よりハガキ、著作家協會の件に就き會見を申し込んであつたので、氏の事務所を訪ふたのだけれども、時間が後れて留守。滋子氏を訪ひ、それから共に小寺菊子氏を訪ふ。

一月八日。晴。三井、菊子二氏よりハガキ。十日會の通知。山本氏を訪ふ、新日本主義の景氣は割り合にいいやうだ。川手氏を訪ひ、淸子問題の判決書を見たところ、淸子の言行は僕が普通人なら無論僕を侮辱したことになるが、僕が特別なんだから侮辱にならぬと云ふ趣意であつた。その意は僕が普通人の如く名譽など無頓着だと云ふにあるらしい。人を馬鹿にした判決だ。辯護士も怒つて控訴する方がいいと云つてる。その上、また、今夜深田氏が來訪して、淸子に丁度昨年末日に於ける證據發見を別な事で確める報告をもたらしてくれた。

一月九日。曇。夜、雨。米倉書店に手紙を出し、「利那哲學の建設」を送り返せと云ふかけ合ひをすることにした。新潮社より「耽溺」の印稅の印三百三十三部分を取りに來た。(印稅は十圓也)。竹越與三郎氏へ手紙を出した(著作家協會の件)。相馬氏より著作家協會の規則ズリ送附。竹腰來訪。

一月十日。晴。英枝の父へ手紙。相馬氏へハガキ。十日會へ行く。深田氏より原稿。米倉氏來訪、持つて來させた「刹那哲學の建設」を一先づ僕の手に取り返すことにして、前借金百圓の受け取りを書いた。

一月十一日。曇。火曜日會へ行く。大月氏來訪。三井氏より原稿とハガキ。新潮社より質問、同じく返事。正富(汪洋)氏より原稿と手紙。野上氏よりハガキ。

一月十二日。曇。相馬氏よりハガキ、同氏より小包み。廣瀨氏より原稿。戸張氏より展覽會の招待。新日本主義第二號のへんしうを終へたのを、山本氏へ持つて行つた。譯、二十片。

一月十三日。晴。廣瀨氏へハガキ。田山、樋口、中澤の三氏へ著作家協會の發起人名ズリ並に規則草案を送る。著作家協會設立最後の內相談會の通知を十三名に送る。三井氏へハガキ。山鳥がまた屆いたので、川手、山本、滋子、菊子、四氏を招いだが、菊子氏だけは不參。滋子氏は一泊。藝術座よりハガキ。

一月十四日。晴。

一月十五日。晴。樋口氏より著作家協會發起人承諾の通知。芳賀氏(矢一)を訪ひ、また同協會發起人承諾の返事を聽いた。そのついでに昨年出した博士論文の樣子を聽くに、松本(亦)氏が先づ讀んで審査の價値あることを認めたので、それから坪井その他の博士へまわつたが、僕の別居事件が邪魔を

して多分否決されるだらうから、今のうちなら取り下げられるがと云ふのであつた。然し僕は終りまでの經過を見た方がいい、それからいよ〳〵否決されたら、京都の大學へ移すからと答へた。歸宅してから、念の爲め僕の「男女と貞操」を芳賀氏に送り、僕の道德に對する立ち場だけは明らかにして置いてくれろと云つてやつた。岡村(千)氏を訪ふ。譯、三十二片。僕と薫との寄留届を出した。

一月十六日。晴。深田氏來訪。譯、三十四片。

一月十七日。晴。昨夜、深田氏が僕の家で食事をした時僕の羽織を着たが、それをそのまま忘れて着て歸つたので、今日人が届けて來た。山川智應氏より和譯法華經とハガキ。同じく返事。譯、四十五片。

一月十八日。晴。譯、三十八片。

一月十九日。晴。雜誌の校正初校ずみ。滋子氏を訪ふ。讀賣の加藤氏來訪。「固定は眞理でない」(石阪氏に)を十八片。

一月二十日。晴。若宮氏來訪(留守)。著作家協會の內相談會に出席。中澤、田山、竹越、與謝野、馬場の諸氏へ同會の件に付きハガキ。丘淺次郎、有島(生)、千葉、金子(築)、角田(勤)の三氏へ同じく同會の件に付き手紙。原稿を時事へ送つた。

一月二十一日。晴。譯、三十九片。中村(雨)中村(宗)二氏へハガキ。

一月二十二日。晴。雜誌出來で山本氏を訪ふ。小川氏を訪ふ。福田(和)氏よりその母死去の通知。角田(浩々)氏より返事。千葉氏より返事。馬場氏より返事。川手氏より手紙。譯。十一片。

一月二十三日。晴。福田氏へ悔み狀。永井、角田二氏へハガキ(著作家協會の件)。三井氏へハガキ。日蓮宗大學教師清水龍山並に清水梁山氏へハガキ(「日蓮學者に問ふ」の件)。石井(柏)氏へハガキ。川手氏を訪ひ、淸子に對する控訴を委任した。田山、中澤、丘(淺)、有島、中村(春)氏よりハガキ(協會の件)。譯、三十八片。

一月二十四日。小雨。大月氏へハガキ。時事の柴田氏へハガキ。竹越、金子二氏よりハガキ(協會の件)。土田(杏村)氏よりハガキ並に書物。中村(星)氏來訪、協會の件に就き發起人會開催までの下仕事を相談ズミ。

一月廿五日。晴。大月氏來訪。柴田氏來訪。與謝野氏よりハガキ、同じく返事(協會の件)。

一月廿六日。譯、六十片。晴。川手氏より淸子に對する控訴手續きを了した通知。三井氏よりハガキ。鈴木(三)氏よりハガキ(協會のこと)。新潮社並に山本氏を訪ふ。譯、九片。

一月廿七日。夜、小雨。區裁判所より親族會の通知(何の爲めか分らず)。與謝野氏より電報(協會の件)。無盡燈社よりハガキ。「發想と人格」(野口氏を再駁す)十八片。加藤氏來訪。

一月廿八日。晴。森田(恒)、無盡燈、三井、木村(卯)、諸氏へハガキ。松田湛堂、與謝野、龍土會

よりハガキ。筑紫氏の庭へ淸子が僕の蜂二箱をあづけてあるのを聽いたので、けふ、同氏へハガキを出し、無條件で僕に渡すかどうか、然らざれば預からないで淸子に返せ、そこへ取りに行くからと通知した。火曜日會の通知を發す。けふ、呼び出しの區裁判所へ行くと、淸子が民雄の扶助料に對して親族會を設けることを申請してあつた。僕は子の扶助料を出さぬとは初めから、云つてないのだが、向ふは毎月十圓を最低額だと云ふし、僕は今のうちは五圓でいいと云ふので折合ひが付かぬ。つまりかの女の方は子を出しにして少しでも金をむさぼらうと云ふのだから、寧ろこちらへ子供を引き取つた方がいい、向ふでは時々おのれの外出遊びの爲めに病氣で泣いてる子を女中にまかせて置きツ放しにしてあるやうなことが度々あるとか聽いてる。友人の川手氏とも電話で相談して見たら、うツちやつて置けと云ふ。で、受持判事磐井氏に當て、兩方の中を取つて向ふが申請を取り下げるやうに賴んでやつた。若し取り下げねば、親族會は向ふの出した父の木村信義、兄の木村騰藏にこちらから千惠と初とを加へ、向ふの出した筑紫昌門氏を省いて、深田憲治氏を加へるやうに書き送ることにした。けふは、また、板橋署の刑事野木村慶五郎と云ふのが訪ねて來た。これは著作家協會の下相談をこの二十日に開いたのを何か氣にした內務省からの命令でださうであつたので、協會の性質を詳しく云つて語つてやつた。

一月廿九日。晴。時事より稿料四圓五十錢。木村（鷹）氏並に木村（卯）氏よりハガキ。

筑紫昌門氏より昨日の詰問に對して左の返事が來た。

朶雲拜誦仕候小生よりこそ御無音致居失禮の段御海容被下度候扨て御問合せの蜜蜂は昨年十月頃なりしと思え候確かに御預り申候事は事實に御座候右は清子氏訴訟其他多用の爲め充分の手當出來ざる爲め小生方へ持ち込まれたるに小生も其後各方面に要用有乍殘念充分の手當をなす能はず殊に養蜂は不得手の爲め遂に全部凍死せしむるに至り候間せめてもの記念と存じ巢全部は保存致居候清子氏の云はるる蜂の凍死云々は事實に御座候小生は自己の最も正義と信ずる處に向つて其措置を採るもの故へ特に貴下のものに故障を付けるやうの事無之候是非一夕御清話拜聽致度御來遊待入候、時下朝霜暮雪の砌り折角御自愛祈上候敬具

これに對して、また僕は左の絶交狀を送つた。

御ハガキ拜見致しました。御返事の通りでは僕とは餘ほど解釋が違ふやうに思はれます。人の財産の一部を主人の承諾もなく、ただ妻の依賴だと云つて引き受け、而もその後にも一言の御挨拶さへないのは正義でも何でもありません。以上が理由の一つです。それからたとへ引き受けることはよかつたとして見ても、なほ不都合と思ふのは僕とは違ひ君に養蜂の失敗があつたことは、さきに僕が君に與へた蜂群の時で分つてるぢやアございませんか。火鉢とか他の死物ならまだしもですが、生き物をさうした引き受けをしたのは、殺した後とは云はず、お引き受けなすつた時に既に思ひ違ひ

がおありでした。以上は僕の非常に不快と思ふところですから、つつまず御知らせして置きます。巣も君から直接に受け取るには及びません、清子に返して置いて下さいまし。以上。

譯、十八片。

一月三十日。晴。昨日書いた手紙を筑紫氏へ送つた。著作家協會發起人會の案内狀並に名簿その他の刷れたのを五十一名に發送す。竹腰並に有島氏よりハガキ。英枝と目黑不動へ行つた途中で北村氏を訪ふ。歸途、大久保に加藤氏を訪ふ(留守)。譯、二十六片。

一月三十一日。晴。木村(鷹)、森田、三井氏よりハガキ。三井氏へ返事。小杉、中澤二氏よりハガキ。淸子より强迫がましきハガキ。川手氏より對浮田の判決書を屆けて來たが、これを見ると、つまり、「性慾上の病人」と云つたところだけを見れば無論名譽キソンだが、あとに「病人の點ではある他の凡人も同樣で」云々とあるのを見ると、僕だけに特別にその語を適用したわけでもないと云ふに在る。この點は辯護士に控訴するだけの意氣込みと理解とがあるかどうかを糺してから、控訴の可否を考へるつもり。加藤氏來訪。譯、十六片。

二月一日。曇。新潟・木村(鷹)・武者小路、內田(貢)、桑木(嚴)氏よりハガキ。火曜日會へ出席。同會で千葉並に田中氏が淸子事件を仲裁すると云ふので、兎に角、二人で淸子にかけ合つて見て貰ふことにした。(離婚の條件さへおとなしければ)。譯、ナシ。

二月二日。晴。千葉氏へ昨夜の件で念の爲めの手紙を出す。若宮氏へハガキ。山本氏へハガキ。杉村、松居二氏よりハガキ。天弦堂よりハガキ。姉崎、小山内、野口三氏よりハガキ。譯、ナシ。川手氏を訪ふ（對浮田の控訴をもすることになつた）。

二月三日。晴。「再び日蓮の研究に就いて、山川智應氏へ」（十四片）。生方氏來訪。土岐、よさ野、長谷川、戸川氏よりハガキ。譯、三十八片。

二月四日。晴。裁判所より淸子が申受けの親族會通知。巖谷氏よりハカキ。岩村氏よりハガキ。横濱の姉より手紙。著作家協會發起人會へ出席。滋子氏、他の一婦人を伴つて來訪。譯、三片。

二月五日。晴。親族會の件に就き、横濱の姉と麻布の妹とに手紙。十日會の通知來たる。

二月六日。雨。横濱の姉より手紙。姉の手紙によると、區裁判所は淸子の申請に對して親族會にかの女の父兄二名の外には僕の姉一人しか加へてないので、不公平な處置だといふことを磐井判事當てにて書き送り、親族會の決議は無効になるやうにして置いた。横濱へも手紙。譯、五十三片。

二月七日。雨。謠曲の先生來たる（これが第二回の稽古）。譯、四十七片。新潮社へハガキ。

二月八日。雨。萬朝の服部氏來訪。米倉來訪。竹腰來訪。山本氏より原稿。譯、五十七片。

二月九日。晴。新潮社より譯料四十圓。三井氏より原稿。廣瀨氏よりハガキ。「すゐせん道化者」（詩）、「日本語のアクセント」（共に新日本主義へ）。

二月十日。晴。十日會に出席。木村、新潮社二ケ所より書信。新潮社の中村氏來訪。木村、深田二氏より原稿。雜誌のへんしうを爲す。

二月十一日。晴。竹腰が家の件に付き、その親屬本山茂一氏と共に賴みに來た。辻氏來訪。へんしうの爲め加藤氏來訪。「新理想主義」の西宮藤朝氏來訪(留守)。山本氏を訪ふ。滋子氏を訪ふ。淡路の淡路大觀刊行會へハガキ。

二月十二日。晴。淡路大觀刊行會へハガキ。三井氏へハガキ。井奈氏よりハガキ。山本氏を訪ふ。譯・ナシ。

二月十三日。晴。山本氏よりハガキ。山本氏へハガキ、某氏よりハガキ。同じく返事。川手氏へ訴訟參考物。生方・中村(孤)二氏來訪。深田氏を訪ふ(留守)。生方氏を訪ふ。

二月十四日。晴。川手、山本二氏へハガキ。山本並に國家學會よりハガキ。小寺氏を訪ふ。譯、五片。ゆふ方、ちよつと雨。

二月十五日。晴。譯、卅一片。

二月十六日。晴。よみうりの加藤氏來訪。馬場氏へ手紙(著作家協會へ入會せぬことにした通知と四圓〇六錢の出費勘定書き)。譯・卅四片。

二月十七日。晴。滋子氏來訪。譯、廿七片。

二月十八日。晴。譯、五十五片。新潮社へハガキ。

二月十九日。晴。山本氏へハガキ。加藤氏へハガキ。生田(長江)氏來訪、僕が著作家協會との關係を絶つことにならないやうに勸告と、さきの馬場氏まで出した退會理由二箇の申しわけとに關する件だ。「淡路大觀」刊行會と云ふの依賴により、そこへ僕の小傳と寫眞とを送つた。譯、四十八片。

二月廿日。晴。新潮社より譯料三十圓。山本氏より五圓(樺太日々稿料)。川手氏を訪ふ。木村(卯)、加藤、深田三氏來訪(いづれも不在中)。

二月廿一日。夕かたより雨。千葉氏を訪ひ、さきに氏と田中氏との意思から出ての仲裁を以つて清子に無事離婚をさせる件の結果を訪ねたところ、清子があたまから人を馬鹿にしたやうなことを云つて激してゐるのでとても駄目だと諦めて二氏は歸つて來たのださうだ。まるで女志士のやうな粗笨な態度に變化してゐるとのこと——但し却つてそれがかの女の本質を暴露して來たのであつて、僕と一緒の時の多少思索的狀態はかの女の僕によつて臨時に得てゐたものであつたらう。田中氏を訪ふ(留守)。三井、廣瀨、加藤、武林、大須賀、森田、深田の諸氏へハガキ。

二月廿二日。地には雪、天は曇。午後晴れた。三井氏よりハガキ。雜誌三月號校正終り。

二月廿三日。雨。加藤氏よりハガキ。同じく返事。川手氏より對淸子の控訴三月十八日を通知して來た。且、對浮田控訴の委任狀を取りに來たので、實印を押して送つた。

二月廿四日。晴。三井、大須賀二氏よりハガキ。「三田の俗聖人」（田中氏の「福澤諭吉」を評す）四十七片を書き終つた（新日本主義四月號の爲め）。

二月廿五日。晴。廣瀨氏、文章世界よりハガキ。文章世界へハガキ。山本氏を訪ふ。若宮氏來訪。木村（卯）氏來訪（留守）。

二月廿六日。曇。龍土會通知。缺席の返事。千葉氏よりハガキ。譯、四十三片。

二月廿七日。晴。新日本主義社の小集を家で開いた。來會者加藤、木村（卯）、廣瀨、大須賀（績）、田中（王堂）、山本の六氏。他に若宮、武林、森田（恒）、深田、千葉（鑛）氏も招待してあつたがさし支へた。竹腰よりハガキ。夜、田中、加藤、山本三氏と共に寄せへ行つた。歸りに生田（長）氏に會ひ、カフエに行つた。

二月廿八日。小雨。三井、中外日報へハガキ。淡路會へ原稿。謠ひの師、森田二氏よりハガキ。米倉書店主人來訪。「出京を望んだ或娘の爲めに」（七枚）、「希望」へ。

二月廿九日。雨。滋子氏並に前島氏よりハガキ。希望社へハガキ。

三月一日。曇。山本氏へ手紙。英枝の父より手紙（淸子が恐喝同樣の件を申し込んで行つたに付き、心配して上京すると云ふ通知だが、そんなことに及ばぬと云つてやつた）。希望社より稿料四圓二十錢。夜、淺草へクオヷヂスの活動を見に行つた。

三月二日。晴。よみうり社より稿料五圓。若宮、井奈二氏へハガキ。火曜日會の通知二十枚を出す。朝鮮の田代氏よりハガキ二枚。同じく返事。深田氏を訪ふ(氏の娘の縁談の事)。譯、二十一片。

三月三日。晴。加藤氏並に米倉へハガキ。川手氏へ手紙。滋子氏を訪ふ。田中(王)氏來訪(留守)。譯、十九片。

三月四日。晴。米倉氏來訪。譯、四十一片。

三月五日。晴、夜雨。田代氏よりハガキ。十日會の通知。譯、五十四片。

三月六日。晴。希望社より手紙。謡ひの稽古。譯、三十五片。米倉へハガキ。

三月七日。晴。米倉來訪。三井氏よりハガキ並に原稿。火曜日會に行く。新潮社より三十圓(譯料)。山本氏を訪ふ。

三月八日。晴。丸善へハガキ。山本氏へハガキ。吉丸一昌氏の死去通知。譯、三十九片。

三月九日。晴。加藤氏來訪。吉丸家へハガキ。大須賀氏よりハガキ。譯、三十六片。

三月十日。曇。伊藤(證信)氏よりハガキ。米倉來訪。十日會へ行く。譯、二十四片。

三月十一日。雪。美術週報社よりハガキ。木村氏より原稿。譯、二十三片。

三月十二日。晴。新潮社より譯料三十圓。寶生會の謡ひを聽きに行つた。加藤氏より原稿。「新日本主義」のへんしう。

三月十三日。雨もよひ。川手氏を訪ふ。
三月十四日。雨。山本氏を訪ふ。
三月十五日。小雪。諷刺詩「蜜蜂の靈よ」を作る。譯、十八片。よみうりの加藤氏來訪。
三月十六日。雨。三井、木村(卯)氏へハガキ。「よみうり」へ昨日の原稿。地方裁判所より清子が提起した家族扶助料請求の裁判事件の通告書來たる。それに付き川手氏へ相談に行く。僕の考へでは清子が何故に民雄を渡さないで扶助料をむさぼるかが第一の疑問だ。そして清子に扶助料を與へなかつたのは、昨年九月十九日に與へた命令を用ゐないのと、他の男子と飮み歩いたりして、而も或男子の僕に白狀したによると、娼婦のやうな誘惑をしたりしたからである。僕はこの頃になつて清子の前身が全く清淨でなかつたことを思ふ。僕がかの女の淸淨を信じたのは全く盲目であつたのだ。吉野氏を訪ふ。
三月十七日。ゆふ方、雪ふり、初雷あり。
三月十八日。晴。譯、三十二片。茅原(華山)氏より手紙。角田浩々氏死去の通知。
三月十九日。晴。米倉來訪。昨日の公判が川手氏旅行の爲めに延びたので、成るべく渠の名を出さないで濟むやうにと賴むのだが、僕の方では引き合ひに出すべき時になれば出すが、さうわざ〳〵出すつもりもない。

竹腰氏來訪、いよ〳〵今月中に三男眞雄を渡すと云ふので、引き受けることにした。その事で英枝がちよつと怒り出し、外出したが、間もなく歸つて來たのでどう云ふ氣になつたのだらうとうツちやつて置いたら、あとで聽くと、どこかの横丁でうんこを踏みつけたので心機一轉したのであつた。これからまた衝突が多くなるのであらうが、當分は淸子に對した如く英枝にも決して合理以上の讓歩はしない。去るものは去れ、但し心からとどまるものは追ひもしない。淸子の如く、調子に乘つて自己の位地と程度とを知らぬものは、向ふから去つて行くのである。僕は僕だ。女の一人や二人を救ふよりも國家を救ふ方が多忙だ、否、國家を救ふ爲めに自分を救つてる方が多忙だ。夜、武林氏を訪ふ。

三月二十日。晴。角田氏の葬式には行けなかつたので、ハガキを出した。譯、二十六片。

また淸子から別な訴訟が出たのを、區裁判所から通告して來た。今度のは別居前の金を立て替へてあるからと云ふ請求だが、それはかの女が勝手に處分した蜜蜂四群(代價百二十圓)、マント(二十四圓)、火鉢(五圓)、銘仙綿入(九圓)、勸業債權(百五十圓)、貯金(二百七八十圓)、その他家具等でまだかの女の請求高の六七倍も渡してあるわけだ。

三月二十一日。晴。藝術座より帝劇の優待券。使ひに薫を深田氏へやつた。雜誌の校正全部スミ。譯、二十一片。

三月二十二日。雨。川手氏を訪ひ、また今回の裁判事件を依賴した。三井氏よりハガキ。譯、十六

片。

三月二十三日。晴。吉野氏來訪。雜誌校正ズミ。譯、二十五片。

三月二十四日。晴。竹腰來訪。譯、四十四片。

三月二十五日。晴。新潮社へハガキ。竹腰よりハガキ。譯、五十七片。

三月二十六日。晴。新潮社より稿料三十圓。吉野氏へ手紙。山本、深田、廣瀨氏へハガキ。藝術座の出演を帝劇へ見に行く。

三月二十七日。晴。山本氏を訪ひ、それから寄せに行く。竹腰の方から三男眞雄が來て、一緒に住むやうになつた。

三月二十八日。晴。三井氏へハガキ。木村(卯)、田中(王)氏へ手紙。英枝と共に石塚氏を訪ふ。この二三日、神經衰弱か一向に仕事が出來ず、明日から旅行と決す。

三月廿九日。晴。英枝と共に森ケ崎に行く。

三月三十日。晴。森ケ崎があまり氣に向かぬので歸京。龍土會より通知。木村(卯)氏よりハガキ。

三月三十一日。曇。大阪の小林氏より手紙並にその作「曾根崎艷話」。尾島菊子氏の紹介で生駒義薰氏來訪(山本氏へ紹介)。譯、一二十四片。

四月一日。雨。竹腰來訪(もう、子供を二人とも引き受けたから、金錢その他の事で僕等を煩はせ

に一切來るなと命令した。）森田、井奈二氏よりハガキ。京都の橋川正氏よりハガキ。木村（卯）氏へハガキ。譯、三十二片。

四月二日。晴。橋川氏へハガキ。京都よりハガキ。譯、四十二片。

四月三日。曇。譯、三十五片。

四月四日。曇。六十二片。新潮社へハガキ。

四月五日。雨。新潮社より譯印税三十圓。山本氏、滋子氏を訪ふ。

四月六日。晴。吉野氏へハガキ。天野（敬）並に十日會よりハガキ。若宮氏へハガキ。譯、十片。

四月七日。晴。川手氏よりハガキ（裁判事件四件の公判日通知。）新人社へ問ひ合せたことの返事、加藤（朝）氏來訪。譯、三十六片。

四月八日。晴。若宮氏よりハガキ。謠ひの稽古。譯、四十二片。

四月九日。晴。十日會の郊外大會に森ケ崎に行つた。

四月十日。强風。中央公論の瀧田氏來訪。中島（德）氏よりハガキ。譯、十七片。昨日から風邪の氣味がけふ熱が非常であつた。木村氏より原稿。

四月十一日。晴。謠ひの師匠來たる。三井、橋川二氏より原稿。廣瀨、馬場二氏へハガキ。譯、三十片。

四月十二日。晴。淡路會より通知。同じく缺席の返事。譯、六十二片。

四月十三日。晴。金もくせいを植木屋から買つて植ゑさせた。加藤、深田二氏から使ひに原稿。木村氏より手紙。廣瀨氏よりハガキ。長谷川より手紙。（著作家協會への立て替金四圓六十錢來る。）新潮社より三十圓。廣瀨氏來訪。次ぎに、木村（卯）氏來訪。

四月十四日。晴。新潮社へ「耽溺」の印税印五百部分押した。「日本膨脹の根本眞理」（二十五片）、新日本主義へ。謠ひの師匠。

四月十五日。雨。「穿き違へた自由」（五片）、「用語に無反省な蘇峰氏と井上博士」（七片）、「今一度山川氏へ」（五片）以上新日本主義へ。新日本主義十月號へんしうを了す。山本氏を訪ふ。

四月十六日。雨。春陽堂の田中氏へハガキ。增野氏追悼會の通知。「發賣禁止に對する三要點」（十二枚半）、中央公論へ。寄せへ行つた。

四月十七日。夜、雨。深田氏へハガキ。辻村農園より庭を作りに來た。中央公論より稿料八圓七十五錢。文章世界へ小說「かの女の遺物」（廿四枚半）を送つた。同時に西村氏へハガキ。

四月十八日。晴。加藤（朝）、岡二氏を訪ふ。

四月十九日。晴。よみうりの加藤氏來訪。原（德太郎）氏來訪。大須賀績氏來訪。博文館より稿料二十圓也。譯・十二片。

四月二十日。晴。西村氏よりハガキ。井上右近と云ふ人より手紙。增野氏追悼會に臨む。吉野氏を訪ふ。それから共に沼波氏を訪ひ、同氏が近頃熱心の術に依つて試みに僕の近眼を直して貰つたが、別に直つた樣子なし。譯・六枚。

四月二十一日。曇。夜雨。近眼は別に直つてゐない。川手氏を訪ふ。滋子氏を訪ふ。

四月二十二日。曇。原田(信)、井上(右)氏へハガキ。川手氏へ淸子に對する訴訟の追加事項を送る――證人として呼び出す淸子の女中の住所と質問の要件。並に、淸子の惡性癖として第一、ふしだらな評判。第二、飮酒。第三、狂人の血統。第四、無反省と傲慢。第五、家庭內の橫暴。第六、過分な贅澤の傾向。第七・子供(薰)虐待。第八、所天侮辱。第九、飮み步き。第十、僞善性。第十一、粗大性、等。

四月二十三日。雨。原、新渡、沼波、加藤四氏へハガキ。加藤氏よりハガキ。新潟より藥及小包。譯・十三片。

四月二十四日。晴。加藤氏を訪ひ、仔犬を一匹貰つて來た。「新日本主義」の初稿を了す。譯、十一片。謠ひの稽古。

四月二十五日。雨。譯、十九片。高橋(久)氏よりハガキ、同じく返事。原田氏よりハガキ。

四月二十六日。曇。校正再校終り。小此木(忠)氏を訪ふ。野上氏を訪ふ。譯、二十三片。

四月二十七日。晴。妹千惠よりハガキ。小此木(信六郎)氏を訪ふ。山本氏を訪ふ。
四月二十八日。晴。山本、川股二氏と共に小金井に行つたが、花は全く散つてなく、葉ざくらであつた。歸途、三河屋で牛肉を喰ふ。前島氏よりハガキ。
四月二十九日。夜、雨。原(德)氏來訪。火曜日會の通知。藤野愛子氏より手紙。廣瀨氏より手紙。譯、二十片。
四月三十日。雨。廣瀨、長谷川、新潮社諸氏へハガキ。滋子氏、長谷川(勝)氏よりハガキ。譯、三十片。
五月一日。曇。長谷川よりハガキ。福迫氏來訪。鐵道時報社の記者來訪。野上氏へ提燈を返しに行つた。譯、四十五片。
五月二日。晴。新潮社より譯印稅前金三十圓。同じく「耽溺」第五版五百部印稅十五圓。山本氏を訪ふ。火曜日會へ行く。長谷川來訪(留守)。
五月三日。晴。帝文會並に世界社へハガキ。「新日本主義」今月號六册を所々へ。「ドクトル小此木氏の談片と攘白堂說」を同氏の爲めに書いた(雜誌の材料)。長谷川(勝)來訪。加藤夫婦來訪。小此木(忠)氏來訪。廣瀨氏よりハガキ。
五月四日。雹ふる。西村(渚)、闘(露香)二氏來訪。羽太、加藤(房藏)、丸善三ケ所よりハガキ。橫

濱の鈴木（全）氏より手紙、その息子結婚の披露に付き出席の返事をした。小此木氏を訪ふ。
五月五日。晴。小此木氏よりハガキ。謠ひの師匠。加藤（朝）・木村（鷹）氏を訪ふ。西村（渚）・中島（德）・鈴木（全）氏へハガキ。
五月六日。晴。中島（德）氏よりハガキ。長谷川來訪。小說の考案。
五月七日。雨かぜ。希望社へハガキ。小說を書き出した。「功利主義を恥づる勿れ」（六片）・新日本主義へ。英枝の母が夜遲く大阪の遊歷から到着した。
五月八日。晴。高橋（縫子）氏よりハガキ。米倉氏來訪。小說のつづき。
五月九日。晴。縫子氏へ返事。小說「藁人形」（八十二片）・文章世界へ。
五月十日。晴。博文館より十二圓八十錢、これは昨日の小說と返って來た「かの女の遺物」との稿料差金。川手氏を訪ふ。白木屋に森田長谷川二氏の展覽會を見る。丸善へ行く。十日會へ行く。木村氏より原稿。吉野氏來訪（留守）。
五月十一日。晴。鈴木へ一圓のカワセ。辻、中村（孤）、宮島三氏來訪。三井氏より原稿。田中氏へハガキ。新潮社中村氏宛「かの女の遺物」を送る。
五月十二日。晴。英枝の母が吉原を見に行きたいと云ふのでつれて行つて見たが、十數年來行かなかつたので、丸で樣子が違つたやうだし、また寂びれ方も甚しいやうに思はれた。

五月十三日。晴。丸善よりハガキ。長谷川來訪。中村(孤)氏來訪。母、新潟に來るので、上野へ見送りに行つた。
五月十四日。晴。丸善へ返事。鈴木よりハガキ。
五月十五日。曇。山本氏、樺太に歸るに就き、上野まで見送つた。
五月十六日。晴。木村(鷹)氏來訪。岡氏を訪ふ。深田氏來訪。
五月十七日。雨。文章世界へ校正。「佐藤信淵の征服的宗教」(六十八片)を書き終つた。
五月十八日。雨。雜誌へんしう濟み、印刷屋へ屆けた。今井歌子氏を訪ふ。
五月十九日。曇。新日本主議社へ手紙。譯、十片。
五月廿日。雨。社へハガキ。歌子氏へ書物。三新聞へハガキ。木村(鷹)氏よりハガキ。譯、四十片。
五月廿一日。雨。原(正氏)來訪。米倉よりハガキ、同じく返事、磯村氏よりハガキ、同じく返事。譯、五十五片。
五月廿二日。曇。米倉よりハガキ。吉野氏來訪。淺草へ活動を。
五月廿三日。晴。社より使ひ。中澤(靜)氏來訪、その書いた小說原稿を僕の材料として買つてくれとのことだから、四十枚分を五圓で買ふことにした。米倉へハガキ。廣瀨氏へハガキ。譯、二十五

片。
五月廿四日。雨。雜誌の初校ずみ。譯、二十四片。
五月廿五日。大風、後晴。新潮社へハガキ。大月氏よりハガキ。滋子氏來訪。譯、五十二片。
五月廿六日。晴。大月氏へハガキ。新潮社より譯印税のうち三十圓。山本宅を訪ふ。中村(武)氏を訪ふ。關氏來訪(留守)。「デビス博士の迂愚」(十四片)。
五月廿七日。晴。中外日報へ原稿。中澤(靜)氏へ五圓。大掃除。
五月廿八日。晴。秦氏より招待券。大月氏よりハガキ。關氏を訪ふ。高橋(五)氏を訪ふ(轉居してゐなかつた。)中村(春)氏を訪ふ。佐藤、深田二氏を訪ふ。瀧田氏へハガキ。
五月廿九日。晴。上司氏へ中澤氏の原稿。大月氏來訪。原氏來訪。生方氏を訪ふ。
五月卅日。晴。三井、木村二氏へハガキ。「表象の意義」(山川氏に對する駁論)、十一片。野上氏を訪ふ。
五日卅一日。雨。田中(王)氏より轉居通知。湯淺(警保局長)氏より手紙。譯、十一片。
六月一日。晴。木村(卯)氏よりハガキ。中譯(靜)、原、廣瀨、井奈、木村(卯)の五氏、順次に來訪。譯、十六片。
六月二日。晴。火曜日會の通知。藝術くらぶへ「三角畑」の演出具合を見に行つた。小此木(信)氏を

訪ふ。中村(孤)氏來訪。譯、三片。

六月三日。晴。川手氏より手紙(訴訟の件)。木村(卯)氏より手紙。新潮社の佐藤氏へハガキ。社へハガキ。譯、二十四片。

六月四日。晴。中村(春)氏へハガキ(「三角畑」中の一ケ所訂正の件。)中澤(靜)氏よりハガキ。橫濱の姉來訪。譯、五十片。

六月五日。晴。加藤氏來訪。大月氏より手紙。裁判所へ行つたが、扶養料件は向ふの呼び出した證人が出席しいなので延期となつた。譯、三十二片。

六月六日。晴。新潮社より譯印稅のうち三十圓。山本氏を訪ふ。火曜日會へ行く。伊藤(證)氏よりハガキ。

六月七日。晴。三井、伊藤二氏へハガキ。野口氏へハガキ。千葉氏へ手紙。齋藤(茂)氏よりハガキ深田を訪ふ(留守)。「柱の穴に關する川村氏の發見」並に「身づから卑賤と云ふか」(五片)時事の柴田氏へハガキ。

六月八日。晴。橋川氏より原稿。十日會通知。布川氏夫婦來訪。譯。

六月九日。曇。加藤(よみうりの)、井奈、生方三氏來訪。山本、柴田二氏よりハガキ。千葉氏より手紙。譯、六片。

六月十日。晴。米國フレスノの小此木(文九郎)氏へ手紙並に雜誌一部。中譯(靜)氏よりハガキ、並に原稿。野口(米)氏より手紙。山本氏を北里養生園に見舞ふ。十日會へ行く。

六月十一日。晴。つかれをおぼえて一日ぐづ〳〵過ごした。氷室延と云ふ人が栃木縣芳賀郡清原村から夜、尋ねて來て、十二時頃まで話し込んだ。「新日本主義」の支部を同村に設けるよし。

六月十二日。晴。木村氏より原稿。宇野氏より手紙。五新聞社へ新日本主義新定の規則通知。山本氏へ手紙。「タゴル氏に直言す」(十六片)よみうりへ。原稿をよみうりへ。

六月十三日。晴。原氏來訪。三井氏より原稿。伊藤氏よりハガキ。報知社の安信所へ女中の依賴。譯、二十四片。

六月十四日。小雨あり。原氏來訪、近處の借家に入ることに定めしめた。山本氏よりハガキ。譯、十四片。

六月十五日。小雨あり。夜、風。伊藤氏へハガキ。中澤氏より手紙と原稿。遠州笠井町の松下春洋と云ふ人より手紙(雜誌を一部送つた。)譯、三十片。

六月十六日。雨、風。山本氏を訪ふ。

六月十七日。晴。風。新潮社よりハガキ並に手紙。池田氏を訪ふ(留守)。よみうりに立ち寄り、稿料四圓を受取つた。「タゴル氏とその周圍」(九片)。

六月十八日。雨。茄子を十五本植ゑつけた。廣瀨氏よりハガキ。前島、中澤(靜)二氏へハガキ。新潮へ原稿。譯、二十三片。

六月十九日。晴。前島氏よりハガキ並に廣告文。山本氏より小包。高嶺堂へ原稿を持つて行く。川俣氏を訪ひ、共に山本氏を訪ふ。岡野氏を訪ふ。この頃少し仕事が出來ぬので英枝が今夜これまでになき小言を決心あるらしく云つた。たまの貧乏に堪へぬやうなら、どうせまた僕の妻たる資格なし。

六月二十日。小雨。高嶺堂へ追加の原稿を送る。淸子へ僕以前にも處女でなかつた外的證據と別居後の不身持ちとをこちらで知つてることを通告した。新日本主義發行所變更屆を內務大臣並に東部遞信局へ出す。東部へのは書式が違ふので返つて來た。今夜原氏を訪ひ、昔のことになつた時、渠の學生時代からのシャボンえらびがとう〳〵スミス石鹼屋になつて、失敗も亦シャボンの爲めであつたと云ふと、渠はまた僕のことを「君の新日本も久しいことだぞ」と云つた。成るほど、僕は大阪の學校に於いて新日本のあだ名があつた。原氏とは三十年來の友人で、僕が鄕里を出てからの初めての友人だ。譯、二十九片。

六月二十一日。曇。譯、二十六片。原氏來訪。

六月二十二日。晴。中村(孤)氏來訪。原氏夫婦と淺草へ「カピリア」を見に行く。川手氏より手紙。譯、七片。

六月二十三日。晴。山本氏よりハガキ。デビス博士より手紙。

六月二十四日。曇。デビス博士へハガキ。四新聞社へ七月號目次。帝國典範會社より手紙。小坂田某氏よりハガキ。原氏の依頼で公證人役場へ行く。川手氏を訪ふ。滋子氏を訪ふ。浮田氏に對する控訴は破キされた。

六月二十五日。雨。原氏を訪ふ。新潮社へハガキ。川手氏へ證據用の東京日々とハガキ。譯、十五片。

六月廿六日。雨。地方裁判所へ出頭、仲裁をしたいから來いとのことであつたのだが、清子の方が出席しなかつた。僕の方も仲裁は到底成り立つまいと云ふ意志を示めして歸つた。次回は來月七日(但し清子からの扶養料要求の件)。今日、妹千惠が來ての話にまた清子離婚に對する證據の一つが擧つた。雜誌初校ずみ。譯、七片。

六月廿七日。雨。新潮社より譯印稅のうち三十圓。神崎氏より手紙。中村(武)氏よりハガキ。今日、「闇の盃盤」の僞版が日吉堂本店と云ふところから本年二月に出てゐるのを發見した。かけ合ふつもりだ。原氏を訪ふ。

六月廿八日。雨。神崎氏へ手紙。新潮社へ手紙。田中(王)氏よりハガキ。雜誌本文再校ずみ。下痢でやすむ。

六月廿九日。曇。萬歲社へ雜誌廣告。火曜日會通知。山本氏より手紙。「カピリア」の續篇を原氏と見に行つたついでに、僞版家の日吉堂を訪ひ、昨日午後六時までに挨拶をしろと云つて置いた。千惠が來て、淸子の材料を探索して來た。雜誌發行所並に見本差出局變更屆の二通をすませた。

六月三十日。晴。武林、中村(孤)二氏朝からつれ立つて來訪、ゆふ方まで。原氏來訪。また別な原(正)氏來訪。譯、十三片。

七月一日。雨。川手、山本二氏へ手紙。中澤氏發送の手傳ひに來た。十四五年前に滋賀縣で敎へた學生の井尻新之助が九年米國にゐて歸朝、新日本主義の仲間になつて幹事として奔走することになつた。支部設置依賴のハガキを次ぎの人々に出す、盛岡の大信田、日向の日高、橫濱の鈴木、長野の中村、大阪府の荒木、淺草の藤野、淡路の鈴木、中津の林、大津の堀井、北海道の田口、京都の井上。木村、三井二氏へハガキ。前島氏を訪ふ。山本氏を訪ふ。

七月二日。晴。新潮社の佐藤氏より手紙。井尻氏よりハガキ。「國法と生活」(十四枚)、中外日報へ、渡邊素海氏への答へ。

七月三日。晴。木村(卯)氏よりハガキ。本日原氏と共に府中に行き、中屋と云ふ宿屋を探偵して見た。淸子がここに三日若しくは四日とまつたと云ふことを聽いたからで、先月八、九、十日の三晚をとまり、十一日に出發してゐる。その用向きは別に問題にならぬが、十日の晝ちよツと尋ねて行つた

男があると云ふその人相は全く田中王堂氏らしい。それから淸子の歸京は實際に於いては十二日であつたとまで分つてるので、十一日の晩をどこでとまつたかが疑問だと云ふところまで漕ぎつけて歸つた。

七月四日。雨。田代氏へハガキ。松下、池田(芳)、西本氏よりハガキ。火曜日會に出席、田中王堂氏を別室へ呼んで誓言を破つて昨日發見のやうな行爲があるのをなじり、私交斷絕を宣言して置いた(但し公けの席で會ふのは別とした)。

七月五日。雨。教育實驗界から教育界に對する質問が來たので、左の如く答へた、——

今日の教育に最も疎んじられてゐるのは本能とその結果とである。俗に天才と云つたり、靈感と云つたりするものは、すべて本能を適當に理智の制限から解放した狀態である。これが今の教育に忘れられてゐる。

文章世界の西村氏から原稿依賴、昨今多忙なので斷わつた。

本日、原氏が田中(王)氏の宿(喜樂園と云ふ、三河島の貸席)へ行つて探偵して來たによると、先月十一日の夜は歸宅してゐず、十二日もおそくなつて歸つたのださうだ。かうなると、淸子の行爲と段段接近して來た。明日は、その十一日の晩の密會所と思はれるところを探偵するつもり。萬朝報社の野上氏を訪ひ、同社が聽き込んでる密會所の寺とはどこの方面だと聽くと、「日暮里の」とだけ分つて

る。僕等のあてのところと大體は一致してゐる。譯、十八片。タゴル氏へ「直言」掲載の雜誌。

七月六日。曇。一元社よりハガキ、同じく返事。井上(右)氏よりハガキ。文章世界の西村氏より原稿依賴のハガキ、同じく斷りの返事。譯、四十五片。十日會より通知。この會通知に正宗氏歡迎の意を書き入れてないので、別によみうりと時事とへその意を書き添へて貰ふ知らせを出した。

七月七日。曇。闘氏よりハガキ。氷室氏より手紙、同じく返事。けふ、原氏に伴はれて淸子の行爲偵察の爲め熊野前のラヂウム溫泉淸遊館と碩(原本缺字)寺とに行つて見たが、効果は擧らなかつた。但し前者の方は主人並に女中がすべて昨今改まつたので、以前の主人に聽いて返事させることにして來た。日吉堂主人が石川誠三氏を伴つて來訪、僞版の妥協を申し込んで來たが、旣に辯護士に訴訟依賴をしたので、その方へ相談すると云つて歸した。紙型は「闇の盃盤」の外に「新自然主義」のをも買つてあるとのこと。

七月八日。晴。川手氏へハガキ。タゴル氏へ雜誌。中村(武)氏より手紙並に小說の返稿。闘氏より書物。中澤(靜)氏來訪。正宗得三郎氏歸朝に付き、十日會歡迎會の通知ハガキ。高嶺堂へハガキ。前島氏より手紙。四圓五十錢、新潮の原稿料。譯、二十二片。今夜、淸子の宅へ午後十時頃に田中と云ふ人が來たと云ふの內通があつたので、張り番をさせるつもりで妹の宅へ行つて見たが、偵察によると、淸子が午後十一時過ぎに筑紫の書生と歸つて來た。藝術くらぶの芝居を見に行つたのだ。田中は

一度あがつて待つつもりであつたが、芝居ときいて歸つて行つたのだ。明日來ると云ひ置いたさうだ。

七月九日。曇。本日、原氏が淸子の女中が病氣で引きさがつてる叔父の家と云ふのを尋ねたが、どうしても分らなかつた。前島氏へ手紙。川俣氏へ手紙。譯、三十七片。（千系の報告。淸子はこの夜十二時頃筑紫から醉つて歸つた、田中氏が門まで來て、ではまた明日來ますと云つて別れた）。

七月十日。大雨。井川氏よりハガキ。中央公論の瀧田氏より小說依賴、同じく返事。川手氏を訪ひ、偵察材料を報告す。十日會に行く。（千系の報告、淸子はこのまた府中へ行つた、田中と一緒らしい）。

七月十一日。晴。神崎氏よりハガキ。同じく返事（鑛山は自家經營などの野心を起さず、賣つてしまつた方がいいとの忠告）。井川氏より手紙。譯、三十片。

七月十二日。雨。新潮社の佐藤氏へハガキ。澤（來太郎）氏より手紙、同じく返事。木村（卯）氏より原稿。上田（敏）氏の死去の通知。山本氏よりハガキ。譯、三十七片。

七月十三日。雨。新潮社より譯印稅のうち、三十圓也。山本氏を訪ふ。井尻氏より手紙、同じく返事。上田敏氏の訃報。谷中へ上田氏の葬式に列しに行く。

七月十四日。小雨。上田家よりハガキ。小說を書き初めた。

七月十五日。晴。正宗、廣瀨氏より原稿。廣瀨氏よりハガキ。加藤（朝）氏よりハガキ。雜誌へんし

うずみ。原氏來訪。

七月十六日。十七日。日東堂よりハガキ。小說「その一日」(五十枚)を終る。

七月十八日。晴。山本氏より手紙。米倉より手紙。同じく返事。中央公論社より六十圓。吉野氏を訪ふ。譯、十一片。

七月十九日。晴。池田氏をチウインガム社に訪ふ(留守)。藝術くらぶに「三角畑」試演の準備を見に行つた。正宗(得)氏を訪ふ。氏よりセザンの版畫を一つ貰ふ。山本氏を訪ふ。途中で平塚明子氏に逢つた。米倉より手紙。譯。四十片。

七月廿日。晴。米倉へ返事。原氏を伴つて「三角畑」を見に行く。

殆ど三ケ年の飜譯、やツと完結した。總計九千四百八十七片、乃ち、四千七百四十四枚である。あとは索引と挿し畫とだ。これに印税のうちとしてこれまでに取つた金を通算すると、一千四百六十三圓二十錢也。

一月廿一日。晴。山本氏を訪ふ。新潮社の佐藤氏に面會し、飜書の始末に付き詳しいことを相談した。前島氏を訪ふ。米倉より手紙。

七月廿二日。晴。丸善へハガキ。新潮社の佐藤氏へハガキ、羅馬衰滅史飜譯の件。萬歲社より手紙。中央公論の小說校正ズミ。鈴木(三)氏畑君死亡の通知。廣瀨、蒲原(有)、野口三氏を訪ふ。

七月廿三日。闞氏よりハガキ。

七月廿四日。雜誌再校ずみ。印刷屋主人來訪。夜、三重吉夫人の葬儀に列し、歸りに野上生田二氏と共に日比谷の松本でビールを飮む。

七月廿五日。晴。

七月廿六日。野上氏を訪ふ。

七月廿七日。廿八日。「鄕土と日本」なる雜誌を送つて來て、何か言葉を求められたので、左の如きことを通知した、——

鄕土と日本と云ふことは、結局、一つである。僕等に對して日本は抽象的な物ではなく、僕等が人生を經營する具體力である。僕等は人生の實際經營を國內の一地方に於いて、乃ち、一鄕土に於いてするが、其鄕土人なる僕等は間接若しくは部分的な日本人ではなく、直接に全部的日本人である。斯う云ふ氣分なり哲理なりになれてこそ、僕等の日本主義は具體化せられ、又統一されるのだ。

日記の一節

泡鳴

殆ど三ケ年を費やして、やツとプルタルク英雄傳の飜譯五千枚が出來上つたけふこの頃、三四日來何だか氣拔けがしたやうになつて、每日朝湯をすまして食事を終はると、椽がはの椅子にもたれて庭

ばかりを眺めてゐる。

けふも雨で――土用芽をふいてる檜葉、ちやぼ檜葉、山吹、えにしだなどが、下なる黑ずんだ葉や枝から段々と上の方に色の層を成し、濃い綠、あさ綠のうへが黃色にぼけてるのが、闇に光りを添へたやうだ。

すいてふ花と云ふ名で買つて來たやさしい一本の草花が、今澤山のひげのやうなぢくのさきにさや豆のやうな實を結び殘しつつ、上へ上へと延びて唐人まげのやうな花を開らいて行く。その根もとにある五六本の低い桔梗の花は凡て淡紫だと思つてゐたら、けさから一つの白いのをも咲き初めた。七草の寄せ植ゑの萩には、もう、つぼみが見える。ここにも桔梗が咲いてゐて、うす紫の下向き勝ちは寂しい感じのするものだが、その上には二もとのをみなへしが黃いろい花をぱツと天に向けてゐる。

かかる狹い世界の中央なる圓い花壇の眞ン中には、今を盛りと青葉のカンナが眞ツ赤な花を吐いてぼんやりしてゐる主人の目をさましてくれる。然し渠には一つ物足りないのは蜜蜂がないことである。この五月頃には、どこかに飼はれてる蜂が澤山やつて來て山吹やえにしだの花の蜜を取つてたので、あさゆふにそれを見て氣がすんでたが、今は花の少くなつて來た時節で、蜜蜂も飛んで來ない。春以來、一群を新たに買ひ求めようとしてゐたのだが、そこまで手が屆かない。去年別居したあの妻が僕

の數年來丹精して來た蜂の四群を殆ど故意的に無くしたのが如何にも殘念でたまらぬ。

今の家婦が西本願寺の連枝同格なる別格寺の娘であるのを聽き知つて、僕の一友人で大谷光瑞氏のもとにゐた者が二樂莊に育つた朝顏の種を數種類呉れた。それがこの頃每朝のやうに二三輪づつ咲く育て方や芽のつみ方が惡かつた爲めか、最初に咲いた光輝ある紅の一輪が徑四寸あつただけで、その他のはすべてそれ程に達するのがない。

雨のゆふ方を僕はふる帽を被つただけで庭へ出た。そして庭と玄關道とを仕切る竹垣に纒はせてある金蓮花の延びたのを、ぶら付せない爲めに竹にまとひ付けた。そのついでに、四坪ばかりの畑をおほつてる胡瓜の棚をのぞいて見ると、また新たに一尺ばかりのが四つ五つ出來てゐた。僕はその一つを切つて來て鹽をつけて喰つた。こんな小い畑でも、成り出すとそれからそれと出來るもので、近處の友人などは每日のやうに一つや二つ細君をして取りによこす。すべて僕が自分で畑をして、自分でこやしを與へたものだ。

成り物の成るのを待つ面白さにおとなも小供も變はりないやうだ。今年十四になつた子は、一昨年の暮から僕と初めて一緒に住むやうになつたのだが、去年の春はさきの家の庭ぢうに出た――そして僕が樂しみにしてゐた――紫しづかの芽生えをすツかり雜草と共にむしり取つてしまつたものだが、もう、この頃では、僕の手つだひをして、朝顏の芽のつみ方も分つたし、畑へのこやしもやれる。ま

た、今年十一の子は、去年の春初めて僕のところへ遊びに來て、僕の畑をやつてるのを見おぼへ市中へ歸ると直ぐ、八百屋から奇麗に洗つた大根を一つ買つて來て、庭さきへ植えたが、白いところを天邊に向けて、葉の方を土に埋めたさうだ。が、本年から僕の家で小學校へ通ひながら、歸宅するといつも、今一名下の子と共に畑の周圍をめぐつて枝豆の數を數へて見たり、唐もろこしの實を仰いで見たりして、いつ喰べられるだらうと語り合つてる。唐もろこしは家の板壁うらに添つて家の周圍に種を播いたので、總計百五六十本はあるが、そのうちよく實を結んだのは五六十本だ。その花のさきは板壁を二三尺もうへへ出てゐる。僕は胡瓜を喰つたあとで、また雨にぬれながら、試みに唐もろこしを三つだけ取つて見たら、すべて十分に粒が揃つた上出來で、歯の拔けたやうなところはない。

然し下の子はゆふべから熱があつて、オキシヘラをかけてやつてるがまだもどす氣が去らないので、その最も樂しみにしてゐる唐もろこしだが、これは與へられぬ。（七月二十八日）

（茲へ新日本主義第一卷第九號に掲載される日記の一節が入る）さして右の雜誌切拔が這入つて居る。（編者）

七月廿九日。大風雨。竹腰來訪。風雨に付一泊。「日本人とユダヤ人」（撰民の觀念に付て）十七片。

七月三十日。晴。竹腰は今回阿波に行くに付き、死に場所を岩野家の墓地なる故長女の墓に定めて置いてくれろと賴んで歸つた。せん別に多少の金錢をやる約束をした。英枝と共に加藤氏を訪ふ。僕はまた木村（鷹）氏を訪問した。

七月三十一日。晴。野上氏來訪、共に丸善に行く。新潮社主よりハガキ。高嶺堂より手紙。氷室氏より手紙。新潮社、中村(武)氏、山本氏、前島氏を訪ふ。プルタルク挿畫の整理をすませた。

八月一日。晴。中澤氏來訪。千ゑの家族四名來たる。廣瀨氏來訪。吉野氏並に木村(秀雄)氏來訪。

八月二日。晴。春陽堂、西村、新日本、早稻田文學社等へハガキ(小說を書くかけ合ひ)。野上川氏へハガキ。井尻氏より手紙。

八月三日。晴。井尻氏へハガキ。田中氏へハガキ。氷室氏よりハガキ。原氏來訪。夜、若宮氏を訪ひ、西洋古典飜譯事業會の組織を相談す。

八月四日。ちよツと雨。朝早く、千ゑから使ひあり、田中氏が淸子のところへ昨夜九時頃に來て、十一時過ぎまでゐてもまだ歸らなかつたので、車屋を賴んで外に番させてあつたが、氏が歸つたか歸らないか分らないが、今玄關に男のはき物があるから通知するとあつた。で、長谷川へ行つて見たが、その時は、もう、そのはき物もなかつたとのことであつた。

中村(孤)氏來訪(碁、六番に三番づつ)。原氏來訪。「不振か持久か」(十五片)、新潮へ。

八月五日。ちよツと雨、あと晴。早稻田文學より小說三十枚以下依賴。淡路の鈴木氏よりハガキ。佐藤(稠)氏を訪ふ。中譯氏來訪、一圓を貸す。

八月六日。晴。淡路大觀發行所並に鈴木(勇)氏へハガキ並に雜誌數十部。原氏來訪。深田氏二度來

訪。佐藤(義)氏より手紙(『羅馬衰亡史』飜譯の件はプルタルクの景氣を見てからのこと、また本年中每月六十圓づつ前金を渡すことは御免を被むりたしとのことを中學會の返事として通知)。竹腰よりハガキ(阿波行きは見合はせの由)。田中氏へ催促した書物が返送されて來た。生田(長)、德田(秋聲)二氏を訪ふ。生田氏へは希臘羅馬古典飜譯會に名を出す承諾を得に行つたのだ。

八月七日。晴。米倉よりハガキ、同じく返事。生方氏を訪ふ。小說を書き初めた。

八月八日。夜、雨。池田(藤)氏へ手紙。米倉よりハガキ。大月氏よりハガキ。小說をつづける。

八月九日、十日。岡氏よりハガキ。山形の堀新と云ふ人からハガキ、同じく返事。『二頭の馬』(三十一枚分)、早稻田文學へ。中村(星)氏へハガキ。

八月十一日。雨。池田氏より手紙。淡路の石上欽二氏よりハガキ。

八月十二日。曇。石上氏へハガキ。佐藤(稠)氏よりハガキ。池田氏を訪ふ(雜誌の廣告を取りに)。

八月十三日。曇。雜誌のへんしう、三井氏よりハガキ。滋子氏來訪。

『警戒すべき世界主義』(二十六片)、新日本主義へ。『兎の憤激』(諷刺詩)。

八月十四日。晴。千葉氏よりハガキ。

八月十五日。晴。長谷川へハガキ。京都の伊藤氏へハガキ。千葉氏へハガキ。滋子氏よりハガキ。

諸新聞へ雜誌九月號の目次通知。原子氏を訪ふ(『日蓮』出版の相談をして見た)。

八月十六日。晴。日吉堂より「闇の盃盤」並に「新自然主義」の紙型を届けて來た（これで僞版の問題は方づいた）。世界名著飜譯會の趣意書を起草した、明日若宮氏に見せに行くつもり。

八月十七日。晴。新潮社主へ手紙。滋子氏よりハガキ。中澤、加藤（朝）、加藤（謙）三氏來訪。若宮並に北村二氏を訪問。

八月十八日。晴。山本、中澤二氏よりハガキ。北村氏へコミクオペラ原稿とハガキ。氷室氏來訪。原（正）氏來訪。女の世界記者來訪（ことわつた）。

八月十九日。雨。

八月廿日。晴。雜誌の初校ずみ。山本氏を見舞ひに行く。木村（卯）氏へハガキ。

八月廿一日。晴。高嶺堂の主人來訪。日本蓄音器會社の社員來訪。中外日報より參圓。野上氏を訪ふ（留守）。木村（卯）氏よりハガキ。川手氏より手紙（浮田氏に對する控訴棄却の寫し文）。

八月廿二日。雨。中村（星）氏より手紙。時事の柴田氏より手紙。雜誌再校ズミ。

八月廿三日。雨。東亞堂へ手紙（「日蓮」出版のかけ合ひ）。畑の胡瓜を切取るに付き、根から水を取つたら、化粧水がビール瓶に五本分出來た。井尻（新）氏より手紙（家の難局を發見した爲め、新日本主義運動に當分はたづさはれぬさうだ）。原氏來訪、四五時間花を引いた。

八月廿四日。晴。井尻氏へ返事。日蓄より稿料五圓。野上氏を訪ふ。

八月廿五日。晴。博文館、チウインガム、新潮社、オキシヘラ、山本氏、天弦堂、東亞堂を訪ふ。
八月廿六日。ちよツと雨。關氏を訪ひ、飜譯會に寄附しそうなあてある人一名の勸誘を賴んだ。川手氏を訪ふ。野上氏よりハガキ。新潮社の佐藤氏より手紙。
八月廿七日。晴。佐藤氏へ手紙（關氏の書物紹介）。川手氏へ手紙。高嶺堂へ手紙（印刷代をもつと安くするところがあると掛け合）。中澤氏來訪。
八月廿八日。晴。大月　岡氏よりハガキ。新潟縣の小暮と云ふ人よりハガキ。東亞堂並に天弦堂を訪ふ（共に主人留守）。今井（歌子）氏を訪ふ。畑をやり直していろ〳〵の菜や大根をまいた。
八月廿九日。神經衰弱のやうで何もせず。
八月卅日。雨あり。正宗氏よりハガキ。植竹氏より手紙。北村（季）、奧山（寛平）、若宮氏へ書信。
八月三十一日。晴。本富士町石川文榮堂へハガキ（「ボンチ」紙型買ひ受けの件。）吉江氏、木村（鷹）氏よりハガキ。新潮の佐藤氏より手紙。池田氏を訪ふ。生田氏を訪ふ。若宮氏來訪、同氏と共に布川氏を訪ふ。新潮より稿料四圓。
九月一日。晴。馬場、吉江二氏へハガキ。關氏へ手紙。川手氏へ手紙。火曜日會の通知。
九月二日。晴。加藤（朝）氏を訪ふ。
九月三日。晴。馬場氏より手紙。蕃我堂よりハガキ。福迫氏よりハガキ。印刷屋へ行つたついでに

川俣氏を訪ふ。
九月四日。晴。氷室、大野二氏へハガキ。中村(一)氏へ手紙。川俣氏へハガキ。滋子氏よりハガキ。巖よりハガキ。吉江氏送別會の通知。中村(孤)氏來訪(留守)。
九月五日。晴。佐藤(義)氏よりハガキ。小寺(菊)氏よりハガキ。火曜日會へ出席。
九月六日。晴。川俣氏よりハガキ。文藝雜誌より文學愛好の青年に對する坐右銘を徴して來たので、「經驗もなく、自分でよく考へて見たこともない言葉を吐くな」と答へて置いた。中澤氏、原氏來訪。犬の一方(エス)を捨てに山の手電車で上野に行つた、到底育つ見込みがないからである。
九月七日。晴。十日會より通知。よみうりの加藤(謙)氏來訪。原氏を訪ふ。早稻田文學より原稿料十八圓。
九月八日。晴。「國家主義並に個人主義の獨斷的區別の撤廢」(三十枚)を日本評論の爲めに書いた。
九月九日。晴。日本評論社より稿料十五圓。散文詩「生活の寂しみ」。雜誌新日本主義を「日本主義」と改題の辭(七片)。
九月十日。晴、風。木村(卯)氏へハガキ。十日會へ行き。天弦堂より手紙。木村(卯)氏より返事ハガキ。
九月十一日。風。高嶺堂並に天弦堂へハガキ。三井氏へ手紙。中澤氏よりハガキ。澤(來太郎)氏よ

り刷り物。木村(卯)氏より手紙。

九月十二日。曇。田代(順一)氏來訪。高嶺堂主人來訪。山本氏を訪ふ。氷室、並に橋川氏よりハガキ。

九月十三日。雨。小此木(忠)、橋川、氷室、川俣氏へハガキ。東部遞信局へ手紙。一元社よりハガキ。加藤氏より原稿。川俣氏よりハガキ。三井氏よりハガキ二、原稿二。川手氏來訪、いよ〳〵「日本主義」の協同主幹にすることになつた。

九月十四日。雨。川手氏並に一元社へハガキ。內務大臣宛雜誌題號變更屆。東部遞信局宛同じく屆け。振替口座加入の手續きを了す。原氏と共に伊藤(義人)氏を訪ふ。原子氏へ手紙。

九月十五日。晴。川手氏よりハガキ。雜誌のへんしうをすませて、高嶺堂へ持つて行つた。川俣氏より論文作法の稿料二十五圓。氷室氏へハガキ。原子氏來訪、夜また同氏を訪ふ。

九月十六日。雨。山本氏へ手紙。控訴院へ行く、(示談の樣子もあつたが、とてもお話にならなかつた)。鼻かぜの爲め、夜は早く就褥。

九月十七日。中村(孤)氏來訪、病氣の無聊の爲め碁を三十八九番うち、それから花を三年やつた。

九月十八日。十九日、廿日。雨。生方氏を訪ふ。

九月廿一日。晴。ミス、エルシーワイルと云ふ人より手紙、同じく返事。氷室氏よりハガキ。中澤氏

來訪。
九月廿二日。雨。石上氏より、並に大野氏より書信(共に支部設置の件)。天弦堂より手紙。
九月廿三日。雨。やツと「枕とハンケチ」(三十枚分)脫稿。京都から滋子のハガキ。
九月廿四日。雨。新潮社へ原稿。一元社に茂氏を訪ふ、日本評論に各號評論の評論を二十枚づつ書くことになつた。それから同社の小說依賴の相談にあづかることになつた。吉野氏を訪ふ。岡(落葉)氏來訪(留守)。米倉より手紙。
九月廿五日。晴。米倉へ返事。石上氏へ手紙(支部の件)。瀧田氏へ手紙(借金の件)。大月、氷室二氏へハガキ。木村(卯)・高嶺堂・闕三氏よりハガキ。別な小說を書き初めた。
九月廿六日。晴。木村(卯)氏へハガキ。茅原(茂)氏へハガキ。川俣氏へ返本。雜誌初校ずみ。原氏來訪。
九月廿七日。中澤(靜)氏へハガキ。
九月廿八、九、三十日。
十月一日。晴。前島、山本、生方三氏を訪ふ。大月、小寺菊子、正宗(得)、深田、原子の五氏別々に來訪。
十月二日。雨。川手、瀧田、高嶺、氷室氏へハガキ。高嶺堂より手紙。山本氏より返事、同じく返

事（以後雜誌への廣告料が出せぬと云ふことになつた）。中村（武）氏より原稿を返して來た、危險だと云ふので。

十月三日。雨。瀧田氏より借金斷りの手紙。火曜日會に出席。

十月四日。晴。正木（照藏）氏へ手紙並に雜誌。（郵船會社の外國通ひ諸船に「日本主義」を備へさせる交渉）。川手氏へハガキ。萬歳社へハガキ。關氏を見舞ふ。若宮氏を訪ひ、ここ半年ばかりの生活を飜譯か著述を條件に補助してくれるものがないか一考して貰ふことにした。ついでに、北村氏を訪ふ。

十月五日。晴。大住（嘯）氏よりハガキ。大月氏より手紙。日本評論の爲めの「評論の評論」（四十片）「個人の國家的生活」（平塚氏への答へ）、二十三片、文章世界へ。

十月六日。雨。井奈氏よりハガキ。一元社へ原稿を持つて行く。を書き終つた。

十月七日。晴。十日會の通知。野上氏來訪。野上氏を訪ふ。

十月八日。晴。中村（孤）氏來訪。中澤氏來訪、その小說を一元社へ紹介。野上氏の家に行き、碧梧桐並に鼠骨の二氏と共に謠ひを歌ふ（二氏に會ふのは初めだ）。

十月九日。雨。木村（卯）氏よりハガキ並に原稿。

十月十日。雨。敬文館主人に手紙。田中（正平）氏より手紙。藤村氏歡迎會の通知。博文館より稿料

八圓。十日會へ行く。山本氏を訪ふ。
十月十一日。晴。茅原(茂)氏へ原稿。大月氏よりハガキ。和泉流後援會より招待狀。
十月十二日。雨。木村(卯)氏へハガキ。川手氏へハガキ。また同氏へ手紙。原氏、岡田(勝)氏來訪。大杉氏、野枝氏と共に來訪。雜誌へんしう。
十月十三日。雨。敬文館、木村(卯)、廣瀨氏よりハガキ。橋川氏より原稿。三井氏へ手紙。博運社へハガキ。一元社へ廣告料。雜誌原稿を印刷所(本號より無我山房)へ渡す。川手氏よりハガキ、協同の主幹の件を斷つて來たが、それも多少は豫期しないではなかつたので、十月號にはさう揭げながらも僕は危ぶんでゐたのであつた。
十月十四日。晴。小此木(信)氏へ手紙(雜誌の件)。各新聞社へ目次通知。三井氏より原稿。中澤氏よりハガキ。和泉流後援會の能狂言へ行つた歸りに、德田秋聲氏並に生田葵氏と共に神田をぶらつき、また川竹亭の落語へ這入つた。それからまた本鄕まで步み、生田長江氏を訪ふ。
十月十五日。雨。宇野氏より手紙(見本の件)。原子氏よりよびに來たので、碁を打ちに行つて來た。
十月十六日。晴。川手氏へ手紙。
十月十七日。晴。川手氏よりハガキ。大月氏よりハガキ。中澤氏來訪(早稻田文學へ紹介)。原氏を訪ふ。齒醫者へ行く五回目。

十月十八日。晴。川俣氏を訪ふ。加藤(朝)氏、他の一友をつれて來訪。大月氏來訪。
十月十九日。新潟から英枝の父來たる。
十月廿日。雨。
十月廿一日。父、二泊し、今夜出發。伊藤(義人)氏來訪。原(正)氏來訪。
十月廿二日。晴。中村(孤)氏來訪、碁を三十五番打つて、僕が白と定つた。雜誌校了。
十月廿三日。晴。正宗(得)氏を訪ねながら、三越の二科展覽會を觀に行つた。歸りに長谷川へ立ちよる(借金の世話の返事を聽きにだが、出來なかつた)。正宗氏には靑木氏の畵を一枚賣つて貰はうとしたのだが、二十五圓以下だらうと云ふのでやめた。
十月二十四日。夜、雨。木村(秀)氏より招待狀。大阪の吉岡氏來訪。德田(秋聲)氏並に生田(弘)氏を訪ふ。
十月二十五日。夜、雨。博運社へハガキ。中澤氏來訪。小說「瓢簞みがき」を脫稿(五十八片)。原氏と共に吉岡氏の宿を訪ふ。
十月二十六日。晴。前島、中村(武)、正宗(得)、山本、小此木の諸氏を訪ふ。小此木氏はここ三ケ月間雜誌の不足費を補つてくれることになつた。雜誌出來。新潮へ小說原稿。
十月廿七日。曇。吉野氏來訪。同氏と共に淺草の駒子の「蜘蛛の舞」を見、暫らく樂屋で御馳走にな

る。

十月廿八日。夕かた雨。前島氏へ「オキシヘラに關する經驗」を送る。正宗（得）氏より靑木氏の畫を三十圓で芝川氏が買ふ承諾をしたと云ふ通知が來た。加藤（謙）氏來訪。原氏を訪ふ。

十月廿九日。雨。一元社よりハガキ。德田（秋聲）氏へ「黑瀨」の原稿を持つて行く、「枕とハンケチ」を訂正增補して「思ひ違へのハンケチ」（四十一枚）としてだ。

十月三十日。曇。新潮社より原稿が返つて來た。芝川氏を訪ひ、靑木繁氏の畫「運命」を四十圓で買つて貰つた、（これで雜誌の費用にも當てられる）。日本評論社を訪ふ。

十月三十一日。曇。火曜日會の通知。

十一月一日。雨。小說「お園の家出」（九十片）を終はる、日本評論の爲めに。

十一月二日。晴。橋川氏へハガキ。須原啓興社並に千章館へ手紙（小說出版のかけ合ひ）。三井氏へハガキ。渡邊素海と云ふ人よりハガキ。服部守成と云ふ人よりハガキ。中澤氏來訪。

十一月三日。立太子式。晴。若宮氏へ手紙。水谷（竹）氏よりハガキ。加藤、戶川、前田、野口氏を訪ふ。

十一月四日。晴。若宮氏より手紙。須原より返事（駄目）。今井歌子氏を訪ふ。小此木（信）氏を訪ふ。「評論の評論」（四十片）、日本評論の爲め。

十一月五日。晴。中澤氏來訪。「卓上問答」（二十片）、新潮の爲め。

十一月六日。晴。「親遠疎近の弊」（七片）。へんしう。

十一月七日。晴。新潮社の佐藤氏へハガキ。一元社へハガキ。前田（洋）氏よりハガキ、氏の爲めに前島氏へハガキ。火曜日會へ出席。散文詩「ラザロの姉妹マルタ」（四十行）。

十一月八日。晴。吉野、德田（秋聲）氏を訪ふ（後者は留守）。長田（秀）氏に出會ひ、氏の家へ行つた。前田（洋）、宇野、大月三氏より書信。「著書の僞版に就いて、一般の著者並に讀者に」（十一片）、よみうりへ。

十一月九日。雨。黑潮の中根氏よりハガキ。三井氏よりハガキ。原氏來訪。よみうりへ原稿。

十一月十日。雨。中根氏へ返事。久原氏へ手紙。橋川氏より原稿。一元社へ行く。十日會出席。

十一月十一日。雨。夜、晴。黑潮の中根氏よりハガキ。讀うりより原稿返る。竹腰よりハガキ。「本號の評論」（二十片）、時事の爲め。茅原（茂）氏へハガキ。德田（秋）氏へハガキ。

十一月十二日。晴。「新聞の新聞」の柴崎氏よりハガキ、同じく返事。山本氏より轉居の通知。時事へ原稿。一元社の太田氏來訪。雜誌のへんしう濟み。「艷福家としての大杉氏」（十片）日本評論の爲め。

十一月十三日。晴。生田（弘）氏へハガキ。三井、木村（卯）、田代氏へハガキ。日本評論へ原稿。日

本評論より使ひ。

十一月十四日。晴。柴崎氏よりハガキ。若宮氏よりハガキ。中外日報社よりハガキ。山本氏を見舞ふ。中村(武)氏を訪ふ。

十一月十五日。雨。川手、若宮、中外日報へハガキ。中川(小十郎)氏へ手紙(寄附勸誘と山本氏病狀通知と)。中外日報の質問へは、「一、近頃の感想は矢張り悲痛で面白い。二、近頃讀んだ本は、法華經を叮嚀に讀み返したが、ます〳〵そのつまらぬ理由を發見した」。黑潮よりハガキ。

十一月十六日。晴。長谷川へ行く(留守)。中村(吉)氏を訪ふ(留守)。生方氏へハガキ返事。昨日から「日蓮聖人御遺文」を讀み初めた(研究的に)。

十一月十七日。雨。時事より一方の方の原稿返し。時事へ返事。木村(卯)氏へ原稿の參考物。木村(卯)氏よりハガキ。原氏を訪ふ。黑潮の中根氏來訪。

十一月十八日。雨。川手氏を銀行に訪ひ、鴻の巢へ行く。德田(秋聲)氏を訪ふ。米倉よりハガキ、同じく返事。

十一月十九日。夜、雨。米倉よりハガキ、同じく返事。時事の柴田氏よりハガキ。

十一月廿日。晴。校正ズミ。柴崎氏よりハガキ。「日本一」社よりハガキ。廣瀨(哲)氏へハガキ。原氏を訪ふ。殖民公論の堀田氏來訪。同氏の爲めに「陸上唯一の我國々境」(十三片)。

十一月廿一日。晴。鈴木(三重吉)氏より轉居の通知。この數日は日蓮遺文をばかり研究。
十一月廿二日。晴。井奈氏よりハガキ。野上氏を訪ひ、『熊野』を謠つた。
十一月二十三日。晴。堀田・柴田・廣瀨三氏よりハガキ。生田(弘)氏を訪ふ。
十一月二十四日。晴。長谷川へハガキ。神崎氏、生方氏よりハガキ。生方氏へ返事。時事より稿料五圓。田中(純)氏を訪ひ・新小說の二月小說を請け合ふ。
十一月二十五日。夜、小雨。原氏を訪ふ。
十一月二十六日。晴。瀧田氏へハガキ(火曜日會の件)。前嶋、山本・小此木氏を訪ふ。
十一月二十七日。晴　東京堂・北隆館へハガキ。原子氏へ手紙。小此木氏へ手紙。滋子氏、正宗(得)氏連名のハガキ・京都より來たる。長谷川來訪。原氏來訪。
十一月二十八日。筑紫氏來訪、去年の事件以來絕交してあつたのだが、あげて見ると、想像通り淸子との件に和解離婚をしたらどうだと云つて來たのであつた。淸子に簡單な條件で離婚承諾の意志さへあれば、今暫くの間は餘地があると云つてやつた。但し去年の蜂の件並に民雄代理人になつた件は不都合を責めて置いた。この二件に對して渠がまだ少しもあやまる氣がないので、僕としては從前通りに取り扱ふことは出來なかつた。
十一月廿九日。雨。黑潮の中根氏來訪。稿料の殘金三十圓(これで都合五十圓)を受け取つた。原氏

を訪ふ。火曜日會の通知を發す。中川(小十郎)氏より返事(雜誌への寄附は斷つて來たが、山本氏の病氣に對する補助は出來た)。

十一月三十日。雨。紀平氏、茅原(茂)氏よりハガキ。茅原氏へハガキ。原氏を訪ふ。

十二月一日。山本(喜市郎)氏の死去の爲め、この九日間は何もせず、屢々の徹夜に耳が一方きこえなくなり、また風を引いてゐる。小此木耳科病院にかよひ中。

十二月九日。晴。病院の歸途、吉野氏を訪ふ。木村氏より原稿。

十二月十日、十一日、十二日。耳科へ行く。

十二月十三日。宇野、佐藤(四)、三井、中澤氏へハガキ。

十二月十四日。森田(恒)氏を訪ひ、共に田山氏を訪ひ、また郊外を散歩す。

「故露滴山本喜市郎の傳」(三十片)、日本主義へ。中澤氏よりハガキ。雜誌へんしうずみ。日本評論より三十圓。

十二月十五日。石塚氏を訪ふ。

十二月十六日。けふで耳はいいかと思つたら、また矢張りあすも行かねばならぬ。中澤氏來訪、雜誌の收金を依頼す。山本氏、新潮社、天弦堂を訪ふ。

十二月十七日。晴。耳科へ行つたついでに、芝へまわつて川手氏を訪ふ。

十二月十八日。晴。耳はよくなつたやうだから、病院へ行かなかつた。
十二月十九日。晴。水上(寧)氏より手紙、同じく返事。
十二月廿日。晴。
十二月廿一日。晴。田中純氏の代理來訪(夏目氏の思ひ出を「三度の面會」と題して話した)。よみうりの加藤氏來訪。原子氏を訪ふ(校正に)。田中(純)氏へハガキ。
十二月廿二日。西村(渚)氏へハガキ。
十二月廿三日。晴。村山氏より原稿。黑潮の中根、長谷川二氏來訪。
十二月廿四日。晴。中澤氏來訪。小說「繼母と大村夫婦」(七十二枚半)、新小說へ。野口(米)へ氏ハガキ。田中純氏へハガキ。
十二月廿五日。晴。中澤氏來訪。弟の巖を伴つて安倍氏を訪ふ(弟の件に付き)。
十二月廿六日。晴。高橋(久)氏へ手紙。瀧田　西村二氏へハガキ。春陽堂より稿料六十二圓五錢也。
十二月廿七日。風。英枝、女兒を生む母子ともに健全。前島、新潮社、中村(一)、小此木、一元社を訪ふ。新潟、山本へハガキ。臺灣の中川氏へ手紙(山本氏の件)。
十二月廿八日。强風。中澤氏よりハガキ。長谷川へハガキ。耳科へ行つたが、耳はもうよくなつて

十二月廿九日。晴。萬歳社へハガキ。清子の代理人が執達吏をつれてさし押へに來た。押さへたのは衣物四五枚と書物八百三十三冊。

十二月卅日。晴。こちらから清子の宅に行き、僕が持つて來る權利あるものを車にのせて持つて來た。其中に清子のしまつてあつた書類があつた。其中に田中王堂が清子に送つた夜中呼出し狀（中野ステーションへ二、池袋ステーションへ一）並に其他の往復廿五通と清子が王堂に送るとて書いた艷書一通とを發見したので、證據品として整理した。其他にも他の男との變な意味ある書類もある樣だ。

十二月卅一日。晴。川手氏を訪ふ。押取品中から清子へ子供の衣類と貯金帳と實印とを長谷川の手を經て返却した。

大正六年

一月一日。晴。天弦堂より雜誌廣告料三圓。年賀狀――出したのが二十七。――來たのが三十二。山本氏より手紙（故山本の記念として書棚を一つくれるさうだ）。時事の太田（稠夫）氏來訪、舊臘三十日の件を調べに。

一月二日。大雪。中澤氏來訪。原氏を訪ひ。今村高畠二氏に逢ふ。年賀狀――來たのが十二。――出したのが十二。

一月三日。晴。長谷川へ行く。

一月四日。晴。長谷川、小野崎、伊藤（義）、原氏來訪。賀狀――來たのは二十一。出したのは九。

一月五日。晴。横濱より姉夫婦來訪。若宮氏來訪。加藤、小寺、深田、佐藤（稠）氏を訪ふ。

一月六日。晴。女兒、美喜と名づけて届け出た。ローマ字ひろめ會の鳴海氏來訪。若宮氏來訪（事件を何とか方づければどうかと）。年賀狀――來たのは八、出したのは五。川俣氏より山本遺稿へんし

うの打合せ。原氏を訪ふ。長谷川、先日の事件に關係した爲めに始末書を出さねばならなくなつたと云つて來た。「羅馬字に對する僕の考へ」(八片)。

一月七日。晴。原氏に從つて今村氏を訪ひ、「日本主義」の米國並に布哇に發展すべき道を相談した。

一月八日。晴。山本宅にて川俣氏と共に露滴遺稿を編輯した。正宗(得)氏を訪ふ。賀狀――來たのは五、出したのは三。

一月九日。晴。米國行手紙十五通を認めた(雜誌擴張の爲め)。

一月十日。晴。十日會へ行く。生田、長田、高安三氏を訪ふ。若宮氏より手紙。

一月十一日。晴。事件に付いて、若宮氏と川手氏とを訪ふ。歸途生田(長)氏を訪ふ。

一月十二日。晴。木村氏よりハガキ並に原稿。原子氏來訪。

一月十三日。晴。昨年末清子の宅へ物を取りに行つた時のことが時事新報に出たのに對して、長谷川がかかり合ひになり、その職の任地を變更させられた損害上、今後その取り返しがつくまで月々僕から七圓の補助をすることになつた。但し、千惠がその前に朝早くやつて來て、蒲原の枕を蹴たりしたので、以後この家には入れぬことにした。

一月十四日。晴。吉野氏來訪。

一月十五日。晴。加藤氏より原稿。田中(純)氏より手紙。木村(卯)氏の紹介で中島德三郎と云ふ人が來た。正宗(得)氏宅の義太夫會を聽きに行つた。雜誌のへんしう終る。「民族的功利主義の覺醒」(十四片)、日本主義へ。

一月十六日。晴。三井氏よりハガキ。山本氏よりハガキ。シエルコフと云ふ夫人より手紙、同じく返事。武林氏を訪ふ(留守)。

一月十七日。雪ちよつと降る。萬歲社より手紙。天弦堂、大須賀二氏よりハガキ。原(德)氏來訪。

一月十八日。晴。若宮氏よりハガキ。若宮氏來訪(事件の爲めに)。齋藤(未鳴)と云ふ人より手紙。

一月十九日。晴。齋藤氏へ返事。田中(純)氏へハガキ。原氏、中澤氏來訪。「德富蘇峯論」(八十片)、夜、山本氏宅へ七七日の法事に呼ばれた。

一月二十日。晴。シエルコフ夫人より手紙。帝國ホテルに同夫人を訪ふ。春陽堂より二十八圓。田中(純)氏と鴻の巢へ行く。德田、安倍、木村(卯)三氏を訪ふ(共に留守)。ついでに、長谷川の叔母を訪ふて久しぶりで會つた。

一月二十一日。晴。若宮氏より手紙。維新公論の芳井氏來訪。「僕が若し女であつたら」と云ふ質問に答へてくれろと云ふから。「一生結婚をせず、誰れをも引きつけて、いつも若々しく渠等に尊敬をさ

せる」と答へてやつた。黒潮社に中根氏を訪ふ。雜誌初校ずみ。

一月二十二日。晴。執達吏が來たが、競賣延期。木村(卯)氏來訪。若宮氏へハガキ。

一月二十三日。晴。田中(純)氏よりハガキ。大月氏來訪。若宮、北村、上司氏を訪ふ(共に留守)。

一月二十四日。晴。天弦堂並に田中(純)氏よりハガキ。中央新聞社に若宮氏を訪ふ。池田、德田二氏を訪ふ。萬歳社の佐藤氏來訪。宮地氏來訪。若宮氏、夜、來訪(清子の事件が同氏仲裁の條件で方がつきさうだ)。その爲めに僕はかの女に先づ與ふべき百圓を明日都合せねばならぬ。

一月二十五日。晴。若宮、川手二氏を訪ふ。川手氏と共に「光琳」へ飲みに行く。新潮社へ行く。

一月二十六日。晴。新潮社へ行く。事件の爲めに川手、若宮二氏と共に吉田氏の事務所に集つたが、こちらの工風すべき百圓がまだ出來ぬ爲めに事が運ばなかつた。新潮社長より手紙。田中(純)氏よりハガキ。中澤氏來訪(留守)。

一月二十七日。晴。新潮社長へ手紙。執達吏役場より二月二日競賣の通告。「シエルコフ夫人の計劃に就て」(九片)、時事へ。實業之日本社へ手紙(Natural Education 飜譯の件)。

一月廿八日。晴。淡路會よりハガキ、同じく返事。氷室氏より手紙。武林氏を訪ふ(病氣のよし)。中澤氏來訪。

一月廿九日。晴。若宮氏へ手紙(仲裁示談の條件)。

一月三十日。晴。吉野氏來訪。實業之日本社より返事(斷り)。佐藤(義)氏よりハガキ一枚。敬文館、實文館、大同館へ手紙(ナチユラルエヂユケシヨンの件)。若宮氏より手紙あり、今回の「日本主義」に出た「田中王堂氏に問ふ」の如きを書けば折角の仲裁も破れるか知れぬと云つて來たので、僕は然し他日に僕の不利益な感じを殘すのがいやだから或程度まで事實を書いて置いたのだと答へる返事を出した。そしてそれが爲めに仲裁が破れるのならそれも止むを得ぬからなほ爭ふつもりだが、まだ若宮氏の文意には昨日送つた條件を一考してくれる餘地はあらうと。

一月三十一日。晴。時事より稿料二圓。

二月一日。晴。けふは社用のをも加へれば、郵便が隨分多く來た。僕だけのに關しても、若宮氏より手紙(例の件)。大月氏よりハガキ。實文館より返事(斷り)。大同館よりハガキ(明日來訪とのこと)。原子氏來訪。

二月二日。晴。文章世界より稿料二圓。大同館主人坂本眞三氏來訪。敬文館よりハガキ。同館へ行く(主人留守)。

二月三日。晴。坂本氏より手紙(斷り)。大月氏より原稿。「訴訟より離婚まで」(八十三枚)。中央公論を訪ふ。田、野上二氏を訪ふ(共に留守)。

二月四日。晴。新潮社より「耽溺」五百部の印税十五圓。同社々長から百圓くめんの問題には駄目の

返事が來たので事件の示談を破談にせねばならぬ。原氏を訪ふ。

二月五日。晴。中央公論より原稿歸る。橋川氏より原稿。大月氏來訪。今日の公賣が音さたなかつたので、若宮氏を訪ふと、淸子がはの辯護士が成るべく示談にする意志があり、僕の百圓はここ三ケ月間に拵らへることにして、若宮氏が用意の八十圓を先づ渡し、それで方づけてしまうつもりだと分つた。

二月六日。晴。川手氏へハガキ。若宮氏より昨夜と行き違ひの手紙。ローマ字擴め會よりハガキ並に執筆の禮物。黑潮社並に春陽堂へ行く。

二月七日。晴。若宮氏よりハガキが來たに付き、中央新聞社に氏を訪ふ。川手氏と肉屋へ行き、歸途一緒に活動へ行く。

二月八日。晴。中央新聞社に若宮氏を訪ひ共に東京法律事務所に行つて淸子との離婚手續きを了す。この時若宮氏の工面した八十圓を渡し、あとは五月十日に七十圓、それから每月十圓を七十圓、八十圓とを加へて五百圓に達するまで與へることになつた。大月、春陽堂、北隆館よりハガキ。春陽堂、北隆館へハガキ。黑潮の中根氏、敬文館主人、並に新潟の蒲原氏へ手紙。

二月九日。晴。中根氏來訪。十日會より通知。

二月十日。晴。池田、石山(運吉)、千葉、新潮社の佐藤氏へハガキ。樫村敬文館より手紙(駄目)。

黑潮より手紙。萬歲社の佐藤氏來訪(留守)。黑潮社に行き、稿料九十六圓受け取る。十日會出席。
二月十一日。晴。原氏へあづけてあつた書物をすべて持ち運ばせた。清子宅へ昨年來の荷物を届けさせた。「評論の評論」(十五枚分)、日本評論へ。黑潮へハガキ。
二月十二日。晴。
二月十三日。晴。天弦堂へ手紙。風の氣味でか眼が赤くなつて氣分が惡い。加藤、山田、小寺氏を訪ふ。
二月十四日。
二月十五日。晴。中澤氏來訪。木村、三井、橋川氏より原稿。雜誌へんしうを終はる。
二月十六日。晴。
二月十七日。曇。原氏を訪ふ。
二月十八日。晴、風。原氏と共に川手氏を訪ひ、若菜氏と會ひ、共に牛肉屋やパウリスタや鴻の巢へ行つた。長野氏來訪。
二月十九日。晴。長野氏へハガキ。
二月二十日。　氷室に山本氏よりハガキ。氷室氏へ返事。
二月二十一日。晴。長野氏よりハガキ。執達吏よりハガキ。川手氏を訪ひ、訴訟の證據物件を取り

戻して來た。原子氏を訪ふ。

二月二十二日。曇(また寒かつた)。長野氏來訪、僕が淸子から押取して來た田中並に淸子の信書並に淸子宛米倉、筑紫、安原、伊藤の書信(すべて證據物件であつた)を受け取つて行つた。同時に淸子に屬する諸印をも渡してやつた。正宗(得)氏を訪ふ(留守)。中村(武)氏を訪ふ。新潮社へ「半獸主義」の訂正改版「肉靈合致の曙」をかけ合ひに行つたが、佐藤氏が留守なので置いて來た。山本宅へ行き、露滴遺稿の出來たのを二冊持つて來た。

二月二十三日。晴。

二月二十四日。晴。中村(孤)氏來訪。朝より夜八時までに碁を二十五六番戰ひ、とう〱渠を先にした。原子氏も來訪。

二月二十五日。晴。深田氏、朝と夜とに來訪。シエルコフ夫人より手紙。小寺氏の紹介で佐藤眞也來訪。文章世界よりハガキ、同じく返事。

二月二十六日。晴。

二月二十七日。久しぶりの雨。鈴木(全)氏より僕のいとこの吉味鉄十郎が死んだ通知が來た。吉味氏へ香奠一圓を送つた。大月氏來訪。

二月廿八日。曇(小雨あり)。英枝の弟より手紙。春陽堂の細田氏來訪。「讀者は批評家」(七片)、中央

文學に。
三月一日。晴。中根氏來訪。櫻井照悳の葬式に臨んだ。
三月二日。晴。大月、井上、細田、長野、櫻井（ちか）の諸氏よりハガキ。田中（正平）氏よりハガキ、同じく返事。「寒月」（八十一片）、文章世界へ。
三月三日。晴。新潮社より出版原稿返る。前島、新潮社、天弦堂、小川氏を訪ふ。郁子氏を訪ふ。博文館より稿料三十二圓八十錢。
三月四日。晴。寶生會へ行く。四谷の三河屋で開いた龍土會へ行く。（集つたもの田山、前田、上司、島崎、長谷川、生田、蒲原氏と僕）。歸りに生田氏と飯田橋まで歩いた。
三月五日。晴。郁子氏、中央公論、東亞堂、新潮社へハガキ。「今一度譯し假名」（六片）、よみうりへ。大月、原二氏來訪。
三月六日。晴。中村（星）氏より原稿依賴。太田氏より同じく。「花袋論の一端」（十七片）、文章世界へ。
三月七日。晴。十日會より通知。東亞堂主人より返事。野上氏を訪ひ、「松風」を謠ふ。「文藝上からの了解」（九片）、時事へ。「文壇の現狀に對する私見」（十九片）、早稻田文學へ。大月氏より原稿。
三月八日。晴。相馬（御風）氏より手紙。郁子氏よりハガキ。吉味氏よりハガキ。大月氏よりハガキ。

加藤(朝)夫婦來訪。

三月九日。雨。「飜譯的人道主義の不成立」(三十片)、日本主義並に日本評論へ。

三月十日。雷雨あり。萩原朔太郎氏よりハガキ。十日會へ行く。

三月十一日。晴。前田(洋)、東亞堂、吉田辯護士、田中義一諸氏へハガキ。米倉氏よりハガキ。橋川氏よりハガキ。淺草の愛子さんを一年ぶりで訪ねて行つた。

三月十二日。曇。「現詩壇と月に吠える」(十八片)、日本主義五月號へ。

三月十三日。晴。萩原氏へハガキ。吉野氏來訪、とう〳〵僕が碁で先になつた。吉田、前田、東亞堂二氏よりハガキ。臺灣の柴田(廉)氏より手紙。

三月十四日。晴。木村氏より原稿。室生(犀星)氏よりハガキ。木村(卯)氏來訪。雜誌編しらずみ。

三月十五日。風。室生氏へ返事。時事の柴田氏へハガキ。川手氏へ手紙。(浮田事件と競賣延期の件)。一元社よりハガキ。「文壇現狀論」(十八片)、よみうりへ。

三月十六日。晴。愛子氏より手紙。萩原氏より手紙。新潮社を訪ひ、ここ二三ケ月の收入の道を相談した(出來ればいいが)。山川氏を訪ふ。

三月十七日。晴。生田氏よりハガキ。よみうりの加藤氏來訪。原氏を訪ふ。「戰爭の氣ぶんと考察」(三十九片)、黑潮へ。

三月十八日。曇。島中（雄）氏へハガキ。春陽堂より二圓五十錢。細田氏より手紙。三井氏よりハガキ。中澤氏、一人の友人をつれて來訪。吉野氏來訪。中村（孤）氏、若い一婦人をつれて來訪。新公論の島中氏へハガキ。

三月十九日。雨。三井、相馬、黑潮の中根氏へハガキ。間違つてまた執達吏が來た。「田山氏の一兵卒に於ける描寫上の缺點」（十五片）、時事へ。長谷川へ二圓五十錢。

三月廿日。雨。川手氏を訪ふ（留守で在たから電話で用件を）。原氏を訪ふ。加藤（朝）氏より手紙。

三月廿一日。晴。橋川氏へハガキ。

三月廿二日。晴。中村（孤）氏來訪。野上、中根二氏よりハガキ。小說「鼻」（三十七片）。

三月廿三日。夜に入つて雨。島中、茅原、青年文壇よりハガキ。青年文壇へ返事。

三月廿四日。雨。「京都の一友人へ」（二枚）。

岩野泡鳴

近頃は信仰問答でばかりお隱れですか？細君は京都が、もう、いやになつて來てはゐませんか？僕も時期を見て一度御地や大阪へ日本主義宣傳演說をやりに行きたいと思つてます。その時はお力を借りたいと思ひます。文壇の人々のあんまり呑氣なのには時々手賴りない感じを催すことがあります。日本主義社へ相當の寄附でもしてくれるものがあらば、それを費用にして一度全國へ宣傳にま

わりたいとも思つてます。今更ら日本主義でもないと云ふやうた飛んでもない思ひ違ひをしてゐるものが青年間には殊に多いやうですが、それは却つて渠等の間に外國を新らしがつて、外國思想その物の既にわが國の新發展には時代後れなのを知らないのが多數を占めてるのを證します。

僕は近頃殊に日常生活に追はれて散歩などするひまが少いので、からだの運動の爲め謠ひを初めてから、もう、一年以上になります。敎へに來て吳れるものがよくその道の萬事を心得てる人なので、割合に進步も早く、もう、難物なる「松風」、「俊寛」、「あし刈り」等も一わたりはやりました。本日は午後五時から野上臼川宅にその方の五六名の集りがあるさうで、僕には「三井寺」がきめてあるさうです。野上夫婦は共にうまいものです。また同席する筈の碧梧桐氏は半ばくろとです。安倍能成氏も僕よりはずツと心得があるときいてます。

黑潮三月號に出た僕の「離婚まで」を讀んで下さい。君などが公開的に僕に忠告したその意味の當つてなかつたことも分りましよう。事實通りですが、然し、そのまま僕の創作として、その主人公には必要な批判と洞察と客觀化とを十分に與へてあります。そこを讀まないで、ただうわツらに見て直ちに僕自身の辯護と見做した評家の如きは全く分らず屋です。(六、三、二四)

三月廿五日。雨。東亞堂よりハガキ。原氏を訪ふ。中外日報へ原稿。野上氏宅の謠ひ會へ行き、「三井寺」のシテを謠つた。

三月廿六日。晴。

三月廿七日。晴。英枝の弟より手紙。「眞實の生活」(十六片)、青年文壇へ。中村(孤)氏來訪。

三月廿八日。晴。郁子氏へハガキ。長田(秀雄)、武林二氏來訪、共に武林氏の宅へ行き、それから
また德田(秋聲)氏を訪ふ。

三月二十九日。雪少しふる。

三月三十日。晴。宮地氏來訪。時事新報より稿料二圓五十錢。

三月三十一日。晴。郁子氏よりハガキ。吉野氏來訪(とう／＼白を取り返して互ひ先になつた)。

四月一日。晴。武俠世界へ左の取消を出す、

「武俠世界編輯者へ」——

何とか散史と云ふ人はどなたか知りませんが、いづれ大した考へもなくから氣焰を吐いて喜ぶ連中の一人と存じます。僕の事に關して書いたのをちよツと拜見しますと、僕が芝の下宿屋の娘をどうかしたとありますが、その下宿屋は僕のおやぢの經營してたのですから、何かの聽き間違ひでしよう。おまけに、その家で僕は故押川春浪をその兩親の依賴により一時監督してゐたこともありました。春浪の兩親は僕も第二の親々と思つてた關係もあり、既に僕がその時妻帶してゐたので、春浪の監督を賴まれたのでした。思ひ違ひをして餘り無責任なことを書いては御雜誌の體面上からもよくあります

まい。この全文をかかげて御社は取り消しの責任を盡して下さい。四月一日。大月氏來訪。木村(鷹)氏來訪・同氏と共にまた小寺氏を訪ふ。

四月二日。晴。長野氏來訪。よみうりより稿料四圓。

四月三日。夕方より雨。田中(純)氏へ手紙。木村(卯)氏よりハガキ。振替貯金中の十五圓を現金で受け取つた。門馬氏來訪。新潮・小此木、前島、天弦、中央新聞を訪ふ。薄井(秀)氏に逢ひ、東京朝日のクラブで玉突と碁とをやつた。「遊蕩文學と否との區別」(再び宮森氏に)十一片、時事へ。

四月四日。晴。英枝の弟へ手紙。中央公論へハガキ。門馬氏へハガキ。木村氏へ雜誌。井上(右)氏より原稿、それを訂正して返す。野口氏より招待狀。同じく返事。中村(孤)氏來訪。

四月五日。晴。西村氏よりハガキ、同じく返事。木村(卯)氏よりハガキ。新潮社より手紙とハガキ(廣告料金と出版相談の斷りと)。一元社の山川氏來訪。

四月六日。風。散髮屋へ行く。やツと風邪のきみ去る。井上氏よりハガキ。長野氏よりハガキ(民雄養子の件の手續き完了のよし)。春陽堂の田中氏(純)より返事。大月氏より原稿。內藤氏能の招待狀。「上司論の一端」(十一片)、文章世界へ。中村(星)氏へ稿料催促。

四月七日。雨あり。野口氏のレセプションへ行く、米國詩人ビンナ氏並にフキケ氏夫婦や佐々木信綱氏やに初めて會つた。時事の柴田氏より原稿歸る。東亞堂より雜誌への廣告原稿。中澤氏よりハガ

キ。大月氏來訪(留守)。早文より稿料三圓。
四月八日。晴。伊藤(證)氏へハガキ。山宮氏へ雜誌。愈々困つて、「自然の敎育」を譯し初めた。
四月九日。晴。正宗(得)氏よりハガキ。黑潮の中根氏來訪、共に飛鳥山の櫻を見に行つた。
四月十日。小雨。小林(一)氏へ手紙(黑潮の爲めに)。三井氏よりハガキ。山宮氏より書物。森ケ崎開會の十日會へ行く。
四月十一日。原氏來訪。早文社より追加稿料一圓。
四月十二日。晴。一元社の山川氏來訪。一元社より稿料八圓。
四月十三日。小雨あり。中村氏來訪。木村、橋川二氏より原稿。
四月十四日。曇。內藤氏古稀の賀能に行く。廣瀨、一元社、靈英、橋川氏よりハガキ。
四月十五日。雨。木村氏來訪、雜誌へんしうをすます。三井氏より原稿。小倉氏よりハガキ。小林(一三)氏より返事。木村氏と共に大須賀氏を訪ふ。
四月十六日。晴。靈英、川路二氏へ雜誌。中根氏へハガキ。橋川氏へハガキ。三井氏へハガキ。池田氏へ手紙。
四月十七日。晴。野口、蒲原、加藤三氏を訪ふ。中村(孤)氏來訪。池田氏よりハガキ。
四月十八日。晴。池田氏よりハガキ。池田氏を訪ふ(譯書の件)。中村、深田、原三氏來訪。

四月十九日。中澤氏來訪。中村氏と共に普通敎育社を訪ふ。
四月廿日。晴。
四月廿一日。晴。正宗(得)氏よりハガキ。
四月廿二日。晴。三崎行きの會へは多忙の爲め並に金がない爲め行かなかつた。よみうりより原稿歸る。廣瀨氏よりハガキ。「雄辯」の靑柳氏來訪、原稿を賴んだ。同氏に田山、正宗、若宮、秋聲四氏へ紹介する名刺を渡した。
四月二十三日。曇、夜小雨。平塚(明)氏より轉居の通知。中村(孤)氏を紹介がてら、野上彌生氏を訪ふ。
四月二十四日。雨。靑年文壇よりハガキ並に稿料四圓。靑柳(隆)氏よりハガキ。三井氏よりハガキ、同じく返事。原氏を訪ふ。
四月二十五日。晴。小野崎より手紙。大月氏來訪。沼波(武)氏來訪。みどり氏來訪。野上氏よりハガキ。
四月二十六日。晴。原氏を訪ふ。細田氏來訪。
四月二十七日。晴。中村(孤)氏來訪。井上氏よりハガキ並に原稿。
四月二十八日。井上氏へ返稿。

四月二十九日。井上氏よりハガキ。

四月三十日。新潮社より「耽溺」第九版の印税十五圓。お滋さんよりハガキ。井上氏よりハガキ。沼波氏を訪ふ。大月、平塚夫婦來訪(留守)、中村氏來訪。

五月一日。大雷あり。黑潮の中根氏來訪。同氏と淺草の活動や五九郎を見に行つた。雄辯社より稿料十圓。

五月二日。晴。中村氏來訪、同氏と共に秋聲氏を訪ふ。新潮の中村、谷崎諸氏もまじつて夜の十時過ぎまで花を引いた。十二時頃引き上げる時、中村氏と武林氏とがついて來て、とう〳〵徹夜して話した。

五月三日。晴。二人は朝の六時頃歸つた。伊奈氏より手紙。山川氏來訪。龍土會より通知、同會當番へ返事。新潮の佐藤氏へ手紙(プルタルクの件)池田氏へハガキ。羽太氏へ手紙。

五月四日。雨。米倉氏よりハガキ。

五月五日。晴。中村氏來訪。天弦堂廢業の通知。大月氏よりハガキ。中川(小十郎)氏の父君死去通知、同じく返事。「創作と主義との關係」(十枚)、春陽堂中央文學へ。『「うそ」とは?(田山氏へ)』(六片)、文章世界へ。

五月六日。東亞堂よりハガキ。細田氏よりハガキ。利光(常)、池田、北村、若宮諸氏を訪ふ。中村

氏來訪。
五月七日。雷鳴、雨あり、地震あり。池田、佐藤、山本氏を訪ふ。
五月八日。晴。初太氏よりハガキ。
五月九日。晴。宇野氏よりハガキ、同じく返事。新潮の佐藤氏より手紙。
五月十日。晴。瀧田氏を訪ふ。加藤氏より原稿。行樹社より招待狀。十日會へ行く。普通敎育社より譯料のうち三十圓也。
五月十一日。晴。柴田氏よりハガキ。
五月十二日。曇。井奈氏よりハガキ。淡路新聞社より手紙。中村氏來訪。加藤氏を訪ふ。
五月十三日。雨。正宗(得)氏よりハガキ並に著書。「日本に於ける亞細亞主義の勃興」(三十一片)、日本評論と日本主義とへ。原氏來訪。秋田氏へハガキ(僕に對する攻擊が中外日報に出たのは筆記通り間違ひがないかどうかの問ひ合せ)
五月十四日。雨。中村、原二氏來訪、一元社より稿料八圓。橋川、三井、木村三氏より原稿。廣瀨氏より三角棻の種。萩原氏より手紙、乃ち、左の如し。
あなたの御批評を拜讀して非常に感激致しました。あなたから御批評をいただいたことは小生にとつて此の上もない名譽です、絕大な光榮です、小生感激にたえません。

御教訓は押しいただいて拜讀致しました。

あなたの御推賞にあづかつた「天上縊死」の詩は小生にとつて最も自負のあつたものです、あれを作つた頃小生狂態して自ら日本第一の名詩と稱しました、併し何びとからも認められないで（北原白秋氏だけは認めましたが）却つて詩壇のある方面から非常な罵倒と嘲笑とを買ひました、川路柳虹といふ人の如きは「瓦かけのガラクタ詩」だといつて冷笑しました、然るに今日になつてあなたから推賞にあづかつたことは小生にとつて何とも言へぬ悦びです、失禮な申し條ですが知己を得たりといふやうな幸福を感じました。

「ありあけ」もまた小生にとつて最も自信のある作品です、あなたの御教訓の中で何よりも痛切に感じたことは音韻や音律についての御注意でした。

小生自身の最も考へてゐることもその問題ですが、また自ら最も不安を感じてゐるものもそれです、森林太郎氏もこの點で、私の詩及び現詩壇一般に通ずる缺陥を指敎して下さいました。

あなたの御敎訓は私ばかりでなく他の作家たちにもよい御敎訓でした、今の詩壇では一つとして「完全なる韻詩」の形をもつたものがありません、この點では私ばかりでなくだれも羞恥をもつてゐることと思ひます、あなたのやうな先覺者から時々注意をあたへていただくことは現詩壇のために最も肝要なことと思ひます。

私の詩の句點のきり方についての御注意は特に私を反省させました、正直に申しあげると私は今まで少し馬鹿でした、句點をうつ場所について少しく無神經にすぎて居ました、御言葉によつて始めてそれを自覺しました、今後は自ら注意します。

挿畫についての御言葉を地下の田中恭吉にきかせたく思ひます、室生犀生君があなたの御言葉をよんで『恭吉といふ人も仕合せものだ』と言つたのを私は特に意味深く考へました、恭吉君は全く世に認められない死んだ人です、あなたの御言葉は彼の靈にとつてはどんなに滿足な微笑に價することでせう。今後とも小生はあなたの御指敎をあふぐ場合が多いのです、何はともあれ御厚情に對してこの感鳴と歡喜とを申しあげます、亂筆平に御許し下さい、敬具頓首

萩原生

岩野泡鳴樣

侍史

五月十五日。晴。アテネ印刷所、昨夜全燒に付き、『日本主義』編輯が終つても印刷に附することが出來なくなつた。三角氏よりハガキ。秋田氏より返事。木村(卯)氏來訪。木村(秀)氏よりハガキ。

五月十六日。晴。中村(孤)氏來訪。廣瀨氏より手紙。川俣氏を訪ひ、印刷屋をもとの高嶺堂にきめ

た。

五月十七日。晴。廣瀨氏へ三尺きうりの種とハガキ。木村(秀)氏へハガキ。中澤氏より原稿。川手氏よりハガキ。「草の葉」會より招待、同じく出席の返事。羽太鋭治氏を訪ふ(初めてなり)。

五月十八日。晴。野上氏よりハガキ。木村氏よりハガキ。木村駒子氏夫婦來訪。中村氏來訪。川手氏、押川氏を訪ふ。野上氏より電報(午前一時半)。芝川氏へ手紙。

五月十九日。晴。野上氏よりハガキ、同じく返事。芝川氏よりハガキ。吉田氏より手紙、同じく返事。ストーナ夫人の「自然の教育」譯了、但し僕の名を出さず、中村氏の名で公けにする(僕はこれで清子に拂ふ分のうち今月中に拂ふべき七十圓が出來るわけだ、別に三十圓は先日取つた)。渡邊氏歌集披露の宴に上野精養軒に行く。

五月廿日。風。原・深田二氏來訪。前島、吉田二氏よりハガキ。神經衰弱の爲め何も出來ず。

五月廿一日。晴。有斐閣へ手紙(川手氏の著書に付いて)池田氏を訪ふ。安成氏よりハガキ。

五月廿二日。晴。原、中村・加藤(朝)三氏來訪。

五月廿三日。大月氏來訪。中村・加藤二氏來訪。

五月廿四日。若宮氏より手紙。「愛の本性――熱烈なほど闘爭的」(十七枚)、女の世界へ。

五月廿五日。晴。大掃除。吉野、中村二氏來訪。

五月廿六日。晴。女の世界記者來訪。十二圓を置いて行く。有斐閣を訪ふ。歌子氏を訪ふ。

五月廿七日。晴。中澤、中村、原三氏來訪。中村氏は初めて細君をつれて來た。荒畑氏よりハガキ。高嶺堂よりハガキ。荒畑氏を訪ひ、犬の子を一匹貰つて來た。

五月廿八日。晴。大月氏へハガキ。有斐閣より返事(川手氏の著書出版の件だめ)。譯了の書の件に付き普通教育社を訪ひ、中村氏に會ひ、共に歸つて來た。途中で平塚(篤)氏に會ふ。

五月廿九日。晴。中村氏來訪。譯の書は今一度池田氏から原著者の手紙を取らねば出版出來ぬことになつた、從つて清子へまわす分の金も――。

五月三十日。晴。文章世界より稿料一圓五十錢。池田、若宮、吉田氏を訪ふ。

五月三十一日。雨あり。若宮、吉田二氏を訪ふ。

六月一日。晴。中澤氏來訪。大月、西村二氏よりハガキ。「鼻」(訂正して五十五枚半)、新小説へ。吉田氏より手紙、少しでも金をやらねば清子はさし押へを實行するさうだが、これは實際は若宮氏と吉田氏との間の紳士條約で清子だけがやかましく云へぬ筈だ。

六月二日。晴。若宮、吉田二氏を訪ふ。新小説より稿料四十七圓六十錢。吉野氏を訪ふ(いよ〳〵先にしてやつた)。

六月三日。晴。中央公論よりハガキ、同じく返事。山本一家歸北の送別會を川俣氏宅で開らき、出

席。深田氏を訪ふ。中村氏來訪。
六月四日。越山堂並に上田氏へハガキ(書物八百册を賣る相談の爲め)。
六月五日。雨。越山堂並に上田屋來たり、和洋書八百册以上を四十四圓五十錢に賣り拂つた。
六月六日。晴。昨日の書物賣り拂ひ代と衣物を質に入れたのとで六十圓を拵らへ、これに二三日前に出した十圓とを加へて吉田辯護士に淸子の差し押へを解かしめた。これであとは毎月十圓を淸子にやればいいのだ。川手、若宮、北村氏を訪ふ。中川(小十郞)氏より手紙。越山堂、高嶺、加能氏よりハガキ。
六月七日。晴。加能氏へ返事。加藤(朝)氏來訪。鳴海うらぶる氏來訪、蜜蜂の箱と蜜蜂とを交換することにして、夜になつて一群を持つて來た。
六月八日。雨あり。中村夫婦、中澤、原、鳴海氏來訪。昨日鳴海氏宅で多くの蜂にさされたのが熱を起し、昨夜は早く寢たが、けふもなほ手やくびにこりを生じてゐる。けふ、殘りの書籍を並べて見ると、なほビール箱に十三杯ある。
六月九日。十日。十一日。十二日。十三日。十四日。越山堂、十日會、加能、高嶺堂、上司、東亞堂、小川、生田、三井、木村(卯)中澤諸氏より書信。
「近頃の創作界」(九枚)、文章世界へ。「獨存孤立の偉大」(十片)、「有主義で無理想」(十片)、「崇外

病と恐外病」（八片）・日本評論と日本主義へ。
日本評論社より稿料八圓。文章世界より稿料六圓三十錢。木村（卯）・中澤、都留氏來訪。川手氏の憲法論の校正が來初めた（これは氏の爲めに一度目を通してやるのである）。
十四日、また執達吏が來て浮田氏に對する敗訴の費用都合十五圓四十錢ばかり取られた。
六月十五日。晴。山本氏一家歸北を上野に見送つた。その歸りに英枝を伴ひ、川俣その他の二三氏と共に安倍氏を訪ふ。中澤氏來訪。
六月十六日。晴。野上氏より手紙。中村氏來訪。廣瀨氏より書物。中村氏と共に原氏宅でから花を引く。新潟縣柏崎に引ツ込んでる故繼母の娘安子が出京、末の娘四歲を女優にして東京に住みたしと云ふので、明日その口を探してやるつもり。
六月十七日。雨。伊藤（證）、木村二氏よりハガキ。郁子氏を訪ふ。安子へハガキ。原夫婦來訪。
六月十八日。曇。前島、郁子二氏よりハガキ。都留氏より手紙。大津氏よりハガキ、同じく返事。黑潮の中根氏來訪。
六月十九日。雨。中村氏・大津氏を伴つて來訪・三人協議の上ストーナの飜譯原稿は向ふへ渡すことにして、僕はさきの三十圓以外にたツた八十圓を來月から四ケ月に割つて取ることにした。池田氏へ手紙。針重氏よりハガキ、同じく返事の手紙と取り消し文と。神崎氏よりハガキ。「押川春浪と僕」

（六片）、武俠世界への取り消し文。

六月廿日。夜、小雨あり。鳴海氏を訪ふ。

六月廿一日。雨。茄子苗の追加を買ひに行つたついでに沼波氏を訪ふ。「霜子のかたみ」（訂正六十七枚）、黑潮へ。

六月廿二、三、四、五、六日。「坪内氏の星月夜に對する異議」（十片）、日本主義、日本評論へ。中澤氏よりハガキ。加藤氏より手紙。都留氏より手紙。中村、中澤、吉野氏來訪。

六月廿七日。都留氏へハガキ。

六月廿八日。雨。中村氏來訪。

六月廿九日。雨。伊藤（證）氏よりハガキ。加藤（朝）氏へ手紙。生田、中村二氏の紹介を以つて堀木克三と云ふ人が來訪。雜誌校正ずみ。川手氏の憲法論校正。

六月三十日。晴。木村氏よりハガキ。川口氏よりハガキ。

七月一日。晴。川俣氏等と玉川へ行き、歸りに生田（葵）氏を訪ふ。留守に中村、中澤二氏來訪。よみうりより原稿歸り來る。遠藤よりハガキ。

七月二日。雨あり。伊藤（證）、柳田、渡邊三氏へ手紙。廣瀬氏並に舊巣會よりハガキ。川口氏より手紙。同氏へ返事。新潮社、前島、中村（武）氏を訪ふ。黑潮の中根氏へハガキ。

七月三日。晴。新潮社並に中村(武)氏を訪ふ。中村氏より手紙。氷室氏よりハガキ。同氏へ返事。

「概念からの要求」(十五片)、日本主義並に日本評論へ。

七月四日。晴。野口氏を訪ふ。在米の木村駒子氏よりハガキ。柳田氏より手紙。「個人主義に關する三種の誤想」(七片)、日本主義へ。

七月五日。雨あり。中根氏を訪ふ。川手氏を訪ふ。中村氏來訪。

七月六日。風。伊藤、十日會よりハガキ。中央公論よりハガキ、同じく返事。「自國を知れ」(再び)、(五片)、中外日報へ。黑潮社より八十圓四十錢。

七月七日。晴。氷室氏より手紙・同じく返事。野村氏より手紙。加藤(一夫)氏よりハガキ。田中(孤)氏よりハガキ、同じく返事。「感情家の田山氏」(十一片)、新潮へ。本多氏よりキングと云ふ洋犬を貰ふ。

七月八日。晴。「歐洲政治史概論」(六片)、川手氏の「比較憲法論」(六片)、共に日本主義へ。

七月九日。晴。森(盛)氏より手紙、同じく返事。靈英よりハガキ。鳴海、中澤二氏來訪。沼波氏を訪ふ。

七月十日。晴。山本(唯三郎)氏へ手紙。羅馬字擴め會へ手紙。吉野氏來訪。十日會へ行く。

七月十一日。晴。擴め會の鳥谷部氏來訪。鳴海氏の宅で山田(純三)氏を知る。研究社へ手紙。宇野

氏よりハガキ。
七月十二日。晴。橋川、木村、三井三氏のよせがきハガキ。山本氏を訪ふ(留守)。池田氏を訪ひその席で久しぶりに兒島氏に會ふ。川手氏を訪ふ。橋川、井上二氏來訪(留守)。神經衰弱と暑さあたりで寢る。
七月十三日。晴。夜、木村氏が橋川氏と田代氏とを伴つて來訪。
七月十四日。晴。三井氏より原稿。中澤氏よりハガキ。原(正)氏來訪。
七月十五日。晴。沼波氏來訪。研究社より返事。
七月十六日。晴。加藤氏を訪ふ。
七月十七日。廣瀬、龍土會よりハガキ。龍土會へ返事。
七月十八日。ふく子氏來訪。十九日。アメリカの木村駒子氏よりハガキ。鈴木(三)、中澤、都留、三人社、中央公論よりハガキ。中央公論へ返事。川俣、大須賀二氏を訪ふ。
七月廿日。晴。東亞堂より手紙、返事。德田、生田、一元社を訪ふ。
七月廿一日。晴。長谷川おば來訪(留守)。久し振りで湯淺(倉平)氏を訪ふ、碁を三番、二目置いて勝負まけをした。都子氏、羽太氏を訪ふ。羽太氏へ手紙(雜誌の八月號印刷費借用の件)
七月廿二日。晴。羽太氏より返事。木村氏より雜誌。東亞堂より手紙。木村氏を訪ひ、雜誌印刷費

前金を借りる。中澤氏來訪。
七月廿三日。晴。雜誌の印刷所を萬月堂にきめた。中澤氏來訪。「赤司氏の謬見」(三たび)、七片。
七月廿四日。晴。沼波氏を訪ふ。
七月廿五日。晴。英枝と共に平塚、中村二氏を訪ふ。
七月廿六日。晴。中澤氏よりハガキ。中澤氏來訪。ふく子、中外、羽太三氏へハガキ。
七月廿七日。晴。中外日報よりハガキ。新東洋社より手紙、同じく返事並に英文原稿。「指の傷」(二十四片)、青年文壇へ。鳴海氏の蜂を調べに行つた。
七月廿八日。曇。烏谷部氏へハガキ。碁會に行く(湯淺(倉平)氏も來たる。)
七月廿九日。曇。北村氏を訪ふ(留守)、若宮氏を訪ふ。薫の中學より手紙(呼び出し)。宇野氏よりハガキ。
七月三十日。晴。東亞堂より九圓六十錢。鳴海氏を訪ふ。
七月三十一日。晴。佐藤(稠)氏を訪ふ。
八月一日。晴。新潮社より二圓五十錢。中村氏來訪。
八月二日。小雨二度あり。遠藤よりハガキ。烏谷部氏より手紙。聖學院へ薫の爲めに呼び出されて行く。中村氏を訪ふ。鳴海氏來訪(留守)。

八月三日。小雨、風。前田(晁)氏よりハガキ、同じく返事。三井氏よりハガキ、同じく返事。滋子氏、來訪。鳴海氏の蜂群へ王を誘入させた。「喧嘩相手の急轉を覺悟せよ」(十五片)、日本主義へ。

八月四日。雨あり。三井、中村(武)氏へ書信。「大權干犯論の當否」(七片)、日本主義並に日本評論へ。鳴海氏を訪ふ(蜂王はうまく落ちついた)。

八月五日。少雨あり。「新舊日本の解釋」(十三片)、日本主義並に日本評論へ。印刷屋へハガキ。中村氏來訪。

八月六日。晴。夜、小雨。鳴海氏來訪(前島氏へ紹介。中澤氏來訪。野上氏を訪ふ。

八月七日。晴。中村、一元社二ケ所へハガキ。「描寫上の我執とは」(五片)、日本評論へ。

八月八日。九日。

八月十日。十日會へ行く。小林(一)氏へ手紙。「內部的寫實主義から」(九枚)、新潮へ。

八月十一日。新潮社主を訪ふ。新潮より四圓五十錢。三井氏よりハガキ。伊藤(證)氏の紹介にて十菱隆彥氏來訪。

八月十二日。雨あり。三井、木村、川口、宇野氏へハガキ。中村、生田(長江)、滋子三氏來訪。

八月十三日。曇。山本(唯)、池田、滋子三氏を訪ふ。

八月十四日。晴。小林氏より手紙。廣瀨氏よりハガキ。

八月十五日。曇。佐藤氏へ手紙(借金の件)。黑潮の中根氏來訪、共に横山、沼波二氏を訪ふ。

八月十六日。佐藤氏・江の島よりハガキ。靑柳(隆)氏よりハガキ。鳴海氏を訪ふ。

八月十七日。曇。三井、木村二氏より原稿。「比叡山下の日吉祭」(十枚)、黑潮へ。鳴海氏外一名と共に來訪。野村氏來訪。

八月十八日。雜誌へんしうずみ、印刷屋へ持つて行く。

八月十九日。晴。山本(唯)氏へ手紙。はら工合が惡くて何もできず。

八月二十日。晴。おやすよりハガキ。川俣氏の紹介を以つて島田美彥氏來訪。

八月二十一日。晴。深田氏來訪。島田氏再び來訪。田丸氏より手紙、同じく返事(短篇小說ローマ字譯の件)。加藤氏より轉居の通知。中村氏來訪。

八月二十二日。晴。野口氏よりハガキ。中澤氏來訪。鳴海氏來訪。

八月二十三日。晴。野村氏來訪。やツとけふから小說を書き初めた。

八月二十四日。夕かた小雨。竹腰、德島より歸京一泊。山川氏來訪。

八月廿五日。晴。鈴木(初)へ手紙。英枝と共に中村並に平塚氏を訪ふ。ストーナー譯料のうちへ五十圓也。

八月廿六日。晴。細田氏よりハガキ。木村(卯)を訪ふ。深田、川俣、武林氏を訪ふ。

八月廿七日。晴。大月氏よりハガキ。宮地氏來訪。川口氏を訪ひ、淸子に與へる七月分十圓を渡す。深田氏を訪ふ。
八月廿八日。晴。土岐、茅原二氏よりハガキ。新潮社より手紙並に三十圓（『耽溺』の重版稿料）
八月廿九日。晴。滋子氏來訪。中澤、大野二氏來訪。
八月三十日。夜、雨。十日會の飯能行きの件に就き、武藏野鐵道へかけ合に行つた。同氏を訪ふ。茅原氏よりハガキ。
八月三十一日。雨。鳴海氏を訪ふ。布川氏を訪ふ（今回露國へ派遣されるので俄かに露語を一般的におぼえたいと云ふので、敎師の周旋をしてやることにして、先づ沼波氏へ心當ての露人へかけ合つて貰ふハガキを出した。）
九月一日。夜、雨。黑潮社、川手、池田、滋子、前島諸氏を訪ふ。
九月二日。雨。加藤（一夫）氏よりハガキ。十日會の通知を出す。
九月三日。雨。森田、岡二氏よりハガキ。中澤氏來訪。生田（弘）氏の紹介を以つて小田部と云ふ人來訪。
九月四日。雨あり。山本（留守）、池田二氏を訪ふ。鳴海氏來訪（留守）。秀、大須賀、荒木（郁）、齋藤、加藤（謙）氏よりハガキ。中村並に黑潮へハガキ。

九月五日。雨。山本氏を訪ふ(留守)。德田(秋江)氏よりハガキ、同じく返事。清子より催促ハガキ。沼波氏よりハガキ。加藤、長田、柴田、在田、鈴木、小寺夫婦、正宗(得)氏よりハガキ。中村氏來訪。

九月六日。晴。尾山氏、短歌雜誌の原稿を頼みに來た。山本氏を訪ふ。夜、原氏大阪から歸宅を訪ふ。西村、山田、小泉氏よりハガキ。

九月七日。晴。川路、滋子、廣津氏よりハガキ。木村(鷹)氏來訪。原氏を伴つて皐月丸賣買の件を矢島氏へ紹介に行つた。中澤氏並に奧村氏來訪。小說「獨探嫌疑者と二人の女」(百枚)中央公論へ。

九月八日。曇。中村氏來訪、譯料の內金二十七圓を持つて來た。瀧田氏へ原稿を持つて行く。宮地湊屋よりハガキ。黑潮より稿料十圓也。隣りの野村氏を訪ふ。

九月九日。雨。十日會を飯能に開いた爲め、旅行に出た。久しぶりで田舍の景色を見た。

九月十日。雨。三浦氏來訪。

九月十一日。雨。吉野氏よりハガキ。「經濟的非戰論の缺陷」(二十六片)日本主義へ。日本評論へ。「心理の描寫と說明」(三片)、日本評論へ。一元社へハガキ。

九月十二日。雨。中澤氏來訪。一元社より稿料八圓。木村(卯)氏來訪。森田氏より招待狀。三井氏より原稿。

九月十三日。曇。「大阪辯護論」（四十六片）、大阪每日へ。
九月十四日。晴。吉野氏來訪。木村、大須賀二氏よりハガキ。
九月十五日。雨。大阪每日へ原稿。野村氏來訪。「人麿の佳作傑作」（十五枚）、短歌雜誌へ。
九月十六日。雨。尾山氏來訪。原稿を渡す。大須賀氏より原稿。院展並二科を見に行つた。雜誌へんしうずみ。
九月十七日。
九月十八日。晴。神崎氏來訪。中外社の青山氏來訪。中村氏へハガキ。
九月十九日。晴。中澤氏來訪（留守）。山本、池田、滋子、德田、生田、長田、瀧田諸氏を訪ふ。
九月廿日。晴。オキシヘラ會へハガキ。川口氏よりハガキ。東雲堂より稿料七圓五十錢。「夜の虹」（六片）、アカツキ文學並に中外日報。「僕の本年の作」（六片）、中外へ。
九月廿一日。晴。山本（唯）氏をその社に訪ひ、秘書役に會ひ、日本主義社へ寄附の件を話し込んだ。大月氏來訪。オキシヘラ會よりハガキ。
九月廿二日。曇。大阪每日並にオキシヘラ會へ書信。臺灣の中川氏より手紙、同じく返事。帝劇へ行く。
九月廿三日。雨。木村、中外、前島、山本（露）氏よりハガキ。島田氏來訪。鳴海氏を訪ふ。中村氏

へハガキ。

九月廿四日。雨。木村氏よりハガキ。「佐藤中將の軍事思想論」(十六片)、時事へ。

九月廿五日。雨。生田氏を訪ふ。「神社宗教論」(十一片)。瀧田氏を訪ふ(留守)。

九月廿六日。曇。中村氏を訪ふ(留守)。中澤氏來訪。山本(唯)氏より手紙(寄附謝絕)。西村(龜)氏よりハガキ、同じく返事。中央公論並に時事より原稿歸る。

九月廿七日。曇。薄田氏より返事、同じくハガキ。新東洋社より手紙。黑潮、若宮、茅原、萬月堂へ行く。布川氏より本日露國出發の通知。野村氏より家賃の催促。「博士ケーベルその人」(十一片)。

九月廿八日。曇。大月氏よりハガキ。萬月堂、若宮、池田氏を訪ふ。宅に月評會あり、十名集つた。

九月廿九日。雨。おほ家へ斷り。西村(龜)、一元社よりハガキ。

九月三十日。雨。若宮、北村二氏を訪ふ。

十月一日。大暴風雨。小林、帝國文學、伊藤、大須賀氏へハガキ。薄田氏より手紙、同じく返事。

磯村氏より耽溺英譯稿。今朝午前二時頃より大暴風雨になり、家根のかわらを飛ばし、庭の板垣を倒し、畑は丸でめちや〳〵になつた。一ちんち、その始末に費やした。電燈もけさからまだつかぬのである。

十月二日。晴。池田、滋子、川手氏を訪ふ。押川先生を訪ふたけれど留守であつた。後藤・滋子二氏よりハガキ。

十月三日。晴。遠藤、大須賀、西村(龜)氏よりハガキ。遠藤へ返事。「武林氏へ」(四片)、カネへ。畑を耕し山東菜をまいた。

十月四日。晴。大月氏よりハガキ。岩村家の新主人より手紙。前島、川手二氏を訪ふ。

十月五日。雨。中村、平塚二氏を訪ふ。大阪毎日より原稿返る(手違ひで「日本主義」の方へさきに出てしまつたから)。加藤(謙)、蔦月堂二氏よりハガキ。岡田氏より電報。

十月六日。雨。京都へ原稿。薄田氏より大阪毎日の爲め十五六回の短篇依賴、同じく承知の返事。加藤(朝)氏より手紙並に原稿。「憶良と旅人の對照」(三十二片)、短歌雜誌へ。

十月七日。雨。尾山氏へ昨夜の原稿。

十月八日。雨。月評會あり。

十月九日。曇。神崎氏より手紙同じく返事。原氏へ手紙。

十月十日。雨。尾山氏よりハガキ。十日會へ行く。朝、押川先生を訪ひ、雜誌維持のいい方法を相談して見た。三浦氏來訪。

十月十一日。晴。尾山氏よりハガキ。奥村氏來訪(犬と子供との寫眞を取つて貰つた)。

十月十二日。晴。橋川氏より原稿とハガキ。
十月十三日。曇。滋子氏よりハガキ。「中外」より手紙。岩村透氏追悼會の通知が來たけれど、金がないので行けさうもない。宮地氏來訪。
十月十四日。曇。家主より家賃の催促。英枝を中村氏へ使はす。生田（長）氏よりハガキ、同じく返事。木村、中澤二氏より原稿。三井氏より原稿。雜誌へんしうずみ。
十月十五日。雨あり。池田、押川二氏よりハガキ。英枝を短歌雜誌へ使はす。雜誌原稿全部を萬月堂に郵送。
十月十六日。雨。「法學士の大藏」（百三十片）、脫稿。
十月十七日。薄曇。奥村正雄氏死去の通知。短歌雜誌より稿料八圓。英枝を中村氏へ使はす。
十月十八日。雨。三井氏よりハガキ。瀧田氏へ原稿を持つて行く。
十月十九日。雨。奥村氏來訪。北峯氏より手紙。
十月廿日。雨。深田氏より紋つきの羽織を借りて演說會に出かけた。あかつき文學社第一講演會で「國語上の自營」を演說した。一時間で用意の半ばを演じ終ることができただけ。
十月廿一日。曇。北條、三井二氏へハガキ。
十月廿二日。鳴海氏來訪。押川先生へ手紙。

十月廿三日。晴。

十月廿四日。曇。原、山川二氏よりハガキ。大阪の小林氏より名簿。中澤、宮地、岡三氏一緒に來訪。瀧田氏へハガキ。「耽溺」の英譯を通讀訂正してしまつたので、磯村氏へ郵送。鳴海氏を訪ふ。

十月廿五日。雨。シエルコフ夫人へ手紙。原氏より手紙。

十月廿六日。晴。三浦、原子二氏を訪ふ。三浦氏と初めて及川氏を訪ふ。

十月廿七日。雨。

十月廿八日。雨。川口氏へハガキ。井上氏よりハガキ。三浦氏と及川氏を訪ふ。山本(三)氏を訪ふ。

十月廿九日。晴。「華族の家僕」(九十六片)を書き終はる、大阪毎日へ郵送。薄田氏へ手紙。有吉氏よりハガキ。萬月堂へハガキ。

十月卅日。晴。黑潮より原稿返り來たる。「青年」より手紙。野上氏よりハガキ。早稻田文學社よりハガキ。原氏來訪、原氏を訪ふ。「羅馬字と國語上の自營」(二十五枚分)、新小說へ。

十月卅一日。晴。萬月堂よりハガキ。山本(三)氏よりハガキ。萬月堂へ校正。押川氏を訪ふ。深田氏を訪ふ。川口氏を訪ひ、淸子への九月分を渡す。

十一月一日。夜、雨。羽太氏へ手紙。萬月堂へ校正。大須賀氏よりハガキ、同じく返事。鳴海氏、

三浦氏を訪ふ。
十一月二日。上司氏へハガキ。增田氏へ手紙（日蓮の研究出版交渉）。羽太氏より返事。三浦氏來訪。及川氏を訪ふ（留守）。生田氏を訪ふ（留守）。
十一月三日。曇。樋口紅陽と云ふ人、序文を賴みに來た。米倉より手紙。新日本社より手紙。大須賀氏宅へ招かれて英枝と共に行く。大阪毎日より稿料五十圓なり。
十一月四日。雨。米倉へ返事。上司氏より返事。新日本へハガキ。早文へ答へ。薄田氏へハガキ。三浦氏來訪。
十一月五日。晴。草村氏へ手紙（出版の件）。
十一月六日。晴。增田氏より返事。三浦氏が飯塚海軍中佐と高田氏とを伴つて來た。押川氏並に長谷川（天）氏を訪ふ。
十一月七日。晴。大江書房へ手紙。十日會より通知。島田氏より國民への原稿依賴。新潮社より手紙。前島、滋子、萬月堂へ行く。中澤氏來訪（留守）。
十一月八日。晴。島田、奧村二氏ハガキ。前島氏へハガキ。大月氏來訪。「新聞並に新聞記者の改善法」（二十五枚）、新日本へ。
十一月九日。雨。新日本へハガキ。大江書房より返事。薄田氏よりハガキ。前島、佐藤（鋼次郎）氏

より ハガキ。「國際正義はどこまで主張できるか」（十片）・日本主義と中外日報へ。本多氏來訪。

十一月十日。雨。竹腰よりハガキ。十日會へ出席。

十一月十一日。晴。本多氏二人來訪。奥村氏來訪、前島氏へ紹介の名刺を書く。「傳統と僕等の日本主義」（三十一片）・日本主義へ。中村氏へハガキ。

十一月十二日。晴。前島氏の紹介で東方時論の東氏を訪ふ。中澤氏よりハガキ。中央公論より手紙。「西宮氏に」。日本主義へ。「有島氏の愛と藝術」（六枚）、國民新聞へ。

十一月十三日。晴。新日本並に國民新聞へ原稿。本多氏を訪ふ。

十一月十四日。晴。中根、加能二氏へ手紙。福岡日々へ手紙。三井・木村二氏より原稿。小野・池田二氏を訪ふ。月評會があつた。

十一月十五日。晴。萬月堂へ雜誌の原稿。「若宮田中比較論」（二十五片）、中央公論の爲め。中澤氏より原稿。萬月堂へ追加原稿。

十一月十六日。早朝、雨。曇。大江書房へ手紙。小野氏よりハガキ。小野氏を訪ふ。三浦氏來訪。

十一月十七日。晴。三浦氏と共に隆文館の草村氏を訪ふ。本多氏來訪。大江氏より手紙。原、加能二氏よりハガキ。中澤氏よりハガキ。

十一月十八日。晴。大掃除。

十一月十九日。晴。木村氏並に長谷川(樂)を訪ふ。

十一月廿日。晴。小林氏より手紙、同じく返事。都留氏より手紙。

十一月廿一日。晴。原氏來訪。生方氏來訪。

十一月廿二日。晴。「中外」社より參圓也。國民新聞より四圓也。有島(武)氏へハガキ。三井氏へも三種。小林一三氏の招待で喜文へ行つた。

十一月廿三日。雨。黑潮の中根氏へ手紙。萬月堂へハガキ。

十一月廿四日。晴。有島、沼波二氏よりハガキ。

十一月廿五日。晴。沼波氏へ返事。黑潮、押川、池田、中根、中村氏を訪ふ。「一日の勞働」(八十片)、文章世界の爲め。

十一月廿六日。晴。滋子氏へハガキ。

十一月廿七日。晴、風。黑潮、新日本、池田、博文館を訪ふ。文章世界より三十六圓五十錢。

十一月廿八日。晴。押川氏の話で初めて飯野吉三郎氏に會ひに行つた。向ふは古神道を古神道のまま新らしい解釋なしに押し通すべきだと云ふが、僕は解釋を現代的にしなければ無駄だと云つた。然し僕の所謂新らしいとは外國的でなく日本人としての自覺を云ふのだから、つまり、兩人が兩端から持ち合つて日本主義と云ふところで一致點はあらうと思ふ。兎に角、今一回會ふことにして別れた。

押川氏へその知らせ。大八木氏へハガキと雜誌。田島夫人來訪、一泊。
十一月廿九日。晴。
十一月卅日。晴。田島夫人本日歸る。淸子へ十圓。
十二月一日。夜、雨。黑潮社、新日本社を訪ふ。山本一周忌の爲めに川俣氏宅に集つた。
十二月二日。晴。木村(卯)氏來訪。
十二月三日。夜、雨。三浦氏來訪。中根氏を訪ふ。
十二月四日。晴。女の世界へ返事。龍土會より通知、同じく返事。前島、滋子、藤井三氏を訪ふ。
十二月五日。晴。北隆館へハガキ。小說「乃木大將の惑ひ」(二十七枚半)。中央公論社より稿料十圓五十錢。
十二月六日。晴。飯野氏を訪ふ(けふは例に聽いた劍を握つて見せたが、つまり信念が强いから手が切れぬと云ふのは、木村秀雄氏のやるのと同樣心理學的にも解釋ができることだ。僕はこれを一番よく云つても充實の刹那を示す以上ではないと思つた)。
十二月七日。晴。東方時論、中外社、押川氏、川手氏を訪ふ。黑潮を訪ひ、稿料のうち九十九圓也。姉崎(博士)、千葉二氏よりハガキ。十日會の通知。
十二月八日。晴。中根氏來訪、共に浦安並に宇喜田村の水害地を見舞ふ。

十二月九日。

十二月十日。十日會へ行く。中澤、青山二氏來訪。「我國思想界の現狀と其救濟」（六十片）・「中外」へ。十二月八日より十一日に至るまでの書信――奥村正雄氏遺族よりハガキ。中外より電報。服部桂子氏よりハガキ。宇野氏より手紙。龍土會よりハガキ。新東洋より英文原稿返る。西本氏追悼會通知高橋（久）氏よりハガキ。

十二月十一日。晴。中外より稿料二つ分にて四十五圓。押川氏を訪ふ。

十二月十二日。晴。萬月堂、東方時論、加藤（房藏）氏、押川氏、池田氏を訪ふ。佛蘭西學會よりハガキ。川路氏來訪。內弟子にしてくれろと云つて來た女があつたさうだ。月評會であつた。

十二月十三日。晴。小寺（南）、齋藤（茂）氏よりハガキ。佛學會へ返事。羽太氏へ手紙。飯野氏へハガキ。押川、德田、生田、長田氏を訪ふ。

十二月十四日。晴。新日本、岡、前田、鈴木氏を訪ふ。

十二月十五日。夜、小雨、風。羽太氏より返事。淡路會より通知。「斷片語」（九片）。

十二月十六日。晴。萬月堂、池田氏、芝川氏を訪ふ。龍土會よりハガキ。

十二月十七日。晴。龍土會、野上氏へハガキ。北隆館よりハガキ、同じく返事。新潟よりハガキ。ワルト社よりハガキ。池田氏へ書冊。

十二月十八日。晴。
十二月十九日。晴。「鐘」よりハガキ。萬月堂よりハガキ。龍土會へ行く。
十二月二十日。
十二月二十一日。晴。中央文學より問合せ。山形縣の伏見と云ふ人來訪。岩淵に田中伯を訪ふ、病氣の爲め會へず。興津の西園寺侯を訪ふ、入れ違ひに上京とのことでこれも會へず。靜岡に伊藤（仙峯）氏を十五六年ぶりで訪問・一泊。保田俊子氏をも訪ふ。
十二月二十二日。晴。靜岡へ來た原氏と共に保田氏を訪ふ。夜、出發。
十二月二十三日。晴。早朝歸宅。池田氏よりハガキ。池田氏へ返事。野上氏よりハガキ。中外社よりの招待で神樂坂の常盤亭に行き、久津見氏並に福田博士に會ふ。千葉氏來訪。
十二月二十四日。晴。上田屋支店へハガキ。雜誌出來。押川氏を訪ふ。
十二月二十五日。晴。前島氏、滋子氏を訪ふ。
十二月二十六日。晴。押川氏、池田氏を訪ふ。歸つて見ると、つい近所に火事が出たあとであつた。中村（春）氏來訪。佛蘭西學會の招待で華族會館に行く。
十二月廿七日。晴。萬月堂、一元社、鳴海、原氏を訪ふ。芝川氏を訪ひ、先日の寄附金（社の爲め）に對する禮に靑木氏の紀念畫を渡した。この二三日の來信――中外社より、有島（武）氏より、木

村(卯)氏より。
十二月廿八日。晴。木村、內藤二氏へハガキ。
十二月廿九日。晴。芝川氏よりハガキ。新潟へ海苔を送る。
十二月三十日。晴。木村(卯)氏來訪。
十二月三十一日。晴。夜、生田氏を訪ひ、留守であつたから田中(純)氏に行き、そこから生田氏を呼んで共に除夜をした。

大正七年

一月一日。晴。子供と共に朝食前に「君が代」を歌はうとしたほどの氣ぶんになれたが、それもほんの僅かの間で、直ぐ面白くなくなつた。僕自身がもつと氣さくになれない爲めでもあらうが、英枝もよくないのだと思はれる。來賀狀へ二十ばかり答へを出した。

一月二日。雨。五つばかり、來賀狀へ答へ。

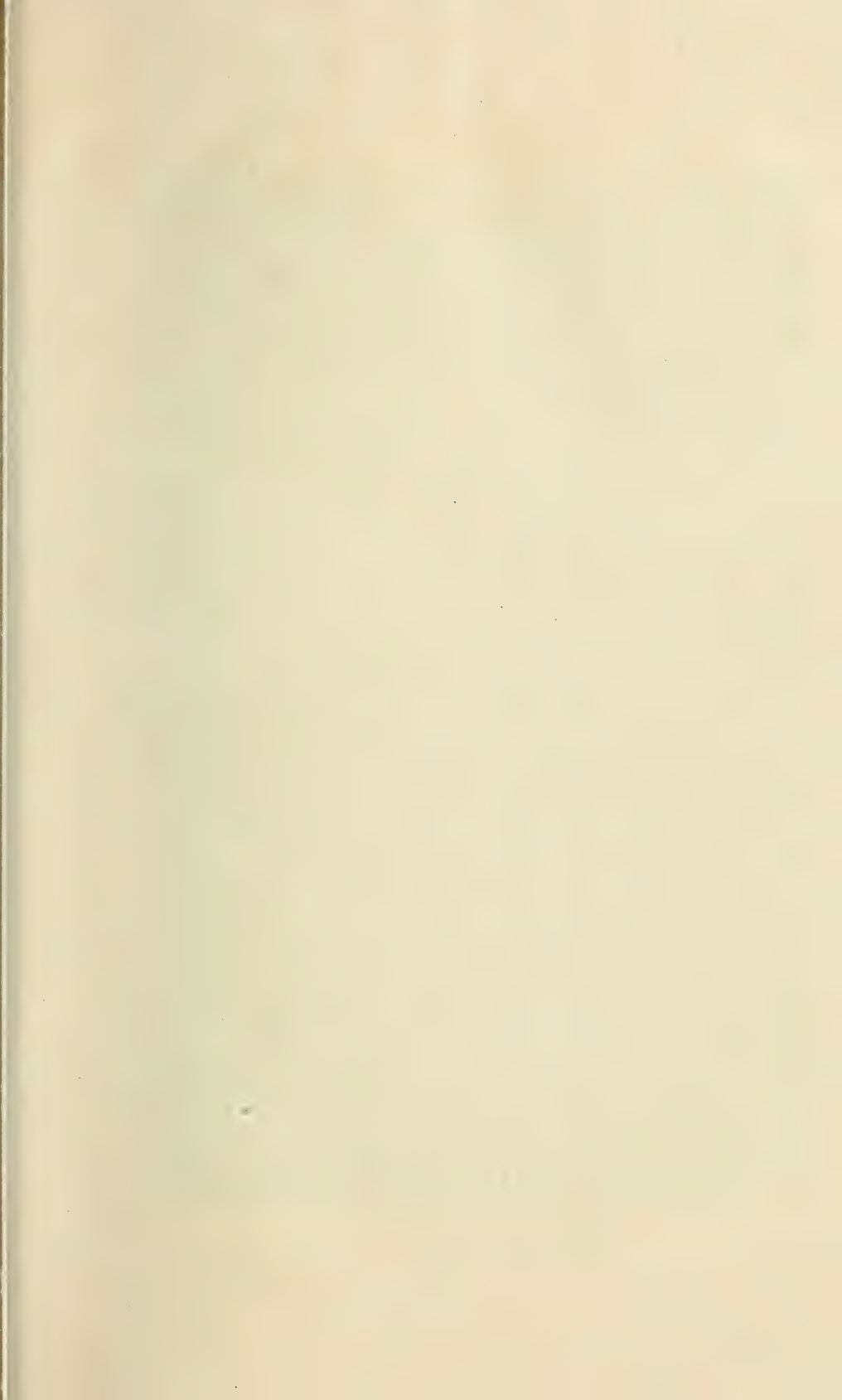
一月三日。晴。押川、飯野、蒲原、野口氏を訪ふ。木村（卯）氏、田代氏を伴つて來訪（留守）。來狀へ十三ばかり答へ。

一月四日。晴。吉野氏來訪。碁を打つて向ふを二目にしてやつた。

一月五日。晴。中澤氏來訪。野口（米）氏來訪。來狀への答へ四つを出した。

一月六日。晴。蒲原（有明）氏、原子氏來訪。賀狀への答へ、一。英枝と共に德田（聲）氏を訪ふ。

一月七日。晴。英枝を伴つて生田（長）氏宅のカルタ會に行く。「しづ機」の一節を歌つて見た。深田

（大正七年二月撮影）

◇雨　氷

△珍らしい現象

△被害は無つた

東京市內にては二日午前二時四十分頃より雨となり午前六時半頃歇みたるが同四時頃より樹木の枝葉電信電話線等悉く氷に包まれて珍らしく雨氷の現象となり地面の如きも一面に平滑なる氷に覆はれたり此の現象は天保五年正月と明治卅五年の正月とに起りし稀なる現象にして時には電信電話線の切斷する事あり數日前石川縣金澤に於ける雨氷は其の一例にして被害多かりしも昨朝のは其の程度には達せざりき（新聞の切拔）

氏來訪（留守）。

一月八日。晴。前島氏を訪ひ、オキシヘラの濕布をして貰ふ、また耳がかた一方きこえぬゆゑ。『文藝雜話』（三十八片）、新小說へ。

一月九日。晴。返狀、二つ。

一月十日。晴。十日會へ行く。この一週間ばかり、夜半は氷點下に五六度だと云ふほど寒い。返狀、三つ。吉野氏を訪ふ。

一月十一日。晴。耳科醫へ行く。小此木、飯野、池田、若宮、北村氏を訪ふ（共に留守）。關氏よりハガキ。本年、けふまでの年賀狀、總計百十二枚。

一月十二日。晴。

一月十三日。晴。月評會の新年宴會が宅にあつた、集まるもの十三人。石山氏夫婦來訪。

一月十四日。晴。飯野氏を訪ふ。中外社へ行く。加能氏よ

り校正が來たのを見た。

一月十五日。晴。中澤氏よりハガキ。內海(宗)氏より手紙。大月、三井二氏より原稿。古館、工藤二氏來訪。新日本へ小說「乃木大將の惑ひ」を渡す。

一月十六日。凪。瀧田氏來訪。中央公論へ小說を書く爲め。森ケ崎へ來た。

一月十七日。十八日、十九日。森ケ崎滯在。「非凡人のおもかげ」(五十九枚)、中央公論の爲め。

一月廿日。森ケ崎より歸る。朝、同地にあいて散文詩「森ケ崎の朝」。留守中に北原、與謝野、川手、高桑氏よりハガキ。

一月廿一日。中澤、小川二氏來訪。中央公論より七十圓八十錢。

一月廿二日。廿三日。(小雪)、廿四日。中井氏よりハガキ。深田氏を訪ふ。淸子へ十圓。「流行と不易」(八枚)、靑年文壇の爲め。

一月廿五日。雨あり。「散文詩に就いて」(十片)、時事へ。靑年文壇より稿料五圓。

一月廿六日。晴。春陽堂主人へ出版の相談手紙。新時代の杉中氏へハガキ。芝川、茅原氏を訪ふ。

一月廿七日。晴。芝川氏へ手紙(原氏のプレスボタンのことに就いて)。

一月廿八日。晴。春陽堂よりハガキ。

一月廿九日。晴。「散文詩の夢幻的說明」(二十三枚半)。

一月三十日。晴。前日の原稿を文章世界へ。加能氏よりハガキ、同じく返事。芝川氏より手紙。氷室氏よりハガキ。カフエシンバシよりハガキ。氷室氏來訪・宇都宮演說會のことを相談して歸つた。中澤氏來訪。

一月三十一日。晴。

二月一日。晴。「田中氏の學問獨立論」(九片)、日本主義へ。加能氏よりハガキ。時事より稿料二圓五十錢。

二月二日。晴。中根氏へハガキ。萬月堂へ校正に行く。加藤(房)、木村(鷹)、小寺三氏を訪ふ。仙臺の齋藤氏より手紙。

二月三日。雨あり。中根氏よりハガキ。新潮社より「耽溺」の印税十五圓。新時代の佐藤氏來訪。

二月四日。晴。正富氏よりハガキ。新時代へ原稿「新政論家等の思想程度」(三十一片)。

二月五日。晴。正富氏へ返事。文章世界へ原稿。前島。滋子、加藤三氏を訪ふ。中澤氏より端書。

二月六日。雨。木村(卯)、井上二氏よりハガキ。木村(卯)氏來訪。「誇張と疎放の意味如何」(十二片)、時事へ。

二月七日。晴。時事へ原稿。木村(鷹)氏へそのバイロン傑作集にのせる書翰一篇を。木村(卯)氏よりハガキ。氷室氏より手紙。

二月八日。晴。氷室氏へ返事。木村(卯)氏へハガキ。押川氏へ手紙。加能氏よりハガキ。博文館より稿料二十四圓四十錢。木村(鷹)氏よりハガキ。金澤貞一郎と云ふ人より手紙。同じく返事。小野崎よりハガキ。同じく返事。「吉野氏の民本主義論」(十三片)。日本主義へ。中澤氏來訪。「内務省圖書課長へ」(六片)。

二月九日。雨。春陽堂の林氏。十日會。三井氏よりハガキ。「大山氏の思想」(十八片)。日本主義へ。

二月十日。雨。十日會あり。川俣、大須賀二氏來訪、共に十日會へ行く。

二月十一日。曇。帝劇へ行く、小野崎よりハガキ。

二月十二日。晴。坪内(士)氏より手紙。

二月十三日。曇。博文館。田中伯爵。氷室、小野崎氏へ手紙又はハガキ。

二月十四日。雨。木村(卯)氏より原稿。

二月十五日。晴。雨。田代氏より手紙、同じく返事。月評會があつた。演說會の原稿を作る。

二月十六日。晴。宇都宮へ行き、小野崎へ一泊。

二月十七日。晴。小野崎方へ氷室氏來訪。演說會延期のことが分つた。同氏に伴はれて氷室村なる同氏宅へ行き一泊。

二月十八日。宇都宮に小雪。歸京。晴れ。留守中の來狀――河田、新日本畫會、齋藤氏より手紙並

にハガキ。田中伯爵より手紙。
二月十九日。晴。三浦氏、生田(長)氏來訪。田中伯爵へ手紙。氷室、小野崎二氏へハガキ。
二月廿日。晴。東北學院のシュネイダ氏へ英文手紙。西園寺侯へ手紙。三井氏よりハガキ、同じく返事。氷室氏より手紙、同じく返事。臺灣の柴田氏より原稿。小野崎へハガキ。「對話細君操縱策」(十五枚)、中外新論の爲め。飯野氏を訪ふ(留守)。伊藤(義)氏を訪ふ(留守)。
二月廿一日。晴。田代氏へ原稿並にハガキ。闘氏へ手紙。吉野氏來訪、共に衆議院の傍聽に行く。黑潮社、田中(純)・德田(秋聲)氏を訪ふ。田代氏よりハガキ。宮地氏より手紙。時事より稿料四圓。伊藤(義)氏よりハガキ。
二月廿二日。晴。田代、宮地・新時代へハガキ。新時代より稿料十二圓也。午後八時宅を出發旅行――
二月二十二日の午前に、長野から電報がかかり、「アス會アリ直グ來イ」「コンヤ一〇ジ上野立テ」とあつた。信濃日々の主筆闘露香氏からのだ。で、詳しいことは分らなかつたが、急いでその用意にかかり、指定の時間を後れないやうに家を出發した。巣鴨から田端へ下りて見ると、まだ殆ど二時間の餘裕があつたので、近處の山本鼎氏の宅に立ち寄つたところ、どうせ眠つてた方がいいのだから少し酒を飲んで行けと勸められた。長野市の闘氏宅に着したのは、何でも二十三日の午前七時

頃であつた。少し休めと云つて寢床を取つて呉れたが、久々で會つたのだから炬燵にさし向つて語り合ひながら十一時頃になつた。それから同社の副社長小瀧辰雄氏の案内で關氏と共に晝食をやりに、善光寺のかたはらなる見晴しのいい萬佳亭に登つた。

僕はまだ雪の深い國の景色を見たことがないので、この旅行には必ずそれが見えると想像してゐたのだが、この一つの樂しみを裏切られたのは案外であつた。それでもなほ汽車が上田あたりを越えてからは、すべての山の頂上から汽車の通り道なる平地までも眞ツ白になつてるのがあけがたの月夜に氣持ちよく見えた。そして今、萬佳亭から長野市の家々の屋根や川中島の平野が白くなつてるのを見おろして、あツたかいがどこかに凛としたところもある風を顏や胸に受けると、どうしても高原寒國の眺めだと云ふことが感じられた。

午後三時、小瀧氏を初め、信濃日々の記者二名と共に、僕は再び汽車の上の人となつて四十分ばかりの道を土倉驛まであと戻りし、土倉溫泉に來て晩食をすませ、直ぐ脊中合はせになつてる上山田溫泉に移り、そこの新築「溫泉劇場」に於いて、小瀧氏等數名の政談のあとで、僕は定められた日本主義演說を一時間ばかりやつた。聽衆は百六七十名足らずであつた。午後十一時に演說が終つてから、直ぐまた溫泉宿に於いて長い紙や扇面に揮毫を二十枚ばかり賴まれて書いた。初め斷わつたのだが、是非にと云はれたので思ひ切つて大膽に成つたのだ。僕の揮毫などとはこれが一生に初め

てである。

この演説會を世話した更南共鳴團の諸氏十數名はあとに殘つて僕等の爲めに宴會を午前の二時半までつづけた。そして日本主義社支部を溫泉劇場に設置することが定められた。同地は冠着山のふもとに在つて、その川床から鐵氣ある琉黃溫泉を涌出させてるところだ。湯好きの僕には名殘り惜しかつたが、宇都宮市に於ける同日の日程が動かせないので、ここにできた支部の代表者に見送られながら、午前二時半、僕は夜明けにはまだひまのある月夜を再び千曲川にさしかかつた。寒い風を辛抱して車のほろをはづさせると、三丁餘にも渡る低い板橋の眺めは僕の眠り不足な目に却つて鋭敏に吸收できた。

如何にも寒く冴え、夜づらに靄のかかつてるわけはないが、月の光に見る限りが何となくぼやけてゐたのは夜の感じが與へる想像からであらう。正面に白くそびえてる山のかげがさかしまに橋の下の水に寫つてるのかと思つたが、橋の中ほどに來て見ると、それはそのかげでも何でもなく、川原に消え殘る雪と砂利との構成する幻影であつたのが分つた。そしてごろ〳〵と車の輪のころがつて行く音は興をさますものであつたが、橋を渡り切つてから山のふもと路を車の輪がばり〳〵と途上の氷を破つて進む勢ひに再び心が緊張を增した。

土倉驛から高崎に着する汽車の進みが後れたので、乘り換への車は待つてゐなかつた。そして僕

の早く溫泉場を出た苦心も無駄になつた。ねむたいにも眠られず、一時間半を乘り換へ場に待つて次の列車を捉へた。宇都宮には午後一時半に着いた。停車場に待ち受けてた僕の甥と共に、直ぐ車を舊城址に走らせた。一週間前に見た市役所前の噴水は、水を吹き上げつつも幾百すぢかに岡まつて、氷のしだれ柳を成してゐたが、けふはあツたかいので全くそんな幻影を帶びてゐなかつた。舊城址の演說場には既に聽衆が多く集つてて、熱心な主催者の氷室正氏は氣が氣でなかつたと云つた。僕も然し汽車の上で氣が氣でなかつたのだ。

なほも集りつつあつた人々の爲めに、僕は所定の時間を止むを得ず一時間後れて、午後二時から約一時間半を演說した。もツと述べるのが主催者に對しても本統であつたのだらうが、二日二晩を少しも横になつて眠らなかつた疲勞の爲めにうまい工合に行かなかつた。それに、或事件を述べる時など、少し胸が塞がつて來たので、途中から別な問題に移つたところもあつた。二百の聽衆は過半、同市の智識階級に屬する人々であつたさうで、上山田に於けるよりも人數は多かつた。

演說後、別室でこれも氷室氏催しの宴に列し、それから甥の宅へ行つてぐツすり翌二十五日の朝まで眠つた。

二月廿五日。晴。朝、小野崎の家を出で、氷室氏に送られて宇都宮出發。歸京して直ぐ帝劇に村田かく子の總見に行く。

留守中の來狀——西園寺侯、三井氏、田代氏より。

二月廿六日。晴。原(正)、伊藤(義)氏來訪。

二月廿七日。雨。鷗、小瀧・氷室、小野崎氏へ手紙。萬歳社へ廣告原稿。新潟へハガキ。萬月堂、末日會、井上猛と云ふ人よりハガキ。鳴海氏を訪ふ。

二月廿八日。雪。井上氏へ返事(その子の出奔を知らないかと云つて來たのだが、僕の名をかたつて誰れかがその子を東京へ呼び出したものらしい。絶えておぼえなき人のことだから、迷惑を感ずると云つてやつた)。飯野氏を訪ふ。

三月一日。晴。木村、田代二氏を訪ふ。

三月二日。晴。田代氏來訪。中外新論より七十圓。小野崎より手紙。有島(武)氏よりハガキ、同じく返事。中村(星)氏より手紙、同じく返事。

三月三日。晴。木村氏、小川氏來訪。中外新論の爲めに「思想と文藝評」(二十八片)。中央文學よりハガキ、同じく返事。

三月四日。晴。新論へ原稿。新潟へ九圓送る。滋子、生方二氏を訪ふ。

三月五日。晴。萩原(井泉水)氏より手紙並に書物。前島、中村・小川、野上氏を訪ふ。

三月六日。晴。宮原・萩原二氏へハガキ。曉聲社・佐藤(義)・及川・春陽堂へ書信。尾山氏來訪。

井上氏よりハガキ。萬月堂、アルス二ケ所を訪ふ。

三月七日。晴。山下氏へ手紙。古垣氏へハガキ。佐藤(義)氏より返事。奥山氏よりハガキ。奥村氏來訪。薫が車力に敷かれたので、順天堂へつれて行つた。今、早稻田文學へ短篇を賴まれてながら、どうも書き苦しかつたところであるので、直ちにこの事件を題材にすることにした。

三月八日。晴。短歌雜誌よりハガキ。佐藤(義)氏よりハガキ。中村(星)氏よりハガキ。十日會より通知。川俣氏より手紙。順天堂、新潮社を訪ふ。新潮社より印税の先借り十圓。また左の耳がきこえなくなつたので、小此木病院へ行く。

三月九日。晴。中村氏並に短歌雜誌へ返事。隆文館の草村氏へ手紙(飜譯の件相談)。新潮社より印税先借り貳十圓也。小此木耳科へ行く。順天堂から薫を迎へ返す(足の骨は幸ひに折れてなかつた)。

三月十日。雨。夜、あらし。鹽田氏來訪。耳科へ行く。十日會。

川俣氏より手紙。河井、鹽田氏よりハガキ。加藤氏より原稿。

三月十一日。晴。耳科へ。中井氏來訪。田代氏より手紙。德田氏を訪ふ。「强い相手」(四十片)、早文の爲め。

三月十二日。晴。田代氏へ手紙。耳科へ。

三月十三日。晴。河井氏よりハガキ。大月氏よりハガキ。青柳氏來訪。「人麿の高市皇子殯宮歌」(二

十三片)。
三月十四日。晴。耳科へ。吉野氏を訪ふ。奥村氏並に明子氏來訪。三井・木村二氏より原稿。川路氏より手紙。尾山氏を訪ふ。
三月十五日。雨。鎌田氏よりハガキ。横濱の姉よりハガキ、同じく返事。樋口(紅)氏へハガキ。月評會あり。「平和論者との對話」(二十三片)、世界公論へ。
三月十六日。雨。橋川氏よりハガキ。世界公論の安藤音三郎氏來訪。世界公論社より稿料十圓なり。
三月十七日。晴。耳科へ。關氏よりハガキ。「中產農民の漸滅と高等遊民の勞働」(廿三片)、日本主義へ。「民愚主義の議會答辯」(八片)・日本主義へ。散文詩「外交政策」(二片)・日本主義へ。「斷片語」(四片)。
三月十八日。晴。川路氏へ返事。森田。加藤二氏を訪ふ。樋口氏よりハガキ。「井泉水氏の句」(四片)、日本主義へ。
三月十九日。晴。隆文館・中外新論、川手氏を訪ふ。耳科へ。川路氏來訪(留守)。明治學院より報告。
三月廿日。晴・風。川路氏來訪。

三月廿一日。耳科へ。三浦氏を訪ふ。萬歲社より手紙。蜂がうゑて死に出すのがあるので蜜をやつた。

三月廿二日。ちよつとあられあり、雷鳴あり。蜂は蜜を吸收してない。三浦氏・中澤氏來訪。萬月堂へハガキ。雄辯會へ原稿・「加藤朝鳥氏に」(六片)を。「三たび西宮氏へ」(五片)。

三月廿三日。晴。山口氏へ拾圓を振替で、淸子への二月分として。古垣氏より手紙。耳科へ。

三月廿四日。晴。雄辯會よりハガキ。耳科へ。原子・滋子、武林氏を訪ふ。

三月廿五日。雨。田中伯へ手紙。飯野氏へ手紙。萬月堂へハガキ。

三月廿六日。晴(夜、雨)。隆文館の草村氏よりハガキ。隆文館を訪ふ。押川氏を訪ふ。三浦氏を訪ふ。田代氏より手紙。「人の主義」(十六片)、時事へ。

三月廿七日。晴。隆文館を訪ふ。途中で平塚篤氏に逢ひ、カフエライオンに立ちよる。田中純氏春陽堂辭職の通知。

三月廿八日。晴。隆文館を訪ひ、ゲエテの「キルヘルムマイステル」の後部を飜譯する約束ができた。實業の世界並に中外社を訪ふ。後者で、さきに送つた小說「乃木大將のまどひ」を受け取つた。宮中のことがあるのでどうしてものせにくいとのことだ。夜、帝國小學校の西山氏を訪ふ。子供の一人を同校へ入れようかと思つて。

三月廿九日。雨。混沌社よりハガキ。前島氏を訪ふ。末日會へハガキ。
三月卅日。雨。三浦氏來訪。原氏を訪ふ。
三月卅一日。晴。池田氏よりハガキ、同じく返事。石丸氏よりハガキ、同じく返事。伊藤(證)氏よりハガキ。末日會に出席、代議士の尾崎敬義その他に會つた。
四月一日。晴。隆文館の關氏よりハガキ、同じく返事。大須賀氏より手紙。
四月二日。晴。小川、三井二氏よりハガキ。「涙のこぼれた話」(二十二片)、中外日報並に日本主義へ。蜜蜂はとう〳〵死んでたのを發見した。井上氏が大學英文科の學生と共に訪問して來た。中澤氏來訪。
四月三日。晴。有島氏よりハガキ、同じくへハガキ。萬月堂より。眞雄がどうも少し物忘れをするので耳科へつれて行つて見て貰つたら、喉の奥にはれがあつて、それが爲めに腦力を害せられてゐたのだ。田中(純)並に石丸氏を訪ふ。本日、初めて子供を三名もつれて上野へ行つて見たが、下の子が自轉車にぶつかつた。
四月四日。晴。新潮の中村氏、原稿を頼みに。木村(卯)、宮地二氏來訪。十日會の通知。
四月五日。晴。耳科へ行つた。同じく眞雄の喉にも手術が施された。宮地氏よりハガキ。伊藤(證)氏よりハガキ。

四月六日。晴。氷室氏、三井氏より手紙。荒木滋子氏よりハガキ、同じく使ひをやる。中外社を訪ふ。中外新論社より稿料のうちを十圓。

四月七日。雨。石丸、大月二氏よりハガキ。蒲原氏より手紙。先日田中純氏のところで會つた平山幹子氏より手紙。時事より稿料四圓。吉野氏來訪(留守)。十日會の會場柴又へ行つた。「蛇の記憶」(十八枚半)、中外へ。

四月八日。晴。田代氏よりハガキ。「野村氏の初見參」(十二片)、中外新論へ。中澤氏來訪。早文より稿料十六圓也。

四月九日。夜、雨。安藤氏へハガキ。中外新論へ原稿並に手紙。小川氏より手紙。中村(孤)氏に送つたハガキが不明で歸つて來た。大阪の上田氏より手紙、同じく返事。けふ、菊の根を分けた。

四月十日。雨。丁度根わけをした菊によかつた。三井氏よりハガキ並に原稿。同氏へ手紙。

四月十一日。雨。木村氏よりハガキ。英枝の弟俊麿來たる。「憑き物」(百十九片)、新潮へ。

四月十二日。晴。新潮より稿料四十八圓也。

四月十三日。

四月十四日。曇。隆文館より手紙。樋口氏より手紙。奧村氏よりハガキ。月評會の觀櫻會があつた。

四月十五日。晴。隆文館を訪ふ。ゲーテの譯は駄目になつた。中外社を訪ひ、稿料のうち七圓二十錢也。飯野氏を訪ふ。

四月十六日。晴。耳科へ。吉野、石丸二氏を訪ふ。

四月十七日。曇。中澤氏來訪。樋口氏へハガキ。英枝の弟去る。但し、再び歸宅、つづけてゐることになる。

四月十八日。宇野氏より手紙、同じく返事。

四月十九日。樋口氏來訪、三浦氏を訪ふ。

四月廿日。一日中、病臥。

四月廿一日。晴。吉野氏來訪、碁を七八番試む。

四月廿二――廿六日。風邪の氣味にてぐづ〳〵してしまつた。その間に新潮社の森本氏來訪、一つ談話筆記を取つて行つた。宇野氏より發行人變更屆の押印をして來た。

四月廿七日。廿八日。廿九日。中根氏來訪、共に横山、沼波二氏を訪ふ。「空氣銃」(百五十一片)、中外へ。

四月三十日。夜、雨。中外社より原稿料のうち四十圓也。清子へ拾圓也。

五月一日。雨。英枝との結婚屆を出す、同時に正英と美喜とを認知して第五男と第三女とにした。中澤、加能二氏よりハガキ。西宮、中村(武)二氏へハガキ。

五月二日。晴。神崎氏よりハガキ。西宮氏よりハガキ、同じく返事。羽太氏より手紙、同じく返事。中村(武)氏へ返事。三浦、中澤二氏來訪。石丸、野上二氏を訪ふ。

五月三日。晴。飯野氏を訪ふ。森田氏よりハガキ。新潟よりハガキ。新潮の森本氏來訪、同氏へ原稿となる舊手紙二通。雄辯社より手紙(原稿依頼)、同じく返事。

五月四日。曇。新潟へ結婚ずみの通知狀を出した。吉野氏を訪ふ。耳科へ。

五月五日。雨。中外社を訪ふ。久保田、沼波、中根三氏よりハガキ。「僕のイズム觀を述べて諸家のイズム觀を評す」(三十片)、新潮へ。

五月六日。滋子氏を訪ふ。

五月七日。曇。吉野、中根二氏來訪、共に横山(健)氏を訪ふ。中澤氏より轉居通知。長安氏より手紙。小野崎氏より手紙、同じく返事。

五月八日。晴。太陽の淺田氏より原稿依頼、承知の返事。新潮社より稿料七圓五十錢。十日會よりハガキ。加藤(謙)氏の紹介で大觀社の池田氏來訪。「詩論四則」(二十一片)、文章世界に。

五月九日。晴。伊藤(義)氏來訪、渠が東海生命保險會社へ這入る身元保證をしてやつた。三浦氏を

訪ふ。「現太戰に對する傍觀的觀察と自覺の印象」(十八片)、大陽へ。

五月十日。雨。加能氏よりハガキ。小野崎よりハガキ、同じく返事。十日會へ出席。「外國語の必要程度と國語戰」(二十五片)、日本主義へ。

五月十一日。曇。木村(幹)氏來訪。

五月十二日。晴。「室伏氏の雷同移植的民主論」(二十二片)、日本主義へ。中澤氏來訪。小野崎が蒙古熱心家の西岡士郎氏をつれて來た。木村(卯)氏よりハガキ。

五月十三日。晴。三浦氏夫婦來訪。石丸氏へハガキ。

五月十四日。晴。大月氏來訪。西岡氏より手紙(これによると、西藏のラマ經文中にジンギス汗のことをヨシツネと云ふよし。)

五月十五日。晴。「渠の疑惑」(八十二片)、「大觀」の爲め。三井氏よりハガキ。石丸氏より返事。十日會があつた。

五月十六日。晴。池田氏へハガキ。三井氏より原稿。元丸より手紙。雜誌へんしうを終る。飯野氏を訪ふ。森田氏を訪ふ。

五月十七日。雨。大觀の池田氏より電報。

五月十八日。晴。使ひを大觀社へ出し、原稿を届けた。池田氏へハガキ。春陽堂の野村氏來訪、新

小說の原稿依賴。新潮の森本氏へハガキ。春陽堂の野村氏來訪、小說依賴。

五月十九日。夜、雨。大觀社より稿料五十九圓。池田氏來訪(留守)。中澤氏來訪、同氏宅へ伴はれた。

五月二十日。

五月二十一日。晴。野村氏、原稿の催促に來た。「入れ墨師の子」(八十一片)新小說の爲め(編者曰、その篇は六月號の新小說に掲載せられ、直ちに發賣を禁止されてしまつた。丁度青春の頃の前に入るべきもので、その姉妹篇である。どうかして削れるだけ削つても登載したいと思つて、內務省の方へも奔走してみたが、何うしても材料全體が惡いと云ふので、絕對に差止められてしまつた事を遺憾に思ふ)。

五月二十二日。晴。中澤氏來訪。大掃除。三井氏へハガキ。蔦月堂へハガキ。英枝歸省を上野まで見送る。田中氏よりハガキ。

春陽堂より三十二圓八十錢。

五月二十三日。夜、雨。井上、森本二氏よりハガキ。雜誌校正を出す。川路氏の紹介で畫家有元氏來訪。短册に詩句を書いてやつた(五枚)。

五月二十四日。小雨。菊子氏へハガキ。大阪陽明學會よりハガキ、同じく返事。石丸氏來訪。「雄辯」へ手紙。

五月二十五日。晴。雄辯並に大阪陽明學會より手紙。杉田孃が尋ねて來たが、英枝が留守なので直ちに歸つた。

五月二十六日。晴。井上氏へハガキ。英枝より手紙、同じく返事。

五月二十七日。晴。三井氏、井上氏、末日會よりハガキ。滋子氏を訪ふ。「靑春の頃」(八十枚)、雄辯へ。(編者曰、第六卷靑春の頃の解題に文章世界に掲載せられたと記しておいたのは誤りで、雄辯に掲げたのであつた事を訂正します)。新潮の森本氏來訪。雄辯へハガキ。

五月二十八日。夜、雨。中外社より有樂座招待。英枝よりハガキ。前島、新潮社、小川、德田氏を訪ふ。雄辯社より稿料八十圓也。

五月二十九日。曇。大須賀、雄辯社二氏へハガキ。大觀の池田、英枝、大月氏よりハガキ。中外招待の有樂座へ「圓光」を見に行つた。德田氏を訪ふ。

五月卅日。晴。英枝へ手紙。春陽堂の野村氏へハガキ。木村、森田、川俣氏よりハガキ。ひさし振りで大町氏をたづねたけれども留守、川俣、大須賀、中尾氏を訪ふ。佐藤氏來訪。龍士會の通知を出す。

五月三十一日。雨。森田氏へハガキ。淺岡氏へ手紙。末日會に行き、小村俟その他に會ふ。

六月一日。晴。田代、野村氏よりハガキ。藤野愛子氏より手紙、同じく訪問す。深田、木村二氏來

訪。

六月二日。曇。久保田氏へハガキ。淺岡氏よりハガキ。英枝より手紙。平塚篤氏と會見。

六月三日。雨。吉野氏を訪ふ。平山氏より手紙、同じく返事。原氏を訪ふ。

六月四日。雨。春陽堂を訪ひ、野村氏と共に內務省に發賣禁止の內意を聽きに行つた。赤木と云ふ事務官に面會。「入れ墨師の子が」禁止されたのであつて、兄弟姦を書いた爲めに普通では挑發的でなくとほることが挑發と見られたのだ。平塚、原子、滋子氏を訪ふ。

六月五日。曇。「海上のいのち拾ひ」(九片)、中外新論に。三井氏よりハガキ。龍土會へ行く。

六月六日。晴。三浦、生方、靑柳氏來訪。英枝を上野へ迎へに行つた。

六月七日。晴。三井氏よりハガキ並に原稿。田中(純)氏を訪ひ、また共に小川氏を訪ふ。

六月八日。晴。鳴海氏來訪。「揖保川の月夜」(六片)、大觀へ。

六月九日。夜、雨。池田氏へ原稿。川路氏よりハガキ。吉野、平山(幹)、大月、中村、安倍夫婦の六名、順々に落ち合つた。アメリカの晩人生より手紙。

六月十日。雨。川俣氏よりハガキ。十日會へ出席。

六月十一日。晴。中根、吉野二氏來訪、あとで一緒に秋聲氏を訪ふ。土岐氏より手紙並に「指の傷」の羅馬字がき。雄辯會より使ひ。

六月十二日。晴。土岐氏へ返稿。井上氏より原稿。三井氏よりハガキ、同じく返事。土田へハガキ。平山氏より手紙。木村氏よりハガキ。「政治小說の出ぬ所以」(三十一片)、世界公論へ。石丸氏來訪。

六月十三日。曇。野口、土岐、田代三氏よりハガキ。新潮社の加藤氏より手紙、同じく返事。深田夫婦來訪。

六月十四日。晴。幹子氏來訪。流行世界の高橋氏來訪。中外の安成氏より手紙、同じく返事(小說選者依賴の件)。天佑社より手紙。木村氏より原稿。中村(春)氏來訪。

六月十五日。中根、吉野二氏來訪。月評會あり、荒川氏が藝人の猫八をつれて來た。

六月十六日。曇。愛子氏より半切の書。

六月十七日。曇。新潟へ手紙。三浦氏、石丸氏來訪。石丸氏を訪ふ。

六月十八日。曇。田中(純)、三井氏へ手紙。新潮社、大同館並に玄文社へ出版の相談。櫻井一作氏へ手紙と雜誌十部。松本氏へハガキ。世界公論へ原稿、同じく稿料十圓也。石丸氏來訪。中村(春)氏を訪ふ。

六月十九日。雨。流行世界の高橋氏へハガキ。加藤介春氏へハガキ。大同館(阪本眞三)氏よりハガキ。電話加入の申込をしに中央電話局へ行つた歸りに、新潮並に田中(純)氏を訪ふ。石丸氏のとこ

ろで氏の長篇小說を讀ませられ、乞はれたままに批評と注意とを與へた。中村氏來訪。
六月二十日。雨。荒川氏、闕氏、よみうりの淸水氏來訪。山川氏よりハガキ。
六月二十一日。雨。齋木氏よりハガキ。太陽より稿料十圓也。「僕の見たトルストイ」（三十一片）、トルストイ研究へ。
六月二十二日。晴。靈英氏よりハガキ、同じく返事。中川（小）、小林（一）氏へ軸物（買はせる爲め）。原氏の義父が死去、悔みに行く。
六月二十三日。曇、夜風あり。中根氏が堺の禪僧一名をつれて來た。
六月二十四日。晴。新潮社より拾五圓也、「耽溺」印稅前借。小川氏のところで初めて西宮氏に逢つた。川俣氏を訪ふ。三井氏よりハガキ。
六月二十五日。雨。雜誌校正をすませる。
六月二十六日。曇。櫻井、氷峯、靑柳氏より手紙。中外新論より稿料四圓也。平塚氏を訪ふ（留守）。靑柳、安藤二氏へハガキ。
六月二十七日。晴。大觀社を訪ふ。靑柳氏より手紙あり、また「靑春の頃」が發賣禁止になつたと云ふ通知があつたので、雄辯社を訪ふ。田代氏を訪ひ、共に木村氏へ行く。坂下町の長谷川を訪ふ。
六月二十八日。晴。三浦氏を訪ひ、共に田中、稻毛、藤生、今井、並に三星へ行く。長谷川へハガ

キ。

六月二十九日。晴。田中氏を訪ふ。吉野氏を訪ひ、ともに三星、日本評論社等を訪ふ。菊子氏來訪。

六月三十日。晴。平塚(篤)氏を訪ふ(留守)。石丸氏を訪ふ。大月、原二氏來訪。清子へ十圓也。

この四日間の來狀――加藤(介春)、小林、中根の諸氏より。文章世界より稿料十圓也。

七月一日。(一字缺)。愛子、內藤、加藤(介)、靑柳氏へハガキ。

七月二日。晴。小倉、田中(純)二氏よりハガキ。新潮社より稿料八圓。新潟より手紙。

七月三日。晴。井上氏よりハガキ。小林氏へハガキ二。

七月四日。夜、雨。池田氏へハガキ。

七月五日。雨。安藤氏よりハガキ、中澤氏來訪。

七月六日。夜、雨。池田氏よりハガキ。新潮よりハガキ。池田、若宮、北村三氏を訪ふ。(若宮氏にブッゲルを返却)關氏へハガキ。

七月七日。晴。三井、加能、新時代へハガキ。中川(小十郎)氏より手紙、同氏を東京ステーションホテルに訪ふ。田中(純)氏より返事、同氏を訪ふ。押川、川手氏を訪ふ。永田警保局長をその官宅に訪ふたが、留守。大須賀、中尾、川俣氏を訪ふ。

七月八日。晴。永田氏を訪ふ(留守)。

七月九日。晴。永田氏を內務省に訪ひ、左の件を質問に及んだ。一、僕に對して內務省では誤解若しくは偏見を有してゐることは以前から新聞記者どもの知つてることであるが、それはどうしたことであるか？これに對する渠の答へは、まさかそんなこともなからうが、半獸主義と云ふことが云はれた時代に少し危險視されたその餘波に過ぎなからうと云ふのであつた。これには僕は半獸主義が古神道の精神を新解釋に附したものであつて、今の日本主義の發足點なることを說明した。第二に、僕の作を何でも當分發賣禁止にして、當分葬らうと云つてるさうだが、事實そんな考へか？これはその實僕ばかりに向けた考へか、また葬らうとする人數中に僕が實際に數へられてるのか、どッちも確かでなかつたが、少し鎌をかけて見たのであつた。渠の答へは、いやそんなことはない、內務省では大杉氏のやうな社會主義者にでもその書いた物に就いて別々に判斷するやうに努め、決してその人全體に就いて拒否しない。まして社會主義者のやうな者でない僕に對してはだと云ふのであつた。第三に、雄辯社へ七月號を押さへに行つた巡査が岩野の如きは注意人物だからあんな者の作を掲載するのはやめろと云つたさうだが、これでは人の生活若しくは營業を妨害するのである。その責任は警保局にあるか警視廳ばかりにあるか？これに對する渠の答へは、直接には警視廳にあるが、警保局でもれんらくがないこともないから、局長として警視廳へそんなことのないやうに語つて置くとのことであつた。

斯う云ふことで正面の用事はすみ、あとは餘談で分れた。渠は同國人で、もとは手紙のやり取りもしてゐたことがある。會つたのはけふが初めてだ。
中川氏を再び東京ステーションホテルに訪ね、いろ〳〵政治上や思想上の話をした。氏は日本主義社へ五十圓を寄附した。
七月十日。晴。歌子氏、安子氏を訪ふ。十日會へ行く。宮地氏來訪。
七月十一日。晴。三浦氏が文昭堂の主人林繁夫氏をつれて來た。原子氏來訪。江部氏を訪ふ。安子氏よりハガキ。木村氏よりハガキ。
七月十二日。暴風。三井氏よりハガキ。
一二三日來、不快でたまらないのである。薫がこれまでにも度々不審のかどがあつても、まさかと思つて見のがして來たのだが、一昨日家の金七圓を盜んで竹腰に與へたことを白狀した。そのついでに、すべてをも白狀したが、その十二年の時、乃ち、五年前に、初めて宮仲の居へ來た年に、暮れの三十一日に郵便局から出してこさせた十五圓を落したと云ふのも竹腰に與へたのであつた。その時竹腰は直ぐあとからやつて來てとぼけてゐたが、今から思ふと、あの時から子供を使嗾してちび〳〵家の物を盜ませてゐたのであつた。僕は薫の學校を斷然やめさせて小僧にでもやつてしまはうと思つてる。
この事件をしほに英枝は別れることを申し出したので、僕も承知しないわけに行かなかつた。

原氏を訪ひ、薫の小僧になる口を大阪の方へ照會して貰つた。

竹腰へ手紙を出し、先日盜ませた金七圓を返せ、然らざれば訴へると云つてやつた。酷のやうだが、さうでもしなければいつまでも直るまい。

七月十三日。晴。茅原(茂)氏朝より來訪。碁を二十番ほど戰ひ、それから夜になつて玉突きに行つて十二時過ぎまで。然し子供が親の物を盜みをしたし、英枝は里へ歸ると云つてるし、英枝が歸るなら歸つてもよいが、それよりも不愉快なのは子供が親をあざむいてたことで、それを思ふと何の仕事も手につかぬ。きのふ、原氏に賴んで大阪へ薫を小僧にやる口を照會させたが、眞雄もどうせあの竹腰がついてたらまた薫の二の前になるだらうからどツかへやつてしまうつもりだ。

七月十四日。晴。

○竹腰へ子供を返すに就き左の事々を申しやる――

一、子供をおだてて お前が外からおれの家の物を絶えず盜ませてゐたやうな不心得では子供の生ひ立ちに望みがないから寧ろお前が何とでも子供をしてしまへ。

一、おれをあざむいてたやうな薫にも呆れてしまつたし、お前が生きてる限り眞雄をもおだててさうさせるやうになるだらうからこれにも見込みなし、不良少年じみた二人ともやるから、籍を取れ。

一、お前と子供との爲めに今回英枝とも別れることになつたが、女房と別れるのよりも子供に呆れた方がおれには何倍悲しいか知れぬ。けれども、おれの性質として以後薫と眞雄とは死んだものと諦める。

以上。

○別れる子供に與へる心得――

一、母親が取れと云つても父親の物を取るのは親に對して不孝である

一、物を盜めと敎へる母親は子供にだツてもいい母親ではない

一、小僧に行つても、その主人の物を盜んで母親に渡すのは母親をも泥棒にする不孝な子である

一、親孝行をする爲めにでも惡事をするのは矢張り惡い

一、これまで父親をあざむいてた罪をあがなふつもりなら、小僧から仕上げて立派な人間になれ、それまでは父親へ音信をするに及ばぬ

一、どうせ竹腰にやることにしたお前らだから、以後岩野を名乘らず竹腰薫、竹腰眞雄と云つてゐよ

一、お前等が他日立派な人間になつた時再びおれに會ひたい場合にはこの心得書きを持つて來たれ

大正七年七月十四日

父認む

けふ午後二時に薫と眞雄とに以上の手紙と心得書きとを持たせて竹腰の方へ送つた。或は誰れかにつれられて歸るかとも待ち受けたが、とう〳〵歸らなかつた。

木村・三井二氏より原稿・木村(鷹)氏より轉居通知。中外社より中元、大觀の池田氏より中元。深田氏來訪、子供のこと並に英枝の離婚希望のことを話したら、英枝に對して思ひとまるやうにいろいろ云つてゐたツけ。

七月十五日。夜、雨。宅に月評會あり、七名會合。隆文館の關氏より手紙。「日本的と無消化的批判」(九片)。

七月十六日。晴。三浦、大月二氏來訪。原氏宅へ竹腰が薫をつれて來たさうだが、僕は會はなかつた。警察へ辯解しに行つたさうだ。

七月十七日。晴。飯野氏を訪ふ。中外新論・川手二氏を訪ふ。中澤氏より原稿。雜誌編しろずみ。江部氏を訪ふ。

七月十八日。曇、夜雨。帝劇へ行く。けさ、大塚の警察分署から呼びに來たので行つて見ると、竹腰は子供を入らぬからと云つてるので、矢ツ張りこちらへ一先づ引き取ることにした。で、夜おそく僕等が歸宅して見ると、もう二人とも來てゐた。

七月十九日。晴。川手・文昭堂二氏へハガキ。伊藤(義人)氏よりハガキ。子供は矢張りさきの白狀

をうち消してゐるので、とても家に置いてやる氣になれぬ。夜、森田氏を訪ふ。
七月廿日。晴。新潟よりハガキ。羽太氏より手紙。中澤氏來訪(留守)。小寺氏を訪ふ。
七月廿一日。晴。羽太氏へハガキ。森田、オキシヘラ、井上、林氏よりハガキ。夜、石丸氏を訪ひ、三浦氏並に江部氏と落ち合つて江部氏宅へ行つて小宴を催した。
七月廿二日。晴。森田氏來訪、共に江戸ツ子へ鯉こくを喰ひに行つた。大月氏より手紙。
七月廿三日。晴。子供の小僧行きの口の爲めに日本橋の方へ出かけた歸りに滋子氏を訪ふ。それから歸宅、一晩中下痢で困つた。
七月廿四日。晴。雄辯社、加藤氏よりハガキ。江部氏を訪ふ。
七月廿五日。晴。蔦月堂へハガキ。鳴海氏を訪ふ。深田、石丸二氏來訪(留守)。大阪から英枝の姉上京。眞雄がちよつと歸つて來たが、今の使はれさきが氣に入つたやうすだから、あす、いよ〳〵本式に送つて行かせることにした、帽子製造おろし屋だ。
七月廿六日。晴。深田、江部二氏來訪。
七月廿七日。晴。末日會よりハガキ、同じく出席の返事。蔦月堂よりハガキ。加藤、石丸二氏同伴で訪問。よみうりの淸水氏來訪。英枝の姉出發。『誤られた國家主義』(十片)、東京朝日へ送る。鎌田榮吉氏所論の攻撃。

七月廿八日。晴。朝日へ原稿。大阪毎日の薄田氏より原稿依賴。薫、ちよつと歸宅、そして荷物を持つて行つた、使はれさきは藥問屋である。

七月廿九日。晴。薄田氏へ承知の返事。杉浦翠子氏より手紙、同じく返事。飯野氏を訪ひ、同氏と世田ヶ谷へ行く。水上(梅)氏を訪ふ。原子氏來訪。夜、同氏を訪ふ。

七月三十日。晴(夜ちよッと雨)。光成、巖、國民新聞社より書信。同社へ手紙(人物一覽の返事)。鳴海、中井二氏來訪。川口氏を訪ひ、淸子への十圓を渡す。深田氏を訪ふ。「猫八」(九十八片)、大阪毎日の爲め。

七月三十一日。晴。末日會に出席、歸途室伏、田中(純)、長田(幹)氏等と新橋カフヱに立ち寄る。

八月一日。晴。英枝と共に木村(鷹)氏を訪ふ。

八月二日。晴。橋井氏より手紙。田代氏より手紙。三浦氏來訪。江部氏を訪ふ。

八月三日。晴。大阪毎日へ原稿。中井氏よりハガキ。江部氏を訪ふ。薫よりハガキ、おなじく返事。

八月四日。晴。中川氏へハガキ。森律子、姉崎博士二氏へハガキ。薫よりハガキ、同じく返事。鎌田氏へ本日の東京朝日に渠に對する駁論が出たのを通知。中根氏よりハガキ、同じく返事。十日會の通知。

八月五日。晴。『「白百合」時代』(十五片)、よみうりへ。中根氏を訪ふ。夜あらしの警報あり。多少は當つた。大阪每日より電報ガワセ。

八月六日。未明より雨。晝間は降つたりやんだり。深田氏來訪。夜、雨。

八月七日。曇。中根氏を神田の社に訪ひ、一緒に羽太氏へ行き、また三人一緒に三ツ星カフェに行つた。飯野氏を訪ふ。桑木氏よりハガキ。

八月八日。曇。木村(鷹)氏來訪。井上氏よりハガキ。大阪每日より稿料六十三圓。宮地氏、池田、萬月堂二氏へハガキ。

八月九日。晴。「詩の語勢論を駁す」(十五片)、文世へ。

八月十日。晴。十日會へ行く。伊藤(證)氏、和田春陽堂よりハガキ。

八月十一日。晴。關氏來訪、氏を紹介しに中外社を訪ふ。萬月堂、中外社よりハガキ。

八月十二日。晴。中外社を訪ふ。新潮社、中村(武)氏を訪ふ。夜、原子氏と碁を戰ふ。

八月十三日。晴。大須賀氏へハガキ。新潮の佐藤氏へ手紙。「耶蘇敎思想に對する對抗意志」(九片)、日本主義へ。「斷片語」(十五片)、日本主義へ。江部氏を訪ふ。

八月十四日。晴。大觀の池田氏來訪。石丸氏來訪。雜誌へんしうずみ。

八月十五日。ちよツと雨。月評會あり。大月氏よりハガキ。木村(卯)氏來訪。

八月十六日。ちよツと雨あり。三井氏より原稿。小寺菊子氏よりハガキ。「親鸞教徒の理想に對する疑問」(二十二片)、日本主義並に親鸞研究の爲め。飯野氏を訪ふ。伊藤氏を訪ふ。
八月十七日。晴。川俣氏來訪。闘氏よりハガキ。中澤氏より原稿。
八月十八日。急雨あり。氷室、池田、齋藤、山本(三)、平塚(篤)。神崎六氏へ手紙(雜誌維持費の件)。田中(純)氏、島田氏よりハガキ。末日會の用事で森律子氏を訪ふ。茅原(茂)氏を訪ふ。小說を書き初めた。
八月十九日。曇。萬月堂へハガキ。姉崎氏へハガキ。江部氏を訪ふ。
八月二十日。晴。三浦氏來訪。小松菜と山東菜との種を買つた。胡瓜のあとに播かねばならぬ。
八月二十一日。曇。原子氏來訪。
小島氏より轉居通知。
池田、平塚、山本氏より返事。
新潮の佐藤氏よりハガキ。
左のハガキが届いた。——

其後御無沙汰仕候小生も出席可仕候　　乙字　（以上自筆添書）

時下殘炎將軍未敗候處、愈々御淸穆奉賀候。陳者岩野泡鳴君の筆禍を慰め度、一夕懇親會相催旁々御高說承り度、萬障御繰合せ、御臨席被下度御案內申上候敬具。

日時　八月二十六日午後五時

場所　市外雜司ヶ谷、鬼子母神境內。開泉閣（新築、日本料理、入浴隨意）

會費金貳圓　（當日御持參）

準備の都合有之候に付御出席の有無は、電話小石川一〇五四番か、折り返し葉書にて御返信願上候。

大正七年八月二十日

發起者

中尾倍紀知
池田林儀
加藤謙
川俣馨一

八月二十二日。曇。石丸氏よりハガキ。中村(孤)・原子二氏來訪。四五丁ばかりの近處に火事があつた。猶八來訪。

八月二十三日。晴。滋子氏を訪ふ(英枝と共に)。胡瓜を毎夕段々切つて行つて、化粧水が今年はびんにたツた一杯しか取れなかつた。

八月二十四日。晴。「國語とその表現文字」(十一片)・よみうりへ。鳴海氏、原子氏を訪ふ。日本主義主幹の名刺のうらに左の如き文句を入れさせた。

僕等の主張

日本の思想、日本の國語、並に日本人としての生活の獨立を期し、政治にも宗教にも日本中心を以つて世界人類を吸收同化する爲めに、古神道精神の新時代的發現なる日本主義を主張す

八月廿五日。晴。田中(純)氏へハガキ。神崎、中井、末日會よりハガキ。「淺間の靈」(七十枚)、中外の爲め。胡瓜のあとへ小松菜と山東菜とを播いた。

八月廿六日。晴。末日會へハガキ。中外社へ行く。菊の竹を改めてやつた。(もう、二百十日の嵐がきざしてるから。)中根、山本氏よりハガキ。山本(鼎)氏が信州よりリンゴ一箱を送つてくれた。筆禍慰藉會へ招待せられ、一場の挨拶を述べた(十七八名出席であつた)。

八月廿七日。晴。秀英舍へ中外の中目氏に會ひに行つた。そこで中央公論の瀧田氏に會ひ、十月の小說を賴まれた。。大月氏よりハガキ。齋藤(茂吉)氏より手紙。巢鴨驛長よりハガキ。山本氏へハガキ。

八月廿八日。急雨あり。三浦氏來訪。江部氏よりハガキ。深見氏を訪ふ。小說を書き初めた。

八月廿九日。晴(風)加藤氏よりハガキ。時事へ原稿。樋口氏よりハガキ、同じく返事。三井氏へハガキ。石丸氏來訪。

八月卅日。大風雨。原氏を訪ふ。

八月卅一日。晴。伊藤氏來訪。末日會に行き、初めて床次竹次郎氏、伊藤文吉氏等に會ふ。歸りに四五名とカフェを二軒まわり步き、午前三時に歸宅。時事よりハガキ。

九月一日。曇。原子、石丸、平塚(篤)氏來訪。平塚氏につれられて同氏宅へ行く。樋口、中央公論、

中外社、三井の諸氏より書信。よみうりより稿料三圓。雜誌の校正。
九月二日。晴。中外社を訪ひ、稿料八十四圓を受け取つた。校正に行つた。
九月三日。晴。川上(賢三)氏へ手紙。中外社へ短い原稿五枚。石丸、中澤二氏來訪。
九月四日。晴。片上氏へハガキ。三浦氏來訪。伏見保と云ふ陸軍屬なる日蓮信者が日本主義のことを尋ねて來た。秋聲氏の紹介で多紀と云ふ人が來訪。夜、布川氏を訪ふ。『要太郎の夢』(七十八片)、中央公論へ。新小說より小說依賴。
九月五日。晴。別な小說を書き初めた。瀧田氏へ原稿並に手紙(稿料價上げの件)。露西亞評論より手紙。原子氏を訪ふ。
九月六日。晴。川俣、中根二氏よりハガキ。片上氏より手紙。英枝と共に秋聲氏を訪ふ(留守)。本鄕でべに雀を買つて來て、十四末と共にしてやつた。中澤氏來訪。石丸、大月、宮地三氏共に來訪。
九月七日。晴。中央美術よりハガキ。中外社募集の小說十三篇の選をした。中央公論社より稿料五十八圓五十錢。
九月八日。夜、雨。中外社、野村氏へハガキ。中村(武)氏より手紙。姉崎、中外社よりハガキ。二科會より招待狀。石丸氏來訪。『生田長江氏の印象』(十三片)、新潮の爲め。
九月九日。雨。中村(武)氏よりハガキ。二科を見に行く。歸りに石丸氏を訪ふ。

九月十日。晴。十日會へ行く。

九月十一日。晴。「僕の描寫論」(五十四片)、新潮へ。中村、前島二氏を訪ふ。江部氏を訪ふ。三浦氏來訪。小說の依賴。「無內容の犧牲」(二枚)、露西亞評論へ。

九月十二日。晴。野村氏よりハガキ、同じく返事。大町(桂月)氏の送別會通知。石丸氏來訪。滋子氏を訪ひ、萬年筆を買つた。

九月十三日。夜、雨。露西亞評論より手紙。生田(葵)氏よりハガキ。橋爪氏より原稿。羽太氏へハガキ。原子氏を訪ふ。

九月十四日。雨。風。木村、井上二氏より原稿。野村氏來訪。「午後二時半」(四十三枚)、新小說へ。

九月十五日。晴。春陽堂主人へ手紙(稿料値上げの件)。帆足氏より原稿。月評會あり。駒子氏來訪。

九月十六日。晴。千葉(江東)氏へ手紙(新聞小說を書かせとの件)。帆足氏へハガキ。石丸氏來訪ふ。

九月十七日。晴。中澤氏より原稿。中根氏を訪ふ。關氏を訪ふ。新小說より稿料三十八圓七十錢。日置氏を訪ふ。

九月十八日。雨あり。神崎氏へ手紙。新潮より稿料十五圓五十錢。萬月堂より手紙。帆足氏よりハガキ。

九月十九日。晴。深見氏を訪ふ。文學界よりハガキ、同じく返事。
九月廿日。夜、雨あり。帆足氏來訪。叔父の小林、何とか云ふ人を紹介しにつれて來た。
九月廿一日。晴。新小說より校正。江部氏來訪、夜また同氏を訪ふ。
九月廿二日。雨。（日曜）氷室氏よりハガキ、同じく返事。中根氏よりハガキ。深見氏を訪ふ。
九月廿三日。雨。池田（藤）氏、新居氏、外山氏、中村（春）氏へハガキ。雜誌の校正。「父の出奔後」（九十三片）、文章世界の爲め。
九月廿四日。雨、大風。原子氏來訪。江部氏を訪ふ。
九月廿五日。晴。文章世界より稿料四十六圓五十錢也。池田氏を日本病院に訪ふ。江部氏家に將ギ會あり。
九月廿六日。晴。樋口、氷室二氏より手紙。山本（三）、千葉二氏を訪ふ。田中（純）氏を訪ひ、田中（貢）氏と三人で講武所で飲んだ。
九月廿七日。雨。四谷へ行く。
九月廿八日。曇。三浦氏來訪。橋爪氏へハガキ。駒子氏來訪。
九月廿九日。雨。山本（三）、薄田、藝術クラブへハガキ。日置氏よりハガキ。內藤、飯野、俊子、押川、川手、前島、佐藤、五來の諸氏を訪ひ、前島氏の外はすべて留守であつた。

九月卅日。曇。三浦氏より手紙、同じく返事。末日會に行く。

十月一日。雨。池田(林)、淸水、原子、木村(卯)、𨻶の諸氏來訪。夜、石丸氏を訪ふ。

十月二日。雨。原子氏來訪。森(盛)氏を訪ふ。俊子氏へハガキ。三井氏よりハガキ、同じく返事。新居氏よりハガキ。

十月三日。曇。押川氏を訪ふ。小西書店より手紙。薄田氏より手紙。吉岡、吉井、橋爪三氏よりハガキ。草の葉會よりハガキ、同じく返事。藝術座の研究劇見物。

十月四日。曇。薄田氏へ返事。吉岡氏へハガキ。橋爪氏へハガキ。木村、內藤、滋子三氏よりハガキ。萬月堂、中外、滋子氏を訪ふ。

十月五日。曇。俊子氏よりハガキ。吉野、平塚(篤)二氏來訪。石丸氏を訪ふ。

十月六日。曇。加藤氏へハガキ。正雄の行つてる所を訪ふ。

十月七日。曇。吉野中根二氏來訪。共に淺草へ行つて歌劇を見た。

十月八日。曇。十日會より通知。廣瀨氏より手紙。

十月九日。晴。廣瀨氏へ返事。結城氏へ出版物の相談。三井氏へ書信。原子氏來訪。

十月十日。雨。飯野氏を訪ふ。生方氏來訪。日本評論社より媾和使節には誰れを押したらいいかと質問して來たので、左の答へを書いた、——

媾和使節の條件——

一、日本の存在精神をよく信念に於いて體現し得る人物。

一、外國語的辭令の爲めに荷負けをしないで、飽くまで正義人道を日本主義的に押通せる人物。

三、正直に生死と毀譽褒貶とに超脱する人物。

四、日本の實力を內察し得てゐる人物。

以上の諸條件をすべて具備するものは今の政治家にも軍人にも見當らないのである。伊藤巳代治や加藤高明や犬養毅では駄目だ。止むなくば、現內閣の產婆役の一人であつた飯野吉三郎を押して見るがよからうか？外交上の外面的事情などはその場で聽かせてやればことだから。

十月十一日。雨。玄文社より返事。同じくまたハガキ。日々の畑氏よりハガキ、同じく返事。池田氏來訪。飯野氏を訪ふ。

左の趣旨書きができ上つた、——

日本主義協會設立趣旨

佛敎並に儒敎の渡來以後、わが國はその一面に於いて事大主義の傾向に壓迫されて來たが、明治年代に西洋諸國の文物に接するやうになつてからそれが一層甚しかつた。彼の長を取つて我の短を

補ふと云へば如何にも結構のやうだが、その標準が何でもかでも外國に在るのでは、自國の實質や特性が忘れられたのである。

僕等は兎に角それ相當の實質と特性とを有する自國の存在を先づ考へに入れて、他國を見ねばならぬ、鎌倉時代に佛教を日本化した親鸞や日蓮は卽ちそれであつた。德川時代に儒教から出て而も日本獨得の思想を發揮した山鹿素行や佐藤信淵はまたそれだ。が、明治年代になつてから、世は滔滔として歐化主義に流れ行き、その間に三宅雄次郎氏等は政治的に、木村鷹太郎氏等は哲學的に日本主義を叫んだけれども、その後その叫びは殆んど消えてしまつたやうな狀態である。僕等の現實に最も接近する政治や外交でも、これが思想的に解釋される時には、西洋人の頭腦で以つてするのを一番新らしいこと、また正しいことに思はれてゐる。

今やわが國人一般の無自覺者流は儒教旺盛時代に行はれた地獄の審判繪に於けるが如く、自分等が罪人となつて外國人の判官に裁きと憐みとを乞ふてゐる有り様だ。こんなことでは思想上にも生活上にも國民の獨立などはあぶなツかしいではないか？けれども、わが國では、他の一面にはわが建國以來の大精神、古神道主義の對抗意志的勢力が各時代にいつも潛在又は旺溢してゐて、それが明治時代には彼の明治天皇の征服愛的大事業となつて顯はれた。僕等はこれを思想的宗教的に新らしく解釋して、日本主義空前の大權化と見做すのである。

けれども、西洋思想をのみ標準にしてゐるもの等には、正義や博愛がその實際に於いて人間の征服心の發現であることが分らない。そしてこれを分らせるのが今日わが國をして西洋思想からも、儒敎や佛敎からも獨立させる所以になるのである。同時にまた、僕等の日本主義が今までの佛敎や儒敎のみならず、耶蘇敎をも、あべこべに救つてやる所以になるのだ。一般に西洋は積極的で、東洋は消極的だと云はれるが、東洋のうちに數へられるわが國の人道的特性だけは印度佛敎や支那儒敎のやうに消敎的ではなく、而も西洋の一般思想や宗敎よりも元來が積極的である。

かかる立脚地に在つて、僕等は岩野泡鳴を主幹として小雜誌「日本主義」を毎月發刊配布して來たこと旣に滿三ケ年に達しかけてゐる。これを機として今回日本主義協會を設立し、一層盛んに左の思想と信念とを宣傳し實行したいのである。

一、日本の思想の、日本の國語の、並に日本人としての生活の、獨立を期する。

二、日本を中心として世界の文明、進步、並に統一の爲めに戰ふ。

三、わが國家的制限はわが個人の膨脹內容であるから、これを離れて日本人としての人類の存立はできぬことを確信する。

四、外國人の事は外國人をして理由づけしめよ、日本人には實力のあるところ、即ち、道なるを以つて、國際問題に於いても實力以上若しくは以下を問ふに及ばない。

五、獨斷的個人主義、獨斷的國家主義、空想的世界主義、並に無政府的社會主義を排斥する。

六、肉靈合致の生々的充實を生活とし、純全征服の福音を體現する。

日本主義協會々則

一 名稱と所在

第一條 本會は日本主義協會と稱す。

第二條 本會本部を東京に、支部を必要に應じて各地方に置く。

二 事業

第三條 本會は新時代に相應する日本主義宣傳の爲め左の事業を行ふ

（一）雜誌の發行

（二）地方遊說

（三）圖書の刊行

（四）日本を中心としての世界事情研究

三 會員とその義務

第四條 本會々員は贊助會員と普通會員との二種とす

第五條 贊助會員は毎月金壹圓以上を本會維持費に提供するもの、普通會員は本會雜誌を購讀するものとす

四 役員

第六條 本會に左の役員を置く、——

會頭 一名

評議員 若干名

幹事 若干名

（但し當分の內岩野泡鳴、主幹として本會の全責任を負擔す）

大正七年十月

日本主義協會

假事務所 東京市外巢鴨町一〇八二番地

十月十二日、曇。三井氏へ手紙。羽太氏よりハガキ、同じく返事。「勝利」の會より通知、同じく返事。池田氏へハガキ。夜、外出。

十月十三日。晴。三井氏よりハガキ。石丸氏來訪。原子氏宅の正信偈輪講を聽きに行く。「原内閣成立と之に對する希望」(十二片)、大觀へ。「描寫論補遺」(十二片)、新潮へ。

十月十四日。晴。木村(鷹)氏來訪。飯野、伊藤二氏を訪ふ。木村(卯)氏より原稿。朝日の室伏氏へハガキ。

十月十五日。雨。高須氏より手紙(「放浪」を明治名著文庫に入れる件)、同じく返事。外山氏より手紙並に原稿。東北學院同窓會よりハガキ。月評會あり。

十月十六日。雨。三井氏よりハガキ並に原稿。加藤(謙)氏よりハガキ。新潮の中村氏へハガキ。川路氏「勝利」の會へ行く。

十月十七日。曇。室伏氏よりハガキ。北原氏よりハガキ。中村氏よりハガキ。木村(鷹)氏を訪ふ。

十月十八日。晴。原子氏來訪。「中村星湖氏へ」(八片)、よみうりへ。東北學院同窓會へ行く。その歸途郁氏に會ひ、ちよッとカフエへ一緒に這入つた。

十月十九日。晴。池田、氷室、山本等の諸氏へ協會趣旨を送る。松田氏よりハガキ。弘田氏を訪ふ。深田氏を訪ふ。

十月廿日。晴。吉野、布川、山宮、中澤の四氏來訪。

十月廿一日。晴。伊藤氏來訪。飯野氏を訪ひ、歸りに詩話會へ列し、山宮氏の宅へ立ち寄つた。田中(貢)、高橋(壽)氏よりハガキ。最上氏より手紙。中外社より贈品。

十月廿二日。晴。飯野氏を訪ふ(日本主義協會をいつそのこと氏の精神團と一緒にしてやらうではないかと云ふので、明後日よく話し合つて見ることにした)。抑川氏を訪ふ(けふは他日の爲めに氏の經驗をよく話して貰つた)。川手氏を訪ふ、途中平塚氏に會ひ、ミカドで玉突を五回やつた。同氏を伴つて滋子氏を訪ふ。

十月廿三日。雨あり。江部氏を訪ふ。伊藤公を題の小說を書き初めた。

十月廿四日。晴。原子氏來訪。飯野氏を訪ふ(いよ〳〵雜誌を大きくするやうになりさうだが、なほ明後日決定の筈)。

十月廿五日。晴。碁會の通知。桐生の坂元氏より手紙。原子氏來訪。

十月廿六日。曇。飯野氏と金原銀行に行き、相談の件を即決するところであつたが、相手の人が留守で引き返した。石丸氏を訪ふ。生方氏來訪(留守)。同氏へ返事。シュネイダー氏よりハガキ。伊藤氏よりハガキ。中外に出る小說の校正。

十月廿七日。雨。時事より稿料一圓五十錢。羽太氏より手紙。碁會に行く。

十月廿八日。晴。生田(葵)氏へハガキ。羽太氏へハガキ。矢崎氏よりハガキ。桐生の阪本氏よりハガキ、同じく返事。飯野氏を訪ふ(今日も解決せず)。三浦氏來訪。伊藤氏來訪。

十月廿九日。晴。石丸氏來訪。羽太氏よりハガキ。末日會よりハガキ。國士會よりハガキ。室生、松本二氏より詩集。生田(葵)氏よりハガキ。

十月卅日。雨。生田氏へ返事。「公爵の氣まぐれ」(五十枚)、大觀十二月號へ。石塚夫婦來訪。

十月卅一日。晴。石丸、池田二氏來訪。大觀より稿料のうち五十六圓。よみうりより稿料壹圓五十錢。新潮社より「耽溺」の印税十五圓。新潮より稿料三圓五十錢。時事より稿料三圓五十錢。高須、川口二氏へハガキ。清子へ十圓也。末日會にて初めて西園寺八郎氏に會つた。

十一月一日。晴。羽太氏に、小石川の大正亭へ招待された。その節、いちじくの木を一本貰つて車で歸つて來たところ、翌朝見ると、桑であつた。で、同氏へハガキを出し、お酒を頂戴した上にもまた一杯クワせられましたと。宮地氏よりハガキ。

十一月二日。雨。大觀社より殘りの稿料二十四圓也。飯野・伊藤氏を訪ふ。

十一月三日。晴。羽太氏よりハガキ。熱海の樋口氏より手紙、同じく返事。猶興社並に早稻田文學社よりハガキ。山本氏の能會へ行く。原子氏を訪ふ。一小說を書き初めた。

十一月四日。晴。

十一月五日。雨。須藤(鐘)氏より手紙、同じく返事。新潮より手紙。ろしや評論より手紙。
十一月六日。雨。中根氏來訪。
十一月七日。晴。島村氏葬儀の通知。熱の氣味で葬式に列しかねる斷りを出した。
十一月八日。晴。「お安の亭主」(六十八枚)、新小說へ。川俣氏より手紙、同じく返事。春陽堂へハガキ。
十一月九日。雨。中根、小野二氏來訪。春陽堂より稿料六十一圓二十錢也。「生田氏への答へ」(廿五片)、中外へ。森本氏より手紙、同じく返事。中央佛教より新年號の爲めに信仰をききに來たので、左の如く答へた、——
「僕は僕の內部に深く現はれて來る僕を信ずる。そこに自然の制限があつて祖國の生命と現じ、その刹那の充實努力が無制限の廣がりなる所謂神や理想を絕滅する。人間の認識できる最上の現實はそれであつて、それ以外に眞理もまこともない」。
滋子氏並に生方氏を訪ふ。
十一月十日。晴。中外社。西村、野村三氏より書信。飯野氏を訪ふ。「久米正雄氏へ」(十五片)、時事へ。十日會へ行く。齋藤氏より長崎のカステラ。
十一月十一日。晴。森田氏へハガキ。巖へ手紙。「自作と見當違ひの評」(四片)、新潮へ。吉野氏來

訪。新らしく小說を書き初めた。

十一月十二日。晴。中根、吉野氏來訪。吉野氏は立ち合ひ人をつれて來て、きのふの復讎戰に來たのだが、二目を取り返しただけで、矢ツ張り、白は取れずに歸つた。中澤、原子二氏來訪。時事より稿料五圓。

十一月十三日。夜、雨。大觀社より稿料五圓。滋子、平塚、生方三氏を訪ふ。

十一月十四日。曇、夜雨。森田氏よりハガキ。「家つき女房」(三十枚)、新日本十二月號へ。同社へハガキ。平塚氏來訪、同氏のところへ行く。木村氏よりハガキ。巖より手紙。

十一月十五日。晴。渡邊、明治學院よりハガキ。三井、春陽堂よりハガキ。月評會。駒子氏來訪。

十一月十六日。晴。新潮社、中村、前島、中外社、飯野、伊藤氏を訪ふ。飯野氏との話が本日同氏の宅にて伊勢支部の人と會見して大體きまりが付いたので、いよ〳〵來年一月號より日本主義を擴張することになつた。

十一月十七日。雨。三井、木村、池田三氏へハガキ。大月氏へハガキ。佐藤(新)氏よりハガキ。川俣、深田二氏を訪ふ。

十一月十八日。晴。三井、詩話會よりハガキ。詩話會へ返事。沼波氏よりハガキ。同じく返事。外山氏より原稿。外山氏來訪(留守)。福田博士、森田、木村三氏を訪ふ。井上、齋藤、橋爪、相馬、勳

使河原・杉浦氏へハガキ。石丸氏、近火見舞に來た。
十一月十九日。晴。萬月堂、外山二氏へハガキ。康子氏よりハガキ。中外、押川、玄文社を訪ふ。玄文社にて一月に小說集を一冊出すことにした。
十一月廿日。晴。佐藤氏、遠藤氏へ手紙。木村、井上、土岐氏よりハガキ。康子氏、羽太氏を訪ふ。散文詩「きりぎりす」(十四行)。
十一月廿一日。晴。森本氏よりハガキ。外山氏よりハガキ。三井氏よりハガキ。詩話會に行く。
十一月廿二日。雨。園樂社、井上氏よりハガキ。飯野、江部二氏を訪ふ。「トルストイ論補遺」(十七片)、日本主義一月號へ。
十一月廿三日。晴。三井、佐藤、中外社へ返事。天佑社の宮本氏來訪。三蒲氏來訪。日日新聞の野島氏來訪。中根氏よりハガキ。遠藤氏より返事。
十一月廿四日。曇。本日よみうりに下の如き記事掲載さる。

日本主義の大發展

雜誌『日本主義』といへば恐らく天下一のマメ雜誌で、それが文壇一方の御大將岩野泡鳴氏の主幹する所とは、大概は知らぬ人が多い。所が、氏は這度『日本主義協會』なるものを設立し、盛んに運動中のところ、穩田行者飯野某氏と結託し、愈々『日本主義協會』發展の端緒として伊勢の有志間に支部を設け、更に來年早々よりは雜誌『日本主義』の頁を增大し、七千部以上も刷るといふ素晴らしい意氣込みださうだ。小說なんぞコツコツ書くやうなケチな仕事は、もうやめやうかと思ふなどと、今からして常に百倍する大氣焔を上げつつあると、或人は泡鳴氏の近狀を語つてゐた。

横線の個處は間違つてる。

泡鳴が穩田行者の弟子に
……なり濟して
主義が一致した爲
合併したといふ

岩野泡鳴氏は何時の間にやら穩田の怪行者飯野吉三郎氏の信徒になり濟ました、府下巢鴨町一〇八二の日本主義社に泡鳴氏を訪へば同氏は語る『飯野さんの國體の根本主義が神道を基礎として居る點に於て

▼▽僕の　日本主義と相一致して居る事が判つた、所へ今度僕が世界で唯一人の先生として居る押川方義氏から飯野さんと握手して事業を共にしてはどうかと云ふ熱心な勸めを受けたので遂に精神團と日本主義協會とが

橋爪氏よりハガキ。木村氏へハガキ。飯野氏を訪ふ。本日伊勢の支部奔走者が出て來る筈なのが明日になつたので、またあす行くこと。沼波氏來訪。

上の如きも、本日東京日々に出たのだが、

十一月廿五日。晴。飯野氏を訪ひ、伊勢の鳥海氏と共に雜誌の件に就いて相談の結果、來年二月號から初めることになつた。夜、また鳥海氏の宿を訪ふ。闘氏來訪。南人社の川口氏來訪。

十一月廿六日。晴。沼波氏より手紙。松本氏の會より通知、同じく返事。石丸氏來訪。江部氏を訪ふ。

十一月廿七日。晴。文章世界よりハガキ。木村(卯)氏よりハガキ。闘氏を訪ふ。

十一月廿八日。晴。中外社より選料二十圓。文章世界へハガキ。末日會より通知、同じく出席の返事。小川氏より手

紙。飯野氏を訪ふ。鳥海氏並に滋子氏を訪ふ。
十一月廿九日。晴。南人社の川口陟氏來訪。大觀社の池田氏來訪。小川氏へハガキ。
十一月三十日。晴。三井・木村二氏へハガキ。萬月堂へ十二月號原稿を送る。川口氏へハガキ。清子へ十圓（十月分）の振替へ。齋藤氏よりハガキ。末日會へ行く。

> ▼▽合併 する事となり明春一月發行の第四卷第一號から日本主義を精神團の機關雜誌とすることにしたあの團體の後には金原銀行が控へて居て金は自由に使へるし双方共に好都合だと思ふ』
>
> 横線の個處は間違ひ

十二月一日。晴。小川氏よりハガキ。池田（藤）氏送別會通知、同じく返事。山本露滴第三周忌會へ行く。短篇小説集「猫八」、四百ページ分を集めて、訂正を終はつた。
十二月二日。雨。北村氏よりハガキ。井上氏よりハガキ。外山氏來訪。巖並に原（隼）氏へハガキ。新潟並に飯野氏へ大觀各一册。文章世界より稿料六圓五十錢。
十二月三日。晴。日々新聞、相馬、土田三氏より書信。池田（藤）氏の送別會の爲め築地精養軒に行く。米倉嘉兵衞、野島常次郎、田鍋一二、星一等の諸氏に會つた。
十二月四日。あられあり。ローマ字社並に羽太氏よりハガキ。小説の別集を整理し、「非凡人」と名づけた（天佑社より出す分）。外山氏來訪。
十二月五日。晴。博文館、東部遞信局よりハガキ。東部遞信局並に萬月堂へハガキ。玄文社へ小説

集原稿を渡し、印税内金七十五圓を受け取る。押川先生を訪ひ、共に銀座の肉屋へ行く。今井(歌)氏を訪ふ。川路氏より使ひ。

十二月六日。晴。木村並に巖よりハガキ。英枝の弟より手紙。飯野氏を訪ひ、媾和問題に對する意見を明日新聞記者に發表することにした。

十二月七日。晴。木村並に巖へ返事。滋子氏を訪ふ。翠子氏より原稿。三井氏よりハガキ。木村氏より手紙。最上氏より手紙。飯野氏を訪ふ。

十二月八日。

左の手紙を西園寺侯に送る、――

謹んで一書を呈する事をお許し下さい。媾和問題に關することでございますが、若しいよ〳〵あなたがお立ちになることにお成りでございましたら、どうか日本主義の根本に據つて日本の立脚地を十分に發揮して載きたいのでございます。ヰルソン氏にせよ、ロイドヂョーヂにせよ、結局は、自國の利益を考へに入れての正義人道であります。日本も日本の利益を以ての正義人道でなければ馬鹿を見ます。一國の利害は取りも直さず一國の精神であります。利害を離れての精神や正義は摸倣であり迂濶なおつき合ひであります。で、日本の純粹な利害的精神とは古神道に現はれたそして明治天皇に體現された征服愛であります。日本國家の制限内に同化して來い、然らばお前らをすべ

て眞人間（僕はこれを人間神と申します）にしてやると云ふ精神です。日本國家の存在意義は卽ちこのゴスペル卽ち福音に在ります。崇神天皇が四道將軍を派遣したのはただ軍人派遣ではなく、この福音の宣傳であつたのでございます。これにまつらふものは和し、まつろはぬものは平らげるとは、日本の實利的精神實現の道（卽ち、これがわが國の正義人道）であります。

他人他國の土地や住所を必ずしも貰はないでもかまいません、けれどもこの精神の實現を妨げられる場合には、日本は昔からの慣例に依りいつ何時再び劍を取らないとは限らぬと云ふ覺悟を外國の談判委員に十分に示めして下さい。これには外國の宗敎や哲學を考へに入れる必要もなく、わが國特有の宗敎や哲學がさうした精神と覺悟とを發揮させるものだと思つて下さいませ。

そして若しこの覺悟の發表が媾和會議で侮蔑されるなら、結局、僕の申し出で行つても亦侮蔑されるに終りましよう。中途半端な要求で侮蔑されるよりも、わが國家存立の根本問題で侮蔑される方が、他日わが國民のそれに對する奮起と公憤とをより以上に有効に致します。

十二月八日　　　　岩野泡鳴拜

侯爵西園寺様

十二月八日。晴。吉野氏、原子氏來訪。
十二月九日。晴。東京日々の「平素懷抱の信仰」質問に對する答へ――
僕の平素懷抱するところの信仰は征服愛の福音です。これはわが國の古神道にはありますが、耶蘇敎にも佛敎にも儒敎にもない精神です。そして個人卽國家の存立理由であります。
中外日報「平和克復第一年に於る宗敎家の責務」質問に對する答へ――
外國摸倣の平和論と無制限平等觀の高尙がりとを撤回して、ますく他に對する個人卽國家の對抗意志を自覺すること（媾和會議にも、日本の立ち場を正直に持ち出して、日本の精神を邪魔される は將來もいつにても戰ひを辭せぬとの意志を發表して置けと云ふことを目下その筋へ運動しつつあ ります）。
十二月九日。晴。巖よりハガキ。中央公論の小說を書き初めた。
十二月十日。晴。巖へハガキ。翠子氏よりハガキ。池田（藤）氏來訪。天佑社より印稅のうち七十圓也。福田氏より原稿。十日會へ行く。
十二月十一日。初雪、つむこと二寸。夜、木挽町の吉田屋に福澤桃介氏の池田氏送別會あり、出席。男は明治學院出身が主で、女は帝劇の女優八名であつた。
十二月十二日。曇。福田、談笑會等にハガキ。熱海の樋口主人へハガキと「大觀」。加能氏へハガ

キ。英枝の弟より菓子、同じく禮狀。
十二月十三日。晴。まだ雪がとけない。
十二月十四日。生方氏の「猫」の會に行く。
十二月十五日。瀧田氏來訪、書いてゐだ小説（百枚を越えた）は少し新年號にはおそろしいと云ふので、あとまわしにして別なのを書くことにした。月評會。
十二月十六日。晴。長谷川氏へ手紙。池田（林）氏へハガキ。
十二月十七日。晴。闘、新潟、樋口諸氏よりハガキ。男兒出產、諭鶴と命名す。
十二月十八日。晴。「家つき女房」を訂正して百三十六片、瀧田氏へ渡す。中央公論より稿料のうち二百圓也。飯野、新潮社、中村氏を訪ふ。前田、詩話會、玄文社よりハガキ。
十二月十九日。雨。玄文社、長谷川氏へハガキ。詩話會へハガキ。芝區役所へ謄本願。江部氏を訪ふ。
十二月廿日。雨。小野崎よりハガキ、同じく返事。時事の柴田、讀賣の加藤氏より書信。中澤氏よりハガキ。飯野、前島、萬月堂等を訪ふ。
十二月廿一日。曇。明氏へハガキ。淸子へ十一月分。玄文社の長谷川氏より手紙。琴子氏來訪。吉野氏來訪。

十二月廿二日。雨。淺野氏初めて來訪。外山氏來訪。長谷川氏よりハガキ、同じく返事（出版書物の件）。新潮社の佐藤氏よりハガキ。
十二月廿三日。雪。大阪の英枝の姉へハガキ。新潟よりハガキ。
十二月廿四日。晴。中外社の中目氏へハガキ。雪見がてら琴子氏と共に武藏野鐵道に乘つたが、所澤へ行つて甥のつてで飛行機練習場に入り、暫らく見物した。
十二月廿五日。夜、雨。所澤から晝頃歸る。小野崎へ手紙（細君の候補者の件）。
十二月廿六日。雪四寸。池田（林）氏よりハガキ。玄文社の長谷川氏より一部不用の原稿返し。伊藤氏よりハガキ。相澤氏よりハガキ。石丸、中澤二氏來訪。外山氏來訪。川合氏より手紙。
十二月廿七日。晴。池田（林）氏を訪ふ。
十二月廿八日。瀧田、中村二氏へハガキ。滋子氏よりハガキ。杉中氏よりハガキ。時事より稿料四圓也、內藤氏よりハガキ。
十二月廿九日。舊巢會へ行く。「征服被征服」（二百六枚分）を書き終る。
十二月三十日。池田（藤）氏を東京停車場へ見送る。琴子氏、木村（鷹）氏を訪ふ。木村（卯之）氏來訪。
十二月三十一日。晴。英子氏より手紙。中外氏より稿料拾圓也。

大正八年日記

一月一日。琴子を訪ひて一泊。
一月二日。
一月三日。琴子と共に有樂座へ行き、カルメンを見た。
一月四日。
一月五日。琴子の件、豫定より早く妻に知れて失敗。
一月六日。
一月七日。晴。飯野、德田、生田、高安、野上氏を訪ふ。池田氏來訪(留守)。
一月八日。晴。
一月九日。雨。池田氏來訪。
一月十日。雨。新年狀、けふまでに達したのが百四十六枚。

一月十一――七日。「抱月須磨子辯護論」（十九枚）新小說へ。

一月十八日――十九、廿、廿一、廿二、廿三日。風邪の爲め數日臥床。耳の一方が聽えなくなり、廿三日より小此木へ通ふことにした。

新潮より「耽溺」の印稅十五圓也。

加能氏より手紙（原稿依賴）、同じく返事。

德田、長田二氏を訪ふ。鳥海氏へ手紙。

一月廿四日。原子氏を訪ふ。

一月廿五日。雪と雨。江部氏を訪ふ。「土田氏に答ふ」（五枚分）、文章世界へ。小說を書き初めた。

一月廿六日。晴。宮地（謙）氏よりハガキ。橫濱の姉より手紙。石丸氏を訪ふ。

一月廿七日。晴。耳科へ行く。江部氏を訪ふ。赤木（桁）氏より轉居の通知。

一月廿八日。晴。耳科へ行く。野上氏よりハガキ。同氏へ雜誌返し。めいぼが左りの目にできて不愉快だ。

一月廿九日。雪。樫村敬文館へハガキ（「古神道大義論」を昨日廣告の名著評論文集へ入れて貰つては困ると云ふ通知、獨立の印稅物だから）。

一月卅日。雪。新潮社の佐藤氏よりハガキ。同じく返事。末日會より通知、同じく返事。

一月三十一日。曇。飯野氏を訪ひ、伊勢の鳥海氏に會見し、第一回の雜誌費一部を受取る。末日會へ行く。中央公論より稿料殘金二百三十六圓四十錢也。滋子氏より手紙。
二月一日。曇。よみうりより稿料一圓也。淸子へ十圓（十二月分）。山宮氏よりハガキ。佐藤氏を訪ふ（プルタルクの件）。小川氏を訪ふ（將棋六番のうち四番を負けた）。
二月二日。雪。五來氏送別會の通知、同じく出席の返事。滋子氏來訪。
二月三日。曇。飯野氏へ電話。
二月四日。凪。靈英より手紙。十日會の通知。澁谷美代子と云ふ婦人が小說の指導を賴みに來た。
二月五日。曇。五來氏の送別會へ行く。同會で川尻東馬、吉川正一、澤田撫松氏に初めて會つた。
安子氏よりハガキ。新小說より稿料十三圓三十錢。
二月六日。晴。耳科へ行く。菊子氏よりハガキ。深田氏來訪。
二月七日。雪。若宮、長谷川、山宮氏へハガキ。美代子氏より手紙。中村（武）氏よりハガキ。原子氏來訪。
二月八日。雪。春陽堂、明治座より手紙。加能氏へハガキ。「お竹婆アさん」（百四十六片）、大觀三月號の爲め。雪ふりつづく。
二月九日。晴。池田、久和代氏、加能、山宮氏よりハガキ。加能、長谷川、靑柳氏より手紙、小野

崎、池田、三浦三氏來訪。
二月十日。曇。靑柳、長谷川二氏へハガキ。三井、天佑社二氏よりハガキ。露西亞評論より手紙。飯野氏を訪ふ。耳科へ行く。十日會へ。
二月十一日。晴。飯野氏を訪ふ(伊勢支部の代表者が「日本主義に渡すべき金を他へ流用したので、ここ二三日保證金を待つてくれとのことだ)。巖よりハガキ。荒川、小野二氏來訪(花を引いた)。伊藤氏へその兒にやる下駄を屆けた。
二月十二日。晴。大須賀氏よりハガキ。外山の父より手紙。月評會。「一元描寫の實際證明」(三十二枚分)、新潮三月號へ。大觀より原稿料のうち五十圓也。
二月十三日。曇。伊藤氏よりハガキ。東部遞信局より手紙。石丸氏來訪。平塚(篤)氏より使ひがあつたので、晩餐に行つた。
二月十四日。朝、雨。午後、晴。新潮より稿料二十圓也。大須賀氏よりハガキ。飯野氏へ電話。原子氏來訪。
二月十五日。晴。大須賀氏より原稿。大月氏來訪。文章世界の小說をけふ斷わつた、書きつつあるのがまだ長くなるから。飯野氏へ手紙。
二月十六日。晴。碁會へ行く。詩話會、柴田、增田、新潟よりハガキ。柴田氏へ返事。澁谷夫人來

訪(その作を讀んだがなかなかよかつた、ちよツと描寫上のくれちがひを直せば)。

二月十七日。晴。高木と云ふ人より手紙。

二月十八日。雨。春陽堂の店員小峯氏來訪、「征服被征服」(並に「空氣銃」と「離婚まで」)を單行本にする約束が成つた。これは一つの長篇小說である。中根氏よりハガキ、同じく返事。詩話會よりハガキ、同じく日本年刊詩集への原稿を送る。原子氏來訪。

二月十九日。晴。澁谷夫人よりハガキ。中外の生駒氏來訪。江部氏を訪ふ(將棊七番のうち六番を勝つた)。

二月廿日。晴。中根氏よりハガキ、同じく返事。澁谷夫人より原稿。池田氏へハガキ。新小說の小野氏來訪。「部落の娘」の前篇六十枚分を渡す。

二月二十一日。雨。中外社へ使ひ。中根氏よりハガキ。阪尾と云ふ人より手紙、同じく返事。詩話會に行く。

二月二十二日。雨。駒子氏來訪。

二月二十三日。晴。新潮社の佐藤氏へ手紙。耳科へ行く。池田氏よりハガキ。石丸、中澤二氏來訪。

二月二十四日。晴。中央公論よりハガキ。吉野氏、荒川氏來訪。

二月二十五日。晴。飯野氏を訪ふ。島田氏よりハガキ。中ノ目氏・澁谷夫人より手紙。宮地氏來訪。
二月廿六日。晴。宇都宮の氷室氏來訪。雄辯の青柳氏來訪。長谷川（勝）より手紙。
二月廿七日。晴。長谷川氏へ返事。新小說の小野氏よりハガキ。文章世界より稿料四圓四十錢。大觀社より稿料殘金六十八圓四十錢也。大觀社へハガキ。末日會より通知。中外の高木氏來訪。大月氏來訪。
二月廿八日。晴。子供にひなを出してやる。巖よりハガキ。末日會に行く。飯野氏を訪ふ。
三月一日。晴。國民の島田氏よりハガキ。「部落の娘」（續）、五十二枚。
三月二日。晴。新小說へ手紙。島田氏へ手紙。
三月三日。晴。木村（鷹）、三浦二氏來訪。抒情文學社よりハガキ。江部、原子二氏來訪。
三月四日。晴。春陽堂へ「征服被征服」の原稿を渡す。木村（幹）氏よりハガキ並に著書。日本電報通信社「新聞總覽」より新聞記者座右銘を徵して來たので、左の如く答へ、——
もツと世間を知れ。多くはまた聽きの、そのまた又聽きに安じて見當違ひの獨斷をしてかかるのは最もよくない。
池田氏來訪。春陽堂より百圓屆く。
三月五日。晴。春陽堂よりハガキ。小野氏より手紙。京都の川瀨と云ふ人より手紙、同じく返事。

青柳氏より手紙。澁谷夫人來訪。中澤氏來訪。森ケ崎溫泉に着。

三月六日。滯在。

三月七日。滯在。內外時論の社長住居氏、竹森氏と共に來訪、(小說依賴)。女中二名、各々十圓の給金で來た。

三月八日。滯在。

三月九日。歸宅。「蜜蜂の家」(七十枚)、雄辯の爲めに脫稿。留守中の書信――中村氏、露西亞研究會、上杉愼吉氏、羽太氏、十日會、荒木老母死去通知、中外新論社、川瀨氏、俊麿等。

三月十日。曇。春陽堂の小峰氏へハガキ。川瀨氏へ返事。十日會へ行く。

三月十一日。晴。雄辯の青柳氏來訪。原稿料九十一圓を持つて來た。春陽堂の小峰氏來訪、印稅のうちの三十圓を持つて來た。書生の外山があまりにしらみたかりなのであすから斷わることにした。

三月十二日。雨。大金へハガキ。三井、木村、佐藤(四)の三氏へ書信。月評會。

三月十三日。晴。中村(武)氏の原稿催促の手紙が森ケ崎の方からまわつて來た。氷室氏からハガキ。內外時論の住居氏から原稿の催促。東北學院より中學部全燒の通知。小說を書き初めた。

三月十四日。晴。中村氏へ斷りの返事。樋口氏宅よりハガキ。羽太氏、菊子氏來訪。「わが子のやうに」(七十二片)、內外時論の爲めに。

三月十五日。雨あり。住居氏よりハガキ。住居氏來訪、原稿料七十二圓を置いて行く。同氏に田山、正宗、德田三氏への紹介狀を渡す。江部。原子二氏來訪。單行本『猫八』の初校了。

三月十六日。晴。内外時論社へハガキ。明治學院同窓會よりハガキ。吉野氏を訪ふ。薫へ少しまた重大な戒めの手紙を書いた。

三月十七日。晴。江部氏を訪ふ。天佑社、春陽堂の小峰氏よりハガキ。靑柳氏へハガキ。

三月十八日。晴。大月、中根二氏來訪。加能氏の『世の中』の會へ行く。薫より手紙。長谷川、三橋、靑柳三氏よりハガキ。

三月十九日。耳科へ行く。夜になつて大風。

三月廿日。晴。詩話會よりハガキ。飯野氏を訪ふ（雜誌擴張の件、擴張費を銀行から受け取つた中間者がそれを米相場に立てかへて、この頃の暴落に失敗してしまつた。その影響で一人は昨日首を縊つて死んだ。そんなわけで當分見込なし）。菊子氏を訪ふ。小野崎來訪。

三月廿一日。晴。福澤（桃介）氏、小野崎氏より手紙。天佑社よりハガキ。道頓堀記者齋藤氏來訪。田中（純）氏へハガキ。三浦氏來訪。石丸氏を訪ふ。詩話會へ行く。

三月廿二日。晴。大金へ手紙（詩話會宴會の件）。小野崎、澁谷夫人、吉野、横濱の姉等來訪。川瀬氏より手紙。

三月廿三日。小雨。姉、歸濱。稻毛の上總屋へ投宿。

三月廿四日。滯在。

三月廿五日。滯在。

三月廿六日。歸京。「二食主義者」(七十四片)、內外時論の爲め。

留守中の來書――大金、菊子氏、山宮氏、渡邊氏よりハガキ。東北學院・自由てんらん會、長谷川(巳)氏より手紙。

三月廿七日。晴。長谷川(巳)氏へ手紙。三浦・生駒氏來訪。江部氏を訪ふ。飯野氏へ手紙。

三月廿八日。晴。生方氏來訪。末日會よりハガキ。

三月廿九日。晴。飯野氏を訪ふ。

三月卅日。晴。山宮氏へハガキ。高木、內外時論、中村(武)氏より書信。中澤、原子二氏來訪。三浦氏を訪ふ。

三月卅一日。晴。伊香保書院の高木氏來訪、また一つ短篇集の約束が成つた。末日會に行く。橫濱の姉・來訪。

四月一日。晴。原子氏を訪ふ。

四月二日。雨あり。澁谷夫人來訪。抒情文學、詩話會、中外新論、寶生クラブより書信。「それが文

藝批評か」(五片)、西宮氏へ答へ、新潮。散歩がてら西村氏の店へ立ち寄る。

四月三日。晴。新潮より稿料三十七圓。竹村氏より著書とハガキ。大阪新報の高木讓氏來訪。石丸氏を訪ふ。原子氏來訪。高木(角)氏へ手紙。

四月四日。小雨。竹村氏へハガキ。高木氏よりハガキ。滋子氏よりハガキ。小野、伊藤二氏よりハガキ。伊香保書院の爲めに「青春の頃」と題した短篇集四百四十枚分をえらんだ。けふ、畑を耕し、また菊の苗をわけてやつた。

四月五日。小雨あり。中外の中目氏へハガキ。原子、みぞべ二氏來訪。

四月六日。詩話會に森ケ崎大金に列席したついでに、大金に滯在。七、八、九、十日まで。十日會大會が同日にあり、それと共に歸京。

四月十日。留守中の來翰——坂本と云ふ青年より手紙。大月、室氷、新潮等よりハガキ。

四月十一日。晴。靈英、氷室、新潮社へハガキ。廣瀨(哲)氏、三浦氏來訪。伊香保書院よりハガキ。

四月十二日。晴。月評會、あすか山へ櫻見に行く。吉野、中根二氏來訪。

四月十三日。晴。羽太氏より手紙。江部、三浦二氏と散歩した。須藤氏へハガキ。

四月十四日。曇。薰へ手紙。玄文社の長谷川氏より手紙。天佑社へハガキ。廣瀨哲士氏の渡佛送別

會へ行く。
四月十五日。雨。原子、外山、池田三氏來訪。大金よりハガキ。
四月十六日。晴。鱶英よりハガキ。不平社よりハガキ。滋子、島田。中井氏來訪。仙臺の須藤（鬼一）氏、久し振りで來訪。
四月十七日。晴。中目氏へハガキ。天佑社の宮本氏よりハガキ。
四月十八日。晴。大月氏、詩話會よりハガキ。
四月十九日。晴。菊地氏よりハガキ。同じく返事。加能氏へ十日會の名簿とハガキ。山宮氏、石丸氏、中目氏來訪。中外の內藤氏より手紙。「お常」（九十三枚半）、中外の爲めに出來。渡佛中の五來氏よりハガキ。
四月二十日。晴。島田、光成、澁谷夫人、三浦氏來訪。英枝をつれて淺草に愛子氏を訪ふ。原稿を中目氏へ渡す。
四月廿一日。晴。押川、玄文社、飯野、川手氏を訪ふ。詩話會に出席。
四月廿二日。風雨。早稻田文學より原稿依賴。
四月廿三、四、五、六日。飯野氏と相談の上「日本主義」を六月から再び出すことになつた。
四月廿七日。晴。中外社へ行き、稿料を催促す。松崎と云ふ人より手紙並に原稿。新潮社を訪ひ、

四部作出版の計劃を承知して貰つた。「耽溺」の印税三十圓を新潮社から受け取る。

四月廿八日。晴。「改造」の社長山本氏來訪。原稿の前金五十圓を受け取る。天佑社より「猫八」の初印税の殘金百七十三圓を受け取る。

四月廿九日。晴。伊東英子來訪。〓木村（卯）氏よりハガキ。

四月卅日。雨。中央文學へハガキ。中外社より稿料百四十圓二十五錢（さきに受け取つた四十圓の前金と合はせてだ）。玄文社より「猫八」印税一千五百部代の殘金壹百三十五圓也。中澤、小野崎、俊丸來訪。

五月一日。雨。雄辯の青柳氏より原稿依頼。新潮社より稿料一圓八十錢。

五月二日。雨。國民文藝會より手紙。同じく返事。井上氏よりハガキ。滋子氏來訪。

五月三日。晴。中澤、石丸二氏來訪（留守）。大月氏來訪。井上、三井氏よりハガキ。國民文藝會よりハガキ。

五月四日。晴。雄辯の青柳氏、春陽堂の小峰氏よりハガキ。「解放」の西村氏へハガキ。本日までに新潮社への泡鳴五部作のうち、三百五十枚の「放浪」、三百五十五枚の「斷橋」、並に三百二十四枚の「憑き物」の原稿を整理した。

五月五日。晴。澁谷夫人來訪。吉野氏來訪。「胸の海」（散文詩）ができた。

五月六日。晴。新潟より鐘馗の一幅・同じく返事。加藤氏へハガキ。深田氏へハガキ。春陽堂の小峰氏よりハガキ。深田氏來訪。

五月七日。晴。西村氏よりハガキ、同じく返事。國民文藝會の招待で帝國ホテルへ行き、來客總代として演說をした。同席で床次內務大臣に大分いろんな話を吹ッ込んで置いた（日本主義のことに就いて）。

五月八日。晴。小野崎よりハガキ。獨步十三年忌會よりハガキ、同じく返事。中外社へハガキ。玄文社へ脚本出版の相談。午後より鶴見の花香苑へ行つた。中村（星）氏を生麥に訪ふ。「山の總兵衞」を書き初めた。止宿。

五月九日。晴。花香苑に止宿。中村氏來訪。

五月十日。晴。歸京。飯野氏を訪ふ。留守中の來翰――蒲原（有）、池田、外山、「異象」、大鐙閣より。來訪者――石丸・瀧田諸氏。大月氏來訪。十日會へ行く。

五月十一日。夕がたから大雨。長谷川（巳）氏よりハガキ。新潮。天佑社、玄文社、春陽堂、池田氏へハガキ。床次內務大臣をその自宅に訪ふ（留守）。正宗、長谷川（天）二氏を訪ふ。

五月十二日。雨。佐藤氏よりハガキ。巖より返事。月評會。

五月十三日。曇。加藤（朝）氏より手紙。木村、川路二氏よりハガキ。須藤氏よりハガキ。伊香保書

院へハガキ。光成氏、滋子氏來訪。

五月十四日。晴。春陽堂へハガキ。床次内務大臣へ手紙（約束に從ひ二三度尋ねても會へなかつたから、この十九日の學者招待か、廿四日の宗教家招待かに僕をも招待せよ、さうすれば僕の日本主義を十分に述べると）。

五月十五日。雨。明氏、文章世界記者、大月氏、井上氏、外山氏來訪。「山の總兵衞」四十二枚）、文章世界へ。日本主義へんしうずみ。玄文社の三井、甲州の三井、加能、須藤、朝日新聞、山宮送別會の諸氏よりハガキ。

五月十六日。晴。須藤氏より手紙。池田、長谷川（卯）二氏へハガキ。前島、新潮社、天佑社、歌子氏を訪ふ。松崎氏へ返事。

五月十七日。晴。青柳氏へ十日會名簿を。森ケ崎へ行く。

五月十八、九、二十日。森ケ崎より歸宅、留守中の來狀――明治學院、本間氏、石丸氏より手紙。須藤、佐藤、石丸、詩話會よりハガキ。今村氏來訪。

二十日の夜、東朝の招待で築地精養軒へ。

五月二十一日。津輕言葉の爲めに鳴海氏を訪ふ。新公論の土屋氏來訪。

五月二十二日。曇。玄文社の三井、深田、樫村氏よりハガキ。池田氏より手紙。朝日新聞より手紙。

中央公論の高野氏來訪。春陽堂の今村氏來訪。石丸氏の招待で燕樂軒へ行く。
五月二十三日。晴。
五月二十四日。晴。長崎の松崎氏よりハガキ。「催眠術師」（八十八枚）・中央公論六月號へ。須藤氏の招待で大森望翠樓ホテルへ行く。文武堂よりハガキ。大月氏來訪、本日からまたうたひの稽古。
五月二十五日。晴。廣瀨氏宅よりハガキ。玄文社の三井氏より手紙。森ケ崎へ行く。滯在――
五月廿六、七、八日。
五月廿九日。晴。歸宅。
菊地氏より手紙。小野崎、末日會、兜屋堂、其他より書信・菊地氏、佐藤氏へハガキ。大月氏來訪。
五月三十日。晴。吉野、中根、外山三氏來訪。よみうりより稿料三圓。田鍋氏より日本主義社へ每月十圓の寄附（本年中）。田中（純）氏よりハガキ。薫より手紙。
五月三十一日。雨。末日會へ。
六月一日。晴。佐藤・松崎・横關氏より手紙。伊藤、中井二氏來訪。横關氏へハガキ。
六月二日。晴。澁谷夫人、大月氏の作を本人に讀ませて見た。相馬氏より「大鹽平八郎」。
六月三日。晴。生方・原子、外山氏來訪。
六月四日。雨。大須賀、須藤、十日會よりハガキ。「母の立ち場」（百十枚）・改造七月號へ。相馬氏へ

ハガキ。福澤氏より著書。

六月五日。曇。横關氏へハガキ。山宮、福士、二氏よりハガキ。福士氏へハガキ。中井氏來訪。滋子氏を訪ふ。茄子、胡瓜の畑を整理。

六月六日。晴。ロシヤ研究會より手紙。生方氏を訪ふ。平塚(篤)氏來訪(留守)。婦人公論社より質問が來たに答へて、「夏は裸かで畑の世話をしたり、木を挽いて箱を造つたりするのが一番氣持ちがよし」。

六月七日。晴。大觀社より招待狀。松崎氏へ原稿返却。平塚氏を訪ふ。改造社より稿料二百五十三圓也。

六月八日。晴。飯野氏、大觀社へハガキ。昨日伊東英子氏の小說原稿を改造社の横關氏へ渡した。寶塚歌劇團より手紙。三浦・原子二氏來訪。明治會館へ鹿島えつ子の「淺妻舟」の踊りを見に行く。

六月九日。雨。菊地氏より手紙。「雜感」(十二片)、日々へ。江部氏を訪ふ。

六月十日。雨。西村・伊東・女の世界よりハガキ。十日會へ行く、菊地(寬)・芥川(龍)・三島の三氏が初めて出席。物品火災保險に入る、伊藤氏の紹介で。

六月十一日。雨、雷あり。江口氏へハガキ。伊藤氏よりハガキ。青森の佐々木義滿氏より手紙。江部氏を訪ふ。

六月十二日。雨。佐々木氏へ返事。月評會。

六月十三日。曇。江部、三浦、原子三氏來訪、夜おそくまで花を引く。

六月十四日。曇。大隈侯招待の會へ行つてちよツと演説をした。大隈邸よりの歸りに川俣氏へ立ち寄り、大須賀、內海(月杖)、その他一二名と花を引き、翌朝の六時までに至つた。それでも別に物をかけることはしなかつた。

木村(卯)氏よりハガキ。

六月十五日。晴。木村氏へハガキ。佐藤、倉田、春陽堂の小峰氏より書信。新劇協會より招待狀。原子、照岡二氏來訪。大月氏來訪。

六月十六日。曇。新劇協會を見に行く、上野夫人、小林夫人がゐていづれも五六年振で會つたので、東洋軒で御馳走をした。

六月十六日。(重複)曇。青柳氏より手紙。春陽堂より「征服被征服」の千五百部印稅の殘金百六十圓也。原商事へハガキ。大觀の池田氏へ手紙。三井、玄文社、天佑社へハガキ。

◇隈侯と文士連

「大觀」の一周年茶話會

泡鳴外交を罵り

星湖隈侯に誨ゆ

『大觀』創刊一周年茶話會は昨日午後二時早稻田大隈侯邸で開かれた記念撮影後大廣間で侯は吾輩は元來武骨で文學には不向だが坪內博士に薦められて英國

◇…文學史

を讀み次で芳賀博士の日本文學史を讀んでその大體を知つた向後何とかして諸君の大作も讀みたい」と愛嬌を述べ建部博士の演說に次て岩野泡鳴氏は「今日の狀態では政治が專門的なる如く文學も餘り專門的になつてゐる、人間の眞

に觸るる文學の素養なき
◇…外交家　の失體を見よ」と巴里講和會議を罵つて氣焰を擧げ中村星湖氏は「僕の先刻の演說中島村抱月君の晚年は振はなかつたといはれたが僕から見れば振ひ過ぎる程振つてゐる」とて文學者の眞面目に就て氣を吐き生方敏郞氏は例の奇警な一流の演說で
◇…茶々を　入れ其他に田中純氏等の所論もあつて歡談の裡に五時過ぎ散會した當日の出席者は右の外白鳥、小劍、菊子、貞子、葉舟、寬仲等諸氏四十餘名であつた

六月十七、八、九日。十二社豊田館に滯在。脚本「勞働會議」を書き初めた。

六月二十日。歸宅。吉野・中根、淸水氏來訪。留守中の來狀――萬歲社、詩話會、山宮、三井(武)、光成氏。

六月二十一日。晴。石丸氏を訪ふ。「放浪」の校正が初まる。

六月二十二日。(一字缺く)菊地、岡、前田、西宮、小川、中村諸氏へ將棊の會の通知。瀧田氏へ脚本の表題通知。加藤氏へハガキ。新潮社の佐藤氏よりハガキ、同じく返事。江部氏を訪ふ。島田、中澤・並に澁谷夫人來訪、その三創作を讀ませて見た。

六月二十三日。

六月二十四日。三井氏よりハガキ。江部氏宅で將棊會・西宮(藤)、岡(落)氏を伴つて行く。

六月二十五日。晴。脚本「勞働會議」(五十一枚)、中央公論へ。同社より稿料百十七圓三十錢。滋、生田、德田三氏を訪ふ。「放浪」の校正全部來たる。

六月二十六日。「征服被征服」の製本出來。雄辯の青柳氏より手紙。佐藤氏よりハガキ。

六月二十七日。晴。印刷の長谷川氏來訪。

六月二十八、九日。十二社豊田館に滯在。

六月卅日。歸宅。

留守の來狀――須藤、淺野、靑柳、アルスより。著作家組合より。長谷川より。吉野、中根二氏來訪。

沼波氏の送別會へ雜司ケ谷開泉閣へ行く。

七月一日。晴。大地の愛の會より、同じく返事。十日會通知。菊地氏よりハガキ。中井氏來訪。中澤氏へハガキ。

七月二日。雨。澁谷夫人、中澤氏來訪、その創作を聽く。靑柳氏より手紙、二。小寺氏より畫會、室生氏よりハガキ。大庭氏より手紙(著作家組合入會留保並に發會式不出席の通知に對する勸告である)。

七月三日。曇。杉田夫人、滋子二氏を訪ふ。伊東夫人より手紙。有島氏の會よりハガキ。中澤氏來訪。

七月四日。曇。山宮氏よりハガキ。白鳥並に西條二氏より詩集。大須賀氏よりハガキ。森田氏よりハガキ。深田、佐藤(稠)二氏を訪ふ。

七月五日。曇。「征服被征服」の會を僕の爲めに正宗白鳥、池田林儀、大須賀乙字その他三名の幹事

で催しがあり、六十七八名集つた。小野崎一泊。

著者の原稿には「征服被征服」の會に關する新聞切拔が貼り付けてある。寫眞が不分明で、遺憾ながら入れることが出來ない。その記事に――「「征服被征服」の會――は著者岩野泡鳴氏のために去る五日夜ミカドで開かれた。集り會する者六十餘氏、主賓岩野夫妻を初め秋聲、小劍、臨川、星湖、得三郎、晁、鼎、乙字、作次郎、貞雄、詛風、臥城、季晴、卯之助、一夫、秀雄、貢太郎、八十、與志雄、菊子、滋子、桑代、かの子、岩三郎、由也、鐘一、碎花、幸次郎氏其他といふ盛んな會であつた。池田林儀氏が發起人を代表して挨拶を述べ、野口米次郎、深田憲治の二氏が感想談をした後で、泡鳴氏が起つて、愛嬌たつぷりな謝辭と同時に最近の生活信條を一同に對つて披歷した。食卓を離れてからかの「猫八」が、岩野先生のために、例の鳴き眞似を御馳走して座を賑はしたりしたのは思はぬ景物であつた。(編者)

七月六日。雨あり。吉野、中根、中井氏來訪。光成氏よりハガキ。水守氏よりハガキ。雄辯へ中外へ行つてた「お常」を渡す。

七月七日。湯原元一氏へハガキ(その攻擊の掲載された「日本主義」を添へて)。

七月八日――十八日まで。下痢で三日間の絕食以來多忙であつた。その間に來た書信――池田、國民新聞、都留、三井、井上、氷室、オキシヘーラー、菅原、中村、中澤、詩話會、太陽掛り、今井、春山、池田、中根、本間、東部遞信局等より。

「自由解放とデモクラシの批判」(四十枚)、新潮へ。
中根氏、詩話會へハガキ。早文社の本間氏へハガキ。
七月十九日。
七月廿日。東京出發、宇都宮着。
七月廿一日。小野崎の出征を横濱の姉夫婦、甥、月岡夫人等と共に見送つた。それから、日光へ來たり、井桁屋に一泊。山内の菅原氏を招いた。
七月廿二日。菅原氏を照尊院に訪ふ。
七月廿三――廿六日。氷室、松本、荒木、須藤等の諸氏よりハガキ。
七月廿七日。氷室氏來訪(氏の細君の手紙を以つて)。夜また來訪。小寺夫人、澁谷夫人より手紙、同じく返事。大雨あり、これで氷室あたりのかんぱつも直るらしい。
七月廿八日。また大雨あり。芥川、池田、春山氏へハガキ。新潮社より電報がわせ。
七月廿九日。雨小ぶりになる。「お増の信心」(百四枚)、大阪朝日八月十一日よりの爲め。朝日へハガキ。
七月三十日。雨。瀧田、淺田二氏へハガキ。留守宅へ手紙。英枝より手紙。淑女畫報の寫眞班が來て泣虫山を背景として僕の立ち姿を寫して行つた。

七月三十一日。曇。新潮社の佐藤氏よりハガキ、同じく返事。英枝より手紙。氷室氏へハガキ。英枝へハガキ。池田氏より手紙、同じく返事。大阪朝日の春山氏より手紙、同じく返事。

八月一日。雨。中井氏並に英枝より手紙。英枝へハガキ。(夜八時頃から晴)。萱原氏へ手紙。

八月二日。晝後から雨。英枝よりハガキ。日光山より特待券。

八月三日。雨。朝日より手紙。博文館よりハガキ。氷室氏よりハガキ。英枝より手紙。

八月四日。晴。英枝へハガキ。加藤、柴田氏へハガキ。朝日より手紙。新潟へハガキ。澁谷夫人より手紙。英枝よりハガキ。「燃える襦袢」(八十五枚半)、太陽九月號へ。山内の萱原氏へいとま乞ひに行く。

八月五日。晴。蘆野愛子氏へハガキ。英枝よりハガキ。

八月六日。晴。英枝來たる、一泊。

八月七日。共に日光山の見物をしてから、中禪寺へ行つて一泊。

八月八日。英枝歸京。詩二篇「日光」と「中禪寺湖」とを作つた。

八月九日。晴。氷室へハガキ。よみうりへ詩の原稿。千家(鐵麿)氏へハガキ。萱原氏へ「日光」の詩を。「離船」(二十一枚半)、大觀へ送る。池田氏へ手紙。

八月十日。
八月十一日。晴。日光出發、歸京。丁度二十日間滯在してゐたところは、日光町板挽町四〇三鈴木與吉方であつた。
留守とめ置きの書翰――數十件
八月十二日。晴。千家氏より手紙。
八月十三日。晴。鈴木氏へ禮狀並に振替で二圓送る。淺田氏へハガキ。松崎氏へハガキ。長谷川(巳)氏へハガキ。三浦、井上二氏よりハガキ。中根、中澤、中井三氏來訪。
八月十四、五日。飯野氏を訪ふ。
八月十六日。「日本主義」へんしう。杉田夫人よりハガキ。
八月十七日。晴。太陽の小說を校正す。日光の鈴木氏よりハガキ。
八月十八日。木村(卯)氏を訪ふ。
八月十九日。晴。澁谷夫人、森本氏來訪。千家氏より手紙。著作家組合よりハガキ、同じく組合入會拒絕の返事。「斷橋」初校ずみ。
八月二十日。晴。千家氏へ返事。高須、横關二氏へハガキ。耳科醫。茅原(茂)、佐藤(四)氏を訪ふ。先日、日光で買つた短刀は小此木博士の鑑定では濃州關物の定兼であるさうだ。

八月廿一日。晴。結城氏へ手紙（短篇小說集の相談）。氷室、春山二氏へハガキ。飯野氏へ手紙。猫八へ手紙。澁谷夫人より手紙。倉田氏よりハガキ。西村氏を訪ふ。
八月廿二日。晴。耳科、生田、長田氏を訪ふ。長田、加藤（朝）二氏來訪。茅原氏よりハガキ。松中氏よりハガキ、同じく返事。
八月廿三日。晴。永江氏へハガキ。耳科へ行く。飯野氏を訪ふ（平岡定一郎氏に會つた）。新潮社よりハガキ。巖より手紙。日本評論社の鈴木氏、中外社の野澤氏來訪。
八月廿四日。
八月廿五日。晴。天佑社より使ひ、內外時論社の社長來訪。大月氏來訪。玄文社より返事。井上氏へハガキ。下痢にて朝から絕食。
八月廿六日。晴。二科會より招待狀。長江、住居、天佑社よりハガキ。大觀社より稿料四十二圓五十錢也。千家氏より手紙。
八月廿七日。晴。巖へ手紙。米倉より手紙、米倉へ十圓の振替へ。生方氏來訪。
八月廿八日。內外時論の住居氏來訪。
八月廿九日。晴。「鐵公」（前篇、三十六枚分）、內外時論へ。同社より稿料七十圓也。佐藤氏よりハガキ。改造社より手紙。よみうりより稿料一圓五十錢也。前島、佐藤、中村、田中氏を訪ふ。

八月卅日。晴。巖、來訪(或新會社へ這入る爲め原子氏へ紹介した)。生方氏よりハガキ。松本、井奈、二氏へハガキ。

八月卅一日。晴。千家氏より手紙。森田氏より手紙。三浦、江部二氏來訪。「著作家組合に入らぬ理由」(十九片)、新潮十月號へ。「どちらが呑氣だ」(七片)、新潮十月號へ。

九月一日。晴。二科及び院展へ行く。川口氏より、清子への七、八月分受け取り來たる。石丸、川瀨、黑谷氏よりハガキ。加藤氏より原稿。

九月二日。晴。橋爪氏よりハガキ。三浦氏より手紙。原子氏來訪。中井氏、地方の人をつれて來訪。

九月三日。晴。川路氏へハガキ。吉岡、庭山、千葉、今井、井奈、時事よりハガキ。飯野、押川、改造社より論文稿料五圓也。

九月四日。晴。飯野氏へ手紙並に「猫八」。石丸氏來訪。新潟、白石(哲)二氏よりハガキ。川手、平塚、生方氏訪問。

九月五日。晴。茅原、白石二氏へハガキ。詩二篇(「今の詩界」と「こやしの臭ひ」)。よみうりへ詩稿。倉田、佐藤氏よりハガキ。川路氏より返事。中外日報社より手紙、同じく返事。澁谷夫人來訪。

九月六日。晴。澁谷夫人より手紙。高須、白石二氏よりハガキ。婦人公論よりハガキ。町內の祭りに五圓寄附。西村、原子二氏來訪。

九月七日。小雨あり。北海報知社よりハガキ。「青年」社よりハガキ。大月氏、加藤(謙)氏來訪。西村氏を訪ふ。

九月八日。晴。白石、池田、澁谷夫人よりハガキ。白石氏より原稿。高橋(五郎)氏來訪(天佑社へ紹介)。野村氏、雜誌「人間」の原稿依賴に來たる。

九月九日。夜、雨あり。白石、三浦氏、十日會幹事よりハガキ。中外日報社より手紙。西村(宇)氏を訪ひ、「鐵公」の材料のことに付き質問して來た。

九月十日。雨。十日會へ行く。

九月十一日。雨。大月、島田二氏來訪。倉田氏よりハガキ。井奈氏よりハガキ。

九月十二日。雨。午前四時、「鐵公」つづき、四十枚半でき上り、內外時論の爲め。同社へハガキ。伊東夫人、高岡、澁谷夫人、千家、新潮社よりハガキ。

九月十三日。雨。飯野氏を訪ふ(留守)。伊藤氏を訪ふ。大月氏よりハガキ。高橋(五)氏より手紙。

九月十四日。雨。高橋氏へ手紙。內外時論よりハガキ。井上、木村、白井三氏より原稿。

九月十五日。雨。吉村氏來訪。飯野氏よりハガキ、同じく同氏を訪ふ。公論社より手紙。三井、野上氏よりハガキ。

九月十六日。曇。千家、木村二氏へ手紙。原子、江部氏來訪。

九月十七日。雨。新潮社へハガキ。中外日報社よりハガキ。

九月十八日。急雨あり。内外時論社よりハガキ。島田氏よりハガキ。今井歌子氏來訪。原子氏來訪。

薫より手紙あり、左の如く返事した――

『一、お前はまじめに働いてゐると考へてゐても、他から不まじめ若しくはなまけ者と見られるのは、矢ッ張り、お前に考へ違ひがあるのだらうと思はれる。小僧になつてれば、小僧の仕事をしツかりやつた上で餘分の時間に自分の勉強をするのはいいが、きツと仕事を十分までせず八九分だけにとめて早く自分の時間をむさぼるのだらう。それなら、考へが間違つてる。店の仕事に從事する以上は、その仕事を先きにして自分一個の勉強はあとにすべきものだ。

二、山の手に引ッ込んでゐたから非常識になつたと云ふやうなことはあるべき筈でない。子供の時に非常識は當り前だ。社會に出て(お前はさうしてゐれば人よりも早く社會に出たのだから)段々に常識的になつて行くやうに努むべきである。

三、岩野家が紊亂してゐると思つてるのは考へ違ひである。竹腰がいろいろ不都合を演じながらなほ頑張つてゐた時は紊亂してゐたかも知れないが、あれを無關係にしてからは少しも亂れはない。お前ら二人がそとへ出てゐるのは竹腰とお前らとがぐるになつて勝手に家を亂れさせようとしてゐ

るのだ。お前らさへゐなければ、若しくはお前らが改心すれば。そんなこともなくなるわけだ。

四、かね若しくは品物を子供らしく、、、、、なく盗んだことはお前に取つて一度や二度ではない。七圓がなくなつた時ばかりに辯解しても駄目だ。宮仲で十五圓を落したと云つたのも竹腰に渡したのではないか？それに、竹腰はお前らが出たあとでも時々近處まで來て近處の魚屋やその他へあがり込み、くだらぬことを愚痴ッぽく云つて笑はれ物になつてるのだ。そして魚屋などの話によると、板壁のそとからお前を呼んでよく品物などを持つて行つたと云ふではないか？また、隣りの野村の女どもと手紙のとりやりをしてうちのことをいろいろうそまで云つて惡くきかせてゐたのも近頃になつて分つた。お前は實にこちらの知らないうちに不埒なことをいろいろ行なつたのだ。それが爲めに野村のうちとこちらとで（お前が盆に來たその少しあとで）喧嘩ができた。そしてよく調べて見ると、すべてお前がうそを云つてたことが原因になつてたことが分つた。今度來たとて、このままでは英枝はお前に小使ひ一つ出すまい。お前が惡かつたのが一段とまた分つた爲めだ。竹腰はお前の母だが、岩野家の主婦は英枝だ。竹腰は今や岩野家に無關係なものだ。この區別をお前はいまだに分つてゐない。

五、他家の父は子供にあまくて、子供がそとで間違つたことをしても責任を負ふかも知れないが、おれはそんな父ではない。子供が子供らしくなつて來れば責任は子供に持たせる。決して子供の尖

敗をこちらで引き受けないから、さう覺悟しろ。まして竹腰のやうな不埒な女のあと押しがあるものに、一々こちらで責任が持てるか？

六、おれはおれ一代でつぶれてもいいと思つてるのだから、岩野家のことなど心配するには及ばぬ。おれは公けの人間になつてるのだから、岩野家一家のことなどに沒頭してはゐられないのだ。おれはおれでやりとほすのだから、お前はお前でやりとほせ。單に血脈の關係などで人間と人間とは妥協できるものではない。お前が一つのことを懺悔したのは惡いことではないが、あれだけではまだ父の勘氣は納まらない。お前の母をかばふ爲めにお前の父をあざむいてる間は父は決してお前と親しみを持つことはできない。お前が勝手に自殺しようと、墮落しようと、父は決して恐れはしない。どうせできそくなひで終はるくらゐなら、どうなつても同じことだ。

七、學問をやめさせられたのをこちらのせいにしてゐるやうだが、それもまだとほけてゐるか、思ひ違つてるかである。竹腰とお前らとが惡かつたのであることを悟らねばならぬ。今日までに二三の人からお前ら(お前と眞雄と)をもとのやうにしてやれと云ふ忠告を受けたが、おれは尋常のことでは承知しないのだ。原德太郎の如きはとうとう東京にゐ切れなくなつて大阪へ落ちて行つた。そのもとはと云へば、繼母に對するあるべからざるまでのひねくれ根性が習慣になつて、社會上の働らきにまじつて人を落し入れたり、自分ばかりでいいことをしようとしたりした爲めである。それ

が爲めに誰れも信用しなくなつて、喰ひつめものになつてしまつたのだ。
八、以上のことが分らないでは二度と再びうちへ來たとてどちらもお互に面白くなからう。で、二度と來ないものと見てお前に忠告して見れば、左の如きことを云ふより仕かたがない。(まだ學問をさせる氣にはなれないから)。
(甲)、小僧生活をいやになつたと云ふが、お前は今のところ小僧でもしてゐるより外に仕やうがなからう。して見ると、辛抱するが當り前のことだ。何ごとをしたツていやになるものだ。そのいやを辛抱しつつ段々と向上の活路をひらいて行くのが人間だ。
(乙)、若し他のことへ轉じようとならば、獨りで本當の勞働者になつてしまへ。それには印刷職工がよからう。他日、父の勘氣が解ける時もあらば、印刷屋をひらいてやつてもいいから。
九、お前の手紙にはまだづうづうしいところがあるのを發見してゐる。
大正八年九月十八日　　父』
薫
九月十九日。晴。巖へハガキ。中村(吉藏)氏來訪、將棋を戰つて五番に三遍負けた。春山、橋爪氏よりハガキ。

九月二十日。晴。橋爪氏へハガキ。住居氏よりハガキ。山口(陸三郎)と云ふ人から手紙。内外時論より稿料八十一圓也。帝劇へ行く。
九月廿一日。晴。倉田、中澤、澁谷夫人來訪。詩話會へ行く。巖、長田、氷室氏より書信。
九月二十二日。晴。松本氏より手紙。野上氏を訪ふ
九月二十三日――廿六日。午後まで森ケ崎に。
留守中の書信は萬山綠舍、姉、巖、改造社より。「狐の皮」(四十一枚)出來、「新時代」の爲め。
九月廿七日。晴。
九月廿八日。晴。伊藤氏來訪。よみうりよりハガキ。「無理想で有主義」(四枚)、中外日報へ。
九月廿九日。晴。千家氏よりハガキと原稿。武藏野會よりハガキ。千家氏と武藏野會とへハガキ。
九月三十日。雨。新時代社より稿料八十二圓也。
十月一日。雨。飯野氏を訪ふ。西村氏より種を貰ふ。稿料、玄文社より七圓、新潮より十圓也。杉村氏より手紙、同じく返事。川俣氏へハガキ。
十月二日。雨あり。生田氏より反駁原稿、同じく返事。「近松氏へ」(三片)、新潮へ。
十月三日。晴。江部、西村氏を訪ふ。サンエス記者藤森氏來訪。東大法科の山田欣三郎氏來訪。「リズム論に就て福士氏へ」(八片)、文章世界に。

十月四日。晴。野村、加藤氏よりハガキ。井上氏よりハガキ、同じく返事。千家氏よりハガキ、同じく返事。黑石會よりハガキ、同じく返事。

十月五日。雨。池田氏、三浦氏、澁谷夫人來訪。松本氏よりハガキ。

十月六日。曇。大鐙閣へ「時代の要求する日本的教養」と云ふ論著出版の相談。田代、松本二氏へハガキ。關(如來)氏よりハガキ。月見會を催し、藤森夫人、伊東夫人、小寺夫人、秀夫人、木村(鷹)、川手、小寺の諸氏來會。

十月七日。雨。水蘆、加藤氏よりハガキ。三井氏より原稿。加能氏より手紙、同じく返事。羅馬字ヒロメ會より手紙、同じく返事。ボストンの人より手紙。三井氏へハガキ。川俣氏よりハガキ。

十月八日。晴。江部氏來訪。三浦氏より手紙。須藤氏よりハガキ、同じく返事。

十月九日。晴。加藤、三島、千家、佐藤氏よりハガキ。千家、加藤二氏へ返事。「改造の山本氏より手紙。三島氏へ返事。仙臺の須藤氏來訪、晩食後一緒に歩きながら上野まで行つた。

十月十日。雨。川路氏よりハガキ。十日會へ。生方氏來訪。

十月十一日。晴。大泉氏よりハガキ。內外時論よりハガキ。同社の爲めに伊東英子を推せんする辭を送つた。中央公論の瀧田氏來訪、原稿依賴。野口氏送別會に列する爲め井の頭公園へ行く。島田、西宮、深田氏來訪(留守)。

十月十二日。夜、雨。野口氏へハガキ。野口、西村二氏よりハガキ。月評會で十名ばかり。深田氏來訪。

十月十三日。森ケ崎へ行く。

十月十四日。歸京。十五日、十六日、十七日。――十三日からけふまでの來狀、中村、大正日日、伊東夫人、兒玉(花外)、日本美術新聞、正宗(白鳥)、新報知、中川(小十郞)、飯森の諸氏より。

「犧牲」(四十三枚)、新潮へ。この稿料六十四圓也。「渠の舊日記より」(二十二枚)、新報知へ。この稿料四十四圓也。

十七日。伊東夫人來訪。

十月十八日。晴。服部、島田、柴田三氏へハガキ。公論社の質問へ左の如く返事――

「普通選擧實施の時期は今でもよし、またあとでもよし。利害はどうせ相伴ふことが分つてる。實施の方法としては先づ成るべく日本主義的教育が一般に行はれてるやうにすること以上」。

千家氏へハガキ。倉田氏よりハガキ並に手紙。五來素川氏歡迎會の通知(僕も發起人の一人として)、今夜あるのだ。

十月十八日夜より二十四日まで森ケ崎滯在。その間の來狀――吉井、瀧田、龜山、大久保、千家、

田澤、高橋、シュネーダー、幽顯社。『最新』の記者中井氏來訪。
『實子の放逐』(百十六枚)、中央公論へ。
十月二十五日。雨。倉田、光成、淺野氏來訪。五來氏より手紙。新潟の靈英よりハガキ。
十月二十六日。曇。春山氏よりハガキ。川俣、吉井、加藤氏へハガキ。飯野氏を訪ふ。

十月廿七日。
(ここから小說『鹽原日記』として書きかへた)。
十月廿七日の午後四時三十分頃に西那須驛に着し、それから自動車(乘り合ひ一人前四圓)で五里半の道を四十五六分で鹽原の福渡りと云ふ溫泉場へ來た。その途々のいい風景は夜であつたので見られなかつた。いづみ屋と云ふに入り　滯在することになつた。湯はすみとほつて奇麗だ。が、ごたごたしてゐる間取りで面白くなかつたので、明日は別な離れへ移されることになつて、その夜は一杯飲んで休むつもりであつたが、自働車に乘り合はせたおちいさん夫婦のところへ呼ばれて暫らく話をした。日本橋本町の藥り問屋の隱居であつた。孫をもひとりつれて來てゐた。この人の話でいづみ屋へとまることになつたのだ。
十月廿八日。曇。朝食をすませてから舊館の別室へ移つた。新館は川に臨んで前山並びにその左右

の青い樹木や紅葉を見られる代りに、ごたごた人の往き來がやかましかつたが、舊館はそれと道をさし挿んでかみ手にあり、その一番奥の高い坐敷を僕が占領することになつた。この夏は皇太子殿下附き侍從や武官がゐたさうで、ずッと前には閑院の宮様もゐられた。また三島彌吉さんが新婚をした時の室もここであつたとのことであつた。あたりの家々の家根を見おろして青い山や赤い山に向つてゐる。青いのは杉の山でお檜が澤山立ち並んでるやうに一面にその絶頂までのしあがつてる。ここには紅葉が少い。それと一つ淺い谷をへだてた山には、その代り、赤や黄や青みがかつた黄やの色で以つて一面の錦が織り出されてゐる。そのうちで赤いのはかへでやつつじの葉の色で、黄いろいのはかつらやならや栗の葉だ。それらを押しなべて紅葉と云つてるのだが、そのけしきは、本年はまだ霜や風がひどくないので、これからまだ暫らく盛りだと云ふ。

三島君の別莊は赤い山の方のはづれ（無論、川のこなたであるが、川は音ばかりでここからは見えない）に在る。こちらへかぎの手に反つて向ふへひらいてるその方に、そこの庭のではないかも知れぬが、高い松が一つあつて、左右の紅葉をぬいてゐる。その松や別莊は丁度一階山のふもとにあるやうに見える。その少しさき（來た道の方）に鳥居戸山のこれも赤黄こきまぜの紅葉が見えて、その裾に陛下の御用邸がある。兎に角、この室から四方をながめると、靜かなもので火鉢の湯のたぎつてる音がしてゐるあひだに川の音が始終遠く、そして時々自働車や馬車の發着の音が樹かげにしてるばか

りだ。

これから一と奮發、「人間」の爲めに小說を書き上げようと思ふ。英枝よ、これは日記の一節だからこのまま保存して置いて貰ひたい。鹽原は交通が不便で、自働車屋などが意張り過ぎてて途々不愉快だ。二度と來るつもりはないから、來た以上、暫らく當分はとどまつて見る。「人間」の小說と中央公論に渡した物の續き四五十枚を書いたら歸るつもりだ。そのあひだに一度もツと上の方へ行つて、鹽の湯で二三泊するかも知れないが、兎に角、さう云ふ知らせが行くまではここへ東京日々だけを每日送つて貰ひたい。大抵の手紙は保留して置いて誰れから何が來てゐると云ひさへすればよし。

以上――餘は後便

十月廿八日の午後から廿九日の夜半までに雜誌「人間」の爲めに「子無しの堤」と云ふ五十二枚半の人間らしい小說を書き終へたので、三十日(晴)を一と息入れて來るつもりで車上を今一層かみの方へ行つた。福渡りの宿屋が並んでる道を三四丁も行くと、その突き當りに白倉山のふもとなる天狗岩と云ふ大きな石が山にべたりと廣がつて屹立してゐて、その周圍も皆紅葉だ。そのけはじいやま裾を左りへ曲つたところに、直ぐ退馬橋がかかつてて、川添ひ道がついてるが、橋から又直ぐのところに横へ左りに渡る橋があつて、そのさきは植竹私有の公園山だ。そこも樹の葉の色に照つてるのを川のこなたからながめながら進んだ。五六丁ばかり來たところの、鹽釜と云ふ宿場で人間社宛の書き留め郵便

を出し、また二三丁で福渡りの內湯へ引いた湯の出もとのあるところへ來た。この邊の川ぷちから見返ると、天狗岩の山の後ろ手が、そこも岩だらけのあひだに紅葉してゐるのが見える。そこから眞ツ直ぐに自働車道を三四丁で、有名な淸琴樓もある機織りと云ふ溫泉場を、廣い河原をへだてて、高みの路傍から見た。機織りの位置は周圍の山々が少し遠くひらけてゐて、そのながめは廣い河原を渡つてこちらがはの山々のはにかみ笑ひを見るにあるらしい。が、そこから車を引ツ返して、再び內湯の出もとへ來た。

何と云つても、もとの三島知事の思ひ切つた交通開拓は今となつては爲めになつてゐて、鹽原の奧の方までも自動車がとほるのだ。が、ここから橋を渡つて川の支流にさかのぼる。道は狹くて隨分ひどい阪だから、自動車はとほらぬ。慣れた車夫は、然し、どうやらかうやら十二丁をのぼりつけた。そのあひだはお粂みちと云はれ、お粂と云ふ婆さんが造つた道だ。兩かはに植ゑ付けた杉と檜の木とで大抵のながめはふさがれてるが、坂の上まで來ると、ながめは天狗岩の橫手まで高みからひらけた。その直ぐなる鹽の湯まで來ると、こちらの高樓から川向ふの山々の可なり雄大な紅葉が見渡たされる。

茗荷屋と云ふのが客でふさがつてたので、玉屋と云ふのに這入つた。車は七十錢取つた。宿は一泊二圓で中等だ。僕に當つた三階の室の正面には、川をへだてて一とかたまりの杉の森の腰から以上が

見えふさがつてるが、その杉の後ろうは手も靑と赤相ひ半ばの景だ。そして椽がはへ出ると、目の下にうづもれた紅葉のあひだを右から左りへと十五六間はばの川が音を立てて流れてゐる。その上流と下流とからそり返つて、黄。赤、紅のいろづき葉が、松その他の靑葉と入りまじつて、横へ四つに重なつた山々の絕頂まで一面につらなり渡つてる。そしてその全景を引き締める爲めのやうに、例の杉の森が一番近く僕の目の前に立つてゐる。無論、その眞ツ下の崖にも紅葉は一面だ。

福渡りのは、――僕の占領してゐる場所からは別だが、――かの川添ひの部屋部屋から見ると、紅葉を紅葉の中から見るやうな景だが、ここのは紅葉を近く見おろし、遠く見渡すのである。大きいと云へば大きい。

晩食にはまだ二時間ばかりあるので、以上けふの日記をお前當てに投函しかたがたそとへ出て、もツとさきの方の道を狹い芝橋を渡つて進むと、行く手の川ぶちにたひらな廣つ場が見えて、植ゑ付けたやうに紅葉樹の幹が立ち並んで、それが赤さうな太陽のよこ照らしに透いて見えた。來たついでにそこまで行くと、梅ケ岡と云ふ立て札がしてある。その中で丁度隣りにとまり合はせた中年者夫婦が一緒に寫眞を取らせてゐたのを少し隔ててながめながら行くと、向ふから何だか見たやうな人がにこにこしてやつて來るではないか？小寺健吉氏であつた。繪に適する位置を探してゐたらしい。同じ玉屋の四階に來てゐるのであつた。渠は每年來るさうだが、去年の今頃はもう、紅葉は半ば散つておそ

かつたさうだ。暫らく一緒に崖のそばの腰かけに休んだが、その目の前に紅葉してゐるのは葉の大きい、きざみの淺いイタヤもみぢのやうであつた。宿へ歸つてから、聖目を置かせて碁を十番ばかり打つて、一緒に食事をした。そして別れてから、午前の一時半まで、中央公論へ渡した作の續きを書き初めた。雨が降り出してゐた。

十月卅一日。起きて見たら、赤い山々にまだ少し雨が降りつつあつて、而も靄はかかつてゐないので、樹々の色がしめやかに一層つやを帶びて見えた。小寺と共に廊下の倚子によつてながめてゐたが、渓はこの景の一番右手を、川のこちらがはの一番近く眞赤なもみぢの大樹を取り入れて油畫にしてゐるのださうであつた。車が一臺も出切つてゐるので、福渡りへ電話をかけて一臺上げて貰はうとしても、そこにもけふは天長節の人出の爲め餘裕がないのであつた。止むを得ず歩いて山を下だることにして、一英國人を加へた三名の仲間と一緒に宿を出た。坂道の上から白倉山の天狗岩のよこ手の紅葉までが正面に見渡せるところは矢張りよかつた。ゆふべ、あんまの笛をきいたが、目くらで以つて鹽釜から毎晩十五六丁をこの坂までも獨りであがつて來るのださうだ。

うち湯のもとまで下りると、橋を渡つて、僕は他のものに別れ、自動車通りをかみへ左りに曲つた。そして機織りを過ぎて今一つさきの名所、門前や古町まで橋から八丁ばかり來た蓬萊橋と云ふのがかかつてるその向ふがはのたもとなる米屋と云ふ旅館で一と休みして車を命じようとすると、丁度

中食どきで部屋が明いてゐないと云ふし、車も亦五六臺あつても客があるのであつた。そこの家につづいてその家よりも低い瀧が低い山の端から川へ落ちてるのを見ながら、橋の上に立つと、周圍がずツとひらけたながめで、遠く山々の紅葉だが、ここは別に取り立てて云へる風景でもなかつた。で、また機織りまで立ち返つた。

淸琴樓を中心として見た景は、後ろの山を切り田返して、畑が段々に疊み上つてるのとも聯想されて、小じんまりした田園の箱庭のやうだ。廣い川原の左右に盛りあがつた二つの山が一番近く色づいてるのだ。奇麗だけれども、規模が小さい。鹽原の紅葉と云へばどうしても鹽の湯に限つてるらしい。それが然し、大ではあるが、僕のむかしの記憶に間違ひなくば、京都高尾山の奇や江州永源寺の勝には及ばなからう。また、北海道十勝原野の大には。

とうとうまた徒步の止むなきに至つたが、歸り途では矢ツ張り白倉山の裾から植竹公園に渡つての景がよかつた。曇りではあつたが、幸ひに、雨に會はないでしまつた。そして紅葉の光りある色に少しもうす暗さを感じないですんだ。いづみ屋に歸つて、念の爲め川添ひの室々の廊下へ行つて見ると、流れの向ふに見える山々の景色はあまりに低く接近してゐるやうで何となく狹く優しい。そして軒のそばに紅葉してゐるのは僅かの山櫻ばかりであるに氣が付いた。それから、もとのながめ廣い室に這入つて、山々を見直して見ると、比較的に靑い山と云つた前山、赤い山と云つた一階山、その次

ぎの鳥居戸、それからその少し後ろでずツと左りへ寄つてそびえ立つ富士がたちの根本山、一番左りに近く家の後方からその一端を迫らせた裏山、そのすべてに、鹽の湯あたりよりは荒ツぽくない感じが廣かつた。これは僅かのだが、人家の家根や黑いも大根ばたけが御用邸の家根までつづいてるのと調和した爲めでもあらう。家の後ろになつてゐる裏山と白倉山も、廊下をまわればよく見えた。

よく聽いて見ると、このあたりのは、黃いろがかつたのがカツラ、栗、ホウの木、ソネ、クヌギ、カシハ、ナラなどの葉で。赤い方へ變はるのがサクラ、柏の葉のやうに早く落ちるノデボウ、野州に多い野州つつじ、それにもみぢだ。が、この邊のもみぢにはイタヤがその半ばを占めてゐて、その紅、葉が一番後れるさうだ。根本山の中腹からいただきにかけてどす赤く見えるのは、野州つつじが多いからとのこと。二三日の前から見ると、もう、ずツと葉が散つて、枝や幹を白く遠く露出させてゐる木々ができたのも却つて奇麗である。一階山と鳥居戸のあひだに遠くて見えないが里前山と云ふのがあつて、そこのいただきにのぼらなければ西那須やその他の里が見渡せないと云ふに徵して見ても、僕らが隨分山深く來てゐるのが分つた。だから、仕事をやめると、何となく寂しく、人悲しくなつて繪ハガキでも出さうかと云ふ氣になる。

九州日報からの手紙が東京からまわつて來たので返事を出した。けふは、馬車のここへ來るまでにある見返り橋の曲りで谷へころげ落ち、名ある人とその兄弟が手やあたまに血を出したさうだが、死

人は出さなかつた。小田原から熱海へ行く輕便自動車のやうに、このあたりでも自動車のかよひ初めにそれが同じ途中で落ちたし、昨年は天狗岩のところで定員以上をのせた馬車のかじ棒が折れて、御者臺にのつてた女學生が三名、退馬橋のわきからころげ落ち、一人は即死、二名はおほ怪我をしたさうだ。勝景の地には兎角さう云ふ危險が伴ふ。

鹽の湯での小寺氏が話では、去年は今頃既に紅葉が過ぎてゐたさうだが、今年はまだ霜が少く、風が吹かないので、ここ十日まではまだ見られるだらうと云つてゐる。が、來てからまだ四日ばかりだのに、その初めと今とでは氣候が俄かに變はつて、手のさきまでがひやひやする。

十一月一日。晴。朝十時に、手を火にあぶらねばならぬほど周圍が寒くなつた。風もけふは少しひどい。きのふから、こちらの室と直角に前山の方へ出張つた室に年の若い丸髷の婦人が來て居たが、その持ち主が――大分年よりだが――あとから來後れてけさの午前三時に西那須驛へついたので、輕便は勿論、自動車や人車もなく、六里の路をてくてく歩いてたツた三時間で六時にここへ着したさうだ。無論、細君が來てゐなければそんな奮發はしなかつただらう。

十一月二日。晴。きのふの夫婦は、こちらが起きた時には、もう出發してゐた。僕は「實子の放逐」のつづき五十三枚を中央公論に郵送する爲め、車にのつて鹽釜まで行く途中、天狗岩の頂上あたりは紅葉が散つて、枝ばかりが奇麗に見えてゐた。植竹公園へそれる橋の少し手前なる退馬橋へ昨年

馬車がぶつかつて、人込みの爲め御車臺に乘つてた人々三名だけが谷へころげ落ちたのだが、そのあとがついてるのを車夫は敎へて呉れた。

十一月三日。晴。別な小說を書き初めたが、こないだうちからの奮發で少しつかれをおぼえて夜中に一杯飮んで早く休んだ。宿の主人に養蜂をすすめて置いた。確かによささうだから。

十一月四日。曇。きのふけふがおだやかなので前山や一階山の紅葉は持ちこたへてゐる。それにしても、紅葉は山々のうへの方から散つて行くと云ふにもれず、ここでも、もう、いただきにはすがれがよく見えて來た。雄辯への小說「あぶら蟲」を四十三枚書き終へた。

十一月五日。晴。妻の來ると云ふのを待つてたが、子供が少し病氣で來られなくなつたと云ふので、俄かに午前の十一時に出發。乘り合ひ馬車で、來た時には夜で見えなかつた景を見て行くと、見える限り、恐らく鹽の湯の以上の景ばかりである。殊に、川中に材木岩がそびえて、その川しもに稚兒が淵を臨むあたりから右手の山々を見上げるところは、どす赤いつつじだらけの山々に溪流をあしらつてなかなかの絕景だ。そして魚どめ橋、猿岩ばし、その他、橋があるところには必らず左り手に大小の瀑布があつた。それから一旦、がけ下から生えたうすぐらいもみの大木林に僕らの目はおほはれたが、見返り橋へ來ると、また僕らの通過した山々、谷々の照らしが奥深く返り見られて、そこで鹽原全體の風景を總勘定せしめた。そしてその勘定によると、京都高尾の奇も、永源寺の勝も、ま

るでちツぽけになつて、これに對照されるのは、ただ十勝の高原の紅葉ばかりだ。一は深い山の、一は高い平野の、雄にして大なるものだ。

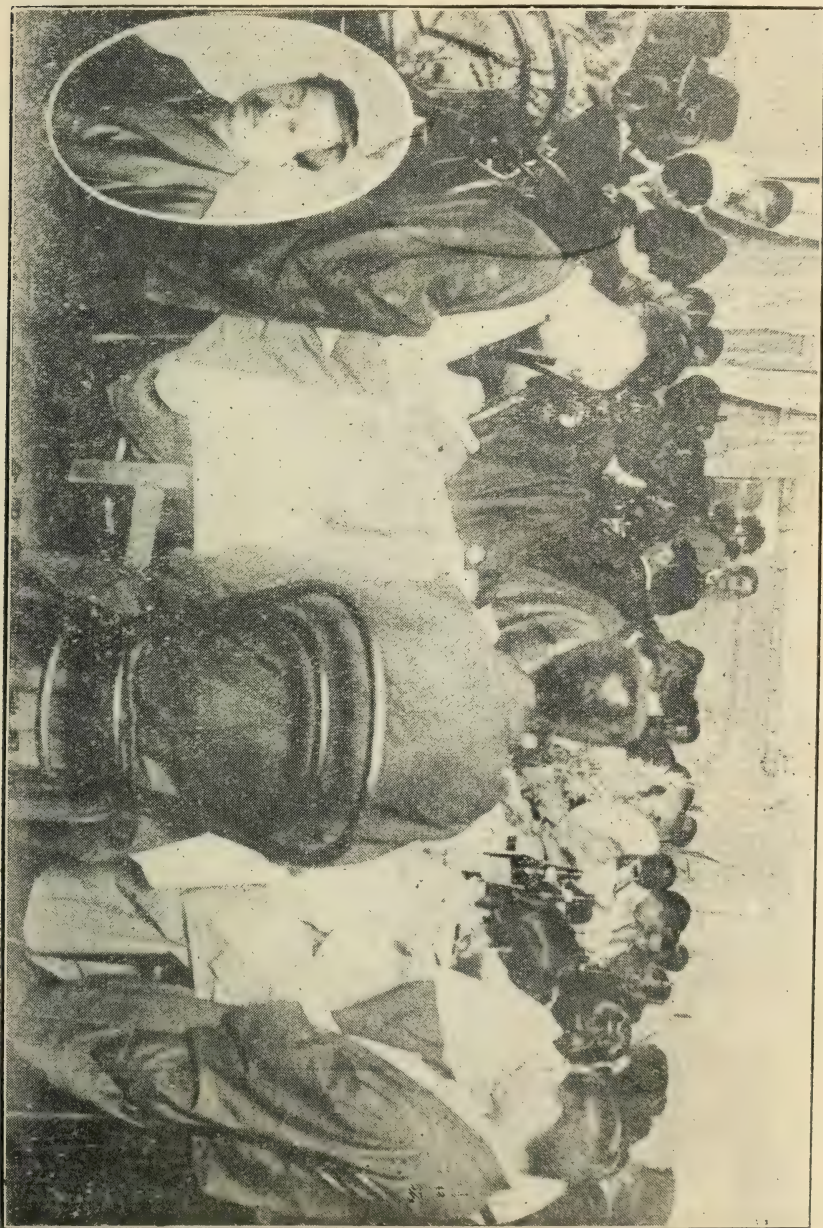
西那須を午後一時半の急行に乘つて歸京。

十一月六日。雨。留守中の來狀――九州日報の加藤氏、人間社より百六圓、里見（弴）、萬歲社、十日會、上司、木村、井上、千家（二通）、吉井、中の目、倉田、福士、中外日報、早稻田文學、早文の本間氏、上司、横關、友達會、新潮、龜山、木村、千家、細野、大澤の諸氏よりハガキ又は手紙。千家氏へハガキ。横關氏、中尾氏へハガキ。

十一月七日。晴。青柳、新佛教、九州日報より手紙。いづみ屋、山宮、古垣、巖、サンエス、青柳氏よりハガキ。三島氏邸へ英枝と共に展覽會を見に行く、その歸りに森田氏を訪ふ。サンエス記者來訪。雄辯より稿料に十六圓也。飯野氏を訪ふ。

十一月八日。夜、雨。飯野氏を訪ふ。江部氏と將棋。「荊棘の座」社よりハガキ。瀧田、内外時論社へハガキ。「鹽原日記」（三十三枚半）。

十一月九日。曇。サンエス社へハガキ。人間社の野村氏へハガキ。地方裁判所より竹腰氏のことで呼び出し狀。大鐙閣、近松（秋江）、樋口氏よりハガキ。小野崎より通知。吉山氏より手紙。青柳氏來

（もうお歸りになりましたか　繪葉書本包み小包みで　お送りしましたから宜しくお願いいたします　池田）―本繪葉書裏面の文

訪。青柳氏の結婚披露會へ招かれ、一席の演說を爲す。

十一月十日。曇。地方裁判所へ竹腰の永島に對する家屋取り返し事件の證人として出頭、秋山檢事の問ひに陳述して來た。十日會。

十一月十一日。雨。サンエスの藤森氏來訪。今井孃來訪。森田氏よりハガキ。秋山檢事へ大正四年五年に渡つての竹腰事件に關する日記の大略を書き出して送つた。

十一月十二日。曇。池田氏、千家氏よりハガキ。月評會。

記念のヱハガキ、池田氏より着す。

十一月十三日出發、森ケ崎へ行き、同じく二十四日に歸宅。

この間のおもな來狀――千家氏より二通、井上、新潮社、文章世界、米國の富澤氏より。人間社、三井、木村(鷹)、川俣、日々の畑、高橋(久)、巖等。服部、池田、倉田、「おせい」(百十五枚)、改造新年號へ、稿料貳百九拾圓也。「或高等學生の親」(四十六枚)、公論へ、稿料百十五圓也。

十一月廿六日。文藝座を帝劇に見る。

十一月廿七日。疝氣のやうに腰が痛む、こないだぢう冷えてあぐらをかいた爲めだらうが、こんなことは初めてのことだ。保田氏來訪。

十一月廿八日。雨あり。江部、原子二氏來訪。

十一月廿九日。曇。中谷氏より手紙、加能氏よりハガキ。駒子氏來訪。杉中氏へハガキ。
十一月卅日。雨。教育時論社より「新時代の教育に任ずべき今後の教育者に與ふる言葉」を伺ひに來たので、左の如く答へた。
「日本の思想、日本の國語、並に日本人としての生活を先づ重んじ考へるがいい。外國崇拜と外國摸倣との根原である帝大並に高師のできそこなひ思想と感化とから離脫せよ」
十二月一日。曇。水守氏へハガキ。文章世界の岡田氏來訪。江部、西村二氏を訪ふ。
武藏野會よりハガキ、同じく返事。原子を訪ふ。
十二月二日。晴。中澤、倉田、池田氏來訪。新時代、婦人公論、倉田氏よりハガキ。
十二月三日。晴。高橋(久)氏より手紙。改造社よりハガキ。「金貸しの子」(七十枚)、文章世界へ。
十二月四日。晴。日本評論社より手紙。文章世界より百七十五圓也。「眞理論者」(三十枚)、大觀新年號の爲め。米澤順子氏より手紙と詩集、同じく返事。三島氏より手紙。淺野氏よりハガキ。
十二月五日。
十二月六日。
十二月七日。晴。飯野、前島、新潮社、小川、田中(純)、大須賀氏を訪ふ。小野崎氏より通信。澁谷夫人より手紙。村上、十日會よりハガキ。茅原氏よりハガキ。大阪朝日よりハガキ、同じく返事。田

代氏へハガキ。
大阪朝日よりのは「普通選擧斷行」の贊否であるが、その質問に對して左の如く答へた。
「どツちでもよし。今のところ、普通選擧によつて多くを期待できず。もツと重大問題があります。たとへば、新らしい意味の日本主義的教育の普及の如き」。池田來訪、稿料のうち金六十圓也。
十二月八日。晴。日本評論社の鈴木氏來訪、短篇集「青春の頃」を持つて行く、その前金百圓也。山田氏より手紙・同じく返事。田代氏來訪、日本主義社の爲め來年より活動して呉れることになつた。
十二月九日。晴。中谷、西村氏へハガキ。澁谷夫人よりハガキ。庭山氏より原稿。山田氏來訪。木村、三井、井上氏へハガキ。
十二月十日。晴。十日會へ行く。加藤氏よりハガキ、同じく返事。山本氏よりハガキ。澁谷夫人よりハガキ。茅原氏より手紙、同じく返事。中澤氏よりハガキ。「現代に對する日本主義的綜合觀」(二十九枚)、文化批判第三維新へ。
十二月十一日。晴。井上、清水二氏來訪。光成氏來訪。井上、木村、三井、白石、北峯、菅原氏より原稿。外山氏より手紙。山田氏よりハガキ。
十二月十二日。晴。西村、千家、中谷氏よりハガキ。藤森氏より手紙。房州の松川氏よりハガキ。月評會の忘年會を宅に催す。出席者十八名。

十二月十三日。雨。英枝とみき子とを伴つて橫濱なる姉夫婦を訪ふ（そこで珍らしくも淡路から來たいとこの井關夫人にも會つた）。

十二月十四日。晴。歸京。市井氏よりハガキ。都留氏より手紙。須藤氏よりハガキ。

十二月十五日。雨。山田氏來訪、稿料五十圓也。關氏、富山より讀賣新聞へ入社したとて來訪。國民劇場を有樂座へ見に行く。山本（三）、三浦氏よりハガキ。光成氏より原稿。

十二月十六日。

藤森秀夫氏へ左の返事――

「御手紙拜見、あの評は僕が書いたのです。が、意味に於いては外部の技巧を云爲したつもりはありません。あア云ふことにも詩人の生活內容の同じいことが見えすいて來ると云ふのです。君の御文意ではまだまだ精神と技巧とを舊式に別々に考へる弱點があります。それを指摘したり、またそれに反對な詩を作るのはあながち『傲慢』でもありません。それをさう見る人こそまだ弱所を持つてるのでしよう。それから、僕は今の詩界へは殆ど仲間入りをしてゐないのも同樣ですから（つまり、感服しない爲め）今の詩人の誰れに對しても辯解などはしません。あなたでもまだリズムの知識さへないやうです。日本語は獨逸語とは違ひます」。

千家鐵麿氏へ左の手紙――

「前略。僕らは時間や空間をでも外存的には考へません。生活に這入つたそれを內存的に考へるばかりです。ところが、君の永遠性とか實在性とかは內存を越えて外存的になつてるやうです。從つて、分る筈もない死後や生前のことを無理、不自然に取り入れて內存的なよそほひをさせようとしてゐるに過ぎません。それは西洋的にも東洋的にも舊思想でしよう。井上氏の批判もその意味でしよう。僕らがこれから世界へも宣揚しようとする古神道的思想若しくは宗敎は、餘ほど新らしい物です。從來の一般神道家が安んじてゐるやうな形式は殆どぶち破つてからの現實主義的な物です。君の發想もそこへおのづから觸れることがあるやうですが、惜しいことには、舊式な考へかたに捕らへられてるやうです。若し大社敎の信仰個條のやうな物があつて、それに御職業上無理にもこじつけて置かねばならぬのなら、それまでのことですが、若しさうでなくば、どうです、物の見かた、態度、立脚地を改めて、僕らと一緒の方向へ向ひませんか？今は僕らの如き行きかたによつて同胞を說服し、且、その說服を世界の人にも與へなければならぬと思つてるのですから。あらゆる點で一致することはできないことですが、せめて思想の傾向は同じ方へ向つてゐたいのです。執筆者中、君だけが丸で方向が違つてると（日本主義であつても）、他の人々からいつまでも異議を唱へる論文が出て、編輯上困ります。

「で、どうしても君の態度が變はり得ないと云ふことでは、井上氏へのお答へ（一と先づ送り返しま

すが）を一回のせてこの論難を終りとしたいのです。そして君の御寄稿（なほつゞけて載けるなら）を古典の事實的研究や紹介に限つて載きたいのです。そもそもに於いて僕が君のを最初に轉載させて貰ひましたのも、つまり、あのやうな素直で議論ぬきの研究物が讀者にも又讀者以外のものにも必要だと感じたからでした。

「兎に角、君のお答へは新年號編輯ずみのあとへ屆きましたから、出すとしても二月號になります。

「一度ゆツくり會談致したいやうな氣が頻りですが、お互ひに斯うかけ隔つてては困ります。都合によると、今月か一月かに大阪まで行く用ができるかも知れません。その節は君もそこまで出て來ませんか？尤も、來年は雜誌ばかりでなく演說的宣傳にも發展の道を講じつつあります。十二月十三日。千家樣、岩野拜」。

小川、菊地、岡、中村等の諸氏へ將棊會通知。島田氏よりハガキ。飯野氏を訪ふ。小寺、木村二氏を訪ふ。

十二月十七日。江部、原子二氏來訪。

十二月十八日。淺野、光成、澁谷夫人來訪。江部氏を訪ふ。

十二月十九日。晴。鈴木、藤森二氏來訪。江部、原子二氏來訪。

この三日間の來狀――川俣、山本、松川、柴田、詩話會、中央文學、小川、鈴木（昇）。

十二月廿日。晴。大月氏來訪。改造社より手紙。「斷片語」六枚分、東京日々へ。

十二月廿一日。曇。ちよツとみぞれあり。宅にて將棊會を開らき、十名ばかり集つたが、菊地寬、江部鴨村、原子廣輾の三氏が賞を取つた。松田、淺野二氏よりハガキ。光成氏來訪。

十二月廿二日。晴。山本(勇)氏より手紙。同じく返事。

十二月廿三日。菊地、瀧田、山本(實)氏へハガキ。入江氏よりハガキ。吉野、安田二氏を訪ふ。

十二月廿四日。夜、雨あり。藤野愛子氏よりハガキ。藤森秀夫よりハガキ。川俣氏よりハガキ。菊地氏よりハガキ。高橋(久)氏よりハガキ。同じく返事。日本評論社より手紙、同じく返事。江部、原子二氏來訪。山本氏來訪。

十二月廿五日。晴。伊上氏より手紙。兵庫の友社よりハガキ、同じく返事。飯野、伊藤二氏を訪ふ。

十二月廿六日。晴。千家氏へ左の返事、――

「いつも同じ軸をまわつてますが、斯う云つたら大體の傾向は分りませんか？一、特に感覺ばかり重んじるのではないが感覺を離れても別に存在を觀念できるやうな事物はあつても問題とするに足らず。二、人間の生活には感覺までも伴つてるので、感覺を離れても考へられると空想若しくは假定された物は神、未來、永遠、靈魂等でも不必要。三、死んだ古代の神々若しくは祖先にはそれとしての存在はない、生きてる人間の記憶に史的事實としてのみ殘つてる。四、自由意志も生の間に於

いてだけです。五、死んで神になるのではなく、生きてる間の充實緊張に、人間神が現はれるのです。六、たとへば、乃木大將を死んでから神としたのはただ記憶をとどめるのみのことで、若し眞に神たる資格があつたとすれば、生きてた時にあつたのです。斯うして最も現實的、現世的な思想や生活が日本人の他國人にまさる特色です」。

一元描寫論の著述を初めた。

十二月廿六日。大阪の高橋氏へ送つた二百圓の返事が來て、十年前の借用證書も返つて來た。

十二月廿七日。曇。久保田、池田氏、岡氏よりハガキ。

十二月廿七日。雨。小島氏來訪。萬歲社へ受け取りを。

十二月廿八日。駒子氏來訪。倉田氏よりハガキ。

十二月廿九日。伊東夫人來訪。新潟より掛け圖三本。

十二月三十日。新潟より餅。齋藤（茂）より手紙。芥川江部二氏相つれて來訪。福士氏來訪。荒川氏來訪。

大阪朝日より平和克復後第一新春感想を聽きによこした。

十二月卅一日。晴。國粹出版社より手紙。杉中家より手紙。東京日々より稿料九圓。興國同志會よりハガキ。飯野氏へ使ひをやる。本年は自分に取つて一番活動した年であつた。小說だけで二十篇。收入は印稅も加はつて四千五百圓あまり。

大正九年

一月一日。晴。賀狀を出すこと五十四枚。原子氏が宮本謙吾と云ふ、もと馬賊の隊長をしてゐた人をつれて來た。江部氏とこの二人とで花を引く。

大阪朝日へ左の答へ、――

『わが國のますます發展的な傾向になつて來たのをありがたく思ひます』。

謠曲界への返事、――

『慣例を打破して能を劇場に演じてもよし。能の形式を破壞することなく、民衆的ではないが、芝居のあひに挾むのは面白からう』。

一月二日。晴。江部氏の宅にて皆と花を引く。

一月三日。晴。宅にて歌がるた、花がるたの會あり、菊地、芥川、吉野、その他二十五六名集まる。弟の巖も來たる。

一月四日。晴。日本橋の松谷氏宅へ招かれて行く。
一月五日。晴。原子氏宅のかるた會へ行き、花かるたの一等賞を得た(江部氏が二等)。
一月六日。晴。芥川氏宅へ招かれて行つた。そのついでに、野上氏、山本鼎氏、山本(勇)氏を訪ふ。
一月七日。夜に入つて雨。飯野。岡二氏を訪ふ。
一月八日。晴。江部、原子二氏來訪、花を五年。隆文館の店員來訪。
年始狀の來たのは今日までに百八十五枚ばかり、出したのは百八枚。
一月九日。晴。井奈氏より手紙、同じく返事。松川氏より手紙、同じく返事。江部、原子二氏と花三年。
一月十日。晴。木村氏來訪。十日會へ。羽太氏よりハガキ。島田氏へハガキ。
一月十一日。晴。倉田氏。伊藤氏來訪。齋藤氏よりハガキ。大泉氏よりハガキ。小野崎氏より手紙。
一月十二日。夜、雨。吉野氏來訪。坂本氏より手紙。雄辯社より原稿依頼、斷わり。短歌と詩社より依賴、斷わり。井闘氏よりハガキ。井闘氏へハガキ。月評會。
一月十三日。晴。石丸氏よりハガキ。俊丸來たる。原子氏來訪。
一月十四日。晴。朱葉會より手紙。男だて社より手紙。有島氏よりハガキ。庭山氏よりハガキ。木

村氏その他の原稿四つ。日本主義へんしろずみ。江部、原子二氏來訪。
一月十五日。晴。藤田健治と云ふ人來訪。中根氏が倉田氏と共に來た。水上氏よりハガキ、同じく返し。大連の中澤と云ふ人よりハガキ。天佑社から出る「家つき女房」の校正終はる。
一月十六日。晴。眞雄來たる。「無政府主義紹介事件の批判」(十七片)、日本主義へ。「學者の迂遠」(五片)、よみうりへ。堀井のお靜さんより手紙、同じく返事。改造青年社よりハガキ、同じく返事。横濱の鈴木氏より手紙。よみうりから返つた原稿を東京朝日へ。
一月十七日。晴。三島、井奈、杉田氏よりハガキ。「許される自由」(二十三片)、大正日々へ。「發展」の訂正を終はる。
一月十八日。晴。(二字鈌く)。來る。原子氏來訪。
一月十九日。晴。大正日々へハガキ。江部氏と共に中村(春)氏を訪ふ。進士經雄と云ふ人より手紙、同じく返事。新潮社より「憑き物」印税のうち百圓也。
一月二十日。晴。勝浦へ行かうとして巣鴨から市内電車にのつてると、平塚篤氏に會ひ、一緒に相撲を見に行つてしまつた。そして夜一緒にうちへ來て、江部氏をも呼んで花の遊びをした。
一月廿一日。晴。勝浦へ來て、勝浦ホテルへとまることにした。夜、石丸氏來訪。
一月廿二日。晴。石丸氏を訪ふ。中澤氏肺病のよしに付き見舞ひを出す。同じく三井氏のかぜに

も。茅原(茂)、平塚(篤)、英枝三氏へハガキ。

一月廿三日。晴。加藤(謙)氏より故大須賀氏の件で手紙、同じく返事。石丸氏來訪。

一月廿四日。雨あり。大鐙閣の西村氏より手紙(原稿依賴)、同じく返事。宅へハガキ。單行本「燃える襦袢」の初校濟。石丸氏と東豐濱の方へ行く。そして夷隅郡豐濱村新宮の押塚旅館で一酌した。

一月廿五日。晴。故松井氏追悼會の通知。英枝、生田(長江)二氏よりハガキ。澁谷夫人より手紙。英枝と天佑社とへハガキ　石丸氏宅で馳走になる。

一月廿六日。晴。ホテル背後の山に登つて見ると、そと海も見えて而も春の氣候のやうで、じつとしてゐると、ねむくなつた。椿は皆花が咲いてゐた。尤も下の畑の菜たねは葉が二三寸で花を咲き延ばせてゐるのもある。夜、石丸氏が土地の有志を一人つれて來た。

一月廿七日。晴。夜、かぜがつよかつた。天佑社と英枝とよりハガキ。「おせいの失敗」を九十枚まで書き進めた。あすから歸京の上また書きつづけねばならぬ。「家つき女房」の再校が二十日に終つたのを忘れてゐた。「太陽よ」の詩を作つた。

一月廿八日。晴。勝浦より歸京。この夜、雪ふる。

留守中の來狀――東北學院より二十圓寄附の受け取り。雄辯より原稿依賴。川俣、靑柳(有)、水上、內藤よりハガキ。沼波氏より原稿依賴。倉田氏より池田、邦枝、田代、天佑社、室生の諸氏より

ハガキ。池山藁子氏より手紙。縣葵より手紙。鈴木喜一と云ふ人より手紙。
一月廿九日。雨。春さめのやうであつた。英枝らの發起の歌會があつた。田代氏來訪（日本主義社の件）
一月三十日。晴。鈴木（善）、中尾、水上三氏へハガキ。「燃える襦袢」の再校ずみ。
一月三十一日。晴。山田氏へハガキ。「故大須賀乙字氏」（七片）、並に「僕の舊句」（十二片）。
二月一日。夜・雨。井奈、大正日々、水上氏へハガキ。山田氏、深田氏來訪。
二月二日。雨。常盤木社より手紙。廣橋福太郎と云ふ人より手紙（弟子にして呉れいと云ふのだが、返事はしない）。大阪毎日より手紙。薫並びに久方氏よりハガキ。
二月三日。晴。大阪毎日へ寫眞と略歴とを。飯野氏へハガキ。常盤木社へ原稿。井奈氏よりハガキ。高階英司と云ふ人より手紙（弟子にしてくれとのことだが、返事せず）。澁谷夫人、島田氏來訪。
二月四日。晴。木村、三井、井上氏へハガキ。新潮社の佐藤氏へハガキ。「日本人」よりハガキ。玄文社の佐々木氏より手紙。大月氏、江部氏來訪。俊丸來る。
二月五日。雨。薫よりハガキ。松川氏より手紙。玄文社の賴みで帝劇を見に行く。「おせいの失敗」（三百〇六片）、改造三月號へ。
二月六日。晴。佐々木（茂）氏。井上氏、若宮氏よりハガキ。若宮氏の年始狀がけふ届いたのだ。若

宮氏へハガキ。「まだ充實せぬ新作と俳優今後の努力」(九片)、新演藝へ。高等工業學校の鹽田、内田二氏が演說を賴みに來た。瀧井氏來訪。

二月七日。晴。日本評論社より印稅前金の殘金壹百三十二圓也。原子氏の周旋で薰が松谷氏の株式仲買店の小僧に入ることになつた。これは幸田を早く養はせるやうにする爲めの止むを得ざる考へからである。

二月八日。からからした雪つみつつ降る。田代氏より手紙。久米氏の脚本祝賀會へ行く。つづいて邦枝、南部、中戸川氏の會へもつれられた(いづれも英枝と共に)。

二月九日。晴。雪は地上に四寸。天佑社より「家つき女房」印稅千五百部に對する殘金壹百六十五圓也。

改造社より稿料殘金二百八十五圓也。吉野、江部二氏來訪。

二月十日。晴。十日會へ行く。同會にて大須賀氏に關する追憶談をする。

二月十一日。晴。(寒さひどし)。牛島と云ふ人より手紙。沼波氏よりハガキ。大阪每日よりハガキ。江部、原子二氏來訪。結城氏へ手紙。新潮社の佐藤氏へハガキ。

二月十二日。晴。薰よりハガキ。新潮社より小包み。羽太氏よりハガキ。時事の伊藤正德氏へ手紙(末日會へ入會勸告並びに演說依賴の件)。月評會あり。

二月十三日。晴（朝、風ひどかつた）。在田、巖、伊藤氏よりハガキ。中外社、中央公論社より手紙。

二月十四日。晴。藏前の高等工業學校へ行き、日本主義の演說を一時間と五分とやつた。聽衆は八百人。それから江口、吉田二氏と共に電車通りをぶらつき、よか樓でコーヒを飲んだ。井上、木村二氏より原稿。內田氏、新潮の佐藤氏よりハガキ。時事より稿料二圓也。

二月十五日。雪つむ。夜、英枝らの短歌會。

二月十六日より十九日まで森ケ崎に滯在。留守中の來狀――詩話會、伊藤（正德）氏、日本評論、著作家組合、田中（純）氏、松川氏。

二月二十日。十八日、十九日の夜は徹夜をしたのだ。そしてやツと中央公論の爲めに「山の奥」（五十五枚）を脫稿。伊東夫人來訪。江部、原子二氏來訪。

二月二十一日。晴。著作組合への入會はさきに不承知であつたが、その組合から出すと云ふ「著作評論」への寄稿依賴には承知したハガキを出した。飯野氏へ使ひ（雜誌の件）。ミカド支店へハガキ。

二月二十二日。晴。日本評論社の碁會へ行く。井上、ワルト二氏よりハガキ。

二月二十三日。雪。江部、西村二氏を訪ふ。森氏より、又薰よりハガキ。巖より濱松の納豆屆く。

「小學敎育改造の要點」（六片）、國民新聞へ。「先覺文藝の實際」（十三片）、時事へ。

二月二十四日。雪。四寸六分。白石、岡、三井三氏よりハガキ。長篇小說並びに一幕物四篇の「實子の放逐」單行本まとまる。

二月二十五日。晴。日本評論社へハガキ。三井、白石二氏へハガキ。「大觀」、深田、三浦三氏へハガキ。中井氏來訪。西村氏を訪ふ。畔柳氏より小包。

二月廿六日。晴。畔柳氏へハガキ。飯野氏を訪ふ(留守)。伊東(義)氏を訪ふ、そして同鄕人高島誠一氏に會つた。「性」より質問あり、それに答へ。「婦人界の三問題」(七片)がそれ(日本主義四月號にのせる)。研究座より手紙、入會の返事。日本評論社より「もえる襦袢」の再版五百部印稅八十五圓也。

二月廿七日。夜中に雨。樋口氏より手紙並に著書。同氏へハガキ。元丸より、池田氏より、横濱の鈴木より、千家氏よりハガキ。小野崎氏より戰地通信。原子、倉田氏來訪。

二月廿八日。雪。千家氏へハガキ。玄文社より稿料六圓也。同社へ返事。澤田氏よりハガキ。原子氏來訪。うたひ「黑塚」を初めた。

二月廿九日。晴。雄辯より手紙。日本評論社よりハガキ。同じく返事。樋口、鈴木二氏よりハガキ、末日會へ幹事として行く。床次内相も來た。晝のうちに飯野氏を訪ひ、共に自轉車で内相宅まで行く。

三月一日。晴。鈴木氏へハガキ。西村氏を訪ふ。

三月二日。晴。解放より「政黨政治に對する民衆の覺悟」を質問して來た。僕の答へ――「政黨政治に對する民衆の覺悟はもつと日本的生活に徹底することです。外國がどうだからわが國もどうだと云ふやうな論據は本當の論據にはなりません。この點に於いて普選運動などよりも寧ろ日本的教育の普及が急務です」。

三月三日。晴。明治座に「法難」を見る。

三月四日。晴。山本氏より手紙。十日會より通知。

三月五日。晴。明治學院よりハガキ、同じく返事。外山氏よりハガキ。荒川、平塚(篤)・江部、原子氏來訪。

三月六日。晴。江ベ氏を訪ふ。日本評論より「情か無情か」(實子の放逐改題)の印税前金のうち百圓也。澁谷夫人來訪。「廣津氏へ」(六片)、新潮へ。

三月七日。晴(ひどく寒い)。實業之世界社より原內閣の存續を希望するやとの質問をよこしたので、するとへた。勞働國社より無政府主義に對する質問が來たので、同主義問答(三片)を書いた(日本主義四月號に掲載)。伊藤(正)氏より手紙。神道本局より手紙。

三月七日。晴。三井氏より手紙。短歌と詩社よりハガキ。大須賀家より手紙。

三月八日。昨夜來、石丸氏、江部氏、原子氏が來て、午前四時遊んだ。それから運動に出で、午前

六時頃に三人で一ぜんめし屋へ這入つた。龍田氏來訪。

三月九日。晴。英枝の妹、てる子大阪より來た。昨日來、氣ぶんわるい爲め、雄辯の小說を斷わつた。「先づ讀める」(七片)、よみうりへ。

三月十日。晴。龍田氏より手紙。ロシヤ研究會より手紙。婦人界より性慾敎育に關する質問あり、その答へ——

(一)、子供と云ふのが男女十五六才(若しくはそれ以上)をも含むなら、無論、性慾上の知識を批判的に與へる必要があります。

(二)、その方法は親かうへの兄弟かが直接に敎へれば一番よからうが、どうしても云ひにくく、聽くものも耻かしがるものだから、それには不斷に小說を讀ませて置くに限ります。

三月十一日。曇。飯野氏を訪ふ。先日もちよつと話があつたことだが、政府では陸軍、外務省、內務省、檢事局、警視廳の社會思想に對する取り締りを統一する相談がある。その爲めに一つの機關を政府以外に設け、その機關を飯野氏が指揮してその指揮には政府も無條件で從ふことにさせることになるだらう。そして「日本主義」をその機關雜誌にしようとしてゐる。且、僕に內務省囑托となつて全國遊說に向ふことを提議して來る內相談があるらしい。さうすることが僕らの主義の宣傳にもなるなら、そしてその間の生活費が小說を書かないでも出るなら(金に見つもつて每月今のところ二百五十

圓はかかつてるが)、承知してもいいと思ふ。既に床次内相には話してあるさうだ。
伊藤氏來訪。原子氏來訪。大每社より小說依賴、承知の返事。昨日は太陽と解放とからも依賴があつた。千家氏よりハガキ。
三月十二日。曇。昨夜から徹夜、午前の六時に雄辯の爲めの小說「美人」(五十枚)を書き上げた。新潮社の佐藤氏よりハガキ。小野崎より手紙。東北學院より手紙。今井、井上二氏よりハガキ。月評會あり。
堺氏へハガキ(氏がその演說に於いて僕がドラグ商會の梅毒藥廣告なる愛君主義の文章を書いたかの如く發表したによる異議なり)。
三月十三日。晴。雄辯より稿料百二十五圓也。新潮社より「耽溺」印稅三十圓也。日本評論社より「もえる襦袢」の第四版の印(五百部分)を取りに來た。田邊某氏より手紙。伊藤、白石二氏よりハガキ。
照子並びに俊丸出發。中井氏、三浦氏來訪。大月よりハガキ。時事より稿料九圓二十錢也。
三月十四日。雨。「江口氏へ」(十片)、よみうりへ。伊藤(義)氏が高島誠一氏を伴つて來た。宅に短歌の會あり。堺氏より返事あり、云つたことは云つたが眞僞は保證せずと附け加へたから責任はないと。これでも失敬きはまる。
三月十五日。雨。木村、三井二氏より原稿、茅原氏よりハガキ。川俣氏を訪ひ、芳賀博士へ國學院

大學の時間を少し持たせて貰ふやうに交渉を賴んだ（一週一時間でも大學程度の學校で僕の思想を傳へたいからである）。佐藤・深田二氏を訪ふ。

三月十六日。晴。茅原氏へハガキ。伊藤氏へハガキ（發動機會社の權利株を申し込むことの依賴を受けたに對する斷わりである）。大月氏來訪。『再び原田氏へ』（二片）・よみうりへ。

三月十七日。晴。長崎、結城、川手、飯野氏を訪ふ。渡平民と云ふ人より手紙（去年ライフと云ふ雜誌で僕を攻擊した同志があつたのに對する詫び狀だ）。

三月十八日。晴。渡氏へ返事。山田氏へハガキ（興國同志會に對する奬勵の爲め）。小野崎より手紙。國民の島田氏より原稿依賴。詩話會よりハガキ。長崎英造氏を訪ふ（日本主義補助の件）。同氏の紹介にて淺野良三（留守）・茂木惣兵衞・田邊勉吉の三氏を訪ふ（日本主義社の別事業として『勞働の花』を出す爲めの相談に）。中川小十郎氏を訪ふ。

三月十九日。晴。長崎氏へ手紙。澁谷夫人が歸國のいとま乞ひに來た。淺野・蒲原二氏よりハガキ。山田氏宛のハガキが歸つて來た。讀賣より手紙。日本評論社より使ひ。雄辯會より使ひ。原子氏來訪。瀧井、中村・新居氏へハガキ。

三月廿日。

三月廿一日。日本評論社に碁の會あり、僕は碁で二等賞に當るわけであつたが、幹事の爲めに他へ

賞を讓つた（先月は將棊の方で矢張り二等賞のところを同じ理由で菊地寛氏へゆづつた）。

三月廿二日。雨。春陽堂より手紙、同じく返事。近松（秋江）氏よりハガキ、同じく返事。薫へ手紙（今でも追ひ出されてゐるのだから、たとへうちへ來たとてうちと思つて振舞ふのはいけないこと、松谷へ行つてるのがいやなら勝手にしろだが、小使ひをさう日曜毎に取りに來るなと云ふこと）。隆文館へ手紙（一元描寫論がまだ書けないから、その埋め合せに「悲痛の哲理」を出さないかと云ふこと）。けふ、菊の根を分けてやつた。そして三つ葉をまいた。

三月廿三日。雨。吉野氏來訪。吉野氏へ端書。大月氏より端書、同じく返事。末日會の通知を發す。

三月廿四日。小雨。大月、原子氏來訪。西村氏の近所らしいところに火事あり、見舞ひに行く。時事へ短論（三片）。

三月廿五日。雨（みぞれまじり）澁谷夫人よりハガキ。井上氏よりハガキ。高島氏より手紙。菊地氏宅の將棊會へ行き、四勝十一敗、成績最下のものにきまつてた將棊盤を貰ふ。

三月廿六日。曇。氷室氏より手紙、同じく返事。森ケ崎へ行く。

三月廿七日、廿八日（雨）、廿九日（雨）の朝まで滯在。

留守の來狀——小野崎より八通、加藤、石丸、松田氏よりハガキ。林氏より手紙。四十年社より招待狀。訪問者——谷岡氏、山方氏。

三月卅日。雨。茅原、井奈、谷岡氏へハガキ。瀧井氏、本間氏より手紙。單行本「情か無情」の校正初まる。西村氏を訪ふ。

三月卅一日。雨。本間氏へ返事。茅原氏へハガキ。日本評論社よりハガキ。議員候補者淺賀並に前田兩氏の推薦依賴狀が來た。末日會へ行く。

四月一日。雨。東洋大學で演說を依賴されたが、時間を通知して來なかつたので行かなかつた。井奈、中戶川二氏よりハガキ。「情か無情」の初校終はる。玄文社より手紙、同じく返事（どんな芝居を見たいかと云ふ質問だから、僕が最初に發行させる脚本集中のうちの物をやらせて、それを見たいと云ふ心が盛んなことを以て答へた）。

四月二日。雨。日本評論社を訪ふ。

四月三日。雨。中尾氏より手紙。小出氏の選擧依賴狀。岡氏よりハガキ。川路氏よりハガキ、同じく返事。「公爵の氣まぐれ」と云ふ單行本をまとめた（同名のに「大將の疑惑」、「津田三藏」、「お增の信心」、「狐の皮」並に「難船」）。

四月四日。雨。短歌會あり。吉野氏よりハガキ。

四月五日。雨。井上、巖二氏よりハガキ。「おせいの巡禮」（七十七枚）を書き上げ。「今一度江口氏へ」（八片）をよみうりへ。

四月六日。雨。新潮記者來訪。隆文館店員來訪、「新自然主義」、「半獸主義」に「悲痛の哲理」を冠して六百ページばかりの一書にする約束ができた。新自然主義四百ページだけの紙型はこちらで提供して、印税八分。少し割りが惡い。原子來訪、共に江部氏を訪ふ。學藝書院の主人來訪、「公爵の氣まぐれ」初版印税のうちから百圓也。

四月七日。曇。鹿沼の鈴木よりハガキ（分娩の通知）。昨夜より今朝の九時まで論文や脚本の訂正。時事より稿料。

四月八日より十日夜まで森ケ崎滯在。

四月十日。十日會を森ケ崎に催した。

四月十一日。月評會の觀櫻會あり。

四月十日より十二日まで氷室氏ととまり。

留守より今日までに露西亞會より手紙。友達會より。岡田利勝氏死去の通知。山峰氏よりハガキ。中外日報社より手紙、月二十圓で長短に拘らず四回分の原稿を書くことを依賴。岡田、日本評論社、芥川氏へハガキ。研究座より手紙。

四月十二日。晴。沼波氏よりハガキ。岡田氏へハガキ。氷室氏宇都宮へ歸る。佐藤（四）氏來訪。太陽より使ひ、「おせいの巡禮」（七十九枚）の稿料貳百拾三圓三十殘也。

四月十三日。晴。釜山日報社より手紙。前田候補より端書。「情か無情」再校ずみ。西村氏を訪ふ。

四月十四日、十五日、十六日。春山、菊子、森本、大澤、高階、本間、氷室夫人、氷室、橋爪、伊東夫人よりハガキ。

國粹出版社より手紙。小野崎來訪。

四月十七日。晴。日本評論社より「情か無情」の初版印稅殘金百三十八圓也。吉野氏を訪ふ。

四月十八日。晴。畑を返して廿日大根と時なし小蕪とをまいた。池田氏來訪。

四月十九日。——

以後、かぜの氣味で面白くなし。

四月廿三日——常盤座へ招待された。

四月廿四日——劇作家協會設立の相談に列す。

四月廿五日——研究座を見る。

泡鳴全集第十二卷 終

大正十年十二月十五日印刷
大正十年十二月二十日發行

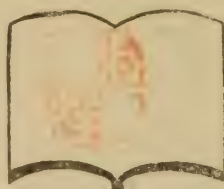
泡鳴全集十二卷

（非賣品）

著作權所有

著作者　岩野美衛

國民圖書株式會社代表者
東京市麹町區内幸町一丁目六番地
發行者　中塚榮次郎

東京市神田區三崎町二丁目三番地
印刷者　井波修次郎

東京市麹町區内幸町一丁目六番地
發行所　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番
振替東京五二一九八番

印刷所國民圖書株式會社印刷所

（製本所　製本所）